

# 鹿児島県史料

市来四郎史料二

## 解題

一  
今年度は、明治維新百五十年に当たる平成三十年度に刊行した『市来四郎史料一』に引き続き、市来四郎（以下、市来）による諸編纂物の端緒となる「旧邦秘録」（文久二年巻一―巻七・文久三年四月までの巻一―巻四）を『市来四郎史料二』として刊行する。以後、元治元年までを順次刊行する計画である。

東京大学史料編纂所所蔵である底本の「旧邦秘録」には、指示事項を記した付箋や久光の書き込みがあり、また、文字があったと考えられる部分に「、」点が付けられている。これらのことから、この底本は、久光が目を通した後市来へ下げ戻したものに市来が手を加えた、いわば校正本であることが分かる。これを元にして清書本が作られれば校正本は不要になるが、久光の書き込みなどあることから市来は大事に所蔵していたことが「市来蔵書」の印が捺されていることよって知られる。しかし、底本には「磯島津家編輯所図書之印」もあることから、あるいは清書本は作られないまま、校正本が島津家へ渡されることになったことを示しているのではなからうか。

市来の編纂した島津家家記に関するものは、『鹿児島県史料』として既に『忠義公史料』（全七巻）・『斉彬公史料』（全四巻）・『島津齊宣公史料』（一卷）として発行されている外、『島津斉彬言行録』（岩波書店、昭和十九年）もある。

市来については、「市来四郎君自叙伝」（以下、「自叙伝」）が『忠義公史料 第七巻』に所収されており、また、右の『鹿児島県史料』の解題でも「自叙伝」に基づく叙述がなされているので参照願いたい。

## 二

市来の島津家家記への関わりは、「自叙伝」明治十五年条に、「去十年櫻島避乱中、奉命せしことあるも、乱後一家の

経営に従事し、余閑なく三四年を過せしも、前年来稍く筆研を事とするに及び、齊彬公御事蹟の編纂に従事したり」とあり、久光・忠義父子から桜島避難中に齊彬の事蹟編纂を依頼された、と市来は云っているが、寺尾美保氏は正式なものとは言いがたい（『明治期島津家における家史編纂事業』、松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』山川出版社、平成二十七年）としている。

「順聖公御言行録」（以下、「言行録」）の編纂が何時始まり終わるのか、島津家からの正式依頼は何時なされたのかについて、市来自身でも混乱しているようである。明治十八年、市来が島津家家記編纂を依頼されるまでは齊彬の言行録を中心に編集していたことは明らかである。市来は、それを異なる名称で記していることはつぎに見る通りである。

①「自叙伝」に「同（明治十五）年二月一日、島津家家令東郷重持より、順聖公御言行録編集方御依頼の趣を伝承す、是より先き一月初めより編纂に従事し、脱稿の分十五冊に及ぶ、漸次新聞上に掲載し、遺勲追崇の心得なりしが、偶々島津家の嘱託に遇ふ、依て之を奉呈す、実に奇遇と云ふへし」とあるように、市来は自発的に「言行録」を編述しており、それを新聞紙上に掲載することにより遺勲を追崇するつもりであったが、二月一日、島津家家令の東郷より編集を嘱託され、脱稿分の十五冊を奉呈した、とある。明治十五年一月初めには既に編纂に着手しており、その後には島津家から編纂の嘱託が正式に伝えられている。脱稿や奉呈の年月は明記されていない。

②「旧邦秘録編纂備考」（「石室秘稿」所収、以下、「備考」）には、「齊彬公御一世ノ部ハ悉皆編纂ス、則御言行御事蹟録十五冊ナリ、○此編輯ハ明治十六年一月初稿、十七年冬ニ至リ脱稿捧呈ス、○此稿ヲ十八年一月、東京ニ於テ御家令東郷重持ヨリ郷友会員編輯ノ原本ニ出セリ、伊地知貞馨受領ス、尚予親シク御事実ヲ告ルコト数回ニ及ヒタリ」とある。すなわち、「御言行御事蹟録」は十六年一月初稿し、翌年冬に脱稿した。十五冊である。十八年の奉呈がきっかけとなり「旧邦秘録」を初めとする島津家家記編纂へ進んでいくことは、後に述べる通りである。

③「編集方御取設顛末」（「自叙伝」所収、以下、「顛末」）には、「明治十八年四月上旬に及び、照國公御伝二十卷成

功上呈あり」とある。「備考」にある「斉彬公御一世ノ部ハ悉皆編纂ス、則御言行御事蹟録十五冊ナリ」の記述は、「言行録」の脱稿分十五冊とも符合し、また、斉彬一世の事蹟を記したものが「御言行御事蹟録」であると読み取られる。編集年次もおおよそ重なることから「照國公御伝」は「御言行御事蹟録」であるとも推定できるが、成立年と巻数に違いがある。

④『史談会速記録』第三輯（以下、『速記録』）では、「言行録の編輯をも請合ひました、乍併言行録は、現今に至りても未だ全く脱稿は致しませぬが、已に百三十巻ばかりになつて居ります」と云つており、寺尾氏が指摘するように、明治二十五年段階でも完全には脱稿していなかった。

①から④により推論するならば、明治十年桜島に避難している最中に久光から「言行録」編纂について内々の依頼を受けた市来が、西南戦争の混乱から脱し生活の目処が付き、一段落した十五年一月には編纂に着手していた。同年二月（後に見る「顛末」の記述からすれば、三月以降であると考えられる）、「先代斉彬の言行録を調べよ」と島津家から正式に囑託を受けた。十七年四月廿日付で「以上、三十六ヶ條、第一卷、（中略）去月二日奉呈仕り置キ、第二卷、則此一冊ニテ、不肖ノ私奉命ノ事柄大概此ノ如クニ候」（岩波本『島津斉彬言行録』一四六頁）と市来は家令宛に伝えており、当初の「言行録」はここが区切りであったことが分かる。しかし、明治二十一年七月、宮内省より国事執筆の始末を取り調べて奉呈するようにとの特命により、以後、史料調査範囲が拡大し、補訂し続けていくことになったため、④のように発言することになったと考えるのが妥当であろう。

三

「旧邦秘録」を初めとする島津家家記編纂の発端について、市来は「久光の、忠義と相談致しまして、編修事業に取掛りましたは、明治十五年の春からでございます」（『速記録』）と、久光の発意であるとするが、島津家家令東郷重持

による「顛末」にその推移を辿るとつぎの通りである。

1、明治十五年三月中旬、市来四郎・久木山泰藏・高島一二の三氏が磯御邸に来て、島津家の系譜や歴代の事蹟、特に斉彬・忠義・久光に関する事蹟および忠良なる藩臣伝などの編集はどうなっているかと尋ねた。これに対し東郷は、三氏の懸念には私も同感である。系譜は重豪までは調べているが以後は中止となっており、事蹟についてもわずかの史料しか残っていない。三氏の質問には深く感ずるところがあり、熟考の上追って返答すると答えた。

2、市来など三氏の質問の次第と東郷の懸念を忠義へ伝えたところ、忠義は編纂に賛同し、三氏が引き請けてくれるならば、久光へ言上するよう指示した。

3、東郷は同僚迫水久中・橋口千次の同意を得、共に市来など三氏と会合し、忠義の意向を伝え、取り調べの方法などを尋ねた。これに対し、史料については、市来が二十三歳の時より武備・経済・刑律・雑編・旧説・海外の部別に書きためた「石室秘稿」と名付けたもの、および市来兄弟の日記やその他の記録等を所有しており、また、市来は強記博聞で筆削にも堪能であるから編纂者として適任である、と返答した。

4、3の結果を久光に言上したところ、久光もかねてからの素志であったと喜び、参考になるものを提出するよう求めた。

5、市来は、文久二年久光初上洛前後の事蹟を二日間で編纂して差し出した。東郷は、忠義へ見せ、さらに久光へ見せたところ、二三枚見てその仕事の速さを賞賛し、篤と閲覧するとして手元に止め置いた。

6、二三日後、久光は「如何にも能く記せしものなり、正に事実の通にて、少しも違ふことなし、実に妙と謂ふ可し、斯くも事実を記するものなれば、必ず成功を期すべしと信するなり」と褒めた上で、再度の取り調べを命じた。

7、市来は、前編に継ぐ記述を二日間で編纂して提出した。久光は迅速・詳悉であることを賞賛し、取り調べの手続きを定め、記録編纂を市来に担当させた。

8、明治十八年四月上旬、市来は斉彬伝二十巻を成功させ上呈し、二三代遡って調査する事を願い出、許可された。同時に忠義・久光の手元にある書類も下げ渡された。

9、編纂の内容・文体については、「記録は事実を記するを以て貴しとす、体裁に泥ミテ事実を誤ること勿れ、漢文・和文を欲せず、普通仮名雜りの文にして、真相を穿つことを務むべし」と指示し、書名については、久光が文久年間以降国事に軼掌した顛末の話を筆記した「尊話録」を呈した際に、家記の表題は「旧邦秘録」と称すべしと、自筆の紙片を下付した。なお、秘録とは「藩内の事蹟は遺漏なく事実を記すべき主旨なれば、秘事秘聞も憚る所なかるべし」との意味であると指摘した。

10、市来は、脱稿毎に両公の添削を受けた。忠義は事実の差謬・文字の遺脱を紙捻で指摘して下付した。市来は再校訂正し、疑点は参謁の節窺い取り調べ、説明伺いの上補正した。これを東郷は久光へ差し出し、久光は自筆で誤謬遺漏を補正し、編纂上の欠点を指示した。しかし、添削については、『速記録』では、「久光が添削した上は、忠義に廻わし、忠義は又自分の考へや覚への程を書き入れます」と述べており、添削の順序が逆になっている。父子関係からこれは市来の記憶違いであろう。

11、明治二十年久光死去により編纂方法変更の必要があり、以後、宮内省への働きかけにより、二十一年五月、嘉永六年より明治四年に至るまでの事蹟を三ヶ年内に提出するよう島津・毛利・山内・徳川（水戸）家へ特命があり、三〇〇〇円の下賜金があった。これにより史料交換や事実討論のために史談会が設立された。また、島津家から提出する書名は「島津家国事軼掌史料」とすることに決定した。六月には、忠義より市来へ、「旧邦秘録」は先代の事蹟を詳述し子孫の規範となるものであるから完全無欠の編製を期すことは勿論、特命も島津家の面目のみでなく、国家万世のため重要なことであるので、両方とも一切担当するよう依頼されている。また、東郷へも市来の編纂に不都合がないよう心得るよう指示している（「史料編纂ニ就御達書」、「石室秘稿」所収）。

12、史料調査の範囲が拡大したことにより、逆に提出すべき編纂は進まず、寺尾氏によると、繰り返し遅延願いが出され、提出されたのは三十六年であった。しかも、提出されたのは、阿多澆編纂の「薩藩史料 巻帙 拾冊」であった。市来は三十三年六月、編纂方を解任されており、市来が提出するために進めていた「島津家国事執筆史料」とは別物が新たに編纂されたのである。

1 から10までは「旧邦秘録」に関する記述、11・12は宮内省達命による編纂物に関する記述である。11・12も市来が関係し、「旧邦秘録」とも重なるものであるが、ここでは触れずに、1から10について纏めてみる。

島津家家記の編纂開始の端緒は、『速記録』にある久光・忠義による発意ではなく、十五年三月中旬に、市来が中心となり家記編纂を暗に島津家に催促したことに始まる。家記編纂の必要性を感じていた久光は、市来の力量を確認し、「言行録」編纂を囑託した。「言行録」の編纂が一応終わり上呈された十八年、7にあるように、家記編纂は大きく動き出した。『速記録』には、つぎのようにある。

明治十八年でありましたか、久光の申されますには、拙者は維新前後に御先代（齊彬を云ふ）の遺命を継ぎ、聊か國事に盡したことで、夫れを書き遣したいと思ふけれども、一向ソウモイカス、是迄段々申付けた人もあつたけれども、頓着なく已に拙者も老年で、何日死ぬかも知れぬ事なれば、子孫にも其事實を傳へたいと思ふて居ると、私に申聞けましたから、夫れは固より私も希望致す事で、言行録を終りました上に、其編輯方を御願ひいたす心得でござりましたと答へましたが、夫れでは骨折れと申付ましたから、不束の私恐入りますけれど、御沙汰にまかせ、御請け致しますと答へました、（中略）書名は則ち舊邦秘録と、久光の自から名付け、書き付けて私に渡されました、其時久光の申されますに、秘録と言へば大層な様であるが、他に憚る事もあり、或は内外國事の機密に罹り、世上に知れぬ事も記さねば、後世の爲めにならぬと云ふことで秘録と名付けた、

「自叙伝」の十八年条にはつぎのようにある。

(二月に東京に出た市来は) 島津家家令東郷重持に会し、島津家国事執掌録編纂の件を談し、岩下方平・伊知地貞馨・黒田清綱・内田政風の諸氏に会談し、編集事件を懇議したり、五月に至り帰県す、

全年十月十五日、島津家家記編集方の嘱託を受け、十九日より豊民館跡に編輯所を創建す、廿日照國神社へ参拝奉告す、尋て玉里邸に出頭、久光公へ拝謁、尊命拝承の旨を上申し、種々訓示を賜ふ、之より編輯所に毎勤し、写字生数人を雇用し、孜孜編録に従事す、

右から、斉彬の遺命を継いで国事に尽くした事実を子孫へ伝えたいとの願望を久光は持っていたが、適任者を得ないままになっていた。また「(維新前後についての書籍は誤りが多く、久光についての記述も褒めすぎ・失敬なこともあるが、当時秘密で世上に現れないことなので知られないのは無理もないが) 歴史は當時の事実を真直ぐに記すこそ肝要であるから、若し此儘に後世に傳はりては、誠に遺憾な事である」(『速記録』)との思いがあった。市来の家記編纂の働きかけは、久光にとっても待ちかねたものであったのである。

「言行録」提出が一区切りとなり、市来個人の編纂から組織による編纂へ変わった。市来と久木山泰蔵が編纂の嘱託をうけ、鹿児島郡堀江町二五三番地、旧養毅社二階に編輯所を開設した。久木山は造士館教員であるため、午後退館後に編輯所へ出頭するから、専従者は市来であった。この外、写字生が四五人雇用されていたが、市来は勤仕の遅速もあるので、写字生は実質二人である、と記している。

では、組織化された後の「旧邦秘録」編纂計画はどのようなものであったのだろうか。

「顛末」8で見たように、斉彬より二三代遡って調査することが許可されたから、当初の計画はつぎの通りであった(「備考」)。

重豪公 一編

延享二乙丑十一月七日ニ起リ天保四癸巳  
正月廿日ニ終ル、年数八十九年ニ充ツ、

齊宣公 二編

安永二癸巳十二月六日二起り天保十二辛丑十月十日二終ル、年数六十九年ニ充ツ

齊興公 三編

寛政三辛亥十一月六日二起り安政六己未九月十七日二終ル、年数六十九年ニ充ツ

齊彬公 四編

文化六己巳四月廿八日二起り安政五戊午七月十六日二終ル、年数五十年ニ充ツ

忠義公

万歳安政戊午年ヨリ起り明治十年迄十九年分、大凡百廿冊位ニ及フナラン、

五編

万歳

国父久光公

右御五代、延享二年乙丑ヨリ明治四年辛未廢藩置県ニ至ル迄、年数凡百二十七年ニ充ツ、

○又、明治二年辛未ヨリ同十年迄九ヶ年分ヲ補遺トス、

合テ年数百三十五年

此内ニ 久光公御分家ノ事実モ孕ル、

編纂は、久光の国事執掌が優先事項であることから、五編の文久二年より始めることになっているが、他の年次も同時に編纂が進められた。

明治二十年四月、編纂の進捗状況はつぎの通りである。

文久二壬戌年中八冊 浄書捧呈ス、(中略)

同中稿 八冊 (中略)

同下稿 八冊 (中略)

○文久三癸亥年正月ヨリ七月中十六冊 浄書捧呈ス、(中略)

○同年八月ヨリ十二月迄

中稿 凡十冊 (中略)

下稿 此紙数凡九百枚

○元治元年甲子正月ヨリ同年中  
中稿

下稿 五冊 (中略)

○元治二年乙丑正月ヨリ同年中

下稿 五冊 (中略)

○慶応二年丙寅正月ヨリ同年中

此下稿 凡四冊 (中略)

○慶応三年丁卯正月ヨリ同年中

此下稿 凡ソ百余枚

○明治元年戊辰正月ヨリ

此下稿 凡ソ二百枚

二十一年四月二十日頃までの進捗状況はつぎの通りである。

一 壬戌年 拾六冊

一 癸亥年 式拾四冊

一 甲子年 三拾二冊 内、拾六冊浄書

合計七拾二冊



国父公アリ、加之

朝廷ノ御覚モ又比ナシ（下略）（本書二六一号）

市来のこの久光理解に対しては、さすがに久光自身面映ゆかったのか、「賛称ニ過タリ」と記している。

久光評により顕在化したこの傾向は、市来の島津家家記編纂に共通するものであることは注意しなければならない。しかしながら、「旧邦秘録」の筆者にすぎないと自らを位置づけながらも、島津家家記編纂のスタイルは「言行録」編纂時に既に完成している。編纂において市来が眼目としたのはつぎの点であった。

天保比より嘉永安政頃迄の事實形勢は維新歴史の目玉でござりますから、尚更當時の形勢則大勢を詳に記すが肝要と心得ますから、（中略）中にも書翰類の中には畧言があり、隠語があり、或は簡短な字句がありて、後世ではオツコウに見るとか深いことを淺く見るとか云様なこともござりまじやふから、私は其等のことを成るべく考へて説明解釋し、或は事情形勢を詳記するなど随分面倒でござりますけれども、努めて其をやつて壯年の者に授けて筆を取らせ、或は書たもの、添削など致し（下略）（『史談会速記録』第七輯）

市来が重視したのは、後世の者が理解しやすいように、字句の説明・解釈などに力を尽くすことであった。したがって、この部分に市来の力量が示され、同時に市来の視角・史観も見て取れる。しかしながら、市来の編纂物には、桜田門外の変を文久元年とするなど、単純ミスや思い違いなどもあることは共通しており、利用にあたっては注意する必要がある。

岩波本『島津斉彬言行録』では、（ ）内には具体的な説明書きがある。巻之二の軍制改革の条を例に取ると、「御改制ノ御趣意ハ御書取（嘉永七年甲寅正月十四日新納駿河へ御直ニ御下ゲ相成タル由）」（八〇頁）と、御書取は何時・誰へ・どのような方法で渡されたかの説明が付け加えられている。また、「因ニ記ス」として、例えば、西洋式砲術の伝来について、市来の取り調べた事柄を詳細に記している。市来はこのような注記の付け方について「私共言論等ヲモ記

載仕り、益元長ニ相成候へドモ、奉命ノ儀成効ニ垂々タルヲ顯サンノミノ卑意ヲ以テ因ミニ記載仕り候」(一四六頁)としてゐる。

以後の家記も同様の編纂スタイルであることを例示する。

『忠義公史料』では、斉彬の子哲丸の死去に関する史料を挙げ、「公ハ、安政四年巳九月九日鹿兒島城ニ於テ御誕生、(実ハ去年十二月廿八日)同六年己未正月二日鹿兒島城ニ御逝去、御年三ツ」(第一卷二ノ八号)との説明を加える。水軍兵士停止布達の史料の部分では、「軍艦製造及ヒ水軍創設ハ、斉彬公特ニ御心ヲ竭サレタルハ悉ナ人知ルカ如シ、然ルニ御逝去ノ後、財政不都合ノ口実ヲ以テ国事必要ノコトモ廢棄シ、水軍ノ如キモ如斯、是レ島津豊後・新納駿河等ノ措置ニ出タルカ故、人心甚タ穩カナラス、物議囂々タリ、時情前卷ニ記スカ如シ」(第一卷二一号)と水軍創設の由来と廢棄令への反応などについて説明を加えている。

『斉彬公史料』では、斉彬の元服などの布達の後に、「因ニ記ス、公ハ未タ若年ナルニ、御名声夙ニ顕ハレ、大小許多ノ諸侯同年齡ノ中ニ、薩ノ若公ハ賢明ニシテ末頼母シク、或ハ器量柄サスカ一藩ノ世子ノ価値アリト称揚セリトナム」(第一卷二三号)と斉彬を称える福永仁右衛門の話載せている。

唯一の例外が『斉宣公史料』である。これには市来の注記は一切ない。文化朋党事件後の文化五年五月、「樺山・秩父勤役中取扱ノ議ハ何モ御取用ニ不相成候」(四四号)として諸向帳留の焼き捨ての布達が出されている。市来は史料の焼失・破棄について、江戸藩邸の書類は慶応三年の藩邸焼き払いで焼失、藩庁の公用簿は明治五年大山綱良県令による焼却、城下士などの所有する史料は西南戦争時により焼失、さらに斉彬の枕辺の貴重な書類は、斉彬が側役山田壮右衛門へ命じ死去に際して焼却させた事例を挙げており、文化五年の史料焼却は歴史的にも一大事件であるから当然注記があつてもよいはずであるが、何も記していない。同令は国老信濃名で出されているが、実質は重豪の意向が反映されていると考えられることから、島津家に対する市来の配慮がなされた結果であろう。『斉興公史料』には注記・説明が

付けられていることが、その証左である。

五

今年度刊行分には、久光の初出京・寺田屋事件・公武合体への働きかけ・生麦事件等々、国事執筆の具体的動きを見ることができ、市来も種々の部分に注記・説明を細かに付けている。

また、「旧邦秘録」・『忠義公史料』・『玉里島津家史料』（以下、『玉里』）は同時代を取り扱っているため重複するものがあるのは当然であるが、これらを見合わせることによって事実を正確に理解することが可能になる。

以下、その一部の事例を示そう。

「旧邦秘録」で市来は種々の見解を異なる形式で示している。

冒頭の「正月年首拝賀ノ式略シテ行ハラレタリ」(本書一号)には、筑後松崎駅で桜田門外の変の報に接した忠義は、

発病を申し立てて参勤を中止し、全快しない届を出しているために嘉慶の式も略した、との説明を加えている。

正月六日の「御先規ノ如ク御流儀砲術(中略)操練及ヒ軍神祭典等執行セラレタリ(中略)、御名代島津讃岐(中略)、国老川上但馬、(中略)操練人員総計二千五百三十余名(中略)ニシテ、小銃隊(中略)及ビ野戦砲隊或ハ砲台射擲等ノ演習ヲナセリ」(本書二号)の文章には、「御流儀砲術」の説明、「軍神祭典」には祭典司の名前、「名代島津讃岐」には実名が追記され、所領地垂水の石高、「操練人員総計」には参加する郷士・私領士・城下士の内分け、「小銃隊」には所持する小銃名など、本文部分を理解するための細かな注記がつけられている。また、国老川上但馬には、「実名糺ス」の貼り紙があり、以後、補填すべきことが示される。

個々の事項についての説明の外に、「編者曰ク」として、一事項について市来の見解が示される。例を引くと、桜田門外の変の持つ意味や影響について説明し、坂下門外の変にも触れた後、「幕府ノ威望存廢ニ罹リ、剩ハ外夷ハ各所

ノ開市ヲ迫リ、将来如何ナル世ニ変スルナラント悉人危懼ヲ懷ケリ、之レヲ乱兆頭レ、幕連ノ傾ケル初メトス」(本書四号)と位置づけている。「編者曰ク」には市来の歴史に対する視角が見て取れる。

『旧邦秘録』・『忠義公史料』・『玉里』の三書の関係について例示する。

文久二年十月、青蓮院宮の書翰が久光に届けられた。「旧邦秘録」では、この件を三つに分けて記している(本書一五五〜一五六の一号)。

(1) 藤井良節が昼夜兼行で着覽し、近衛・青蓮院宮・中山忠能の書翰を届けたと記述し、藤井良節には「旧名井上出雲守ト称ス、福ヶ迫諏訪社々司ナリ」の説明が付けられている。

(2) 「青蓮院宮ノ御書翰左ノ如シ」とあり、貼り紙に「御書翰記載仕度」とある。

(3) 青蓮院宮への答書である。十月のみの記載で、差出人は島津三郎である。

『玉里』では(3)の部分だけである。「戊十月」とあり、差出人は「源久光拜上」とある(『玉里』一一三四七号)。「忠義公史料」では(1)・(3)はなく、(2)の青蓮院宮の書翰が所載される。それは「一朝儀常変ノ二道、何レニ被定可然事、一京地ニ藤房卿無是、呉々モ早々出京、藤房卿正成之所為頼入候事、一良節ニ京地形勢聞取、勘考モ候へハ、可被申越候事」(第二卷一五四号)の三ヶ条の内容であり、九月晦日付で島津三郎宛に出されていたことが分かる。

三書は同じ件に関連する史料を掲載しているが、三書を併せ読むことにより初めて全体が分かるのであり、市来の説明で理解しやすくなっている。

久光の建言書では、市来の説明が一段と詳細になる。

文久二年八月の「国是二十四箇条」(『玉里』一一二七八号)について、端裏書の「戊八月十九日一橋邸ニ而越前同席献言之扣」に関し、建言書提出の理由をつぎのように記す。

国父公ハ一橋殿ニ御参向、春嶽公モ御来会、国事ノ御議談刻ヲ遷サレタリト、国父公ノ尊旨ハ春嶽公御上京アリ

テ、国是ノ論奏

聞アルヘシト数回御献言アラセラレシト雖モ、幕府ハ疑惑ノ情実アリテ悠々不断、事ヲ左右ニ托シ決行セサルカ故、本日左ノ御献言書ヲ呈セラレタリ、(本書一一一號)

この記述は久光の話を市来が敷衍したものであろう。『玉里』では条文のみであるが、「旧邦秘録」(本書一一一の一号)では、二十四ヶ条中市来の補説が何もないのは七ヶ条にすぎない。特に、第五条「是迄 公武之御間名義不相当之儀、細々御取調御変革有之度事」には、「將軍家御一代一度ハ是非御上洛之事」「諸御書付認振之事」「勅使御会釈向等其外段々可有之事」の三ヶ条が取り上げられているが、いずれの箇条についても「編者曰ク」などの詳細な説明・意見が付けられている。

また、文久二年閏八月廿一日付「密旨奉命御献言十二ヶ条」(本書一二〇の二号)は「(前略) 極密献策有之候者、厚宸衷ニ被 箆置、錦囊之策ト被 成置度 思召候間、聊モ不遺意底、国家之御為不憚機密、不避忌諱、極内々言上有之候」(本書一二〇の一号)と達せられていたため、「旧邦秘録」では理解を助ける説明が多く付けられている。『玉里』は、当然のことながら、条文のみであるが、「旧邦秘録」ではその理解を助けるために市来の意見が付けられているのは前と同様である。しかし、「旧邦秘録」ではつぎの箇条が欠如している。

一大坂・兵庫・堺之地は、畿内要枢之津湊ニ御座候処、当分大坂は因州・備前・土州、兵庫は長州、堺は立花、幕命ヲ受警衛仕候、小臣鄙見ニは聊落着難仕御座候間、幸長土之ニ藩滞京仕候ニ付、右両地之警衛当分通ニ而、外寇防戦実事十分行届候哉之旨、委曲御尋問被為在度御答候、品ニ依り屹と御沙汰被為在度御事と奉存候事、(『玉里』一―二九八号)

最後に興味ある市来の記述を一つ挙げておこう。それは文久二年三月十七日、久光訓戒についての記述である。久光の訓戒の部分はつぎの通りである。

(前略) 皇国ニ生レ候者、誰トテモ

王朝ヲ尊ヒ夷狄ヲ惡ミ候情意者有之筈ニ候、若シ志操無之者ハ禽獸同前之事ニテ、別ニ勤

(其服力)

王家之誠忠派之ト可申様更ニ無之事ニ候、然ルニ右通之名目相唱ヘ候由別而不可然事ニ候、殊二年若之面々容貌異様ニシテ大鬚・大髯等ノ輩ヲ指サレタル者ナリ、放恣之者共有之哉ニ候、是以先年ヨリ追々被為仰渡事候処、近頃者其節ト者相變リ候風儀ト相成、弥以不宜次第ニ候、士者行跡律儀ニ廉潔ヲ專トシテコソ本意之事ト存候、何程武文致研究候共、言行不正異様異風ニ而者武士ト者被申間敷候、且郷士以下家来末々ニ至リ候而モ右様之者共有之哉ニ而、猶以不可然事候条、右之趣奉行頭人能々相心得、支配下ヘ丁寧ニ申論、父兄又者同郷年長之者共ヨリモ心得違無之様、屹度教戒有之度存候事、

これに對して市来は「編者曰ク」として、つぎのように記す。

如此訓戒ノ令ヲ下サレタル其源因ハ、一兩年前ヨリ藩内諸士壯年ノ曹勤王ノ説ヲ唱ヘ、或ハ攘夷鎖港ヲ主張スル等一種ノ党派ヲ建テタリ、此儕旧慣ト異リ大鬚多髪ニシテ他邦人ノ容姿ヲ模擬シ、常ニ誠忠ノ句ヲ以テ稍口癖トセシカ故、他ヨリ名ケテ誠忠派ト唱ヘタリ、其曹概ネ擊劍家ニシテ、中ニモ葉丸半左衛門ト云カ門人ニ多ク、專ラ劍法ヲ磨励シ、或ハ読書、或ハ時事ヲ論シ長大ノ刀劍ヲ帶シ剛強ノ風ヲナセリ、一目誠忠派ノ人ナルヲ知ル、(本書二七の一  
号)

すなわち、ここで薩摩藩士分以上の壯齡の習慣について解説している。

一つは兵児・兵児二才についてである。これは十五六歳より二十四五歳頃までの者であり、その容姿は異状である。頭は左右頭頂からこめかみまで髪を剃り、後ろ頭の僅かな髪により鬘を結う。衣服の袖は腕まで、裾は脛までのものを着し、寒暑を厭わず文武の研磨を怠らない。実に風雨寒暑に筋骨を鍊り、廉潔勇威を主として酒色を戒め、忠義を守り、事に当たつて人に遅れず、難に臨んで避けず、戦においては君公の馬前に死するを本分とする。酒色に耽り或いは廉恥

を欠く者は絶交する。このように互いに督責する者を兵児二才と通称した。この習慣は数百年来の慣行である。

二つは、二三年前から出て来た誠忠派である。髪は頭頂を拇指ほどに剃り、多髪大鬚で大髷を結うという一種の容姿を共通にした。この者は勤王攘夷を唱え、他藩彼我の別なく同心一致し帝室のために尽くすことを主義とし、そのため旧慣を去り固陋の因習を蟬脱しようとしており旧慣固守の者と対立した。

三つは、勤王派である。容貌は旧慣風であり、勇威を尚び文武を磨励し、尊皇攘夷を説き帝権回復を主論とした。幕末には薩摩の二才・壮年はこの三派があつたとする。

誠忠派（士）については、安政六年十一月、茂久（忠義）名で、斉彬の遺志を継いで行動するとして脱藩突出の過激な動きを止めた「誠忠士面々」への達があることは周知するところであるが、誠忠士が独特の容姿をしていたことはこれにより初めて知られる。

また、当時の世情について、「此時藩内士分ノ風ニ、勤王攘夷ヲ唱サル者ハ惰夫トシ、或文武ヲ研磨スルニ汲々トシテ、撃剣ノ声喧シト云フモ謔言ニ非ラサルナリ、如此ナルハ実ニ七百年來育成ノ国風衰ヘサル者ト謂フヘシ、（中略）数百年來愛撫セラレタル士氣益盛ナリ」（本書二七の一号）とする市來の見解は、島津家を褒め称えることに尽きており、重豪が郷中教育をなくそうとしたことなどの歴史を無視しており、「七百年來育成ノ国風」や「数百年來愛撫セラレタル士氣」と記すことに市來の限界がある。市來が郷中教育をどのように見ていたか知りたいところである。

（安 藤 保）



## 例 言

一本書は、東京大学史料編纂所所蔵「旧邦秘録」を底本とし、『鹿児島県史料 市来四郎史料二』として刊行するものである。

一本書の目次は、主に「旧邦秘録索引」・「旧邦秘録中稿索引」・『鹿児島県史料 名越時敏史料』・『同 忠義公史料』・『同 玉里島津家史料』中の目次を参考に作成した。また、目次のないものは新たに付した。

一本文には適宜通し番号を付したが、複数で構成されたものについては小番号を付し、その中の一つのみを目次として掲載した。

一収載した文章を他の文書や写本などによって補充または校合する場合は、次のようにした。

ア 校合史料からの補充箇所は▽△で示した。

イ 補充や校合に使用した典拠史料の名称は以下の通りである。

〔原本史料〕 「旧邦秘録材料」(東京大学史料編纂所所蔵)

〔群書輯録〕 (東京大学史料編纂所所蔵)

〔虎嘯輯録〕 (東京大学史料編纂所所蔵)

〔紹述編年〕 (鹿児島大学附属図書館所蔵)

〔石室秘稿〕 (国立国会図書館所蔵)

〔刊本史料〕

〔旧記雑録後編〕 (『鹿児島県史料 旧記雑録後編』六)

〔旧記雑録追録〕 (『鹿児島県史料 旧記雑録追録』八)

「地誌備考」(『鹿兒島県史料 旧記雜録拾遺 地誌備考』一)

「斉彬公史料」(『鹿兒島県史料 斉彬公史料』第二卷)

「忠義公史料」(『鹿兒島県史料 忠義公史料』第一卷・第二卷)

「玉里島津家史料」(『鹿兒島県史料 玉里島津家史料』一・二・九・十)

「名越時敏史料」(『鹿兒島県史料 名越時敏史料』一・二・七)

「市来四郎日記」(『鹿兒島県史料 市来四郎史料』  
玉里島津家史料補遺)

「南部弥八郎報告書」(『鹿兒島県史料 玉里島津家史料補遺 南部弥八郎報告書』一)

「潜中紀事」(『續日本史籍協會叢書』清河八郎遺著)

「西藩野史」(『新薩藩叢書』二)

『野史台維新史料叢書』別篇十二

『孝明天皇紀』二・三

『島津久光公実記』一

一刊行にあたって本文の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア 字体は、一部を除き原則として常用漢字を用いた。

イ 平出・擡頭・闕字・割書および但書などは、底本の体裁に従い、闕字は一字分あげとした。

ウ 仮名は、底本の体裁に従った。変体仮名は仮名に改めたが、江・而・之・者・茂はそのまま用いた。

エ 文書・記事などの本文中には、適宜に読点「、」や並列点「・」を付した。

オ 原注は、底本の体裁に従って示したが、新たに付した注記は、「」で囲み原注と区別を行い、文意の通

じない箇所や文字は、「ママ」・「○○カ」などとした。なお、文意の通じない文字等の注記(○○カ)

は、各冊の初出にのみ付した。

カ 訂正箇所を空白を詰めるために付された「、」点は、これを外した。

キ ルビは、底本にあるもののみを付した。但し、本文と重複するものについては適宜これを外した。

ク 朱書は、「朱書」と注を付して朱書部分を「」で囲んだ。

ケ 貼紙・頭注は、「貼紙」・「頭注」と注を付し「」で囲んだ。

コ 文字の不明や欠失は、その箇所を□□で囲んだ。

サ 方言と思われるものは、原本忠実とした。

シ 編纂過程における指示書きにより本文に訂正が施されているものは、適宜指示書きを外した。

ス 既刊の『鹿児島県史料』と重複するものについては、既刊史料名及び文書番号を付した。その際、『鹿児島県史料』の表記は省略した。



# 鹿児島県史料 市来四郎史料二 目次

## 旧邦秘録 文久二年 一

一	年首拝賀ノ御式略シテ執行セラレタリ	……………	一
二	御先規ノ如ク御流儀砲術操練及ヒ軍神祭典	……………	一
三	先規ノ如ク諸役員昇級転遷ヲ命セラレタリ	……………	一
四	旧臘七日江戸芝邸火災ニ罹リタル趣飛報到来	……………	二
五	御邸火失ニ付御参観之儀御猶予ノ御願開届ラレ且邸屋御造営費御拝領等ノ飛報到着	……………	三
六	英人品川御殿山居留館焼亡ス	……………	四
七	鳥津大藏国老職ニ小松帯刀大番頭ニ拝ス	……………	四
八	當中騷擾鎮定ノ江戸飛報	……………	四
九	太守公撃剣師範加藤権兵衛宅ヲ訪問セラレタリ	……………	五
一〇	桜島赤水村洗出ニ於テ大砲操練	……………	五
一一	外国製ノ汽船購求スヘキ命ヲ受出崎セシ侍医八木称平外一名帰国ス	……………	五
一二	坂下門安藤対馬守遭難ノ事再報	……………	六
一三	国父公二月二十五日御発駕延引ノ旨布達	……………	七
一四	安政六年大島ヘ蟄居ヲ命セラレタル菊池源吾放免スヘキ旨ヲ達セラレタリ	……………	七
一五	亡高崎五郎右衛門長男佐太郎外同類ニテ士籍剝脱或ハ流刑等ニ処セラレタル輩ヲ赦罪セラシムル	……………	九
一六	国父公二九へ御引遷ニ付テ奥表ノ諸局開設ノ旨達セラル	……………	九
一七	御城下海岸五ヶ所ノ砲台射的演習ヲ命セラレタリ	……………	九
一八	和泉様御事明廿一日二の丸へ御引遷御延日ノ旨達	……………	九
一九	太守公撃剣師範家へ達セラレタル御訓示	……………	九
二〇	国父公二ノ丸へ御引遷	……………	一〇
二一	国父公御上京ニ付江戸邸ニ於テ警備ノ人員	……………	一二
二二	国父公御出府御首途ノ式執行セラレタリ	……………	一三
二三	長藩土木原庸蔵外二名国父公御出府ヲ聞テ入国シ大山格之助等へ面晤ヲ乞ヘリ	……………	一四
二四	熊本藩士廿余名入麩シ小松大久保ニ面会ヲ乞ヒ国父公御出府ノ実否ヲ問フ	……………	一五
二五	国父公訓誡ノ令ヲ発セラレタリ	……………	一五
二六	国父公御政事御介助ノ旨太守公御親書ヲ以テ達	……………	一六
二七	重テ国父公訓誡ノ令	……………	一八
二八	国父公二ノ丸御発駕	……………	二〇
二九	町田岩下カ率ル処ノ人数日向路ニ向テ出発ス	……………	二一
三〇	御途中筑後瀬高駅ニ於テ浪士三十余名御本陣へ推参シ從駕ノ重役へ面接ヲ乞フ	……………	二一
三一	筑前木屋瀬駅ニ於テ浪士廿六名御本陣ニ推参シ從駕ノ重役ニ面会ヲ乞フ	……………	二二
三二	久留米藩士真木和泉守来麩	……………	二四
三三	馬関ヨリノ飛報到着国父公三月廿五日小倉駅ニ着セラルタル旨告ケ来	……………	二五
三四	国父公ハ播州室津へ着セ玉ヒ同五日迄從駕ノ人々ノ来着ヲ待セ玉フ	……………	二五
三五	太守公磯御邸下海浜ニ於テ大砲訓練御覧	……………	二六

三六	兵庫駅ニ着セラレ此日近衛殿ヨリ御内書到来	二二六	五六	国父公浪人鎮撫奉勅ノ旨幕府へ届書	五五
三七	天真流師範加藤権兵衛拝領脇差ノ側役山口直記証書	二二七	五七	暴徒鎮撫ヲ命セラレタル奈良原大山外数名国父公ヨリ御感状ヲ賜フ	五六
三八	国父公大坂土佐堀ノ藩邸ニ着セラル此日從駕ノ輩へ嚴誡ヲ下サル	二二八	五八	慶府ニ於テハ国父公浪士鎮撫ノ為メ御滞京ノ勅命ヲ奉セラレタル趣布告	五七
三九	大坂邸ヨリ伏見ノ邸ニ着セ玉フ	三三〇	五九	禁闕守護ノ為メ島津石見一隊ノ兵ヲ引テ上京ス	五七
四〇	国父公御政事向御介助被為在旨布告	三三一	六〇	関白九条尚忠公内覽職ヲ免セラル	五八
四一	近衛忠房卿ヨリ国父公へ近衛家訪問ノ御内書到来	三三一	六一	近衛忠房卿ヨリ国父公へ近衛忠熙公関白職内覽御辞退ノ趣書翰	五八
四二	伏見邸ヲ發セラレ京師錦ノ邸ニ御休憩近衛家へ御參殿	三三二	六二	御家老座筆者長野彦七京師ヨリ昼夜兼行着慶寺田屋ニ於テ暴徒鎮圧趣ヲ報ス	六〇
四三	御滞京ノ勅命ヲ蒙ラセラレタルニ依リ伏見邸ヲ發セラレ御上京	三三五	六三	慶府ニ於テハ宸翰及ヒ御短刀拝戴ノ趣或ハ寺田屋事件ヲ布告	六〇
四四	大島三右衛門南島謫居ノ経緯	三三六	六四	太守公五杜御參拜国父公京師ニ於テ御成功ノ御祈願	六〇
四五	国父公陽明殿へ御參殿ノ形勢大山綱良友人江報知ノ書	三三七	六五	近衛家ヨリ国父公御呼名ヲ三郎ト御改メアラマホシトノ趣云御書翰	六一
四六	長州世子長門守殿初メテ藩邸へ来向	三三九	六六	国父公勅使大原三位殿へ御差副御東下スルヘキ旨拜命	六一
四七	国父公御上洛爾来京伏坂間ニ各藩ヨリ動靜視察ノ為メ来集セリ云云	四〇一	六七	島津石見二百余名ノ手勢ヲ率ヒテ上着ス則輦下警衛ノ諸事ヲ命セラレ	六一
四八	磯永弘卿友人某へ送リタル当時ノ形勢概略ノ書牘	四〇一	六八	伏見寺田屋ニ於テ暴徒ノ中奈良原カ説論ニ服シタル曹福山ニ着ス	六一
四九	柴山愛次郎橋口壮介等之一類京師へ向テ発向ス	四〇四	六九	本藩士ニシテ暴徒ニ教唆セラレシ者ノ年輪	六二
五〇	伏見寺田屋ニ於テ奈良原カ説論ニ服シタル田中河内之介ヲ初メ我藩士數十人ヲ京師錦街ノ藩邸へ護送ス	四〇八	七〇	一橋尾張其他解愼	六三
五一	寺田屋ノ始末叢聞ニ達ス	四〇九	七一	越前守養父隠居松平春嶽以来御用向可申談云々御達	六三
五二	近衛家ヨリ御參殿アルヘキ旨御使ヲ以テ仰越サル	四一〇	七二	久世大和守上京ヲ停メラル、云云近衛忠房卿ヨリ御通知	六四
五三	国父公へ服心股肱ニ頼ミ思召スノ宸翰及ビ近衛忠房卿御添翰	四一一	七三	近衛家ヨリ贈ラレタル御内書	六七
五四	御建言九ヶ条ノ中間老久世大和守御召喚ノ一条所司代飛檄ヲ関東ニ出ス	四一三	七四	勅使東下ニ付近衛殿御内書	六八
五五	太守公ハ京都ニ於テ国父公御尽力且ツ浪士ノ形勢穩ナラサルヲ聞食シ御近習ノ者二名上京	四一四	七五	国父公勅使大原左衛門督重徳卿ト同日御發京関東へ御下向	七〇
			七六	勢州桑名駅ニ御宿泊	七〇

文久二年 二

七 久世大和守名代牧野讚岐守病氣ニ付御役御免願 ……七〇

九四 野々山丹後守外国奉行被仰付 ……八二

九五 太守公南林寺御參詣 ……八二

七八 国父公勅使大原左衛門督殿へ御差副關東御下向アラセラル趣飛報御一門及ヒ諸士ニ迄迄登城太守公国父公へ拜賀 ……七二

九六 国父公大原卿ノ御旅館へ御參向一橋刑部卿ト初メテ御面接 ……八二

七九 国父公江戸高輪ノ藩邸へ着同日勅使大原卿モ先規ノ如ク竜ノ口伝奏邸へ着長州侯ハ我国国父公ト同ク浪士鎮撫又ハ大政改革ノ為メ勅命ヲ受上京 ……七三

九七 勅使御返答ニ付溜詰同格御譜代大名総登城 ……八三

八〇 国父公ハ越前々中将殿ノ邸へ御出向初テ御面会 ……七四

九八 勅使大原卿御登城勅詔奉循ノ御式 ……八三

八一 明十日勅使御対顔ノ旨被仰出 ……七五

九九 国父公勅使大原卿へ御差副江戸御着駕ノ趣ヲ報ス御本丸御休息所御修覆ニ付太守公磯邸へ被為入タリ ……八三

八二 勅使御白書院へ出御將軍へ御対顔 ……七五

一〇〇 久光公浪人鎮撫御功旁ニ付御刀代金三拾枚御頂戴 ……八三

八三 勅使大原重徳卿重テ御登城閣老其他幕吏ト御論談 ……七六

一〇一 国父公閣老水野和泉守殿へ御見舞尋テ越前々中将殿へ御參向 ……八四

八四 国父公ハ閣老脇坂侯ノ邸へ御參向天下事情御縷述 ……七七

一〇二 大久保越中守大目付外国奉行兼帯被仰付 ……八四

八五 幕府小笠原島ニ外国奉行水野筑後守ヲ派遣ス ……七九

一〇三 国父公御二女入来院院恰妻流行瘋疹ニ罹リ死去 ……八四

八六 瘋疹流行君側ノ曹看護ニ関シタルモノモ登城遠慮スヘキ旨達 ……七九

一〇四 徳川慶喜殿再ヒ相統被仰付御登城於御座之間御対顔ハ叙慮被仰遣趣有之被見被仰付 ……八四

八七 大原卿明後十八日重テ登城ノ心得ナレハ御相談ニ及ハレ度趣ニ付御旅館へ御參向アランコトヲ請ハル ……八〇

一〇五 国父公閣老板倉周防守殿へ向テ幕政ノ得失ヲ論セラレタル御書 ……八五

八八 松平丹後守家臣伊東軍兵衛等東禪寺ニ於テ英人殺害 ……八〇

一〇六 例年之趣諏訪社祭典ニ付太守公御喪中ナルカ故近在神事躰本日ヨリ初ル ……八七

八九 大原卿御登城閣老へ天下ノ形勢上下ノ人情二演ヘラル ……八〇

一〇七 松平春嶽政事総裁職被仰付 ……八七

九〇 脇坂板倉ノ両老ハ大原卿ノ御旅館ニ參候一橋後見職ノ一条ヲ演ラル ……八〇

一〇八 各組頭宅へ諸士喚ヒ出シ国父公御滞京中又ハ江戸ニ於テ勅使ニ御副力閣老其他へ御談議ノ概略ヲ示ス ……八七

九一 両老ハ重テ參候後見職一事苦情ヲ述ラル ……八一

一〇九 勅使大原卿御帰京御発途御暇乞ノ為メ御登城 ……八七

九二 大原卿御登城閣老其他大小ノ幕吏列坐ノ中ニ於テ勅旨奉行速ナランコトヲ責問セラル ……八一

一一〇 国父公一橋殿へ御參向御建言書ヲ呈セラレタリ ……八八

九三 京都守衛兵出張ヲ令ラル ……八二

一一一 大原卿ヨリ一橋殿へ贈ラレタル和歌 ……九四

九四 京都守衛兵出張ヲ令ラル ……八二

一一二 大原卿ヨリ一橋殿へ贈ラレタル和歌 ……九四

九三 京都守衛兵出張ヲ令ラル ……八二

一一三 江戸御発駕御首途ノ式 ……九四

一一四	長州世子長門守殿初テ来邸	九四
一一五	国父公江戸高輪ノ邸御発駕東海道ニ向テ御帰国ノ途ニ就カセラル	九六
一一六	国父公ハ函根ノ嶮ヲ越シ玉フ時富士山ヲ遠望セラレ歌ヲ詠セラル	一〇三
一一七	国父公御入洛	一〇三
一一八	国父公天拝御劍御拝戴	一〇四
一一九	国父公勅使ニ御差副御東下ニ付公卿方ノ中ニモ異言紛々タルカ故中山卿正親町三条卿野々宮卿ハ贈ラレタル御書	一〇六
一二〇	国父公ヘ建築ノ御沙汰書正親町三条大納言ヨリ御渡	一一〇
一二一	国父公江戸御発駕ヲ布告ス	一一九
一二二	国父公天拝御劍御拝戴及ヒ御退京御帰国ノ飛報	一一九
一二三	鹿兒島近辺烈風損害ニヨリ米価騰貴	一一九
一二四	生麦ニ於テ英国人殺害ノ飛報	一一九
一二五	在京磯永弘卿友人某ヘ送リタル書牘抄	一二〇
一二六	国父公御帰国願ニ付三条実愛卿叙慮之趣御書取ヲ以テ仰越サレタリ	一二二
<b>文久二年 三</b>		
一二七	寺田屋鬭争ノ前頃世ノ形勢	一二四
一二八	神奈川ニ於テ汽船買入	一二四
一二九	軍備充実ノ為メ御領内百二拾余郷ニ硝石製造所ヲ建設セシム	一二五
一三〇	島田左兵衛権大尉斬殺セラレ四条川原ニ梟首	一二五
一三一	太守公御参府御猶予ノ御願閣老御聞届	一二六
一三二	太守公谷山ヘ御遠馬ヲ催サレ御通路掛ケ伊集院仁左衛門カ墓碑御覽	一二六
一三三	生麦村ニ於テ英国人斬殺シタル雜説長崎ヨリノ報知	一二八
一三四	米一万石ヲ朝廷ヘ献上	一二九
一三五	幕府ハ国父公御献言ノ旨ヲ採用	一二九
一三六	国父公勅使ト御同日京都御着駕近衛殿ヘ御参殿云々報知到来	一二九
一三七	国父公御下国ノ処御内勅被為蒙閣東御尽力之襄勅アリテ御劍御拝領	一二九
一三八	生麦ニ於テ英人斬殺事件ニ付同国「ミニストル」ヨリ幕府ニ就テ詰責ス	一三〇
一三九	大目付諏訪数馬事被聞召趣アリテ謹慎	一三〇
一四〇	御近習番松方金次郎生麦村ニ於テ英人斬殺事件ニ付昼夜兼行帰覽	一三一
一四一	国父公京師御発駕御帰国ノ途ニ就カセラル	一三一
一四二	国父公御行列ノ順次	一三一
一四三	国父公御下国後始テ五社御参詣	一三一
一四四	太守公関ヶ原ノ難戰ヲ追想妙円寺参詣	一三二
一四五	江戸報知ニ曰幕府モ逐次政態改革ニ着手云々	一三三
一四六	国父公御親筆ヲ以テ当今ノ世態情実ヲ示サレ御国政一大変革セラルヘキ旨布令	一三三
一四七	国父公御達ニ依リ太守公御添書	一三四
一四八	国父公福昌寺御墓参	一三五
一四九	国老小松帯刀京都及ヒ江戸ヘ至急上登スヘキ旨拜命	一三五
一五〇	幕政変革シ諸侯ノ妻子国邑ノ居住ヲ免ス	一三五
一五一	幕政変革ニ付太守公御参覲	一三六

一五二	江戸在勤斐刈李之介留守居汾陽次郎右衛門免職	一三六	一七二	伊地知壯之丞御小納戸格御庭奉行動集成館掛押	一六一
一五三	大樹公来亥春上洛	一三六	一七三	太守公国父公御一同沖ノ小島砲台築造ノ場御覽	一六一
一五四	三条実愛卿当時ノ形況ヲ記シ国父公叡慮ヲ安セラルヘキ旨懇請	一三六	一七四	暁姫様寧姫様御事御下国ノ旨達	一六二
一五五	藤井良節京都ヨリ昼夜兼行近衛殿下及青連院宮中山卿等ノ御書翰ヲ護シ着寤	一三七	一七五	年頭御式ノ達	一六二
一五六	国父公ヨリ青連院宮ヘノ答書朝議常変二道ノ件	一三七	一七六	井伊掃部頭及同類ノ者御処分ノ達	一六三
一五七	有馬新七其外同類七人死体埋捨被仰付候事	一三八	一七七	暴徒攘夷勅命ヲ迫ル	一六七
一五八	近衛殿下御親翰ニ被对国父公御答翰	一三九	一七八	豊後岡藩主中川修理大夫江戸参府ノ途次長土二藩或ハ浮浪士等馳テ修理大夫ヲ責テ京師ニ入ルシム	一六八
一五九	藤井良節御答翰ヲ護シ上京	一四一	一七九	井伊安藤其他ノ前罪ヲ匡サレ將軍家茂公ヲ權大納言ニ貶セラル	一六九
一六〇	勅使関東ヘ下向醜夷拒絶ノ勅諭	一四二	一八〇	傍觀シタル藩々争フテ上京或ハ一門ノ者或ハ重臣ヲ上京セシメ宮堂上方ノ間ヲ奔走阿媚ス	一六九
一六一	太守公御親書ヲ以テ目下必要ノ条件一般ヘ御諮問	一四九	一八一	生麦ニ於テ英国人斬殺ノ事件ニ就テ江戸飛報	一七〇
一六二	来亥春將軍御上洛ニ付キ太守公ニモ御付従	一五〇	一八二	照国公御贈官ノ口宣到着	一七〇
一六三	例規ノ如ク稻荷社祭典執行	一五一	一八三	太守公国父公御一同今度変更ノ兵隊操練御覽	一七〇
一六四	国父公御上京太守公御参府ニ不及旨達	一五一	一八四	大島盛太夫等十名御役又ハ勤方免ゼラレ謹慎	一七〇
一六五	横浜ニ於テ購求セラレタル汽船本日廻着セリ永平丸ト名ツケラル	一五一	一八五	島津権五郎御小姓与番頭二拝ス	一七一
一六六	軍制改革太守公御親書ヲ以テ令セラレタリ	一五一	一八六	伊地知壯之丞御小納戸頭取御趣法掛御用人席ニ拜シ御用取扱御用人同様トノ趣達セララル	一七一
一六七	江戸ニ於テ御願濟アリシ琉球通宝鑄造布告	一五四	一八七	將軍家御上洛発表	一七一
一六八	国老喜入撰津守衛兵二百名ヲ率ヒ至急上京	一五七	一八八	御上洛之節久能山ヘ御社参	一七一
一六九	斉彬公贈權中納言従三位ノ宣下付照国大明神之高ヲ下サル	一五八	一八九	大赦発表	一七一
一七〇	高橋縫殿大目付拝命	一六一	一九〇	米穀置乏ニ付急救ノ法ヲ建ラレ肥筑両国ヨリ許多輸入セシム	一七一
一七一	長土水其他各藩士或ハ浮浪ノ徒洛中ニ蟻集シ鎖攘ノ說喧囂暴慢ノ所為寡カラズ内乱目下ニ迫レルトノ飛報	一六一	一九一	將軍御上洛ニ付隨行ノ面々冗費省略スヘキ旨達	一七二

一九二	照国公御社殿建築場御撰定	……………	一七二	二一〇	琉球通宝通融ノ御達	……………	一八五
一九三	子十二月御上洛ニ付仰出	……………	一七二	の	一	……………	一八五
一九四	国父公京都守護職御拜命	……………	一七三	二一一	太守公擊劍師範加藤権兵衛カ宅へ入ラセラレ聖 劍法御覽	……………	一八六
一九五	松平肥後守守護職及ヒ国父公御上京御沙汰書	……………	一七三	二一二	太守公川尻調練場へ御出馬	……………	一八六
一九六	御流儀砲術歩兵訓練之儀此涯取止ニ付川上式部 申渡	……………	一七三	二二三	暁姫様寧姫様御着ノ苦ニ付御手当向ノ儀御達	……………	一八六
一九七	近衛関白曩キニ勅約ノ如ク御辞職内覽ノ宣旨ヲ 蒙ラル	……………	一七四	二二四	御着当日ノ次第布達	……………	一八六
一九八	大久保一藏至急上洛	……………	一七四	二二五	兩姫君様御着	……………	一八七
一九九	近衛忠熙卿ヨリ国父公へ京都守護職トシテ御上 京ニ付御書翰	……………	一七四	二二六	御城下六組与替ノ達	……………	一八七
二〇〇	松平容堂殿存寄申立云々老中演達	……………	一七九	二二七	御城下諸士五人組設立ノ令	……………	一九三
二〇一	の	一	一八〇	二二八	御鷹場廢セラレ	……………	一九三
二〇二	松平容堂公ヨリ国父公へ奮起ヲ促ス御書翰	……………	一八〇	二二九	江戸中ニ在ル藩邸大小十余ヶ所必要ノ分ヲ殘シ 其余ハ悉ク売却或借地等返戻	……………	一九四
二〇三	寺院ノ梵鐘仏具ノ類鑄壞琉球通貨鑄造資料ニ充 タリ	……………	一八三	二三〇	故井伊掃部頭直弼殿ノ前罪ヲ匡シ祿地没収付藩 内沸騰	……………	一九五
二〇三	歳暮拝賀ノ御式受ケサセラレタリ	……………	一八三	二二一	砲術館ヲ廢シ演武場建設	……………	一九五
二〇四	年首御式執行	……………	一八四	二二二	御軍賦改正ニ付一所所有地外ノ祿高減少ノ令ヲ 發ス	……………	一九六
二〇五	例規ノ如ク砲術館ニ於テ歩砲二兵ノ操練及ヒ軍 神祭典執行	……………	一八四	二二三	金相場替発令	……………	一九六
二〇六	本年々首ノ礼式ヨリ麻袴又ハ羽織袴等着服勝手 タルヘキ旨令	……………	一八五	二二四	富国強兵ノ道ヲ開質素節儉ノ令	……………	一九六
二〇七	本年々首御謡初ノ御式廢セラレ	……………	一八五	二二五	攘夷策略御下問ノ思召	……………	一九七
二〇八	旧臘発布幕令ヨリシテ一般平服上下ヲ廢シ羽織 袴紺足袋等着ス	……………	一八五	二二六	京師ノ形勢報知	……………	一九七
二〇九	先規ノ如ク諸役人昇級転遷或ハ地頭職転換ヲ命	……………	一八五	二二七	一橋殿上洛	……………	一九八
				二二八	太守様御参府御延期	……………	一九八
				二二九	近衛殿御書翰ヲ以国父公御上洛速ナルヘキ旨御 依頼ノ飛報	……………	一九九

二二〇

の 勸農ノ儀御布達 …………… 一九九

二二一 太守公御親書ヲ以テ令条ヲ発布 …………… 二〇三

二二二 暲姫君典姫君寧姫君大磯ノ桜花遊覧ヲ催 …………… 二〇四

二二三 琉球通宝鑄造資料トシテ古製銅砲鐘ノ類ヲ鑄滅スヘキ旨令 …………… 二〇四

二二四 汽船永平丸明石灘ニ於テ暗礁ニ乗揚艦底破裂ス …………… 二〇四

二二五 両御旗本其他諸隊操練 …………… 二〇四

二二六 国父公不日御上京ニ付汽船買入 …………… 二〇五

二二七 永平丸暗礁ニ触レ沈没シタルカ故小松等ハ幕船ヲ拝借シ下甕 …………… 二〇五

二二八 国父公勅命ヲ蒙セラレ御上京ノ旨被達 …………… 二〇五

二二九 沖ノ小島遠見番所ヨリ幕ノ汽船ヲ誤認シテ相凶ノ狼煙ヲ揚ク …………… 二〇五

二四〇 川上筑後多年職務精勤致シタルニ付思召ヲ以鞍籠拝領 …………… 二〇六

二四一 中山中左衛門大久保一蔵御側役御小納戸頭取兼務ニ拜ス …………… 二〇六

二四二 京師警衛ノ為メ重中小姓并足輕等上京出發 …………… 二〇六

二四三 海岸守備ノ令 …………… 二〇六

二四四 異国船御手当ノ次第 …………… 二〇七

二四五 外国事情視察ノ為メ派出セシ新納次郎四郎帰甕生麦事件ニ付英艦來港スヘキ趣報知ス …………… 二〇八

二四六 国父公御上洛御首途ノ御式御先規ノ如ク執行 …………… 二〇八

二四七 御筆又ハ御口達ノ覺 …………… 二〇九

二四八 御親書布令 …………… 二〇九

の 一 稲富數馬外數名実父在職中ノ不正阿責 …………… 二二〇

二五〇 御側役其他御軍役奉行等へ職務時間御達 …………… 二二二

二五一 御趣法掛被廢 …………… 二二三

二五二 御勝手方掛并御用人右御役場廢止ニ付掛御用人御用人座へ出勤スヘキ旨達 …………… 二二四

二五三 御趣法方調掛ノ儀以來御勝手方調掛ト名目被相替 …………… 二二四

二五四 政庁御出席政務取扱ノ実況御親覽 …………… 二二四

二五五 非常ノ時世御變革御一条等御沙汰ニ付達 …………… 二二五

の 二 国父公御上京御日延 …………… 二二五

二五六 五代才介支那上海ニ於テ購求ノ汽船廻着ス …………… 二二五

二五七 国父公御上洛ニ付太守公ヨリ御別杯 …………… 二二六

二五八 高崎佐太郎中川宮及ヒ近衛家ノ御内旨ヲ含テ下 …………… 二二六

二五九 長藩久坂玄瑞外數名暴論者ノ聞へアル輩御面謁 …………… 二二六

二六〇 松平長門守殿ハ家臣久坂等カ關白殿下ノ館邸へ推參セシ趣伝聞セラレ候云々 …………… 二二七

二六一 物頭ノ名目被廢御兵具奉行ノ名目ニ被復 …………… 二二七

二六二 御役人并御役場新ニ被召立達 …………… 二二七

二六三 伊集院平治小根占郷地頭ニ拜ス …………… 二二七

二六四 異国船渡來ノ節諸向御手当ノ儀御達 …………… 二二七

二六五 諸郷へ異国船内海へ乘入候節ノ手当ニ付達 …………… 二二七

二六六 諸郷へ異国船内海へ乘入候節ノ手当ニ付達 …………… 二二七

二六七 諸郷へ異国船内海へ乘入候節ノ手当ニ付達 …………… 二二七

二六八 重久佐次右衛門金老万兩借上 …………… 二二七

二六九	重久佐次右エ門川井田藤助外三名借上金ノ儀達	二二三	二八八	国父公御退京ノ節御届書	二四五	
二七〇	江戸及京坂鎖港攘夷種々ノ訛言	二二四	二八九	近衛家へ御退京ノ御趣意書呈贈	二四六	
二七一	重久佐次右衛門御貸上金ノ義ニ付慎ヲ被命	二二五	二九〇	国父公御帰国ノ旨仰出	二四九	
二七二	国父公不日御上洛其他汽船購求ノ為メ竹下清右衛門外一名出崎	二二六	二九一	国老小松帯刀將軍家御上洛ノ恭賀ヲ述	二五〇	
二七三	急變ノ節御目付御軍賦役ヨリ達シ次第御兵具所ヨリ相図ノ目吹立候様達	二二六	二九二	御上洛御在京日数十日タルベキ旨被仰出ニ付達	二五五	
二七四	質素節儉布令云々	二二七	二九三	英艦神奈川へ来港シ生麦ノ事件ヲ責論ス	二五五	
二七五	金銀錢ノ融通ノ儀云々	二二七	二九四	英艦渡来ニ付幕府ヨリ御達	二五五	
二七六	諸国寺院ノ梵鐘ヲ溶滅シ大砲ニ鑄換スヘキ太政官符	二二七	二九五	大樹婦府ノ事以勅諭被召止	二五六	
二七七	海防ノ準備一層嚴整スヘキ旨令セラル	二二九	二九六	攘夷ノ儀ニ付幕府沙汰書	二五六	
二七八	各藩党派分立	二二九	二九七	英国軍艦ヨリ差出タル書翰	二五六	
二七九	將軍家茂公上洛ノ途ニ就	二二九	二九八	右英人ノ書翰ニ対スル幕府答書	二五七	
二八〇	京師及江戸雜報	二二三	二九九	足利三將軍ノ木像ノ首梟シタルニ付達書	二五八	
二八一	佐賀侯ヲ文武勸奨ノ総裁トシ人材登庸撰択ノ事ヲ委任ス	二二三	三〇〇	洛中ノ形勢云々報知	二五九	
二八二	大坂ノ儒者池内大学及千種殿家臣賀川肇浪人ノ為ニ斬殺セラル	二二三	三〇一	諸隊編伍ヲ改ム	二五九	
二八三	英国ノ軍艦横浜ニ来港シ生麦事件ヲ詰問ス	二二三	三〇二	砂揚場ニ於テ諸隊ノ操練ヲ催ス	二六〇	
二八四	大原左衛門督四辻侍從謹責ヲ蒙リ禁錮セラル	二二三	三〇三	幕府外国掛御目付ヨリ江戸留守居へ渡サレタル書面	二六〇	
			三〇四	長崎奉行ヨリ九州各藩へ達	二六一	
			三〇五		二六一	
			の	一	井伊掃部頭家来へ英艦渡来ニ付御達	二六一
二八五	二ノ丸御殿へ花倉御茶屋御引直	二三五	三〇六	攘夷拒絶御届	二六二	
二八六	国父公御発城前ノ浜ヨリ御搭艦	二三五	三〇七	国父公於京都從駕ノ者へ御示達	二六二	
二八七	国父公御親書ヲ以テ從駕人員へ御達書	二四四				

文久三年 二

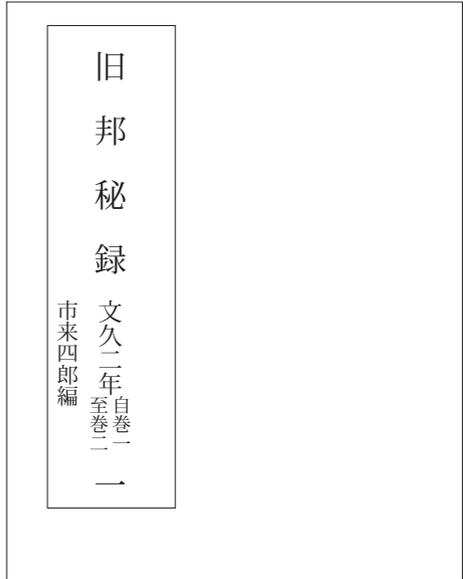
三〇八	大久保一蔵ヲ以御達書	二六三	三二九	花倉御茶屋国分御仮屋地へ御引直	二七五
三〇九	攘夷御決議期限諸大名へ達	二六三	三三〇	五ヶ所砲台演習ヲ催サル	二七五
三一〇	尾張大納言外二十侯へ攘夷ノ成功遂クヘキ懇勅	二六四	三三一	国父公御下国御迎ノ為太守公国分迄御奉迎	二七五
三一〇	尾張大納言外二十侯へ攘夷ノ成功遂クヘキ懇勅	二六四	三三二	国父公佐土原へ一日御滞留又之進殿元服加冠ノ式願	二七六
三一一	二条城ニ於テ閣老水野和泉守殿御渡	二六四	三三三	国父公御着城	二七六
三一二	將軍帰東ノ願停止ノ御達書	二六五	三三四	御三役以下職務時間召替	二七七
三一二	將軍帰東ノ願停止ノ御達書	二六五	三三五	国父公福昌寺外二寺御廟參	二七七
三二三	大樹帰府之事故々以勅諭被召止候事	二六五	三三六	四月中旬大坂物価報	二七七
三二四	国父公汽船白鳳丸ニ搭セラレ御帰国	二六六	三三七	国父公御退京後朝暮阻隔ノ情甚シキ趣近衛家御内書	二七八
三二五	英夷開兵端候節者尽力決戦スヘキ幕府沙汰書	二六七	三三八	御内書ニ对セラレタル国父公御答翰	二七九
三二六	伝奏衆ヨリ水戸殿へ御達書	二六七	三三九	攘夷拒絶ノ嚴令	二八二
三二七	英国人へ彼我国旗ノ照会書写九州沿海各藩へ示サル	二六七	三四〇	例年ノ如吉野牧馬追張行	二八三
三二八	在京各藩へ攘夷ノ勅命	二六九	三四一	御直元服并御太刀進上ニテ初メテノ御目見ノ儀ニ付達	二八九
三二九	国老島津登辞職願	二七〇	三四二	長土水三藩及浮浪ノ輩溢セラレ	二九一
三三〇	英国軍艦打払方ノ儀ニ付各藩留守居へ被達	二七〇	三四三	砂揚場ニ於テ大砲遠撃ヲ催	二九二
三三一	米価格外高料ニ而諸人難決ニ付達	二七一	三四四	火薬製造所各所ニ創設	二九二
三三二	国父公不日御下国可被為在旨御達	二七一	三四五	將軍家御上洛	二九二
三三三	海陸攻守ノ操練ヲ催サル	二七二	三四六	主上石清水八幡へ行幸將軍家供奉ヲ命セラル	二九二
三三四	長崎報知書曰攘夷鎖港決定ノ趣外国人へ洩聞ヘタル云々	二七二	三四七	国父公御退京後京師ノ形勢云々	二九四
三三五	梵鐘琉球通宝鑄造資料ニ尤ラル	二七三	三四八	磯永真海友人へ通報ノ書牘ノ略	二九五
三三六	照国大明神ノ社殿御造営御着手	二七三			
三三七	中原猶介長崎ヨリ報知書	二七三			
三三八	中原猶介友人へ送りシ書簡	二七四			

三四九	將軍家參内天拜ノ式執行	三〇〇
三五〇	上下加茂神社行幸	三〇一
三五一	下町弁天砲台ニ於テ大砲演習	三〇二

旧  
邦  
秘  
録



〔表紙〕



〔扉に、表紙の文字の外に「久光公御加筆」二〔紙数百二十八枚〕の記載あり〕

旧邦秘録卷之一

文久二年壬戌○清曆同治元年  
○西曆千八百六十二年

紀元二千五百二十二年

孝明天皇第百廿  
世統仁即位十七年

將軍家茂公第十  
五世襲職五年

〔四世カ〕

忠久公第一  
世受封八十二世  
後鳥羽 六百七十七年  
茂久公第二十  
九世 知政五年

1 ○正月年首拝賀ノ式略シテ行ハラレタリ〔符カ〕一昨万延元年庚申三月御参府ノ御途中、筑後国松崎駅ヨリ御発病ノ御申立ニテ御引返シ御帰国、其後今ニ御全快ニ至ラセラレザル旨ノ御届ナルカ故、嘉慶ノ式モ略式執行セラレタ、

2 ○正月六日立春、御先規ノ如ク御流儀砲術西洋式即チ高島秋帆ガ和蘭人ヨリ伝習シタル欧州式ノ操練及ヒ軍神祭典等執行セラレタリ祭典司兵道、家馬衛守

御名代島津讚岐〔貼紙〕「貴」垂水郷一万五千四百、国老川上但馬敦二十石余ヲ領ス、

久〔貼紙〕「実名糺ス」、其他大番頭・御小姓組番頭・御側役・御軍役奉行・物頭等数十名出役、操練人員総計二千五

百三十余名〔運カ〕諸郷土及ヒ私領ハ每郷二三名乃至四五名出頭

小銃隊乃チ「ゲベル」及ビ野戦砲隊或ハ砲台射擲等ノ演

習ヲナセリ、畢テ一同へ酒肴ヲ賜ハリタリ、其式先規ノ如シ、

〔本文書は「忠義公史料 第一卷」四九五号と同文なり〕

3 ○正月十一日、先規ノ如ク諸役員昇級転遷ヲ命セラレタ

リ、其人員凡ソ二十余名人名略、

4  
○正月十二日、江戸ヨリノ飛報到来、報ニ曰ク、旧臘十

二月七日文久元年辛酉、十二月七日夜、江戸芝ノ藩邸火災ニ罹リ、御殿

其他焼燼、加之隣近ニ延焼セシ趣、火ノ出所ハ大奥作

事木屋ニ起レリト云十二月十八日ノ夜初報着、其、後本日迄数回ノ報アリタリ、○芝本邸

ノ造営ハ、嘉永六年癸丑ノ夏ヨリ安政二年乙卯ノ秋ニ

至リ、凡ソ三年有余カノ星霜ヲ積ンデ建築セラレタル者

ナリ造営ノ始末ハ、照因、公御伝ニ詳記ス、○邸中ヨリノ出火ナルカ故、幕

府ノ例規ニ照シ不注意ノ趣ヲ以テ御差扣書ヲ呈セラレ

タリ幕府ノ法規ニ、江戸府内ニ於テ出火セシ時ハ、不、注意恐縮ノ旨ヲ以テ謝罪スルヲ差扣ト通唱ス、○同十五

日、御用番ヨリ閣老御遠慮ニ及ハレサル旨達セラレタ

ル趣モ告ケ来レリ、因テ本日御一門家ヲ初メ大小門葉

ノ人々及ヒ諸士登城、御機嫌伺ヒ奉ルヘキ旨国老ヨリ

布告セリ、然シテ家廷至天璋院殿御統柄ノ詛ヲ以テ再建ノ

費用金二万両惠与セラレタル趣モ告ケ来レリ、○本年

四月中例規ノ如ク従来諸大名江戸参観ノ規則アリ、我藩四月参府四月賜暇ノ定規ナリ、御参府

ノ御予定ナリシニ、火災ニ罹レルヲ以テ猶予セラレン  
コトヲ請願セラレタリト雖トモ、幕府ハ成規ニ照シテ

允許スルヲ得ス、茲ヲ以テ特別造営費ヲ惠与シ、御参  
觀ヲ促シタル者ノ如シ、○當時在邸国老島津登包、番

頭菱刈空之介隆徳、留守居汾陽次郎右衛門・同兼役堀

次郎旧名仲左衛門・小太郎・次郎、後子伊地知宗之丞、今貞馨、

編者曰ク、文久元年辛酉三月三日、外桜田ニ於テ水戸

脱藩士及ヒ我カ藩士有村次左衛門兼清「実名札ス」田信

義方等カ大老井伊掃部頭殿直ヲ刺殺シタリ、茲ヲ以テ

彦根藩士ハ復仇ノ企ヲナシ水戸ニ兵ヲ向ントシ、我

カ藩ニ復讐ノ謀ヲ旋ス等ノ説紛々擾々タルカ故、若

シ御途中又ハ江戸府内等ニ於テ無礼ヲナス者アルニ

当テハ、至当ノ所分ナサ、ルヲ得ス、然ルトキハ倭

チ天下ノ動乱ヲ惹キ起サンコトヲ慮リ、筑後国松崎

駅ヨリ御発病ノ御申立ニテ御曳返シ當時ノ事実ハ万延元、年ノ記ニ詳載ス、

御帰国アラセラレタリ、○此ノ変タルヤ、二百有余

年至治ノ世、然カモ威權赫奕タル大老カ僅々十数名

刺客ノ為メニ斬殺セラレタルハ、斬殺連中ニ有村次左衛門

事実、或ハ其後海江田信義・内田政風等カ大久保利、幕威ノ墜

通ヲ論責シタル始末ハ、万延元年ノ記ニ掲載ス、揚二関スルヲ以テ連類・党与ヲ搜索スルコト甚タ嚴

5  
〔頭注〕「藩邸建築費惠号」

○正月十五日ノ夜、江戸ノ飛報到着十二月二十、五日江戸発、報二曰ク、

今春御参観之儀、御屋敷焼失御住居不被為調旨ヲ以テ  
五ケ月程御猶予之御願相成候処、御願之通御聞置、九  
月中屹度御参府可被為成卜之趣被仰渡、且御屋敷御焼

〔本文書は「忠義公史料 第一卷」五〇五号と同文なり〕

且ツ彦藩ニ於テハ君仇ヲ報シ国辱ヲ雪カントスルノ  
際、我藩ハ尋常参観ノ行装ニテ不慮ノ変ニ応スルノ  
予備コレナキカ故、事変ノ報ヲ聞テ断然御帰国アラ  
セラレタリ、而シテ従駕ノ国老川上久美式部参府、其顛  
末ヲ届出タリ、○此ノ變動ニ就テ一般動搖、人心  
恟々物議喧囂、上下顰眉声ヲ吞ミ、流血堆屍ノ世ニ  
変セシコトヲ恐懼セリ、斯カル時情ナルカ故、御帰  
着ノ後モ応變ノ警戒ヲナサシメ、或ハ謹慎セラレタ  
リ、尋テ本年正月十五日、坂下門外ニ於テ浪士等闇老  
安藤信正对馬守殿傷ケ、連年如此キノ時態ニ陥リタルハ  
幕府ノ威望存廢ニ罹リ、剩へ外夷ハ各所ノ開市ヲ迫  
リ、将来如何ナル世ニ変スルナラント悉人危懼ヲ懷  
ケリ、之レヲ乱兆顯レ、幕運ノ傾ケル初メトス、

失ニ付御造営費御拝領、旁不容易御訳柄ニ付、当秋  
太守様御参府被遊迄之内

〔頭注〕「国父公御参府発表」  
和泉様 即チ国父久光公、編者ハ以下皆国父公ト記ス、国父ト御尊崇  
云云之趣ハ、文久元年辛酉四月廿七日太守公御親書ヲ以テ布  
達セラレタリ、其ノ御親書ハ當時之記ニ詳載ス、御出府御礼被

仰上度御内願被 仰上候処、当春中御出府被成候而モ  
不若旨被仰渡候段モ申来候、此旨可致通達候、

正月十六日 但馬川上 式部川上 摂津喜入

右ノ如ク布達セラレ、而シテ 国父公御出府ノ準備ニ着  
手セラレ、諸事 太守公御参府ノ向ニ準拠スヘキ旨モ達  
セラレタリ、

編者曰ク、昨年春松崎駅ヨリ御引返シ、御帰国ノ後  
ハ種々ノ巷説寡ラス、咸人憂慮スル所ナリシカ、

国父公御参府ノ旨発布セラレシニハ、一般大ニ怡悅  
〔朱書〕  
〔下脱カ〕  
ノ説、誰謂フトモナク唱フルカ故、有志之輩ハ歎喜

ノ眉ヲ開キ、壯年ノ者ハ握腕奮起従駕ヲ冀望シ、其  
筋ニ就テ切迫頼請スル者夥シク、実ニ盛ナリト謂フ

ヘシ、

〔本文書は「忠義公史料 第一卷」五一〇号と同文なり〕

6 ○英人迫テ品川御殿山ニ居留館ヲ建築ス、洋風ノ造築盛

大ヲ極メタリ、十二月十八日夜焼亡ス、火ノ出所全ク

放火ニ罹ル者ノ如シト云フ、街説ニ、浪士或ハ長土水

三藩士ノ所為ナリト云フ、建築未タ落成ニ至ラス、不

日英人徙居ノ準備中ナリト云フ、

7の1 ○正月十七日、島津〔久昌〕国老職ニ拜ス〔朱書〕若年、小松帯刀〔清藤〕

大番頭ニ拜シ、御側役勤是迄之通ニテ御家老方御用吟

味事ニモ可相加旨拜命ス〔元〕当番頭、而シテ同日 国父〔寄職〕

公御出府ニ付、従駕ヲモ命セラレタリ、布達左ノ通り、

和泉様御事、当春中御参府可被 遊旨、従 公辺被仰

出候段、 御直被 仰上、御家老之場ニテ小松帯刀被

召列候様被 仰述候、此旨可致通達候〔編者云、御直被仰上云云、 太守公ヨリ 国父公へ御直被、 仰上ルヲ云フ〕

正月 十七日

但馬川 上

〔本文書は「忠義公史料 第一卷」五一五ノ一号と同文な

り〕

7の2 又従駕ノ人員左ノ通り達セラレタリ、

和泉様御出府被為在候ニ付、御供方之儀者

太守様御参府御供被 仰付置候面々、都テ被召列候旨

被 仰出候、此旨向々へ可相達候、

正月 十九日

但馬川 上

右ニ 太守様御参府御供被 仰付置候面々トハ、昨年三

月御参観従駕ノ人員ヲ云フ、松崎駅ヨリ御曳キ返シ御帰

国アラセラレ、重テ御参観ノ時モ此人員従駕ヲ命セラレ

シ故、今回転シテ如此命セラレタル者ナリ、

○正月 日〔貼紙〕「日糺スヘシ」、 国父公御出府中、国老喜入〔久高〕

撰津御用部屋江毎勤スヘキ旨ヲ命セラレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第一卷」五一五ノ二号と同文な

り〕

8 ○正月十八日江戸飛報ニ曰ク、本月二日ハ例規ノ如ク年

首嘉慶ノ為メ諸大名総登城〔二日下馬ト通唱シ、各正服ヲ着ケ行、 粧美観ニシテ登宮、嘉慶ノ式アリ、

朝四ツ時頃天下馬何トナク騒擾、各藩扈従ノ輩各刀槍

ヲ携へ、刃向フモノアラハ鬪争ニ及ハンノ準備ヲナセ

り、城中ニハ下馬〔前脱カ〕ニ駭騒起レリト囂々タリ、城外ハ宮

内ニ非常ノ事アリシト人以人ニ伝へ、其出所詳ナラス、

9

真二怪奇ノ形況ナリ、其レカ為各藩邸ヨリハ早馬ヲ飛ハシ、或ハ驅ケ来ルモアリテ府下鼎沸セリ、過年外桜田ノ街二井伊大老ノ變アリテヨリ、各藩心ヲ用ヒ警備嚴ナルカ故、又モヤ浪人ノ暴動ナラント頗ル騷擾、凡ソ一時今ノ二時許リノ間、何事モナキニ唯々擾々タリシトソ、故ニ内外郭ノ諸門ヲ閉鎖シ、警衛嚴ニシテ往来ヲ停メタリ、何等ノ事ヨリシテ騷駭ニ及ヒタルヤ、鎮定ノ後悉人奇怪ヲ覺、〔天魔カ〕天摩ノ所為ナラント唱ヘタリシト云フ、元日ノ晝ヨリ雪リ、二日ノ朝ニ至リテ熄ミ快晴穩ナルニ、実ニ怪異ノ事ナリシトソ、當中ニ於テハ、登城ノ大小名或幕吏ハ井伊氏横死ノ先跡モアルカ故、同日申ノ刻許リニ下城、閣老等ハ酉ノ刻頃ニ退城セリト云フ、

〔本文書は「忠義公史料 第一卷」五一六号と同文なり〕

○正月十九日、太守公擊劍師範加藤権兵衛宅へ卒然入ラセラレ、門生中修練ヲモ御覽、尚奨勸ノ言親達セラレタリ、御馬行、扈從ノ具、モ威馬上ナリ、而シテ礮其他御乗廻シ、日没ノ頃御帰城ナリ、

10 ○正月廿日、桜島赤水村洗出ニ於テ大砲操練ヲ催サレタ

リ、此地二三ヶ所ノ土堤ヲ築キ、之ヲ放撃セリ、三堤共ニ軍艦ノ長サニ〔ブレカット〕築キタリ、第一堤ハ距離五丁、第二堤ハ八丁、第三堤ハ十二丁トス、是レ夷艦来港撃掃演習ノ為ニシテ、而シテ一月二回定日ヲ以テ演習ヲナサシメラレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第一卷」五一八号と同文なり〕

11<sup>01</sup>

○正月廿三日、侍医八木称平〔玄悦〕〔貼紙〕「実名糺ス」〔洋学ニ通ス、〕及ヒ五代才助友長崎ヨリ帰国ス、出崎セシ所以ハ、外国製ノ汽船買入ルヘキ旨、旧臘十二月奉命出崎セリ、此レ国父公御出府ノ用ニ充テラル為メナリ、〔即チ汽船天、〕○同人力説ニ、現今長崎港碇泊ノ外国船二十余艘、其中英・米・仏・和蘭等ノ軍艦五艘、商船ハ英米ノ両国多キニ居ル、商法日二月ニ旺盛、物価逐日騰貴セリ云云、

〔本文書は「忠義公史料 第一卷」五一九号と同文なり〕

11<sup>02</sup>

○江戸邸焼亡セシニ就テ御造管費金二万両、加之去ル己未ノ年 月「日糺スヘシ」〔貼紙〕安政六年 己未月 江戸大城焼失ノ造管

費<sup>御手伝金ト</sup> 六万両ノ納残四万余両ナルヲモ御納呈ニ及  
通唱ス、

ハサル旨、閣老ヨリ達セラレタリ、藩邸焼亡御造管費二万両及  
ヒ大城造管費御献納金納残

四万両合計六万両ヲ患与セラレタルニ同シ、如斯特別ノ措置アルハ  
天璋院殿ノ縁由ヲ名トシ、其実當時天下ノ形勢危殆切迫、或ハ本藩  
ノ威名高ク必ス為スコトアランノ説算カラサルカ故、概言スレハ氣  
嚮ヲ取ランノ一手段、或ハ我カ 公永ク在国セラレテハ成規立タサ  
ルノミナラス、各藩モ之レニ倣ヒ、種々ノ故障ヲ以テ在国スルニ至  
リテハ幕威ノ如何シニ関スルカ故、如此懇丁ノ措置アリシトノ説モ  
アリタ、○<sup>〔貼紙〕</sup>「編者曰」過ル嘉永癸丑ノ年開港以來、天下

ノ人心乱ヲ好ミ、治ヲ厭フカ如キノ人情ニ変遷シ、而  
シテ辛酉三月浪士井伊大老ヲ刺殺シ、尋テ壬戌正月安  
藤閣老ヲ傷ケシヨリ益ス人心潰乱物情騒然、浪士各所  
ニ蜂起シ、外夷ハ暴謾倨傲ニシテ大坂・兵庫ノ開市ヲ  
迫リ、其挙動猖獗無礼ヲ極メタルカ故、大ニ

宸襟ヲ悩マサレ、鎖攘ノ命ヲ下サル、ト雖モ、幕府循  
奉セサルノ説普ク伝播シ、尊

王憂国ノ人士奮慨抛身シテ幕府專横ノ罪ヲ算ハ蜂起ス  
ルニ至レリ、斯ク不穩ノ世態乱兆顕然タルカ故、各藩  
競フテ海陸ノ守備ヲナセリ、我藩ハ弘化ノ始、 齊興  
公軍制ヲ改革セラレ、沿海ノ警備尤モ嚴整、尋テ照国  
公殊更ニ整理セラレタリト雖モ、神瀬ノ砦堡建築ノ大  
業ハ着手セラレシ迄ニシテ薨セラレ中止セシヲ、今回

再築ノ旨發令セラレ、洋学者石川確太郎<sup>〔正徳〕</sup>へ<sup>石川ハ和州高</sup>  
取藩士ニシテ

洋学ニ達シタルカ故、照国公特

旨士分ノ籍ニ御抱ニナリタリ、凶形其他装置ノ砲数等取調  
ヲ命セラレタリ、同人ハ安政四年ノ頃 照国公ノ命ヲ  
奉シ、和蘭人「ハントウエーン」ナル者ト議シ、建築  
ノ凶形、装置ノ砲数等ヲモ議定シタリ、此回モ都テ其  
時分定メ玉ヘル通ニシテ八十斤、六十斤、二十四斤ノ  
長砲、或ハ五十斤、十六斤ノ白砲等、合計百十二門ヲ

備へ、九稜郭ニシテ広大ナル構造ナリ  
安政ノ度 照国公指  
揮シ玉ヒシ事笑ハ御  
事蹟録ニ、  
詳記ス、

12 <sup>〔貼紙〕追加</sup>

○正月廿八日江戸報告ニ曰ク、本月十五日閣老安藤對馬  
守殿登營ノ途次、西丸下ニ於テ浪士等六七名拔刀、或  
ハ短銃ヲ放チ討テカ、リ、對馬守殿負傷、辛フシテ遁  
ル、コトヲ得、扈從ノ輩防戦ノ為死傷アリシ趣共報シ  
タリ、此日安藤殿ハ朝五ツ時頃西丸下官邸<sup>閣老ハ官邸  
ニ居住ス、</sup>ヲ  
出テ登營ノ途次、坂下門ヨリ一丁許リノ所ニ浪人共六  
七名待伏セ、乘輿三四間ノ所ニテ短銃ヲ打チ掛ケ、唐  
突抜刀切り掛リシ故扈從ノ輩防戦シ、對馬守殿ハ駕籠  
ヨリ飛出抜キ合セ、坂下門内ニ逃入ラレシ故、門衛ノ

者ハ直ニ扉ヲ閉タルカ故追躡ノ賊モ及ハス、辛フシテ遁レタリト云フ、初メ浪士輩短銃ヲ打掛ケ、直ニ駕ニ近接シ刀ヲ突き入レタル時、左ノ肩先ニ疵ヲ受ケ、其儘飛出抜合セタル際右ノ髪ニ一ヶ所、左ノ<sup>(マ)</sup>ニ一ヶ所、合テ三ヶ所ノ負傷ナリ、真ニ危カリシコトナリシトソ、井伊家横死ノ後閣老其他幕吏ハ殊ニ警衛ヲ嚴ニシ、陪從ノ者擊劍得達ナルヲ撰ヒタルカ故、防戦ニ力メ命ヲ全フセラレタリト云フ、安藤家ニモ死傷十余人、即死八名、浪士ハ五名ノ死亡、二名ハ遁逃、死屍ヲ驗セシニ各檄文ヲ懷中シタリ、其文ハ第八卷付録ニ記ス<sup>安藤殿ハ井伊直弼在職中同心一致、専ラ井伊カ姦惡ヲ助ケタル人ニシテ、井伊横死ノ後モ自ラ任シテ井伊カ奸ヲ繼紹シタル、檄文ノ如ク実ニ天地ノ間ニ容ルヘカラサルハ井伊ニ戻ラサルナリ、○當日ハ我藩土橋口伝藏モ下馬見物ニ出テ親シク目撃シ、其形況ヲ届出タリ、又佐土原藩士某等モ親視ノ趣大同小異届出ノ趣、在邸国老島、浪士討死セシ津登カ長男島津主殿ハ送レル書中記ス処如此シ、<sup>(河本)</sup></sup>

輩懷中ノ名紙左ノ如シ、豊原邦之助・三島三平<sup>異本二三郎ト記ス</sup>、何レカ是<sup>(細山繁義)</sup>、細谷忠斉<sup>三十二 黒沢保高</sup>、吉野政介<sup>三十 三十四 小田朝儀</sup>、杉見千之助<sup>三十三 三十四 小田朝儀</sup>、浅田儀助<sup>二十二 三十三 三十四 小田朝儀</sup>、外一名姓名分明ナラスト云フ、一説ニ、長州藩邸ニ走入リ自殺シタリトモ云<sup>尊攘紀事ニ記ス又ハ、</sup>

日河辺水戸人詣長藩邸、自殺桂氏舎、検屍得斬姦旨意書云云、又日浪士七名、日甲田下野人、日川本越後人、日平山・黒沢・小田・高田皆水戸人、皆鬪死云云、然レハ檄文又ハ、名紙ニ記ス姓名ハ変名ナルヤ明カナリ、

〔本文書は「忠義公史料 第一卷」五二〇号と同文なり〕

13 ○二月八日布達ニ、 国父公二月廿五日御發駕ノ旨布達

セラレシカトモ、御都合ニ依リ三月十六日ニ延引セラ

レシ趣、本日布達アリタリ、

14 ○二月十日「日糺スヘシ」發令、去ル安政六年ノ冬、大

島へ蟄居ヲ命セラレタル菊池源吾<sup>又ハ大島三右衛門トモ云フ、 旧名西郷吉兵衛 即チ隆盛</sup>

ナ、放免、至急帰郷スヘキ旨親族ノ者へ達セラレ、而

シテ迎ヒノ為メ官費飛舟ヲ立ラレタリ<sup>迎ノ為メ吉井仁左衛門外ニ二名飛舟ヨリ</sup>

渡海、此ノ菊池ナル者ハ安政六年九月、京師清水寺ノ

僧月照<sup>一名忍向、又月照トモ云フ</sup>卜借ニ鹿兒島灣龍ケ水村ノ沖ニ投

海ノ後、大島ニ蟄居ヲ命セラレタリ<sup>投海ノ顛末ハ安政六、 年ノ記ニ詳載ス、</sup>

當時井伊大老カ逆政ヲ施シ外夷ト親密シ、

天裁ヲ仰カス忝ニ開港条約ヲ結ヒ<sup>飯条約ト云フ</sup>、或ハ宮・堂

上方、或ハ正義ノ諸侯、或ハ憂国ノ人士ヲ幽囚シ、或

ハ斬流ノ刑ニ処シタルノ際、月照ナル者ハ禍ヲ避ケン

カ為メ九州へ下リ、遂ニ鹿兒島ニ来リ西郷ニ頼レリ、

西郷ハ其事情或ハ 照国公ノ密命ヲ奉シ、

朝廷其他宮・堂上方ノ間〔周旋カ〕ニ周施尽力シタル顛末ヲ国老

新納駿河ニ就テ具申シ、宜ク処分アラシムコトヲ懇願セ

シニ、新納ハ幕府ノ威權ニ恐怖シ、東目筋ニ向テ去ラ

シムヘキ旨ヲ西郷ニ密諭シタリ、西郷密諭ヲ聞キ奈何

ントモスルニ途ナク、終ニ借ニ投海ノ慘狀ニ及ヒタリ、

編者曰ク、本藩ニ於テ從來一ノ旧慣法アリ、他藩ノ

者国境ニ入り犯則或ハ障碍アル者ト認ムルトキハ、

東境筋即チ高岡郷ニ向テ護送シ去ラシムルヲ長送り

ト唱ヘ、再ヒ封境ニ入ルヲ得サラシムルノ処分ヲナ

セリ、是レニ因テ西郷ハ密諭ノ趣ヲ聞テ、已ムヲ得

サルニ迫リ借ニ海ニ投シタリ、然ルニ西郷ハ舟人ニ

助ケラレ蘇活シ、月照ハ惜ムヘシ鬼籍ニ遷レリ、然

シテ後チ、月照ト共ニ海没セシ旨ヲ以テ幕府ニ届ケ

出テタルカ故、姓名ヲ變シ大島ニ蟄居僭伏セシメラ

レタリ、然ルニ今日召還ノ命下ルニ至レルハ、国

父公御上洛、天下ノ為メ竭サル、ノ深凶アラセラ

ル、ノ際、從駕ヲモ命セラル、為メナリト云フ、此

ノ如ク發令セラレシヲ有志ノ輩伝聞シ、歡喜ノ眉ヲ

開キタリト云フ、○當時天下ノ形勢概略ヲ記サンニ、

安政五年〔貼紙〕「戊午三月大老ニ擧ラル」ノ夏頃ヨリ、井伊大老ハ將軍

ノ若齡ナルヲ狹〔狭カ〕ミ暴政逆行、上

天朝ヲ尊重セス、下蒼生ヲ苦メ、恣ニ外国ト条約ヲ結

ビ、剩ハ恐多クモ

御讓位ヲ促シ奉シテモ謀リ、或ハ正義ノ宮・堂上

方ヲ幽囚シ、或ハ有志ノ諸侯、或ハ慷慨忠奮ノ諸藩

士等ヲ流斬ノ刑ニ処シタル等横暴ヲ極メ、尚ホ党

与・連類ヲ搜索スルコト甚タ嚴ナリ、故ニ一般恟々

トシテ声ヲ吞ミ、縮潜恐懼ヲ懷キタルノ際、新納駿

河ハ專斷シテ西郷ニ論スニ、高岡筋ニ向テ誘ヒ去ラ

シムルノ旨ヲ以テセリト云フ、西郷ハ其論達ノ嚴ナ

ル進退是レ窮リ、遂ニ借ニ投海ニ決意シタル者ナリ

論達者ハ新納駿河カ命スル旨ヲ以テ、政府ノ筆吏福永直之、  
丞・御裁許掛梁瀬源之進ナル者西郷ニ論達シタリト云フ、而シ

テ西郷ハ辛フシテ舟人ノ為メニ復活シ、後チ大島ニ

蟄居セシメラレタリ、然リ而シテ追捕ノ幕吏八月照

及ヒ西郷カ屍ヲ驗査センモ計リ難シト慮リ、西郷カ

墓ヲモ築カシメタリ其墓今西郷カ墓地ニ存ス、詳ナルハ月照投海ノ条ニ記ス、初メ月照

入国セシ趣ヲ 齊興公聞セ玉ヒ、種子島ニ借居セシ

ムヘシト寛大至仁ノ内命ヲ下サレタリ、然ルヲ新納

16 ○二月十二日、 国父公二ノ丸へ御引遷ニ付テ、奥表ノ

ハ後患アランコトヲ恐レ、專断シテ西郷ニ諭ス旨アリシ故、遂ニ投海溺歿ノ惨状ニ至リシトナン 齊興公御内命ノ趣

ハ投海ノ条、 此事他日発露シ、有志ノ輩嘆惜憤慨、新納カ所為ヲ惡ミ、 齊興公ノ勇断仁慈ヲ感称セシコトナリキ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」四二号と同文なり〕

15 ○二月十二日達、亡高崎 〔温恭〕五郎右衛門長男佐太郎 正・亡山田一郎左衛門嫡孫清徳 後孫一郎、戊辰ノ役・亡近藤隆左衛門長男金吉・亡土持岱助家跡・亡村田平内左衛門家跡・亡国分伊十郎家跡・亡野村喜八郎家跡、其外同類ニテ士籍剥脱、或ハ流刑、或ハ謹慎等ニ処セラレタル輩、復籍或ハ赦免ヲ命セラレタリ、○高崎・近藤ハ父ノ罪戾ニ依リ流刑セラレ、当时在島ナリ 本藩ノ刑法ニ、父ル者ハ其子ニ及スノ法規ナリ、高崎ハ父処刑セラレシ時、父ハ十三歳ナリ、故二十五歳ニ滿テ流罪ニ処セラレタリ、此ノ令ヲ發セラレタルニハ、一般仁慈ノ御措置ヲ感称セシ事ナリキ、

17 ○二月十五日、本日例ノ如ク御城下海岸五ヶ所 砂揚場・大波戸・新波戸・祇園洲ノ砲台射擲演習ヲ命セラレ、沖中二標的ヲ浮へ各砲台同時ニ放発シ、其響キ山岳ヲ震動セリ、標的射擲ノ法ハ嘉永五年ノ春 照国公創始セラレ、以来海防ノ演習ニ用ユルコト、ナレリ、

諸局開設セラル、旨布達セラレタリ 八田喜左衛門知紀ハ近藤・高崎等カ連類ニテ謹慎ヲ命セラレシ者ナリシカ、本日御広敷番頭ニ拜シ、二ノ丸勤務ヲ命セラレタリ、知紀ハ当時歌道ニ有名ナリ、

18 ○二月廿日布告左ノ如シ、

和泉様御事、明二十一日二ノ丸へ御引遷之筈候処、御造営向不相運候ニ付、来ル廿四日ニ被召延候条、此旨可承向江可致運達候、

二月二十日 大藏島津

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」三八号と同文なり〕

19 〔貼紙〕「追加」文久元年二月六日ナラン  
○二月 日「日札スヘシ」〔貼紙〕 太守公御親書ヲ以、撃劍師範家へ達セラレタル御訓示左ノ如シ、

口達覚

武芸ヲ励ミ筋骨ヲナラシ候事者当世之急務上之当然ニ

候、亦君臣父子之倫理ニ暗ク、礼義廉恥之道ニ疎ク、

義之大小軽重、道之正邪曲直モ弁セスシテハ却テ忠孝

之大義ヲ過リ、不思モ禽獸之域ニ陥リ候事、古今其例

不少、別而遺憾之至ニ候、自ラ諸師範之者共者文武偏

廢不致様、子弟へ致教育等ニ者候得共、猶亦此旨相守、

其身之省察者勿論、精々子弟ヲ教導致シ文武之本体ヲ

不失、士道ヲ不汚様可心掛候、且各流儀ヲ立候ニ付而

者自ラ秘伝秘術銘々有之、軽々敷難漏儀者当然之事候

得共、甚敷者流派ニナツミ、己ヲ進メ他ヲ退ケ、寇讐

ノ如ク心得違候事、近古以来之弊風ニ而不可然事候条、

国中之士民者互ニ兄弟骨肉之情義ヲ存シ、礼讓ヲ以相

交リ、私ヲ捨、講習練磨致シ、国家之实用ニ相立候様

有之度存候事、

二月 日〔貼紙〕一日〔貼紙〕糺スヘシ〔貼紙〕

此ノ御訓諭書各師範ノ輩へ被下、門生中ノ教導厚ク注

意スヘキ旨命セラレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」四三号とほぼ同文な

り〕

20  
○二月二十四日〔頭注〕已上刻〔國父公元丸へ御移遷〕

國父公重富邸ヨリ二ノ丸へ御

引遷アラセラレタリ、御子様方モ同刻御曳越アリ、即

チ悦之助君〔貼紙〕・真之助君〔貼紙〕・芳之進君〔貼紙〕ノ

御三方及ヒ成姫君〔貼紙〕「俊姫君ナリ」、○本日 太守公御始

メ諸公子又ハ御一門ノ人々登城、御嘉慶ノ式アラセラ

レ、其他大身分及ビ諸士登城、 太守公 國父公江恭

賀ノ式御本丸ニ於テ執行セラレタリ、

編者曰、 照國公薨去、 太守公御相続、御若齡御

政事御取馴レナキカ故、 齊興公御介助アラセラレ

シカトモ、御老年ナルカ故 國父公万般聞シ召サレ、

齊興公逝セラレシ後ハ内外多難ノ世態ニ変遷シ、殊

更御苦心御介助アラセラレタリ、依テ幕府ハモ御介

助ノ御届ニ及ハレ、日々御登城アラセラレシト雖〔行カ〕

モ、 太守公ノ尊慮ハ二ノ丸へ御棲居、御尊崇御孝

養ヲ竭クサル、ハ無論、御國政モ親シク聞シ召サレ

ンコトヲ懇願セラレシト雖モ、固ク御謙遜御肯諾ア

ラセラレサルカ故、 太守公ハ大二憂悶セラレ、尚

ホ数回御親シク御懇請、或ハ国老或ハ御膝辺ノ輩ヲ

シテ、御心情又ハ時勢切迫ノ事情ヲ述ヘシメ玉ヒシ

二、漸クニシテ御肯諾アラセラレシトソ〔貼紙〕「国老川上筑後・喜入撰津御使ヲ以テ二ノ丸御引遷ヲ表向ニ被仰上タル始末ハ前編ニ記ス」

依テ至急二ノ丸御造営、本日御引遷リアリシカハ、太守公ノ御安堵ハ素ヨ

リ一般大ニ安心恭慶セリ、而シテ以来 太守公日々

二ノ丸へ御伺公、御孝道ヲ尽サレ、御政事向万般御

親密ニ御裁断施行セラル、ニ至レリ、○国父公ハ

斉興公御知政ノ時ヨリ政庁へ御出席、国政ノ議談聞

シ召シ玉ヒシカ故庶事御通貫、茲ニ至リテハ 太守

公ノ御幸ナルノミナラス、国老中ニ於テ殊更ニ安心、

事務ヲ執レリトソ、○前記ノ如ク、二ノ丸へ御引遷

アランコトヲ数回頻請セラレシト雖モ、固ク御謙讓

アルカ故、御国政御介助ノ云々幕府へ御届、而シテ

重富家ヲ又次郎殿へ御讓リ太守公御三弟、初メ敬四郎、重富家ヲ相統セラル、城中公御実形ニ復セラレシ後備後、 国父公ハ御実形ニ復

セラレ国父公ハ、 而シテ後後珍ト称ス、重富家ヲ相統セラレ、城中ヲ出テ、重富家ヘ入ラセラレタリ、茲ヲ以テ御実形ニ復セラルトハ、即チ臣列ヲ離レ、 国父ト尊崇セラル、ハ、

太守公ニ於テ御孝道ノ要典、加之国政ノ上ニ於テ当

時内外多難、焼眉ニ迫レルノ時ナルカ故、切ニ頻願

セラレ、文久元年四月十九日ヲ以テ又次郎殿即チ珍へ

重富ノ家統讓受ノ式執行セラレタリ此時又次郎殿、備後ト改名、而

シテ国父公ハ同廿四日和泉ト御改名アラセラレ、依

然重富家ニ御座アリテ日々城中へ御出向、国政聞シ

召サレ御介助アラセラレタリ此時 国父公ト尊称スヘキ旨 太守公御親書ヲ以テ布

令セラレタリ、而シテ日々出城セラル、二、從駕ノ吏員重富邸ニ至リ、而シテ從駕スルコトナレリ、茲ヲ以テ重富家々來付從スルコトヲ得ス、又重富家ノ邸中、○當時天下ノ形勢危殆切

ニ事務局ヲモ設立セラレタリ、○幕府ハ暴威ヲ振ヒ逆政ヲ施シ、上

朝廷ヲ輕シ奉リ、下蒼生ヲ困メ人心離反、治ヲ厭ヒ乱

ヲ好ムノ人情ニ立チ至リシ故、 国父公ハ 照国公

ノ遺志ヲ紹述セラレ、尊王ノ大義ヲ確定シ、幕政ヲ

釐革シ、賢才ヲ挙ケ佞吏ヲ黜ケ、富国強兵ノ道ヲ立

テ、外夷ノ輕侮ヲ挽回シ、

皇威ヲ万国ニ輝カサレンコトヲ建議セラレント、御父

子日夜心思ヲ勞セラレ、茲ニ至リテ断然御雄決、

国父公不日御出府或ハ臨機御上洛、大ニ發揚セラ

ル、ノ英意ナルカ故、先ツ国政ヲ整理シ、文ヲ治メ

武ヲ張り、国ヲ富シ民生ヲ安シ、七百年來養成ノ

御家風一層拡張セラレントノ 尊慮ナリ、是ヨリシ

スルニ至レリ、

川路正七郎

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」三九号・四〇号と同文なり〕

大鼓役

宇都岩太郎

21  
○

物主

種子島嘉次右衛門

右者出府人数之内、一備之内右通被仰付候、左候而、急変之節者御兵具所ヨリ相図之具吹き立候者、早速同所へ相揃候様被仰付候、

兵糧玉薬方

二月

登島津  
久包

郷田次右衛門

川崎四郎左衛門

物主

貝ノ役

関田藏右衛門

使番

肥後五左衛門

太鼓役

松木孫太郎

旗預

橋口善兵衛

物主

肥後五左衛門

兵糧玉薬方

岩山金之進

小頭

米良矢八郎

小頭

坂元喜右衛門

寺師善真  
(宗進)

宇都三之丞

貝役

木藤市助

右書前二同シ、

二月 登島津久包

右戦兵左ノ如シ、

川俣休太夫

〔田実カ〕甲実六左衛門

本原周右衛門

北原直左衛門

高江与右衛門

石神喜右衛門

橋口良助

脇岡休左衛門

川俣治兵衛

高野瀬彦助

伊瀬地六郎

斉藤幸之進

四位林左衛門

二川十郎左衛門

猿渡権左衛門

指宿壮平太

〔安藤カ〕藤孫右衛門

小野喜藤次

黒木新藏

塩田一三多

中村東介

橋口叶介

田島嘉藤次

坂本中節

小田半五右衛門

上床筑兵衛

肥後織右衛門

岩崎右源太

和田助二

江口駒之丞

松下孫兵衛

橋口源七郎

右書前二同シ、

二月 登島津久包

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」四一号と同文なり〕

22 ○三月六日、本日 国父公御出府御首途ノ式執行セラレ

タリ、諸事 太守公御参府ノ御式ニ異ナルコトナシ

公御参府ノ度毎ニ御発駕前辰ヲ撰ンテ神社御参拜、御参拜〔朱書〕一畢

テ「田之浦ヨリ御乗舟、御城下戸渡ヨリ御上陸、二ノ

丸へ御帰城アラセラレタリ、

古川松兵衛

篠原矢七郎

肥田木覚右衛門

平川民五郎

山崎平八郎

富満武兵衛

池田吉兵衛

池田彦右衛門

内山怒兵衛

有馬戸右衛門

橋口正兵衛

山下市藏

松永伝左衛門

三原彦六

町田莊次郎

23 ○三月七日、本日長州藩士木原庸蔵ナル者三月二日着薨、同

藩士二名入国、大山格之助〔綱良〕・有馬新七等〔正義〕二面晤〔面晤カ〕ヲ乞ヘ

リト、当時他藩人等二私ニ面接スルヲ禁セラレタルカ

故、大山ハ其旨ヲ以テ面晤スルコトヲ得サルノ趣ヲ以

テシ、而シテ本日空シク帰途ニ就キタルヲ、窃ニ水上

坂下ノ茶店ニ於テ面会セシニ、木原大ニ喜ンテ曰、今

回入国セシハ他事ニ非ス、国父公不日御出府ノ趣ヲ

伝聞シ適々入国セリ、聞ク処ニ依レハ、名ハ御出府ニ

シテ其実御上洛、加之 先公即チ照國公御遺志ヲ継述セラレ、

尊

王ノ大旗ヲ京師ニ樹テラル、ニ在リト、果シテ然ラン、

然ルニ於テハ我輩草芥ノ身モ從属シテ犬馬ノ勞ヲ尽サ

ンコトヲ欲ス、或ハ聞ク、旧臘大久保正介利通カ旧名上京シ、

近衛殿下ノ紹介ヲ以テ内

勅ヲ奉セラレタリト、是モ又果シテ然ラン、茲ヲ以テ

大兵ヲ卒セラレ上洛セラル、ト、冀クハ我輩ハ素ヨリ〔率カ〕

長藩主ニ於テモ驥尾ニ属シテ竭サシメンカ為メ、遙々

来向セリ云々ノ趣ナリシト、大山曰ク、我曹機密ニ関

セス、内

勅等ノ云々ハ果シテ虚説ナラン、今回 国父出府セラ

ル、ハ修理〔修理大夫カ、忠義〕太夫病痾、參觀猶予ヲ謝シ、或ハ江戸邸造

堂等ヲ指揮センカ為メニシテ、敢テ風説ノ如クナルニ〔綱カ〕

非ラス、然リト雖モ内外多難ノ時ナルカ故、臨機幕府

ヘ建言等ノ事ハアルモ知ルヘカラス、細事ハ我曹預リ

知ル処ニアラサル旨ヲ述シニ、木原信用ノ顔色ナク、

又強テ質問スルコトモナクシテ、長藩ノ因循不断要路

君側ノ俗吏等、幕吏ト心ヲ合セ阿媚ノ挙動見ルニ忍ヒ

ス、中ニモ永井〔長井カ、時庸〕・周布〔兼翼〕等カ挙動ヲ歎慨シ、若シ風

説ノ如ク 国父公ノ英拳モアラハ、重テ面晤ヲ樂ム、

或ハ驥尾ニ属シ竭スノ尽力ヲ依頼スヘシト謂テ別レタ

リトソ、有馬新七ハ伊集院町ニ於テ面晤シ、木原等カ

所論ヲ聞キ他日偕ニ為スコトアランコトヲ約シタリト

ナン、而シテ後、有馬ハ大山カ答弁ノ因循ナリシヲ嘲

リタリト云フ、有馬等ノ黨員ハ元來粗暴激烈ニシテ輕

拳妄動ノ意アリ、大山ハ沈重寡黙、其意フ処ノ一二モ

口ニ出サルルカ如キ性質ナルカ故、上ノ訓誡ニ背カス、

又旧好ノ情ヲ失ハス、窃ニ面会シタリトソ、大山カ木

原ト知己ナルハ、江戸邸在勤ノ時懇交ノ者ナリト云フ、

有馬ハ旧知ニ非ラスト雖モ、橋口伝藏（兼備）・橋口壯助・柴山愛次郎（道隆）「等ト」隣県有志連中ニ往復書信ノ趣意ヲ伝聞シ、適々来覓セリト云フ、

24 ○三月十日、熊本藩士廿余名市来港町迄舟行、是ヨリ上

陸、鹿兒島ニ入り、小松帯刀・大久保一藏（利通）へ面会シ、

彼ノ藩情ヲ述へ、而シテ 国父公御出府ノ実否ヲ聞カ

ントス、当時御出府前ニテ多忙且憚ル旨アリトテ入覓

ヲ允サス、同所ニ止メ置キ其筋ノ者ヲ応接ノ為メ出シ

タリ、熊本藩士云フ所、 国父公御出府ノ事情或ハ御

上洛、或ハ内

勅ヲ奉セラレタル等ノ実否如何ンノ質問ニ涉リ、或ハ

両橋口・柴山・有馬等カ隣県知己人等ニ送リタル書意

等ノ真偽ヲ問ヘリト云フ、

25 〔頭注〕「訓誡ノ令」  
○三月十五日、本日 国父公左ニ訓誡ノ令ヲ発セラレタリ、

去ル午年外夷通商御免許以来、天下之人心致紛乱、

各国有志ト相唱候者共、尊

王攘夷ヲ名トシ、慷慨激烈之説ヲ以テ四方ニ交ヲ結ヒ、不容易企致シ候哉ニ相聞得候、当国ニテモ右之者共ト私ニ相交リ、書翰往復等致候者有之哉ニ候、畢竟勤

王之志ニ感激（イタシ脱カ）候処ヨリ右次第ニ及ヒ候筈ニ者候得共、

浪人・軽卒之所業ニ同意致候而者、当国之禍害ハ勿

論 皇国一統之騒乱ヲ醸出シ、終ニハ群雄割拠之形

勢ニ至リ、却テ外夷ノ術中ニ陥リ、不忠不孝無此上

儀ニ而、別而不軽事ト存候、拙者ニモ 公武之御為

聊所存之趣有之候ニ付、〔玉里島津家史料〕より補以来当国<sup>△</sup>之面々△右様之

者共ト一切不相交、命令ニ從ヒ周旋有之度事ニ候、

若又私之義ヲ重ンシ絶交難致者共者、有筋ニ申出候

得者、其訊ニ応シ何様共可致処置候、尤、此節之道

中筋且江戸滞留中、右様之者共致推參候共、私ニ面

会致間敷候、乍併無拠訊ニヨリ致応接候共敢而不致

議論、其筋之者へ致談判候様返答可致候、乍此上不

勘弁之族於有之者、天下国家之為、実以不可然事候

条、無遠慮罪科可申付事、

〔本文書は「玉里島津家史料十」補輯文書九五ノ二号六一

五頁「去ル午年」・「名越時敏史料一」一二二頁「去ル午年」と同文なり」

此御書取、三月十二日国老中へ下ケラレ、国老中ハ左ノ添書ヲ以テ布達セリ、

25の2

外夷通商御免許以来天下ノ人心致紛乱、各国ニ有志ト相唱候者共四方ニ交ヲ結び、不容易企致候者モ有之哉ニ相聞得、当国ニモ右之者共ト私ニ相交リ、書翰往復等致候哉ニ付、以来一切不相交、勿論此節御道中并江戸御滞留中、右体之者共致推參候トモ私ニ面会不致、無拗訳ニ依リ心接致候共其筋之者へ致談判候様返答可致候、乍此上不勘弁之族有之候者、無遠慮可被処罪科旨、御別紙之通 和泉様御筆ヲ以テ被仰出、何トモ奉恐入事ニ候、右ニ付テハ不容易事候ニ付、被 仰出之趣誠実ニ相貫キ、聊カ異心有之間敷候、此上万々一心得違之者ハ不差置御取扱可被仰付候、右之通、組中・支配中へ不洩様可申渡候、

三月<sup>十五</sup>日 筑後川<sup>上</sup> 大藏島<sup>津</sup> 摂津<sup>喜</sup>入

但馬川<sup>上</sup> 式部川<sup>上</sup>  
〔本文書は「名越時敏史料一」一二二頁「外夷通商以来」と同文なり〕

26  
〔頭注〕「国父公国政御介助」

○同日、国父公御政事御介助ノ旨 太守公御親書ヲ以テ達セラレタリ、左ノ如シ、

26の1

家老中へ

和泉様御儀、何篇是迄国政向御内談申上、且先般従公边御内沙汰之趣モ有之、於我等実ニ幸之至ニ候、就而者此度ニノ丸江御住居被 遊候ニ付、猶又表向御介助奉願候間、以来 仰出等弥嚴重相守候様可取計候事、

三月<sup>十五</sup>日

〔本文書は「玉里島津家史料十」補輯文書九五ノ二号六一六頁「家老中江」・「名越時敏史料一」一二〇頁「家老中江」と同文なり〕

右、太守公御親筆ヲ以テ達セラレタルニ因リ、国老中ノ添書左ノ如シ、

和泉様御儀、御国政向何篇御内談被 仰進、且先般公義ヨリ御内沙汰之趣モ被為在、御幸ニ被 思召上候、就テハ此度二ノ丸へ御住居被遊候ニ付、猶又表向御介助之儀御願被 仰進候間、以来仰出等<sup>〔弥脱之〕</sup>嚴重相守候様可取計旨、御別紙之通御筆ヲ以被 仰出、誠ニ以テ難有御事候条、此旨謹而奉承知、 仰出之趣聊無緩疎誠実ニ相守、家来末々迄モ急度可申渡候、

右之趣、組中・支配中へ不洩様可申渡候、

三月<sup>十五</sup>  
日

筑後川上 大藏島津 摂津喜入

但馬川上 式部川上

〔本文書は「名越時敏史料一」一二二頁「和泉様御儀、」  
と同文なり〕

右、文久二年壬戌三月十五日、大小門葉ノ人々及ヒ諸士へ拜聞ヲ允サレ、而シテ一般ヘモ布達セラレ、而シテ二ノ丸御造営一層至急ヲ要スヘキ旨モ達セラレタリ、○上文ノ如ク、是迄ハ国政上御内談可否ノ御意見ヲ述ヘラルノミナリシカ、是ヨリシテ 太守公御同様庶政親裁セラレンコトヲ御懇請、御肯託アラセラレタルヲ布告セラレ

タル者ナリ、

編者曰、二ノ丸御殿ハ安永ノ末 重豪公御隠居ノ時分新ニ建替セラレ、天保ノ末御台式・表御書院等ヲノミ残シ、奥御座敷等ハ不用ナルヲ以テ解除セラレタルカ故ニ、今回ハ悉ク新建セラレタリ、○当時各藩ニ有志者ト唱へ、尊王攘夷ヲ主張シ、或ハ討幕ノ説ヲ立ル者四方ニ蜂起シ、党ヲ結ヒ類ヲ集メ、其党员日々増加シ、而シテ本藩ノ挙動ニ注目シ、殊ニ国父公ノ御名望ヲ仰キ、御進退ノ奈何ンヲ窺ヒ居タリシ曹、今回御参府或ハ御上洛断然発揚セラルノ説ヲ伝聞シ、冀望ノ機運至レリト御途中ニ拜迎付従ヲ冀ハント欲スル者多ク、或ハ御発駕ノ前頃適々入国シテ従駕ヲ懇願スルモノ寡ラスト雖モ、素ヨリ浪士輩ヲ率ヒ玉フノ尊意ニアラス、藩士ニシテ従駕ヲ願スル者ノ夥シキヲモ説諭セラレ、僅々六七百名ヲ引率セラレタリ、茲ヲ以テ浪士輩如何ニ懇請スト雖モ、允容セラルヘキニ非ラス、又計画ノ如キハ積年御心ヲ煉ラレ 照国公ノ御遺志ヲ継述セラレ、七百年來綿々相伝ノ家國顧ミラレス、御忠誠ヲ貫カル、

ノ一ニシテ、毫髮ノ御私心ナキカ故、浪士輩ノ言論

聊顧慮セラレス、確然英決御上洛アラセラレシ者ナ

四月十六日近衛殿へ初テ御參殿ノ時御演、  
説覚書ヲ説テ御忠誠ニ外ナキヲ知ヘシ、

27  
○三月十七日、重テ 国父公左ニ訓戒ノ令ヲ下サレタリ、

拙者ヨリ書取ヲ以テ申渡候事遠慮ニ相考候得共、当時

世上ノ情態何歟不穩之趣ニ相聞得候ニ付、不得已事先

日為相達事ニ候、猶又致勘考候処、畢竟上威之輕キ処

ヨリ群下類ヲ引キ出シ候儀ニ而、当守〔其後脱カ〕者勿論、拙者〔其脱カ〕

ニモ心痛至極之事ニ候、士風沙汰之儀者此前ヨリ追々

被仰出置、近頃ニモ再往申渡為相成事ニ候得共、方今

ノ模様ニテハ非常之變事到来之節、致一和候処無覚束

存候、皇国ニ生レ候者、誰トテモ

王朝ヲ尊ヒ夷狄ヲ惡ミ候情意者有之筈ニ候、若シ志操〔其脱カ〕

無之者ハ禽獸同前之事ニテ、別ニ勤

王家之誠忠派之ト可申様更ニ無之事ニ候、然ルニ右通

之名目相唱へ候由別而不可然事ニ候、殊ニ年若之面々

容貌異様ニシテ大鬚・大髯等ノ輩ヲ、放恣之者共有之哉ニ

指サレタル者ナリ、

候、是以先年ヨリ追々被為仰渡事候処、近頃者其節ト

者相變リ候風儀ト相成、弥以不宜次第ニ候、士者行跡

律儀ニ廉潔ヲ專トシテコソ本意之事ト存候、何程武文

致研究候共、言行不正異様異風ニ而者武士ト者被申間

敷候、且郷士以下家来末々ニ至リ候而モ右様之者共有

之哉ニ而、猶以不可然事候条、右之趣奉行頭人能々相

心得、支配下ヘ丁寧ニ申論、父兄又者同郷年長之者共

ヨリモ心得違無之様、屹度教戒有之度存候事、

三月「日札スヘシ」〔貼紙〕

〔本文書は「玉里島津家史料十」補輯文書九五ノ二号六一

五頁「拙者ヨリ書取を以申渡候事」・「名越時敏史料

一」一二四頁「拙者ヨリ書取ヲ以申渡候事」と同文な

り〕

此ノ御親書ニ国老中ノ添書ヲ以テ組頭宅ニ於テ拜聞ノ後、

一般江布告セラレタリ国老中添、  
書略ス、

編者曰ク、如此訓戒ノ令ヲ下サレタル其源因ハ、一

両年前ヨリ藩内諸士壯年ノ曹勤王ノ説ヲ唱へ、或ハ

攘夷鎖港ヲ主張スル等、一種ノ党派ヲ建テタリ、此

儻旧慣ト異リ大鬚多髪ニシテ他邦人ノ容姿ヲ模擬シ、  
常ニ誠忠ノ句ヲ以テ稍口癖トセシカ故、他ヨリ名ケ  
テ誠忠派ト唱ヘタリ、其曹概ニ擊劍家ニシテ、中ニ  
毛葉丸<sup>半左衛門</sup>カ門人ニ多ク、専ラ劍法ヲ磨勵シ、或

ハ讀書、或ハ時事ヲ論シ長大ノ刀劍ヲ帶シ剛強ノ風

ヲナセリ、一日誠忠派ノ人ナルヲ知ル元來本藩士分以上  
習慣アリ、十五年ノ年齢ヨリ二十三年乃至四五年ノ頃迄ヲ兵  
兒ト唱ヘ、其容姿異状ニシテ、顛頂ヨリ左右顛顛ノ辺迄毛髪ヲ剃  
払シ、後顛ニ少許ノ毛ヲ殘シ、鬚ヲ結ヒタル形状蜻蛉ノ宿レルカ  
如シ、前面ヨリ見ルトキハ恰モ円顛ノ如ク、然カモ緊縛ノ為メ左  
右ノ鬚毛悉ク剃脱シ、銅板ヲ帖シタルカ如シ、而シテ袖ハ腕ニ止  
リ、裙ハ脛ニ至リ、冬衣ヲ厚フセス、夏暑熱ヲ厭ハス文武ノ研磨

夙夜怠ラス、実ニ風範<sup>雨沐カ</sup>雨浴寒暑ニ筋骸ヲ煉ラシ、廉潔勇威ヲ主ト

シ、酒色ヲ謹誠シ、苟モ忠義ノ二字ヲ確守シ、事ニ当テ人ニ後レ  
ス、雖ニ臨ンテ避ケス、軍陳ニ出テハ君公ノ馬前ニ死スルヲ以テ  
臣子ノ本分トス、如此同朋相ヒ督責スルヲ兵兒ニ才ト通唱セリ、  
之レ數百年來ノ慣行トス、酒色ニ耽リ或ハ廉恥ヲ欠キタル者ハ絶  
交スルニモ至ル、又二三年前ヨリ誠忠派ト唱フル党派起レリ、其  
輩ハ從來之兵兒ニ反シテ顛頂ヲ剃スルコト僅カニ指ヲ容ルカ如  
ク、多髪大鬚、顛上ニ大鬚ヲ結束シ一種ノ容姿ヲナセリ、此ノ輩  
ハ勤王攘夷ヲ主義トシ、他藩彼我ノ別ナク同心一致、帝室ノ為メ  
ニ竭サント、依テ容貌モ旧慣ヲ去リ固陋ノ因習ヲ蟬脱セン云云、  
茲ヲ以テ旧慣固守ノ曹ハ之レヲ誹議スルカ如キ、又勤王派ト唱  
フ勢アリテ、遂ニ誠忠派ノ唱起レル者ナリ、

フルアリ、容貌ハ旧慣風ニシテ、是モ同シク勇威ヲ

尚ヒ文武ヲ磨勵シ、一向ヲ尊王攘夷ノ說ヲ立テ帝權

回復ヲ主論トセリ、此二三ノ党其間ニ一弊ヲ生シ稍

軋轢抗諍スルニ至リ、年若ノ輩ハ口論喧噪ニ及ヒタ

ルモアリ、茲ヲ以テ 国父公各党ノ軋轢ヲ憂ヒ玉ヒ、  
變事到来一致無覺束云云ト記サレタル者ナリ、此時  
藩内士分ノ風ニ、勤王攘夷ヲ唱サル者ハ惰夫トシ、  
或文武ヲ研磨スルニ汲々トシテ、擊劍ノ声喧シト云  
フモ誣言ニ非ラサルナリ、如此ナルハ実ニ七百年來

育成ノ国風衰ヘサル者ト謂フヘシ、然リト雖利害交  
錯ノ弊ハ古今例アルモノニシテ、斯ク迄士氣奮興大  
義名分ヲ弁別セルニモ、少シク志想所論ノ異ナルヨ  
リ軋轢諍抗ノ弊害ヲ生シ、殊ニ大義ノ為メ危殆ヲ顧  
ミ玉ワス、御上洛ノ前頃ナルカ故大ニ憂慮セラレ、

如此訓戒ノ令ヲ布カレタル者ナリ、○国父公御出府  
ノ旨發表セラルヤ、從駕冀望ノ者夥シク切迫請願シ、  
其筋ノ役員頗ル困却セリ、其挙動稍粗暴ニ似タリト  
雖モ、元來本藩ニ於テ古ヨリ少年ノ者ヲ養成スルニ、  
武士ト生レタル者ハ事ニ臨ンテ人ニ後レス、義ト難  
ニ当テ避ケス、進ンテ其責ニ當リ、君主ノ馬前ニ死  
スルヲ以テ其職其任トスルヲ<sup>腦漿カ</sup>腦醬ニ養成セシカ故、

今回ハ殊更ニ冀望シ、

禁闕ノ下ニ於テ職任ヲ竭サントノ志操、其志其主義

禁闕ノ下ニ於テ職任ヲ竭サントノ志操、其志其主義

悪ムヘカラサルカ故、懇願ノ挙動稍粗暴ニ涉レルモ  
アリト雖モ懇篤説諭セラレタリ、茲ニ至テ數百年來  
愛撫セラレタル士氣益盛ナリ、

28  
○三月十六日午上刻、

國父公二ノ丸御発駕アラセラレ

タリ、同夜伊集院苗代川御泊、夫ヨリ隈ノ城・阿久

根・出水等御宿泊、同廿日肥後へ御出、九州路御通行、

馬関ヨリ大里ヨリ馬関江御渡海ニハ、太汽船天祐丸へ御上

船ノ予定ナリ、此日天氣晴朗穩ナリ、老幼男女拜別伺

候ノ者御通路ニ充滿シ、尺寸ノ余地モナカリキ、○從

駕ノ人員四百五十余名士分、外ニ足輕百五十余名、其

他陪從卒ニ至ル迄凡ソ七百余人ニ及ヘリ、○從駕國老

ノ場ニテ大番頭御側役勤小松帶刀清、利三十四十

ヲ領、御側役谷川次郎兵衛・御納戸奉行東郷長左衛門

敬・小納戸山本五郎右衛門・大久保一藏・中山尚之助

其外御近習ノ吏員數十名、御供目付山口彦五郎・原田

才之丞・大山仲兵衛・篠崎彦十郎・奈良原喜左衛門・

江夏仲左衛門・御軍賦役伊知地龍右衛門後正治、又

出格從駕ノ人員一名、陸小姓ト唱フル者凡ソ六十名ハ

人名後ニ  
記ス、壯勇ニシテ武術練達ノ輩ナリ、或ハ警衛二百余

名ハ本日汽船天祐丸ニ塔シ搭カ、當時汽船ヲ備ヘタルハ、幕府ニ大

ヲ備ヘタルハ我藩ニ這ノ天祐丸ヲ以テ嚆矢トス、○當時江戸其他ニ於

テノ巷説ニ、薩州ハ大汽船ヲ買入、大兵ヲ奉テ浪花ニ突出シ、勤王

ノ大旗ヲ京拱ニ揚ケラル、ト喋々噴々、人心大ニ動揺セリ、○此汽

船ハ英國製ノ商船ニテ、長崎ニ來航セシヲ其心十二万弗ニ買入レラ

レタリ我藩當シテ凡六、長サ三十間余、三百五十馬力ニシテ鉄製堅牢ノ

船ナリ、本藩ニ於テ洋製ノ大汽船ヲ購シタルハ之ヲ初トス、而シテ

前之浜へ回航ノ上、天祐、馬関ニ廻航シテ御着ヲ待ツノ予

定ナリ、朝四ツ時一同塔艦、此ノ人数ハ守衛ノ為ナレハ隊

伍ヲ編制シ、主將ハ北郷作左衛門平佐郷八千三百七十七石余、

在勤番頭奉命、関山亂へ交替ス、而シテ小頭即チ一・什長・伍

長等ノ役ヲ設ケラレタリ、○御供ノ人々ハ立揚袴等ニ

テ、太守公御參觀御上下ノ行粧ニ異ナルコトナシ、

○今回ハ是迄御出府等ノ御行粧御行列ノ次第、二異リタル

ハ、御跡備ニ大小砲ヲ備ヘラレタリ、二斤ノ野戰砲四

門、小銃百挺、何レモ荷作ニテ備ヘラレタリ野戰砲ハ西

山戰砲、小銃ハ當時主張スル処ノ荻野流式十、斯ノ如ク大小砲

ヲ備ヘラレタルハ前代未曾有ノ事ナルハ、近頃物騒ノ

世態且ツ此回ノ御參府ハ尋常ノコトニアラサルカ故ナ

リ、○本日御發駕後發令、町田民部久當番頭職、伊集

院成院郷ノ内石谷村

本廉四郎一隊ノ人数ヲ卒ヒ、日向路ヲ取テ細島ヨリ上〔清彦〕船、上京スヘキ旨命セラレタリ、其人員惣計三百余名ニ及ヘリ、

29 ○三月廿八日、本日町田・岩下カ〔朱吉〕ル処ノ人数日向

路ニ向テ出發ス、曉七ツ時砲術館ニ集会シ、黎明吉野

街路ヲ取テ發シタリ砲術館ハ大龍寺馬場ニ在リ、今龍尾町龍尾小学校ノ地

30 ○三月〔頭注〕「浪士從駕ヲ乞フ」日〔廿二日ナ〕日尚糺スヘシ〔貼紙〕、御途中筑後高瀬〔瀬高カ〕

駅ニ於テ浪士三十余名御本陳ヘ推參シ、從駕ノ重役ヘ

面接センコトヲ乞フニ由リ、御供目付奈良原喜左衛

門・山口彦五郎・江夏仲左衛門応接セシニ、浪士等曰

ク、今回 国父公御上洛ハ天下ノ為メ御英斷ノ程、草

莽ノ身ニ於テモ実ニ感服ノ至、伝ヘ承ル処ニ扱レハ上

皇威ヲ回復セラレ、下生民塗炭ノ困ヲ救ヒ、外夷掃除ノ

大義ヲ立ラル、ノ尊慮ヲ以テ御上洛ナリト、苟モ皇國

ノ民庶トシテ匹夫匹婦モ感激セサル者ナカランヤ、又

聞ク処ニ依レハ、御出府ノ名ヲ以テ其実御出京、

天意ヲ窺ワレ、且ツ御計畫ノ順序ヲ定メラル、ト、就テ

草芥ノ身モ驥尾ニ随テ犬馬ノ勞ヲ尽シ、身ヲ挺シテ国恩ヲ報シ、或ハ憚ナカラ聊愚意モ陳言センコトヲ欲ス、或ハ幕府僭上ノ所為少カラス、驕奢ニ募リ、剩ヘ近頃ニハ正義ノ宮・堂上方ヲ貶斥シ、正論ノ諸侯ヲ黜罰シ、有志ノ人士ヲ幽囚、或輕重ノ刑ニ処シ、外夷ニ密親シ恣ニ約条ヲ結ヒ、

天朝ヘハ種種々ノ口実ヲ設ケ劫シ奉リ、恐多クモ御讓位ヲモ促シ奉ント謀リ、其他大罪數フルニ違アラス、我輩草莽ノ身モ握腕切齒、身命ヲ棄テ驥尾ニ属ヒテ尽ス処アラントス、元來尊攘ノ二ツハ積年ノ切情ナリト雖トモ時至ラス、又主宰ノ人ヲ得ス、東走西奔將師ニ仰クノ人ヲ求ムルコト茲ニ數年百方心ヲ用ヒ、耳ヲ傾ケルノ際賢明英徳ナル故、齊彬公ノ大志ヲ紹述セラレ、国父公御出府ノ説ヲ伝聞シ、我輩一同手足ノ舞踏ヲ知ラス、同志ノ輩愁眉ヲ開クノ時至レリト、一同奮テ失敬ヲ顧ミス推參シ、応分ノ御仕役ヲ冀フトノ趣ナリシトソ、然シテ先般有馬新七・芝山愛次郎・橋口伝藏等ヨリ通知ノ趣アリシトノ事モ演舌セリト、応接者答弁ニ曰ク、此度 国父出府ノ主意ハ、修理太夫病氣ニ依

リ此涯參觀ノ様体ニアラス、已ムコトヲ得ス実父島津

和泉參府、修理太夫參觀御猶予ノ御礼、且藩邸造管指

揮旁ノ為ニシテ別ニ仔細無之、聞込ノ趣ハ一々誤聞ナ

ルヲ弁セシニ、浪人等曰ク、茲ニ於テ敢テ論問ヲ欲セ

ス、強テ從駕願ヒ奉ルニ非ラス、何レニモ浪花辺ニ同

志ノ者多数扣ヘタルカ故、尚ホ評議ニ及ヒ事ニ臨ンテ

建言、或ハ御助力致スノ時機アルヘシト懇懃ヲ尽シテ

退散シ、然シテ小倉ヨリ乗舟、浪花ニ向テ発帆セリト

云フ、此ノ輩ハ各藩士烏合ニシテ、宰スル者モナキカ

如クニ見ヘタリトソ豊後岡藩小河弥右衛門一、  
敏一カ同類ナリシト云フ、

31 ○三月 日廿四日ナ、  
ラン、筑前木屋瀬駅ニ於テ浪士二十五六

名御昼休ノ御本陣ニ推參シ、從駕ノ重役へ面会ヲ乞フ

コト前ノ如シ、其筋ノ者応接セシニ、高瀬駅ニ於テノ

趣意ニ異ナラサルカ故答弁モ同シカリトソ、此ノ儕モ

強チニ從駕セント迫リシコトナク、京撰ノ間ニ於テ重

テ可伺ノ儀アルヘシトテ退散シ、大里ヨリ乗舟シ去リ

タリトソ久留米藩真木和泉カ連類ノ輩、  
或長州人モ交リタリト云フ、九州路ニ於テモ如

此ナルカ故、浪花辺ニ於テハ尚ホ続々推參請願スル者

モ多カラント予メ注意セラレタリトソ、其時藩内其他

隣藩或ハ京撰等ノ間、中ニモ関東ニ於テハ種々巷説、

流言喧囂、多クハ鎮攘或ハ討幕ノ御主意ヲ以テ御出府

ナリト云ヒ囁セリトソ、如此ナルモ柴山・両橋口等ノ

曹カ、出府ノ途中各所ニ於テ浪士等ニ談話シタル趣ヲ

浪士輩ハ機会トシ、甲聞テ乙ニ伝ヘ、乙伝ヘテ丙ニ移

シタルカ如ク、遂ニ伝播街説喧シキニ至レル者ナリト

云フ、

編者曰ク、両橋口・有馬・柴山ノ曹ハ当時本藩ニ於

テ過激論者ノ巨魁タリ、二三年前ヨリ奔走シテ連結

ノ党与モ寡カラス、其論旨過激、其拳動粗暴ナルカ

故、小松・大久保・中山ノ儕ト阻隔ノ形況ヲ顕シタ

リ、小松等ハ 国父公ノ尊旨ヲ循奉シ竭ス処アリ、

有馬等ハ之レニ反シテ、義拳ト称シ閔白殿下及ヒ所

司代ヲ討チ、而シテ

天子ヲ狭ミ、天下ニ号令シテ幕府ヲ討チ、攘夷御親征

ノ計画ナリシトソ、茲ヲ以テ論旨氷炭相反シ、小松

等ヲ指シテ因循不断ト名ツケタリ、橋口等ハ藩内其

他隣藩ニ声息ヲ通シ、其謀ル処御上京ノ機ニ乗シ暴

発スヘシトノ企ニ外ナカリシトソ、如此激烈粗暴ノ主意ニシテ亦タ謀ル処モアルカ故、壮年血氣ノ輩与党増加シ、国父公ノ尊慮ニ妨碍アルカ故、柴山・橋口ノ輩ハ戰級ヲ進メ、而シテ江戸邸組合方在勤ヲ命セラレタリ兩名共ニ造士館句読師ナリシヲ訓導師ニ進、此メ、江戸邸組合方在勤ヲ命セラレタリ、此レ全ク藩内ニ粗暴論者ノ増加ヲ遮断センカ為メ、其巨魁ナル者ヲ引キ離シタル措置ナリト云フ、然リト雖モ兩名ハ却テ手ヲ延スニ道ヲ得タリト悦出府セリ、或ハ小松等カ奸計ヲ以テ揚テ遠ケタリト憤懣ノ意モ又ナキニ非ラスシテ、一層暴謾過激ノ勢ヲ増シタリトモ云フ、而シテ兩名ハ出府ノ途次、熊本其他肥筑ノ間各所ニ於テ浪士ニ面接シ、義拳ノ大旗ヲ京撰ニ揚ルノ国論ナリト稍揚言シタリトナン、然ルカ故ニ、浪士等ハ此ノ機ニ乘シ宿志ヲ達セント諸所ニ蜂起シ、其勢熾ナルニ至レリト云云、○両橋口・柴山等カ論旨ハ、国父公関東ヘノ御参向ハ甚タ不可ナリトシ、京師ニ於テ直ニ義旗ヲ拳ケラレ、先ツ関白殿（頭注）註 九条尚忠公也「久公」及ヒ所司代（船紙）酒井若狭守忠義「ヲ誅シ、京伏坂間ニ在ル幕吏ヲ斬戮或ハ「駭」（本音）逐シ、而シテ

天子ヲ狭ミ、幕府ノ罪ヲ問ヒ鎖攘ノ令ヲ布ク等ノ順序ニアラスンハ、成功ヲ見ルコト能ハサルヤ明ナリト、小松・大久保等カ説ノ如ク姑息因循ノ措置ニ出ルトキハ、幕府ハ暴策詐謀ヲ逞フシ、遂ニ再ヒ高時・尊氏ヲ生シ、建武・延元ノ徵ヲ踏ミ為スコト能ハス、（轍カ）嘯臍ノ悔及フヘカラサルニ立到ランノ論ニ止マリ、有馬其他ノ曹ト堅ク取テ熄マサリシト、剩ハ出府ニ臨ンテ決定セシ処ハ、国父公浪花ニ着セラルルニ中テ御出府ヲ遮リ奉リ、大旗ヲ京師ニ揚ケラル、ノ場ニ促迫スルノ計画ナリシトソ、果シテ説ノ如ク御発駕ノ報江戸ニ達スルヤ、直チニ在邸国老（船紙）津登久包ニ向テ上京センコトヲ乞フト雖モ、国老ハ法規ニ依テ内命ノ令書ヲ見テ、而シテ之ヲ允サント云フ内命ヲ奉シタリト云フハ、渠彼等カ、素ヨリ前記ノ如ク揚テ遠ケラレ詐謀ニ出タル者ナリ、タル措置ナルヲ銜メルカ故、粗暴ニ切迫セリト雖モ国老ハ固ク取テ允サ、リシカハ、已ムヲ得ス遂ニ同党偕ニ脱走シタリ、茲ヲ以テ国老ハ法規ニ照ラシ探偵捕縛スヘキヲ令シ、捕手ヲ各道ニ派遣セリト雖モ得ス（脱走人ノ名、後ニ記ス、而シテ脱走ノ輩ハ昼夜兼行浪花ニ出

テ、公然 国父公ノ御着坂ヲ俟ツ、其時諸国ノ浪士ハ逐日來集シ、予約ノ如ク暴拳ニ議決シタリト云フ  
 江戸邸脱走ノ前頃、国老ハ橋口社介ヲ官宅ニ呼ビ、粗暴ノ挙動ニ及フコト勿レト百方懇諭セシニ、種々陳弁スト雖モ、国老ハ公私ノ情ヲ尽シテ寧反復ノ説諭セシニ、遂ニ承服ノ答詞ヲナシタル、カ故、尚同志ノ輩ヲモ説諭鎮撫スヘキヲ内諭シタリトソ、然ルニ日ナラスシテ脱走セシヲ以テ見ルトキハ、面ニ承伏ノ姿ヲ示シタルヤ明ナリ 橋口社助カ父ハ彦次ト云フ、少シク才識アリ、篤実ノ人物ナリ、維新ノ後参政ニ拔擢セラレ、 ○柴山・橋口等ハ出府ノ前頃隣県ノ同志ニ、回章ヲ以テ 国父公御発駕ノ確報ヲ得タル時ハ直チニ浪花ニ走セ集ルヘキヲ約シタリト、故ニ浪士等ハ各相伝ヘ、倍々党員ヲ増シタリト云フ、中ニモ長・土・久留米・岡・秋月・福岡等ノ藩士多キニ居レリト云フ、長州ハ特ニ多数ニシテ浪花ヘ來会セル初メニアリ、伏見寺田屋ノ慘状ニ及フ前頃ニハ、浪花ニ在テ謀議ノ首魁トナリ 其頃長州ニハ 完戸・九坂・來島・高杉・木原等激論ノ巨魁ナリ」頗ル竭力シ、暴徒等四月廿三日上伏ノ川舟用意等ハ、長人ノ周旋ニ出テ費途ヲモ弁シタリト云フ、然リ而シテ如何ナル思想ニ変シタルニヤ、上伏セス、薩人其外発舟ノ後踪跡ヲ知ラサルニ至レリト云フ 有馬・橋口等浪花発舟ノ際、長人ハ後舟ヨリ上伏スヘシトノ約束ナリシトソ、其時橋

32

口・有馬等ノ輩ハ寺田屋ニ就キ糧食ヲ命シ、長人ノ來着ヲ俟チタリシニ遂ニ來ラス、連類ノ曹後チニ長州人ノ詐謀ナリシヲ覺リタリト云、○却説予テ計画セシ所ハ前二概記セシカ如ク、伏見ニ於テ諸浪士ト会合シ、而シテ一手ハ関白九条殿下ヲ襲ヒ、一手ハ所司代酒井若狹守殿ヲ討チ、而シテ後チ闕ニ入り、事情ヲ述ヘテ罪ヲ謝シ奉リ、上奏シテ討幕攘夷ノ号令ヲ天下ニ布レンコトヲ請願スヘシ、一手ハ錦街ノ我カ藩邸ニ出テ事由ヲ陳謝シ、而シテ 国父公迅速御參内ヲ促シ奉ル等ヲ以、当夜ノ順序ト定メタリトソ、茲ヲ以テ糧食ノ用意ニ及ヒ、未タ喫スルニ至ラサリシニ、戌ノ刻頃鎮撫説諭使ノ人々即チ大山・奈良原・森岡・ 其頃 江夏・山口・道島・鈴木父子及ヒ上床」等ノ九名、寺田屋ニ到レリ、○説諭使ノ人々ハ下伏シテ暴徒何レニアリヤヲ搜索シ、遂ニ寺田屋ニ屯集セルヲ探知シ、而シテ九名一同行キ向ヒ、説諭ニ及ヒタリト雖承服セス、却テ暴謾ノ言語ヲ吐キタルカ故、遂ニ鬪争斬殺ニ及ヒタリトソ 中ニ有馬ハ、説諭使ノ人々ニ向テ暴謾ノ言語ヲ吐キ罵詈シタリト云云、

〔頭注〕「真木和泉來廳」  
 ○久留米藩士真木和泉守「其頃 実名札ス」  
水天宮ハ、同藩社司職

士三名姓名不詳偕二適々來麿三月七八日頃着、麿セリト云フ、小松・大久保

及ヒ有馬新七等二面会センコトヲ乞フ、大久保等面晤セシニ論旨過激粗暴ナルカ故、可否ノ論ニ涉ラス放擲

シ、而シテ藩士猥リ二面接ヲ誡メ、三月十四日志布志郷夏井通二案内ヲ付シ去ラシメタリ、而シテ同十七日

再ヒ來麿、十日間許ノ後二退麿セリト云フ斯ク再ヒ來麿、麿セシ其事由ノ確タルヲ知ル者ナシト雖モ、聞ク処ニ依レハ、真木ナル者ハ無二ノ攘夷討幕論者ニシテ、四方ニ奔走シ党与多キ者ナリトソ、国父公今回勇為敢進御上洛アルヲ伝聞シ、或ハ前頭柴山・橋口等ノ曹ト結合セシ事実アリテ、時ヲ俟チタリシニ機会至レリト

窃ニ來麿、驥尾ニ属ヒテ竭ス処アラント懇願ル切ナリト雖モ、素ヨリ我藩論ニ背違セルヲ以テ、是ヲ論斥スルトキハ多少ノ障碍ヲ生ンセンコトヲ慮リ、御発駕ノ後、国老喜入撰津カ所見ヲ以テ再ヒ來麿セシメ、事ヲ左右ニ托シテ数日逗留セシメ、諸浪士ト俱ニ御途中ニ推參セシコトヲ予防センカ為メ、斯ク一時ノ措置ヲナシタリト云

フ、初メ大久保等面晤ノ時彼カ言ニ、九州中ノ各藩士則チ岡藩小河弥右衛門・福岡藩平野次郎等ヲ初トシテ数百ノ同志人アリ、或ハ四国・中国ノ各藩ニモ同志ノ者寡カラス、夫等ノ曹ヘモ通知シ、偕ニ驥尾ニ属ヒテ竭サンコトヲ欲ス、願クハ此機会ヲ失ハレス、大旗ヲ京師ニ掲ランコトヲ頼願ス云云ナリシトソ、

33  
〔頭注〕「馬関へ着セラル」  
○四月六日馬関ヨリノ飛報到来、国父公三月廿五日小倉

駅ニ着カセラレ、同廿六日大里駅ヨリ馬関へ御渡海、同廿八日迄同地御滞留、二十九日汽船天祐丸へ御搭艦、大坂ニ向テ御発航ノ旨告ケ來レリ、○馬関御滞留中大

久保ハ浪花ニ向テ先發シタリト、是レ京坂ノ間ニ浪士

許多來集、或ハ大島三右衛門カ挙動異状ノ報アリテ、鎮撫ノ命ヲ奉シ先發シタリト云フ、

34  
〔頭注〕「播州室津へ着セラル」  
○四月二日、国父公ハ播州室津へ着セ玉ヒ、同シク五

日迄御滞船、從駕ノ人々ノ來着ヲ待セ玉ヒ、同六日御揚陸、是ヨリ陸道ヲ取り、同八日兵庫駅ニ宿ラセラレ、

同十日大坂ノ邸ニ着セ玉ヘリ、麿城御発駕ヨリ海陸凡ソ廿四日間、室津へ三日ノ御滞船、其時ノ御作、

自出家郷已二句 轎舟過得幾関津  
此行何意人知否 欲扶扶桑国裏塵

此ノ御作近習ノ曹ヘ示サレタリト、実ニ扶桑国裏ノ塵ヲ掃除セラル、ノ御誠心ヲ表セラレタル者ナリ、

編者曰、此回ヒノ御旅行ハ則チ王政維新ノ起源ニシテ、大小三百余侯ノ中ニ独リ我藩ノ英断ニシテ、真

ニ大偉業ト謂ワサルヲ得ンヤ、当時幕府ハ井伊大老カ逆政ノ意ヲ継述シタル安藤閣老在職シテ、専横ノ

施政ナルハ咸人知ルカ如シ、多言ヲ要セス、大小侯伯ノ中時事ヲ憂ヒタルモアルヘシト雖モ、多クハ幕

府ノ鼻息ヲ伺ヒ、或ハ優々不斷優遊不斷カ、唯々封土ヲ守ルニ

ノミ汲々トシテ、

王室ノ衰頹畏クモ

創意憂悶セラル、ヲ慷慨奮起スル者ナク、実ニ嘆慨極

マレリ、幕府ハ我藩ノ動靜ヲ伺ヒ、為ス所アランノ

說ニ驚懼シ、百方奸謀ヲ用ト雖モ邪ハ正ニ敵セス、

施スニ術ナク、徒ラニ探訪ニ勞シタリ、故ニ此時ヲ

以テ

朝威復古、幕運傾頹ノ形顕ハレタル初メトモ謂フヘキ

ナリ。當時大小侯伯ノ中ニ水戸・長州・土州・宇和島等、尊王ノ藩々  
モアリト雖モ、幕威ニ恐レ、或ハ俗論ノ為メニ遮ラレ優々不斷  
中ニモ水長ノ二藩ハ、尊王ノ人士アリト雖モ手下スニ途ナク、  
鬱々タルノ際、我藩断然上洛セラレ、ノ説ヲ聞キ、有志ノ輩勃々  
奮興、本藩ニ先鞭セラレタルヲ殘慨シ、手足ヲ措クニ処ヲ知ラ  
ス、藩主ニ痛諭シ、或ハ藩吏ニ迫リ、遂ニ跡ヲ逐フテ起レリ、殊  
ニ長藩ハ藩論定マラサルカ故、有志ノ輩ハ脱走シテ四方ニ奔走ス  
ル者少カラス、藩庁ハ永井・周布等ノ奸吏、四五年前ヨリ幕吏ト  
親密、朝幕ノ間ニ周旋シ、永井カ如キハ開港、勅許ノ事ニ就テ  
京師ニ出、堂上方ニ建言或ハ説ク処モアリタリ、如此キノ挙動全  
ク幕府ノ鼻息ヲ窺タル者ナリ、然レニ我藩ハ独リ断乎トシテ揚発  
ノ場ニ至リテ、永井等ノ輩ハ幕吏ト謀結シテ我カ藩ノ挙動ヲ窺  
ヒ、国父公ノ御出府ヲ名トシ其実御上洛ナラシメテ疑シ、密ニ  
長門守殿下国ヲ促シ、途次京師ニ出、我藩ノ動靜ヲ視察シ、臨機  
抑圧セントノ謀議ヲ銜ンテ帰国セリト、而シテ国父公浪士鎮撫御  
滞京ノ勅命ヲ奉セラレタル後着京セラレ、而シテ国父公御出京ノ後十  
日ニシテ着京セラレタリト云フ、一説ニ四月二十六日着京トシ、  
宮・堂上方ノ間ニ頼リテ、国父公ト同シク勅命ヲ奉セント切迫懇  
請セリ、朝廷ニハ既ニ、国父公ニ勅命ヲ下サレタル後ナルカ  
故、兩虎相争フノ憂アラシク恐レ玉ヒ、朝議甚タ困難ニシ  
テ、遂ニ其事実ヲ以テ、国父公ノ御氣嚮ヲ問ワレタリト、其願未  
ハ後ニ記スルカ如シ、然リ而シテ長藩士ノ中ニ我有馬・柴山等ノ

暴徒ト團結シ暴動ニ及ハント、同シク伏見へ発向ノ契約ヲナシタル  
ノミナラス、暴徒上伏ノ川舟用意等ハ悉ク長人ノ尽力スル処ニシ  
テ、而シテ遂ニ其約ヲ歟シ、上伏セス踪跡ヲモシコナリキ、其舉動  
當時巷談ヲ用ヒ我藩ヲ惡ミ讒誣甚シキニ至レリ、○是ヨリ先キ長  
州ハ幕府ノ内命ニ依リ、其臣永井雅楽ナル者ハ御目付淺野一學ト  
偕ニ上京シ、外夷通書ノ、勅許アランコトヲ尽力セシメタリ、其  
時永井ハ一ツノ建言書ヲ作り、関白殿其他中山殿・正親町殿等ノ  
諸卿へ就ヒテ宇内ノ形勢ヲ説キ、或ハ開市ハ彼我ノ利益ナル等ノ  
旨ヲ述べ、勅許ナキハ稍御暴論ニ近シトノ言モ述ヘシメタリト  
シ、然リト雖トモ、創意確乎トシテ御動キナキカ故、永井等ハ手  
ヲ空フシテ束縛セリ、其時永井カ建白ハ世ニ流布シタル者ナリ  
キ、此ノ始末ハ、  
前編ニ詳記ス、

35

○本日 太守公磯御邸下海浜ニ於テ大砲調練御覽アラセ

ラレタリ、當時内外多難、京撰間ニハ浪士蟻集、粗暴  
ノ挙動ニ及ハントシ、外ニハ夷狄暴慢無礼ニシテ、其  
勢焰猖獗目前国害ヲ生センモ量ルヘカラス、乱兆顯然  
タルカ故、海陸ノ兵備一層嚴整セラレ、操練毎ニ太守  
公御親ク御勉勵アラセラレ、一月二三回ノ大操練ヲ促  
サレタリ、御先手御旗本等ノ諸隊操練ハ一週間一回ニ  
催サレ、日トシテ砲声ヲ聞カサルハナシ御城下諸士六組及  
ヒ足隊聯合計七組  
ナリ、日ニ毎一組ノ操練ナルカ故、一週間、  
一回ニ及ヘリ、諸郷・私領モ之ニ準ス、

36

〔頭注〕「兵庫駅ニ着セラレ」  
○四月八日、兵庫駅ニ着セラレ、此日近衛殿大納言  
忠房卿御内書

到来、左ノ如シ、

36の1  
〔頭注〕「近衛殿御内書到来」

薄暑催弥平安令賀候、於毎々御実情被申越、何モ珍重  
ノ事ニ候、面謁何モ関東之次第具ニ承、珍重之儀  
ニ存候、其方上洛候ハ、入来之事ニ待入候、中山尚之  
介・大久保市藏等江者其方入来之儀留置候得共、最早  
当時之模様ニ成行候者、御上洛候者必御入来之様存候、  
尚面謁卜待入候事ニ候、何分即今穩便ニ御誠忠有度存  
候、仍テ何モ申入置度存候事、

四月八日 忠房

尚以大久保市藏咄ニ、中山前中將ヨリ之条々承、甚々  
是ハ不人物無之人ニ候也、

〔本文書は「玉里島津家史料」一五五号とほぼ同文な  
り〕

○当時京撰ノ間ニ浪士多ク屯集シ、暴動ノ形勢ナルヲ  
以テ、小松・大久保等ヨリ、幾千ノ兵ヲ至急ニ召寄せ  
ラレ不虞ニ備ヘラレンコトヲ言上ス、 国父公仰ニ、  
〔義弘〕松齡公関ケ原ノ戦ヲ以テ考ヨ、兵ノ多少ニ由ルヘカラ  
ス、精銳ノ兵一千人モアラハ、浪士等ノ暴発ハ恐ルニ

足ラストノ御言ナリ、此御言ヨリシテ別ニ召喚セラレ  
サリシトソ、此時從駕ノ人員凡ソ一千人許リモアリ、  
此ノ御事ヲ聞ヒテ從駕ノ人々感嘆シ、一層奮起セリト  
云フ、

37  
〔貼紙〕追加

○四月九日、 太守公磯邸ニ於テ天真流擊劍奥儀御相伝  
ノ式ヲ受サセラレタリ、此日師範加藤権兵衛清通清総伝書  
三卷ヲ呈シ、奥儀ノ太意ヲ演テ奉授、畢而加藤へ御盃  
及ヒ御脇差一腰ヲ賜フ、此賜フ所御脇差ハ先規ノ如ク  
御側役山口直記カ証書ヲ付シタリ、左ノ如シ、

覚

御脇差波平 一腰長一尺七寸三歩 白木鞘  
安氏 萌黄緞子袋入

右者、 茂久公御若年之御時ヨリ天真流御信仰混ス  
ラ被遊 御修行、其方儀分而骨折此節御相伝申上、  
御伝書都而差上、別而 御満足被 思召上候、依之  
右之通拝領被仰付候、仍証書如件、

文久二年戊四月九日 山口直記花押

加藤権兵衛殿

38の1  
〔頭注〕「大坂藩邸御着駕」  
○四月十日、大坂土佐堀ノ藩邸ニ着セラレタリ、此日從

駕ノ輩へ左ノ嚴誡ヲ下サレタリ、

〔頭注〕「誠論ノ令書ヲ發セララル」  
一諸藩士浪人等江私ニ面会不可致事、

一命ヲ受ケスシテ猥リニ諸方へ奔走不可致事、

一万一異變到来候共敢而不致動搖、下知無之内其場へ

不可驅付事、

一酒食可相慎事、

右之趣先度ヨリ追々申渡候得共、以來猶又可相守、若

此上違背之族於有之者無用捨可処罪科者也、

四月十日

〔本文書は「名越時敏史料」一四二頁「一諸藩士浪人等へ」と同文なり〕

此ノ誠諭ノ令、即日從駕ノ輩へ拜聞又ハ布達セラレタ

リ、而シテ鹿兒島ニ於テハ、国老中左ノ添書ヲ以テ同

月廿七日布達セラレタリ、

前文略ス、

38の2

〔之通脱カ〕  
右 去ル十日

和泉様以御筆御達被為 在候条、誠実ニ相守候様、於

大坂御殿拜聞申渡ニモ相成候段申来候、此旨向々へ不

洩様可致通達候、

四月二十日 筑後川 大藏島 摂津喜 式部川  
七日 上

〔本文書は「名越時敏史料」一四二頁「右之通、」とほほ同文なり〕

如此嚴誡ヲ下サレタルハ、我カ脱走ノ者或ハ浪士輩、

国父公ノ御参府ヲ機会トシ京撰ノ間ニ屯集シ、関東御

下向ヲ遮リ御滞京ヲ促シ奉リ為スコトアラントシ、或

ハ鎮撫ノ為メ先發ヲ命セラレタル大島〔貼紙〕四郷カ背命、

浪士等ヲ教唆シタルカ故、却テ勢力ヲ増シ、其形勢穩

ナラサルヲ以テ如此嚴令ヲ布カレタル者ナリ、然リト

雖モ、我カ藩ノ暴徒等ハ此嚴誡モ馬耳風トシ、窃ニ暴

動ノ策ヲ施シタリ、此時大坂ノ外邸ニ給養セラレタル

浪士〔頭注〕「暴徒人名」二ハ、中山大納言殿ノ御内田中河内助〔綴紙〕「以下人名下の」「各実名

アキは全てマ」  
〔嘉猷〕・同人長男左馬助 〔貼紙〕・同人甥青木頼母、京都

ノ士千葉郁之助、肥前佐賀藩士中村主計〔重義〕、筑前秋

月藩士海賀宮門〔直求〕、佐土原藩士富田猛次郎〔通信〕・同池之

上準之介〔陣駈〕、久留米藩士真木和泉頭〔和泉守カ〕・同名菊四郎

・酒井伝次郎〔重威〕・鶴田陶司、高鍋藩士原道太〔盾雄〕・

同藩士若水半次郎・古賀菅次、中垣誠太郎、吉

武助左衛門〔信義〕、岡藩士小河弥右衛門、秋田ノ農清川

八郎〔正明〕等、各藩脱走ノ者凡ソ三十有名、中山侍従忠光

〔朱書〕〔忠能卿〕「朝臣」モ〔貼紙〕「窃志ヲ合セタリ」トゾ〔朱書〕、我藩士ニ

ハ橋口伝藏・柴山愛次郎・橋口壮助〔永造〕・有馬新七

・田中謙助〔盛明〕・西田直五郎〔正基〕・森山新五左衛門〔永造〕・

弟子丸籠助〔方行〕・大山弥助藏・深水休藏・町田六郎左

衛門〔重俊〕・吉原弥次郎〔重俊〕・三島弥兵衛〔通庸〕・河野四郎左衛門

・是枝万助・林庄之進〔景綱〕・岸良真之介〔盛弘〕・橋口吉

之丞〔景綱〕・柴山龍五郎〔景綱〕・森新兵衛〔盛弘〕・永山万藏〔盛弘〕・谷

元兵右衛門〔清基〕・木藤市助〔清基〕・伊集院直右衛門〔清基〕兼〔清基〕・吉田

清右衛門〔清基〕・西郷信吾〔清基〕道〔清基〕・岩元勇助〔清基〕・坂元彦右衛門

・有馬休八〔清基〕・篠原冬一郎〔清基〕幹〔清基〕・谷山郷士大脇伸左衛

門〔清基〕・同松田東園〔清基〕、喜入撰津家来指宿三次〔清基〕、関山

糺〔親輔〕、家来美玉三平〔親輔〕・同山本四郎〔親輔〕等〔親輔〕「各美名糺ス」、

凡ソ三十五名、他藩士長州・土州等合計百四五十名ニ及ヘリ、国父公ハ此ノ曹カ挙動ヲ深ク憂ヒ玉ヒ、海江田武次〔信義〕・奈良原喜左衛門〔門脱カ〕ノ二名ニ命セラレ、尊慮ノ旨ヲ示シ敢テ動揺セス、謹シテ御尽力ノ成否ヲ見テ命ヲ俟ツヘシト懇篤説〔朱書〕「論」セシニ、言詞ニハ承服シ、内ニハ窃ニ暴動ノ計画ヲナシタリト云フ、○此時巷説百出、一ヲ以テ百トシ唱へ、数千ノ兵ヲ揚テ京師ニ出テ直チニ兵端ヲ開カレ、天子ヲ狭シテ討幕シ、遂ニハ覇業ノ謀策ヲ旋ラサルト喋々噴々、其節喧囂ナルニ至レリ、此時在邸国老ハ之ヲ聞テ大ニ憂慮シ、大目付菱刈奎之介・留守居汾陽次郎右衛門ヲ大坂ニ遣シ、陸行ヲ止テ天祐丸〔朱書〕汽船ニテ品川沖ニ回船ス可キノコトヲ告ク、然レトモ近衛殿ノ御内書アルヲ以テ之ヲ用ヒス、二人ヲ説諭シテ大坂ニ止メラレタリ、又末藩島津淡路守殿〔忠〕江戶ニ在テ世説ノ喧シキヲ聞、憂慮ノ余リ家臣二名ヲ御途中ニ出サレ、江戶ニ於テノ世説ヲ述へ、京都へ御立寄りナク直チニ御東下アルヘキ趣ヲ告ラレタリ、是レ本末ノ間憂慮セラル、モ又理ナキニ非ラス、然リト雖モ、国父公ハ積年心思ヲ煉ラレ機運ヲ察セラレ、御発揚ノ尊意ヲ知

ラス唯二街巷訛伝ヲ聞キ、恐懼憂悶ノ余リ忠告セラレタル者ナルカ故、御深慮ノ旨厚ク其人ニ諭サセ玉ヒシカハ、初メテ御深意ヲ拜承シ、敬伏シテ東帰セリトソ、然シテ世説ハ種々様々益々喧シク、京摂ノ間ハ素ヨリ畿内近国ハ更ナリ、全国今ヤ汗馬・鉦鼓ノ声ヲ聞キ血河堆屍ノ惨状ヲ見ルニ至ラント一般恐懼極リタリ、幕府ニ於テハ万計千謀ナサ、ルコトナク、我カ藩ノ豊隙ヲ窺ヒ妨遮ノ術計ヲ廻ラシタリト雖モ、素ヨリ誠意一ニシテ毫髮ノ私心ナキカ故、施スニ途ナカリシト云フ、斯ル折節ニ福岡侯美濃守御參府ノ為メ播州大倉谷迄御旅行アリシニ、世説ノ喧シキニヤ恐レ玉ヒケン、引返シ帰国セラレシトソ、福岡侯ハ我カ藩ノ近親ナリト雖モ藩論定ラス、有志者ニ乏シク士氣衰頽時勢ヲ弁セス、我カ藩ノ街説ヲ聞キ、同論同拳ノ嫌疑ヲ恐レ朱書「ラレタリト云」、○近衛殿ハ素ヨリ、宮・堂上方ハ 国父公御發程ノ報ヲ聞カセ玉ヒ喜眉ヲ開カレ、奏聞ニモ及ハレシニ

叡感斜ナラス、御着坂ノ報ヲ待タセ玉フコト千秋ノ如クニ思食サレシトソ、

朝廷ニハ數百年ノ久シキ幕府ノ束縛ニ困玉ヒ、中ニモ近年井伊大老カ暴政ニ宮・堂上方ハ恐懼極リ玉フノ際、

国父公ハ堂々トテ御上洛アリケルニハ、真ニ魚ノ水ヲ得タルカ如キノ思ヲナサレシトソ、又 国父公ノ今日

茲ニ及ホサレシハ一朱書「旦」夕ノ事ニ非ラス、 照国公

ノ尊志ヲ繼述セラレ御心ヲ勞セラレシ事、凡ソ五年ノ

星霜ヲ踏ンテ發揚セラレタル者ナリ、其間千緒万端苦心セラレ、近衛殿ハ素ヨリ宮・堂上方ノ間ニ膝辺ノ者

ヲシテ画策セラレ、而シテ機會ヲ規定セラレ、公然御

出發アラセラレタル者ナリ辛酉ノ年春ノ頃ヨリ、近衛殿ハ御

ヲ命セラレ、其時中山へ 国父公御深慮ノ旨ヲ含メラレ、或ハ近衛

殿ヨリハ時態挽回 叡慮ノ趣ヲ以テ 御依頼アラセラレタリ、茲ヲ

以テ御深慮ノ趣密 奏セラレ、其後大久保一藏ニモ上京ヲ命セラレ、

御獻言ノ趣モアラセラレタリト雖モ、 朝廷ハ積日幕府ノ暴政ニ困

セラセラレ、殊ニ堂上方ハ逆威ニ恐懼シテ悠柔不斷ノ挙動モ寡ラサ

リシトソ、○御縁談トハ、近衛忠房卿ハ島津又八郎姉ナルヲ 国父

公御養女トシ入興セラレタリ、 御入興ノ始末ハ後卷ニ記ス、

39 〔頭注〕「伏見邸ニ着セラル」 ○四月十三日、大坂藩邸ヨリ川舟ニ召サレ、同日晚景伏

見ノ邸ニ着セ玉ヘリ、此時浪人等ノ暴動ヲ憂ヒ玉ヒ、

從駕ノ人数半バヲ大坂邸へ殘シ、警視ヲ命セラレタリ、

40  
○四月十四日布達、先般幕府へ御届二被及タル国父公御  
政事向御介助被為在候旨、左ニ布告セラレタリ、

40の1  
太守様御在府之年ハ

和泉様御政事向万端御指揮被為在度旨、先般

公辺江御届被 仰上置候処、御用番久世大和守様被聞

召置候旨御到来候、依之明十五日諸士登城、御両殿様

へ御「祝」儀可申上候、

四月十四日 大藏島津

41  
○本日 国父公ニハ伏見邸ニ御座アリシカ、近衛殿忠房御

内書到来、其御書面ノ趣所司代酒井若狭守ヨリ、近頃

浪士京坂ノ間ニ相見得、種々ノ評判モ有之候ニ付、公

卿方武士へ猥リニ面会遠慮アルヘシトノ趣ヲ伝奏へ申

達シタリ、然レトモ此度ハ尋常ノ事ニアラサルカ故、

御嫌疑ノ訊ナキニ於テハ早々御上洛御参殿ノ節、中山

殿・正親町三条殿御面会アラマホシトノ事トモナリケ

レハ、国父公ニハ少シモ御憚リノ訊アラセラレサル

旨ノ御即答ナリシトソ近衛殿へハ予テ御打ち合せニナリタルコトニテ、御着伏ノ趣御通知アリシ故、右

ノ如ク御参殿ヲ促サレ、近衛家御書面左ノ如シ、  
タル者ナリシトソ、

41の1

弥勇健珍賀候、明後十六日面会ト楽ミ待人候、正親町

三条ニモ面会候事ト申入候処、尤モ承知ニ候趣、乍去

酒井若狭守ヨリ伝奏江此通り之書付差出シ候ニ付而者

全武士江面会抔差留メ候様成次第、乍去其元サへ嫌疑

不被存事ニモ候者大盤石之至、何時成共面謁可仕旨ニ

候儘、何卒唯今直様ニ右否御報頼入存候、御報次第二

而面謁可仕候由ニ承候間、以急使早々ニ申入候間、

早々ニ御報頼入候、呉々其元御誠忠之儀者何迄モ頼敷

存候事ニ候、乍去唯今 御膝元ニ而騒々敷不相成様、

事穏便ニシテ関東改革在度事ニ候、呉々於 御膝元人

氣立騒ケ敷相成候而者誠忠モ難立、先以穏便之手段ニ

而被為安 宸襟候様良策在度事ニ候、長州ニモ誠忠決

当之趣ニモ候ハ、一致ニテ良策肝要ニ候、呉々大盤

石之賢底専ニ而、精々誠忠被尽候様偏ニ仰ク処ニ候、

乍去

帝都戦場地ト相成候而者不容易大乱、呉々 御膝元静

ニシテ被安為脱カ

宸襟候様、長藩杯一致良策勘要之事ニ候、呉々卒事ケ  
間敷次第在之候而者事成就難成候間、何分御分別御如  
才者無之哉ト者存候得共、静ニ被為安

宸襟候様良策伏而頼入候、先者大急々正親町三条へ面  
謁被致候否ニ付態々申入候、右乱書々推覧ニテ何卒唯  
今直様ニ御報頼入度候事、

四月十四日 忠房

島津和泉殿へ 極密早々

此書付所司代ヨリ伝奏へ差出シ候写ニ候間、草々  
是モ御返却之様伏而頼入存候事、

〔本文書は「玉里島津家史料」一五九号と同文なり〕

〔所司代ヨリノ書付記載仕度〕〔此書面焼失スト云フ〕

42 ○四月十六日未明ニ伏見邸ヲ発セラレ、京師錦ノ邸へ御  
休憩、御服ヲ改メラレ〔髮斗目〕、巳ノ刻頃近衛家へ御参  
〔頭注〕近衛家へ初テ御参殿、諸卿ト御論議御厭言、而シテ浪士鎮撫奉勅

服飾・御行装モ本式ナルノミナラス、前頃ヨリ御上洛  
ノ説種々様々ニシテ御名望轟キタルカ故、御通街拝観

ノ者夥シ、而シテ表御殿ニ於テ初メテ忠房卿へ御謁見  
ノ式アラセラレ、畢テ御休息所へ御誘引、中山大納言  
忠能卿〔議〕・正親町三条大納言実愛卿〔議〕御謁見、初メテ  
御面会ノ趣共御互ニ御述べノ後、国父公御演説且ツ  
御手扣ノ御書面ヲ呈セラレタリ、左ノ如シ、

此節私儀関東へ出府仕候趣意、表通者去々々年来修  
理太夫参府、両度迄御猶予之御礼、且者屋敷焼失後  
下知不仕候而不相叶用向有之筋ニ御座候得共、内実  
者公武御合体

皇威御振興、幕政御変革被為在候様建白仕候所存ニ御  
座候、尤、此儀者一朝一夕之事ニ無之、去ル午年已  
来幕役共

勅諭ヲ遵奉不仕、外夷通商免許仕、剩へ正議之親王・  
公〔朱書〕卿ヲ奉始、一橋〔刑部卿〕・尾張〔前大納言〕・水戸  
〔前中納言〕・越前〔松平春嶽〕・其外有志之大名ヲ禁錮仕、  
庶人者死流之刑ニ取行候処ヨリ、乍恐被為一惱〔朱書〕  
宸襟候御模様伝承仕候、引続キ諸国之町人・商人等江  
迫リ金子ヲ買上候上、自儘ニ其位ヲ上ケ洋銀ト号シ、

白銅ヲ以テ国家之通用金ヲ吹替、引続キ列国之諸侯  
江川々手伝ト申シ上ケ金ヲ申付、追々逆政相募候ニ  
付而者、諸国之人心致紛乱、浪人共尊

王攘夷ヲ主張致シ、慷慨激烈之説ヲ以交ヲ四方ニ結  
ヒ、或ハ大老ヲ刺シ、或者夷人ヲ戮シ候ヨリ、幕役  
共取締之嚴命ヲ下シ候処弥奮發仕、近頃ニ相成候而  
者殊ニ致増長、終ニ者不容易企ニ及候哉ニ伝聞仕候、  
右之通ニ而者

皇国一統騒乱之基ト相成、勤 王之趣意ニモ不相叶、  
却而外夷之術中ニ陥リ候儀ニ而、実以不可然事ニ御  
座候、私儀家督之者ニモ無之候得共、三百年來徳川  
家之鴻恩ヲ蒙リ、殊ニ亡兄薩摩守臨終之節、国政之  
儀者勿論、

天朝・幕府之御為宿志致継述精々尽力仕候様、分而遣  
託之趣モ承居候ニ付、右次第傍觀猶予仕候而者不忠  
不孝之罪難遁ト存詰、修理太夫申談、是非關東江出  
府所存十分言上仕候含ニ而、去月十六日国許発足、  
去六日播州姫路江着仕候処、諸浪人共追々上坂仕、  
私通伏相待事ヲ起シ候趣ニ相聞得候ニ付、道中差急

候儀モ出来兼、漸ク去ル十日大坂江着仕候処、浪人  
多人數滞坂仕居、紛々之次第御座候而迎モ通行難仕  
候ニ付、家臣之内内々差出、其方共実ニ勤

王之志有之候ハ、此方致上京  
叡慮可奉伺候間、暫時僭居可仕旨精々理解為仕候処、  
乍漸承服仕候付、十三日伏見江到着、今日參殿仕  
叡慮奉伺所存ニ而、建白仕候者更ニ疎暴ニ事ヲ破候儀  
ニ無御座、天下之人心安堵仕候様御処置被為在度所  
存ニ御座候間、不惡御聞取、委細奏

聞被成下候様伏而奉希上候、誠惶謹言、  
四月<sup>十六</sup>日

〔本文書は「玉里島津家史料」一六一号の一部・「名越  
時敏史料」一一二二頁「此節私儀、」と同文なり〕

右御手扣書ヲ近衛殿ヲ初メ中山・三条ノ三卿御覽アリテ、  
大ニ感歎セラレシトソ、重テ左ノ御書面ヲ呈セラレタリ、

42の2

一 粟田口宮 〔貼紙〕青蓮院宮尊融法親王、後朝  
彦親王、又久邇宮ト称ス・左府公 近衛忠  
鷹

〔頭注朱書〕「前右大臣」  
司公御父子 〔前閔白政通  
公・輔熙公〕 御慎被為解、且於關東一

橋・尾張・越前等御慎解モ有之候様被 仰出度事、

一 右御慎解之上、〔貼紙〕左府公関白職被 仰出、於関東者

越前々中将殿〔春紙〕大老職ニ被為任度、此儀者家格〔慶永〕

二 付先例者無之筈ニ御座候得共、非常之時節非常之

処置有之候様被 仰出度事、

一 田安〔朱書〕「中納言慶頼卿」後見名有テ実無キ事ニ御座候

二 付、免許致候様被 仰出度事、

一 安藤对馬守〔信〕「正」手疵平癒出勤仕候由、是者第一天

下之人心ニ関係仕、不可然事御座候間、速ニ退職仕

候様被 仰出度事、

一 久世大和守〔貼紙〕「広」早々上洛仕候様被 仰出、前件之

儀速ニ取行候様吃度被 仰出度事、

一 前件之儀被 仰出候ニ付而者、乍恐

朝廷之御威光不被為立候而者、幕役共遵奉仕候儀懸念

奉存候間、大名二三家江御内

勅被相下、若幕役共違

勅之趣有之候ハ、速ニ弁責仕候様被 仰出度事、

一 此已後者

叡慮之趣浪人等江不相洩様、御取締嚴重有御座度奉存

候事、

一 浪人共ノ説妄ニ御信用不被為在様〔忠脱カ〕奉存候事、

一 越前在職之上者上洛被 仰出、將軍未若年之事情ニ

付、非常之時節御懸念被

思食候間、一橋後見被 仰付、

朝廷御尊崇之道於関東精々奉尽、邪正之弁明白ニ相立、

外夷之御処置天下之公論ヲ以永世不朽之明制被為定、

皇威海外ニ被為振候様罷成度、乍恐奉存候事、

右之条々至愚之身ヲ不顧、存慮之趣申上候間、厚御

評議被為尽、若御取用被為成御事ニ御座候者、一日

モ早ク

勅命被為在度御事ト偏ニ心願ニ御座候、敬白、

〔本文書は「玉里島津家史料」一六一号の一部・「名越

時敏史料」一一三頁「一粟田口宮」と同文なり〕

以上九ヶ条ノ趣、三卿一同倍々御感歎、程ナク中山・三

条ノ両卿参 内アリテ、御演説ノ趣及ヒ御手扣書ノ二通

ヲ

天覧ニ供ヘラレシニ、

叡感浅カラス、而シテ尚ホ兩卿奏

聞ノ旨アリテ、晩影ニ及ンテ兩卿再ヒ近衛家へ參殿アリテ、

奏聞セラレシ次第

叡感斜ナラサリシ趣トモ、 国父公具ニ御拝承アラセラ

レタリ、而シテ夜ニ入りテ左ノ

勅命ヲ奉セラレタリ、

42の3

〔頭注〕「浪士鎮撫勅書」

浪士共蜂起不穩企有之候処、島津和泉取押候旨先以

叡感思食候、別而於

御膝元不容易儀於発起者、実被〔朱書〕

宸襟候事ニ候間、和泉当地江滞在、鎮靜有之候様

思食候事、

〔本文書は「玉里島津家史料一」一六二号・「名越時敏史

料一」一四二頁「浪士共蜂起」・「市来四郎史料一」一

一五頁「浪士共蜂起」と同文なり〕

右御拝戴、三卿へ就テ御受ノ旨御演説アラセラレ、丑ノ

前刻頃御退殿、伏見邸へ御帰着ハ夜モ明ケタリトソ、○

本日三卿へ向テ御演説、或ハ三卿ノ御尋問等ニ對セラレ

御答弁ノ次第、実ニ確然タルモノニテ、三卿モ意外ニ出

テ驚愕セラレタリトナン

其事実ハ大山格之介・磯永弘卿カ書ニ詳カナリ、○御手扣及ヒ九ヶ条ノ趣或ハ本日各卿ト御論語ノ趣漏レ聞ヘ、悉ナラ感稱シ、中ニモ第六條中幕役共違

勅之趣有之候者速ニ弁責仕候様云云ノ御文意、真ニ寛猛兩端ノ意文外ニ溢レタリト、或ハ大名二三家へ御内、勅云云ノ趣ハ、公明盛大毫毛御私心ナキヲ殊ニ感服セシコトナリキ、或ハ幕府ハ種々ノ街説ヲ聞キ恐懼憂慮セシニ、公武御合体云云ノ趣ニ、ハ稍々安ンスル旨アリシトソ、

43

〔頭注〕「御滯京」

○四月十七日、御滯京ノ 勅命ヲ蒙ラセラレタルニ依リ、

未ノ下刻頃伏見邸ヲ發セラレ御上京、近衛家へ御參殿、

而シテ錦街ノ藩邸ニ入ラセラレ、本日ヨリ御滯京アラ

セラレタリ、○昨十六日御建言ノ如ク閣老久世大和守

御召ノ旨、本日伝奏ヨリ所司代酒井若狭守へ達ラレタ

リ、○此日ヨリシテ御滯京、尚ホ御心ヲ竭サレ、

朝威興復ノ策ヲ立テラレ、從駕ノ輩即チ小松・大久保・

中山・堀等ノ者ヲシテ議伝ノ両奏へ献言セシメ玉フコ

〔伊地知貞馨〕ト数回ニ及ヒ、公卿方ニハ幕威ニ恐懼セラレ、決行遲

寛ノ事ノミ多キカ故、 国父公ハ機會ヲ過ランコトヲ

憂ラルコト又寡カラス、実ニ御苦辛一方ナラサリシト

ソ、○如此至公至明ナル御献言アラセラレ、

天意ノアル処アルニ尚ホモ浪士等ハ我意ニ募リ暴動ノ兆

アルカ故、奈良原喜左衛門・海江田武次ノ兩名ヲ態々大坂へ差下サレ懇諭セラレシニ、面ニハ承服ノ答弁ヲナセシト雖モ、其拳動甚タ曖昧ニシテ 御安慮ニ至ラセラレサルカ故、重テ大久保一藏ヲ下坂セシメ、懇々尊意ヲ示サレ、妄動スルコト勿レ、臨機指揮セラルノ時アルヘキノ趣ヲ以テ丁寧反復論サレシニ、敬服ノ旨ヲ述ヘタルニ由リ、軽忽ノ動作ニハ及フマシト稍 安慮セラレタリシニ、豈凶ランヤ、遂ニ同月廿三日ノ始末ニ及ヒタリ、

44

○大島三右衛門

〔頭注〕大島南島論居 旧名西郷吉兵衛、善兵衛又ハ菊池源吾又西郷吉之助、後隆盛、去ル安政六年九月、京都清水寺ノ僧月照ト投海ノ後、幕府へ憚リ菊池源吾ト変名シ、大島ニ塾居ヲ命セラレタリ、其時自ラ大島三右衛門ト改メタリ、 国父

公御発駕ニ先チ浪人鎮撫ノ命ヲ受ケ、京坂ノ間其他上京ノ途次各所ニ於テ命ニ背シ、却テ諸浪士ヲ煽動シタルニ依リ、浪士等ハ倍々蜂起セリ、茲ヲ以テ 国父公御怒リ、汽船ヲ以テ下魔スヘシト令セラレ、而シテ徳島ニ謫シ、半年許ニシテ沖永良部島ニ遷サレタリ御発駕ノ前頃

ヨリ浪人等京摂ノ間ニアリテ、 国父公ノ御着坂ヲ待チ暴挙ノ企アリ、故ニ大島ハ予テ浪士輩ノ間ニ名望アルヲ以テ、御発駕ニ先チ鎮撫ノ為メ出サレタリ、然ルニ命ニ反シ却テ浪士輩ヲ煽動シ、其ヨリ浪士等一層勢力ヲ増シタリト、浪士等ハ有名ナル大島カ先発シ、其言ヲ 国父公ノ 尊旨ト信スルニ至レリ、素ヨリ 国父公ノ 尊旨ハ御手拍書ニ記サレタルカ如ク、毫髮モ他意アラセラレサルハ多言ヲ要セス、茲ヲ以テ御怒リ一方ナラス、直ニ下魔スヘキヲ令セラレ、而シテ寛恕ノ処分ニ出テ流論ノ刑ニ処セラレタリ、此際堀次郎ナル者ハ御着坂ノ前頃江戸ヨリ大坂ニ出、予テ奉命ノ旨ヲ以テ近衛殿其他堂上方ニ出入シ、中ニモ岩岩具視脚ニ就テ謀ル処アリ、大島ハ浪士ト謀リシカ故、堀カ所論ト水炭反対セリ、然リト雖モ、堀ハ 国父公御着坂ノ上 尊慮ヲ以テ決セラル、処アラント浪士輩ヲ大坂ノ外邸ニ入レ、數日ノ間藩費ヲ以テ給養セリ、其中ニ我藩士兩橋口・柴山等江戸邸脱走ト雖數名モアリ、而シテ御着邸、其頗末ヲ聞召サレテ御怒リ一方ナラズト雖モ、寛大ノ旨ヲ以テ脱走人等ハ謁見ヲモ允サレタリ、元來本藩ノ法規ニ、御目見以上ノ士脱走セシ者ハ搜索シテ屠服セシメ、其子弟・家族ハ士籍ヲ剝脱スル旧古ヨリノ法律ナリ、此レ數百年來恩養ヲ受ケタル主人ニ背キ、不忠不義ナルヲ以テナリ、然ルニ今因脱走ノ輩ハ藩則ニ違背スト雖モ、其志 尊王愛國ノ二ニ外ナキヲ酌量セラレ、出格寛大ノ処分ヲ以テ謁見ヲモ允サレタリト云フ、大島ナル者モ命令ニ背違シ、上ハ 朝廷ノ 御動靜ニ関シ、下蒼生ノ苦難ニ罹レル場合ニ背命ノ挙動ヲナシタルニハ、從來ノ国法ニ照ラシテ論スルトキハ其刑甚タ重シト雖モ、大事ニ臨マレタルノ際ナルカ故、寛恕ノ一筋ヲ以テ流刑ニ処セラレタルモノナリ、○大島ニ從属ヲ命セラレタリ村田新八・森山新藏永同タ汽船ニ下テ下魔ヲ命セラレ、村田ハ喜界島ニ、森山ハ大島ニ同シク流罪ニ処ラレタリ、森山ハ山川港内ニ於テ屠服シ死シタリ、○如此処刑セラレタリト雖モ、大島ハ国老中ニ於テ尚ホ顧慮スル旨アリテ、蟄居ノ地ニモ警視ノ吏ヲ置キタリ、流刑ノ者ニ警視ノ者ヲ置キタルノ例ナリト雖モ、天下ノ一大事ニ関スル時ナルカ故至念ヲ加ヘタルモノナリ、○村田ハ高橋某カ二男ニシテ村田十藏カ養子ナリ、森山下町ノ商賈森山与兵衛カ長男ニシテ、初メ東園ト称ス、医業ヲ為ス、近頃医ヲ罷メテ新藏ト改メタリ、父某士分ニ昇級ス、金満家有名ノ者ナリ、兩名俱ニ銅臭家ナリ、當時ノ説ニ、大島及ヒ大久保利通等ハ元來貧困裕ナキカ故、

国事ニ奔走スルノ経費ハ悉ナ森山カ支弁セシト云云、○大島ハ堀ト議論協ハス、浪花ニ於テ大ニ論スル旨アリシト、堀ハ二三年前ヨリ密命ヲ奉シ京師・関東ニ往來周旋シ、公武御合体内ヲ治メ、而シテ後外治ノ論ニシテ、即チ 国父公ノ 尊旨ニ外ナク、大島ハ論旨激烈、討幕鎖攘ノ主義、小松・中山・大久保等ハ素ヨリ 尊旨循守ノ主論ニシテ堀ト同義ナリ、茲ヲ以テ堀ハ大島ト反論、遂ニ不睦ヲ生シタ、

45 ○大山綱良四月二十二日友人某ヘノ報知ニ曰ク 私報ナリト雖モ當時ノ

形勢ヲ知ルニ足ルノ報ナ、ルカ故、参考ニ記載ス、

45の1

前文略ス、〔内奉脱カ〕極内申上候、去ル十六日晝七ツ時、伏見御

発館、日ノ出前錦御邸ヘ被為人、四ツ時分陽明殿ヘ御

参殿、于時御同会ノ御方々ニハ、第一左府公・正親町

三条公・中山公ニテ、終日御密談、其内右御方々参内

有之、夜入り御下り、又々陽明殿ヘ被為人候、但シ、

泉公ハ御参内無之候、夫ヨリ亦々御密談被為在、乍漸

夜入過ヨリ御酒・御吸物等相初リ候、当日ハ種々ノ御

議論ニテ、 泉公余程威猛高ニナラセラレ御論シアラ

セラレシニ、中山・正親町〔朱書〕二三条等暫時ハ恐怖、肝ヲ

被冷候由ニ岩倉殿ヨリ堀ヘ御密話ノ由、然シテ後、其

旨 泉公ヘ堀ヨリ申上候処、優柔不断ノ向ナルカ故薩

摩口ニテヤリ懸ケシ故、些ト嚴シク聞ヘシナラント御  
晒ナサレシ由ニ御座候、実ニ英邁ニ被為人、難有事ニ  
御座候、

一夜ニ至リ、弥必死ノ御覺護ニ御勇断被為在シニ、偕テ

七

叡感〔之カ〕 思食之趣被仰出、実ニ前代未聞ノ御盛筵、御家ニ

於テハ殊更帝室ノ為メ、斯ク御尽ハ初メテノ御事ニテ

御同然難有次第、其細事ハ疾クニ御聞及ト奉存候ニ付

不申上候、

一十六日御参殿、当夜直ニ御滞京之御内

勅ヲ蒙ラセラレ候処、再三御辞退被仰上候得共、

天意決然御聞受無之、不得已御受被為在候由、尤モ

天意ノ在ル処、古元弘ノ楠公ト同シク〔股肱カ〕肱股ト御頼ミ 思

食シタルハ、三百有余候ノ中只我カ一藩ニ止リタルハ、

順聖公ニ初リ、亜テ御舍弟 泉公ノ御英邁ニアリ、実

ニ我輩迄モ錦ヲ着テ都下ニ肱ヲ張ルノ思ニ御座候、

一長州ノ若君長門守定広 今元徳、来ル二十六日着京ノ賦ナル由、

長州人モ大坂ハ勿論、当地ヘモ多人数出掛居、尤、先

日泉公御上京相成候処、彼ノ永井雅楽ナル者早々関東

へ走下り候由、但シ此永井ハ大奸ニテ候、然シナカラ  
此度ハ堀ナト、能ク打合セタル(懸カ)赴有之候由、周布ナト  
モ先達テ再勤シ関東へ下り、爰許ヘモ暫時罷居候由、  
一長州ハ我公此ノ御盛挙ヲ甚タ羨シク存候由、若着京ノ  
上ハ如何ナル挙動ヲ初メラルヘキヤト、高シ卑シト其  
期ヲ相待罷在候事ニ候、

一十七日ニハ閣老久世大和守早々上京致候様所司代ヨリ  
早打ヲ以テ申越シ候由、関東ノ騒動一方ナラスト相聞  
得、実ニ笑フニ堪ヘス候、此回ノ事ニハ所司代大ニ相  
弱リ、先日ヨリ度々此ノ御方ニ使者ヲ遣シ、何篇御互  
ニ御熟談申上度ト頭ヲ下ケテ申越候程ノ御勢ニ成り立  
チ申候、

一去ル十七日再ヒ御上京以来、洛中ノ評判ハ弥幕勢ト兵  
刃ヲ接ルト申囃シ、大騒キノ形況筆紙ニ難尽候処、此  
御方ニハ泰然トシテ穩順ナルニ付、此両日ハ鎮靜致シ、  
追々御趣意ニ感シ敬慕ノ向ニ御座候、

一十六日暁、伏見御発館之刻、伏見奉行ヨリ相図ノ狼煙  
ヲ揚候処、所司代ハ取ルモノモ取敢ヘス直様二条城へ  
逃込ント致候処、御城番門ヲ不開、終ニ不入付候由、

先日ヨリ彼は伏水辺へ間諜ヲ入レ置キ恐怖ヲ懷キ居候  
折柄、暁時ニ御発館ニ付キ、弥兵端ヲ開カル、ト相心  
得候半乎、其外笑ニ不堪事ノミ多ク有之候、

一九条殿下ハ近日所司代ト不和ニナラレタル由、是モ例  
ノ長袖公家ノ臆病ヨリ全ク身構ニテ、遂ニ隙ヲ生シ候  
由ニ相聞得候、殿下ニハ当春以来一度モ 参内ハ無之  
候由、先達テ初メテ所司代方并町奉行付人数ノ守衛付  
キニテ 参内相成り候由、内実ハ御辞職ノ御願ニ相成  
候由、是迄幕府ト奸ヲ同フセラレシ罪科少カラス、明  
白ニ御糺明御打落シ相成ルハ疑ナシト被存候、

一岩倉殿ハ是迄色々ノ説アル方ニテ疑ノ事モ有之候得共、  
此度ニ相成り堂上方ニハ弥随一ノ御方ニ御座候、大原  
三位殿モ同様、先ツ此ニ方ヲ堂上方ノ人物ト相聞得候、  
一京都并九州辺ノ諸浪人ハ都テ大坂御屋敷へ今以テ御構  
ヒ、江戸ヨリ亡命ノ人数モ其通ニ御座候、菱刈(天脱カ)夫之介菱刈全  
大坂迄出掛ラレ候処、些ト不都合ノ向ニテ今ニ大坂へ  
滞在ニテ、近日蒸気船江戸へ廻船便ヨリ帰戸ノ賦ニ御  
座候、

一安藤モ当月ハ御用番(对馬守)之処、先日御役御免、

溜詰格へ被仰出候由、

一追々有志ノ諸侯方モ出京相成ル向、未タ御滯京御奉命

以来鎮撫一篇ニテ何モ表向ニハ不相發、毎日〳〵公卿

方夜分ニ御所ヨリ御下リ相成候由、誠ニ

叡慮之振ヒ立候事ハ筆ヲ取ルニ無限候、右次第ニ成立候

モ、全ク 泉公ノ御英斷ヲ以テ

聖慮モ初テ明ニ顕レ、

皇国ノ機運盛ナルヘキ基ヲ開カレタルニハ、 順聖公之

尊靈嚙ソ御満足ト奉恐察候、中略ス、今晚酔後ノ乱筆

御推覽可被下候、云云、

四月二十一日夜認

大山拜上格之助

二白、此節ハ堀次郎ニハ大配慮、別テ周〔朱書〕旋〔朱書〕〔尽力ニ御

座候、四十人〔編者曰、四十人トハ、暴発連中ヲ云フ乎、外ノ人数ハ大坂ヘ滞在、

氣之毒ナル事情ニ有之候、此ノ入組ノ訳ハ後音ニ委細

可申上候、岸良〔兼善〕近々出足ニ付、御聞取モ可有之、

岩下氏ナトノ一列今日迄モ着無之、日々相待候、ケ様

ノ時アノ様遠慮アル人恋シク存候、中略ス、彦根モ鞍

馬口ト申ス処ヘ木俣〔彦根藩 門業〕惣裁ニテ五百人余出張ノ由、

先月二十六日関東ヨリ出張アルヘキトノ使者到来、二

十八日国許ヨリ出發ノ由、其外幕兵追々入京ノ趣ニ相  
聞得申候、

〔本文書は「市来四郎史料一」一三二頁「極内書奉申上候、  
〳〵」と同文なり〕

此ノ書牘ハ時ノ事実或ハ一般ノ形況ヲ知ルノ一端ナルカ  
故、参考ノ為メニ記ス、大山ハ組方吟味役ノ職〔組頭、顧問ノ如  
キ職掌ナリ、  
ヲ以テ從駕ノ員ニアリ、

46  
〔頭注朱書〕「此条誤伝ナリ」  
○福岡侯ハ定規御參府ノ途次、木屋之瀬駅ニ於テ

〔貼紙〕御朱書ノ如ク誤伝ナル故消ス」  
国父公ト御行逢アラセラレ、 国父公ハ馬関ヨリ汽船

ニ召サルノ御予定、福岡侯ハ中国路ヲ取テ御旅行アリ

タリトソ、

〔頭注〕「長州世子長門守殿初メテ藩邸ヘ来向」  
○此時ニ方テ長州ハ藩論不定党派分裂、永井・周布等ノ

輩ハ要路ニ在テ幕吏ト心ヲ合セ、開港

勅許ノ事ニ周〔朱書〕旋〔朱書〕シ、公〔朱書〕卿〔朱書〕方ノ間ニ献言シ、加之 国

父公御出府ノ場ニ至リテハ殊更幕府ト親密シ、世子長

門殿下国ヲ促シ、京都ヘ立寄り我カ藩ノ挙動ニ注目ス

ヘキノ密旨ヲ奉シタリト、然ルニ又一党派勤

王鎮攘或ハ討幕主義ナル、則チ完戸九郎兵衛・久坂玄瑞〔通武〕

其外幾多ノ輩ハ国老福原〔元卿〕越後ト論ヲ同フシ、長門守殿

ヲ滞京セシメ、国父公ト同シク

勅命ヲ奉セントシテ遂ニ永井等ヲ擯斥シ、福原等長門守

殿ヲ奉シ中山・正親町・岩倉・大原等ノ諸卿〔朱書〕ニ就テ

切迫願、遂ニ

勅命ヲ奉シタリ、其頻請ノ挙動稍脅迫ニ出テ、豈ニ薩藩

ノ下風ニ立シヤ、或祖先元就ヲ初メ尊

王ノ事蹟ヲ挙、公卿方ヲ動シタリ、茲ヲ以テ

朝議大ニ困難ニ涉リ、若シ請フニ任セラル、ニ於テハ、

両雄双ヒ立ツノ勢ニ立到ランコトヲ恐レ、又長州ノ請

フ処ヲ允サレサルトキハ、一大藩ノ氣嚮ヲ失ハンコト

ヲ慮リ玉ヒ、

叡意甚タ煩ハセラレタリト、然ルニ岩倉殿ノ意見ヲ以テ

密カニ此ノ趣ヲ 国父公ニ告ケラレシニ、

国父公此由聞食シ驚カセ玉ヒ、臣素ヨリ一毫ノ私意ア

ルコトナシ、亡兄 斉彬遺命ヲ守リ、国体ノ日ニ衰頹

ヲ憂ヒ悠々傍觀ニ忍ヒス、一家一身ノ存亡ヲ顧ミス上

京シ、上ハ

朝廷ノ御為メ、下蒼生ノ困苦ヲ救ハント恐多クモ犬馬ノ

勞ヲ尽サントス、然ルニ如此報国ノ意アル者アルハ喜

ヒニ堪ヘサル処ナリトノ趣ヲ述サセラレシニ、岩倉殿

大ニ感嘆セラレ、而シテ奏

聞ニ及ハレシニ至誠ノ真衷

叡感斜ナラス、因テ長州江モ同シク

勅命ヲ下サレタリトソ大山綱良・磯永弘卿カ書、  
臘中記スル処ニ拠ル、

旧邦秘録五編文久二年之一終

旧邦秘録五編文久二年之一

草稿

明治十九年四月二日奉呈、此冊中

朱書又ハ御張札ハ都而 正二位公

御筆ナリ惣計六ヶ、  
所御添削、近衛公御書三通・

御宸翰壹通同五月廿六日拜謁、

当日被相下写取り記載ス、

47 ○四月 国父公御上洛、爾来京伏坂ノ間ニ各藩ヨリ動靜

視察ノ為メ来集セシ者寡カラス、或ハ浮浪ノ輩多ク出京シ、今迄帶刀セシ者ハ見ルモ稀ナリシ洛中、忽チ許多ノ帶刀者ヲ見ルニ至リ、実ニ世ノ變遷著シキヲ覺ヘ、從テ種々ノ街説喧々囂々虚実錯雜、信ヲ措クノ説ハ十中ノ一二ニシテ、 国父公ニハ或ハ数千ノ精兵ヲ率ヒ御上洛、

禁闕ヲ守護セラレ、而シテ攘夷鎖港或ハ幕府ノ積罪ヲ匡

サレ、若シ罪ヲ謝セス鎖攘ノ

叡意ヲ循奉セサル時ハ、征夷將軍ノ職掌罷免ノ

勅諭ヲ發セラル、ノ御計畫ナリト、或ハ閑白殿〔貼紙〕九条及ヒ

所司代ノ罪ヲ糺サレ、黜斥セラル、ノ御献言モアリタ

リト、或ハ攘夷

御親征ヲ發令セラルト、茲ヲ以テ幕府ハ近畿〔近畿カ〕ノ大小名又

ハ紀尾ノ親藩ヲシテ薩藩ヲ抑ヘシムルノ内令ヲ下シタ

リト、或ハ彦根ヲ先鋒ト定メタリト、同藩ハ復仇〔庚申三〕

為メニ直弼カ横死シタル仇トス、ノ義ヲ重ンシ、進ンテ討薩

ノ密命ヲ奉シ国ヲ拳テ出兵スト、其説街衢ニ喧シク、

日ナラス洛中兵馬ノ街ニ変スナラント、人心恟々トシ

テ枕ヲ安ンスルコト能ワス、斯ル流説ニ浮浪ノ輩ハ機

二乗シ事ヲナサントスル者モ又寡カラサリシトナン、如此流言浮説ノ喧シキモ、二百年来目ニ汗馬ノ姿ヲ見ス、耳ニ鉦鼓ノ声ヲ聞カス、鞭囊ノ世ニ突然御上洛、加之浪士ハ京坂ノ間ニ蝟集シ暴動ノ形況ヲ顯ハシ、国父公ヲ將師ニ仰キ、事ヲ揚ント稍揚言セシカ故、街説流伝虚実判然タラサルモ又理ナシトセス、

48 ○四月二十日ヲ以テ從駕人員ノ中ニアリシ磯永弘卿、友

人某ヘ送リタル書牘、當時ノ形勢概略ヲ知ルノ一端ナ

ルヲ以テ、参考ノ為メ左ニ記ス、

前文略ス、各藩浪士又ハ我カ藩士多人数ニノ丸公〔国父公ヲ云フ〕

48の1

勤 御着坂ノ前以テヨリ大坂ヘ屯集致シ御着坂ヲ待チ奉リ、

勤

王ノ大旗ヲ揚ラレンコトヲ迫リ奉ル企ニ及ヒ候処、堀氏

次〔貼紙〕「伊地知 貞馨」江戸ヨリ伊集院次左衛門ト一緒ニ下坂相成

リ、関東ノ事情旁ヲ以テ議論ニ及ハレ候由、中々承服

ノ向ニ無之、其上西郷氏ハ暴人等ト同意ニテ候由、夫

故堀氏ノ論ト合ハス、甚タ不工合ノ向ニ御座候、柴山・橋口ハ私ニモ朋友ノ事候ニ付、着坂直二面会仕候処、全ク干戈ヲ動カシ迅速ニ事ヲナサ、ルトキハ、機會ヲ失フトノ計策ニテ、私ヘモ其事ニ預リ候様切ニ申勸候ニ付、其座ニテハ程能ク申答、後刻大山氏綱良ヲ云フヘ

内談ニ及候処、先ツ其事ハ早シ、迎モ彼ノ人々カ考通ニ味クハ參ルマシク、吾レヘモ其論ヲ申シタレトモ笑フテ置ヒタトノ事ニ御座候、私ノ考ニテモ、二百ヤ三百ノ人数ニテ斯ク事高ク評判囃シ立候上ニハ、大坂城代・伏見奉行・所司代等ノ人数少クモ七八百ト千人ハ有之上、随分手当モ致居候説モ有之、夫レニ向テ二三百ノ人数カ、必死トハ申ナカラ銃砲モ持タス、短兵ニテハヨモヤ仕込シ候儀者無覺束ト存候、又岸良ヘ丁度承リ候ニモ、中々

御趣意ハ御遠大ノ趣ニ御座候間、柴山ナト馬鹿ナ事ヲ為サブル様申スヘシトノ事ニ候間、手紙ヲ残シ私ニハ從駕上京仕候、然ル処去ル十六日陽明殿へ御參殿、深更ニ及迄近衛家其外有志ノ堂上方中山殿・三条殿ナト、

御打ち合セ、

奏聞ニ及ハレ候趣アリテ別紙通りノ

勅命ヲ蒙ラセラレ、同十七日御上京、御滞京御膝元ノ御守護ト相成リ、誠ニ前代未聞ノ御威光ニテ徹々タル私共迄モ冥賀冥加ガ之至リ、外方市中ノ評判ハ全ク將軍家ノ上ニアリテ鬼神同様奉尊敬候由、其上

朝廷ニモ御先代 順聖公以來此度ニ至リ御忠誠ヲ貫カレ

タルニ依リ、速ニ

輦下へ御引留ノ

勅命ヲ下サレタルハ、実ニ

皇威ノ輝ク基ト奉存候、此後御尽力ノ程思ヒヤラレ申候、右通ノ御都合ニ相運ヒ候ニ付、此上ハ後日ノ模様次第ニ御下知可有之候ニ付、兼テノ志ハ其時ニ述申スヘクト奉存候、今ノ勢ニテハ少シモ申シ分ナキ御都合ト相成リ、御成功ハ無疑ト奉存候、柴山・橋口ナトハ大坂へ被残置候、氣ノ毒ナル次第ニテ、私ニハ定テ臆病者ト見限ラレタルニ候半、然シナカラ纔ノ人数ニテ其上命令ニ乖キ、十人ヤ二十人荷担致シ候トモ、迎モ功ヲ遂ケ候見止ナキノミナラス、

上意ニ妨ヲ為スハ恐アリ、又勝敗ハ兵ノ多少ニヨラスト

ハ存シ候ヘトモ、幕勢ハ器械モ備ワリ主客ノ勢モ有之候ニ付、勝運ヲ得候トハ存ラレ不申候、幕府ヨリ彦根・大垣・郡山・膳所、其外（畿内カ）幾内ノ大小名ハ此内ヨリ内達シテ、京伏坂ノ間ヘ夫々人数モ出張ノ由、（元禄カ）元録ノ赤穂義士カ夜討ノ段トハ雲泥ノ違ト奉存候、又我カ公ノ御名望ハ將軍ノ上ニ出テ、古ヘ楠公同様ニ奉仰慕、朝廷ニモ同様頼ミ、思召ストノ由ハ市街ノ婦女子迄モ唱候ニ付、至誠ノ貫カレタル処ヨリ干戈ヲ動カサレステ、

皇威輝クノ御尽力無疑ト奉存候、御同慶此事ニ奉存候、

又江戸表ノ騒ハ一方ナラストノ評判ニ御座候、奸吏ノ動揺思ヒヤラレ候ト申ス事ニ御座候、諸藩ニテ奮發致候者長州ノミニテ其外ハ悉ク二ノ足ヲ踏ミ、或ハ島津家モ此度切りニテ惜シキ大藩モ禿レニ無疑トノ評判モ有之由、長州モ国論一定不致、党派三四分シ、其中ニ有志者ハ勢微々ニシテ、要路ノ処ハ幕府ノ手先キニ相成リ、此御方ノ御出府ニ目ヲ付ケ取抑ヘノ内命ヲ受ケ、近日御嫡長門守様着京ト申ス事ニ御座候、又熊本ハ全クノ幕論ニテ、一兩年前ヨリ我カ藩ノ抑ヘヲ心懸ケ居

候由、井伊ノ一件後幕ヨリ熊本人ヲ仕ヒ間諜ヲ入レ候由、日州高岡辺ニハ種々ノ者往来致ス由ニ相聞得候得共、今ニ相成リ何程間諜充滿ストモ憂フヘキコトニ無之候、又西郷氏ハドウ云フ所ヨリ乎浪士ト全ク同論ニテ、干戈ヲ動スヲ主トセラレ候由大山氏モ怪ミ居ラレ申候、柴山等モ必ス近キ内ニ勢ノ及ハサルヲ覚リ申スヘク、何分要路ノ人々ト私憤モ少カラサルヨリト申ス説ニ御座候、此ノ時宜ニ運ビ立チ候上、私意ヲ狭ミ天下ノ大事ニ臨ムハ志アル者ノ為ス処ニ非ラスト、少シハ手強キ書状ヲ送り置キ申候、先ツ出立後今日迄ノ形行太略申上候云云、

四月廿日

磯永拜

二白、朋友トハ申ナカラ氣ノ毒ナルハ柴・両橋（柴山・両橋口）ヲ云ノ三人ニ御座候、是迄心勞シタルハ御上京ニ相成ル迄ノ事ニテ、爰ニ相成候テハ十分ノ御運ヒナルハ言ハスシテ明ナルコトニ御座候、去ル十六日陽明殿御取次ヲ以テ御建言モ数ケ条ノ由、一々意表ニ出タル、斷乎タル御事ノ由、追テ手ニ入レ可差上候、

49 ○柴山・両橋口・有馬等ト結合ノ浮浪暴動ノ主謀者ハ、

平野次郎・清川八郎〔朱書〕・真木和泉・小河弥右衛門〔兩脱カ〕・

田中河内介等ノ輩ナリ、清川ハ出羽国秋田ノ豪農ニシ

テ少シク才識アリ、元來討幕鎖鑊ヲ主張シ、我 国父

公ハ献言書ヲ捧ケタリ、其文左ノ如シ清川ナル者ハ、出羽

劍法ヲ学ハンカ為メ万延元年ノ頃江戸ニ出、擊劍家千葉英次郎方門

ニ入り、後テ学ニ志シ昇平館ニ入学シタリ、為人傲謾粗暴ニシテ礼

義ヲ知ラス、故ニ同寮ノ人之ヲ斥ケテ、談ヲ俱ニスル者モナカリシ

ト云フ、○伏見寺田屋ノ事アリテ後、幕府新徴組ノ隊長トナリ、暴

行倍々甚シク、或ル日江戸麻布一ノ橋辺ニ在ル儒、

者金子与三郎ヲ訪ヒ、屢途暗殺セラレタリトシ、

49の1  
〔頭注〕「清川八郎建言」  
側聞執事意欲使人窺

聖意、然後從事矣、某窃懼、執事不察

聖意之所在及各邦義士所以依頼執事之情、遂以失時機

也、故敢以書陳之、某聞処非常之變者、必有非常之

挙、然後有非常之功今也、執事之挙実有超越百世之

氣、故各邦義士、以身委于執事、執事乃惠然居之客

館、使皆安其心、以待執事之動止、故衆皆知執事有

決挙之心、受命而從其令也、今若執事公然奏之

天闕、不量情偽、而一欲以

聖決從事、某窃危之、何則

天子穆在深宮、左右近親皆姦人也、饒有〔雖カ〕

聖旨從為隱晦、会不能有自〔前カ〕

宸衷出也、是以某輩僅所以得窺

聖旨者、唯有 御製而已、各邦義士相忍旋延至於此者、

抑有待於執事乎、然執事不察其情実、公然以窺

〔天闕カ〕天決為事、以某計之、

天意決不可窺、

勅命決不可得、苟不然則必為姦人所誣、而其所以尽力

者反為禍於

皇家之基也、願執事熟計之、断然從事、以称于天下万

民之望、則幸甚、某聞、但大義者不累小嫌、故能奏

大功、今執事之挙真可謂天下之大義矣、

聖旨既已昭明、天下人情、既已帰向、何可容疑邪、依

違不発、若使姦魁横生其心、狭

天子而令幕府、正其犯上之罪、則不唯失

神器、執事將何所辞邪、願執事断然從事、速斬姦魁、

然後奉

勅命而令幕府、則凡百之事、唯所欲為、回天之偉勲、

亦自此始矣、某雖不佞、多年周旋於国事、聊有關於

此拳、往又姑受惠於貴邸、義雖不畢也、情自不可疎、故敢呈書、唯願執事採扱之、〔冒瀆カ〕昌濱尊嚴恐懼無已、文久二年壬戌初夏清川正再拜頓首

又同シク連結ノ浪士ニ筑前福岡藩平野次郎目見以下ノ者ナリト云フナル者モ同シク建言ス、其論旨清川ニ異ナルコトナク

暴動ノ論ニ外ナシ、連衡ノ曹其拳動異状ナルヲ以テ

国父公大ヒニ憂慮セラレ、上文ノ如ク海江田・奈良原

ノ両士ヲシテ懇篤説諭セラレシカトモ、兎角其動作常

ナラサルカ故、再ヒ大久保一藏ヲ以テ誠諭セラレシニ、

陽ニハ敬服ノ姿ヲ示シ、隠ニ事ヲ揚ントシテ種々謀計

詐術ヲ以テ、遂ニ四月廿三日我カ藩士柴山愛次郎・橋

口壮介・橋口伝藏・有馬新七・田中謙助等ヲ初トシテ、

浪士田中河内介・清川八郎・平野次郎・真木和泉守

〔貼紙〕後久留米・水天宮社司」・小河弥右衛門等都合八十余人、刀・槍・

銃器ヲ提帶シ、数艘ノ川舟ニテ京師ヘ向テ発向セリ

此人數ノ外ニ、長州藩士予テ連合ノ徒數十名モ同日発向ノ堅約ヲナ

シタリシニ、如何ナル議ニ変シタリケン、伏見寺田屋ノ始末ニ及ビ

一人モ着伏セサリシトナン、柴山等ノ徒大坂出発ノ前刻迄ハ後舟ヨ

リ一同発舟スヘシトノ堅約モナシタリト、或ハ柴山等ノ徒八十余名

カ乗舟ハ皆長人ノ手ヲ以テ雇入レタリトソ、如此稍巨魁ノ場ニ立テ百

ハ、當時ノ世評ニ、其詐謀ヲ惡ミタリ、而シテ八十余名ノ暴徒ハ同

日申ノ半刻許リニ伏見京橋詰寺田屋ト云ヘル旅店ニ就キ、長人ノ来

着ヲ待チ或ハ糧食ノ用意ニ及ビ、〔正〕○高崎佐太郎正ナル者ハ、

夜襲暴発ノ計画ナリシトソ、〔風〕暴発ノ趣注進ノ為メ大坂ヨリ馳セ登リ、事ノ次第ヲ言

上セシニ、国父公大ニ怒ラセ玉ヒ、過日来懇篤ノ説

論ヲモ顧ミスシテ暴謾ノ拳動奇怪ノ至、殊ニ鎮撫ノ

朝命ヲ奉シタル上ニ、我カ藩人ヲ初メ

闕下ニ於テ干戈ヲ動スニ至ルトキハ我カ罪輕カラスト、

直チニ嚴重鎮定スヘキ命令ヲ下サレタリ暴徒等カ其日ノ計画ハ、伏見ニ

於テ予テ固結ノ人員会合シ、二手ニ分レ両道ヨリ洛中ニ突出シ、一

手ハ関白九条殿ヲ襲ヒ、一手ハ所司代酒井若狭守ヲ討チ、而シテ禁

内ニ出テ幕府ノ罪ヲ算ヘ、討幕ノ令ヲ天下ニ布カレンコトヲ願願ス

ヘシ、又一手ハ錦街ノ我カ藩邸ニ出テ事実ヲ陳謝シ、国父公ノ御

参内ヲ促シ奉リ、天子ヲ狭シテ討幕鎮撫ノ勅命ヲ申、尋テ藤井

下シ玉ハシテ奏聞セラル、等ノ計画ナリシトソ、〔貼紙〕良節「実名札スベシ」モ大坂ニ在テ此ノ由ヲ聞テ馳セ

登リ、企テノ趣或ハ長州藩士モ許多応援ノ約ヲ定メ、

剩ヘ上伏川舟ノ費用等悉ク長人ノ支弁スル処ナリシ趣

ヲ言上セリ、茲ヲ以テ其筋ニ於テハ直チニ鎮撫ノ為メ、

從駕人員ノ中ヨリ敢勇ノ者八名ヲ選抜シ派遣セラレタ

リ、其人々ニハ大山格之助綱・森岡善助昌・奈良原喜

山口金之進〔直秀〕〔貼紙〕「実名糺スベシ」・鈴木昌之助〔実名糺スベシ〕

勇右衛門二男、以上八名二命セラレタル趣ハ、暴徒ハ必ス伏見・鳥羽ノ両道ヨリ洛中ニ突入スヘシ、依テ此人入スヘシ、二道二分レ、途次ニ於テ 国父公ノ尊旨ヲ説明シ、若シ承服セス通過セシトセシトキハ臨機ノ処分無論タルヘシ、洛中ノ騷擾ニ至ラシムルコト勿レトノ趣ナリシト、八名ノ輩ハ頗ル劍槍ノ業ニ達シタルノミナラス、忠勇ノ聞ヘ殊更ナル人々ナレハ泰然トシテ奉命セリ、又上床源介ナル者モ同シク從駕ノ員ナリシカ、八名カ奉命ノ由ヲ伝聞シ、頻請跡ヲ慕フテ途中ニ会シ、鎮撫ノ人数九名ニ及ヒタリ、此時高島一次・平山龍助ノ二名モ此ノ事ヲ伝聞シ、鎮撫ノ命ヲ奉セント大久保・中山等ニ面接ヲ乞フト雖モ、国父公ニ謁シテ何等カ繁忙遅刻ナルカ故、斯ル大事ニ臨ンテ命ノ下ルヲ俟チ機ヲ失ハンハ甚タ遺憾ナリ、寧ロ乞ワスシテ発向シ、後日命ヲ俟タサルノ罪ニ伏スルニ若シト断然馳セテ伏見ニ下リ、暴徒ノ所在ヲ聞得テ寺田屋ニ到リシ時ハ、早ヤ暴徒伏誅ノ後ナリシトソ、故ニ鎮撫ノ人々ト俱ニ負傷人ヲ看護シ、或ハ伏誅ノ輩カ死骸格護等ニ周旋セリト、平山ハ山口、○八名ノ輩カ負傷ヲ看護シ、京師ノ邸ニ引キ揚ケタリトソ、

発程ノ際、其筋ノ役員ヨリ暴徒ハ多勢ナリト聞ヘタリ、

説諭ニ服セサル時ハ臨機ノ処分勿論ナルカ故、応援ノ人数ヲ出サント云フ、八名ノ人々謂ク、斯ル一大事ノ使命ニ多数異口区々ノ論談ハ却テ害アリ、敢テ多数ノ人員ヲ要セス、役員等謂ク、然ラハ足輕五六十人モ付属セシメント謂フ、八名謂ク、我曹必ス命ヲ辱メサルヤ疑ナシト謝絶シテ、両道二分レテ下伏セリ、而シテ役員等ハ八名ノ人員ニテ覚束ナシトテ、窃ニ千本通り等ノ各所ニ数十ノ人数ヲ埋伏セシメ応援ノ予備ヲナシ、而シテ錦邸モ不虞ノ嚴備ヲナセリ、○上文ノ如ク長州

藩士モ俱ニ暴発ノ形勢ナルカ故、堀次郎ヲ使者トシ彼藩士モ暴徒ノ中ニアリ、其事情在邸ノ吏員聞知セリヤ否ヤ、或ハ邸中ノ動靜如何ン視察ノ為メ遣ハサレ、留守居完戸九郎兵衛及ヒ久坂元瑞ニ面接シ、我カ藩邸ニ聞キ得タル趣ヲ演説セシニ、兩名ハ驚愕、初メテ聞キタル形容ヲナシタリト、其動作怪ミヲ容レサルヲ得サルカ如クナリシトソ、而シテ彼レ謂ク、警備ノ人員不足モアラハ加助スヘシト云フ、堀曰ク、否、警備ノ人員不足ナルヲ以テ来向セシニ非ラス、貴藩士暴徒ノ中ニ在リトノ説ヲ聞テ、虚実如何ンヲ問ハンカ為メノミナリト云テ帰途ニ就キ、邸中ノ様子ヲ窺フニ甚タ常ナラス、各所ニ挑灯ヲ点シ、或ハ戎具ヲ着ケ、或ハ火車羽織ヲ着シタル者ノ立廻レルヲモ目ニ触レタリト、是ニ由テ藤井カ大坂ニ於テ聞知セル趣ト比考スルニ、甚タ怪シキヲ覚ヘタリトソ、○寺田屋ノ事アリシ後、暴徒左袒ノ曹カ説ニ由レハ、藤井カ聞キ得タル説ハ虚妄ニアラス、上文ニ記シタル如ク、後舟ヨリ上伏シ、而シテ部署ヲ定メ各所ニ突進スヘシトノ約ナリシト、然リ而シテ大坂ヲ発舟セシヤ否ヤヲ弁スルニ由ナク、寺

田屋ノ顛末ニ及ヒタリ、當時ノ説ニ、上伏ノ暴徒発舟ノ後チ長人ハ各所ニ潜伏シ踪跡ヲ暗マシ、我カ藩士等カ計画ノ成否ヲ傍觀シ、而シテ後又為スコトアランノ詐謀ヲ施シタルヤ必定ナリト云云、此說中ラスト雖モ又扨ナキ妄想トナシ難シ大山綱良・磯水弘卿カ書牘其他、幾多ノ報知大同小異ノ説ナリ、而シテ鎮撫方奉命九名ノ人々ハ申ノ中刻頃京師錦街ノ藩邸ヲ発シ、二手ニ分レテ伏見邸ニ到リシハ戌ノ刻二近ク當時伏見藩邸ニハ本田弥右衛門在邸、事ヲ宰シタリ、暴徒等ノ所在ヲ搜索セシニ、京橋詰寺田屋ト云ヘル酒樓ニ屯集セリト聞ヘタルカ故、暴徒等ノ騷擾ヲ慮リ穩靜ナルヲ要シ、奈良原・道島・江夏・森岡ノ四人異本ニハ奈良原・森岡・江夏ノ三名ト記セリ、寺田屋ニ至リ家人ヲ喚ンテ、薩州ノ有馬二面会センコトヲ伝達セシム、〔頭注〕「伏見寺田屋ニ於暴徒伏誅」有馬等ノ徒ハ二階ニ在テ之レヲ聞キ、答詞モナサス安臥シナカラ謾言シ依然タリシトソ、故ニ四名ハ止ムヲ得ス二階ニ登リ見ルニ、暴徒等群居シテ種々ノ戎器ヲ携ヘ、已ニ出發セントスルノ形勢ナリシニ、四名ノ人々ハ尚モ穩ニ面晤ヲ乞ヒシニ、漸クニシテ有馬・柴山・橋口壯助・田中ノ四名ヲ階下ニ誘ヒ下リ、而シテ国父公ノ尊旨

朝意ノ在ル所ヲ以テ説論スト雖モ、少シモ敬服ノ体ナク、暴謾倨傲ニ募リ罵詈極リタリ、茲ヲ以テ四名ノ人々曰ク、君命ニ背キ朝意ニ戻リ、其罪輕カラサルカ故、屠服シテ罪ヲ謝ヨト勸ム、有馬等憤怒シ、四名ニ刀刃ヲ向ケンノ形勢ナリケレハ、其時道島大声、上意ト呼ハリ抜刀シテ有馬・田中ヲ討ツ有馬カ刀ハ鑢本六七寸許、是ヨリ互ノ鬪争ニ及リノ刃ヨリ折レタリト、〔弟子丸カ〕是ヨリ互ノ鬪争ニ及ヘリ、此騷動ニ第子丸・橋口傳藏・西田・森山ノ四名階上ヨリ馳セ下ルヲ、大山・鈴木父子・上床四名ハ階下ニ待伏セテ悉ク切り伏セタリ、討手ノ中ニ道島ハ暴徒ノ為メニ鬪死セリ道島ハ初メニ上意ト喚ハリテ抜刀セシト、森キ橋口壯助ト戦ヒ、相替ニ死シタリト云フ、森岡・鈴木勇右衛門ノ二名ハ深手ヲ蒙リ、奈良原・山口ノ兩名モ負傷セシカトモ輕傷ナリ、而シテ二階ニ在リシ數十名ノ暴徒ハ此騒声ヲ聞キ、一同切テ下ラントスルノ形況ナリケレハ、奈良原一名二階ニ馳セ登リ、大声謂テ曰ク、各鎮靜スヘシ、我曹諸君ニ異儀アルコトナシ、疑ヒアルヘカラスト、大肌拔ニナリテ提フル処ノ刀ヲ擲ケ棄、泰然トシテ坐セシニ、暴徒等モ安心、鬪争ニ至ラス鎮靜シ、然シテ田中河内介ナル者ヲ階下ニ喚ヒ

下シ説論セシニ、初メテ真ニ敬服ノ言ヲ以テシ、而シテ衆暴徒モ一同承服安靜ニ帰シタリトソ、○田中・森山ノ二名ハ重傷、戦鬪ノ力ナク倒伏シタリシカ、後チニ死ニ就カシメタリトソ、山口ハ負傷セシカトモ、鎮撫ノ始末言上ノ為メ当夜帰京シタリ、其他鎮撫使ノ八名モ当夜半過帰京ノ途ニ就キ、二十四日ノ曉錦ノ邸ニ着シタリトソ、○奈良原カ階上ニ馳セ登リ刀ヲ棄、大肌拔ニナリテ説論ヲ加ヘタルハ、剛邁機敏ノ働キナリシト大ニ感賞セシ事ナリキ、然ラサレハ數十ノ暴徒一時ニ刀鋒ヲ並ヘ討テカ、ルトキハ、五六名鎮撫方ノ輩如何ニ劍法得達ナリト雖、僅カノ人員ニテハ抑制ニ困ムヤ必セリ、況ンヤ同徒斬殺セラレ必死ノ暴徒ナルヲヤ、実ニ勇剛機發ノ挙動ト賞セサルヲ得ンヤ、

50 ○四月廿四日、前夜<sup>廿三</sup>伏見寺田屋ニ於テ奈良原カ説論

ニ服シタル田中河内介ヲ初メ、我カ藩士数十名ヲ京都

錦街ノ藩邸ニ護送<sup>奈良原ナル者引列レ、本日未明着邸セリ、</sup>寛大ノ処置ヲ以テ

給養セラレタリ<sup>外出ヲ禁セラレ、タルノミナリ、</sup>是レ前非ヲ悔悟シタル

カ故ナリ、○而シテ近衛殿ヲ初メ公卿方ヘモ右ノ顛末

ヲ通知セラレシニ、驚キ玉フコト一方ナラス、所司代ヘモ事ノ始末ヲ届ケ出ラレシニ、大ニ驚怖セリトソ<sup>廿三日暴徒上伏穩ナラサル趣ヲ伏見奉行ヨリ所司代ヘ通報セシニ、所司代ハ大ニ驚怖シ防禦ノ手当ヲナシ、其身ハ二条城ヘ避ケ入ラントセシニ、城番モ備防ヲ嚴ニシ城門ヲ閉チ入ルコトヲ得サリシト、或ハ伏見奉行ハ殊更防禦ノ備ヲナシタリト、京伏間ノ市街ハ今ヤ戦争ノ衝トナレリト、避遁ノ用意ヲナシ恟々トシテ夜ノ明ルヲ俟タルニ、鎮定ノ趣ヲ聞キ安堵ノ思ヒヲナシタリトソ、○所司代カ二条城ニ通レ入ラントセシ云、磯永弘卿・大山綱、○公卿方ヘハ尚ホモ鎮定ノ始末ヲ告ケラレシニ、大ヒニ安堵怡悅セラレ、</sup>国父公ノ英断忠誠ヲ感賞セラレサルハナカリシトソ、而シテ此ノ由奏聞ニ及ハレシカハ

叡感斜ナラス、一回ヒハ驚カセラレ、一回ヒハ喜バセラ

レ、国父公ノ忠誠ナルヲ殊更ニ感賞シ玉ヘリトソ、

○伏見ニ於テハ暴徒ノ死骸ヲ本田弥右衛門担当シテ懇

ロニ埋収シ、寺田屋ヘハ其場ノ片付ケ等残ル処ナク手

当ヲナシタリ<sup>寺田屋ヘハ座席ヲ穢シタルカ故金一百両ヲ与ヘラレタリ、而シテ後同屋ハ鬪争ノ跡見物セント來客充滿</sup>

シ、大ニ利ヲ得タリト云フ、○暴徒ノ屍ハ同地<sup>寺一寺名札ス、</sup>ベシニ埋収セシメ、道島カ死骸ハ京都東福寺ニ厚ク葬ラレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」五六号と同文なり〕

51 ○四月廿五日、

朝廷ニハ寺田屋ノ始末ヲ

聞食シ、

御安慮ナリト雖モ、尚ホモ殘党ノ挙動如何アラント

憂慮セラレ、而シテ左ノ御書 近衛殿ヲ以テ伝達セラレ

タリ、

51の1

〔頭注〕「暴徒嚴制勅命」

浮浪之徒蛮夷之儀ヨリ彼是蜂起之趣、去十六日内々

言上被惱

宸襟候処、鎮靜之儀御受有之、被安

叡慮候処、又々一昨夜以来猛暴之形勢被

聞召候、元来右之徒為

皇国赤心報国之志ヲ以投身命候段、

御感之御事ニ候得共、攘夷一件ニ付而者実々自先年深

被惱

宸衷候処、何分国中一致第一ト被

思召候ニ付、尚厚被廻

叡慮候御事ニ候、然処方今血氣之壯士等不用理解、暴

論ヲ為主奉

勅命ヲ待スシテ、猥リニ乱妨ケ間敷儀ニ及候段、忠憤  
却而違

勅之筋ニ相当不埒之至候、右等違背之輩者早ク嚴ニ可

加制止儀ニ被

思食候事、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一三二号・「玉里島津家

史料一」一六六号・「名越時敏史料一」一八九頁「浮浪

之徒」と同文なり〕

此ノ

御趣意書ニ近衛殿忠房左ノ御副書ヲ以テ伝達セラレタリ、

唯今從

51の2

朝廷野々宮宰相定功中将伝為 御使被来、此御書付被出候而

泉州国父公父ヨリ浮浪之輩江理解ニ被及候様被仰出候、仍而

御伝申入候、

〔本文書は「玉里島津家史料一」一七〇ノ一号の一部と同

文なり〕

又此ノ

御端書ニ、

51の3

久世上京之上久世トハ關老久世大和守ヲ云フ、去ル十六日御獻言ノ趣ニ依テ同十七日上京スヘキ旨、所司代江達セラ

レタ、

叡慮被(御旨趣脱カ)

仰出候而モ、酒井若州所司代酒井若狭守ヲ云フ、在役ニ而者如

何ト甚心配ニ候、和州上洛迄ニ辞役之都合賢考可賜、

此人不容易姦曲ニ而懸念仕候、

〔本文書は「玉里島津家史料」一七〇ノ一号の一部と同

文なり〕

右ノ

御趣意書ニ対セラレ、左ノ御受書ヲ呈セラレタリ、

51の4

浮浪之徒嚴ニ可加制止旨承知仕謹而奉畏候、乍併私

方江不罷居者ハ力ニ難及事ニ奉存候、此段者前以申

上置候事、

四月二十  
五日

島津和泉

51の5

此ノ御受書ニ取添へ、近衛殿江左ノ御書ヲ呈セラレタ  
リ、

御受書ハ別紙ニ相認差上候、御端書之酒井若州事、

御懸念之儀共御尤之至奉存候、乍去当坐之御処置六

ケ敷奉存候、久世上洛之上者私十分説破可仕処存ニ

御座候得共、未一面会モ不致者ニ候得者、直二面会

申諭様無之、此儀少時ク御待被遊度、偕又申上兼候

得共、其御殿諸太夫之内ニ酒井引合之人々可有之ト

愚考仕候ニ付、右之者共ヨリ色々申上、御配慮被遊

候御事モ可有之歟ト奉存候、當時之勢迎モ午年同様

編者曰、安政五戊午ノ年井伊大老カ暴政ヲ施シ、宮・堂上方及ヒ

有志ノ諸侯、或ハ各藩士等ヲ幽囚、或ハ斬流ニ処シタルヲ云フ、

ノ暴政者無之ト奉存候、今大路丈者御退編者曰、今大路ハ近衛

家諸太夫筆頭、如何可有之哉、是モ御都合次第第二御座

候、当分ニ至リ若哉暴政ヲ発シ候ハバ、即チ事變ヲ

生シ可申、此儀者御安心可被成候、

編者曰、右ノ御書面中山尚之助ヲ以テ呈セラレ、尚

ホ中山へ仰含メラレタル趣アリシトソ、○近衛殿ヲ  
初メ堂上方ハ積年幕府ノ圧制ニ恐怖セラレ、中ニモ

戊午ノ年井伊カ暴政ニ宮・堂上方ヲ困メタル先蹤モアリシ故、今回 国父公ノ御竭力ニモ安心セラレサルハ、時勢ノ弁識ニ暗ク、勢力ノ強弱ヲ知ラサルトモ謂フヘシ、○御文中久世上洛ノ上ハ私十分説破可仕所存ニ御座候云云、其御文意ヲ玩味スルニ、正義ノ一ヲ以テ説破セラル、ノ意、深遠ニシテ勇威溢レタリト謂フヘシ、○今大路〔貼紙〕「名札スベシ」ハ近衛家諸太夫筆頭ニ居テ姦物ノ聞ヘアル者ナリシトソ、然レトモ強テ黜斥ヲ勸メラレサルハ、茲ニ至リ一小諸太夫カ酒井ニ通謀スト雖モ、堂々ト御上洛竭力セラルモ至誠ノ一二外ナキカ故、敢テ小輩ノ妨碍ヲ顧ミ玉ワサル者ナリ、又若シヤ暴政発シ候者即チ事変ヲ生シ可申云云ノ御文意、御勇断ノ意文外ニ溢レタリト、当時此ノ御書意ヲ洩聞シ、一般感佩極リタルコトナリキ、

52 ○四月廿六日、近衛家ヨリ御参殿アルヘキ旨御使ヲ以テ仰越レシカトモ、御所旁故国老小松帯刀参殿拝承ノ趣ハ、畏コクモ近衛大納言忠房ノ許ヘトノ

宸翰ヲ下サレタリ、其御文ニ、泉州国父平生ノ忠誠ヲ表セン云云ノ趣、加之常ニ

玉体ヲ離サレサル左文字ノ御短刀一口ヲ下賜セラル、ノ旨伝達セラレタリ、小松ハ

〔頭注〕御短刀御拝戴宸翰及ヒ御短刀ヲ護シ直ニ帰邸セシカハ、 国父公ハ御

服ヲ改メラレ拜戴ノ御式行ハセラレ、明ル廿七日近衛

家ハ小松ヲ以テ御札御伝奏ヲ願ハレタリトソ、実ニ前

代未聞ノ御榮譽ナルハ多言ヲ俟タサルナリ、茲ヲ以テ

御国中一般大ニ感佩、上下共ニ恭賀ノ声街衢ニ喧シキ

ニ至レリ、

53 〔貼紙朱書〕「日前後」○四月廿四日近衛忠房卿ヘ左ノ

宸翰ヲ下サレシニ依リ、翌廿五日小松帯刀ヲ召寄セラレ、

御短刀ト俱ニ伝達セラレタリ、

〔頭注〕宸翰写宸翰左ノ如シ忠房公御親書ノ写、ニ依テ記載ス

53の1

連日夏景増加候、弥其卿壮健満足候、偕者泉州即今浮

浪之輩鎮静之儀頼ミ置、苦勞ニ存候、且亦惣体国論勤

王之志專ニシテ、万事進退可応勅諭之趣実以正論、殊

〔頼母敷候カ〕  
更頼母敷々、弥其趣意深厚、行末々迄モ勅命遵奉有之

候様ニト存候、此品麤軽ニ候得共従来持古シ候故、芽  
出度内々泉州心底可賞勞一笑ニ遣シ候、先其卿江差出  
候儘宜伝達頼入候、決而極内之儀、其辺相含候而取計  
之儀モ頼置度存候也、

四月廿四日

尚以、時氣專自愛可在存候、只々泉州江宜可申達様  
頼入候也、

近衛大納言ノモトへ

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二四号と同文なり〕

此ノ

宸翰ニ御短刀一口ヲ近衛殿へ密カニ渡サレシニ仍り、近

衛殿ハ小松帯刀ヲ召喚ハレ、写取ラレタル

宸翰ノ写ヲ渡サレタリ、其時忠房卿御添翰左ノ如シ、

今日モ快晴ニ候、弥御平安珍重ニ候、其元誠忠之条々

天朝不淺御満足之

御旨趣、就テハ其元御心底被賞、從來

御物之 御短刀極密ニ被遣度

叡慮昨日不存寄

勅書ニテ賜候事、何共恐入於愚拙モ深畏ミ候事ニ候、御  
礼厚申上置候事ニ候、仍今日帯刀招寄日度御伝申入  
候、幾久敷御重宝可為存候、賜候

勅書写置候儘御拜見之様存候、御跡ハ幾久敷其元江御残

シ置之様存候、仍写取日度内々御伝申入候事、

四月廿五日

尚々余条ハ帯刀へ可申ト存候事、

忠房

島津和泉トノへ内々

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二六号と同文なり〕

此ノ御書翰ト

勅書ヲ固封シ小松へ渡サレタリ、上封ハ島津和州先生極

内急、忠房ト三重迄封セラレタリ、○御短刀及ヒ御栞<sub>〔拵カ〕</sub>

粧飾ノ金ナ物等左ノ如シ、

御短刀 安吉 一口

一長九寸三分

一 中心二寸九分

一 鉏金（細カ）目方拾匁五分

一 縁頭金七々子御紋菊四個、栗形同二個、逆角同二個、一文字同一個、鞠尻同三個

一 鞠金梨子地二枝  
菊ノ高蒔絵

一 柄鮫

一 小刀 信濃守高道

一 小柄金七々子枝菊  
目方拾八匁

一 目貫金枝  
菊

一 目釘金乱レ菊  
表裏共ニ

一 下ケ緒黒糸

一 袋 表大和錦、裏紫絹紫打長二尺一寸五分  
幅四寸三分

一 箱 桐白木、銀金ナ物ニ金粉ニテ銘ヲ書シ、緒真

田打

斯クノ如ク美麗結構ノ粧飾ナルノミナラス、

宸翰ノ趣実ニ服心（股脇カ）、狀股ニ頼ミ思召スノ

聖意最ト深重ナル御文外ニ溢レタリ、小松ハ之ヲ拝受シ

守護シテ帰邸、此由言上ニ及ヒシカハ、 国父公ハ拝

戴ノ式厳重ニ執行セラレタリトソ、而シテ極密ノ事ナ

リト雖モ、要路ノ吏員ヘハ密カニ拝覽ヲ允サレタリ、

是レ文久二年壬戌四月廿五日ノ事ナリシトソ、

54 ○去ル十六日、近衛家其他中山殿・正親町三条殿等ノ御

取伝ヲ以テ御建言九ヶ条ノ中、閣老久世大和守御召喚

ノ一条、同十七日ヲ以テ所司代ヘ達セラレシニ、所司

代ハ則日飛檄ヲ関東ニ出シ、而シテ奉

勅ノ旨報答シタリト雖モ江戸出発ノ期限分明ナラス、加

之関東ニ於テハ種々紛議ニ涉リ、例ノ詐謀権術ヲ施ス

ノ聞ヘモアリ、或ハ御建言ノ趣

朝議悠々不斷、殊ニ動キ易キ堂上方此際諸説ニ彷徨セラ

レ、時日遷延スルトキハ是迄

御心思ヲ勞セラレタルコトモ水泡ニ帰シ、

朝威挽回ノ機ヲ失ハンコトヲ 御憂慮、久世（貼紙）大和守「（貼紙）御召

喚ハ罷メラレ、引キ替ヘテ

勅使ヲ関東ヘ立ラレ 国父公モ御差副、御下向御尽力ア

ランコトヲ近衛家其外諸卿ニ就テ献言セラレシニ、

叡意ハ偏ニ 国父公ヲ御力ニ御頼

「思召シ、此際

闕下ヲ去リ、遠ク関東ニ御下向アラセラレテハ

御膝許御心細ク、

御憂念アラセラルトテ 御允容ナカリシカトモ、国父公ハ、  
ハ、

皇威回復、天下蒼生ノ安否、国威ノ揚墜ニ関スル一大事  
ノ機会失フヘカラス、幕府ハ久世御召喚ノ趣拜命セシ  
上ハ直チニ走セ登ルヘキニ、斯ク遷延セルハ御疑惑ノ  
廉ナキニ非ラスト重テ献言セラレ、而シテ五月 日

〔貼紙〕  
〔日札スベシ〕朔日ナ、近衛家へ御参殿アラセラレシニ、  
ラン、

近衛家ハ勿論、中山殿・正親町三条殿・岩倉殿ノ四卿  
御来会、 国父公ハ当時ノ形況、御施行ノ緩急、〔利害方〕利害

得失ニ至ルマテ詳ニ御演説アリケルニ、諸卿悉ク感服

セラレタリト、而シテ後、異本ニ、忠房卿中央ニ御着座、御客居  
ニハ中山殿・正親町三条殿・岩倉殿御  
座ニ就キ玉フ、中山・大久保・堀ノ三名ヲ末座ニ召出サ  
ト記セリ、〔腹藏カ〕

レ、各意見伏藏ナク言上スヘキ旨命セラレタルニ依リ、  
三名ハ目下ノ急要事ノミ言上シタリトソ、 国父公ニ  
ハ予テ外夷ノ措置振リ御議論アリト雖モ、即今ノ処ハ  
内国人心一致

皇威挽回、民生安堵、賢材御登庸、武備充実、出テ制ス  
ルノ勢ヲ保ツノ時ニ非ラサレハ、蚊蠅ヲ掃フカ如ク容

易ニ為シ得ヘキニ非ラス、是レ則緩急ノ別アル所以ニ

シテ、若シ緩急ノ順次ヲ誤ルトキハ遂ニ濟フヘカラサ  
ルノ域ニ陥ラントノ旨、本日御論旨ノ要典ナリシトソ、  
斯ク御論談ノ中ニ、四卿ハ動モスレハ攘鎖ノ処分御質  
問アリケレトモ、対シタル御答弁モナク、只一筋二目  
下ノ要点ヲノミ本日ノ御主論トセラレタリシトソ、

55 ○四月廿八日、 太守公ハ京都ニ於テ 国父公御尽力且

ツ浪士ノ形況穩ナラサル報ヲ 聞食シ、御憂慮一方ナ  
ラス、御近習ノ者二名、鈴木宇左衛門・  
川崎剛八ニ上京ヲ命セラレ、

即日出發セリ、○国父公ハ 太守公へ浪士鎮撫奉

勅ノ始末、或ハ

朝廷ノ御模様等御報告、或ハ

闕下守護ノ為メ島津石見

〔朱書〕  
久都城三万四千四百  
静 拾壹石余ヲ領ス、

一隊ノ兵ヲ引

テ至急上京スヘキ趣、御近習岸良七之丞、御小納  
戸見習ニ合メラ

レ、帰国ヲ命セラレタリ、四月廿二日、  
京都發途 四月廿八日汽船天

祐丸ヨリ着覽ス、 太守公ニハ初メテ始終ノ細報ヲ

聞食シ、稍 御安慮アラセラレタリトソ、○国父公ハ

太守公へ御親書モ遣ハサレ、或ハ国老喜入撰津ヘモ御

56 ○国父公浪人鎮撫奉

勅ノ旨、四月廿五日ヲ以テ幕府ヘノ届書左ノ如シ、

細書ヲ下サレ、國中ノ措置指揮セラレシ趣モアリシト  
ナン、茲ヲ以テ 太守公ハ喜人ニ特命セラレ、國中ノ  
動揺ヲ鎮メ、或ハ臨機応援ノ兵備ヲ整備セシメ、或ハ  
海陸ノ練兵一層嚴整スヘキ旨ヲ令セラレ、 御躬ヲ勉  
勵セラレタリ、然ルカ故人心大ニ奮興セリ 臨機応援ニハ  
御出馬ノ尊  
慮ニテ、御先手御旗本等ノ兵備モ 国、  
父公御発駕ノ頃ヨリ予整セラレタリ、

修理太夫実父島津和泉先達而御届申上置候通、江戸  
表江用向有之致出府候途中、大坂表江諸国浪人共寄  
集リ着坂相待居、不勘弁之儀共申立候ニ付、程能申  
諭候得共不致承服候ニ付、不致散乱様家来之者へ手  
当申付置、伏見迄相越、兼而近衛家江縁談之致内約  
置候ニ付、酒井若狭守様江御届申上致上京候序、右  
浪人共之事情御内話申上趣御座候処、其段達  
別紙ハ上ニ記シ、  
タルカ故略ス、  
叡聞、議奏衆ヨリ別紙写之通  
叡慮ノ趣御書取ヲ以被 仰渡候間、去ル十七日京都屋

敷江相越、滞在罷在候段申越候、此段御届申上候、  
以上、

四月二十五日

松平修理太夫内

西筑右衛門

此時幕府ハ 国父公浪人鎮撫ノ

勅命ヲ奉セラレ、御滞京ノ趣ヲ聞ヒテ大ニ動揺シ、探偵  
ヲ出スコト数手、其事実ヲ聞知シ〔厭嫌カ〕厭嫌甚シク如何ニモ  
シテ妨遮シ、或ハ抑圧セント百方計謀ヲ廻ラスト雖モ  
施術ノ紐緒ナク、恐懼狼狽手ヲ空セリト云フ、果シテ  
然ラン、過年井伊大老刺殺セラレシ以来幕威漸ク衰へ、  
尋テ安藤閣老傷ケラレ、益々威權傾頽、浪人ハ各所ニ  
蜂起シ、其勢制シ得サルニ至レルノ際、 国父公断然  
御上洛、浪士鎮撫ノ

勅命ヲ奉セラレタルニハ頗ル困難ニ迫マレリトソ、然ル  
ニ御建言ノ趣、公武御合体ヲ主トセラレタルノ趣ニハ  
一喜一憂、亦疑ヲ生シ、後日如何ンノ挙動ニ及ンモ量  
リ難シト憂慮尠カラサリシト云フ、或ハ浪士等カ主張  
ノ説伝播シ街衢ニ喧シキカ故、是レカ為メ亦タ太甚憂

フル処トナリ、予メ兵備ヲナシ、或ハ京師ヘ彦根藩ヲ初メ近畿ノ藩々ヘ密令シ警備ヲナセリト云フ〔頭注〕「暴徒鎮撫幕府へ届書」  
寺師宗道報知、書ニ由ル  
○伏見寺田屋ニ於テ暴徒鎮定ノ処分、四月廿九日ヲ以テ幕府ヘノ届書左ノ如シ、

56の2  
〔頭注〕「暴徒鎮撫幕府へ届書」

修理太夫実父島津和泉浪人共鎮静方之儀、依

勅命致滞京居候段者、先達而御届申上候通御座候、然  
処大坂江不致散乱様手当申付置候処、浪人共多人数  
京師江駆登リ候趣ニ相聞得候ニ付、為取鎮伏見迄家  
来之者差出候処、修理太夫家来之者共モ立交リ居候  
ニ付、種々理解申聞候趣モ有之候得共一円不致承服、  
別而不届至極ニ候間、此方家来之内八人者打果シ、  
外人数者無異儀取鎮候趣、不取敢京都屋敷江留置候、  
委細伏見御奉行様・京都御所司代様江御届申上置候  
段申越候、此段御届申上候、以上、

四月廿九日

松平修理太夫内

西筑右衛門

右書面ニ八人之名前別紙ニ取添へ届出ラレシニ、御目付

ヨリ伏見ニ於テ鎮撫ノ始末書可差出トノ趣被達シ故、同日  
晩景太略ヲ記シテ差出シタリトソ、○「京都所司代云  
云註ニ記スヘシ」京都所司代及ヒ伏見奉行ヘノ届書モ同  
文意ナルカ故略ス、

57

○暴徒鎮撫ヲ命セラレタル奈良原・大山・森岡・江夏・

山口・道島・鈴木父子及ヒ上床九名へ、左ノ御感状ヲ  
下サレタリ、

今度於伏見抛身命、無比類勸誠忠之程令感悦候、仍  
而切米八石宛行候条、尚可抽精勤者也、

文久二年壬戌四月廿三日

久光御判

奈良原喜八郎殿〔繁カ旧名〕

右各通ヲ以テ下サレタリ〔同文ナルカ故略ス〕、又永田佐一郎ハ從  
駕警衛人数ノ仕長役ナリシカ、暴徒等上伏セントスル  
ノ際、我カ隊中其他ノ暴徒ニ向テ反復説諭セシト雖モ、  
承服セス発動ニ及ヒシカハ、職任ヲ尽スコト能ハサリ  
シ謝書ヲ残シ〔割腹カ〕割腹死シタリ、仍テ左ノ御感状ヲ下サレ  
タリ、

諸浪人等鎮撫之儀、厚致沙汰趣有之候処、投身命申

58の1

論、精忠之程令感悦候、仍切米拾石宛行候条、尚可  
抽精勤者也、

文久二年壬戌四月廿三日 久光御判

〔貼紙〕  
永田佐一郎殿「実名札

スベシ」

如此永田迄十名ノ人々へ各通ヲ以テ御感状ヲ賜ヒ、各榮  
譽ヲ顕シタリ、○永田カ遺髪ハ五月九日親族ハ引キ渡サ  
レ、葬祭料金五十両ヲ賜ヒ、同夜葬儀ヲ執行セリトソ、  
同人カ始末ハ聞ク人毎ニ感称セサルハナカリキ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」五一号と同文なり〕

58 ○鹿兎島ニ於テハ、四月廿七日ヲ以テ 国父公浪人鎮撫

ノ為メ御滞京之

勅命ヲ奉セラレタル趣布告セラレタリ、左ノ如シ、  
勅書ハ前ニ記シタル故略ス、

右之通御承知被為 在、錦御屋敷江御滞在被為 在

候条、一統謹而可奉承知候、

四月二十 筑後川 大蔵島 摂津喜 但馬川  
八日 上

右之趣、御一門四家及ヒ大身分其他諸士登城ノ間、御一門家ハ鶴  
ハ松ノ間、小番・新番・小姓組、  
与力ハ敷舞台ニ於テ拝承セリ、

勅書拜聞ノ後、 太守公 国父公江拝賀ノ式執行セラレ

タリ、実ニ前代未聞ノ御榮誉ナルカ故、一統恭敬人氣  
倍々振起、壮年ノ輩ハ上京ヲ冀望スル者夥シキニ至レリ、

○春米種々ノ街説紛紜、狐疑ヲ懐キタリシカ、茲ニ至テ  
街衢ノ流説モ直チニ転シ、数百年ノ久シキ恐れ多クモ衰  
頽ヲ極メタル

皇威モ漸ク回復ノ緒ニ就キタルハ、全ク 国父公賢明ニ  
出タリトノ説ニ変換シタリ、

59 ○四月廿九日、島津石見「朱書」

禁闕守護ノ為メ一隊ノ手勢ヲ率ヒ汽船ヨリ至急上京スハ

キ旨命セラレ、或ハ足軽三十人陸路昼夜兼行、上京ヲ  
モ令セラレタリ、○国父公御出府発布セラレシ時ヨリ

從駕冀望之人多く、其筋ノ役員ハ頗ル困却シタリシニ、  
島津石見手勢ヲ率ヒテ上京スヘキ旨拝命セシヲ聞テ、

尚ホ懇願者夥シク、国老其他軍事関係ノ吏員ニ向テ切  
迫頼請スル者続々タリ、実ニ盛ナリト謂フヘシ 〔壮年ノ輩  
ハ昼夜ノ

別ナク奔足シ国老ノ宅ニ至リ直接ニ責願シ、甚シキニ至テハ、島津石見カ領地都城ハ文弱ニシテ、実場ニ臨ミ用ヲナサ、ルヤ必定ナリ、當時ハ一大事ノ場合ナルノミナラス、臨機後レヲ取ルトキハ島津家七年来養成ノ名威ニ関スルハ無論ナルカ故、家来数名ヲ付從セシメ、其他ハ御目見以上ノ人ヲ出サルヘシトノ建言セシモアリタリトソ、如此ノ形勢ニシテ容易ニ制止シ難キニ至リシ故、国老中ヨリ論達シ、漸ク其勢ヲ鎮制セリ、論達ノ文意ハ、此ノ末臨機 太守公、○從御上京モアルヘシ、其時各忠誠ヲ尽セヨ云云ノ趣ナリキ、

駕上京セシ上下ノ人員ト今回島津石見カ手勢二百余名ヲ合計スレハ、凡ソ一千二百余人ニ及ヘリトソ、

〔頭注〕「九条関白内覽ヲ罷ム」

60 ○五月 二日ナ、 関白九条尚忠公内覽職ヲ罷ラレタリ、

同公ハ此内ヨリ御所旁久シク参内モナカリシニ、 国

父公御上洛ノ形勢ヲ聞知セラレ、或ハ浪士等蜂起セシ

以来萎縮極リ引籠ラレシトソ、元来幕府ト心ヲ一ニシ、

大ヒ二人望ヲ失ワレ、又御内ノ者ニ奸佞貪利ノ吏多ク、

賄賂苞苴ヲ貪リ、驕奢ヲ極メタル者少カラス、中ニ就

テ、去ル戊午年閣老堀田備中守上京、開港

勅許ヲ迫リ奉ルノ際、或ハ

和宮関東御降嫁ノ事ニハ只萱尽力セラレ、夫レカ為メ巨

万ノ宝ヲ掌握セラレタリト云フ、

61 ○五月 三日ナ、 近衛前左大臣忠熙公御還俗、及ヒ関白

職内覽ノ内

勅ヲ奉セラレタリ、然レトモ御謙遜御辞退アリ 御病身ノ故ヲ以テ御辞

退ナ、 国父公ハ御辞退ノ趣ヲ聞召シ、御書牘又ハ御近

習ノ輩ヲシテ御奉

勅アルヘキ旨御痛責アラレシニ、同十一日忠房卿ヨリ御

書翰ヲ以テ陳ラレタル趣左ノ如シ、

61の1

弥御勇健珍重ニ候、抑過刻ハ中山忠左衛門入来ニ而何カ 〔同脱カ〕

承知仕候ニ候、実以 前左府兎角御逆上強、唯今ニ御

平臥ト申様成御事、復職辺之 御沙汰段々在之候得共、

兎角之御所旁自然弥御逆上強御發ニ而ハ、中々御用御

伺被成候事モ難相成義、忽

朝廷之御不都合ニモ相成候義、且ハ両度迄以一封言上ニ

及置候通之御次第ニ而、実々御痛心被成候事不一方、

甚御心配之御事ニ候、乍去

朝廷ヨリハ御進、其元ヨリモ是非ノ事、実々病根

ニモ可相成哉ト不一方御案思ニ候得共不得止事、先弥

御請可被仰上御様子、乍去兎角御逆上強、近来御所旁

勝之御事、両三月ナラテハ御請モ実々難被成、其上達

而トノ御事ニ而ハ御用ハ差置、不慮ニ御逆上強御発モ

難計、是ハ於忠房モ痛心之事ニ候、何レ二三月ト申処

屹ト 正親町三条辺其元御書取ニ而、御歎願之程幾重

ニモ御頼申入置度、左無而ハ迎モ御請ハ陸ケ敷存候、

不惡御組取被下御取計頼入候、且又前左府還俗被

仰付候ニ付而ハ、過日来モ申入候通、鷹司前右府公モ同

時ニ還俗被 安政五戊午ノ年、大老井伊直弼暴政ヲ施シ、青蓮院宮  
其他ト同時ニ譴責セラレ、落飾・謹慎セラレタリ、

仰付候辺ニ不相成ハ、全

朝廷御政事片手落ト申モノニ而、俗ニ申スエコヒイキ之

様ニ被存候、是モ御申立之程御頼申入候、過日若州へ

御尋ニ相成候処、前左府公ハ還俗、久世上京之上ニ頼

候由、甚是モ如何ニ被存候事、夫ヲ

朝廷ニ而御聞置、其儘ニ而ハ矢張関東是迄之所置、半分

ハ御用ヒノ様ニ相成、衆人如何之御所勞ト却而

朝廷御不外聞之御事、何卒篤ト正親町三条へ御申立御頼

申入度、先ハ乱書〱御推覧頼入候也、

五月十日

尚々中山忠左衛門ヨリ承候条承知仕候事、

明日申刻頃ニ中山忠左衛門入来之程御頼申入置候也、

忠房

島津泉州トノへ早用

〔本文書は「玉里島津家史料一」一九一号と同文なり〕

6102

唯今忠左衛門へ申聞ケ候心得ニテ申落シ候、然者前左  
府御事奉從

勅約、御請被仰上候事、就而ハ直様帰住被致候筈ナカラ、

其内之都合モ在之、且ハ桜木町隱殿モ出来ニ候得者、

当月十七日ニ隱殿へ一先転居被致、尚亦関白

宣下日限治定之上、御用辺ニ依テ本殿へ在職中逗留ト申

者ニテ帰住被致度御事ニ候間、為念右モ申入置候也、

五月十七日

尚以近々ニハ面謁待人候也、

忠房

泉州トノへ

〔本文書は「玉里島津家史料一」一九五ノ一号と同文な

り〕

〔頭注朱書〕「此条御書翰ニ詳ナリ、除クヘシ」

前左府事、勅命ニ從ヒ御受致スヘシ、就テ直チニ帰

去ル戊午年御落飾ノ後御花畑  
ニ御引遷、謹慎セラレタリ、スヘキ管ナカラ、家内都合  
モアリ、桜木町ノ隱宅モ成就、十七日一ト先ツ爰へ  
転住シ、関白

宣下ノ御日取定リシ上、本邸へ帰住致スヘクトノ趣ナ

リシトゾ、○熊本侯ハ帰国ノ順年ニテ、国父公ト

黒崎駅ニ於テ御行違ヒニナリタリトゾ

時江戸ニ於テノ説ニ、国父公ノ御出府ハ其実

攘夷ノ勅命ヲ幕府ヘ下サ、ルノ御計畫ニシテ、宮・堂上方攘夷

鎮藩ノ説ヲ主張セラレ、或ハ浪士ノ蜂起モ薩州ノ煽動スル処ナ

リ、元來薩州ハ井伊大老ヲ討チタルモ其謀ハ薩州ニ在リ、又安

藤ヲ刺サントセシモ薩州ノ謀計ニ出タリ、或ハ幕府ハ熊本ニ密命

シ探訪ヲ入レ、或ハ臨機ノ処分ヲモ命シタルニ、熊本ハ進シテ其

命ヲ奉シタリ云云、此説無稽ノ街説ナリト雖モ、出所正シク国老

ニモ聞ヒテ頗ル注意セラレタリト云、編者考フルニ、元來熊藩ハ

隣藩ノ親モアリト雖モ所謂普通表面ノ親ニシテ、其実ハ国人互ニ

軋轢ノ情アリ、故ニ當時我カ藩ノ挙動ニ注目シ、

幕意ヲ佐ケントスルヤ多言ヲ俟タサルナリ、

○五月四日晝、御家老座筆者長野彦七京師ヨリ昼夜兼行

着薨、寺田屋ニ於テ暴徒鎮庄ノ趣ヲ報ス

四月廿四日ノ夜、京師出発スト云フ、

63 ○五月五日、鹿兒島ニ於テハ

宸翰及ヒ御短刀拜戴セラレシ趣、或ハ寺田屋事件ヲ布告

セラレタリ

布告文、  
略ス、

而シテ同六日、御一門四家及ヒ大身

分并諸士登城、太守公 国父公江恭賀ノ式執行セラ  
レタリ 寺田屋事件ノ飛報五月五日晝着薨、巷説紛紜人心恟々タリ、  
而シテ宸翰及ヒ御短刀御拜戴或ハ暴徒鎮定ノ趣ヲ聞ヒテ、悉  
ナ人安堵ノ思、  
ヲナセリ、  
〔宸翰カ〕

64 ○五月九日、太守公朝四ツ時御出城、五社御参拜、

国父公京師ニ於テ御尽力御成功ノ御祈願アラセラレタ

リ、○国父公御発駕ノ後ハ、近習ノ人々ヲシテ五社其

他ノ神社ニ御代拜ヲ命セラレ、或ハ諸士ノ中ニモ御功

業ノ御成就ヲ祈リ、鹿兒島神社・新田宮・霧島神社等

江參籠セシ者モ寡カラサリシト云フ、○本日伏見寺田

屋ニ於テ伏誅暴徒ノ親族各兩名ヲ国老喜入撰津宅ニ召

喚シ、組頭ヨリ論達ノ趣、御趣意ニ背違シ暴動ニ及ヒ

タル始末ヲ概示シ、而シテ爾来子弟等鎮撫方ノ人々ニ

対シ怒恨ヲ狭ムコト勿レトノ趣ヲ嚴達シタリ、○国父

公御滯京ノ際、岡山侯ヨリ御使ヲ以テ御一子御養子ト

セラレンコトヲ懇願セラレタリト雖モ、御謝絶ニ及ハ

レタリ、然レトモ尚ホ其後モ類ニ御懇請ニ及ハレシカ

トモ御許容ナカリシト

岡山ノ先侯齊敏公ハ、照国公ノ御二弟、  
則チ国父公ノ兄君ニテ、骨肉ノ御間ナ  
ルカ故、其御情実ヲ以テ御、  
頻願ニ及ハレタリシトゾ、

65 〔頭注〕「三郎ト御改名」

○五月十一日、近衛家ヨリ御書翰到来、其文ニ、関東ニテ老中水野和泉守モアルカ故、御呼名ヲ三郎ト御改メアラマホシトノ趣ナリ、其御書左ノ如シ、

口述

唯今忠左衛門招寄候儀ハ、其元呼名和泉之処、於関東老中水野和泉守モ在之、差当如何ニ被存候間、呼名御改ニ而ハ如何、殊ニ三郎ト被改候ヘハ尚更之事ト存候、仍右之通申入度、旁忠左衛門入来候頼申入候事ニ候、

五月十一日

忠房

泉州トノヘ

〔本文書は「玉里島津家史料」一九五ノ二号と同文なり〕

是ヨリシテ三郎ト御改メアラセラレタリ 当時ノ説ニ、兎鳥三郎高德カ忠誠ト優劣アラセラレサルカ故、斯ク内勅ニ出タリト唱ヘシト雖モ然ルニ非ラス、御先祖 忠久公ノ御呼ヒ名、初メ三郎ト称シ奉リタルニ依ラレタル者ナリ、○中山尚之助ニモ近衛殿ヨリ忠左衛門ト呼フヘキ旨御内示アリシカトモ、忠ノ字ハ 忠久公ニ憚リ奉リ、古ヨリ藩内ニ於テハ上下共ニ呼名・実名等ニモ憚ルノ国法ナ、ル趣ヲ言上シ、中ノ字ニ替ヘ申左衛門ト改メタリ、

66 ○五月十二日、国父公ハ

勅使大原三位殿江御差副、御東下御尽力アルヘキ旨拜命セラレタリ、

勅書左ノ如シ、

〔頭注朱書〕

〔勅書不見当〕

〔頭注朱書〕

〔明治十丁丑擾乱ノ際、散失セシナラントノ仰ナリ〕

67 ○五月 日 〔貼紙〕「日糺スヘシ」島津石見二百余名ノ手勢ヲ

率ヒテ上着ス、則チ

輦下警衛ノ諸事ヲ命セラレタリ 島津石見ハ航海中ヨリ流行ノ癩疹ニ感シ、京着ノ後数日間臥褥、

国父公ヘ拜謁スルコト能ハス、御東下御発駕ノ前日拜謁セント入浴セシニ再感シ、遂ニ危篤ノ症ニ変シ、後数日ニシテ死シタリ、○同

人ハ 国父公御嫡女ノ夫ナリ、本年二十九歳、

68 ○五月十三日達、伏見寺田屋ニ於テ暴徒ノ中奈良原カ説

論ニ服シタル曹大坂ヨリ乗船、日州細島ニ着シ是ヨリ

陸行、本日福山ニ着シタリ、依テ親族ノ者出張シ列レ

帰り、謹慎セシムヘキ旨ヲ達セラレタリ、而シテ寛宥

ノ 尊旨ヲ以テ処刑ノ沙汰ニハ及ハレサリキ、斯ク寛

大ノ処分ナルハ、暴徒ニ左袒セシト雖モ、巨魁ノ曹ニ

教唆セラレ、一時方向ヲ過リタルヲ憫察セラレ、出格ノ寛典ニ出タル者ナリ、

○本藩士ニシテ暴動ノ人員中、伏誅ノ輩ハ悉ナク壯年ニシテ主謀者ニ教唆セラレタル者ナリ、其年齢左ノ如シ、  
 ○柴山愛次郎二十五歳、父ヲ円貞ト云フ、医ヲ業トス、  
 ○橋口伝蔵三十歳、父ヲ与三次ト云フ、○橋口壯助二十三歳、父ヲ彦次ト云フ、○弟子丸龍助二十五歳、父ヲ高城七郎ト云フ、○有馬新七三十八歳、父ヲ四郎兵衛ト云フ、旧ト伊集院郷ノ士ナリ、○西田直五郎二十三歳、父ヲ弥兵衛ト云フ、○森山新五左衛門(二十九)歳、父ヲ新蔵(永)賀(朱書)ト云フ、○田中堅助三十二歳、父ヲ池田(マ)ト云フ(貼紙)「父名又ハ本人実名等糺スヘシ」、以上八人、説諭使ノ手ニ懼リテ誅セラレタリ、此人員ノ中、柴山・両橋口ハ江戸邸ヨリ脱走シ、有馬・田中・西田・弟子丸四名ハ從駕警衛ノ人員ナリ、森山ハ鹿兒島ヨリ脱走シタリ、又河野四郎左衛門・永山(万斎カ)・木藤市助ノ三名江戸邸在勤中ナリシカ、両橋口等ト偕ニ脱走シテ大坂ニ出、暴拳連中ニ加リタル者ナリ、又町田民

部・岩下(万平)佐次右衛門カ率ヒタル警衛人員ノ中、鈴木武(利)五郎・山口(三斎カ、篤信)三斎ノ二名モ同シク暴徒ニ加ワリタリ、其他ノ輩ハ悉ク從駕警衛ノ員ナリ、

○暴徒ノ中ニ、中山大納言殿御内ノ侍田中河内之介、同人長男左馬之介(本年十)及ヒ青木頼母、京師ノ侍千葉郁之介ノ四名ハ説諭承服ノ後、奈良原ナル者総人員ト偕ニ京師錦街ノ藩邸ニ引致シ謹慎セシメ、而シテ我カ藩士ハ日ナラスシテ下臈ヲ命セラレタリ、然ルニ田中父子・青木・千葉ノ四名モ中山殿ヨリ御倚頼ノ趣アリテ、偕ニ下臈ヲ命セラレタリ、其時佐土原・高鍋両藩士ハ各其藩主ニ引キ渡サレタリ、而シテ下臈ヲ命セラレタル人員ハ大坂ヨリ乗船、日向ニ向テ発航セリ(此ノ大船ハ送船ニテ、日州赤江港ニ在テ大坂へ産物廻漕ノ用船ナリ、從來向港ニ數艘ノ大小船ヲ置キ、諸県郡内ノ米穀其他産物ヲ大坂へ廻漕ノ弁ヲ謀アリ、赤江ノ地ニ一局ヲ設ケ、物品收納ノ倉蔵、而シテ右ノ曹護アリ、之ヲ赤江開場ト称ヘ吏員在勤セリ、)而シテ右ノ曹護送ノ吏ニハ、渋谷彦助(國)・蓼田新平(貼紙)「実名」等ヲ付セラレタリ、然シテ田中父子・青木・千葉ノ四名ハ日州海ニ於テ我カ藩士ノ(頭注)寺田屋ニ於テ奈良原カ説諭ニ(田中父子其他殺サル)仍テ謝罪シタル曹ヲ云フ、為メニ誅殺セラレタリ、其ノ顛末ヲ聞クニ、初メ大坂ニ於テ田中等ニ欺瞞セラレ国憲ヲ犯シ、不忠ノ名ヲ負ヒタルヲ

遺憾トシ、忿懣ニ堪ス遂ニ斬殺シタリトナン、田中ナ  
ル者ハ暴動ノ主謀者ニシテ、中山殿御父子密  
勅ヲ奉セラレシ等種々ノ説ヲ以テ偽贖セシヲ、我カ藩ノ  
暴徒等ハ真ニ

朝意ニ出タル者ト信シタリシトナン、然ルニ寺田屋ノ始

末ニ及、後チニ田中等ト両橋口・有馬・柴山ノ輩カ詐

謀ナリシヲ覚知シ、忿懣ニ堪ヘス誅殺シタリシトソ

吉田清石衛門・柴山龍五郎・是枝万助、而シテ後、田中カ行（行）

季ヲ驗査セシニ錦旗類似ノ者モアリ、或ハ中山忠光朝

臣ノ書翰、或同志盟結ノ連判書類モアリシトナン、

○上文ノ如ク、四月十六日、近衛殿及ヒ中山殿・三条

殿等ノ御取伝ヲ以テ、御建言ノ趣ニ閣老久世大和守ヲ

召喚セラレ御達シアルヘキ

朝議ニ決シ、同十七日所司代ヘ達セラレシニ、所司代ハ

飛檄ヲ以テ関東ヘ告タリ、幕府ハ御建言ノ趣ヲ洩聞シ

所司代ヨリ通知、  
シタリト云フ、

勅旨奉行可否ノ議論紛紜トシテ、

朝命ノ下リシ上ニ施行スルハ幕威ノ薄ラクニ似タリト、

例ノ倨傲論ヲ以テ先ンシテ政体改革ヲ議シ、或ハ戊午

ノ年退隱或ハ謹慎等ヲ命セラレタル諸侯ノ解慎、又ハ

大小吏員黜陟ヲ令シタリ（此時幕吏中議論分裂甚タ雜沓ヲ極メ

者ナリヤ、勅詔ヲ循守シ施行スルニ非ラサルハ不可トスル者モア

リ、然レトモ多クハ從來ノ法規ニ拘泥シ幕威ヲ維持セントノ説ヲ立ツ

ルモノ多数ニシテ、名分論者ノ勢ハ微々タリシトソ、又維持論主張

ノ輩ハ薩藩ノ勢力・名望ヲ挫カントノ論甚タ熾ニシテ、其論旨ヲ実

施セント欲スト雖モ施術ニ因ミタリト云フ、当時幕府ノ形勢ヲ以テ

考フルニ、二百年來上 朝廷ヲ輕ンシ奉リ、下諸侯ヲ抑制シ、權謀

詐術ヲ以テ施政ノ得意トシタルカ故、時勢人情ヲ弁セス、旧慣ヲ以

テ我カ藩ノ名望ヲ嫌忌シ、抑圧論家ノ多数ナリシハ鏡ニ照シテ見

ガ如、

シ、

70

〔頭注〕二橋・尾張其他解慎

○四月廿五日ヲ以テ幕府ハ一橋・尾張・越前・土州・宇

和島五侯ノ解慎、平常ノ通心得ラルヘキ旨ヲ達シタリ

是レ則国父公四月十六日ヲ以テ 朝廷江御献言ノ趣ヲ洩聞キ、朝

命ノ下ラサルニ先ンシ如此達セラレタルハ、例ノ幕威維持ノ一事ナ

リト云、

71

〔頭注〕朱書「此違書ノ書法改ムヘシ、第七卷ノ如クナルヘシ」

○五月三日達、○越前守養父隱居松平春嶽〔朱書〕福井

来御用向可申談候間、折々登城相談可致旨被仰出候、

○松平肥後守〔容〕奥州会 以来重立候御用向ニ付、毎々登

城相談可致旨被仰出候〔津候〕 二非ラス、全ク幕府ノ議ニ出タル者ナ

リ、同侯ハ名望アルニモアラス、然レトモ幕府脇股ノ慶筋ナルカ

故、福井侯ト双ンテ斯ク命シタルハ例ノ幕吏ノ奸術、加之達文中ニ

会津侯ハ重立タル御用向云云、〔徳川慶頼〕、○田安大納言殿〔貼紙〕「実名糺ス」、  
是ヲ以テ幕議推知スヘキナリ、

右御内願之通御後見御免被成、被任正二位候御建言ノ第三ケ条ニ記

サレタリ、叙任セラレシ、○遠江守養祖父隠居伊達春山〔宗書〕紀

名代伊達遠江守卷物五、同氏春山儀、在所へ罷越温泉

へ入湯、病氣致養生度旨願之通御暇被下、二十ヶ月程

モ罷在候而參府候様可致候、依而被下之〔御建言ニ出タルニ〕

ハ非ラスト雖モ、同日達シタ、○大久保越中守〔忠寛〕「実名糺ス」、

右、大目付被仰付〔外國奉行ヨリ、當時幕役中二名望アル人ナリト、云フ、是モ御建言ニ出タルニハ非ラサルナリ、〕

○同月十二日達、松平肥後守・松平春嶽、向後御用有

之節々御用部屋へ相通候様被仰付候、○禁裏付御目付、

小栗石膳〔政寧〕○分部若狭守〔光貞〕江州大溝〔但馬出石〕各

実名糺ス、右、当月下旬五月下旬、

勅使大原左衛門督参向ニ付、御馳走役被仰付候、○同日

達、淡路守養父隠居脇坂掛水〔頭注朱書〕此達書〔頭注朱書〕揚州辰野老侯、右、加判之

列老右通被仰付、座順之儀者紀伊守次ト被相心得、御

勝手掛外国御用取扱被仰付、勤役中年々三万俵被下之、

中務大輔ト改名被仰付候御建言ニ出タルニハ非ラスト雖モ當時

隠ノ身ナルヲモ如此出職、○五月廿六日達、内藤紀伊守〔信忠〕越後、

ヲ命シタルモノナリ、

右、加判列御免、溜ノ間詰格被仰付候此ノ人ハ井伊・安藤ノ鼻息ヲ窺ヒ威權アリ、職務上奸佞ノ所為、少カラサリシ人ナリ、

○同月二十八日達、大久保志摩守御側衆被免候〔忠愍〕此者井

カ鼻息ヲ窺ヒ威權アリ、職務上奸、佞ノ所為少カラサリシ人ナリ、

以上十名ノ進退ハ幕政改革ノ手初メニシテ、茲ニ至リシ

ハ容易ノ事ニアラサリシト云フ〔御九〕以上、寺師宗道カ報、知書ニ捩リテ記ス、

72 ○五月十八日 近衛忠房〔御九〕ヨリ御通知ノ趣ニ、久世大和

守上京ヲ停メラル、云云、今朝三条大納言来邸アリテ、

六月四日久世江戸出立ノ趣ナレハ、上京ノ上

朝意達セラレシ後

勅使差立ラレ、国父公ニモ御下向アリテ、幕議速ニ決

定ノ御促等尽力ノ場コソ然ルヘカラントノ御旨ナリシ

カハ、国父公ニハ関東ノ情実御通貫ノ訳モアラセラ

レシ故、御答ニハ久世上洛恐ラクハ速ナルベカラス、

又

朝議一体御不断ナルカ如シ、今日ノ姿ナルニ於テハ、

皇威挽回ノ期何レノ日ニアルモ知ルヘカラス、シカノミ

ナラス、機会ヲ失シ嚙臍ノ悔及フヘカラサルニ陥ルヤ

必セリ、此儘多日滞京スルニ於テハ幾多ノ藩士元來氣

速キ輩多キカ故、如何ナル挙動ニ立到ランモ測リ難ク、

藩邸錦邸ヲ云狭隘ニシテ多勢維持ノ法モ立チ兼タリ、現今

ノ姿ニテ永ク滞京ヲ命セラル、ニ於テハ、一時知恩院

ヲ宿陳ニ貸与セラレンコトヲ願ハセラル、旨、御答

書及ヒ中山尚之助ヲ以テ近衛家又ハ両議奏へ献言セラレ

シニ、同日晚景左ノ御書翰ヲ贈ラレタリ、

昨烏中山忠左衛門江申置候久世和州上京御差止之儀、

今朝モ三条大納言入来ニテ段々之咄共一向御陸敷由故、

迎モ此上被申立候其陸ケ敷存候間、来月四日和州上洛

御沙汰共伺候而、当地出立之折柄引統

勅使被差立、其元ニモ下向ニ不相成ハ甚役人衆之決議モ

甚陸ケ敷候間、和州上洛之上尚又出立之節其元ニモ下

向卜治定被致候様存候、迎モ幾度被申立候共如何卜於

忠房心配候、唯今忠左衛門来候間可申聞候得共、先以

書中申入候間、早々御報御頼申入候也、

五月十八日  
尚以用繁取紛乱書候、専推覽可給候也、

忠房

三郎トノヘ 乱書御免

此際 朝廷ニハ積年幕政ノ横暴ニ懲ラセラレ、優々不断

空シク日月ヲ耗セラレシ故、 国父公ハ斯マテ改革ノ端

緒ヲ開カレタルニ、如此因循遲緩決行ナキニ於テハ、幕

府弥奸計ヲ逞フスルニ立到ラント頗憂慮セラレ、御膝辺

ノ輩ヲ以テ近衛殿其他議伝両奏ニ向テ頼責セラレシカハ、

漸クニシテ五月廿日ヲ以テ左之如ク発表セラレタリ、

方今之時勢不堪傍觀、島津家一同拳三国抛身命、勤

王攘夷之旨趣言上、不斜

御満足

思食候、今般関東江

勅使被指向、偏ニ

君臣御合体国内一致、攘夷之成功可有之、以深重之

思食被仰下候ニ付、

勅使引統三郎出府可周施、去ル十二日以書取被

仰付置候処、越前々中将国政關係之儀於関東取計候

段、  
觀念符合

御安心

思召候、猶又別紙之通 御沙汰候間、

叡慮之旨徹底尽力可有之、〔深御依脱カ〕頼

思召候、右之段内々 御沙汰候事、

此ノ御書ニ左ノ別紙ヲ添ヘラレタリ、

一橋刑部卿・越前々中将等之儀、御筒条〔簡条カ〕之通被

仰出候処、去ル十五日大樹年頃ニ付、田安大納言後

見願之通差許、越前々中将国政可關係被申付候由言

上有之、就而者後見之儀強而者被 仰付兼候得共、

何分内外不容易形勢ニ候間深被遊

御案痛、以一橋被登用候方可然

思召候、但名目之処可為輔弼歟、〔且脱カ〕越前大老職之事為家

門之間、流例之辺二者可差支候得共、先件非常之処

置ヲ以可被申付

思召候、但是以差支候者、政事総裁〔職脱カ〕ト歟称候而モ可然

思召候、但越前々中将儀

思召之通相成候上者、方今内外危迫之時節ニ付、今年

秋中上京有之、国是之議論被

聞召上候、且同人弥上京之節者引統三郎ニモ可有上京

候、其辺相含可有周施様ニト

思召候事、

又同シク御添書ニ、

今度

勅使被差向候

叡慮、偏二国中一致之

御趣意ニ有之候間、麤暴之儀出来候而者深被惱

宸襟候事ニ候、元来是迄被屈

叡慮候モ全国中平穩ヲ被

思召候御事ニ候間、末々ニ到迄右之

御趣意不違様可申付候事、

右之御書、議奏中山大納言忠能卿・正親町三条大納言

実愛卿・飛鳥井侍從宰相雅典卿・久世三位道熙卿・伝

奏野々宮宰相中将定功卿ノ連名ヲ以テ達セラレタリ、

○此ノ如ク發表セラル、迄ノ間、

朝議悠々且御不断ナルカ故、国父公ハ御苦辛一方ナラ

ス、御膝辺ノ輩ヲ以テ数回御建議ノ趣アリテ、漸クニ

シテ本日發表セラル、ニ至レリトソ本日迄ハ、勅使発京ノ期日ハ達セラレサリシ

ト、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」七二号と同文なり〕

73 ○五月廿日、近衛家ヨリ贈ラレタル御内書左ノ如シ、  
當時

朝廷ニモ異儀紛紜ノ形況、此御書意ニ就テ知ルニ足レリ、

73の1 ○元来外夷一件不容易儀者申迄モ無之候、其上幕府ヨリ  
去ル午年以来

天朝尊奉之道理無之、權威ヲ以奉輕蔑、実以一朝一夕之

次第ニ不在、深被惱

玉体、種々ト

御配慮而已被遊、何共有志之輩者悲歎ニ迫リ候次第、然

ルニ去ル申年ヨリ以来諸浪人共蜂起シ、幕役人共種々  
損亡、夫ニ不心付、兎角權威而已相震ヒ正論難相立、実

以德川家長久モ無覚束、唯此上者夫々大國之大名国家  
之為メ抛身命、正論不相立者後后如何ト懸念ニ存候処、

旧臘尚之助中山尚、当春一藏大久保被差登、巨細ニ忠誠

之心底被申越、実々感佩不過之候、乍去前左府ニ者隠

居、殊ニ落飾迄モ被 仰付前左府トハ近衛  
忠熙公ヲ云フ、候身体、且參

内モ被止置候儀、於愚拙者若年且短才未熟之仕合、其

上

天子玉座ニ奉近候儀者容易ニ難相成次第甚殘懷不一方、  
依而正親町三条へ内覽ニ及候儀ニ而、前左府愚拙ニ者

今度モ其元建白之条々当然之良策ト存込候、乍去過日

来御承知之通議奏衆一致六ヶ敷、其上ニ久我内大臣

〔采書〕「建通」・久世宰相〔采書〕「通熙」・千種〔采書〕「有文」・岩倉〔采書〕「具視」

兩中将各奸佞之人物種々ト以偽、恐多クモ

主上ヲ奉欺、夫ヨリシテ

主上ニモ国忠之者ト

思召被込、且又中山・三条等ニモ誠忠ト被存込、実以

甚々悲歎無際涯、

天朝之有様遺恨ニ存候、夫故当節前左府在職ニテモ痛心  
而已ニテ是ト申功者無之哉ト、実々 御悲歎之御事、

且又和州久世天和守  
ヲ云フ、上洛ノ上 御沙汰共伺、夫ヨリ出立

ト申節、

勅使其元ニモ出立ニ及候様、於半行逢之節引戻候様ト之

事者余リ暴ニ当リ如何之事連モ夫者六ヶ敷、何卒篤ト

勘考ヲ加へ、来月十日前後迄滞在之儘在度ト之評定之

由、最早幾度モ被申立候共強上ニ相当、却テ如何ト被

存候、知恩院之於此方ハ脱カレ者非常之節ニ者、何トカ勘考可有之

哉二存候得共、是迪モ六ヶ敷次第之由、何卒此上者表

向武伝へ願立候歟、又者所司代へ申込、知恩院借受候

歟、両様之内ナラテハ埒不明ト存候、和州モ引戻シニ

不相成、上京ニ而者其元滞在ナクテハ何共

朝廷御案事申上候篤ト御深考、後刻中左衛門〔事脱カ〕山入来之御

御報頼入候也、

五月廿日〔認脱カ〕

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」七八ノ二号・「玉里島

津家史料」二〇三号と同文なり〕

御答ノ趣記載仕度、

〔頭注朱書〕「答書ハ書留不見当、記憶不致候事」

〔頭注朱書〕「明治十丁丑擾乱ノ際、各所ニ格護シ焼亡セルモアリ、

或ハ土中ニ埋メ、数日ノ後取出シ形モナクナリシモア

リ、故ニ此ノ勅書ヲモ見当ラサルハ其災ニ罹レルナラ

ントノ仰ナリキ」

74 ○五月廿一日近衛殿ヨリ御内書ヲ以テノ趣ハ、昨夜野々

宮宰相中将入来ニテ内話ニ、明後二十二日関東へ

勅使御差立ノ御発相定リタリ、因テ差副御下向〔御下向之儀云云ハ因父向ヲ云フ〕

之儀モ達セラルヘシ、久世和州東海道通行

ノ由ナレハ、仮令ヒ行逢ニナリテモ穩ニ致スヘシ、ス

ベテ途中之事質素タルヘシト〔趣カ〕ノ起ナリシトソ、御承知

ノ御書左ノ如シ、

今度関東江

勅使被差立候儀、方今之時勢深被悩

靱慮、偏ニ 公武御一和、国内一致、攘夷之成功可有

之、以深重之

思召、別紙之通被決三事、速ニ其一群議之所帰可有奉

行被 仰遣候、天下之重事ニ候間、

靱慮徹底候様周旋之儀、内々松平大膳大夫江モ被

仰含候、於島津三郎モ出府、大膳大夫長州申合、先

度之

御趣意相心得、為 公武宜可有配慮頼

思食候事、

右御書中三事件トハ即チ左ノ如シ、

第一、大樹早ク諸大名ヲ率ヒ上洛アツテ、

朝廷ニ於テ相共ニ国中之治平ヲ計議シ、万人之疑ヲ散

セシメ、

皇国一和之正氣トナシ速ニ蛮夷ノ患難ヲ攘ヒ、上者祖宗之 神慮ヲ慰メ、下者義臣ノ帰嚮ニ從ヒ万民ヲ化育シ、天下ヲ泰山之安ニ比セラレ度事、

第二、豊臣ノ故事ニヨリ、沿海五ヶ国ノ大藩ヲ以テ五大老トシ、国政ヲ諮決シ夷戎ヲ防禦スル之所置ヲナサシメハ、環海之武備堅固確然トシテ、必ス夷戎ヲ掃攘スルノ功アラント

思召候事、

第三、一橋刑部卿ヲ後見トシ、越前々中将ヲ大老トシテ幕府ヲ扶ケ政事ヲ計ラシメハ、戎虜ノ慢ヲ受ケスシテ衆人ノ望ニ協フヘクト

思食候事、

右三ヶ条ノ中ニ就テ、第三ヶ条目ノ事分テ 御尽力アラセラレ、幕府異儀申立テサル様ニト之赴、 御沙汰之旨 御承知アリタリトソ、而シテ議奏衆ヨリ御達書左之如シ、

浪士鎮静之儀、鳥津和泉江被仰付置候処、同人出府被仰付候ニ付、浮浪取押方之儀難行届、深 御不安

心被悩

宸襟候、万一京師及動揺候而者諸国可蜂起哉ト深被悩 叡慮候、就而者修理大夫被召登度候得共、差支モ有之

候者、鳥津石見率人数上京二者候得共、猶又今一人

〔久造〕〔蜀紙〕 鳥津図書「実名札ス」 太守公御二弟、官城一万五千七百五十二石余ヲ領ス、将士ヲ率

ヒ神速入洛有之、被安

叡慮候様可有尽力、早々申達上着之様被遊度

思食候事、

右之趣御承知、至急一隊ノ人数ヲ呼び、御東下中非常之御警衛 御依頼アリシカトモ、在京ノ人員多数ナルカ故、

禁闕之御守護差向キ不足ニアラス、又諸浪士カ假令ヒ暴発ストモ何程ノ事カアルヘキ、此上多数上京シテハ却テ事ヲ惹キ起スノ患アラントノ

尊慮ニテ、其旨被 仰述、若モ不虞ノ事起ルニ当テモ、現今在京ノ人数ニテ少シモ差支無之、御安心アラセラ

ルヘクトノ趣言上セラレタリ 此時警衛ノ人員上下千五百人ニ余レリ、関東従駕五百人トシテモ、一千人余、在京ナリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」八二号と同文なり〕

75 ○五月廿二日、 国父公ハ辰ノ上刻錦街ノ藩邸御発駕、

勅使大原左衛門督重徳卿ト同日御発京、 関東へ御下向ア

ラセラレタリ、 当夜ハ大津駅ニ御宿泊ナリ、 ○大原殿

〔頭注朱書〕「各実名及ヒ今一人ノ姓名モ礼シ記入スベシ」  
ヘハ御警衛ノ為メ我藩士十名ヲ從駕セシメラレタリ

吉井仁左衛門友、 野津七左衛門雄・山内一郎・鈴木昌之助、 仁礼平助  
紀・松岡善助、 赤塚源六、 上床八十右衛門、 野津七次

等ノ輩、 ○当日ハ御通街拝観ノ者群ヲナシ、 尺寸ノ隙

地モナカリシト、 市街ノ説二、 正副両

ノ盛事ニシテ、 日ナラス

皇威耀クノ初メナリト、 洛中ノ貴賤歓喜ノ声喧シキニ至

レリトソ、 從駕ノ輩ハ御上洛ノ人員ニ異ナルコトナシ、

○此日近衛殿及ヒ両三条又ハ岩倉殿ヨリ、 御使者又ハ

御書翰ヲ以テ御発駕ヲ祝セラレ、 或ハ関東ニ於テ御尽

力ヲ依頼セラレタリトソ、

76 ○五月廿五日、 勢州桑名駅ニ御宿泊、

勅使ノ御旅館へ御参向、 関東御着駕ノ上御尽力ノ順序等

御談定アラセラレタリトソ、 ○御発京ヨリ宿駅御休泊

ハ一駅許リ後レ御通行アラセラレタリ、 是レ宿駅ノ大

小二依リテナリシトソ、 桑名駅ハ大駅ナルカ故、 御宿

泊アラセラレタリ 勅使從駕ノ人員ハ僅數十名、 百名ニ足ラス、

国父公ハ陪從卒ニ至迄數百名ノ多數ナルカ故、 同駅御休泊ナリ難カリシトソ、 ○国父公ハ、 勅使大原江御差

副、 関東御下向ノ 勅命ヲ蒙ラレシト雖モ、 未タ御対面ノ時宜ナカリ

シ故、 大原卿ハ御対面アラシコトヲ頼リニ望マセラル、 二依リテ、

本日大原卿ノ御旅館ニ御参向、 初メテ御面接アラセラレ、 関東ニ於

テ御互ニ御尽力アルヘキ次第厚ク御談合アリシトソ、 ○御滞京ノ

勅命ヲ奉セラレシ以來公卿方ニ御面晤アラセラレタルハ、 近衛殿ニ

於テ中山殿・正親町三条殿・岩倉殿等ノ四五卿ニ止リ、 大原卿江サ

ヘ本日初テ御面接アリシハ、 深キ 尊慮アラセラレタルコトナリシ

ト、

77 ○六月十五日達、 久世大和守 〔朱書〕

〔頭注朱書〕「此達書、 第七卷ノ如クナルベシ」 名代牧野讚岐守病氣

ニ付御役御免之儀、 猶又相願候趣不得止事無抱被

思召、 依之願之通御役御免、 雁之間席被仰付候、 心永

致養生、 氣分快キ節者登城、 御機嫌相伺候様被仰付候

久世侯辭職之願ハ、 去ル十七日ヲ以テ京師へ御召喚ノ旨拜承セシカ

幕史中ニ於テ大ニ物議ヲ生シ、 夫ヨリシテ病ト唱シ引籠リ辭職出願

シ、 遂ニ間届ケニナリタリ、 其物議タルヤ、 薩州ト予テ密謀シタル

文久二年（一）

上、寺師宗、  
道方報牘

旧邦秘録五編文久二年之二終

旧邦秘録 文久二年自卷三  
至卷四 一一

市来四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「久光公御  
加筆」〔紙数百一枚〕の記載あり〕

78  
〔頭注〕「勅使大原殿下関東御下向」  
○六月九日、〔重徳〕国父公ハ  
〔久光〕

勅使大原左衛門督殿へ御差副、五月二十二日京都御発駕、

関東御下向アラセラレタル趣ノ飛報到着、同十日布達

セラレ、同十一日、御一門四家及ヒ大身分其他諸士登

城、〔忠義〕太守公 国父公へ恭賀ノ式執行セラレタリ、

○編者曰、大原殿ハ当時堂上方ノ中ニ於テ名望アリ、

年齢モ五十余歳ニシテ老練ノ人ナリ、茲ヲ以テ特撰  
大任ヲ命セラレタル者ナリ、而シテ左衛門督ニ任セ  
ラレタリトソ、今回ヒノ

勅使ハ尋常ノ事ニ非ラサレハ、克ク其任ニ堪ユヘキノ  
人ナリト云フ、然リト雖モ 国父公御差副トハ則チ  
副使ニ外ナラサルカ故、幕府ニ於テ

勅諭循奉否ヤハ 国父公ノ御尽力ニ止リ、其御任重大  
ナルハ無論、幕府ハ二百年來僭上驕傲ニシテ、権謀  
術数ヲ以テ得策トシタルカ故、茲ニ於テ其得意トシ  
タル悪弊ヲ一洗シ、人臣ノ分ヲ守リ、責任ヲ尽シ、尊  
王ノ道ヲ確守シ、人心一致、国威拡張、外夷制御ノ基  
礎立ツト立タサルノ御督責至重至大ノ御大任、御苦  
辛ノ容易ニ非ラサルハ論ヲ俟タサルナリ、幕府ニ於  
テモ

勅使東下ノ因テ起ル処ハ、全ク 国父公ノ御方寸ニ出、  
他ニアラサルヲ探知シタルカ故、啻目的トスルハ  
国父公ニ止リ、実ニ至難ノ御立場ナルハ多言ヲ要セ  
ス、江戸ニ於テハ貴賤拳テ御下着ノ期ヲ俟チ、如何  
ンノ御発諭、奈何ンノ御動作ナリヤト目ヲ拭ヒ耳ヲ

79  
〔頭注〕「江戸御着邸」  
○六月七日

本日 国父公江戸高輪ノ藩邸ニ着セラレタ

リ、○同日

勅使大原殿ニモ先規ノ如ク龍ノ口伝奏邸へ着セラレ、幕

吏分部若狭守

光貞、江州大  
溝二万石余

御馳走役ニテ例規ニ依テノ御

傾ケ、中ニハ善惡種々ノ妄説訛言モ尠カラス、夫レ  
カ為ニモ御憂苦一方ナラス、又笑フヘキノ拳動惡ム

ヘキノ策謀モアリシト云フ 當時江戸ニ於テノ説ニ、薩州ハ  
三四年前ヨリ密カニ公卿方ヲ煽

動シ、中ニモ近衛殿ヲ愚玩シ、幕府ヲ嫌惡セシメ、或ハ鎖攘ノ説  
ヲ朝廷ニ懲瀆シ、或ハ浪士ニ教唆シ世ヲ蹂躪シテ其機ニ乗シ、

〔探駭カ〕  
大權掌握ノ意アリト頗ル猜疑ノ意甚シク、如何ニモシテ其証左ヲ得、  
抑制セント百方搜偵スト、或ハ 朝廷江御献言ノ中ニ、一橋・越

前ニ公登庸云云ノ二条ニハ甚タ憂苦シ、中ニモ一橋ハ多年大政掌  
握ノ念アリテ名声ヲ博取スルノ奸謀アリ、実ニ徳川家ノ魔魁物ナ

リ、如此奸佞ナルカ故、薩人ヲ愚弄シ遂ニ献言ヲモナサシメタリ  
ト、又薩州ハ元来ノ禍心ヲ以テ、仮リニ一橋ヲ吹揚シ、而シテ後

チ大ニ為ス事アラントスルヤ必セリ、茲ヲ以速ク此ノ二奸ヲ  
〔駭〕除セサルトキハ後患大ナラントノ論者多ク、其儕要路ニ向

テ類論スル者寡カラスト雖モ、要路顯地ノ吏ハ悠々不斷、或ハ無  
名無譽ナルニハ輕重手ヲ下スニ途ナク、却テ其論者ヲ嫌忌シ遠ク

ルニ至レリトソ、中ニモ閣老久世侯ハ此ノ論者カ暴行ニ及ハンコ  
トヲ憂苦セラル、コト一方ナラス、越前老公モ同シク嫌惡セラ

ル、コト一橋公ニ異ナラスト云フ、斯クノ如キノ論者ハ、千石以  
下ノ士ト御藏米取り連中多キニ居レリト、或ハ御家門・譜代大名

ノ臣下ニ最モ多シト云云、以上、磯永弘卿カ書牘ニ拠リテ記ス、  
是ニ由テ當時幕府ノ形勢ヲ考フルニ、數百年來驕慢ニ成立シタル

曹名分如何ンノ弁ナク、大義奈何ンノ識ナク、  
シテ狼狽ノ余リ如斯喧噪セルヤ見ルカ如シ、

会釈ナリシトソ、○長州侯ハ我カ 国父公ト同シク、  
浪士鎮撫又ハ大政改革ノ尽力アルヘキ旨

勅命ヲ奉セラレタルカ故、庶事御議談アルハ無論ナルニ、

〔頭注〕「長州侯江戸發途」  
如何ナル思想ニヤ、六月六日 国父公御  
着ノ前日 江戸出發、中山道

ヲ取テ上京セラレタリ、當時ノ説ニ、 国父公御着府

ノ後ニ發途セラレテハ百事混雜ナルノミナラス、兎角  
薩州カ先キンシテ奉

勅セシ故、其下風ニ立サルヲ得ス、奈何ンソ下風ニ立ツ

ヘケンヤト、御着邸ノ前日道ヲ替テ出發セラレシ者ナ

リト云フ、○此時江戸ニ於テハ種々ノ街説喧囂、幕吏

中ニハ異議紛擾、多クハ恐懼心ヨリシテ猜疑ノ意甚タ

シク、

勅命背違ノ論者多ク、殊ニ 国父公ヲ忌嫌スルノ情、甚

太シキニ起レル者ナリシト、茲ヲ以テ長州侯ハ、其嫌

疑ヲ避ケンカ為メ道ヲ転シテ出發セラレタリト、或ハ

一説ニ、薩州ニ先鞭セラレタルヲ殘慨シ、今後別ニ為

ス事アランノ意ヲ以テ出發セリトモ云フ、或ハ幕府ハ

朝廷ト我カ 国父公トノ間ニ離間ノ策ヲ施シ、長州ハ機  
会トシ、上京シテ 国父公不在ノ間ニ尚ホ

朝意ヲ動かサントノ計謀ヲ以テ、種々ノ訛伝尠カラサリ  
シトナン、

80  
〔頭注〕「春嶽公へ初テ御面會」〔松平慶丞〕  
○六月八日、国父公ハ越前々中将殿ノ邸ニ御出向、初

テ御面接ノ御会釈、畢テ浪人鎮撫ノ

勅命ヲ奉シ玉ヒシ始末ヨリシテ、京師ノ情実等御縷述御

論話刻ヲ遷サレシニ、越侯大ニ感賞セラレタリトソ、

○越侯ハ過ル戊午ノ年幕府ノ譴責ニ依テ退隱謹慎セラ

レシニ、去月廿五日四月廿五日解慎、平常ノ通心得玉フヘシ

トノ事ナリト雖モ訛言百出、物議騒々タルカ故、尚ホ

モ心ヲ用ヒ玉ヒ、引キ籠リテノミ居ラレタリシトソ、

同侯ハ当時名望アリテ一般仰望スル処ナルカ故、此際

頭要ノ地位ニ立レサルヲ得サルノ人物ナルヲ以テ、

国父公御献言ニモ記サレタリ、然ルニ世ノ流説訛言ヲ

憚リ引籠リ玉フ時ニ非ラサルカ故、左ノ御書翰ヲ以テ

促サレタリ、

一 翰呈上仕候、暑氣弥増候処、弥御安康被成御座恐

悦奉存候、偕近頃承候得者、少々御所勞ニテ御登城

無之由御所勞ニテ御登城無之トハ、幕吏中一橋公及ヒ春嶽公ヲ忌嫌ノ情甚シキニ依リテ引キ入ラレシト云フ、忌嫌ノ源因ハ前二記ス、何様之御容体ニ候哉、深ク御案シ申上候、

然者先度者亡兄亡兄トハ即チ 照国公ナリ、公殊ニ御懇交ナ

ラレタリトソ、詳ナルハルノミナラス、国事ニ付御同論御尽力アラセ

照国公御事蹟録ニ記ス、御懇意之訳ヲ以御面會被下存慮

申上候処、種々御賢慮之程モ致承知、別而難有奉存

候、其節モ申上候通、当時不容易時節、縦令

勅命無之トテモ、御家門之御家筋徳川之御家ト興亡ヲ

共ニ可被成者勿論之御事、殊ニ分ケテ 御依頼之

勅諭モ被為 在御事ニ御座候得者、天下之大政万端御

尽力有之度御事ト奉存候、然処巷説伝承致シ候得者、

漸ク天下之大事ヲ御傍觀之筋ニ被伺申候、尊慮決而

右通之御事ニ者無之トハ奉存候得共、愚意懸念之余

リヨリ不得止事申上候、当時諸国之人心漸ク乖戾之

模様ニテ、尊公御出職之儀ヲ偏ニ奉渴望候哉ニ相聞

得候処、若モ右様御傍觀有之候而者以テ之外之儀、

第一公辺之御為別而不可然御事ト奉存候、御家臣之

内種々所存之訳モ有之哉ニモ伝聞致シ安政五戊午ノ年、

謹實ヲ蒙ラレシ故、家臣中ニ於テハ無為国事上ノ事ヲ以

長久ノ論者アルヲ指サレタル者ナラン、候得共、是ハ御家計

リ之御事ニ而、天下之御為ニ者不相成儀ト奉存候、

且ツ閣老杯之処無御抛〔閣老杯ノ処無御抛御詔合云云、幕吏ニ於テ忌嫌ノ情アルヲ指シテ記サレ、然レトモ當時天下一般一橋・越前兩公及シテ冀望スルカ故、國父公御獻言ニ一橋公ヲ以テ將軍家御後見、春嶽公ヲ以テ政事総裁職ト記サレタ〕御詔合モ有之筈ト奉存候得共、尊公之御進

退ニ而天下之動靜ニ可致関係歟ト奉存候間、何卒是等之処能々御勘考十分御尽力之処、偏ニ奉伏願候、

儲此品誠ニ以テ輕微之至御座候得共、伺御安否候驗迄奉備高覽候、先者右申上度如此御座候、以上、

六月廿三日

春嶽公ハ此御書翰ノ意大ニ感佩セラレ、而シテ左ノ御

返翰ヲ送ラレシトソ、

〔貼紙朱書〕「本文トハ日付相違ナレトモ此返書ナリ、二十余年以

前ノ事故、不取覚事多シ」

貴酬

一昨夕者貴書忝致披覽候、如論暑氣相増候処、弥御堅勝

珍重存候、陳者先般者初而得御〔面晤カ〕面晤、御賢慮之趣モ承之、

乍憚御同意ニ御座候、就夫段々之御挨拶、殊ニ赤心充分

御吐露ニテ、委縷御教示忝感荷之至ニ而候、御書中之巷

説者兎モ角モ素実ニ傍觀之存念ニ者決而無御座候間、御安慮可被下候、熱氣強ク平臥中、不能委縷候、貴酬、早々不一、

六月廿五日

春嶽

三郎様

二仲、御端文忝、尚又御自愛專一存候、〔佳品カ〕重品御投与忝、此品乍麤種致進上候、早々、以上、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一〇六号・「玉里島津家史料一」二四二号と同文なり〕

81 〇六月九日達、 明十日

勅使御対顔ニ付、表向六半時揃之旨被仰出之、〔表向トハ諸大名其他諸役員ヲ云、〕

〇同日達、

勅使御対顔ニ付、溜詰・同格・御譜代大名・高家・詰

衆・御奏者番、右嫡子共惣登城之事、

82 〇六月十日達、今巳刻御白書院江出御、

勅使大原左衛門督 右御対顔、從

禁「裏」〔朱書〕被仰進候御言伝物御目録持參、御口上之趣被述

之、○

勅使大原左衛門督 右出席、

勅諭之趣 御直ニ述之、畢テ 入御、

〔頭注〕「勅使初テ登城」  
○此時大原殿ハ

勅書ヲ將軍 〔家茂カ〕 茂公江御直ニ渡サレ、

勅命之三ヶ条速ニ奉行アルヘキ旨ヲ演達セラレシニ、將

軍謹テ拝受セラレタリト、○本日ハ幕吏及ヒ大小ノ諸

侯雲霞ノ如ク登城シ、其式最ト嚴肅ナリシトソ、○當

日ハ

勅書拜戴ノ御式畢テ別ニ御論談モナク、

勅使ハ御下城アリタリトソ、

83  
〔頭注〕「勅使再ヒ登城」  
○六月十三日、

勅使大原殿ハ重テ御登城、閣老脇坂中務大輔<sup>安</sup>・板倉周

防守<sup>勝</sup> 靜<sup>勝</sup> 其他幕吏ト

勅命奉行御論談刻ヲ遷サレタリ、此時將軍ニハ簾内ニ在

ツテ議談ノ趣親聞セラレタリト云フ、

○編者曰、幕府ハ

勅使發京ノ前頃ヨリ

勅意ノ条件ヲ洩レ聞キ、循奉ノ可否大ニ議論ニ涉リ、

當中鼎沸、幕威維持ノ論者多ク、循奉論者ハ百中ノ

一二ニ過キサリシカトモ、遂ニ一時循奉シ、而シテ

後變更ノ奸議ニ決シタリト云フ、此日大原殿ハ兩閣

老ヘ向テ、奉行否ヤノ

勅答速カナルヘキ旨ヲ演述セラレ、弁舌流ルカ如ク、

如何ニモ英邁ニシテ寛猛ノ意言外ニ溢レ、兩閣老モ

謹ンテ拝承シ、厚ク評議ニ及ヒ

勅答ニ及ントノ答詞ナリシトソ 此際幕吏中ニハ、一時奉行シ

シタルハ例ノ詐謀ノ一ニシテ、従来幕府ノ得意ニ出タル者ナリ、

又維持論者ノ中ニモ、激昂論者ハ類ニ薩藩ノ威力ヲ挫削セサル時

ハ後患大ナラント、或ハ無礼ノ挙動ニ及ハントセシモアリタリト、

閣老其他ノ吏員ニ於テハ、其輩ヲ嚴識スルニハ頗ル困却痛心セリ

ト、或ハ彦根藩士カ此ノ機ニ乗シ為スコトアラントスル者アリシ

ヲ、鎮静スルニモ困ミタリト云フ、以上ノ説、維新ノ後旧幕吏阿

部邦之介<sup>潜</sup>・榎本道章・宇都宮三郎親譚ナリ、阿部ハ旗下ノ

士ニシテ<sup>奥州白川城主</sup>、豊後守<sup>〔実名札ス〕</sup>三弟ナリ、當

時御目付職、維新ノ頃ハ陸軍奉行ニ昇進シ、明治四年ノ夏大藏省

ニ奉職シ、而シテ岩倉公ノ欧州巡行付属ノ員ニ在リ、戊辰ノ役中

榎本釜次郎<sup>武揚</sup>等ト議シ、榎本ハ海軍ヲ掌リ、阿部ハ陸軍ニ

宰シ回復ノ謀ヲ回ラシタリト、榎本道章ハ奥右筆、其後一橋殿ニ

付従上京シ、慶応ノ初メ大目付職ニ昇進、対馬守ト改名、維新ノ

後榎本武揚等ト函館ニ脱走シ、五稜郭中ニ在テ会計ヲ掌リ、降伏

シテ後チ明治四年ノ未開拓使權判官ニ奉職シタリ、宇都宮ハ洋学

者ニシテ開成所ノ教授役ヲ奉シ、化学有名ノ者ナリ、維新ノ後大

学校ノ中博士ニ任シ、後チ、工部大技長ニ昇進セリ、

84  
〔頭注〕「閣老脇坂侯下御談話」  
○六月十四日、国父公ハ閣老脇坂侯ノ邸ニ御参向、天

下ノ事情御縷述、而シテ

勅命ノ趣速ニ奉行アルヘキ旨、懇々御演説ノ上其要点御  
〔貼紙〕〔御手扣書記載仕度〕  
手扣書ヲモ遣ハサレシニ、脇坂侯ノ御答詞ニ一々敬承

セリ、実ニ天下ノ安危茲ニ在リ、篤ク評議ニ涉リ

勅答ニ及フヘシトノ趣ナリシトソ、然リト雖トモ尚ホモ

御安心ノ場ニ至ラサルカ故、同十六日左ノ御書翰ヲ以

テ御責促アラセラレタリ、

84の1  
〔頭注〕「閣老脇坂へ就テ御建言」  
一筆致啓上候、日々暑氣相加里候処、弥御壯健被成

御座奉恐賀候、然者先日者旧来御親睦之、脇坂侯ハ当時閣

アリ、茲ヲ以テ、国父公御着府間モナク彼ノ官邸ニ御参向、国事

ノ御談話ニ及ハレタリ、元来御縁続ナルカ故、閣老ノ資格ヲ離レ

御親睦ノ筋ヲ以テ待遇セラレ、国一筋ヲ以テ御役御離レ御

事御親談アラセラレタリトソ、  
面会被成下、別而忝奉存候、殊ニ随貴意存慮無伏藏〔腹藏カ〕

申述候処、何モ無御異論致安心候、夫ニ付猶又致熟

考候処、何レ天下之御為ト奉存、僭踰之罪ヲ不顧、

左条之儀申述候間、御都合次第御同列方江モ御談合

一此節

叡慮之趣被為 在、久世氏閣老久世大和守広周上京之儀被 仰出  
候処、御請及遲滞候ニ付、不被為得止事

勅使被差下、公武御一和、御国内一致之処ニ無之候

而者不相濟ト被

思召、就而一橋・越前之両侯天下有志之人心帰嚮スル

処故、御後見・御大老ニ御登庸有之候様ニト之

御趣意、誠以恐悅至極之御事ト奉存候、然処先日粗御

咄致承知候得者、名目之処御評議甚御六ヶ敷由名目ノ処云云、

名目トハ御献言ニ記サレタル如ク一橋公御後見、越前老公政事総

裁職ノ名義ヲ云フ、此ノ名義ニ付テ幕議ハ格式上ニ於テ難スルノ

旨アリシト、是レ畢竟両公ヲ忌憚ノ情実ニ出タル者ニ外ナラス、

御書面ノ如ク当時危殆切迫ノ世態、些少ノ名目ヲ口実トスルハ優

柔不断ノ譏ヲ免レサルノミナラス、遂ニ人、其節者愚意何共

不申出、態ト差打罷在候得共、退而致勘考候得者存

付候儀致黙止候而者却テ不忠ト奉存、不得止事申上

候、邂逅  
勅使被差立被 仰下候

御趣意、纔名目計リニ被為拘、御評議御決定無之候而

者、乍恐優柔不断ト可奉申歟、当時不容易折柄、旧

格先例ニ御拘泥被為在候而者、以之外之御大事ト奉

存候、ケ様御評議御遲延罷成候而者又々人心疑惑ヲ

生シ、異説紛々致流行、浪人共致蜂起候儀モ可有之哉ト甚以懸念至極ニ奉存候、若其次第二相成候而者、迎モ

御国威御挽回之期ハ被為在間敷、実ニ恐入奉存候、

何卒非常之時出格之訳ヲ以テ、一日モ早ク御評決

勅諭御遵奉被為在候様伏而奉希上候、尤モ一橋君御後

見之儀者近頃(徳川慶頼)田安君御後見御免ニ相成候故、際ハ(行方)

之処如何ト之御評議ニ被伺、御尤之御事ニ者御座候得共不容易時節、殊ニ被為惱

宸衷、態々

勅使ヲ以テ被 仰出候御事ニ御座候得者、快ク御受被

仰上候ハ、公武御一和之御実情御通徹被為在候

御儀ニテ、天下之人心モ此御一条ニ至極感服、御

国家御安泰之基ト乍恐奉存候、越前君之儀者御家門

之事故、聊御故障之訳モ被為在候ハ、御大老同様

御政事総裁有之候様屹度被仰渡、一統江モ右之趣承

知仕候様御達被為在候ハ、御国内静謐、人心一

和罷成、無此上御美事ト乍恐奉存候、

一長州之事粗申出候処、御答振不分明ニ致承知候、此

〔貼紙〕長州ノ建言記載仕度

儀者先頃脇方ヨリ承り候、五月二日大膳大夫ヨリノ

上書致落長州侯建言ニケ条トハ、水戸前中納言齊昭公御贈官之事、二三安政五戊午ノ年所刑セラレタル人々赦宥、此

二条ナリ  
シト、手、虚実者難量御座候得共、愚意聊致疑惑候、

尤、御上洛之御一条者実ニ寛永以来之御盛典者申上

迄モ無御座候得共、先日モ申上候通、何ソ当年中不

被為在候而モ天下之人心紛乱仕ニモ有御座間敷、来

秋ヨリ先ニ被為行候者可御宜哉ト奉存候、貴所様モ

其御趣意ト致承知候、然ルニ長州ニ者頻ニ此儀御催

促申上候姿ニ相見得、甚無心元奉存候、方今之処ニ

而者

勅命通り越候御登庸之上当秋上京被命、外夷御処置国

是之御議論言上有之、

叡慮御伺相成候方可然歟ト奉存候、急速ニ 御上洛被

為在候而者御道中宿々及迷惑、且於京師種々御評議

決兼候御事共被為在候ハ、以テノ外之御大事、却

テ

皇国混乱之基歟ト乍恐奉存候、大膳大夫爰許江罷在候

ハ、小子面会直談致度所存モ有之候得共、着ヲ乍

存道ヲ替へ前日発足之次第、何共不審千万、心底難

量御座候、長門守出府之由ニ者候得共家督ニモ無之、  
決兼候儀モ可有之候ニ付、相成儀ニ御座候ハ、只  
今之内再ヒ大膳大夫被召返、小子ト深厚致談合候様  
被仰下候儀者相叶申間敷哉、左様御座候ハ、趣意

一致

公武之御為別而可然御事ト奉存候 大膳大夫殿ニモ国父公

ヘキ旨奉 勅セラレシ故、誠意愛国ノ情アリテ私意ナキモノナル  
ニ於テハ、御着府ヲ待テ百事協議セラレ、戮力尽忠ハ無論ナルニ  
明日 勅使ト偕ニ御着府アルヲ聞知セサルニモ非ラサルヘシ、然  
ルニ道ヲ替テ出發セラレタル始末 勅旨ニモ違ヒ、或ハ私心アリ  
ト云フモ理ナシトセス、又幕府力出發セシメタルモ怪マサルヲ得  
サルナリ、斯ノ如ク狡黠ノ挙動誰カ之ヲ權シトセンヤ、茲ヲ以テ  
国父公ハ大膳大夫被召返、小子ト深厚致談合候様云云ト記サレタ  
リ、然ルニ幕府ハ如何シノ思想何等ノ議ヲ以テ呼ヒ返サ、リシヤ、  
畢竟猜疑心ヨリシテ長州ニ密意ヲ授ケタリト謂ハサルヲ得サルナ  
リ、当時江戸ノ街説ニモ、幕府ハ長州ニ密命セシ事アリシトモ唱  
ヘタリトシ、茲ヲ以テ 国父公ハ末文ニ 国元発足致候ヨリ抛身  
命、公武ノ御為周施仕候儀ニテ、敢テ功名榮利ヲ貪リ候趣意無  
之云云ト記サレタリ、実ニ 国父公ノ 尊旨ハ、分毫モ御私心ア  
ラセラレス、一筋ニ 公武御和睦、 皇威回復、 国威擴張ノ御尽  
力ニ外ナキハ普ク、 右之趣家督ニモ無之候得共、 亡兄遺  
衆ノ知ルカ如シ、

言之一筋ヲ以不得已事、不肖之身ヲ忘レ所存十分申  
上候間、若忌諱ヲ犯シ僭踰之罪ヲ御糾シ有之候ハ、  
何様共可奉畏候、小子此節国許致発足候ヨリ抛身命、  
公武之御為周施仕候儀ニテ、敢而功名榮利ヲ貪リ候

趣意ニ無之、 公武御一和、御国内一致相成候得者

愚身者如何様罷成候共、曾而遺憾無御座候、此趣深  
ク御汲取被成下度伏而奉願候、以上、

六月十五日

島津三郎

〔本文書は「玉里島津家史料」一三三三号と同文なり〕

85

〔貼紙〕

○當時外国人倨傲暴慢、我カ政治ノ不整、武備充実セ  
サルヲ輕蔑スルコト甚シ、中ニモ英人ノ所為甚シキ  
ヲ極メ、種々驕謾ノ挙動アリ、加之小笠原島ヲ占取  
セントシテ、日本所属ニ非ラス、既ニ占拠ノ勢ナル  
ニ依リ、幕府ハ外国奉行水野筑後守ヲ初メ数名ノ吏  
ヲ派遣シ、掠奪ノ患ニ備ヘタリ〕

86

〔頭注〕「全国一般癩疹流行」

○四月中旬頃ヨリ六月初頃迄、鹿児島及ヒ諸郷ニ至ル  
迄癩疹大ニ流行、死亡寡ラス、京撰其他モ同シク從  
駕ノ輩モ多ク、鹿児島ニ於テハ四月末ヨリ五月中旬  
頃迄ハ日ニ三十余名ノ死亡アリト云フ、諸局ハ夫レ  
カ為メ稍閉局スルモアリ、是ニ依テ御手許ヨリ予防  
又ハ治癒薬施与セラレ、組頭担〔朱書〕シテ配与セラレ

古老ノ言ニ、斯ク流行シタルハ凡六十余年ノ後ニアリシト云  
タリ、鹿兒島中ニ於テ一日ノ死亡平均三十余名ニ及ヒタルコト、

凡ソ十五日間許、○太守公ニモ未タ御煩ナキカ故痲瘡下同シク、一  
ナリシト云フ、

○六月十五日、例年ノ  
慮スヘキ旨布達セラレタリ、

如ク祇園祭ノ例日ニテ、上下両町例年手踊等ノ興行  
〔祇園カ〕

モ痲疹ノ為メ為シ得ス、祭典ノミナリキ、○京都留

守居田中仲右衛門ナル者モ同症ニ罹リ死シタリ、故

二本田〔親雄〕弥右衛門伏見御飯屋番ナリシカ、田中カ後職

ニ拜シタリ、

87  
○六月十六日、大原卿ヨリ御使ヲ以テ明後十八日重テ登

城ノ心得ナレハ、御相談ニ及ハレシ趣アラセラル、カ

故、明十七日御旅館ヘ御参向アラン事ヲ請ワレタルニ

因リ、〔朱書〕後ヨリ御参館、夜ニ入りテ御帰邸アラセラ

レタリ、此日大原卿卜御相談ノ詳ナルハ知ルニ由ナシ

ト雖モ、

勅答速ニアルヘキ御促シ、或ハ

勅諭ノ御ケ条幕府奉行如何ノ御密話ナリシト云フ、

88  
○七月十三日江戸飛報ニ曰ク、六月廿二日ノ夜、英国

「ミニストル」高輪東禅寺ニ旅寓セシニ、警衛松平丹

後守〔ママ〕ナリシカ、其家臣伊東軍兵衛其他三四名同

寺内ニ於テ英人二人ヲ斬殺シ、而シテ伊東ハ〔屠服カ〕屠服死

シタリ、英人幕府ニ迫リ其屍ヲ檢シテ事穩ニ帰ス、

伊東ハ元來慷慨ノ士ニシテ鎖攘ヲ主義トセシ者ナル

ニ、宿直ニ当リ英人伊東ニ対シ無礼ノ挙動アリ、予

テ惡ム所ナルカ故、直ニ斬殺シタリト云フ、依テ主  
家ノ警衛ヲ罷メラレタリ云云〔屠服カ〕

89  
○六月十八日、大原卿御登城アリテ、脇坂・板倉ノ両閣

老ヘ向テ、方今天下ノ形勢、上下ノ人情ヲ演ハラレ、

安危存亡分別ノ時機ナルカ故、

勅諭ノ条々速ニ奉行ノ

勅答アルヘシト督促セラレシニ、両閣老曰ク、越前々中

將任用ノ事ハ御受アルヘシ、一橋後見ノ一事ハ御受ケ

ノ有無曖昧ニシテ、頗ル困頓ノ形況ナリシトソ、

90  
○六月廿五日、脇坂・板倉ノ両老ハ

〔頭注〕一閣老勅使旅館参候

勅使ノ御旅館ニ参候、一橋後見職ノ一条ハ御受致シ兼ル  
ノ旨ヲ演ヘタリト、大原卿ハ、此一儀御ケ条中尤モ枢  
要ノ事ナル旨ヲ以テ大ニ論責セラレシカハ、重テ評議  
ニ及ハントテ退館セラレタリトソ、

91  
〔頭注「閏老再ヒ勅使旅館参候」  
〇六月廿七日、両老ハ重テ

勅使ノ御旅館ニ参候シ、前日ニ同シク後見職ノ一事ハ  
種々苦情ヲ述ヘ御受ノ向ニアラス、殆ント手切レノ形  
勢ニ立到レリ、茲ヲ以テ終ニ来ル二十九日大原殿御登  
城、當中ニ於テ議セラルヘシトテ、其日ノ御論責ハ罷  
メラレタリトソ、〇如此切迫ノ事情ニ立到リ、幕府ハ  
將軍幼冲ナルカ故、庶事吏員ノ議決ニ出、議論百端、  
異言喧囂、

勅旨違背ノ勢ニ迫リ、剩ヘ一橋公ハ戊午ノ年頃ヨリ幕吏  
中ニ人望ナク、畢竟大権掌握ノ意アリト巷説ニモ涉レ  
ルヨリシテ、譴責退隱ノ処置アリシ事情ヲ今復唱フル  
ニ依リテ、今回モ後見職ノ地位ニ置クコトヲ甚タ忌嫌  
セリト云フ戊午ノ年、一橋公カ流説ニ罹リ、タル顛末ハ當時ノ記ニ詳ナリ、如此キ情実アル  
カ故、幕吏ニ於テ此一事ハ曖昧ニ付シ遷延スルノ情意

ナリシト云フ、然レトモ大原卿ハ素ヨリ、 国父公ハ  
此一事三ヶ条ノ要点トセラレシカ故、屢大原卿ヘ御意  
見ヲ述ヘラレ、大原卿ハ

勅命ヲ辱シメラルノミナラス、

朝威ニ関スル至重ノ事柄ナルカ故、必至ノ御心得ニテ、  
本日ノ御登城ハ是ヲ限リト御決心、要用ノ書類ハ悉ク  
焼キ棄ラレ、御内ノ土堀内典膳ナル者ヘ含メラレタル  
趣モアリテ御登城アリシト云フ、如斯ノ時機ニ臨メル  
カ故、本藩士從駕ノ人々モ格護ヲ極メタリトナン、

92  
〔頭注「勅使登城、第四回」  
〇六月廿九日、

勅使大原卿ハ午ノ上刻頃御登城アリテ、脇坂・板倉其他  
大小ノ幕吏威儀ヲ繕ヒ列坐セシ中ニ於テ、

勅旨奉行速ナルヘキ旨責問セラレシニ、吏員等大原卿ノ  
必死ヲ極メラレタル威嚴ニヤ恐怖シタリケン、前日ノ  
形況ト反对シ、異議ヲ吐ク者ナク悉ク敬伏シ、

勅旨残ル処ナク循奉スヘキ旨ノ内答ヲソ述タリシト、真  
ニ危カリケル時宜ナリシトソ、

○六月十九日、京都守衛兵出張ヲ令セラレタリ、物主島津左〔知覽郷カ〕津余〔知覽郷カ〕ヲ領ス、当番頭職、御軍賦役坂本彦五郎〔貼紙〕「実名」・御目付肥後直次郎、兵士ハ御城下一番組十名・三番組十名・五番組十名、合計三十名、外二足輕三十名ナリ、

○編者曰、国父公御発駕ノ際ヨリ今ニ至迄、上京ヲ頼願スル者夥ク、中ニモ島津石見上京拜命ノ時ヨリ〔久静〕

懇願シテ熄マサル者寡ラス、国老ヲ初メ其筋ノ者ハ甚タ困却シ、太守公臨機御上京ノ時ハ多勢引卒セラルヘキ等ノ言ヲ以テ説諭鎮静セシカトモ、尚ホモ頼請シ熄マサル処ヨリシテ、以来六組ヲ中分シ当直ヲ定メ、一組内壯健ニシテ品行正シキ者ヲ選抜シ命セラルヘキニ規定シ、今回ヨリ其規則ニ準シタリ、然リト雖モ其選抜ヲ希望スル者又多ク、組頭ニ向テ切迫スルニ至リ頗ル困却セリトソ、○本日奉命ノ人員ハ、島津石見病死或ハ守衛人員麻疹ニテ死亡ノ虧員ヲ補ハンカ為ニシテ、則チ島津左〔貼紙〕「実名札ス」ハ島津石見カ跡職ニ命セラレタル者ナリ、

94 ○六月廿日達、

野々山丹後守外国奉行被仰付、○同月

晦日達、松平伯耆守〔貼紙〕「宗」丹後所司代被仰付〔大坂御城、代ヨリ〕

○有馬左衛門佐〔道純〕越前寺社奉行被仰付〔御奏者、丸岡〕○松平伊豆〔大河内信吉〕

守〔參州〕大坂御城代被仰付〔寺社奉、行ヨリ〕○新見伊勢守外国奉行〔正興〕

御小姓組、○岡部駿河守外国奉行〔長常〕○酒井若狭守〔忠義〕若州番頭ヨリ〔後徳〕

代森川出羽守 思食有之御役御免、帝鑑間席被仰付候〔京都所司代ナリシカ、奸佞ノ所為不少、カ故黜斥アルヘキ旨御獻言ニ出タリ〕

○六月廿三日、太守公南林寺御參詣アラセラレタリ、

麻疹流行、御供番人員中該病ニ罹リタル者多キニ依リ、諸局員ヨリ臨時御供番命セラレタリ〔本日ハ旧慣ノ所謂六月灯ナレトモ、流行病ノ故ヲ以テ例年ノ如ク賑ハ、サリキ、〕

○六月廿三日、国父公大原卿ノ御旅館へ御参向、一橋

刑部卿殿ト初テ御面接アリ、越前々中将殿ニモ御来会、各主客ヲ分チ御着座アリシニ、国父公ハ御謙遜、下

段ノ御座ニ就セ玉ヒシカハ、一橋・越前ノ二公類リニ御同席ヲ勸メ玉ヘトモ、堅ク御謙讓アラセラレタリ、

而シテ国事ノ御論話ニ及ハレシ時ハ忌諱ヲ顧ミ玉ワス、刻ヲ遷シテ御論弁アラセラレシニ、其時一橋公ニハ、

今迄御名声ノミ聞カセラレ御親接ハ初メテナリシカ、御諭旨高尚綽然タルニハ頗ル感嘆セラレタリトソ、一橋公後日越前公へノ御譚ニ、島津和泉〔允光〕ハ聞キシヨリモ英邁聡敏ノ人物ナリ、僻遠ノ薩州ニケ様ノ人物能クモ出来タル者ナリトノ仰アリシトソ、

97 ○六月晦日達、 明朝日

勅使 御返答ニ付、溜詰・同格・御譜代大名・高家衆・詰衆・御奏者番、右嫡子迄モ総登城勅命奉答ノ幕議紛紜トハ從來ノ習慣ヲ以テ幕威ノ墜揚ヲ論シ、名分弁識ノ者ハ僅々数名ニ過キサリシト、御側衆及ヒ奥右筆、大小監察ノ中ニ循奉論ノ人アリテ、數回ノ議論ニ及ヒ、遂ニ循奉論ニ帰シタリト、○奥右筆ノ中ニ早川庄次郎ト云ヘル者ハ、元來正論者ニテ今回ハ頗ル力メタリト云、寺師宗道カ書牘、ニ捩リテ記ス、

○編者曰、此報告ノ説出所詳カナラス、巷説ニ等シト雖モ、当時幕府ノ形勢上ニ就テ考察スルトキハ、信ヲ置クニ足ルノ説ナルカ如シ、素ヨリ幕議機密ニ涉レルカ故、出所詳ナラサルハ無論ナリ、○奥右筆早川ハ我カ藩邸ニモ立入りノ人ナリシトソ、果シテ此等ノ密話ニ出タル者ナラン歟、

98 〔頭注一勅諭循奉〕  
○七月朔日、

勅使大原左衛門督重德卿御登城、 將軍家御対顔、勅諭奉循ノ御式執行セラレ、御先規ノ如ク酒饌ノ御饗心等滞リナク畢レリトソ、

99 ○七月二日、江戸飛報来着ス、曰ク、六月七日 国父公

勅使大原左衛門督殿へ御差副、江戸御着駕ノ趣ヲ報ス、依テ本日御一門家及ヒ大身分以下諸士登城、 太守公 国父公へ御祝儀可申上旨布告セラレタリ、○江戸芝ノ本邸ハ去ル辛酉十二月焼亡セシ故、高輪ノ別邸ニ御座ナサル、トソ、同邸ハ、齊興公御退隱後ノ御棲居ニ、テ、其後勝姫君齊興公御棲居トナレリ、

100 ○七月二日、 太守公磯邸へ被為入、同日ヨリ御滞在ア

ラセラレタリ、御本丸御休息所御修復アルニ依テナリ、  
〔貼紙一此達書、第七卷ノ如クナルヘシ〕  
○七月二日達、 御刀 片山 代金三十枚 〔忠義〕 松平修理太夫名代島津淡路守 忠寛、佐、土原侯

右島津三郎儀、用向有之上京致候処、浪人共相集不穩様子有之候ニ付、鎮静可致蒙 御内諭、差向取計骨折

候二付被下之、右、於御白書院「縁」〔朱書〕類老中列坐、豊前守申渡之〔閣老松平豊前守、勝行、下総多古〕

102 〔頭注朱書〕「此条紹述編年ニモ書載ナシ、削除スベシ」  
○七月二日、国父公閣老水野和泉守殿江御見舞、尋テ〔貼紙〕「御書入レノ如ク削除ス」

越前々中将殿江御参向、御談話刻ヲ遷サレタリト、御談話ノ事柄ハ〔朱書〕

103 〔貼紙〕「此達書、第七卷ノ如クナルヘシ」  
○七月三日達、大久保越中守、大目付・外国奉行兼帯

被仰付〔御側衆、ヨリ〕、〔竹内凶書頭、忠寛〕外国奉行被仰付〔神奈河奉、行ヨリ〕、  
○菊池大助、外国奉行被仰付〔御勘定吟、味役ヨリ〕

104 ○七月四日、国父公御二女入来院〔貼紙〕「実名札ス」妻流行〔公寛〕

麻疹ニ罹リ死去セリ、太守公御喪中ナルカ故、御喪服先規ノ如ク受ケサセラレタリ〔入来院ハ入来郷千八、百十五石余ヲ領ス〕

105 〔頭注〕「二橋公再ヒ相統」  
○七月七日達、御使脇坂中務太輔・松平豊前守ニテ徳

川刑部卿殿〔喜慶〕、右、以思召再ヒ相統被仰出、一橋領十万石被進候旨、今朝被仰遣候、○同日、徳川刑部

卿殿 御登城、於御座之間 御対顔、今度以

叡慮被 仰遣趣有之、御後見被仰付候、○右ニ付詰合布衣以上之面々へ於芙蓉之間老中列座、豊前守演達之、若年寄中侍座、

○編者曰、一橋殿ハ去ル安政五戊午ノ年、譴責ヲ蒙リ

退隱謹慎セラレタリ、水戸黄門齊昭公第七子ニシテ一橋家ヲ相統セラレ、当時大二名望アリ、齊昭公ノ志ヲ継ヒテ尊

王ノ道ニカメラレタリトソ、茲ヲ以テ 国父公ノ御献言ニ出タルヲ

朝廷嘉容セラレ、幕府へ仰セ下サレシニ依リテ本日如此達セラレタリ〔達セラレタリカ〕、偏ニ 国父公至公至明ノ御献言ナ

リト一般感称セシコトナリキ、○扨メ御献言ノ趣幕府ニ漏レ聞ヘタル時ハ、幕吏中大ニ物議ニ涉リ、一

橋ハ薩州ト密謀、大権掌握ノ意アリ、或ハ薩州ハ名ヲ天下ノ為ニ仮リ、其底心覇術ニ意アリト喋々、疑

惑ヲ生シタルコトナリシト、仍テ 国父公御出府ノ上ハ抑制ノ処分ヲ施サ、ルヘカラス、否ラルル時ハ

他日臍臍ノ憂アラント、或ハ京師ニ於テ制圧シ勢ヲ挫カント、或ハ浪士蜂起ノ原因モ薩州ノ奸謀ニ出タ

リト、其紛議停止スヘカラサルノ勢ナリシニ、御献言書ニ公武御合体ノ御明文アルヲ以テ要路二三ノ正論者類ニ痛論シ、又ハ薩州ノ献言モ

叡慮トナリシ上ハ循奉セサルヘカラス、否ラサレハ天下ノ人心ニ背違シ幕府ノ罪トシ、喋々タルニ立到ルヤ必セリト献論スル者アリテ、而シテ抑圧ノ議ヲ熄ルニ至レリト云フ、当時幕府ノ形勢ヲ以テ考フルニ、果シテ説ノ如クナリシヤ疑ナシ、其時迄ハ幕威モ未タ熾ニシテ、抑制セントセシヤ論ヲ俟タサルナリ、寺師宗道・伴鉄太郎等カ報牘ニ抛ル、

106  
〔頭注〕「閣老ハ大政改革ヲ論セラル」  
○七月七日、〔朱書〕 国父公ハ閣老板倉周防守殿ヘ向テ幕政ノ

得失ヲ論セラレタル御書左ノ如シ、

去ル丑年亜米利加人渡来、引統諸夷来舶種々願望申

出候処、於〔乍念脱カ〕 公辺

叡慮御伺ニ不為被及、条約御取究〔不被為及カ〕 大老井伊直弼專恣、終ニ 公武

之御間漸ク御隔意被為成、一統之人心モ是カ為ニ不穩趣ニ伝承仕、甚危急至極ニ御座候、申上迄モ無御

座、三百年來 御代々様之御累恩ヲ奉蒙、且当時御内〔朱書〕「縁」モ有之〔天璋院殿ノ御縁統〕 儀ニ御座候得者旁傍觀難仕、殊ニ亡兄薩摩守〔朱書〕照国平素 公武之御為抽忠勤度存念

ニ御座候処、不幸ニシテ志ヲ空フシ遺憾不少儀ニ御座候、臨終之節私人江委曲遺命之趣モ有之候ニ付、其以來忘寢食、朝夕苦慮罷在候処、去々春以後变故井伊直弼刺サレ、尋テ安藤信睦傷ラ〔朱書〕 不一方其儘御改轍無御レタル等ヲ指サ、レタル者ナリ、〔朱書〕 如何様成場合ニ趣候半モ難量、家督ニモ無之身ニ而甚僭越之至ニ御座候得共、是迄之御政事振觀察仕候処、

天朝御尊崇之道不相互、正邪之弁致表〔朱書〕裏、冤魂愁声草野ニ満チ、御外政ニ於而者因循苟且之四字ヲ不被為免故ヲ以テ、虚実者不奉存候得共、乍恐被為惱

宸襟候御模様モ奉伝承、外患者措置、内憂日ニ迫リ、変端牆下ニ生スル之勢顯然ニ御座候間、旧臘家来之者

差出シ〔堀次郎等ヲシテ建言セラレタリ、久世氏閣老久世大其願末ハ文久元年ノ記ニ詳ナリ、和守広周〕

存慮之趣致献白候得共、迤モ御取用相成候御模様ニ無之、遷延之中不可救勢ニ罷成モ難量奉存、是上者是非出府仕、存慮十分言上仕候含ニ而修理太夫申談、

去三月中旬国許発足仕候折柄、京摂辺江諸浪士蜂起、且家来之内私趣意心得違候者共致与力、不容易形勢罷成、迺モ無事通行難仕候二付、無抛一往大坂屋敷江取押置、四月十六日近衛家江参殿、成行人 御耳候処、恐多モ達

叡聞、当日浪人鎮撫之蒙

御内命、誠以冥賀之至恐人難有奉存御受申上、滯京罷

在候内浪士共推而上京仕、騒乱相企候段承及候二付、早速家来差出取押方精々申付候処、乍漸静謐之形ニ

伏見寺田屋ニ於テノ事ヲ  
指サ、レタル者ナリ、相成申候、然処於

朝廷

思召之御訊被為在、

勅使被差立候二付、私ニモ引続出府周旋可仕旨、別紙

之 別紙トハ、 勅使御差副関  
東御下向御拜命ノ書ナリ、通被仰付、重畳恐人難有奉存、

五月廿二日京地発足、先月七日御当地着仕候二付而者、直様表通行<sup>〔献言仕度カ〕</sup>献言仕候奉存候得共、此度者非常

出格之

叡慮ヲ以

勅使被差立候御事故、

勅使之奉 命不被為濟内私ヨリ献言仕候而者、

勅使ヲ差置候場ニ相当リ越俎之罪ト奉存、慙ト差扣罷在候処、内々承知仕候得者、

勅諭御奉行被為在候御内定之由、無此上御慶事恐悅至

極ニ奉存候、從來私持論者、天下之人心帰嚮仕候御

方 天下人心ノ帰嚮仕候御方トハ、一橋公  
及ヒ越前老公等ヲ指サレタル者ナリ、要路ニ御出職、公

武之御間大道相立、無内外表「裏」<sup>〔朱書〕</sup>真実之御一和二被

為成正邪明白、下草莽之匹夫ニ至迄、御威徳ニ敬服仕候御政事之基本定リ、上下一致 御国体堅実之

上

叡慮ヲ被為伺、時世ニ応シ天下之公論ヲ以外夷之御所

置、永世不朽之良法被召建度愚存ニ御座候処、於公

辺早其辺ニ 御着眼被為在、先月朔日之御書付拜承

仕、誠以感佩之至ニ不堪儀ニ御座候、乍去實際施行

之处、古来ヨリ難シトスル事ニ御座候得者、非常之時節御実事不致齟齬様能々御了得、要路之御役々正

邪綿密ニ御評議ニ而黜陟被為在度奉存候、是迄 御

〔貼紙〕「幕令得テ記載スヘシ」威光トカ申候而善悪無御構御压服之御手段者、乍恐

近来之御弊政ニ而弥人氣激発之基ト奉存候間、右等

之御気味御一洗、寛永已往之御政事ニ被為復、公武御合体之大基本被為立候上、義理上ヨリ生シ候真実之御威光被為在度、偏ニ奉懇願候、右申上候如ク内外非常之世態、殊ニ当時御賢明ニ將軍家茂公ヲ指サ、レタル者ナ被為在候由モ粗奉承知候得者、愚考之趣胸臆ニ秘シ候時節ニ無御座ト奉存、不顧不肖之身、虚飾ヲ去リ忌諱ヲ犯シ奉獻言候、若御採用之儀ニ御座候者、猶又存慮之趣可申上候、以上、

七月七日 島津三郎

〔本文書は「玉里島津家史料」二二五五号と同文なり〕

○編者曰、是迄御威光トカ申候而、善悪無御構御庄服之御手段云云、元来暴威庄抑ヲ以施政ノ得策トセシハ御文ノ如クニシテ、事実人情ヲ察セス、形跡ヲ審ニセス、正邪曲直ヲ問ハス、圧抑緊制スル、是ヲ威光トシ概言スレハ暴威抑制ト云フヘシ、近々警テ謂ハンニ、安政五戊午ノ年、宮・堂上方初メ各藩侯及ヒ諸藩士ヲ囚圍ニ陥レ、或ハ斬流等ニ処シタル、全ク曲直邪正ヲ問ハス事実ヲ審問セス処分シタル者ニシテ、施政上障碍アリト認ムル時ハ直ニ此ノ如キ暴行ヲ施シ、甚シキニ至リテハ檻中ニ永ク止メ、或ハ葉殺スル等ノ姦悪ヲ施シタル類往々算フルニ違アラス、是カ為メ幾干カ無辜ニ所刑セラレシ者拳テ数フヘカラス、剩ヘ上 朝廷ニ對シ奉リテモ願々ノ中ニ東縛シ奉リシ事モ亦寡カラス、或ハ勅命違否セン事モ又多シ、此等ハ悉ナ威光ノ部中ニ出タル所為ニ外ナシ、故ニ幕府ヲ悪ム者日ハ日ニ多シ、茲ヲ以テ直言諫諍セラレタル者ナリ、

107 ○七月八日、例年ノ通諏訪社祭典ニ付、太守公御喪中

入来院恰妻死去ナルカ故、近在二十四ヶ村神事踊一名太鼓踊延日シ、本日ヨリ初リタリ例年七月二日ヨリ十二日迄、日々二三、村又ハ四五ヶ村連合シ興行スル例ナリ、

108 〔頭注〕「春嶽公政事惣載」  
○七月九日達、松平春嶽、右今度以

獻慮被 仰遣趣有之候ニ付、政事惣裁職被 仰出候、右

於御前被 仰付候、右之趣詰合布衣以上之面々へ於美

蓉之間老中列座豊前守演達、若年寄中侍座安政戊午ノ年 譴責ヲ蒙ラレ

退隱謹慎セラレタリ、然ルラ 国父公御献言ノ趣 朝廷御採答、幕府へ命セラレ、本日爰ニ至リシ者ナリ、当時幕議ノ情実ハ一橋殿ノ条下ニ記ス、カ如シ、

109 ○七月十日、各組頭宅へ諸士喚ヒ出シ達シノ趣ニ、

今般 国父公 御滞京中又者江戸ニ於テ

勅使ニ御副力、閣老其他一橋・越前侯等へ御議談ノ概略

演達セラレタリ各組頭之ヲ、 演述セリ、

110 ○七月十八日、

〔頭注〕「勅使循奉御受ノ式」  
勅使大原卿ハ御発途御暇乞ノ為メ 御登城、 將軍家江

御対顔、御式事残ル処ナク執行セラレ、

勅諭之趣違背ナク、奉循ノ御請書モ本日將軍家ヨリ大原  
卿御落手アリシトゾ、

111 ○七月十九日、 国父公ハ一橋殿ニ御参向、 春嶽公モ御

来会、 国事ノ御議談刻ヲ遷サレタリト、 国父公ノ尊  
旨ハ春嶽公御上京アリテ、 国是ノ論奏

聞アルヘシト数回御献言アラセラレシト雖モ、 幕府ハ疑  
惑ノ情実アリテ悠々不断、 事ヲ左右ニ托シ決行セサル  
カ故、 本日左ノ御献言書ヲ呈セラレタリ、

111の1  
〔頭註〕「幕府へ再度御建言」  
一 勅命之御事御座候ニ付、 是非大体国是之議論御評決之

上、 来ル八月中旬頃爰許発足ニ而越前々中将殿上洛  
有之度、 尤モ閣老一人同伴之事、

一 一橋刑部卿殿・越前々中将殿御登庸之上者、 閣老ニ  
モ実意ニ大政評議有之度、 巷説ニ、 内実者一和無之  
哉ナトト申事候得共、 若右様之姿露程モ有之候而者、

第一徳川家之御為不可然ト奉存候事 閣老ヲ初メ大小ノ幕  
史ニ橋殿ヲ忌嫌スル  
ノ情太甚シク、 其源因ハ家定將軍薨去、 嗣ナキカ故衆ノ望一橋殿  
ニ在リ、 然ルニ幕吏ハ紀伊宰相家茂公ヲ容レテ嗣トセリ、 其際一  
橋殿大権掌握ノ意アリト喋々セリ、 之レヲ忌嫌、  
ノ源因トス、 詳ナルハ文久元年ノ記ニ載ス、

一 大赦被仰出候御事ニ候得共、 至今何共仰渡無之、  
勅命御奉行之旨ト違ヒ候ニ付、 涯々御施行有之度、 尤、  
午年以来諸浪士等死流幽囚、 総而御赦免被仰出候事、

一 此節被命候所司代ニ而者、 又々人氣ニ相拘リ可申歎  
ト至極懸念ニ御座候、 今一往御評議之上御人撰ニ而、

叡慮御伺有之度事 所司代酒井若狭守(忠義)ヲ免黜シ、 而シテ  
丹後国宮津松平伯耆守(宗秀)大坂御城代ナ  
リシヲ、 幕府專断シテ所司代ニ任シタリ、 人トナリ平凡ナルカ故、  
當時枢要ノ職ニアルヘキ人ニ非ラサルヲ以テ斯ク献言セラレタリ

ト、  
但、 大坂モ同断、  
一 是迄 公武之御間名義不相当之儀、 細々御取調御変  
革有之度事、

一 將軍家御一代一度ハ是非御上洛之事、  
○編者曰、 將軍家参 内ノ大典ハ數百年數世ノ間廢絶セリ、 是レ  
幕府ノ一大虧典ニシテ、 尊崇ノ大義ヲ誤レルノ甚シキモノナリ、  
其ノ怠リタル原因ハ德恣驕慢ノ四字ヲ免レサルヤ論ナシ、 其概略  
ヲ記サンニ、 殆ント二百三十年將軍家十一世ノ間廢典セリ、 最終  
ノ參朝ハ三代將軍家光寛永十一年甲戌ノ年、 大小ノ諸侯及ヒ數多  
ノ吏員ヲ卒ヒテ參朝セリ(明正天皇御即位第二年ニ當レリ)、 此  
ノ如ク久シク廢典ニ及ヒ、 尊崇ノ道大ニ疏輕ニ流レ、 從テ其弊一  
般ニ流伝シ、 朝廷ハ在テ無キカ如ク稍幽明堺ニ在マズニ齊シク、  
少シモ威權ヲ存セラル、 コトナク、 細大ノ政務悉ク幕府ノ左右ス  
ルル処ニ帰シタリ、 茲ヲ以テ一般幕府アルヲ知リテ 朝廷アルヲ知  
ラサルカ如ク、 実冠履倒置ト謂フヘキナリ、 是ニ類スル專恣擅恣  
ノ所為ハ又挙テ算フヘカラス、 大義名分何レニ在ルモ闇昧驕脆弁  
スヘカラサルカ故、 照国公深ク憂ヒ玉ヒ、 尊崇ノ道ヲ確立セラ  
レント積年心思ヲ勞セラレ挙行セラレントスルノ際、 不幸ニシテ

天年ヲ假サス臨終、 國父公ニ委ネ願セラレタリ、茲ヲ以テ 國  
 父公ハ四五年間焦慮苦心シ玉ヒ、遂ニ本年春御上洛獻言セラレ、  
 而シテ 勅使ニ副トシ東下ノ 命ヲ蒙ラセ玉ヒ、御在府中御獻言ニ  
 十ヶ条ノ要点タリ、然ルニ長州侯モ又參 内アルヘキ旨ヲ獻言セラ  
 レタレリ、 國父公ノ尊旨ト少シク異レハ、長州侯ハ速ク故速ニ  
 テテセラレ、 國父公ハ例ヲ以テ大小ノ諸侯、上下ノ吏員引卒セラ  
 レシテ難ク、寛永ノ例ヲ以テ大小ノ諸侯、上下ノ吏員引卒セラ  
 レシテ得ス、假令ヒ是ヲ減スルモ幾千ノ多キニ及ビ宿厭休泊等必  
 ス人民ノ困頓スルヤ言フ俟タス、或ハ將軍家未タ幼冲、大小ノ政  
 議悉ナ有司ノ議決ニ出ツルノ際、 朝議ニ列ラル、モ有名無実ナ  
 ルカ故、時勢臨機ノ措置、寬急先後ノ別ナクシテハアルヘカラス、  
 茲ヲ以テ先ツ一橋殿ヲ後見職ニ据ヘ、越前老公ヲ政事總裁職ニ置  
 キ、而シテ大小ノ吏員ニ賢材忠直ノ人ヲ擧ケ、庶政雜揚リ内政整  
 フヲ以テ即今ノ急務トセラレ、而シテ徐ニ上洛アリテ何ノ遅キコ  
 トカ是アラント、則チ來秋頃ト記サレタル者ナリ、長州侯ノ速ナ  
 ルヲ要セラレタルハ其ノ見何レノ点ニアリヤ、時機人情ニ於テ看  
 察セラル、処アリヤ否ヤ、聞ク処ニ論レハ、藩内ノ激論者或ハ浮  
 浪士ノ論ニ動かサレ、而シテ速行ノ慮ヲ立ラレシト云フ、其深意  
 ノ在ル処ハ、速ニ參 内ヲ促シ、而シテ 鎮攘ノ 勅命ヲ奉行セ  
 シメントスルニアリト、敢テ將軍ノ幼若自ラ事ヲ裁スルト否ヲサ  
 ルトト顧ミス、或ハ内整ヒ而シテ後外ヲ制スル等ノ寬急順序ヲ  
 定メタルニ非ラサルカ如シ、然ルヲ長侯ハ其論ニ左祖シ、激論者  
 或浮浪士等ト偕ニ公卿方ヲ逼責シ、公卿方ハ又是レニ動かサレ、  
 遂ニ無謀ニ 鎮攘ノ詔ヲ促シ奉レルニ至レリ、斯ノ如キ輕躁無謀  
 ノ論者ハ、素ヨリ彼我ノ国力形勢ノ弁ナク、妄ニ鎮攘詔ヲ朝議ニ  
 主張セラルニ於テ、國父公ハ大ニ憂嘆セラレ、各藩ニ於テモ心ア  
 ル輩ハ甚タ痛嘆スル者少カラス、如此情実モアルカ故、速ナルハ  
 キハ内政整フルニアリ、將軍上洛ノ大典ハ後ニシ、一橋・越前上  
 洛、國是ノ議定アララン事ヲ、  
 要領トセラレタル者ナリ、

一 諸御書付認振之事

幕府カ名分ヲ誤リ大義ニ悖リ、僭上驕慢ノ所取為アルハ枚擧ニ遑アラズ、中ニ就テ最モ

甚シキヲ極タルハ、外國ニ対スル文章ニ日本大君ト記シ、或ハ大  
 小ノ政務獨裁、進退ノ權ヲ握リタルカ如ク二書シ、則チ条約締盟  
 至重ノ書ニモ日本大君殿下ト記サシメタル事共、真ニ潛踰擅恣ト  
 カ謂ハン、妄矜トヤ謂ハン、名ツクルニ苦ムノ拳動ナリ、剩ヘ内

ニシテハ京都ヨリ仰進ハサル、或ハ仰進セサレシ等ノ文ヲ以テ  
 シ、君臣ノ分ヲ明ニセザルモ又多シ、如レノ書式ヲ用ルコト茲ニ  
 年久シ、悉ナク人嘆慨スル処ナラハ多言ヲ要セス、茲ヲ以テ 國父公、  
 ハ穩靜ニ御書付認メ振リト記サレ、其妄弊ヲ匡サレタルモノナリ、  
 一 勅使御会釈向等其外段々可有之事、

○編者曰、從來幕府カ驕慢恣態僭上ノ所為少カラサルハ喋々弁ヲ  
 要セスト雖モ 朝廷ヲ奉輕、或ハ 勅使御会釈上等ノ輕疏ナル一  
 ニヲ記サンニ、寛永ノ初メ家光將軍參 内ノ後ハ二百餘年、十一  
 代ノ久シキ斷ヘテ入朝ノ大札ヲ廢シタルミナラス、百位任叙ノ  
 命ヲ奉スルニモ 勅使ヲ引キ受ケ、或ハ年賀或ハ吉凶事アル毎ニ  
 勅使東下セラレ、或物品拝戴等種々ニ付テモ坐カラニシテ、不遜不  
 敬ヲ極メタリ、 勅使ハ城外龍ノ口ニ伝奏邸ト唱フル一小館ヲ設  
 ケ、自身ノ大名或ハ高家ト唱フル旗下ノ者ヲ御馳走役トシ待遇迎  
 送セシメ、將軍自ラ參向セラル、等ノ禮典モナク、無礼ノ甚シキ  
 ト謂ハサルヲ得サルナリ、又將軍ヨリ 朝廷ヘ年賀其他吉凶ノ事  
 ニモ大小ノ大名・高家或ハ所司代ヲ以テシ、閣老カ上京スルハ非  
 常止ムヲ得サルノ事アルニアラサレハ、曾テ上京スルコトナシ、  
 即チ安政五戊午ノ年開港 勅許ヲ逼リ奉ル等ノ大事ニ非ラサレハ  
 上京セシコト罕ナリ、又所司代ナル職ハ朝廷百般ノ御用弁達ヲ名  
 義トシ、其実ハ 朝廷及ヒ皇族或ハ公卿方等ヲ抑制スルニアリ、  
 故ニ諺ニ、閣老昇進ノ階梯ハ初メ大坂城代ヲ勤メ金銀ヲ掌握シ、  
 而シテ所司代職ニ轉シ握掌シタルヲ散布シ、而シテ閣老ニ昇轉シ  
 倉庫ヲ充タルコト云フ、或ハ所司代ナルモノハ必ス閣老ニ出頭  
 ハ閣老ニ昇進スルコト能ハス、不都合ナレモノハ必ス閣老ニ出頭  
 ストモ云ヘリ、實ニ諺ノ如シト云モ虚言ニ非ラサルナリ、故ニ所  
 司代職ヲ奉シ昇等ノ望アルハ必ス抑圧甚シク、暴行<sup>取斂カ</sup>收斂至ラサル  
 ナシ、其ノ者ハ必ス閣老ノ顯地ニ出頭シ、倉庫ヲ滿タシムルニ至  
 レリ、豈ニ太甚シキ者ト謂ハサルヲ得ンヤ、近代所司代ノ純良シ  
 リシハ嘉永ノ頃脇坂淡路守安宅公ニシテ、始 朝廷ヲ尊崇シ、  
 嘉永七甲寅ノ年、内 裏炎上、再建ノ際ニ三條実万公ト謀リ、御所  
 ノ狹隘ナルヲ嘆キ、弘張等其他尊重セラレシ事蹟少カラス、然ル  
 ニ果シテ閣老ニ出ルコト能ハス、寺社奉行ニ轉セラレタリ、朝廷  
 ノ御為小大カ力ヲ尽サレタル事蹟ノ概略ハ実万公ノ伝ニ記セルカ如  
 シ、又輕シ奉リタル事ハ枚擧ニ遑アラスト雖モ、最モ甚シキヲ  
 極メタルハ、今ヨリ九十八年前寛政四庚子ノ三月、閏東ヨリ閏白

殿下へ向テ関東武運長久祝賀ノ 勅詔ヲ賜送セラレンコトヲ依頼セラレシニ、仙洞御所ニハ深く之ヲ拒マセラレタリ、殿下ハ関東ノ氣嚮ヲ憂ヒ、強ヒテ御製ヲ賜ヘラシメテ、奏セラレシ故、御心ナラスモ、宸翰ヲ染メサレシコトヲ、院使芝山前中納言持豊卿関東へ向テ発セラレ、途中思フ旨アリテ恐クモ、勅封ヲ開キ見ルニ、御製、葎生ひ茂りて道も分ぬ世にふるは涙の天か下かな、トアリケレハ、持豊卿ハ、御製ノ意関東ノ意ニ触レシコトヲ慮リ、病氣ト称シ引返サレ、遂ニ御製ハ下サレシトナン、関東へハ早くモ此事洩レ聞ヘ、此ノ如ク公卿方ニ侮ラリ、ハ武門ノ瑕瑾ナリトノ議ニ出テ、五ヶ条ノ趣ヲ以テ逼リ奉リ、御返答ハ伝奏ノ中一人下向アリテ承ハラス、ハ五ヶ条ハ則チ左ノ如シ、一諸大名道中ニテ、勅使タリトモ下座致サスヘク、登城ノ節ハ如何ナル、勅使タリトモ下座致サスヘク、一位位入内等ニ上使ハ遣セトモ、其外ノ事ニハ所司代ヲ以テ取扱ハセ候事、一位階之儀者、天子ノ御心ニ任ルキ事、一勅使タリトモ筋違ヒノ儀ニ於テハ遠慮無ク違、勅致ス間敷事、一後醍醐天皇北条高時ヲ亡シ玉フヲ天皇御叛逆ト称ス、上ヨリ下ヲ討ツ事征伐ト称スヘキヲ、太平記ニ右ノ文アリ、是ニテ公方ノ職掌重キ事知ラレハキ事、右五ヶ条ノ趣、朝議区々ニシテ関東ノ不遜不敬ヲ怒ラサルハナク、殊ニ去年、勅詔ヲ下サレシ太上天皇閑院ノ宮一品典仁親王（自在王院宮トモ云フ）宣下アルニ付、千石二千俵御用途ノ事今ニ何タル、勅答モ致サ、ノミナラス、斯ノ如ク不遜ノ条件ヲ申立ニ於テハ此儘ニ閣キ難シト、朝議ヲ以テ議奏中山前大納言愛親卿ヲ、勅使トシ関東へ差下サル、是レ今ヨリ九十五年前、寛政五癸丑三月ノ事ナリ、而シテ関東ニ於テハ閣老松平越中守（勢州桑名ノ城主）松平和泉守（參州西尾城主）等幕威ヲ以テ任当セント議定シ、三月廿一日、勅使御対顔、五ヶ条ノ御返詞回答ニ及ント先規ノ如ク諸大名惣登城、將軍家御対顔（將軍家齊公）アルヘシトテ、御一門家ニハ尾張大納言宗陸、紀伊大納言治室・水戸中納言治保・松平越前守治好、松平陸奥守重村、細川越中守治温、国主大名ニハ加賀宰相斉広、松平陸奥守重村、細川越中守治年、松平大膳大夫治親、松平肥後守治茂、松平相模守斉邦、松平阿波守治昭、佐竹右京大夫義明、上杉弾正大弼治広、溜ノ間詰ニハ井伊掃部頭直中、松平隠岐守定國、酒井雅楽頭忠道其他三卿・三家ノ庶流、譜代外様ノ大小名・諸代人等意氣揚々、ヒ威ヲ以テ任当セント中山・正親町ノ両、勅使ニ向テ議論ニ及ヒシカトモ、遂ニ中山卿ノ為ニ説破セラレ、將軍家御対顔ノ式モナク引

キ入ラレタル程ノ時機ナリシヲ、水戸中納言治保公不敬ノ罪ヲ謝シ、五ヶ条ノ 勅答ヲ承ル迄モナク、太上天皇 宣下御用途千石二千俵ヲ献セント御受申上タリ云云、中山殿ニ非スニハ此幕府ヲ制抑スルコト能ハサルハ勿論、五ヶ条ノ趣消滅ニ至ラハ此幕府ナリ（詳ナルハ公武問答記ニ記スルカ如シ）、又浜リテハ寛永四年丁卯ノ年（三代將軍家光公、比叡山延暦寺ニ擬シテ東叡山寛永寺ヲ創建セント、勅許ヲ促シテシカトモ、容易ニ允サレシシカハ、松平伊豆守カ奸謀ヲ以テ、遂ニ勅許ヲ得、比叡山ト同シク皇族ヲ申シ下シ坐首ノ宮ト尊崇セシハ、大ニ故アル事ニシテ朝廷ヲ輕シ奉ルノ一手段ナルノミナラス、若シ 朝廷幕府ヲ厭ハセラル、時ハ、宮ヲシテ関東ニ錦旗ヲ特立セシ、奸意ニ出タル者ナリト云フ、果シテ然ラシ、其証左トスヘキハ、東叡山ノ宝庫中ニ不明ノ一函アリシテ開キタリシニ、錦旗一流ヲ納メタリ、依テ勝安芳・大久保一翁、山岡鉄太郎等議シテ 朝廷ニ返納シタリト之レ近ク明治三年ノ冬ノ事ナリ（明治四年ノ春、於東京山岡鉄太郎ヨリ市來広貫親シク問ク処ナリ）、是ニ依リテ考フルニ、寛永寺創建ノ本意ハ上文記スルカ如ク、暴奸ニ出タルヲ証スルニ足レリ、殊ニ寛永寺開山ノ僧ハ南光坊海天ナリ、此僧ハ家康公帰依セラレ、陣中ニモ顧問ノ場ニ置レタル者ナリ、海天建言曰。方今列藩推戴。海内無虞。若遷皇居於伊勢。使天家率公卿。專奉太廟祭祀。如往時神祇伯。不復関天下之政。則幕府之隆。莫尚焉。高虎駁之曰。鉅藩宿將。所以推戴幕府者。以其不失礼朝廷也。若逼朝廷移皇宮。則雄藩争起。將問侮蔑朝廷之罪。此大乱之本也。家康深然其言。是レ岡千仞カ涉史統筆ニ記セリ（岡千仞ハ旧仙台藩ノ儒者ナリ）、海天ハ真ニ惡ムヘキノ姦僧ト謂ハサルヲ得シヤ、當時徳川家ノ威力ヲ以テ 朝威ノ衰タルニ乘シ、伊勢ニ遷都ヲ促シ奉リ、祭主ニ等シキ地位ニ隔ラセラル、トキハ如何セシ、然ルニ二月末タ地ニ墜チテ、暴姦ヲ逞フスルコトヲ得サリシハ、高虎之ヲ駁セシト家康公カ名分ヲ弁シ、大義ヲ識別シタルカ故ナリ、殆ヒ哉、如此海天ハ惡ムヘク恐ルヘキノ姦僧ナルカ故、家康公薨去ノ後、生前ノ宿志ナルヲ主張シ、秀忠・家光ノ両公ニ促シテ遂ニ東叡山ヲ創立シ（家康公薨去ノ後五年ニシテ、勅許ヲ促シ奉レ、自ら大僧正トナリ開山ト仰カレ）（慈照大師ト諡ス）、巨大ノ樓閣ヲ築キ天下ノ莊麗ヲ極メ、許多ノ緑地トシ花ヲ謀リ、剩ヘ 皇族ヲ法体ノ宮トシ坐首ト仰キ、明治元年戊辰ノ役該山焼滅ニ至迄二百四十余年、綿々 皇族ヲ坐首タラシメタルノミナス錦旗ヲモ納メ置キタルハ、豈之レヲ何トカ謂ハシヤ、何シカ故ニ 皇族ヲ坐首ト仰キ錦旗ヲ秘藏シタルヤ、今亦多言ヲ俟スシテ其意ノ在リ

シ処ヲ弁スヘキナリ、又幕府カ驕傲憎上ノ太甚シキ概略ヲ記サンニ、先ツ江戸府内ニハ寛永寺・結上寺又ハ城中紅葉山等ニ家康公ヲ初、代々ノ靈屋ヲ建設シ、其結構壮大金銀ヲ「鏤」メタル、実ニ筆舌ニ尽シ得サルハ普ク衆ノ見聞スルカ如シ、剩ヘ大小藩侯ハ種々ノ奇付品アリ、中ニ毛銅石類ヲ以テ狂大ノ灯台ヲ獻設セシメ、或ハ參拜ノ式モ鄭重ヲ極メ、宿坊ヲ設ケ修造ハ多クモ祿ヲ充行ヒ、稍君臣ノ礼ヲ尽サシメタリ、諸藩侯ニ於テモ曾テ否ム者ナク、却テ甘シシ榮誉トスルノ習慣ナリキ、又墳墓モ美ヲ尽シテ結構シタル等、細記ニ遑アラズ、或ハ大小藩共ニ其國邑ニ代々ノ靈ヲ尊崇シ、祭祀ヲ為サシムル等ノ事モアリタリ、或ハ芝ノ海濱ニ別業ヲ設ケ浜御殿ト唱シ、広大美麗ノ結構ナリハ悉ク人知ルカ如クニシテ、將軍爰ニ出向ノ時ハ隣近ノ民間ハ朝夕ノ炊煙モ立テ得サルニ至リ、通街ノ往来ヲ停メ、或ハ門戸ヲ閉鎖セシムル等ノ嚴戒ヲ下スノ事モアリタリ(八丁四方炊煙ヲ禁ストモ云ヘリ)、其他日光・久能等ノ壮大美麗ハ寛永・増上兩寺ノ上ニ出タル、如此セリ上驕奢ナル、是ヲ北条・足利ノ驕僭ニ比ルモ週上ニ出タルヤ必セリ、然ルニ泉涌寺ニ在ル御代々ノ御陵ヲ拜スルニ、幕府ノ墳墓ト同日ニ詣ルヲ得サル輕粗ナリ、誰カ之ヲ慷慨セサランヤ、或ハ百事匱乏ナル、其一二ノ概況ヲ伝聞スルニ、先帝(孝明天皇)御若御定日モ夫レカ為メ遷延セラレタリシ故、或ル公卿大ニ憂歎忿慨シ(三条実万公或ハ岩倉具視公トモ云)、所司代ニ向テ御費途増額アラシム事ヲ嘆談セラレシニ、所司代ハ安リニ増額スルヲ得サルカ故、自弁シテ其御費用ヲ償ヒタルコトアリシト云フ(當時ノ所司代ハ脇坂安宅候ナラン乎)、此ノ如ク僅々御歌會ノ費用ノ如キモ弁シ得ラレサル御匱乏ナルヲ以テ百事推計スヘキナリ、或ハ朝夕御饌供モ甚タ粗輕ナルニハ、調饌ノ吏派ヲ流シタルコトモアリシト云フ、億兆ノ君ニシテ此ノ如ク匱乏ノ御形況ナル、幕府ノ暴逆ナル、真ニ名ツクルニ由ナシ、國民タル者誰カ是ヲ憤ラサラン哉、北条・足利ノ暴戻ト徴ヲ同フスト謂フヘシ、從テモ之、活道ニ生計ノ困頓ナル亦甚シク、小身ノ公卿方ハ内職ヲ爲シ、活道ニ資スル者少カラス、之レニ反シテ幕吏ノ驕侈ナル、実ニ霄壤ノ違アリ、斯ク迄暴奸取斂ヲ百世ノ後ニ伝ヘ、益々其意ヲ繼紹シ暴威ヲ逞フセントスルノ時ニ方テ、國父公ハ七百年來相伝ノ家國ヲ顧ミ玉ハス、身ヲ犠牲ニ置レ、皇威ノ衰頹、国家内外ノ多難ヲ憂ヒ玉ヒ、奮然勇決、上洛セラレ、數百年來衰頹ヲ極メ、在レトモ無キカ如クナル、皇威ヲ回復シ、或ハ大政変更其他細大ノ事項<sup>事項</sup>獻言セラレ、數代得策トシタル奸術暴權ヲ逞フスルコト得サラン

メ、僅々四十余日ノ間ニ勅諭ノ件々其他御獻言廿五ヶ条ノ趣循奉<sup>奉</sup>或ハ採容、奸吏黜斥等施行スルニ至レルハ、古今ナク御鴻業ナルハ贊言ヲ俟タス、実ニ維新ノ盛業ハ此ノ時ヲ以テ元始トスルハ衆ノ知ル処ニシテ、千載不拔ノ一大偉功ト謂ハスシテ何トカ謂ハシ、

一和宮様御会釈向、今一際御手厚有之度、是迄 將軍家

ヨリ諸大名江御縁組ニ不准ト奉存候事、

○編者曰、和宮閩東降嫁ノ其因テ起レルハ、井伊大老・安藤閣老等カ姦謀ノ一ニシテ、公武御親睦ノ名ヲ振り、強ヒテ勅許ヲ促シ奉リシ者ナリ、御会釈上ニ於テモ甚タ粗略ニシテ、尋常將軍家婚娶ニ少シク異ナル処アルノミナリシト、將軍家ノ子女諸大名へ婚嫁ニ比スレハ永炭相違セリト云フ、○將軍家ノ子女諸大名へ婚ノ式ハ、尊大鄭重花美ヲ尽シ驕奢ヲ極メタル者ニシテ、許多ノ吏員ヲ付シ數員ノ婢ヲ從ハシメ、夫家ノ費耗敢テ顧ミス、加之夫家ニ於テハ御次殿ト唱ヘ空ヲ異ニスルノミナラス、婦ノ出入門戸ヲ異ニシタリ、之レヲ御次殿門ト唱フ、剩ヘ夫ハ婦ニ下リ、朝夕夫ハ婦ヲ敬礼スト云フカ如キノ動作モアリタリト云フ、斯ル冠履御置ノ舉動アルモ悲ヒ哉、却テ榮誉トスルノ風ナリキ、甚シク者ト云フヘシ、如此當時ノ習弊ナルカ故、將家ノ婦ヲ聚リシ諸侯ハ必ス國庫空乏、遂ニハ國民ノ膏血ヲ絞リ塗炭ノ困ヲ与ヘ、流離顛廢或ハ一揆蜂起ノ擾々タルニ立到リシ者モ尠カラス、真ニ朝府ノ所為驕傲是レ極リタリ、如此キノ弊數百年ノ間ニ在リテ、諸侯ニ於テ是ヲ臣スノ氣力ナカリシニ、断然獻言セラレタルニハ咸人驚愕感佩セシ事ナリ、○因ミニ記ス、照國公御龐中ハ一橋家ノ御養女ニシテ、実ハ將軍家齊公第 女ナリ(第何女札スベシ)、御結婚御内談ノ時 齊興公ノ御冀望ニハ、三卿ノ内養女トセラレ、尋常相當ノ御婚式アランコトヲ望マセラレシニ、幕府モ已ム事ヲ得ス御望ニ任セラレタリト云、公ハ所謂御次殿ノ弊害ヲ慮ヒ玉ヒシ事ナリシト云、詳ニ 照國公御事蹟ニ記ス、

一御同人様御心願之御事御座候二付、來春中二者是非御

上洛被為在度奉存候事、

一 朝廷御統料、拾万石程御重メ有之度事、

但、公卿方モ方今忠誠之御方者今少シツ、同斷、

○編者曰、朝廷一歳御統料ノ定額ハ、僅拾万石ノ物成リナリシト  
ソ、是ヲ普通石高ノ取箇三分一ニ算スレハ、現石三千三百三十三石  
余ニ相当ス、實ニ僅少ト謂ハサルヲ得サルナリ、此ノ現石ノ内ヨリ  
主上・仙洞・皇太后・皇后・皇子及ヒ皇族方等ノ御用途一切、或ハ  
公卿方御蔵米給与ノ人々ヘモ多少定給セラルカ故、朝廷ノ御用途  
御不足御不如意ナルハ言ヲ俟サルナリ、實ニ億兆ノ君主ニマシシ  
ナカラ僅々タル定額、誰力モヲ嘆慨セザラン哉、是レニ反シテ幕府  
ハ八百余万石ノ所有ト通唱ス、是ヲ三分一ノ取箇ニシテ算スレハ、  
現石二百六十六万六千六百六拾余石ニ相当ス、此内ヨリ朝廷ノ御用  
途ニ比スレハ、幾十倍ナルヤ多弁ヲ要セス、素ヨリ旗下大小ノ給与  
此内ヨリ支給スルハ勿論ナリト雖モ、非常ノ費途アル時ハ大小各藩  
ニ賦課シ献金セシメタリ、此ヲ名付テ御手伝金ト云フ、其他豪農藩  
ニ匠課スルモアリ、朝廷ハ斯ノ如ク微々タル御用途ナルカ故、百  
事御不如意ナル謂ハスシテ明ナリ、加之、禁闕ノ周圍屏牆籬毛崩壞  
シ荊蓍散被、六九門内ノ通街モ草叢、人跡ノ通フ所纔ニ砂礫ヲ見ル  
ト云フモ虚言ニ非ラス、匹夫・匹婦モ此ノ形様ヲ見テ悲歎憤慨セサ  
ルハアラサルナリ、況ンヤ忠肝義胆ノ人ニ於テヤヤ、實ニ羈府ノ所  
為惡マサルヲ得ンヤ、○朝廷ノ御用途御不如意、或公卿方疲弊セラ  
レシハ、普ク衆ノ知ルカ如シ、其概況三条実万公ノ伝ニ記スル処左  
ノ如シ、前文略ス、時ニ朝廷受積衰之余、供御常置。公卿窮困  
動輒破廉恥。公常憂之。於是首建宮中度支。廷臣加祿之議。是  
參列使于幕府。因説老中以此事。後數年有猷地増祿之舉。蓋公之  
議也。嘉永七年。皇宮火。先是。宮垣南面狹隘。又穴巽位一隅。公  
欲因新造而改其制。関白政通。素主省費。公劾。与所司代脇坂安  
宅謀。使其説政通。政通從之。議即決。癸丑。癸丑以後。外国事起。物  
情騒然。幕府起徳川斉昭參海防事。松平慶永。島津斉彬。山内豊  
信。伊達宗城等。皆為列藩之望。公文。

一 諸役人之正邪、屹度御糾シ有之度事、

但、諸大名モ同斷、

公卿方モ同斷、

一 水戸前黃門齊昭殿贈官被仰出度事、

故掃部頭公弼罪科屹度御糾シ、代數御除有之度事、

但、井伊家者先祖代ヨリ徳川家江格別功勞モ有之

候ニ付、当人迄之処ニ而申上候、

一 酒若忠義、隱居慎被仰付度事、

但、間部詮勝モ同斷、其外隨從之面々モ同斷、

一 安藤信隆者今一際重ク被仰付度、其外隨從之面々屹度

御咎メ有之度事、

但、御讓位云云之御事者実事之様致承知候ニ付、

右通申上候、

○編者曰、安藤信隆ハ大老井伊直弼ト心ヲ合セ大ニ暴奸ノ所為ア  
リシ者ナルハ悉ナ人知ルカ如シ、井伊横死ノ後モ依然在職、井伊  
カ慈意ヲ継紹シ、剩ハ、先帝ノ英邁聰明ナルヲ忌嫌シ奉リ、恐多  
クモ御讓位ヲ促シ奉ラント密カニ国学者増次郎ニ命シ御讓位ノ例  
ヲ調ヘタリトノ説、當時街衢ニ私言キタル事ナリシカ、一般大ニ忿  
薄シ、安藤カ肉ヲ喰ハント切齒痛憤セシコトナリキ、此説実ニ暴  
惡ノ最モ太甚シキノ至リニシテ、安藤ヲ惡ムノ強ヒタルニ出タル  
者ナラント信ヲ置カサリシニ、幕吏堀織部正利熙安藤ヘ向テ諫死  
セシ書中ニ、御讓位ヲ促シ奉ラント国学者ヘ史上ニ就テ調ヲ密命  
シタリ云云ノ事ヲ記セリ、是ヲ以之レヲ見レハ街説ノ誣妄ナラサ  
ルヲ知ル、實ニ北条・足利ノ罪蹟ト徹ヲ同フス、人臣タル者豈  
レヲ怒ラサラン哉、○堀ハ外国奉行兼函館奉行ニテ、當時幕吏ノ  
中ニ直実慷慨大ニ国事ヲ痛嘆シ、數回安藤等ヲ論責シ、事容レラ  
レサルカ故諫書ヲ贈リテ屠服シ死シタリ、惜ムヘキ者ナリキ、又  
セラレ、罪状ニ其事ヲ記セリ

一 九条家<sup>尚忠</sup>隱居慎被仰出度、隨從之公卿方家臣等二至迄、武家ニ准シ御取扱有之度事、

一 外夷御処置者、御内政大概御治定之上ニ無之候而者不宜卜奉存候事、

一 諸大名參勤、是迄通ニ而者迎モ海防十分全備難致候

二 付、遠<sup>三百里、中二百里、以上</sup>、中<sup>二百里、以上</sup>、近<sup>百里、以上</sup>ニ応シ、年数差別有

之度、若此儀難相成候ハ、妻子国許へ引取度事、

一 諸御手伝等入費相掛候儀者、以來不被仰付様有之度、

左無ク候而者外夷防禦者勿論、内乱之鎮靜モ出来兼候様可成立奉存候事、

但、天朝之御修復等者別段ノ事ニ可有之事<sup>御手伝云、從來幕府非常ノ費途アル毎ニ諸大名ニ賦課獻金セシムルヲ御手伝云ト通</sup>

唱ス、賦課スルニハ内論懇願セシムルヲ慣例トス、即チ江戸本西ノ兩城、或京・大坂城等ノ修造、或ハ東叡山又ハ増上寺、或ハ日光・久能ノ廟所靈屋ノ修繕、或ハ各所川河堤防ノ修築等、種々ノ費用悉ク獻金セシメタリ、本藩ニ於テ獻金セラレタルハ、近頃ニハ天保九戌ノ年西丸焼亡ノ時十萬兩、○弘化元甲辰年本丸焼亡ニ五萬兩、嘉永四辛酉年西丸焼亡ニ四萬兩、安政六己未ノ年本丸焼亡ニ六萬兩ヲ獻セラレタリ、其他大小藩ニ多少ヲ賦課シ費途ニ充ルカ故、幕庫ハ別ニ耗ス事ナカリシト云フ、賦課セラレタル藩々多クハ封内民庶ニ課出セシメタル者ニシテ、人民ノ膏血ヲ絞取シ僧上驕侈ノ資ニ充ツルト謂フヘキナリ、本藩ニ於テモ天保九年ノ獻金ニハ国庫余祐ナキニ依リ、己ム事ヲ得ラレス御一門以下諸士ノ禄高ニ向テ定額出来五升ニ増課セラレタリ、各藩モ稍類似ノ課ヲ賦シタリト云フ、

一 海防之儀江戸海者勿論、大名一統江年限御定メ是非

致全備候様御達相成度、此上若不行届之国有之候者嚴科被仰付度旨、屹度被仰達度奉存候事、

但、前条參勤之儀、御達ノ上タルヘキ事、

一 大坂・兵庫・堺等警衛、方今之形勢ニ而者不相濟、

屹度嚴重有之度事<sup>大坂・兵庫・堺警衛ハ尚ホ元治元甲子ノ年御獻言、其時ニ至リテ海岸砲台又ハ八幡・山崎等ノ各所ニ関門創建セラレタリ、</sup>

○御獻言ハ元治元年ノ記ニ載ス、

一 京師警衛大藩四五頭江交代ニ而相勤候様被仰付度、

是迄之彦根等者御免ニ而爰許之守衛被命度、左無候

而者第一人心不和合之基卜奉存候事<sup>安政五戊午ノ年、大テ宮・堂上方ヲ幽囚、或ハ輕重処刑セシ後、彦根藩ニ命シ許多ノ人数ヲ京師ニ出サシメ、名ヲ禁闕守護ニ仮リ其抑制ニアリ、茲ヲ以天下ノ人心憤怒、幕府ノ、暴行ヲ惡ムコト甚シカリキ、</sup>

一 於老中宅外国人応援者以來無用ニ致シ、拾万石以上

三拾万石以下之大名外藩四人・譜代四人<sup>二人ツ、交代ニテ參府、被命、</sup>

小事者時々幕府江伺ヒニ不及臨機ニ可取計、外国奉

行以下者其指揮ヲ受ケ相勤候様有之度事、

一 外夷御処置相定迄之間者、可成丈ケ登城者以來無之

様致度事、

但、江戸中江滞留之儀モ同斷、

近衛閑白殿長ク者在職無之模様ニ付、跡代リ 鷹司

一

〔輔題〕  
前右府公江被仰出度事 本年四月閏白宣下ノ 内勅ヲ蒙ラレ

テノ 勅命アラセラレシ故一時奉 勅、長ク在職ハアラセラレサ  
ル御言トモアリケル故、斯ノ如ク御献言アラセラレタル者ナリ、

此事実ハ忠房卿ヨリ 国父公へ、  
遣ハサレシ御書翰ニ明カナリ、

七月 〔日紙〕  
「日糺スベシ」 島津三郎

〔本文書は「玉里島津家史料」二七八号とほぼ同文なり〕

112 ○大原卿ヨリ一橋殿江、左ノ和歌ヲ贈ラレタリト 八月、八月、

黒髪を三たひ握りしふる事を

日々にあらたにおもひ出よ君

113 ○八月九日江戸御発駕、御首途ノ式執行セラレタリ、同

月二十二日

勅使大原卿ト同日ニ御発駕御下国ノ御予定ナレハナリ、

茲ニ至リテ

勅諭ノ件々幕府ニ於テ悉ク循奉アリタルハ、偏ニ 国父

公ノ御尽力ニ外ナラス、実ニ前代未曾有ノ御鴻業ナル

ハ多言ヲ要セス、御名望倍々輝キ、一般敬慕セサル者

ナキニ至レリ、又

勅諭ノ外ニ閣老ニ向テ御献言ノ趣悉クハ未タ行ハレスト

雖モ、御滞府僅々数日ノ間ナルカ故、幕府ニ於テモ

卒然意表ニ出タル一々重大ノ事柄ナルカ故、実施ニ間

ナキモ強テ勸促セラレス、後日ノ成果静ニ御覽セラ

ル、ノ 尊慮ヲ以テ、速ニ御発駕ヲ促サレシ者ナリシ

トソ、○十五夜ハ高輪ノ邸ニテ明月ノ御詠 当夜月朗カナラ

景ニヨソエラレテ、  
御詠ナリト云フ、

望月の光はそらに満ぬへし

浮き雲霧はよしおふとも

114 〔頭注〕「長州世子長門守殿初テ来邸」  
○此時長州ノ世子長門守殿ハ定、去ル四月末下国ノ際京

師ヘ立寄り、 国父公ト同シク浪人鎮撫又ハ大政改革

ノ事件ニ尽力セシコトヲ頻請シ、

勅命ヲ奉シ滞京セラレシニ如何ナル議ニ出タリヤ、八月

十九日東下着邸セラレ 長州ノ世子長門守殿ハ、 国父公御上

ノ 勅命ヲ奉セラレシ後数日ニシテ、 関東ヨリ下国ノ途中京都ヘ立寄

リノ名義ヲ以テ着京セラレ、而シテ 国父公ト同シク国事尽力ノ 勅

命ヲ遮テ申下シ滞京セラレ下国ヲ停メラレタリシカ、 国父公 勅

使大原卿ト関東ヘ御下向ノ後、公卿方ニ就テ種々建論、或ハ將軍家  
御上洛、或ハ鎮撫ノ説ヲ以テ浪人輩ヲ教唆煽動ノ所為モアリシト云  
フ、利ヘ大膳太夫殿ニハ 国父公御着府ノ前日道ヲ中仙道ニ転シ出  
発上洛セラレタリ、是等ノ挙動世人ノ尤モ怪ミ流説ニ涉レルコトナ  
リキ、世説ニ唱フル処ハ、大膳太夫殿ニモ国事尽力アルヘキ勅命ヲ

蒙ラレシ故、勅使ノ御下着ヲ俟チ、国父公ト偕ニ尽力アルヘキニ、措テ出発セラレシハ別意アルニ似タリト、或ハ三四年前ヨリ幕府ト親密ニシテ開港、勅許ノ大事ヲ家臣長井雅楽等ヲシテ尽力セシメタル等、頗ル幕府ノ腕臂トモナルヘキノ所為アリシカ故、今春薩ノ国父公御出府ノ前頭説紛紜タルニ因リ、名ヲ出府ニ仮リ其実上洛為スコトアランノ説アルヲ以テ、幕府ハ長州ニ委ネ薩州ヲ抑制セシメントノ密策モアリシト、或ハ亦長州ハ幕府ト密ニ施ス事アラントスルノ際、国父公御上洛御名望盛ナルノミナラス、人情時勢變換シ幕府ノ威漸ク傾キタルカ故、長久ナラサルヲ察シ、俟チ翻テ幕府ヲ欺瞞シ下国ノ名ヲ以テ京師ニ出、公卿方ニ逼リ国事尽力ノ勅命ヲ頻請シ、或ハ浪士ヲ教唆シ小大事ヲ為サントセシ者ナリト云云、以上当時江戸又ハ京坂其他ノ説ナリシト高津登カ書信ニ記セリ、○編者曰、此ノ説ニ就テ長州カ爾來ノ挙動ヲ以テ推論スルトキハ、始メ幕府ト密親ナルハ開港、勅許ノ事ニ尽力シタルノ末、国父公御上洛トナリシ故、又幕府ト謀リシ事アルヲ疑ナシ、然ルニ国父公ノ御名望意外盛ニシテ幕威漸ク傾キタルカ故、俟チ翻リテ私意ヲ逞フセンノ方向ニ転、而シテ、国父公江御対面アランコトヲ

彼ノ留守居来島又兵衛ナル者中山・大久保等ニ就テ懇請セラレタルニ依リ、其旨言上ニ及ヒシカハ、国父公仰ニ、大膳太夫殿ニハ過日同シク

〔貼紙〕一証追記

勅命ヲ奉シ、江戸着ノ上ハ同心協意尽力スヘキハ勿論ナルニ、着府ノ前日別路ヲ取り上京セラレタルハ、頗ル

意アルノ挙動ト謂ハサルヲ得ス、剩ヘ伏見事件ニ就テ

ハ甚タ怪ムヘキノ挙動アリ、加之其後猷言ノ趣表裏反

対ノ意モアリ、是等ヲ以テ考フルニ、将来偕ニ協意戮

力整フヘキニ非ラサルヤ明ナリ、因テ面会ハ簡短ニ謝

絶スヘシト命セラレ、其旨ヲ以テ兩名ヨリ謝絶セシト

雖モ、反復懇願シテ熄マレサルカ故、已ム事ヲ得ラレ  
ス同廿日高輪邸ニ於テ御面接、此時彼ヨリ建言書ヲ提帶セラレ  
条ナリシ  
アラセラレタリト雖モ、尋常ノ御会釈ニテ退邸  
セラレタリトソ、御面晤中敢テ天下ノ御談話ニハ渉ラ  
セラレサリシトナン、

〔貼紙〕一証追記

〔貼紙〕一從二位公御沙汰ノ如ク斟酌、削除スシ

長門守殿ハ當時ノ説ニ、凡庸ノ名ハ免レサルノ人ニシテ、全ク家臣  
中ノ訓教ヲ以テ普通ノ動作ヲナスノ人ナリト云フ、実ニ然ルヤ否ヤ、  
外見ニ容貌モ甚タ鄙陋ニシテ癖戯ノ病アリ、評説ノ如キモ敢テ誣言  
ニ非ラサルカ如シ、或ハ伏見暴動ノ際、浪士連中ニ彼ノ藩士数十名  
團結ノ者モアリシカ、形勢ノ變シタルヲ以テ約ニ反シ踪跡ヲ暗シタル  
ル挙動、當時ノ巷説種々寡カラス、或ハ当夜彼藩邸へ堀次郎ナル者  
サレヲ得サルノミナラス、邸中ノ形況大ニ怪キヲ覺ヘタリシト、或  
ハ四月末長門守殿着京ノ後、公卿方ニ切迫シテ、国父公ト同シク  
勅命ヲ奉センコトヲ頻請シタルニ由リ、大膳太夫殿ノ名義ヲ以テ  
勅命ヲ下サレタリ、是ニ依テ進シテ天下至重ノ事ニ当ラレシ故、  
国父公ノ御下着ヲ待テ戮力同心尽力アルヘキハ無論ナルニ、御着ノ  
前日道ヲ別路ニ転シ上京セラレタルハ、必ス別意アルノ顯然タリト  
謂ワサルヲ得ス、誰カ之レヲ怪マルヲ得ンヤ、如此懽シトセサル  
ノ挙動アリシニモ耐忍セラレ、懇請ニ応シテ御面  
接アリシハ、毫髮ノ御私心ナキノ証左トスベシ、

旧邦秘録五編文久二年之三終

○八月廿一日、國父公ハ江戸高輪ノ邸御発駕、東海道

ニ向テ御帰国ノ途ニ就カセラレタリ、

勅使大原卿モ同日龍ノ口ナル御館ヲ發セラレ、國父公

ニ一駅先キンシ通行セラレシトソ、○五月廿二日京都

御發程、七月七日御着府、本日八月二日ニ至テ凡ソ四十余

日ノ御滞府ナリ、其間ニ閣老ハ勿論、一橋殿・越前侯

等ニ對セラレ、

勅諭之条件ハ素ヨリ幕府ノ旧弊ヲ一洗シ、

朝廷尊崇或ハ賢材登用、外夷制御其他種々重大ノ事件御

献言、非常ノ御竭力アラセラレ、其間ニ幕府ハ因循或

ハ猜疑ニ固滞シ、違非セントセシ事モアリシト雖、寛

猛御論責、遂ニ其功ヲ揚ケラレ、本日

勅使ト偕ニ御帰途ニ就セ玉ハヒシハ、実ニ前代未聞ノ御

榮譽ナルカ故、一般感賞ノ声喧シキト云フモ諛言ニ非

ラサルナリ、從駕ノ曹ハ上下共ニ錦ヲ着テ揚々タルノ

〔頭注〕「生麦村ノ途次英人斬殺」

思ヲナシタリトソ、而シテ同日武州久良岐郡生麦村ニ

カ、ラセ玉ヒシ時、外国人四名〔紹述編ニハ英人三名馬二打ノリ云云ト記シ、又異本ニ英夷二人騎馬ニテ驅來ル云云ト記セリ、然レトモ四名ニシテ一名ハ婦人ナリシコトヲ実トス、山本五郎右衛門・高島一次現ニ從駕、其場ニアリテ実視ス、馬上横浜ノ方ヨリ江戸ノ方御行粧ニ向テ驅

ケ來リ、会釈モナク御行粧ニ侵入セリ、故ニ先備ニア

ル者備脇ニ避ケシメント手示セリト雖モ、言語不通ノ

故ニヤ將タ意アリテカ、中備近ク猥リニ驅入リタルニ

依リ、中備ニ在ル者モ頻ニ制止セントスル処ニ、一人

ノ士突然進ンデ直ニ一騎ヲ斬殺シタリ〔斬殺セラレタル者ハ

ルドソン〕ト云ヘル、茲ヲ以テ同列ノ夷人ハ直チニ引返シ、

モノナリシトソ、横浜ノ方ニ逃ケ行キタリ、如此彼レ猥リニ行粧ヲ侵シ、

無論彼ノ曲タル判然ナルヲ以テ聊動揺スルコトナク、

泰然トシテ生麦村御休憩場〔御側役谷川次郎兵衛言、通唱ス、ニ着カセラレ、事ノ

始末ヲ聞召シ〔貼紙〕「御側役谷川次郎兵衛言、通唱ス、

目付〔供頭トモ、及ヒ政聽ノ筆吏ヲ江戸へ差返サレ、事実ヲ

以テ届出ツヘキ旨ヲ命セラレタリ、○却説御行粧生麦

村ニカ、リシ時、外国人四名横浜ノ方ヨリ江戸ノ方即

チ御行粧ニ向テ驅ケ來リ、会釈モナク猥リニ御行粧ニ

驅ケ入リタルガ故、先備ニアル者ハ備脇ニ避ケシメン

ト頻ニ手示セリト雖モ、傲然中備ニ侵入セントスル形

況ナリシガ、一人ノ士突然一騎ヲ斬殺シタリ、茲ヲ以

テ同列ノ者ハ直チニ引キ返シ、横浜ノ方ニ向テ逃ゲ去

リタリ、而シテ生麦村ノ御休憩場ニ着カセラレ右ノ始

末 聞召サレ、我カ行粧ニ侵入シタルハ渠ノ曲タル判然タルカ故、事実ヲ以テ届ケ出ツベキ旨ヲ令セラレタリ、依テ御供目付山口彦五郎・政聰ノ筆吏伊集院次左衛門、直チニ江戸邸ニ立チ帰り、在邸国老及ヒ番頭・留守居等ト議シテ、脱藩旧足輕岡野新介ナル者カ所為

ナリシ趣ヲ以テ届ケ出タリトシ届書ニ、岡野新介ト謂フ者ハ旧足輕ニテ、先年故テリ

テ脱走シ浪人トナリシ者ナルカ、旧主ノ行粧ヲ拜セント生麦村ノ通路ニ出居タリシニ、夷人カ行粧ヲ侵シ無礼ヲナスヲ見テ、奮激ニ咆々突然斬リ伏セ、其場ヨリ踪跡ヲ暗マシタリトシテ留守居ヨリ届出タリシトシ、此届書ノ趣ハ在邸国老及ヒ番頭・留守居等カ議ヲ以テ、旧慣憑準、○斯ク脱走ノ旧足輕岡野ナル者カ所為トシテ届ケ出タルハ、在邸国老及ヒ留守居等カ旧慣

ニ準拠シ議定シタル者ナリ、斯ノ如キ時機ナル時ハ目

下ノ煩憂ヲ避ンカ為メ、脱藩或ハ目見以下輕卒ノ所為

トシ届出ルハ、本藩ノミナラス各藩ニ於テノ旧慣ニシ

テ、譬へハ癡狂或ハ酒乱人等カ無礼ヲ為シタル時ハ斬殺シタル例モアリ、斬殺者ハ其場ヨリ踪跡分明ナラサ

ル等ノ旨ヲ以テ藩主ノ名義ニ関セス、煩憂ナキヲ要トスル者ナリ、是レ稍々一般ノ慣例トセシカ如シ、幕府

ニ於テモ煩雜ヲ省クヲ以テ一種ノ機濫トシ、更ニ其実況ヲ問ハサリシ者ナリ當時一般ニ申シ取り又ハ謂ヒ取りト通唱スルアリ、是レ全ク煩雜ヲ省クノ要

トシ、差向キ機敏ノ言詞ヲ以テスルヲ云フ、何レノ藩ニ於テモ留守居職ノ者ハ機濫活敏ナルヲ專要トシ、目下ノ煩ヲ避ケ後患ナキヲ旨トセシ者ナリキ、茲ヲ以テ在邸ノ吏員ハ外国ノ事情ニ暗ク、又時勢ヲ弁識セス、旧慣ニ準拠シ如此届ケ出タル者ナリ、尤モ其時分迄ハ外国交通ノ開ケタル日モ尚淺ク、各藩共ニ彼ノ事情ニ疎ク、幕吏ト雖モ少シク事情ヲ知ル者ハ通弁者ニ止マレルカ如シ、外国人モ又日本ノ時勢人情ヲ弁セス、嘉永癸丑ノ年開港以來當時ニ至迄、倭敵ニシテ跋扈極リタルカ故、礼讓ヲ失ヒ自ラ死地ニ陥リタル者ト謂フヘキナ、

○編者曰、外国人カ浦賀其他ニ屢々来航シ、通信貿易ヲ頻請スルニ至リシハ嘉永六年癸丑ノ年ヲ以テシ、

開市条約ヲ結ヒタルハ安政五戊午ノ年ニアリ、文久二壬戌ニ至テ僅々四年充タサルカ故、一般外国ノ事

情ヲ弁知セス、幕吏ト雖モ弁識セシハ稀ナリ、況ン

ヤ各藩ニ於テヲヤ、加之當時鎖攘ノ說熾ナルノ時ナルカ故、適々夷情ヲ知ル者モ萎縮、声ヲ吞ミタルノ

際、外夷ハ暴慢驕傲ヲ極メ跋扈セルカ故、上下挙テ

惡マザルハナシ、然ルニ行粧ノ中ニ乘リ込ミ、已ニ中備ニ侵シ入ラントスルノ形況ナルカ故、從駕ノ士

奈良原喜左エ門（雷）ナル者斬殺シタリ、元来大小藩共ニ

行粧ハ行軍ニ異ナラサルカ故、仮令ヒ内地人カ是ヲ

侵スモ切リ捨ルヲ以テ從來ノ慣例トス、況ンヤ當時一般敵視スル外国人カ傲然馬上侵入シタル、敢テ許

スヘカラザルノ時機ナリ、特ニ本藩ハ往昔ヨリ嚴確ナル慣例アリテ、行粧ニ妨碍ヲナス者アルニ当テハ、命令ヲ待タス直チニ切り捨ルヲ以テ扈從吏員ノ慣例トシ、常ニ吏員中議シテ胸臆ニ記スル処ノ要点タリ、然ルニ初メ先備ヲ侵シタルカ故、過リテ如此シト認め、避ケシメントセシヲ敢テ避ケス、故ニ止ム事ヲ得ス斬殺シタル者ナリ從來本藩ニ於テ扈從吏員ノ職務上要點トスルハ、途次擾煩ナキヲ專トシ、飯令ヒ癡狂或ハ酒乱或ハ痴人ト認ル者行粧ニ妨碍ヲナサントスルモ、是ヲシテ妨ケサラシムルヲ要スルカ故、先備ニ在ル者指示シテ避ケシメントセシカトモ、夷人ハ傲然中備ニ侵入セントスルヲ見テ、奈良原ハ止ムコトヲ得サルノ時機ニ迫リ直チニ斬殺シタル者ニシテ、奈良原カ客氣ニ、從來日本ニ於テ慣例ナル者ハ、出タルニ非ラサルナリ。一種法規ノ如キ者ニシテ百事拠憑シ標準トセリ、茲ヲ以テ渠カ行粧ヲ侵シタルカ故ニ斬殺シタル者ナリ、然ルヲ以テ曲彼ニ在テ我ニ非ラサルヤ論ナキナリ、○論者曰、飯令ヒ日本ニ於テ行粧ハ行軍ニ異ナラザル者ナリト雖モ、是レヲ侵シタリトテ斬殺スルニ忍ビサル者ニアラスヤ、若シ斬殺スルモ、彼レ凶器ヲ取テ害ヲナサントスルノ形チ顯然タルニ於テハ、至當ノ処分アルヘキハ論ナシ、素ヨリ言語不通ノ外国人ナルカ故、適宜穩當ノ処分ヲ要スヘキナリ云云、

又曰ク、彼レ行粧ヲ侵シタルノ顛末ヲ〔法廷カ〕法廷ニ於テ論スル者トシ、上文ノ如キ傲慢無礼ヲ極メタルニ於テハ、我国法又ハ慣例ヲ以テ処分セル者ナルカ故、其曲直何レニアリヤ、將テ斬殺スル時ハ困難ヲ惹キ起スハ論ナク、目下ハ勇傑ナルカ如シト雖モ、到底粗暴ノ譏ハ免レサルノミナラス、遂ニ国家騷擾、民生ノ困難ニ立到ルヤ必セリ、宜シク忍耐シ、而シテ彼ノ領事官ニ照會シ、法律ニ照シテ罰スルヲ要スベキナリ云云、駁論者曰ク、是其一ヲ知テ二ヲ知ラサル者ノ論ト謂フベシ、奈何ントナレバ先備ヲ侵セシ時我カ国法ヲ知ラザルカ故、如此侵セシ者ト認め、備脇ニ避ケシメント手示シタリト雖モ、傲然中備ヲ侵サントセシハ言語通セザル故ナラント謂フベシト雖モ、彼レ手示スルヲ覚知セザルニ非ラザルベシ、何レノ国人モ手様ハ必ス覚知スル者ナリ、剩ハ堂々數百ノ扈從者列ヲ正フシ、種々ノ戎具ヲ備ヘタルカ故、如何ニ言語不通ナリト雖モ、礼讓ヲ知者豈ニ是レヲ避ケサルヘケンヤ、外国ニ於テモ礼讓ハ最モ教育ノ初メニアリテ彼我異ナル事ナシ、殊ニ交際上先ンシ

重ンズルハ人間ノ通議ナルハ多言ヲ俟タス、然ルニ  
嚴肅タル行粧ノ中ニ猥リニ馬上侵入シタルハ、礼讓  
ニ於テ如何ン、彼等貴重スル処ノ修身書、或ハ聖書  
ト唱フル耶蘇カ言ニモ、礼義ハ人間ノ通議貴重ナル  
者トシ、教育ノ発端ナルヲ記シタルニアラスヤ、是  
ニ因テ是ヲ見レバ、我カ行粧ヲ侵シタルハ暴ト謂ハ  
スシテ何トカ謂ハンヤ、彼暴ヲ以テスル時ハ我モ亦  
至当ノ措置ナサルヘカラス、是レ宇内人情ノ常ナ  
リ、茲ヲ以テ曲彼ニアリト謂フ所以ニシテ、誣ヒテ  
彼ヲ曲トスルニ非ラス、曲直分明ナル者ナリ、如此  
法理ヲ以テ論スルトキハ、當時ノ形勢人情ニ（行カ）於テ  
幕府ノ失虧ト謂ハサルヲ得サルナリ、如何ントナレ  
バ、内国ノ形勢人情ハ鎖攘ノ説甚タ熾ニシテ、上  
朝廷ヨリ下匹夫ニ至ル迄、日夜汲々トシテ他ナキノ際  
ナルカ故、幕府ハ外人ニ示シテ謹慎セシメ、或ハ各  
藩ノ行粧ハ陳列ニ異ナラサルカ故侵スヘカラス、或  
ハ居留地十里以内日本  
里程ヲ漫行スルモ、警吏ヲ付シ不  
虞ヲ戒メ、或ハ形勢人情モ（訓示カ）馴示スベキノ時ナルニ非  
スヤ、又各藩ヘモ外人ヘ対スルニハ如斯ナルベシ、

或ハ途次ニ於テハ如此ナルヘシ、或ハ互ニ過誤アル  
トキハ如此ナルヘシト示達セザルヘカラス、殊ニ  
勅使通行セラル、ニ就テ、外人ニ示スニ一層厚キヲ以  
テスヘキハ勿論ナルニ非ラスヤ、又外国人居留地ノ  
近傍、或ハ（漫遊カ）謾遊允許十里以内ノ地ナルカ故、

勅使ハ素ヨリ本藩ニモ注意スベキノ示達アルヘキノ場  
ニ非ラズヤ、然ルニ全ク之レナキヲ以テ論スルトキ  
ハ、幕府ノ虧失ト謂ハサルヲ得ンヤ、茲ヲ以テ我カ  
藩ハ曲彼ニアリト敢テ畏縮セサル所以ニシテ、幕府  
ノ失典ト外国人カ礼讓ヲ知ラス、暴慢驕傲ヨリシテ  
自ラ禍ヲ招キタリト判論セサルヲ得サル者ニアラサ  
ランヤ、幕府ハ嘉永癸丑以來外夷ノ暴慢倨傲ナルニ  
畏怖シ、天裁ヲ仰ス肆ニ通信開市ノ条約ヲ結ヒタル  
カ故、大ニ

宸怒セラレシ趣一般ニ伝播シ、従テ上下人心幕府ニ不平  
ヲ懷キタル原因ナリ、夫レヨリシテ憂国ノ人士慷慨  
嘆息、或ハ浪士各所ニ蜂起シ、遂ニ當時ノ形勢ニ陷  
リ紛紜擾々、乱兆顯然タルニ至リ百事狼狽、外人ニ  
向テ曲直理非ヲ争フノ氣力ナク、旧来ノ压抑法ヲ以

セント欲スト雖モ、内本藩ヲ抑スルノ力ナク、外ハ外人ト慣例ノ權ヲ主張シ、彼レノ曲ヲ鳴ラシ謝罪セシムルコト能ハズ、終ニ點謀奸策ヲ以テ外人ヲシテ本藩ニ迫ラシメ、撫育金ヲ請求セシメタル者ナリ、然リト雖モ本藩ニ於テハ曲直判然タルノ言ヲ以テ敢而服セス、遂ニ鹿兒島灣ニ回航シ、未タ論判結局ニ至ラザルニ、彼暴慢ニ我汽船ヲ掠奪シタルニ依リ、已ムコトヲ得ス我ヨリ發砲、兵端ヲ開キ擊掃、勝運ヲ得タル者ナリ鬭争ノ顛末ハ文久三年ノ記ニ詳記ス、又曰ク、英人ハ幕府ニ迫ルニ、彼カ国法或ハ欧州各国ノ法ニ則リ斬殺者ヲ刑セヨ、或ハ償金、或ハ被害者カ家族養育金ヲ請求スルコト甚タシ、是亦彼ト条約上此ノ如キノ時機処分法ノ明文アルコトナシ、然ルニ彼ハ妄リニ己カ国法ニ則リ請求スルハ尤モ其理由アルコトナシ、茲ヲ以幕府ハ彼カ曲ノ曲タル顛末ト約条上ニ照ラシテ、斷乎タル答弁ヲナサ、ルベカラス、然ルニ其答弁ヲモ為シ得サルハ、政權掌握ノ職トシテ国權ヲ失ヒシノミナラス、大ニ国辱ヲ取レルト謂フベキナリ、畢竟彼カ暴威ニ恐懼シ彼ヲ弁斥スルノ氣力ナク、奸

策ヲ以テ外国ノ暴威ヲ仮リ、本藩ヲ驚嚇セントセシ者ノ如シ、或ハ己ノ失虧ヲ反顧シ大權掌握ノ当職ナルカ故、外人ノ請求スル条件ハ素ヨリ負担スベキノ条理ナルヤ論ナシ、然ルニ請求スル処ヲ分析シ、本藩ニ向テハ撫育金ヲ要求セシメタル、又其理ノ解シ得サルノ一点ニシテ、則チ點謀奸策外人ノ暴威ヲ仮リ、本藩ヲ懲庄セシ者ナリシヤ疑フヘカラス、當時ノ説ハ本藩ノ名望海内比ヒナク、加之、朝廷ハ愛重倚頼セラル、幕府ニシテ、幕府ノ障碍物ナルノミナラス、国父公、勅使ニ副トシ東下セラレ、大政改革等其他旧來ノ積弊一洗スヘキ旨論セラレ、幕府ノ威望ヲ損滅セシコト寡カラス、其威名大小三百余侯ノ中ニ比肩ナキカ故忌嫌ノ情太甚シク、此ヲ以テ生麦村ノ事ヲ一釁隙トシ、外国ノ暴威ヲ仮リ勢望ヲ削控センノ機會トシタル者ナルヤ、向鏡見ルカ如シ、又一説ニ、閩老井上河内守カ免論ノ策ニシテ外国人ニ懲慚シ、軍艦ヲ鹿兒島灣ニ廻ラシ切迫セシムルトキハ、薩藩カ兵力強守禦ノ備整ヒタリト雖モ、未タ外国人ニ對スルコト能ハサルヤ必セリ、必ス恐縮シ終ニ幕威ヲ仮リ、平穩ノ処分ヲ頼スルニ至ラン、然ルトキハ目下ノ勢力ヲ削控シ名望ヲ損スヤ必定ナリ、隨テ、朝廷ニ於テモ鎖攘ノ説ヲ想メラレ、尋テ浪士輩モ抱憑ヲ失ヒ、自カラ萎靡離散スルニ至ラント、幕威回復ノ一奇策トシ、窃ニ外人ニ密示シ鹿港ニ回航セシメタリト云云、此説強チ二虛妄トナシ難キ、又曰ク、幕府ハ如此外國人又ハ各藩ヘ訓示ヲ怠リシ故、在邸国老等ハ慣例ニ則リ、斬殺シタル旨ヲ以テ断然届出ルトキハ、幕府奈何ンノ措置ヲナスベキカ、然ルニ国老等ハ旧慣ノ習法ニ（傲カ）做ヒ、目下ノ擾憂ヲ避ケンノ一点ニ迷ヒ、脱藩ノ卒岡野カ

所為トシ、其場ヨリ踪跡ヲ知サル趣ヲ以テ届出タルハ、所謂時勢ノ弁識ニ暗ク軽重ノ差別ヲ知ラス、因循苟且ノ甚シキ者ナリ、而シテ後幕府へ論出スル旨初メノ届書ニ反シタルハ、藩論ノ定レル所曲直分明ニシテ、敢而届スヘカラザル理アルカ故ナリ、而シテ當時在邸ノ国老島津登久・大目付兼番頭菱刈奎之介〔汾陽カ〕・留守居汾湯次郎右工門〔貼紙〕・政聴筆吏岩山八郎太〔貼紙〕「実名」等ノ数名ハ終ニ辞職セリ〔貼紙〕勢ヲ弁セス、旧慣ニ依テ届出タルヲ一般喋々残慨セリ、又曰ク、西洋法律家ノ言ニ、法律ハ習慣ヨリ生成スト、或ハ法律ハ習慣ト並ヒ行ハル、者ナリ云云、西洋ニ於テモ習慣ヲ以テ法律ノ素原トス、日本ニ於テハ外交ヲ開キタル日尚浅キカ故、欧州各国ニ行ハル、法律ノ何タルヲ知ル者之レナキノミナラス、英国条約第五条ニ曰ク、英国人ニ対シテ悪事ヲ為セル日本人ハ日本司人ニテ糺シ、日本法律ニ従テ罪スベシ、日本人或ハ外国人ノ臣民ニ対シテ悪事ヲ為シタル英国人ハ「コンシユル」或ハ他ノ〔官人カ〕人ニテ糺シ、英国ノ法律ニ随テ罪スベシ、裁判ハ双方ニ於テ偏頗ナカル可シト記セリ、如此ナルカ故、

外国人ハ設令ヒ旅行規定ノ内ニテモ、日本法律又ハ慣例ニ従フベキハ無論ナリ、元来日本ニ於テ大名ノ行粧ハ行軍ニ異ナラス、之レヲ衝ク者アルトキハ斬殺シテ妨ナキノ慣例ナルカ故、外国人ト雖モ条約上ニ照シ其慣例ニ従ハシムヘキハ勿論ナリ、然ルヲ以テ見ルトキハ、慣例ナル者ハ日本ニ於テ法律ノ一部分タルヤ多弁ヲ要セス、又因ミニ一例ヲ挙ケンニ、天保ノ中頃、肥前佐賀侯ト一橋卿ト争論ヲ起シタル事アリタリ、佐賀侯帰国ノ途次、武州川崎駅ニ於テ佐賀侯ノ関札ヲ諸大名參觀往來ノ宿駅毎ニ、某ノ泊或ハ休ト名札ヲ宿駅ノ前後ニ掲ク、是ヲ関札ト通唱ス、一橋家扈從ノ者猥リニ取棄、土足ニ掛テ毀壞シタルコトアリタリ幕府ニ於テ三卿・三家ト唱タルアリ、三卿トハ清水・田安・一橋ノ三家ヲ云フ、三家トハ紀尾水ノ三藩ヲ云フ、三卿ハ將軍家近親ナリ、故ニ驕誇尊大ナル者ナリ、随テ付從ノ輕卒ニ至ル迄驕傲ナルモノナリキ、佐賀侯ハ名札ヲ穢サレタルノミナラス、休泊ノ一駅ハ則チ陳宮ニ異ナラス、其宮標ヲ毀壞セラレタルハ大ニ体面ニ関スルカ故、通過ヲ停メ臨機ノ措置ニ及ハント決シタリ此時候ノ詩ニ、一庭中土氣〔貼紙〕素豪雄、汝輩奮然競尽忠、請見面年来培養力、海東応識我家風〔原注〕此作ヲ扈從ノ臣永山十兵衛ナル者ヘ付セテレシニ、如此勇斷扈從ノ者ハ直チニ至当ノ措置ニ及ハントセリ、詩意ニアルカ故、家臣中奮然至当ノ措置ヲ一橋卿ニ

向テ施サンノ勢ナリシニ、一橋家ハ頗ル恐懼シ、指揮ノ届カサリシヲ以テ厚ク謝シ、其毀壞シタル輩ハ重刑ニ処セラレタリトソ、此レ稍類似ノ事ニシテ、佐賀侯ハ陳嘗ヲ侵サレタル者トシ、本藩ハ行軍ノ列伍ヲ侵サレタル者ナルノミナラス、手示セシヲモ顧ミス傲然中備ヲ侵サントセシカ故斬殺シタル者ナリ、若シ中備ヲ侵シタルトキハ、先中備ノ扈從者数十名ノ曹ハ何ノ顔アリテ各藩ニ面ヲ向クルヲ得ヘキヤ、奈良原力斬殺シタルハ其職掌ヲ尽シタル者ナルハ無論、日本固有ノ慣例ニ背カサル至当ノ措置ト云フベシ

奈良原ハ独断処分セシコトナルガ故、進シテ其實ニ当ランコトヲ欲スト雖モ、衆悉ク之ヲ允サ、リシトソ、然ルニ英人ハ文久三年二月ニ至リテ、数艘ノ軍艦ヲ以横濱ニ来リ、幕府ニ向テ、我英国人民ハ条約ニ允サレタル内地遊行規定内ヲ通行シタルニ、薩州人ノ為メニ殺害セラレタルカ故、其罪ハ日本政府ニアリ、其償金トシテ十万ポント

我金ニ算シテ凡五十万円、一ポントハ凡ソ金五円ニ当ル、又殺害シタル者ヲ刑セヨ、又殺害セラレタル英人カ妻子養育料ノ金ニ万五千ポント

我金ニ算シテ凡ソ十二万五千円ニ当タル、合計十二万五千ポント

我金ニ算シテ合計ヲ請求セリ、然ルヲ幕

府ハ何ノ理由ニ依テカ妻子養育料ヲ本藩ニ求メシメタリヤ、英人ハ其罪日本政府ニアリト認メタルハ、其当ヲ失ハサル者ト謂フヘシ、幕府ハ逼マラレタル償金ヲ政府ヨリ払ヒ、養育料ヲ本藩ニ求メシメタルハ、其法理ヲ弁スルコト能ハサルハ無論ニシテ、黠謀ナリシハ上ニ論セシカ如ク、本藩ノ威力ヲ削挫セントシタルノ著シキ者ナリ、

○因ミニ記ス、福沢論吉カ著セル國權論ニ曰ク、前文略ス、全体西洋各国ノ風ニ從ヘバ、外国ノ人ニテモ其ノ現ニ住居スル國土ノ法ヲ犯セハ、其國法ヲ以テ罰ス可キ筈ナレトモ、日本ト西洋諸國トハ全く風俗モ殊ニシテ、同シ罪ニテモ処刑ノ法同様ナラザル故

〔二〕斯クハ定リタルコトナリ、之レヲ外國ノ治外法權〔エキステリトヤリナ〕ト云フ、即チ外國ノ政治ノ及フベキ自國ノ外ナル日本ノ地ニ在テ、尚自國ノ法ノ權力ヲ通用セシムルトノ義ナリ、近來新聞紙ナドニ治外法權云云トアルハ此事ト知ル可シ、都テ物ヲ知ラザルハ人ノ侮ヲ受ル本ナリ、婦人・女子ニテモ下等ノ民間ニテモ、外國ノ条約書位ハ平生ノ心得ニ讀ム可キモノナリ、右ノ如ク外國人ハ仮令ヒ旅行規程十里ノ内ニテモ日本ノ法律風俗ニ從フ可キ筈ナルニ、今ヲ去ルコト十六年、文久二年薩摩ノ島津公東海道通行ノトキ、武州生麦ニ於テ英國ノ人「リチヤルトソン」ナル者、馬ニ乗テ公ノ行列ヲ横切タルヲ以テ先供ノ衛士之レヲ差留メントシテ、遂ニ其場ニ切捨タリ、元來日本ニ於テ大名ノ行列ヲ衝ク者アレハ之レヲ切捨テ、妨ナキコト、數百年來人民ノ普ク知ル所ニシテ、之ヲ怪シム者モナク、亦殊更ニ衝カントスルガ如キ狂人モナキユエ、切捨ノ沙汰ハ古來極テ稀ナレトモ、若シモ事實ニ於テ無礼スル者アレハ、大名ノ体面ニ於テ之レヲ許ス可ラサルノ風ナリ、又國法ナリ、然ルニ、彼ノ英人ハ日本ノ法ヲモ知ラス、風習ヲモ心得ス、万事不案内ノ身ヲ以テ、嗚呼カマシクモ馬ニ乗テ島津家ノ行列ヲ乱リタルナル、自カラ求メテ死地ニ陥タル者トコソ云フ可ケン、更ニ訴フ可キ所ナルレバ、英國ノ政府ハ之レヲ口突ト爲シ、翌文久三年二月、數艘ノ軍艦ヲ以テ政府ニ逼リ、我英國ノ人民ハ条約ニ許サレタル規程ノ内ヲ通行シ

テ、日本人ノ為ニ殺害セラレタルカ故、其罪ハ日本政府ニアリ、其償金トシテ十万ポントノ金ヲ払ヘリ、又之レヲ殺害シル罪人ヲモ刑ニ処シ、殺害ヲ被タル者ノ妻子ノ為ニモ二万五千ポントノ扶助金ヲ求ムヘシトノ書翰ヲ差出シ、政府モ其掛合ニ困ンテ遂ニ償金ヲ出シタルハ、同年五月ノ事ナリ云云、○編者曰、償金ハ初要求セン数ヨリ減シタリ、幕府ニ於テ論判ニ涉リテ減シタル者ナリ、

○以上記スルカ如ク、曲直判然タルハ多言ヲ要セス、甚ヒ哉、幕威ノ衰ヘタル、悲ヒ哉、政權掌握ノ職ニ在テ外国ノ勢力ヲ仮リ、一薩藩ノ声望ヲ削挫セントスル、矇ナル哉、外国ノ威力ヲ仮リ、内国ノ不逞ヲ鎮圧スルニ等シキ、真ニ国辱ヲ顧ミサルノ甚シキ者ト謂フヘシ、元來權謀詐術ヲ以テ施政ノ得策トシ、内ヲ治メントシテ外ノ力ヲ仮ル、実ニ恥ヲ知ラス、國權ノ如何ンヲ慮ラス、職掌ノ重キヲ顧ミス、目前ノ利害ニ拘泥シ永世ヲ勘ヘサルハ、〔扶掖カ〕怯隋ノ極ト謂フベシ、英人カ幕府ニ迫リシ事實、或ハ幕府本藩ニ向テ措置ノ始末ハ、後編又ハ文久三年癸亥七月前ノ浜戦争ノ卷ニ詳記ス、

○八月廿二日、 国父公ハ函根ノ嶮ヲ越シ玉フ時、富士山ヲ遠望セラレテ御詠、

富士の根は雪つもるらし玉くしけ

箱根の山に霧立わたる

此ノ御詠、御近習ノ曹ヘ示サレシトナン、

117 〔頭注〕「御入洛」

○閏八月七日、 国父公ハ大津駅ニ着セラレ、是ヨリ伏

見ノ邸ニ御一泊、京師ヘハ御出ナク御下坂御帰国ノ御

予定ナリシカ、此ノ趣

叡聞ニ達シ、畏クモ

主上ハ

勅使ト俱ニ関東ニ於テノ事實ヲ 聞召サレント日夜待セ

玉ヒシニ、京師ヘハ出サセラレス御下伏、夫ヨリ直ク

ニ御帰国ノ途ニ就カセラル、ノ御定意ナル 関東ニ於テノ事實ハ、勅使

大原卿復命セラル、ハ勿論ニシテ、 国父公ハ御專任ニ非ラサルカ故、京都ヘ御立寄ナク御帰国ノ御治定ナリシトソ、功成身退クノ尊慮

ナルハ無論、他ニ亦、御深慮ノ訳モアリシト云フ、 趣、宮・堂上方伝聞セラレ、驚愕

一方ナラス、此由

叡聞ニ達セラレシニ、大ニ

驚カセ玉ヒ、忝クモ 近衛殿下ヘ厚キ

詔ヲ下サレ直チニ御上京、関東ニ於テ御尽力ノ始末奏

聞ハ勿論、尚将来ノ御意見モ聞

召シ上ケラレ度

叡慮輕カラサル旨、態々御使ヲ立ラレタルニ依リ、止ム

事ヲ得サセラレス、大津駅ヨリ遽ニ御入洛ニ変シ、藩

邸ニモ入ラセラレス御旅粧ノ儘近衛家ニ御參殿、関東

ニ於テ御尽力ノ次第、或ハ幕府へ御献言等ノ始末御申

述アリケルヲ、近衛殿忠ハ即チ奏

聞ニ及ハレシカハ

敏感淺カラス、此涯御滯京

闕下ノ御守護ハ勿論、国事御竭力 御依頼思召ストノ

勅命ヲ蒙ラセ玉ヒ、而シテ重テ議奏衆ヨリ明九日御參内

アルヘシトノ趣

勅命ヲ奉セラレシカトモ、 国父公ハ尚ホ厚ク御謙遜、

公武ノ格式モアルカ故、一往関東へ

勅命ノ趣ヲ以テ伺ハレ、其指揮ニ従ハセラレントノ趣謹

テ言上セラレシカハ、議奏衆ヨリハ関東江ノ都合ハ伝

奏衆ヨリ御達アルベシ、少シモ顧慮セラルコト勿レト

テ所司代牧野備前守へ其旨達セラレシニ、嫌疑ナク御

受アルヘシトノ懇命ナルカ故、御受被仰上タリ、斯ク

ノ如ク御謙遜、関東へ伺ノ上ト被仰上タルハ、從來

公武ノ間ニ於テ格式モアルカ故、潜踰ヲ恐レ玉ヒシニ

出タル者ナリシトソ、

○此日

勅使大原卿ニモ御着京、直ニ參

内、関東ノ事實復命ニ及ハレシトソ

国父公 勅使御差副関東御  
下向ノ時分ハ酒井若狭守  
所司代職ナリシカ、其後松平伯耆守宗二更迭シ、又幾、  
干モナク牧野備前守忠二(越後長岡) 転換シタリ、

118

(頭注)天拜 御劍御拜戴一  
○閏八月九日、 国父公ハ御懇篤ノ

勅命ニ従ハセラレ、同日午ノ下刻頃ヨリ近衛家江御參殿

アラセラレシニ、忠熙卿ヨリ御烏帽子并ニ御直垂各一

具御讓受、同殿ニ於テ御換着、申ノ刻過ヨリ忠熙卿御

先導御參

内、御奏者之間ニ昇殿セラレタリ、忠熙卿ハ公卿御門ヨリ、

国父公ハ御台所御門ヨリ御參内ナリ、御所ニ於テハ御

待設ケノ事ナリシ故、御取次番等其筋ノ人々数名奉迎、

御扣ノ間へ御案内、御接待如何ニモ御懇篤、暫時ニシ

テ伝奏衆御誘引御別間ニ誘導セラレ、関白忠熙卿ヲ初

議伝ノ両奏御例座、関東ニ於テ御尽力ノ御事実或ハ形

況等御尋問アリケルニ就此時主上ハ御簾内、一々御

詳述アラセラレシカハ、衆卿大二感歎セラレタリトソ、

而シテ其旨伝奏衆ヨリ奏

聞ニ及ハレシカハ、特ニ

觀感斜ナラサリシトソ此時 天氣殊ニ麗シク、近年本日ノ如ク 龍  
眼ノ麗カリシハナカリシトソ 磯永弘卿・山

内一郎等カ説、其他、此ノ如ク、奏聞ノ間ハ御扣ノ間ニ退  
ノ説話モ皆同シ、

カレシニ、諸卿代ル〳〵懇篤待遇セラレタリトソ、而

シテ後議伝ノ衆御誘引、諸卿御列座

〔天願カ〕天願ヲ拜セラレ小御所御、畏シコクモ本日 天拜ノ御式ハ先規  
ナキカ故、將軍 内拜ノ

式ヲ以セラ  
レシトソ、

御親シク

勅賞御拜聞アラセラレ、而シテ御劍一振肥前国兼  
広在銘御拜戴、

御取次中山大納言忠能卿畢テ初ノ御扣間へ御退キ御茶・御菓

子御頂戴、夜ニ入り御退下、再ヒ近衛家江御參殿、忠

熙卿・忠房卿へ御礼仰セ上ケラレ、亥ノ半刻許リニ錦

街ノ御邸ニ着セラレタリトソ、実ニ前代稀ナル御栄典

ニシテ、恐レ多クモ御家數十世ノ御間、如斯

玉体ニ近ツカレ、

褒勅拜聴セラレシハ前古未聞ナルノミナラス、數百年來

霸政ノ為メ衰頹ヲ極メ、在レトモ無キニ等シキ

朝威回復ノ端緒ヲ開カレ、御家ニ於テノ御榮譽ナル多言

ヲ要セス、真ニ維新ノ元始ハ此時ニ外ナキナリ、而シ

テ此涯御滯京

闕下御守護ハ勿論、將軍家御上洛之上ハ尚亦国事御尽

力御依頼ノ

御内勅拜承セラレタリト雖モ、今回ハ一ト先ツ御帰国ノ

御懇願、他日応分ノ御尽力アラセラルベシトノ趣遮テ

仰立ラレシ故、

朝廷ニ於テモ已ムヲ得サセラレス御帰国アラセラル、事

トナリタリ、

○近衛家へハ本日御礼ノ為メ、御太刀・馬代大判金五枚

ヲ進呈セラレタリ、

○御拜戴ノ御太刀拵左ノ如シ此ノ御拵書ハ、御下ニナ  
リタル本ニ則リテ記ス、

118の1  
一御太刀 肥前国住遠江守  
藤原兼広 一腰

一 式尺三寸四分

一 中心七寸〇五厘

一 御鋸 金無垢掛目八匁五分

一 御縁 赤銅七々子金小縁  
御紋所金菊桐ハツ

一 頭 右同御紋所拾ヲ

一 猿手 右同御紋所二ツ

一 御目貫 御紋中、金菊左右、赤銅五三ノ桐

一 御目釘 金掛目一匁

一 御柄 黒糸打

一 御柄下地 浅黄金蘭

右総掛目三拾式匁

一 御鍔 赤銅七々子金小緑

一 御鞘 金御紋所二十四、大切羽掛目三百三十五匁、  
金梨子地、御紋所十六葉ト五三ノ桐金高蒔絵、  
指表二六ツ、指裏二五ツ

一 御金物 帯取御金物、赤銅七々子金小々緑  
御紋所二十一

内 一 鯉口右同、地金御紋所

一 逆輪右同断、御紋所六ツ

一 鞆尻右同断、御紋所八ツ

一 帯取占金物右同、御紋所二ツ、裏留金

物金無地

一 革先、金物赤銅七々子金小緑

一 御下緒亀甲打、帯摺浅黄金蘭

一 腰卷黒糸打、下地浅黄金蘭

右総掛目三百三十五匁

119 ○国父公ハ

勅使ニ御差副 関東へ御下向御尽力アラセラレシ条件

勅諭ノ趣モ、其素原ハ悉ク御方寸ニ出タル者ナルハ愚

夫・愚婦モ知ルカ如シ 無謀ノ攘夷或ハ將軍速ニ上洛等ハ御否説  
ナリ、詳ニ御建言ニ就テ寛急ノ別ヲ弁セ

ラレタルヲ、茲ヲ以テ憂国ノ人士ハ素ヨリ一般仰慕シ御

知ルヘシ、名声赫奕タリ、故ニ春来初夏ノ頃迄兩端ヲ懐キタル

藩々モ、

勅使ニ副トシ関東御下向ノ命下レルニヨリ、倏チ変シ競

フテ勤

王ノ説ヲ唱ヘ上京スルモアリ、或ハ藩吏ヲ出京セシメタ

ルモアリ、其中ニハ、或ハ勢ニ走セ或ハ名利ヲ貪ルノ

徒モ又寡カラス、実ニ人心ノ変遷ハ一旦タニ転換不定

ハ衰世ノ習ナリト雖モ、昨日迄幕府アルヲ知テ

朝廷在ルヲ知ラサルカ如キノ藩々ノミナリシカ、茲ニ至

リテハ雷同シテ宮・堂上方ノ間ニ奔走シ、阿媚諛言ヲ

献シ、或ハ長土ノ二藩ニ媚諛シ驥尾ニ属シテ周施、或

ハ我藩ノ誘掖ヲ受ント頻請スルモ寡カラス、中ニ就テ

長藩ハ本藩ニ先鞭セラレタルヲ残慨シ、一己ノ功業ヲ

顕ハサント百方黠策ヲ廻ラシ、或ハ浮浪士ヲ聚集煽動

シ、為スコトアラントスルノ挙動、人口ニ餽炙スル処  
トナレリ、浮浪ノ徒ハ必ス該藩ニ倚頼スル者日ハ日ニ  
多ク、長人ハ之レヲ（奇貨カ）機貨トシ教唆シテ、種々ノ暴行或  
ハ悪策ヲ働カシメル等甚タシキノ形況ニ立到レリ、然  
リ而シテ

勅使関東へ御発向ノ頃ヨリ七八月ニ至リテハ、各藩吏或  
ハ浮浪ノ徒洛中ニ蟻集シ、從テ街説喧囂雜沓極リタリ、  
公卿方ニハ多クハ井蛙二等シク、人情時勢ノ弁識ニ疎  
ク尊大鄭重ヲ得意トセラレ、或ハ貧困ニ迫マラレタル  
方々ハ貪利ニ恣々或ハ雷同シ、鎖攘ノ説ヲ無謀ニ唱へ、  
浮浪士或ハ藩士ニ佞舞スルモ又タ眇シトセス、中ニモ  
長人ハ公卿方ヲ籠絡シ、私意ヲ達セント奸計ヲ廻ラス  
カ故、元來婦女子二等シク動揺變遷シ易キ方々ナレバ、  
其説ヲ信シ異言喧擾維持シ難キニ陥リ、遂ニ嫉妬偏執  
ノ説甚シク、其間ニハ我カ藩ヲ以テ名利ヲ貪リ、或ハ  
大権掌握ノ意アリトノ説モ起リ、猜疑交モニシテ厭フ  
ベキノ形勢ニ立到レリ、然ルニ 国父公ハ積年肝胆ヲ  
碎カレ身ヲ犠牲ニ拱セラレ、御上洛御献言アラセラレ、  
尋テ

勅使ニ御差副御東下、  
勅意暢達

皇威復旧ノ基ヲ開カレタルハ、実ニ千古稀ナル偉大ノ御  
鴻業ナルハ多言ヲ俟タス、特ニ 公武一致、国威拡張  
ノ策ハ当時急務ノ最モ急タルハ無論ナルニ、幕府ハ猜  
疑ノ情情ヲ以テ百事優柔不断ナルノミナラス、公卿方  
ノ中ニモ上文ノ如キノ弊ヲ醸シ異言紛々タルカ故、大  
ニ焦慮セラレ、左ノ御書ヲ中山忠能・正親町三条実愛  
以上 野々宮定功（伝）奏  
議奏・

119の1  
（貼紙朱書）（開説カ）  
一此節上京仕、関東之次第尊卿方迄委細言上仕候処、出  
（貼紙）御書入ノ如ク転倒セシ故改メタリ

格之

叡慮ヲ以參

（頭注）御献言  
内可被仰付旨承知仕、微賤之身実ニ恐多奉存、再三固辞  
仕候得共、是非御受申上候様尊卿方ヨリ達而被仰聞候  
二付、不得止事御受申上參

内仕候処、尊卿方ヲ以関東之趣逐一御尋問被為在、殊ニ  
重キ御品迄モ拝領被仰付、誠ニ以テ武門之面目恐入難  
有仕合、毫端ニ難述次第ニ御座候、此上者愈以不肖之

身二及候程者尽力仕心底ニ御座候、就而者乍恐當時之  
朝議粗奉承知候得者、諸国之大名等 公武之御為周施之  
儀相願候者共江者皆

御内命被仰付候由、天下之人心ヲ不被為失様ニト之御評

議ニ而、御尤之御事ト者奉存候得共、今般関東江

勅使被差下、私ニモ下向被仰付、一橋・越前致登庸、大

政变革有之候様被仰下候処、初者六ヶ敷模様ニ御座候

得共、遂ニ御受相成恐悦之御事奉存候、此上者

朝議確乎トシテ不被為動、匹夫之激論一切御採用不被在、  
(為脱力)

関東之処置靜ニ御覽被遊度御事ト奉存候、方今之処ニ

而諸藩ヲ(貼紙)「當時在京諸大名ノ名札シ註記スベシ」

(貼紙朱書)「諸大名ノ姓名不覺」  
御膝元江被召寄候得者、関東之処置御疑之筋ニ相当リ、

(貼紙)「當時在京諸大名ノ名記載仕度」  
於彼地モ却而氣受不宜、御一和之処ニ者參兼可申哉ト

甚懸念奉存候、依之

御内命被仰下候諸藩江者、此節

勅使関東江被差下、一橋・越前登用致シ、政事变革之儀

被仰下候処、御受相成候ニ付、暫彼兩人(貼紙)「彼兩人トハ一  
橋・越前ニ公

ヲ云」  
「政事奉行之次第靜ニ 御觀察被遊度

窺慮ニ候間、此際之処上京周施ニ不被為及候、若此未於

関東

朝廷尊崇之道忘却致シ、大政之旧弊、外夷之処置等変革

モ無之、天下之人心不和合之機相顕候ハ、速ニ

御内命可被為在候間、其節者不移時日、上京尽力可致旨

懇ニ被仰下、御請書差上候様被仰付度御事ト奉存候、

若其節ニ至リ參向不仕者モ御座候者、違

勅之者ニ相違無御座候間、屹度嚴罰被仰付度奉存候、

但、長州者始メヨリ將軍家御上洛之儀致主張周施之事

御座候ニ付、右之儀猶以尽力被仰付、且今般被命候ニ

ヶ条之内大赦之儀者未奉行無御座候ニ付、相濟迄之間

是 編者曰、長州ハ始ヨリ將軍家御上洛致主張云云、此ノ御文意ハ上ニ  
記シタルカ如ク、各藩ハ歸国命セラルヘシトノ趣ト區別セラレ、今

般被命候ニヶ条云云、相濟迄ノ間是迄ノ通被仰付、土州モ同様被仰

付度、若シ此ニ藩モ各藩ト同シク歸国被命ニ於テハ大ニ障碍ヲ生ス

ルカ故、如斯區別シテ記サレタル者ナリ、其所以ハ、長州ハ公卿方

ニ頻請切迫シテ大政变革等尽力アルヘキ 勅命ヲ奉シ、而シテ江戸

御着ヲ知りナカラ道ヲ軛シテテハ圭角ヲ生スヘキニ、國父公ハ国家

安危ノ係ル一大事ノ場合ナルヲ以、迄之通被仰付、土州モ同様

被仰付度奉存候 國父公御着京ノ頃迄ハ、大小侯長州ヲ除クノ外ハ  
悉ク傍觀シ、幕威ノ動スヘカラサル、一薩藩カ

何程武力アリ如何ニ名望アリト雖モ、勢ノ及ハサルヤ必セリ、到底  
不興ヲ蒙リ、數百年來連綿タル封土ヲ失フニ近カラント誹議々々、  
或ハ幕府ノ鼻息ヲ窺ヒ阿媚スルモ寡カラザリシニ、勅使御差副東下  
セラル、ニ至リ、倭チ形ヲ變シ説ヲ改メ自カラ上京スルモアリ、或

ハ藩吏ヲ上京セシメ宮・堂上方ニ諛リ勦 王鎖鑰ノ説ヲ立、或ハ公武ノ御為ニ周施尽力セント懇願スルモ勦カラス、如此佞媚ノ藩々正奸ノ別モナク 内勅ヲ下サル、ニ至レリ、素ヨリ首鼠兩端懸浮ナルヲモ妄リニ 内勅ヲ下サ、ルハ玉石混淆ニ齊ク、又勢ニ走ルノ曹或ハ雷同者ハ真ニ頼母シキニ非ラス、然ルニ 朝廷ニ於テハ天下ノ人心ヲ取ラセラレンカ為ナリト雖モ、玉石ノ別ハ必スナクシテハアルヘカラス、特ニ幕府ハ未タ誠実ニ 尊王ノ意アルニ至ラス、一時ノ權術ヲ以テ 勅意奉行スルハ無論ナルカ故、深ク注意セラレシスハ他日囁臍ノ悔アラシクコトヲ痛慮セラレ、如此猷言セラレタル者ナリ、又匹夫ノ激論一切御採用アラセラレサリシト云、御着京以來浮浪ノ徒多ク出京シ、公卿方ニ切迫責論、朝議ヲ左右スルカ如クナルカ故、是又大ニ憂慮セラレタル者ナリ、又 御膝元ハ諸藩ヲ召ケテラレテハ関東ノ処置御疑ヒノ筋ニ相当リ云云、如何ニモ其情実ヲ貫カレタル者ニシテ、當時ノ要ハ公武御一和、人材賢能ノ者ヲ挙ルヲ以テ最モ急要トス、而シテ内外ノ政治定リ、御国成立ツト立タサルノ）枢機ナルヲ以テナリ、然ルニ長州ハ將軍家速ニ上洛アラシコトヲ主張シ、而シテ攘夷ノ 勅命ヲ下サレ、一般ノ人心鎖鑰ノ掃蕩ヲ定メント公卿方ニ向テ頼リニ逼レリト浪士連中ノ所論モ又是ニ同シ、 国父公ノ御所論ハ、將軍家未タ幼冲ナルカ故、事ノ大小トナク有司ノ議決ニ出ルノ時ナルカ故、當時名望アル一橋公ヲ以テ後見職トシ、越前春嶽公ヲ以政事總宰トシ、諸吏員ニ純正ノ者ヲ登庸スルヲ當時ノ急要トシ、而シテ 朝廷尊崇ノ道立チテ大政正キニ帰シ、人心一致富強ノ域ニ至リテ、外夷制禦ノ策永世不拔ノ礎基ヲ定メラル、ニ在リ、幼若ノ將軍速ニ上洛アリテモ自ラ事ヲ裁スルノ実アルコトナシ、茲ヲ以テ來秋頃上洛云云ト記サレタル者ナリ、是レ長州ノ所論ト異ナル処ナリ、又長州ノ建言ニケ条トハ、水戸前中納言齊昭公贈官又ハ戊午以來愛國ノ輩幽囚セラレシ者大赦ノ事件ヲ陽ニ書面ヲ以テシ、而シテ將軍家上洛或ハ鎖鑰ノ勅命ヲ速ニ発セラルノ事ハ隱ニ懲過シ、タル者ノ如シ、

一 当関白殿下近衛忠 熙卿 御辭職之御事、期月

勅約被為在候由奉承知候ニ付而者、辞表被差出候節者其

通

勅許被為在度御事ト奉存候、乍併当節不容易時勢ニ付、

内覽者如故当殿下江被命度御事ト奉存候、且

青蓮院宮

〔貼紙〕 獅子王院尊 融法親王

御事、天下有志之人心奉帰向候

ニ付、

朝政御相談被為在候様乍恐奉存候、

但、一条左府

〔忠告〕

辭退之節者、鷹司前右府輔 公左府江御

転任被為在度奉存候、

右之趣、至愚短才之身ニ而恐懼至極ニ奉存候得共、不

容易時勢、存慮十分不申上候、而者不忠之罪難免ト存結

メ、尊卿方迄献言仕候間、委細奏

聞被成下度、伏而奉願上候、以上、

月日「月日糺スベシ」

〔貼紙〕 島津三郎

此ノ御献白奉呈セラレシ後、両日ヲ過テ関白近衛忠熙

〔朱書〕 及ヒ左大将忠房卿ヨリ御密翰ヲ以テノ趣ニ、

天覽ノ外他ニハ決テ洩サレサル

〔腹藏カ〕 叡慮ニ被為在候故、御存意御服蔵ナク御献言アルヘシト

〔頭注朱書〕 密勒アリシニアラス、近衛殿下密命ナリノ趣、近衛殿ヨリ密命ヲ蒙ラレタリ、御密翰左ノ如シ、

天覽之外決而他見致間敷候間、御趣意在体ニ打明御書取

給候様異々不洩段、御安意可在存候事、

廿一日 忠房 忠照

三郎殿

〔本文書は「玉里島津家史料一」二九五号と同文なり〕

右ノ如ク密旨ヲ奉ラレシニ依リ、閏八月廿一日近衛家

江御参殿、左ノ御献言書ヲ呈セラレタリ、

○編者曰、治世以来大小ノ諸侯へ、勅旨ヲ下サレタルハ勿論、国  
事上ニ於テノ、勅意ヲ伝ヘラレタル事ハ曾テアルコトナシ、況ン  
ヤ此ノ如ク、天覽ノ外ハ決テ洩サレサル、叡慮ナルカ故、御所存  
御服蔵ナク献言セラルヘシトノ密旨ヲ奉セラレタルハ真ニ稀世ノ  
尊事ナリ、御献言ノ趣ハ畏コクモ忝クモ錦囊ノ御策トセラレンノ  
旨ナルヤ明ナリ、茲ヲ以テ、国父公ハ当時態ニ就テ枢要ノ条件  
御施行ノ順序、寛急ノ別ヲ立、御献言アリ、幕府ヘモ、朝命循奉  
且施行ノ順次ヲ定メテ建白セラレ、或ハ閣老等ニ向テハ公武阻隔  
ノ情ヲ去リ、君臣ノ分ヲ正フシ、而シテ尽一ノ布政アルヘキ旨ノ  
御誠意ナルヲ感銘セス、却テ猜疑ヲ懷キタルハ運数ノ傾キタル兆  
ト云フヘシ、朝廷ニ於テモ浮浪或ハ一二藩無謀過激ノ説ヲ公卿  
方ノ中ニ主張スルアリテ、叡慮ヲ悩シ奉ルノ挙動ニ陥リタリ、  
豈ニ慨歎ト謂ハ  
サルヲ得ンヤ、

〔貼紙朱書〕「記入場尚糺スベシ」  
〔頭注〕「密旨奉命御献言十二ヶ条」  
過日言上之次第被  
聞召、段々幹旋之儀深

御満足ニ被 思食候、巨細内々

御透聴モ被 有候得共、猶向後諸大名御取扱方其余総体

御処置緊要、定而吃ト見込方可有之

叡察被為 有候ニ付、斯迄尽力モ有之候事故、

輦下ニ被留置、治国之良策時々被

〔聞召度力〕  
聞召上 思召候得共、無抛次第ニ而、乍暫近々帰国ニモ

相成候得者、社稷之御為方之儀心付之分底意蘊奥之処、

極密献策有之候者、厚

宸衷ニ被 箠置、錦囊之策ト被 成置度

思召候間、聊モ不遺意底、国家之御為不憚機密、不避

忌諱、極内々言上有之候様被遊度候事、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一四〇号・「玉里島津  
家史料一」二九三号と同文なり〕

右、閏八月十五日正親町三条大納言殿ヨリ密ニ御渡ニナ

リタリ、

〔頭注〕「密旨奉命御献言十二ヶ条」  
今般不肖之小臣ニ存慮無伏蔵、不憚忌諱不避嫌疑、献  
言仕候様承知仕、誠以恐入難有仕合奉存候、且先日者

出格之

思召ヲ以、參

内被仰付候旨承知仕、無位無官之身奉汚

朝廷候儀ニ付、再三固辭仕候得共、是非御受申上候様承

知仕、無拋御受申上參

内仕候処、関東之模様逐一御尋問被為在、殊二重キ御品

迄モ拜領被仰付、実ニ武門之面目、別而難有仕合、毫

端ニ難尽次第ニ奉存候、此上者不肖之身ニ及候程者愈

以抽忠勤度奉存候得共、從來至愚短才ニ而御為メニ相

成候程之良策モ存付不申、実以赤面至極恐入奉存候、

然共適承知仕候儀、沈黙仕候而者却而不忠之至ニ付、

鄙見之趣左条ニ申上候間、乍恐

聖断ヲ以テ宜御取捨被成下度奉希上候、

一當時

皇国之形勢ヲ細ニ觀察仕候処、外二者夷賊頻ニ跋扈之威

ヲ逞フシ、内ニハ諸藩漸ク割拠ノ形ヲ醸成シ編者曰、内ニハ諸藩漸

ク割拠之形ヲ醸成シ云云、當時大小各藩種々ノ故障ヲ以テ參勤猶予ヲ

申上ル者多シ、是レ全ク公武ノ御間御隔隔ノ説伝播シ、夫ヨリシテ首

鼠而端ノ意ヲ懷キ時勢ヲ傍觀スル者ナリ、茲ヲ以テ各邦家ヲ全、於

フセンノ策ニノミ心ヲ用ルノ習風ナルヲ記サレタルモノナリ、  
編者曰、国父  
公勅使ニ御差

副御東下、閣老其他一橋及ヒ越前侯等へ向テ大政変革ノ御督促アラセ  
ラレシハ前記ノ如ク、閣老中ニハ奉行ノ 勅答ニ及ヒタリト雖モ、優々  
不斷ニシテ決行遲々タリ、是、諸国有志之者共者攘夷ノ説  
レ全ク猜疑ニ根シタル者ナリ、

ヲ主張仕、激烈之論ヲ唱へ、実以危急存亡之時ニシテ、

終二者州郡戦争之衝ト相成候半歟ト大息仕罷在候、然

処今般於

朝廷姦臣御退黜之御英政、実ニ恐悅至極、小臣等扑躍仕

候次第ニ御座候、此上者愈以姦党之邪謀ニ不被為惑、

関東之權勢ニ御恐怖不被為在、

朝議確乎トシテ御動揺不被遊様奉伏願候事編者曰、二藩或ハ浮浪輩カ無謀輕

躁ノ論ヲ公卿方信用シ、或ハ切迫セラレ、而シテ 朝議動揺、  
スルニ至レルコト寡カラサルヲ 憂歎セラレタル者ナリ、

一九条前関白九条前関白尚忠卿積年幕府ト同心一意、上 朝廷ヲ困

メ奉リ、下民心ヲ破リ公武ノ間隔隔ヲ生シタリ、其姦  
事ノ概略ハ上ニ  
記スカ如シ、 姦党之巨魁御座候ニ付、今通被召置候而者

不被為濟御事ト奉存候事、

一匹夫之論激烈ニ過キ、且ツ己カ名利之為メニスル事多

ク御座候得者、猥リニ御採用不被為在様奉存候事編者曰、  
今春

国父公御上洛ノ後、各藩士又ハ浪人等上京シ公卿方ニ出入シ、鎖攘

或ハ討幕之説ヲ唱へ、暴慢激烈之挙動甚太シキカ故 婦女子ニ等シ

キ公卿方煽動セラレ、 朝議モ夫レカ為メ紛紜ニ陟リタル事少カラ

或ハ長州人ハ浪士ヲ懷ケ、種々噂言浮説ヲ流布セシメ  
人心ヲ惑ン、或ハ 朝廷ト本藩ノ間ニ離間ノ、  
姦謀ヲ施シタルモ又寡カラサリシト云フ、

一 撰家・親王家者勿論、其余公卿方等、當時節忠誠ヲ以

御奉公有之、聊タリ共傍觀無之様有御座度、且先度モ

申上候通、匹夫江猥リニ御面談之儀、嚴密御取締被為

在度奉存候事、

一 青蓮院 獅子王院尊  
融法親王 御門跡御政事御相談御還俗之御事、先

日口上ヲ以奉願候通、猶又御評決奉願候事 編者曰、青蓮  
院宮ハ當時各

宮方ノ中ニ大ニ名声アリ、為人聰明顯悟ニシテ憂國ノ至情アリ、茲、  
ヲ以テ御還俗因事御關係アルヘキ旨、厚ク御獻言アラセラレタリ、

一 公卿方御黜陟等之儀ニ付、以來関東ヨリ種々申上候共、

朝廷正議被為立候上者、一切御動搖不被為在様奉存候事

編者曰、從來公卿方ノ進退黜陟モ 朝廷ノ意ニ任セラレス幕府之意  
見ニ循セラレタリ、故ニ必ス幕府ノ鼻息ヲ伺ハル、ノ弊少カラス、  
實ニ朝威稍地ニ墜チタルノ形況ナリシハ數百年ノ久シキナリシ故、  
國父公今春御上洛ノ後ハ 朝威漸ク復古ノ緒ニ就キタリト雖モ、旧

弊未タ去リ兼タルヲ以テ、  
如此記サレタル者ナリ、

一 故井伊掃部頭 直弼 在職中、

禁裏六門警衛卜称シ新ニ番人召置候儀者、何等之趣意ニ

候哉、非常守護之為メニ候得者、古來ヨリ被召置候番

人モ有之事ニ候ハスヤ、外夷窺隙之時節尚又嚴重ト申

訊ニ候得者、六門辺之守護ニ而者甚以切迫ニ過キ候様

ニ而、外ニ遠慮モ可有之候間可為無用候、(到底カ) 當底窃盜ヲ

警メ候而已之趣意ニ候者、外ニ処分モ可有之哉、只今

之形容ニ而者全ク

御所ヲ致拂塞候ニ似寄リ以ノ外ノ儀、是カ為ニ下人心ノ

疑論モ致拂騰候ニ付、以來前例ニ復候而、其余全体之

警衛者大藩二三名江交代致輪番候様、幕府ヨリ手厚ク

下知有之度、尤モ松平肥後守 容保 御当地守護之儀者速

ニ免許被仰付度奉存候事 編者曰、六門警衛卜称シ新ニ番人名  
置候儀云云、去ル安政五戊午ノ年、

大老井伊直弼暴威ヲ以テ宮・堂上ヲ或ハ各藩侯、或ハ忠奮ノ人土ヲ所

刑シタル末、名ヲ外夷ニ備フルニ仮リ、其実ハ内地ノ人土カ入京或ハ

朝廷ニ親ミ奉ランコトヲ防ンカ為メ、六門ニ番人ヲ置キ通過ノ人ヲ驗

査シ、或ハ近畿ノ藩々へ密令シ隠ニ 朝廷ヲ斥束シ奉リ、中ニモ彦根

藩ニ命シ許多ノ人数ヲ洛中ニ置キ警戒シ、或ハ近頃會津藩ニ守護ヲ命

シタリ、如此緊束シ奉レルカ故、一般幕府ノ暴行ヲ惡ミ 朝威ノ暢ヒ

セシ事ナリキ、

一 此節関東へ被命候儀者勿論、以來迎モ何事ニ不限被仰

下候条々御受申上候後申度遲延相成候ハ、時々御催

促被為在度奉存候、(申度遲延カ)

勅命被為在候者、以後其儘ニ而被召置候而者第一

朝威ニ被為拘、不輕御事ト乍恐奉存候事 編者曰、從來 朝廷  
事柄、幕府ニ於テ甘心セズ、陽ニ否違シ雖キハ事ヲ左右ニ托シ遷延、  
奉行セザリシヲ習弊トセリ、畢竟幕威ノ如何ニ二関スルヲ以テナリ、  
朝廷ニモ止ムコトヲ得サセラレス放擲シ、不問ニ付セラル、ノ習慣ナ  
リキ、往昔ヨリ 勅詔ヲ遷延シ、或ハ違非シ或ハ放擲シタル事実ハ後  
二記、  
ス、

一於関東一橋・越前登用有之、旧弊变革之趣向卜者見受候得共、何分現事延引相成申候、若今通ニテ相過候而者、

又々天下之衆心動揺可仕歟卜甚懸念至極ニ御座候、依之熟考仕候処、兎角閣老者勿論、幕役人之心底一橋・

越前ニ大権不帰様ニトノ趣意ニ被察申候、兩人ニ大権無之候而者逆モ

勅命通变革モ難被行、乍恐

宸襟モ被安兼候御儀ト奉存候、兩人之儀者人望ノ帰スル

処ニ候得者、大政委任有之候様此涯吃度

御内命被為在度御事ト奉存候、若兩人へ委任之上猶變

革不相成候ハ、最早無致方次第御座候間、其節者機

變ニ応シ御決心之御処置被為在候様、乍恐奉存候事編者

曰、関東ニ於テ一橋・越前登用云云、中略ス、兎角閣老ハ勿論、幕役人ノ心底云云、元来幕府ニ於テ一橋・越前ノ記コヲ忌避スルハ井伊直弼ニ初リ、安政五戊午ノ年譴責シタルハ前二記シタルカ如ク、加之今春、勅命又ハ、国父公ノ御献言、或ハ閣老ニ向テ御論責モアラセラレ

タルカ故、幕府ハ止ム事ヲ得ス登用セラレシカトモ、一橋公御後見、越前公政事総裁トハ大権両公ニ帰スルカ故大ニ忌避シ、例ノ遷延遅寛ノ旧習ヲ以ヒタル者ノ如シ、茲ヲ以テ、国父公其機ヲ察セラレ、重テ御内命御督促アラセラレンコトヲ献言セラレタル者ナリ、又兩人へ委任ノ上猶变革不相成候者、最早致シ方無キ次第云云、中略ス、機變ニ応シ御決心云云ノ御文意御勇決ノ御意文外ニ溢レタリ、

一今般非常之以

聖斷、

勅使被差下、一橋・越前登用相成候上、猶国是之議論可被

聞召候間、越前上洛有之候様被仰下候処、兩人登用相成〔貼紙〕御書取ノ写記載仕度〔朱書〕ナシ候而モ、越前上洛之儀者国是之義論評決之後ナラテハ

難決候ニ付、御猶予可被下旨以書取願出候由、就而者〔貼紙〕書取ノ写記載仕度〔朱書〕ナシ此涯上洛之程合無覚束候間、尚又催促被仰出度、尤、大

政变革ニ付而者、当時ノ世ニ応シ事ノ大小、緩急之次

第モ可有之候ニ付、眼目之ケ条ヲ評詔シ速ニ上洛可致、

国是之論ニ付而者

叡慮之御旨モ被為在、親敷被

聞召上度

思召候トノ御趣意ニ而御達有之度奉存候、若越前上洛

仕候ハ、御尋問之次第ハ第一夷狄掃攘之儀、十年ノ〔貼紙〕御受書記載仕度〔朱書〕ナシ内可及拒絕ト先ツ幕役共御受申上候事ニ付、其処置即今ヨリノ見当如何ント大綱之旨趣被

聞召上、且攘夷之儀者不容易訊柄ニ付、大小藩一同々心戮力不致候而者難被行候事ニ付、上者親王・摂家・公卿・幕府ヨリ、下者三卿・三家・列国之大小藩ニ至迄、

無残

朝廷江為致猷白候様被遊度

思召二候、左候ハ、時ノ宜ニ從ヒ篤ト御決議之儀者、

大樹御相談之上可被仰出候旨被命度奉存候事 編者曰、夷狄掃攘之儀

十ヶ年ノ内可及拒絶ト先ツ幕役共御受申上云云、中略ス、大小藩同心不致戮力候而者難被行云云ノ御文公平ノ御論旨ニシテ、天下ノ一大重事ヲ如何ニ大權掌握ノ幕府ナリト雖モ、專断シテ期限ヲモ定ムヘキニ非ラサルハ論ナシ、朝廷ニ於テモ大小各藩ノ意見御諮問、其宜シキヲ取捨採択セラレ、而シテ勅諭ヲ下サル、ヲ施政ノ要点トス、況ンヤ治乱ノ分ル処ナルヲヤ、加之外国ニ対スル重大ノ事件ナル多弁ヲ、要セス、

一諸大名縁ヲ求メテ周旋相願候者有之由、当春小臣滯京

之節迄者何共不申出、傍觀之模様ニ御座候処、於関東

一橋・越前登庸之事等

勅諭通尊奉有之候故、時勢ヲ恐れ候儀ニ而、俗諺ニ申候

日和見之心底ト推察仕候、粗承知仕候得者、多分者内

願通

御内命被為在候由、天下之人心ヲ不被為失為メ之御趣向

ト者奉恐察候得共、内願之者ハ正邪虚実ノ御探索モ無

之、猥リニ御許容被為在候而者、乍恐

朝威ニモ可被為拘哉ト恐入奉存候、殊ニ征夷之任ヲ差置、

且無謀之論等申上候者モ御座候哉ニ伝承仕候得者、尚

以趣意能々御糾シ実心勤 編者曰、諸大名縁ヲ求メテ周旋相願候者有之由云云、前文ニモ記シタルカ如

ク、國父公御上洛浪士御鎮撫、而シテ勅使ニ御差副御東下ノ頃迄ハ各藩拳テ傍觀シ、幕府如何ノ点ニ向フヤ、勅諭循奉否ヤノ機ヲ窺ヒ居タリシニ、國父公、朝威御輔翼アラセラルカ故、幕府旧慣ノ悪弊ヲ以ユルコト能ハス、遂ニ奉行スルニ至レリ、茲ヲ以テ大小各藩モ意外ニ出驚愕、直チニ雷同シテ藩吏ヲ上京セシメ、宮ノ堂上方ノ間ニ縁ヲ求メ、或ハ旧故ヲ尋テ詔ヒ諷リ、或ハ賂賄芭直ヲ以テ動シ、公武ノ間ニ周旋セント懇願スルニ至レリ、然ルニ公卿方ニハ時ヲ得タリト正邪ノ<sup>枢</sup>別モナク吹捧セラレ、内、勅ヲ下サル、ニ至レリ、実ニ御文ノ如ク、<sup>日相見</sup>嚮キニハ傍觀誹議喋々タリシモ、勢ノ及サルヲ見テ候<sup>日相見</sup>色ヲ替ヘ形ヲ改メ、勤、王鎮撫ヲ唱ヘ雷同スルハ、所論<sup>日相見</sup>見<sup>日相見</sup>心底ナルハ論ナシ、

王ニ相違無之、現事相行レ候策モ有之候ハ、屹度

御内命被為在候様奉存候、併関東モ先者一橋・越前登用

大政変革之趣向ニ相見得候間、此涯之処諸大名上洛ニ

者及申間敷奉存候、此末於関東大政之旧弊、外夷之処

置等変革モ無之、

朝廷尊崇之道モ忘却之姿ニ御座候者、其節者速ニ上京尽

力仕候様嚴重御達被為在、御受書差上候様被仰渡度奉

存候、其期ニ至リ若參向不仕者御座候ハ、違

勅ニ相違無御座候間、嚴罰ニ被<sup>日相見</sup>處候様奉存候事、

一攘夷之儀者方今之一大重事ニ而、

公武御隔意之根源ト奉存候、尤モ於関東条约御取替シ

編者曰、井伊直弼專断ヲ以テ外國条约ヲ結ヒタルハ、安政六年己未六月横浜ニ於テ米國ト締結ス、尋テ英仏蘭魯ト同シク条约ヲ結ヒタ

リ、閣老堀田備中守ヲ上京セシメ条約 勅許ヲ促シ奉リタルハ安政五戊午十二月、越テ六年正月ニ至リテ東帰セリ、相成候上之事ニ御座候得者、無故攘夷被仰出候而者、決而於  
關東御受有御座間敷、左様御座候得者第一

朝廷之御威光ニモ相拘リ、不軽御事ト恐人奉存候、殊ニ

編者曰、攘夷ノ儀者方今之大事ニ而、公武御隔意之根源云々、趣、  
實ニ彼ヲ知り己ヲ知り、當時ノ形勢ニ通貫セラレタル者ナリ、三百  
年来昇平ノ余沢ニ浴シ、士氣衰弱、器械備ハラス、幕府ヲ初トシテ  
各藩拳テ財用足ラス、又海軍ノ備無ク徒ニ陸上ノ短兵ヲ以テ攘斥セ  
ントスルハ、彼レヲ知ラサルノ甚シキ者ト謂フベシ、假令ヒ我ニ陸  
戰ノ設アリテ士氣モ振ヘリト雖モ、彼ハ長スル処ノ軍艦ヲ以テ各要  
津ニ出沒シ、遠擊シテ妨ヲナスニ於テ、一時撃捕ヲモ彼又再び來  
浸スルヤ必セリ、然ルトキハ所謂頭上ノ蚊蠅ヲ追フカ如クニシテ、  
我ハ遂ニ奔命ニ勞レ、為スコト能ハサルニ到ルヤ論ナシ、茲ヲ以テ  
國父公ハ先ツ内政ヲ整ヘ人材ヲ登庸シ、全国一致戮力ヲ第一要ト  
シ、而シテ財用ヲ足シ陸海ノ軍備ヲ完整シ、彼ト對センニハ出テ制  
スルノ国力ヲ保テ、而シテ攘斥ノ、勅命ヲ天下ニ布ル、ノ御計畫ナ  
リ、然ルト先年ヨリ 睿慮ノ在ル処、単ニ鎮攘ノ命ヲ布カレントス  
ルヲ、浮浪ノ徒或長士等ノ人無謀ニ鎮攘ノ、勅命ヲ冀望ルノミナ  
ラス、窃ニ公卿方ニ逼迫シ、発勅ヲ促シ奉レルカ如キ挙動アリ、公  
卿方ニハ數百年來尊大鄭重ニ成育セラレ、人情ノ如何ンヲ知ラス、  
武備ノ沿革奈何シテ弁セズ、大小藩ノ貧富強弱如何ンヲ識ラス、又  
外夷ト云ヘハ禽獸ト同群ニ蔑視シ、實ニ彼我ノ弁識ヲ鎮攘ヲ主張  
セラレタリ、茲ヲ以テ無謀ニ鎮攘ヲ令セシメ、時ハ、幕府ハ責任ヲ  
リト雖モ二百余年驕侈墮弱ニシテ、嘉永癸丑以來外夷ノ威嚇ニ恐怖  
シ、專斷開市ヲ允シタリ、無謀ニ鎮攘ノ、勅詔ヲ下サル、時ハ幕府  
ニ違 勅ヲ促カサル、二等シク、又設令ヒ 天裁ヲ仰カス專擅ノ約  
条ナリト雖モ、日本政府ノ名義ヲ以テ結約シタルカ故、鎮攘スヘキ  
ノ条件アルニ非ラサレハ妄リニ義行スヘカラス、若シ忘リニ整掃ス  
ルトキハ、曲我レニ在リテ無名暴行ノ譏ヲ免カラス、茲ヲ以  
テ輕躁無謀ニ鎮攘ノ、勅詔ヲ下サル、トキハ、違 勅ヲ懲滯セラ

ル、二等キノミナラス、内ニハ浪士等蜂起シ、外ハ外国ニ  
暴行ノ譏ヲ受ルニ立到ランコトヲ憂慮セラレタル者ナリ、此趣伝  
承仕候ハ、浪士共又々蜂起可仕敷ト甚危念奉存候、  
併横浜・長崎等在留之夷人迄之儀者關東ニ被命候ニモ  
及不申、私一手ヲ以テ十分追撃仕事御座候得共、其後  
之処置當座二者御受難申上御座候、其故者条約取結之  
上、無故此方ヨリ兵端ヲ開キ候而者夷人共不義非道ヲ  
申立、同盟之國々相結ヒ、遂ニ軍艦數十艘差向ケ、江

戸海者勿論、諸國要地之津港江乱妨仕、防禦 編者曰、當  
メ大小三百余藩、武備充実ト名ツクヘキハ一トシテ之レアルコトナ  
シ、加之財用欠乏負債夥多、士民ノ給養モ不足ヲ告ル者十中ノ八九ニ  
多言ヲ俟タス、其概況ヲ記サンニ、第一、治乱共ニ緊要トスル処ノ  
人心一致セス、協心戮力國事ニ竭サントスル者甚タ少シ、第二、數  
百年來花美驕侈柔惰ニシテ士氣衰弱ナリ、第三、全国一般上下二人  
材乏シ、第四、貴賤共ニ多クフシテ彼我ノ弁識ニ暗シ、第五、鎮攘ノ  
ノ形勢ヲ概知スル者最モ少クフシテ彼我ノ弁識ニ暗シ、第五、鎮攘ノ  
令ヲ布ル、トキハ候チ兵端ヲ開クニ至ルハ論ナシ、然ルト於テハ資  
糧・器械共ニ備ハラサルヘカラス、然ルト外國ニ於テハ近代器械ノ  
製煉ニ精ヲ究メ、從來我カ國ニ用フル処ニ比スルハ、其精利同年ニ  
謂フヘカラス、第六、日本ニ於テハ未タ海軍ノ設全ク之レナシトモ  
リト云フ者ハ從來ノ小早船等ノ類ニ止マレリ、近頃幕府ニ於テ洋製  
ノ汽船ヲ購求シタリト雖、皆普通ノ商船ニシテ然モ纔ニ大小四五艘  
ニ過キス、本藩ニ於テ大汽船二三艘ヲ備ヘタルノミニシテ、日本中  
僅ニ六七艘ニ過キサルナリ、其他各藩未タ備ヘタルニシテ、加之海兵  
ノ設ナシ、第七、陸戰短兵ハ我カ所長ト雖、古ニ反シタルハ大小砲  
ノ備ナクンハアルヘカラス、況ンヤ外夷ハ精利ヲ究メタル銃砲ヲ專  
用スルカ故、設令ヒ短兵ニ拙シト雖、遠撃セララル、二當テ我ハ唯々

握腕スヘキニ非ラサレハ、我モ又精利ヲ究メタル器械備ハサルヲ得サルナリ、備ント欲スト雖モ財用足ラス、或ハ即成スヘキ者ニ非ラス、之レ第七ナリ、又海陸ノ守禦ハ岩・堡壘・濠ノ設アリ、大小砲器・砲臺アリト雖、彼ト対当ノ域ニ至リシ藩營テアルコトナシ、則航海ニ練達セルハ最モ未タ我レノ及ハサル所ニシテ万里ノ波濤モ謂トセス、我ハ唯沿海廻航ニ過キスト謂フヘク、適々遠航ト云フモ琉球・朝鮮海止リタリ、斯ク航海ニ拙キヲミナラス海戰ニ暗キヲ加シ之二百余年兵馬ヲ見ザルノ兵剩ハ訓練セザル兵ナリヲヤ、所謂教ハサル兵ナルカ故、遽ニ之ヲ以テ戦ハシムルト謂フ者ニシテ、是レ之ヲ棄ツト謂フモ虚言ニ非ラサルナリ、真ニ御文ノ如ク、彼レ軍艦ヲ以テ各所ノ要津各港ニ出沒シ妨害スルトキハ、我短兵幾万ヲ備フト雖、當ニ握腕切齒益ナキノミナラス、奔命ニ勞ルハ論ナク、假令ヒ掃蕩ストモ頭上ノ蠅ヲ逐フニ等シ、茲ヲ以テ 照国ハ皇國ノ地理ニ就テ船艦ヲ備、海軍ヲ設、攻守共ニ必要ナルヲ洞見セザレ、軍艦ヲ製シ海軍ヲ設アランコトヲ建言シ玉ヒ、其御文中ニモ頭上ノ蠅ヲ逐ニ同シ云云ト記サレタリ、然而シテ 国父公ニ於テ其遺訓ニ則ラレ、尚ホ當時彼我ノ形勢人情ヲ觀察セラレ、理ヲ尽シ実ヲ糾シ、輕躁無謀ノ鎖攘ハ自ラ国辱ヲ求メ内國ノ騷擾ヲ惹起シ、国际上疲困ヲ招クノ基ナルヲ反復諒諍セラレタリ、之レ第十ナリ、以上十目ハ其概略ニシテ、勝算ナキノ条枚拳ニ違アラサルナリ、當時幕府ハ姑ク措キ、大小三百余藩ノ中ニ武備ノ少シク備ハレリト唱フルハ僅々四五藩ニ過キス、其他ハ設令ヒ器械ノ一備ハレリト謂フモ、從來ノ式ニシテ实用ニ充ツヘキニ非ラス、兇賊ニ等シク不備ノ名ハ免レサルナリ、長州・水戸・佐賀等僅々三四藩ヲ以テ少シク備具ノ名アリト雖、封域ノ守備モ足レリト謂ヒ、唯シ況ンヤ其他ハ推シテ知ルヘキナリ、隣藩熊本ノ如キモ三四年前浦賀警衛奉命ノ時、实用ニ適スヘキ砲器無ク、本藩ハ借用ヲ懇請セラレタルコトアリタリ(彼藩士德富多太助、外一名來覽セリ)、其始末ハ 照国公御文ニ詳記ス、爾來注意セラレタルニ非ラズモ速成スヘキ者ニ非ラズ、又陸海軍ノ演習、大小砲器製造盛ナルノ名アルニ非ス、矧ンヤ其他ハ推知スヘキナリ、本藩ハ當時勿論十余年ノ後ヨリ海陸ノ守備整ヒタルノ名ハ海内第一等ニ居レリト雖モ、封内三州ニ備ルニ足レリトミニシテ、未タ他ニ及スノ域ニ至ラズ、天保ノ末 齋興公外夷ノ患大ナランコトヲ深く慮ヒ玉ヒ、軍制ヲ一變セザレバ大小銃砲ノ製造局ヲ開カレ、或ハ砲臺製造所モ盛大數百萬斤ノ貯蓄アリ、或ハ海岸ノ各要衝ニハ砲

(附書考)

台ヲ創築シ、或ハ操練所ヲ創起シ國中一般士タル者ヲシテ訓練ニ怠ラサラシメ、或ハ遠路行軍或ハ野營演習ヲモ開カレ、士氣振作ノ道最モ丹精ヲ尽サレ、尋テ 照国公繼紹セラレ一層集成、精ヲ究メ増補改良御躬ヲ垂勉セラレ、特ニ大小ノ軍艦數艘ヲ創製、幕府ハ獻呈セリト雖、海軍ノ設立等百事整理ト謂フヘキニ至レリ、而シテ 太公ニ至テ益精究セラレ、殊ニ天下ノ形勢漸ク衰レ乱兆顯然タルカ故、海陸攻守ノ備稍整頓ト謂フニ至レリ、茲ヲ以テ全国独歩ノ名轟キタルハ成人知ル処ナリ、此ノ如ク殆シト二十年御三代ノ間綿々力ヲ竭サレ、夫レカ及マ費ス処ノ用途モ幾十萬ノ巨額ニ及ヘキニ、殊ト雖モ恐クハ遠ク及ハサル処ニ用テ、唯汽船二三艘ノ多キヘシ、殊ニ士氣ハ古ニ比スレハ衰ヘタリト云フト雖モ、固有ノ存スル処アルカ故、他藩同日ノ談ニ非ラサルナリ、然而シテ近代内外多難ニ臨ルカ故、復旧シ之レ又恐クハ比肩アラサルヘシ、或ハ財用不足ナリト云フト雖モ、齋興公厚ク心ヲ用ヒ玉ヒ畜積モ寡カラス、此ノ如ク海内ニ於テハ當時誇ルヘキノ潛力アリト雖モ、外国ニ対スルニハ全国一意戮力、器械全備、勝算立ツノ時ニ至ラサレハ(鎖攘ノ令ヲ布カルヘキニ非ラス)、兵ノ最モ要トスル処ハ城郭濠溝ノ堅固ナルモ、人心ノ和二若カサルハ論ナク、然ルニ當時上公武ノ御間阻隔ノ情水解ニ至ラス、各藩ハ首鼠兩端方向定ラス、上下共ニ異議紛紜猜疑交々、一トシテ各家ノ憂フル処ノミニシテ喜フノ点曾テアルコトナク、勝算何レニアルモ知ルヘカラス、然ルニ妄リニ鎖攘ノ説ヲ立ルノ徒ハ、輕躁無謀ト謂フヘキハ論ナキナリ、茲ヲ以テ反復獻言セラレタル、不行屈之処ヨリ内地江乱入候儀顯然ニ御座候、私武門之身ニ而、ケ様申上候者不相似之儀ト可被

思召候得共、三百年來ノ太平、人心驕惰之風習、適愷慨之者有之候得共、只ニ氣象迄ニ而実場不案内之武士共必勝之策無覺束、併陸戰者古來ヨリ我長スル所ニ御座候得者、強チニ敗走而已者仕間敷、彼ハ陸戰勝利無之ト存候節者、數十艘之軍艦所々要地之海口ニ出沒致シ、

江戸・大坂其外津港之進路ヲ妨ケ候ハ、是非差出シ  
追扨不申候而者相成間敷、水戦者我カ短ナル処ニ御座

候得者、勝算無覚束奉存候、然ル時ハ自ラ編者曰、當時横  
濱・長崎等ニ外  
國船碇泊ハ僅々数十艘、其中ニ軍艦ハ四五ヶ國ノ通信國ノミ采衛セ  
ルカ故、五六艘ニ過キサルナリ、他ハ皆商船ナリ、厘カ五六艘ヲ攘  
斥スルハ容易ナルカ故如此記サレタリ、然リト雖モ同盟各国カ戮力  
來襲スルニ於テハ、方今我國ノ兵備ヲ以テ掃攘スルハ則無謀ナルヲ  
論セラレタル者ナリ、是則彼我  
ヲ弁知セラル、ノ要点ナリ、

皇國中窮迫ニ及ヒ不戦シテ屈辱セラル、ニ至候儀、必然

之勢ニ御座候、就而愚考仕候処、兎角於関東大政之旧  
弊御一新、武備充実之処御急務ト奉存候、徒ニ筆紙上  
許リニ而御実意ニ御世話無御座候而者、因循苟且之四（苟且カ）  
字終ニ消失仕候期有御座間敷、長大息ノ次第二御座候、  
粗承知仕候得者、迅速ニ攘夷ト申ス事ニ者無御座候得  
共、攘夷ト不被仰出候得者武備充実之期無之ト之

朝議ニ被為在候由、是又御尤之御事ニ者御座候得共、方

今之処ニ而攘夷顯然ト被仰出候而者不被謂禍害ヲ醸出  
候半歟、其子細者激烈之士共此命ヲ伝承仕候ハ、弥  
憤發仕、武備不充実之時世モ不計、端的ニ横浜・長崎  
等江攻撃之策ヲ主張シ、幕府モ鎮靜難相成時機ニ立至  
候者必然ニ御座候、左様御座候而者外夷之術中ニ陥リ、

皇國一統混乱之基、清國之覆轍ヲ被為踏候御事ト、別而  
恐人奉存候、依之前文申上候通、於関東大政之旧弊御

一新、武備充実之御世話御実意ニ御主張有之候様仕度  
一 新、武備充実ノ期無之、朝議ニ被為在候由云云ニ付テ、聞  
ク処ニ抛レハ、水戸烈公ノ御所論、藤田東湖等モ頻ニ鎖攘論ヲ主張  
スルハ、全ク士氣振テ要スル一策論ニシテ、内旨ハ敢テ攘斥スベキ  
非ラサリシト、水戸公及ヒ藤田如キノ人カ無謀ノ攘斥ヲ主張スベキ  
者ニアラサルカ故、果シテ士氣振張ノ策論タルヤ明カナリ、然ルニ  
當時公卿方ハ水戸論（未派カ）ヲ主張シ、但シハ浮浪士カ粗暴論ニ脅迫  
セラレシ者ナルハ論ヲ俟タサルナリ、當時ノ形勢ハ、目前各港ニ數  
國ノ夷船碇泊シタルカ故、水戸ノ鎖攘ヲ主張スル時トハ時機ヲ弁セ  
サルノ甚シキト謂フベシ、今ノ時ニ当テ無謀ニ令セラル、時ハ、浮  
浪ノ徒妄ニ事ヲ開キ、却而外夷ノ術中ニ陥ルヤ疑ナシ、彼ハ無名ニ  
戦端ヲ開クコト能ハサルカ故、我レノ瑕瑾ヲ窺ヒ、遂ニ内地致合セ  
サルニ乘シ、彼ニ蹂躪ノ階ヲ与フルニ同シカルベシ、近ク清國阿片  
事件ヨリ、遂ニ要衝ノ地ヲ裂キ与ヘタルノ轍ニ陥ラシトテ、憂慮  
セラレ、先ツ内政ヲ整ヘ出テ制スルノ国力ヲ保チ、而シテ後大ニ為  
ス処アランノ御計画ナリ、然ル場合ニ至ラバ、戦ハスシテ彼ヲ御ス  
ルノ策生シ、又嘉永癸丑爾來ノ存候、乍恐 東照宮以來天  
辱モ挽回スルニ至ルヤ論ナシ、

下之大政只  
皇國中迄靜謐之為、尾大不掉之患無之様御処置ニ而、外

寇防禦之儀者難相成御座候、方今之勢ニ而者武備堅固

ニ外夷之輕侮ヲ不受様之御処置ニ無之候而者相成間敷、  
其御処置者第一諸藩之疲弊御救ニ有之候、疲弊之本者  
參勤妻子在府火消御手伝等ニ有之候ニ付、右之件々都

而御猶予二而、武備充実仕候様御実意ニ被仰渡候ハ、諸藩モ是ヲ以テ必定價発可仕奉存候、若其上偷安遊惰之弊習不相改者、屹ト嚴罰被仰付度奉存候、右様之御処置ニ御変革御座候者、武備者自ラ充実仕、夷狄ヲ万里之外ニ攘斥仕候儀掌握之内ニ御座候ト雖モ、於關東右通断然タル処置者致間敷、猶暴威ヲ以テ諸藩ヲ屈服之手段而已ニ可有之候得者、

朝廷之御明断ヲ以不被仰出候而者迺モ武備充実、〔外寇カ〕外寇逐斥之処難相成奉存候事

編者曰、御文中ニ第一諸藩ノ疲弊御救ニ有之候、疲弊之本者、參勤妻子在府火消御手伝等ニアリ云云、大小藩共ニ遠近ノ別ナク隔年參勤シ、或ハ妻子在府シ終身我國邑ノ地ヲ踏ミタル者ナク、邸内ニ屈居シ聊カ府内ノ別業ニ遊歩スルヲ以テ無上ノ快樂トセリ、隨而府ノ内外ニ大小ノ邸宅ヲ營ミ、本邸・中邸・下邸或ハ隱邸・支度邸等大小數邸ヲ設ケ、或ハ定府ト唱へ、上下ノ家臣ヲ邸中ニ住居セシメタルモ少カラス〔増カ〕（本藩モ各邸ノ長屋ニ住居スル者総計三百余戸、其人員男女老幼一万余人ニ及ヒタリ）、又衣食住共ニ驕侈ヲ極メ、大藩ハ幕府ヲ模擬シ、中藩ハ大藩ヲ擬シ、小藩ハ中藩ヲ擬シ花奢迭遊ヲ事トシ、尊大鄭重ニシテ、邸外ニ出ルニハ數多ノ從者ヲ具シ、或ハ交際上音信・贈答ノ類多少ヲ以テ禮義ヲ輕重シ、其他百般ノ費用枚挙ニ遑アララス、又隔年參勤往來ニハ許多ノ培者〔増カ〕ヲ從へ種々ノ道具ヲ運搬シ、或ハ妾婢ヲモ往來セシムルヲ普通トス、国邑ニハ相当ノ城郭ハ勿論カ別業・茶邸ヲモ設ケ、數多ノ大小家臣ヲ給養シ、其用途最モ寡カラス〔増カ〕（飯令八十万石ノ領主モ費ス処ハ二十万石余ノ數ニ及ヒタルカ故、疲弊セサルヲ得サルナリ、爰ヲ以テ大小藩共ニ浪花其他ノ商賈ニ（銀仕ト唱フ）依頼シ多少ノ給米ヲ与へ、甚シキハ家老・用人等ノ格式ニテ会釈シ、而シテ年々國産ヲ以テ借金ノ元利ヲ償却スル等、是カメ歳入ヲ占取セラレ、余祐全クナキニ至レリ、其負債ハ悉ナ參勤

往來、在府其他驕奢ノ經費ニ耗シタル者ナリ、又火ノ番ト唱へ、大藩ハ東叡山又ハ増上寺等消防役ヲ命セラル、事アリ、其時ハ国邑ヨリ許多ノ人員ヲ召喚シ防火ノ具ヲ備へ、隣地火災ニハ藩主出張シ指揮ヲ加フル等、其經費モ亦寡カラス、徳川家譜代或ハ家門ノ藩々ハ江戸各所ノ門衛ヲ輪番ス、是ニモ多少ノ人員ヲ要ス、或ハ手伝ト唱フルアリ、江戸城ノ修繕或ハ火災ニ燒亡セシトキハ建築ノ費用、或ハ川湖堤坊ノ修築等ニモ各藩ニ手伝ヲ命シ費用ヲ補充セシメタリ、之レヲ手伝金ト稱ス、此ノ如キ費用アルニ當テハ、国邑ノ士民〔半脱カ〕ニ賦課出ヲ令スルヲモ普通トセリ、實ニ驕奢ノ甚シキ者ト謂フベナリ、斯ル施政ナルカ故、御建言ノ如ク一大変更セサルトキハ武備充実スヘカラサル、

右条々、奉隨

御内命鄙見十分申上候間、忌諱嫌疑飽迄御座候ニ付、

乍恐秘密ニ被召置、世上ニ流布不仕様被成下度、偏

ニ奉願上候、誠惶敬白、

閏八月廿一日 島津三郎

〔本文書は「玉里島津家史料一」二九八号とほぼ同文なり〕

〔貼紙〕此ノ御献白ニ付、御内勅ノ趣モアラセラレ候者記載仕度〔朱書〕「ナシ」

以上十二ヶ条、極密近衛殿下之御取伝ヲ以テ御建言アラ

セラレタリトソ、第一ヶ条中ニ、今般於

朝廷姦臣御退黜之御英政云云ノ趣ハ、八月廿日ヲ以テ久

我内大臣建通・千種少将有文・岩倉中將具規・富小路中務太

輔敬久我・岩倉・千種・富小路及ヒ少将前御局今城氏・藤

ノ式部富小路氏二女右衛門内侍堀川氏等、免黜落飾或

ハ禁錮等ニ嚴譴セラレタリ、此事ヲ指シテ記サレタル

者ナリ、岩倉具視卿ハ剃髪シ、友山ト号シ岩倉村ノ別

邸ニ幽居セラレタリ、○第二ヶ条ニ、九条前関白殿下

ハ免黜セラレタルノミナリシカ、積年幕府ト同心奸術

ヲ施シタル人ナルカ故、重テ奸謀計リ難シト一般安堵

セサルヲ以、姦党ノ巨魁云云ト建言セラレシニ、八月

廿五日落飾謹慎ヲ命セラレタリ、依テ道号円真ト改メ

ラレタリトナン、以上男女十余名ノ姦人黜斥セラレシ

ヨリ人心少シク安スル処アリシト雖モ、時勢奈何ント

モスルコト能ハサルハ、一二藩論ニ欺瞞セラレ、或ハ

浮浪士ノ為メニ愚玩セラレタル公卿方アリテ、夫レカ

為メ又一弊害ヲ醸成シ、遂ニ元治元年八月十八日ノ

始末元治元年八月十八日、堺町御門ノ一条ヨリシテ三

条実美以下七名ノ公卿、長州人ト共ニ脱走セリ、二及ヒタリ  
堺町御門ノ顛末ハ後卷又ハ、  
元治元年ノ記ニ詳載ス、

121 ○閏八月十日布達、 国父公八月二十二日江戸高輪邸御

発駕、御帰国ノ途ニ就カセラレタル旨、閏八月九日報

知到着、本日布告セラレ御一門四家及大身分并諸士登

城、太守公 国父公へ恭賀ノ御式執行セラレタリ布達略

ス、

122 ○閏八月十日ノ夜、京師ノ飛報到来、 国父公

天拝或ハ 御劍 御拝戴等ノ趣、或ハ不日御退京、御帰

国アラセラル、旨報シ来レリ、茲ヲ以テ同月八日ヨリ

島津備後今珍・国老川上式部久美、阿久根迄奉迎ノ為

メ出發セリ兵庫ヨリ汽船ニ召サレ阿久、根へ御航着ノ御予定ナリ、

123 ○閏八月十一日、昼九ツ時ヨリ東北風烈シク、七ツ半時

頃ニ鎮マレリ、鹿児島及ビ近村倒家多ク、穀作田畠共

ニ損害甚シ、依テ米価遽ニ騰貴シ、白米一升百四十八

文ニ内外シ一般困却セリ、日隅二州ハサマテノ損害ヲ

被ラスト云フ、

124 ○閏八月十二日、江戸ノ飛報着到ス、曰ク、 国父公八

月二十一日江戸邸高 御発駕、御下国ノ途次武州生

輪

表ニ於テ横浜在留ノ英国人御行粧ヲ侵シタルニ依リ、

御供目付奈良原喜左衛門ナル者斬殺シタル趣報知アリ

タリ、○此報ヲ聞ヒテ攘夷主張、或ハ壯齡ノ輩ハ踊躍

シテ喜眉ヲ開キ、説ノ如ク若シ来船セハ粉塵シ、本藩

固有ノ威武ヲ宇内ニ輝サント握腕来港ヲ待ツノ勢甚タ

壯ナリ、

125 ○閏八月十五日ヲ以テ在京磯永弘卿友人某へ送リタル書

牘中、当時ノ事情ヲ抜抄シテ参考ニ拱ス、前文略ス、

125の1 勅使大原卿并ニ我公御着京、同日洛中ノ形況ハ実ニ盛ナ

ル事紙墨ニ尽シ難ク御座候、御通行筋ニハ老幼男女群

集、立錫ノ余地モ無之、御通行ヲ妨クル程ニ有之、殊

ニ近国辺ヨリ態々出来リタルモノ多キ由ニテ、御通り

掛リノ時ハ讚美ノ声絶へ申サズ、我輩迄モ実ニ錦ヲ着

タル心持ニテ、誠ニ難有事ニ御座候、又九日御参内ノ

折ハ、御通筋ニハ御着当日ノ如ク見物人夥ク、何トナ

ク賞讚ノ声喧シキ程ニ有之候、其形況ハ筆端ニ尽シ得

不申候間、罷下リ御嘶可申上候、

一御所ヨリ御下リ掛ニモ陽明殿へ御上リ、当日ノ御礼等

被 仰上候由、然シテ議伝両奏ノ宅へ御礼御廻勤被為

在候、

一御参内ノ節、近衛殿ニハ公卿御門ヨリ、我公ニハ御

台所御門ヨリ御上リ、御内証御玄喚ヨリ御昇殿、惣御

供方ハ御春屋内へ相扣居候、凡ソ三時余リノ後ニ御下

リ相成リ候、

天拝之節ハ

玉座ヲ隔ルコト凡ソ二間許ノ所へ被為召、畏コクモ

玉声ヲ懸ケラレ、御褒賞ノ厚キ

一勅語ヲ蒙ラセラレ、殊ニ

龍眼麗カリシ由、其席詰ニハ近衛<sup>忠</sup>殿ヲ初メトシテ、中

山大納言<sup>忠</sup>能殿・正親町三条中納言<sup>実</sup>愛殿・三条中将殿

美<sup>実</sup>・大原左衛門督<sup>重</sup>徳殿・姉小路侍從<sup>公</sup>知殿等、数十人ノ由

ニ御座候、

一御供方人数ノ内御側廻リ又ハ御供目付等、御玄喚迄從

ヒ奉リ候、其人数ハ、小松帶刀<sup>清</sup>廉<sup>紙</sup>・岩下佐次右衛門

方<sup>善</sup>・中山次左衛門<sup>実</sup>善<sup>美</sup>・大久保一藏<sup>利</sup>通<sup>通</sup>・中山中左衛門、其

他御医師・御小姓等、彼是十四五人ニハ過キ不申候、

一御前ニ於テ御劍并

勅書、又ハ御扣席ニ於テ御菓子 御拝戴、加之

御懇篤之

勅語御拜聞被為在、 御拝戴ノ 御劍ハ御下リノ節、取

敢ヘス仮リニ御刀箱ニ納メ御行列先ニ御持セ、守護ノ

士十余人、私ニモ其人數ニテ御座候磯、実ニ御手厚キ

御次第二テ御美名四方ニ轟キ、中ニモ積年幕府ノ輕蔑

ヲ嘆慨致候洛中ノ者ハ、貴賤共ニ喜ヒノ色ヲ顯シ、神

仏同様ニ尊ヒ奉リ候、誠ニ御家ノ御栄名ハ勿論、 公

ノ御威名タトフルニ詞ナシトハ虚言ニ無御座候、

一十一日ニハ近衛殿へ四ツ時分ヨリ御上リ相成候処、御

參集ノ御方々ニハ粟田宮青蓮院尊  
融法親王御初、中山大納言殿・

正親町三条殿・三条大納言殿・大原左衛門督殿等ニテ

終日御親談、後ニハ御酒宴被為在候由、然シテ 御所

へノ御礼ハ近衛殿ヲ以テ被仰上候由、

一右通御榮誉御名声四方ニ轟キ、中ニモ洛中ノ人氣ハ実

ニ神明ノ如ク尊ヒ奉リ、我カ公アリテコソ

皇威モ輝キ国体モ相立、外夷モ是迄ノ如ク恣ナル挙動ハ

得致スマシクト唱へ、市中ニテハ御名ヲ記シ、神仏ノ

守リ札ノ様ニ柱ナドニ張り付、或ハ神棚・仏壇ナドニ

崇メタルモ有之由、是ノ一事ヲ以テ万事御推察可被成

候、長州ニモ当春以來滯京、勤

王ノ筋ハ不相替候得共、我藩ノ如ク一手ノ果斷誠実ヨリ

湧キ出タルニ非ラス、初メ 我公ノ御奮發御勇斷ヲ聞

キ、手ヲ出スニ道ナク、幕府ニ媚ヒ我カ藩ノ挙動ヲ窺

ヒ、且ツ臨機我カ藩ヲ圧倒セントノ奸謀ヲ以テ長門守

殿歸国ノ場ニ相運ヒ、御着京ノ前後ヲ見計ヒ、立寄り

ト名付ケ滯京ノ御促ヲモ宮・堂上方、或ハ所司代等ニ

依リテ謀リタル次第第二有之候由、然ルニ我藩ノ御名望

関東ニ於テ御成功ヲ羨ミ、種々ノ流言浮説多クハ長人

ノ所為ニ出タル由、元來長州人ノ狡猾ナルハ、伏見  
寺田當春

屋事件ヲ云フ、暴挙ヲ企タル時、我カ藩人其他浪士等ヲ伏水迄

出シ抜き、事ノナラザルヲ察シテヤ上伏セシ者一人モ

無之、遂ニ跡ヲ隠シタル時宜不義不信ノ至リ、俱ニ大

事ヲ謀ルヘカラサルノ国風ナリト、我藩人ハ素ヨリ他

藩ノ者モ大ニ忌ミ嫌フ処ニ御座候、ケ様ノ国風ニ御座

候間、此後心ヲ用ヒ容易ニ大事ヲ談スベキニ非ト申ス

事ニ御座候、ケ様ノ形勢ニ御座候間此涯御滯京、將軍

上洛ノ上ハ尚ホ御相談、御政体御変革ニ御尽力被為在候様、厚キ

勅命ノ趣モ被為在候由ニ御座候得共、再三御辞退漸ク御下国ノ御暇ニ相成候由、古ヨリ和漢共ニ嫉妬ノ恐ハ往々有之者ニテ時勢御洞見、功成リ身退クト申ス格言ノ如ク断然御帰国被為在候ハ、誠ニ感服奉ル所ニ御座候、其上生麦事變ノ一大事有之候ニ付、兎角御国政ノ御変革モナクテハ叶ハサル時宜、或ハ天下ノ機運退テ御窺アルヘキノ時節ト奉存候、実ニ御明断御先見ノ明カナルハ、皆人銘感致サ、ルハ無之候、〔齊彬〕順聖公ノ御賢明ト同シト申ス事ニ御座候、又此後生麦事變ハ必ス事ニナリ可申ハ無疑、是ハ御国難ノ重キニ可有之ト奉存候、爰許ニテモ大山氏〔細紙〕ナト、窃ニ憂フ処ニ御座候、此上ハ已ムヲ得サルノ次第ニ御座候間、海防御手当一涯御嚴重、速ニ御着手專要ト奉存候、就テ御先代様ノ御着手通、神瀬ノ砲台一日モ速ニ御着手相成度ト申事ニ御座候、不遠從駕罷下リ細ニ万事可奉告候得共、御盛拳ノ〔概略方〕慨略為可申上、如此御座候、云云、

閏八月十五日

尚々此節

褒勅ヲ蒙ラセラレタル趣其御地ニ相知レ候者、有志連中ノ喜ヒ嘸カシト遠察仕候、又非難家ノ人々ハ恐縮、頭ヲ下ケ申スヘク、此ノ輩ハ名分大義ノ何モノタルヲ知ラス、時勢ヲ弁セサル至愚ノ至リニテ、幕府ハ幾千年ノ久シキモ動カサルモノト思ヒキヤ、此様立チ処ニ動キ初メタルニハ驚キ申スヘク、然シ此モ其人ニアラサレハ動シ得ヘキモノニ無御座、実ニ賢明御勇邁ノ御方寸ニ出タルモノナルハ勿論ニ御座候、又速ニ御帰国ニ相成リ候儀、天下ノ形勢御通見ノ卓然タルモノニテ、長州ノ如キ貪利功名ニ恋々タル卑劣心、分毫モアラセラレス、完全天下ノ為メニ尽サル、ノ御誠意、此事ヲ以テ証拠ト致候一儀ニ御座候、申上度事山海ノ如クニ御座候得共、拙毫ニハ尽シ得申、不遠從駕罷下リ御直話申上クヘク御待可被下候、

126 ○国父公ハ関東ニ於テ御尽力ノ次第御復命ノ後、片時モ速ク御帰国ヲ冀望セラレ、三条実愛卿ニ就テ御暇ノ御願アラセラレシカハ、実愛卿ハ其旨奏

聞ニ及ハレ、

叡慮之趣実愛卿ヨリ御書取ヲ以テ仰越サレタリ、御書取

左ノ如シ

〔貼紙〕丁丑ノ兵火ニ罹リタル中、  
ニアリシトソ、惜ムベシ〕

〔貼紙〕御書取記載仕度〕

旧邦秘録五編文久二年之四終

旧邦秘録

文久二年自卷五  
至卷七三三止

市来四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「久光公御加筆」「紙数百一四枚」の記載あり〕

旧邦秘録五編文久二年之五

忠義公二十  
九世

国父久光公

文久二年壬戌

127 ○今春御発駕三月十日ノ前頃ヨリ四月末伏見寺田屋ノ事四月廿三日

夜日アルノ間ハ、咸人疑懼ヲ懷キ世ノ形勢ヲ窺ヒ、從

テ巷説紛紜タリシカ、

勅使ニ御差副、関東へ御下向 御尽力アラセラレ、或ハ

幕府ニ於テ

勅諭遵奉、大政改革、正邪区別ノ処分奉行セントスルニ

至リ、異説モ漸ク熄ミタリシニ、茲ニ至リテハ殊更春

来ノ説ニ反シ、偏ニ 国父公御方寸ノ一ヲ以テ

朝威逐日耀キ、時世至当ノ政体改革ノ基ヲ開カレタルハ、

照国公薨去以来積年ノ御苦慮茲ニ顕レタリト感佩スル

ニ変シタリ、又畿内方幾内近国ハ素ヨリ全国一般仰望、御名

声赫奕タリ、故ニ御國中貴賤拳テ仰慕シ、今迄誹謗セ

シ輩ハ畏縮、声ヲ吞ムニ至レリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」五二ノ二号と同文なり〕

128 ○八月二十八日江戸ノ報知ニ曰ク、神奈川ニ於テ汽船一

艘ヲ買入レラレタリ、船身長サ四十三間余、幅六間余、

四百馬力、機関二個ノ装置ニシテ、英国商人某カ所有

130

○八月 日「日札スヘシ」京都ノ報ニ曰ク、九条前関白殿下ノ諸大夫〔諸大夫カ〕二島田左兵衛権大尉ト云ヘル者アリ、此者殿下御在職中関東ノ奸吏ト同心、種々奸謀之媒介ヲナシ、或ハ彦根藩士長野主膳〔義昌〕「彦根藩京」等ノ黠吏ト密親シ、幕府ノ姦ヲ佐ケタル者ナルヲ以、七月 日「日札スヘシ」ノ晚景、浪人体ノ者三四名同人カ別邸〔妾宅ナリ〕

129

○八月二十九日、軍備充実ノ為メ御領内百二十余郷二硝石製造所建設シ、製硝ノ法ハ天保ノ末、斉興公、尊慮ヲ以テ開カレ、或ハ人戸床下土天然産ヲモ製採シ、数十万斤ノ貯蓄アリト雖モ、今回ハ殊ニ巨額ノ産出ヲ要セラレタリ、是レ内外ノ難逐日迫マレルカ故、糧餉ト並ンテ必用ノ品ナレハナリ、以来年々十万余斤ヲ製出スヘキ目的ヲ以テスヘキ旨令セラレタリ、

セルモノナリシト、代価六万七千兩、本月五日ヨリ江戸在勤国老島津登〔久〕「包」・小松帯刀〔清〕「廉」其他数名ノ吏員横浜ニ出張、近海ヲ乗試ミ、而シテ受取り、不日兵庫ヘ廻航シ、〔久光〕国父公御帰国ノ御乗船ニ備フルノ予定ナリトソ、天祐丸ハ〔汽罐力〕機罐損シタルカ故横浜ニ於テ修復中ナリト云フ、

ト云フニ来リ、在宅否ヤヲ問ヒシニ、其時島田カ下婢入浴中ナルヲ答ヘタリシニ、島田ハ感動スル旨ヤアリケン、浴衣ノ儘逃ゲ出ントセシカトモ、遂ニ斬殺シ首ヲ取り、徐々トシテ立チ去リタリトソ、而シテ其罪状ヲ記シ、四条川原ニ梟首シタリト云フ、罪状之趣ハ、九条殿下ノ侍島田左兵衛権大尉ナル者ハ、元来姦佞ノ者ニテ殿下ノ威權ヲ仮リ幕府ノ姦意ヲ佐ケ、剩ハ賄賂ヲ貪リ身分不相応ノ驕ヲナシ、或ハ彦根ノ奸吏永井主膳〔長野カ〕ナル者ト同心、関白殿下ヲ欺キ、或ハ幕府ノ奸意ヲ受ケ

朝意ヲ妨ケ奉リシ事共、其罪輕カラサルニ依テ天誅ヲ加フ云云ノ趣ナリシトソ、此島田ナル者ハ、国父公御上洛ノ頃ヨリ九条殿下ノ御威權モ衰ヘタルニ依リ、萎縮シテ一時洛外ニ閉居シ、近頃二条辺ニアル別邸ニ潜伏、世ノ形勢ヲ窺ヒ居タリシヲ浪士体ノ者探知シテ斬殺シタリト云フ、又同シ頃宇郷〔重田〕玄蕃モ斬殺セラレ、同シク罪状ヲ記シ四条ノ磧ニ梟殺シタリ、此ノ二名ハ幕吏ノ奸ヲ佐ケ、彦根藩士長野主膳ト謀リ、九条殿下ノ謀主タリシト云フ、長井モ幾干ナラスシテ井伊家二命

セラレ処刑セラレタリ鳥田ノ二名ヲ斬殺シタル浪人体ノ者ハ、其姓名・国邑等素ヨリ分明ナラスト雖モ、當時ノ説ニ浪士ノ所為ナリト、或ハ長土人ノ為ス所ナリト、或ハ薩藩士ノ斬殺スル所トモ喋々タリシト雖モ、其確証ヲ得ルニ由ナシ、案スルニ、必ス三藩士ノ所為ニ外ナカラン歟、

131 ○閏八月五日布達、〔忠義〕 太守公当冬中御参府ノ御予定ナリ

シカ、尚御猶予ノ御願仰立ラレシニ依リ、閣老脇坂中務大輔様御聞置相成候、依之明六日、御一門四家及ヒ大身分其他諸士登城、太守公 国父公へ御祝儀申上へキ旨達セラレタリ、

132 ○閏八月十八日、〔頭注〕「伊集院俊矩カ墓碑建」 太守公谷山へ御遠馬ヲ催サレ、四ツ

時分御本丸御乗出シ、南林寺墓地へ 尊慮ヲ以テ建設セラレタル故、伊集院仁左衛門俊矩カ墓碑御覧アラセラレタリ、伊集院ハ〔宗信〕 慈徳公ノ輔傳ニシテ篤実謹行人ナリ、茲ヲ以テ其德行ヲ録シ、碑石ヲ建設セラレ、子孫へ祭祀料金二十両ヲ賜ヒタリ、銘文ハ府学助教今藤宏〔新左衛門〕撰ハシメ玉ヒ、篆書ハ松岡〔貼紙〕夫〔十太夫〕政人、銘文ノ書ハ磯永吉徳〔孫四郎〕ニ命セラレタリ、御覧ノ後御乗切り、谷山地頭飯屋ニ御休憩、而シテ波平安行カ

宅へ被為入、刀剣ノ鍛鍊御覧、尋テ柏原河辺ニアル硝石製造所御覧、夜入頃御帰城アラセラレタリ、碑文左ノ如シ、

132の1

文久元年冬十二月。公特命。立伊集院俊矩之碑。

而以銘 命臣惟宏。謹按君姓伊集院氏。諱俊矩。称

仁左衛門。本藩廳府人。其先出自〔忠時〕道仏公。考久

榮。称仁右衛門。妣山田氏。君生而資稟絶人。受学

於山口治易。以实行聞。享保三年擢郡奉行。時年四

十有八。尋為御目付。掌糾明奉行事。〔其折力〕共折獄一皆以

誠接之。辞气愿款。故囚徒感動。不敢匿情。獄皆立

弁。七年転長碕御付人。十八年遷大坂御留守居。所

歴官。皆称其職。有能吏之声。是時 慈徳公為 世

子在江戸。年甫十齡。〔鑑覽〕宥邦公欲為置傳。扱於群有

司。遂举君 命職。因 召之江戸。君自以傳任極重。

辞之。不 許。君乃白曰。心欲用臣。自今以往。凡

導 世子。事無大小。忝以委臣。使得自行其意。則

謹受 命可之。時年六拾有七。班同御用人。是歲補

高原地頭。〔吉莢〕 淨国公既老。居仙巖別館。嘗 召君諭

曰。〔宗信〕益之助漸長。汝宜力勸學。其於經書。亦俾能自講。君退而上言曰。講說書生之業爾。非人君之學也。人君之學。以修身治民為要。臣願以是導之。

公大称善。君常尽誠輔導。世子。勤実學。黜虚文。

又每語以 祖宗戰爭艱難之事。世子有過。雖微必匡正之。

世子嘗在大井邸。夜出捕螢。々悉飛去田中。

世子不樂。侍臣大脇某。輒褰裳入田。多捕以獻。下体尽汗泥。

世子喜亟称之。君乃進曰。郎君他日將 主三州。宜広觀遠聽以公賞罰。豈特目前〔之人力〕人而已。

且国中士。苟食祿者。孰不為 主尽力。何独某。其因事納誨。率此類也。

世子雖幼。深敬重之。其言莫不聽焉。是以 世子德器夙大成矣。君幼孤事山田氏。以孝称。家極貧。躬薪汲以養之。

妣〔妣脱力〕有病。侍湯藥。看護不少懈。妣嘗手織布衣之。君曰。兒不患無衣。顧未有四書。意常恨焉。願壳布以購之。

妣感其志。直求四書以与之。君為人。温和而毅。不妄言笑。其為學。力実践。不事博覽詞章。時有儒生

郡山某者。少年輩相語曰。郡山某講書。辞弁如流文

義易曉。然出問則或思戲。至伊集院子之講。雖弁弗

如。而能人人肝脾。婦途猶爾然。君嘗自江戸還。海上暴遇風濤。舟幾覆。舟中人皆惶遽顛僵。君独安座

煮茶。談笑自若。人驚其胆量。君生于寛文十一年八

月廿五日。寛保二年四月十三日。以疾率于江戸邸舍。

享年七十有二。其病革也。世子臨之。尽永訣之礼。

後常念不忘云。葬大円寺。藏遺髮於覺府南林寺南〔廟塔坐力〕塔坐域。娶石原氏。生一男。曰俊盈。早世。養上村

正甫子為嗣。五世孫兼常。今地方檢者。嗚呼君之誠

心直道。蓋出于天姓〔天姓力〕。而資之以學術者歟。其於

德公。真可謂得輔導之道矣。到于今。臣庶称慕

之盛德。而不衰者。則実君之力也。〔忠義〕今公賢明。好

学凶治。百度修拳。而又以是異数表名臣。豈惟伊集

院氏之榮。抑其有裨於風教実大矣。銘曰。

挺挺風節。誠直立身。道陶 世子。一国婦仁。

嗚呼 吾藩。古不乏人。偃戈以降。疇為君論。

今公好賢。寵及先生。〔先臣力〕貞石勤銘。〔勤銘力〕名永不湮。

文久二年歲次壬戌正月十一日

〔貼紙朱書〕  
〔當時ノ実名、惟宏力〕  
府学助教 臣今藤惟宏謹撰

道奉行知金山山奉行事臣松岡政人謹篆額

此ノ碑文ハ本年正月稿成、奉呈セシヲ〔官カ〕官費建設セラレ、  
 本日御覽アラセラレタリ、公ハ未タ御壯齡〔貼紙〕「本年二」ナ  
 ルカ故、文武ノ道夙夜御研究、特ニ 慈徳公ノ御事蹟ヲ  
 尚慕セラレ、御言行御動作共ニ慣ヒ玉フカ故、其補傳タ  
 リシ伊集院カ行蹟追想セラレ、紀念ノ表碑ヲ建設シ玉ワ  
 リシ者ナリ、一般此美拳ヲ拜聞シ落涙感佩セリ、伊集院  
 カ靈魂モ如何バカリカ感戴セシノミナラス、公ノ御美  
 名千載ニ〔朱書〕「朽」チサルヤ多言ヲ要セス、

133 ○閏八月

日〔貼紙〕「日糺スヘシ」長崎報知ノ略ニ曰ク、生

麦村ニ於テ英国人斬殺セラレタル趣、三日ニシテ長崎  
 へ報シ来リ、同国領事官其他商人、或ハ米・仏・和蘭  
 等ノ領事官集会、在港軍艦英・米・仏・和蘭四艘ナリ  
 シカ、英軍艦ハ即日横浜ニ向テ出港、和蘭艦ハ上海ニ  
 向ヒ、仏船ハ英国へ向ケテ出帆シタリ、之レ全ク事変、  
 本国へ報知ノ為ナリト云フ、在港米艦ハ非常ノ警備ヲ  
 ナシ在留外国人ヲ保護セリ、而シテ不日支那海ニ在ル

各国軍艦数艘日本各港ニ渡来スベシトノ説取々ナリ、  
 一 各国領事又ハ「ミニストル」等ノ議モ、一途二出テ斬  
 殺セシ薩州ノ家来ヲ所刑シ、而シテ其撫育金又ハ其事  
 件ニ費ス処ノ費金ヲ償ハシムルノ件々ニシテ、欧州ノ  
 法則ヲ以論シタリ云云、

一 其後日々横浜ヨリノ往来船多ク、或ハ幕府ハ長崎奉行  
 へノ達シ事モ多端ナリト云フ、

一 英人ヨリ幕府へ申立ツル趣ハ、斬殺シタル始末ヲ聞カ  
 ント、或ハ斬殺シタル薩州ノ家来ヲ呼出シ談判ニ及バ  
 ントノ件々ナリシニ、幕府ハ江戸邸国老へ其顛末ヲ尋  
 問セシニ、斬殺セシ家来ノ者ハ其場ヨリ亡命シ、踪跡  
 不相分旨ノ届出ナリシ故、其段英人へ達シタリシニ、  
 其通ナルニ於テ其主人カ指揮ニ出テ斬殺シタル者ト見  
 做シ、主人ト直談ニ可及ナド種々難題申立、剩へ御上  
 洛前頃ヨリノ街説ヲ聞込ミ、薩州ハ浪士ヲ集メ鎖港攘  
 夷ノ

勅命ヲ促カシタリト云フコトヲ実事ト心得居タル由、殊  
 更同盟各国ト共ニ様々疑惑ヲ生シ、現今日本武備充実  
 ナラス、人氣紛紜タルノ虚ニ乗シ、歐羅巴ノ威武ヲ示

134 〔頭注〕「米穀奉獻」  
○閏八月十九日、

シ懲ラサントノ論モアリト云フ、幕役人ハ外国人ヲ見ルコト鬼神ノ如クニ恐怖セシカ故、外国ノ威武ヲ借り圧倒セントノ策モ有リトノ説モ有之候、如此ノ形勢ナルカ故、実ニ我三州ノ一大難ト云云、又聞ク処ニ依レバ、春來御威名轟キ、其上京師ノ御都合格別ニシテ、幕府ニ於テハ甚タ之ヲ忌ミ嫌フノ情アリテ、如何ニモシテ御威力ヲ削ラントシ、諸侯ノ内ニモ過半ハ其説ニ從ヒ候モ少カラズ、故ニ讒譏スル者多キ由、是ヲ機会トシテ英国ノ威力ヲ借ルノ奸策アルヤニ聞ヘタリ、因テ茲ニ於テハ我三州ノ安危ニ関スル一大事ノ時ナレハ、尤モ御良策アランコトヲ望ム云云ノ趣ナリ、

朝廷へ米一万石ヲ献上セラレンコトヲ願ハレシニ、御受容アルベキ旨達セラレタルニ依リ、九月 日〔貼紙〕一日〔日札〕「スヘシ」廿三日ナラン、

禁内ニ納メタリ、其米俵二千五百俵四斗俵

禁中ノ大庭ニ堆積シタルハ、実ニ盛ナルコトナリシトソ、

運輸ノ途次或ハ

禁内ノ大庭ニ疊積セシヲ、參觀ノ人夥シク、当時京伏坂

ノ説ニ、古秀吉公カ再生ストモ、此ノ如キノ盛事ヲ見玉ハ、嘆称セラル、ナラント唱ヘタリシトナン、

135 〔頭注〕「諸侯妻子国邑住居令卷」  
○閏八月 日〔貼紙〕「日札スヘシ」幕府ハ 国父公御献言ノ

旨ヲ採用シ、諸大名參觀ノ規則ヲ改メ、三ヶ年一回一百日間在府ト令シ、或ハ妻子家族モ国邑在住勝手タルベキ旨、或ハ衣服ノ制度ヲ革メ、或ハ音信・贈答等簡易ナルヘキ趣ヲ發布セラレタリ、此等悉ク 国父公御建言ニ則リタルモノナリ、布令左ノ如シ、

〔貼紙〕  
「幕令記スヘシ」

136 ○閏八月廿日京都報知ニ曰ク、 国父公去ル七日八月七日

勅使ト御同日京都御着駕、錦邸へ御滞留ノ趣及ヒ御着掛近衛殿へ御參殿、堂上方御參集、関東ニ於テノ始末大ニ御賞誉アリタリトノ趣ナリ、

137 ○閏八月廿三日布達曰、 国父公御下国之処、御内

勅被為蒙、近衛関白様御一同去ル九日御參

内被為 遊候処、

天拝於関東御尽力之褒

勅ヲ被為蒙、御劍御頂戴被 遊候旨御到来候、依之明廿

四日四ツ時登城、 御両殿様へ御祝儀可申上云云、同

廿四日御一門四家・大身分及ヒ諸士登城、於席々恭賀

ノ式執行セラレタリ、

138 ○閏八月二十七日江戸報知ニ曰ク、生麦ニ於テ英人斬殺

事件ニ付、同国「ミニストル」ヨリ幕府ニ就テ詰責ス

ル旨アリ、幕府大ニ恐怖シ、為ス所ヲ知ラザルニ至レ

リト、或ハ幕府ハ我藩へ其場ノ始末、届出之趣ト事實

探偵ノ説ニ照シテ尋問スル旨アリ云云ノ趣ナリシトソ、

139 ○閏八月二十七日達、大目付諏訪數馬、右者被聞召通趣

アリテ免職、隱居相願ヒ謹慎、身近キ親類タリトモ書

通又ハ面会ヲ停メラル旨ヲ達セラレタリ、○樺山相馬

大目付二拝ス 御小姓組番頭ヨリ岡半田郷十、高橋縫殿御勘定

奉行二拝ス 御小姓組番頭御、島津相馬若年寄二拝ス 大番頭、

比志島靜馬大番頭二拝ス 御勘定奉、田中原五左衛門御使

番二拝ス 高奉行、  
ヨリ

○諏訪カ如此譴責ヲ蒙リタル所以ハ、今春御上洛又ハ

関東御下向、天下ノ御為メ 御尽力アラセラレシ事ニ

就テ俗論ノ一党派起リ、此輩時運ノ変態ヲ知ラス、固

陋因循ノ説ヲ立テ、或小松・大久保・中山等ノ輩ヲ誹

譏喋々、讒謗噴々、毛ヲ吹ヒテ虧失ヲ潑キ黜斥セント

シ、諏訪ナル者大目付ノ職ナルカ故、探偵シテ其罪蹟

ヲ具上セシメント百方謀ル処アリ、或ハ其党派ノ輩浮

説訛言ヲ用ヒ、人心ヲ動揺セシメタル事實発攪シ、此

ノ如ク処分セラレタル者ナリ、又同時ニ吉川源右衛門

御側御用人・中山甚五兵衛 高奉行三、  
御趣法掛 島方掛 奉行

此三名モ免職謹慎、身近キ親族ト云ヘトモ書通又ハ面

会ヲ禁セラレタリ、又、桂小吉郎 後右衛門 久武ハ大島守衛ヲ命

ゼラレ、至急渡海スベキ旨ヲ達セラレタリ 御小姓組、  
番頭職

ナル者ハ有川等ト常ニ交深ク、浮説流言ヲ醸シタルハ

此ノ二名ニアリシト云フ、此輩元來固陋頑愚ニシテ時

運ノ迫レルヲ弁セス、私忿ヲ懷キ少シク論旨ノ異レル

ヨリシテ、当路在職ノ吏員ヲ擯斥セント謀リシハ、愚

モ又甚シト謂フヘシ、

140 ○閏八月二十八日、御近習番松方金次郎正御道中ヨリ昼

夜兼行帰郷セリ、今回生麦村ニ於テ英国人斬殺事件ニ付テ、横浜在留英国「ミニストル」カ幕府へ申立ツル

趣甚タ倭傲ナルカ故、時機ニ依リテハ鹿児島海ニ渡来、談判ヲ開カントスル形況ナルカ故海防厳整、来港ヲ俟ツノ御予備御指揮ノ旨ヲ含ミ、或ハ其事実具上ノ為メ下国セリ、

141 ○閏八月二十八日、京師御発駕、御帰国ノ途ニ就カセラ

レタリ、同日伏見ヨリ川舟ニ召サレ、晚景大坂ノ邸ニ

着セラレ、而シテ三日間御滞留廿九日、二日迄、九月三日

同地大坂ヨリ兵庫へ御通行、当日御昼休ハ大坂商賈平野屋某カ別荘ナリ、平野屋ハ従来館アリノ銀主ナルカ故、願フ旨アリテ御休トナリタル御発駕、兵庫ヨリ汽船ニ召サレ中国海御航通、

九月五日阿久根郷へ御着艦、同日御上陸、向田迄御通行、同所御一泊、同六日苗代川御泊、同七日午ノ刻御

着城アラセラレタリ、○太守公ハ六日苗代川迄御乗切

ニテ御奉迎、同日御帰城、備後殿今珍・国老川上久差式部

ハ阿久根迄奉迎、従駕帰郷ス従来御下国ノ時、御一門家又ハ国老等國境迄奉迎スルハ、御相続メテ御下国ノ時ニ限レル者ナリ、此回ハ公武ノ御為メ御尽力、特ニ天拝厚キ襄勅ヲ蒙ラセラレ、加之御劍、御拜戴等前代稀ナ

ル御事ナルカ故、公子及ヒ国老、モ阿久根郷迄奉迎セシ者ナリ、

142 ○国父公御行列ノ順次左ノ如シ、

142の1 (貼紙)「御行列ノ順次等尚詳ニ札シ記スヘシ」御先備第一、天賜御劍ト合符ヲ打チタル長物一担

中小姓十二名前後二列ニ守護ス、長、○第二、天賜重キ御品物ハ黒塗金鍍ノ金ナ物ヲ打チタリ、

ト合符ヲ打チタル長物一担長物ノ結構、前下同シ、○第三、御馬(貼紙)「尚詳スベシ」、

○第四、対御狭箱、○第五、御陣長持一担、○第

六、対ノ御道具熊毛黒、白交リ、○第七、御鉄鉈三十挺左右二列、

ル天山流式十匁銃ヲ雷管機ニ改製シタル、○第六、重中小姓三(貼紙)者、赤羅紗袋ニ白キ十文字御紋ヲ打ツ、

十人左右二列、○重中小姓トハ今回特撰ノ人員、(百六十名ナリ、之ヲ中分シテ前後二列行ス、

失箱一担一名御調度掛、○第九、御旗竿、○第十、御弓

台一肩、○第十一、御用箆司一担、○第十二、御馬、○

第十三、御鎧箱一担、○第十四、御長刀一振、○第十

五第十五ヨリ番号、御持筒二肩左右、○第十六(貼紙)「中小

姓八人」、御腰物左右、○第十七、御乘輿御輿ノ左右前後、

付ノ御側廻左右、○第十八、御手槍、○第十九、御弓台一

肩、○第二十、鉄鉈三十挺左右二列、黒羅紗袋十、(貼紙)「重中小姓三

十人」、○第二十一、御馬一匹、靴籠等品々、○第二十

二、從駕人員手槍數十本從來御目見以上ノ人ハ皆、手槍一本ヲ從者ニ持ス、○第二十二

三、野戰砲入ル大長持四担二百目筒、西、洋式ナリ、○第二十四、野

戰砲彈藥及要具入ル長持四担、○第二十五、御家老小

松帶刀清、先後ノ供人数五十余名、馬驗・弓台・鉄鉋・  
刀・筒・手槍等、○第二十六、御側役谷川次郎兵衛久武

上下二十余名、○第二十七、御納戸奉行東郷長左衛門

重、○第二十八、御小納戸山本五郎右衛門美・中山中

善敬美左衛門マ・大久保一藏利、以上御備ナリ、次ニ奉迎ノ

備後殿及ヒ川上式部美久等数名ノ行列ナリ、概略此ノ

如キノ順序ナリ、御上京ノ時モ同様ニシテ、

天賜御劍及ヒ重キ御品ノ二ツ今回加ハリタルノミナリ天賜

重キ御品トハ、御劍及、○当日ハ水上ヨリ御城下迄數十丁

ノ途次、奉迎ノ老幼男女群ヲナシ、実ニ立錐ノ隙地モ

アラサリキ從來御參觀御帰國等奉迎拜送共ニ礼服(麻上下ト通唱ス)スルノ慣例ナリ、此回ハ殊更ニ前代未曾有ノ御榮

誉ナルカ故、遠近ノ男女老幼拜迎スル者夥シ、

ク、御通輿ヲ妨クルカ如キノ形況ナリキ、

○当日ハ御一門四家及ヒ大身分并ニ諸士御着城ノ後登城、

太守公 国父公へ恭賀ノ式、御本丸ニ於テ執行セラレ

タリ、諸公子方ニハ二ノ丸ニ於テ御祝宴ヲ開カレタリ

トソ、又從駕ノ人員モ各盛宴ヲ開キ、夜間ニ至リテハ

弦声舞蹈喧シキニ至レリ、

143 ○九月十四日、国父公五社御參拜アラセラレタリ、御

下国後始メテノ御社參ナルカ故、本御行列ナリキ本御行列トハ、

對ノ御槍及ヒ御手槍等、  
ヲ備ラレシラユフ、

144 ○九月十五日、本日ハ古関ケ原ニ於テ 松齡公御苦戰ノ

当日ナレハ、旧慣ノ如ク諸士壯齡ノ曹、鎧冑ヲ着シ伊

集院妙円寺松齡公御靈位ヲ祭ラレタリニ參拜スル者夥シク、昼ヨリ

夜ニ至テ頗ル賑ヒタリ、戎具ヲ着ケタル者無量八百余

名、其中ニ騎馬モ多数アリシトソ、或ハ行軍練習ノ為

メトシテ、走セテ往来セシモアリシトナン、太守公

モ御乗切ニテ御參拜、御歸路横井御飯屋大迫村ノ内横井村ニアリ、御上下ノ

時御休憩所ニ設ケラレタル小邸 二於テ、通行ノ鎧冑者御覽ア

ラセラレタリ、○太守公ニハ當時乱兆顕然タル世態ナ

ルカ故、武道ノ御心懸殊更ニシテ、御躬ヲ御勉勵アラ

セラレ、如此ク着鎧遠行ノ形況ヲモ御見物アラセラレ

タリ、○妙円寺參詣ハ、天保ノ末、弘化ノ初頃〔朱書〕

ニ禁停セラレシ故、心掛アルモノハ忍ンテ夜中ニ參詣

二禁停セラレシ故、心掛アルモノハ忍ンテ夜中ニ參詣

セリ、然ルニ本年ヨリ着鎧參詣ヲ允サレシノミナラス、  
太守公モ御参拝アラセラレタルニハ咸人感喜セシコト  
ナリキ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一四四号と同文なり〕

145 ○九月十五日江戸報知ニ曰ク、幕府モ逐次政態改革ニ着  
手シ、 将軍家上洛モ発表、尊

王ノ道稍立チ、或ハ一橋公<sup>〔慶喜〕</sup> 将軍家後見職、越前々中將

春嶽公ハ政事惣裁職奉命、日々登城アリト、或ハ諸大

名参覲交代ノ制ヲ变革セラレ、 太守公ハ来ル亥ノ正

月中御参覲、同夏中ノ御在府ニテ七月一日御帰国、御

暇ノ制ニ変シ、或ハ服制ヲ变革シ、慰斗目<sup>〔慶斗目丸〕</sup>・長袴ヲ廢

シ、平日登城ニハ羽織袴又ハ襦高袴等ヲ用ヒ苦ラスト

ノ旨、或ハ大小名供列人数モ格別ニ減シ、其他一切無

用ノ経費ヲ省キ質素ニ復シ、武備充実スヘキ嚴令ヲ布

カラレタリ、中ニ就テ 将軍家上洛ハ寛永十一年、

三代家光公上洛之後殆ント二百三十年、十一代ノ間歴

典ナリシヲ今回復旧ノ盛典ナリ、其因テ起ル処悉ナ

国父公ノ御建言ニ依リテ、幕府モ止ム事ヲ得ス布令セ

リ云云、諸大名ニ於テハ大ニ喜ヒ、国邑ヘ引取ラント  
既ニ其手当ニ及ヒタルモアリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一四五号と同文なり〕

〔貼紙〕幕府布令記載仕度〕

146 ○此日 国父公御親筆ヲ以テ当今ノ世態情実ヲ示サレ、  
御国政一大变革セラルヘキ旨布令セラレタリ、左ノ如

シ、

家老中江

我等事、先般

御内命ヲ奉戴シ関東江出府、 公武ノ御為聊微力ヲ尽シ

再ヒ上京、復命ニ及候処、不凶モ先月九日参

内被仰付、議奏衆御取次ヲ以テ不容易奉蒙褒

勅、殊ニ重キ御品迄モ拝領被仰付、誠以武門之冥賀<sup>〔冥加カ〕</sup>不過

之事ニ候、全体我等素志者

皇国内外之大患不堪傍觀、且

願聖院様御遺託之御旨奉紹述度赤心ニ而、事之成否ヲ

不顧、忌諱ヲ侵シ犬馬ノ勞ヲ致シテ、

王臣之分ヲ尽シ候迄ノ趣意ニ候処、格別之奉蒙

殊遇候儀不存寄事二候、且於関東一橋・越前登用相成、

尊

王之道追々相立候勢二候得者、暫ク奉

勅之厚薄、処置之得失

觀覽被為在候二付、大略御治定相付迄之間、我等滯京仕

候様再三承知致候得共、御断申上及帰国候訳者、畢竟

攘夷之儀先々ヨリ之

叡慮二被為在、兎角此末之時勢大事之訳ニテ、国家之本

治定不相成候而者、時機二応シ十分之勤

王毛難相叶候得者、富国強兵之術大急務ト存候、尤、於

〔貼紙〕六月朔日且先月被 仰渡云云ノ御書付記載仕度

〔貼紙朱書〕手許ニハナシ 関東六月朔日且先月被仰渡候趣モ有之、屹ト此涯国政

之大体相立、人心一致候様变革ニ及度候間、各中ニモ

不容易大事之時世ヲ弁シ、上者

朝廷之御趣意ヲ奉シ、下者我等之誠志ヲ通徹シ、忠直ヲ

尽シ其職ヲ勤メ、国家之柱礎ト相成候様心掛、尚熟慮

之上存寄之趣承度事ニ候、且又今度留守中、士分以上

之者共種々雜説〔柱〕有川・吉川・中山等ノ輩カ醸シタル等申触候

段モ相聞得、以之外ノ事ニ候、事之善悪ニ依ラズ国家

之為上書之儀者、

御先代様〔貼紙〕被仰出置候得者、表向致上書候者臣子

当然ノ事ニ而不苦候間、猶又各中勘考有之、國中一統

趣意貫徹致候様有之度事、

九月十五日 久光

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一四六ノ一号と同文なり〕

147 ○右 国父公御親書ニ就テ、 太守公左ノ御親筆ヲ以テ

同時ニ達セラレタリ、

家老中江

御別紙ノ通被 仰出、我等ニ至リ別而感伏涕泣ニ不堪

候、各中ニモ深御趣意奉汲受、粉骨碎身屹ト其詮相立

候様精力ヲ尽シ丹誠ヲ凝シ、〔久光〕三郎様ノ御趣意ヲ奉助、

我等之不肖ヲ補ヒ、国家之良臣ト相成候様有之度存候

事、

九月十五日 茂久

〔貼紙〕御親筆仰出書ハ御名ナシ、此ノ御書ニハ 国父公ト御同時ナルカ故、御実名記サレタル者ナラン歟

前二記シタル如ク、今春御上洛御発駕後俗論交々起リ、

浮説流言噴々トシテ大ニ人心ヲ動揺セシメタルニ依リ、

今回其巨臂〔巨擘カ〕ノ輩数名ヲ黜罰セラレシヨリ、訛言モ漸ク  
罷ミ、一般尊

王ノ氣嚮定リ、有志ノ曹志ヲ述ルニ至レリ、然リト雖モ  
固陋且ツ因循ニシテ大義名分ヲ識別セス、幕府アルヲ  
知テ

朝廷アルヲ知ラサルカ如キノ曹ハ、尚ホ密カニ異論ヲ唱  
ヘ幕府ノ勢望千歳モ動シ得ヘカラス、或ハ幕政ノ専恣  
驕傲モ不臣ノ行為トセス、或ハ時勢ノ変換モ意ニ介セ  
ス、或ハ外夷来往、通信貿易モ既ニ開ケ、向來大患ノ  
兆顕ハレタルハ、開關以来未曾有ノ一大事ナルヲモ顧  
省セス、世態ノ変遷沿革スヘキノ勢ヲ察セス、或ハ固  
陋頑愚ニシテ、私忿ヲ以テ當時要路在職ノ曹ヲ嫉視ノ  
鄙心ヨリシテ吹毛索疵ノ説甚シク、訛説流言ヲ以テ愚  
夫愚婦ヲ煽動シ、特ニ 国父公ノ御深意ヲ知ラス妄リ  
ニ人心ヲ動スニ依リ、 太守公大ニ憂慮セラレ、止ム  
事ヲ得ラレス、其巨魁タル者数名ヲ黜罰セラレタル者  
ナリ、然リ而シテ尚ホ民間ノ情実ヲ一洗シ、治国ノ大  
体ヲ定メ、富強ノ道ヲ拡張セラレンノ尊 旨ヲ以テ、  
忌諱ヲ憚ラス存意上陳スヘキヲ令セラレタリ、是ノ布

令ヨリシテ一般ノ氣嚮モ定リ、流説訛言モ熄ムニ至レ  
リ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一四六ノ二号と同文な  
り〕

148 ○九月十六日、 国父公福昌寺御墓参アラセラレタリ、

御行粧等五社御参拜ノ時ニ異ナルコトナシ、

149 ○九月十七日、 国老小松帶刀・御側役中山中左衛門、京

都及ヒ江戸へ至急發登スヘキ旨、去ル十日拜命シ、本

日汽船ヨリ出發シタリ 政庁筆吏東郷源左衛門・伊集院次左衛門、御用部屋筆吏得能良助、外ニ足輕三名ヲ從ヘタリ、○御用ノ趣ハ 斉彬公御贈官ノ件、或ハ江戸ニハ御前様其他姫君様等御帰国ヲ促シ奉リ、或ハ一橋・越前侯等ヘノ御用モアリ、ト云。

150 ○今回幕府ニ於テ政体変革ヲ令シ、諸侯ノ妻子国邑居住

勝手タルベキ旨ヲ令シタルニ因リ、我カ藩モ 〔朱吉〕

照国公第三女暉姫君、 其他寧姫君 照国公第五女、寧姫ト称ス、本年十二歳、 勝姫 照国公第十女、初メ閑姫君ト称シ、後勝姫君ト改ム、斉興公御養女、本年五十歳、○初メ 松平 〔朱吉〕 左近将監康寿ニ嫁セラレ、故

アリテ離縁、高御下国ヲ促カサレタリ、各藩ニ於テハ既ニ輪邸ニ御棲居

帰国ノ途ニ就キタルモアリタリトソ、○諸侯大小トナク妻子ヲ江戸邸ニ置クノ制度ハ、今ヨリ凡ソ二百三十

年前、寛永ノ初、黄門家久公ノ御夫人及ヒ諸公子ヲ

江戸桜田ニ居カレシヲ以テ初トス、而シテ大小各藩ニ

及シタリ、即チ質トスルカ如キノ制ナリ這ノ源因ハ第五、

「左近將監康寿ハ。石見浜田城主周防守康任ノ嫡子ナ

リ。家督タラズシテ早世アリ。故ニ閑姫君ハ。薨髮

シテ貞鏡院ト称ス。其後故有テ彼家ヲ辞シ。高輪邸

ニ帰住有リ。勝姫君ト改称アリシナリ。」

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一四七号と同文なり〕

151 ○九月二十一日布達ニ曰ク、今回幕政改革ニ就テ 太守

公御参観ノ年割、来亥年正月元日ヨリ六月中御在府ニ

変更セラレタルニ依リ、本年中御出府アラセラルヘキ

旨ヲ布達セラレ、国老喜入撰津〔貼紙〕「各実名札ス」・御側役

山口直記〔貼紙〕・谷川次郎兵衛〔久〕・御小納戸頭取大久保

一藏〔利〕・中山中左衛門等従駕ヲ命セラレタリ、○九

月二十二日、大久保・中山ノ兩名、御小納戸役ヨリ御

小納戸頭取御用取次兼務ニ拜ス、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一五〇号と同文なり〕

152 ○九月二十六日、江戸在勤大目付兼番頭菱刈全之介・留

守居〔汾陽カ〕汾湯次郎右衛門下着セリ、当日免職ヲ達セラレタ

リ、在勤中失闕アリシヲ以テナリ此ノ二名辞職出願スヘキ旨

ニ、生麦村ニ於テ英人斬殺事件幕府、内論アリシ所以、當時ノ説

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一五二号と同文なり〕

153 ○九月二十九日江戸飛報ニ曰ク、〔家茂〕大樹公来亥春文久三年

上洛アヘキ旨布達セラレ、而シテ一橋中納言殿・松平

春嶽殿、閣老ニハ水野和泉守精忠・板倉周防守勝静、諸侯

ニハ松平越中守定敏・松平肥後守容保・酒井雅楽「頭」〔朱書〕・久・

尾張中納言勝慶、其外大小諸侯数十名従駕ヲ命セラレタ

ル趣ナリ、二百年来廢典ノ事故、其予備甚タ混雜ナリ

トソ、

154 ○九月晦日、三条実愛卿ハ当時ノ形況ヲ記シ、 国父公

速ニ御上洛、

〔貼紙〕  
〔三条公御書翰記載仕度〕  
叡慮ヲ安ンセラルヘキ旨懇請セラレタリ、其文左ノ如シ、

此ノ御返翰左ノ如シ、

〔貼紙〕  
〔此ノ御返翰記載仕度〕

155  
○十月 日〔貼紙〕  
藤井良節〔貼紙〕  
旧名井上出雲守ト  
称ス 福ヶ迫諏訪

社々司  
ナリ」京都ヨリ昼夜兼行着覽、近衛殿下ノ御密翰ヲ護

シタリ、其他青蓮〔朝彦親王〕  
尊融法  
親王及ヒ中山忠能卿等ノ御

書翰モ携帯セリ、近衛殿下ノ御密翰左ノ如シ、

〔貼紙〕  
〔近衛公御書翰記載仕度〕

156  
○青蓮〔朱書〕「院」宮ノ御書翰左ノ如シ、

〔貼紙〕  
〔御書翰記載仕度〕

右御答書左ノ如シ、

156の1  
一朝議常變之二道何レニ被定可然哉之事、

右者、方今之形勢ニ就而者乍恐

朝議之大本被為居、幕威者勿論、下庶人之激論ニ御動

揺不被為在候様奉存候、當時於関東モ大變革之処置

有之、武備充実外夷掃攘之基本相立候儀ト遠察仕候  
二付、関東江被仰下候御事共篤ト御評議之上、遵奉  
相成易キ事件ヲ被仰出、難被行事共者先御猶予之方  
可然哉ト愚考仕候、若御無理之儀被仰下、万一於関  
東御断被申上候様御座候而者、乍恐

朝威ニモ被為拘、且者下有志之輩伝承仕候ハ、関東  
違勅之説又々沸騰仕、紛々之世態ニ可相成哉ト別而  
懸念ニ奉存候事、

一 其御地之形勢、良節ヨリ委細承申候処、第一折々茲  
人殺害之儀御座候由、何共不穩之世態ト奉存候、強  
暴之所行ニ付而者根本有之哉ニ承知致シ候得者、何  
卒右等之御取締被為在度御事ト奉存候、〔乍恐脱力〕茲人ニ於而  
者惡ム可キノ事二者御座候得共、是ハ

朝廷又者幕府ヨリ邪正篤ト御探索之上、嚴重御処置被  
為在度、於

御膝下右様之儀御座候而者、第一

御威徳ニモ被為拘、別而不輕御事ト奉存候、且京師守

護職被〔玉里島津家史料〕より補相定候上は諸藩之者共追々帰国被△仰渡度

奉存候、諸藩之雜人

輦下ニ群集仕候而者、

朝廷御混雜之根元可罷成哉ト懸念ニ奉存候事、

一 此節別段

勅使被差下攘夷之儀被仰出候由、此儀者先般愚意申上

置候間、贅言不仕候事、

右之儀者不入事ト者奉存候得共、御尋問ニ奉從所存申

上候間、宜御取捨被成下度奉願候、以上、

十月 日〔貼紙〕「日糺スヘシ」島津三郎

〔本文書は「玉里島津家史料」三四七号と同文なり〕

○中山忠能卿御書翰左ノ如シ、

〔貼紙〕「中山忠能卿御書翰記載仕度」

右御答翰左ノ如シ、

〔貼紙〕「右御答書記載仕度」

右者、三郎様御発駕前ヨリ尊 王攘夷之説ヲ以テ

種々致造言、諸藩浪人等ヘモ其旨申聞、京撰辺 御通

行之節兵ヲ起シ、九条家并御所司代ヘ可致乱妨相企候

段、室津御出船之節被 聞召上候ニ付、早速理解人御

差遣相成、且

御着坂之上モ御丁寧御論方相成候得共、迎モ相用ヒ候

勢ニ無之、無御抛其方共実々勤王之志有之候者、内分

朝廷へ御都合可被成御伺候間、其内相待候様及度々厚

御諭相成、近衛家へ 御参殿、委曲被仰上候処、早

速議奏衆御招キ御談合之趣被為 在、其趣天聽ニ被遊

御達候処、以之外之事情ニ付、是非御鎮靜可被遊ト之

御旨御承知ニ而、其趣再三御使ヲ以理解被仰付候処、

目前ニ而者承服之形ニ候得共、与類之者共へ内実者、

急速事ヲ破可申ト之御催促之筋ニ、暴威ヲ以テ実事等

敷申聞候ニ付、無扨一同意致シ推々上京之企ニ及候始

末、御国家御難題者不申及、 皇国之御為別而不輕次

第、殊ニ 御発駕前訊而厚ク被仰出候趣モ有之候処、

不顧其儀モ右次第別而不届至極ニ付、存命候得者鋸挽

ニ而被行 直磔筈候得共、於伏見被打果候ニ付、士被

有馬〔正義〕新七

田中〔盛明〕謙助

柴山〔道隆〕愛次郎

橋口壯助

召放、於境瀬戸直磔之格ヲ以死体埋捨申付候、

橋口〔兼藏〕伝藏

森山新〔永造〕五右衛門

弟子丸〔方作〕龍助

西田直〔正甚〕五郎

右者前条同断ニ而、有馬新七外三人張本之者共へ致同意上意打ヲ妨、討手人数へ致手向候処被相果候儀無相違、右次第別而不届ニ付、士被召放斬罪相当ニ而、於境瀬戸死体取捨之格ヲ以死体埋捨申付候、

三島〔弥兵衛カ通庸〕

西郷〔從道〕信吾

伊集院直〔兼寛〕右衛門

永山〔万歳カ盛弘〕万齐

坂元彦右衛門

林正之進

岸良三之助

町田六郎左衛門

河野四郎左衛門

岩元勇助

篠原冬一郎〔国警〕

右者前条同断不筋儀、暴威ヲ以〔意脱カ〕実等敷申聞候処ヨリ致同意、上京之企ニ相及候ニ付、京都ヨリ被差下候上慎申付置候得共、皆共当時ニ相成別而後悔之趣被聞召通、内情実ニ不便之至被 思召上、殊ニ今般別段之 叡慮ヲ以 御参内、且不容易御拜領物迄モ被遊、重畳結構之御事ニ付、出格之御取訊ヲ以、軽重厚薄之無差別御赦免被仰付候、此旨雖有奉承知、以来屹ト改心先非、可抽忠勤候、

右之通被仰付候条、一統奉承知候様表方へ致通達、

奥掛・御勝手方へモ可相達候、

十月 大藏〔島津久敏〕

〔本文書は「名越時敏史料」二二五八頁「有馬新七」と同文なり〕

158 ○当時京都ノ形勢異議紛擾、実ニ内乱ノ兆目下ニ迫レル

カ故、大二

宸襟ヲ悩マサレ、 国父公速ニ御上洛、 御鎮靜

御頼ミ 思召トノ御促ナリト雖モ、 太守公江戸御参

府モ近キニアリ、然ルニ 国父公ニモ御上洛、御両公  
同時ニ御不在トナリテハ、御国政御变革モ中道ニシテ  
連続セサルカ故、 国父公深ク御案痛、軽重緩急ノ間  
ニ於テ御酌量アランコトヲ、左ノ御書翰ヲ以テ近衛殿  
下ニ就テ懇請セラレタリ、

今般

御内命之儀被為在、家臣藤井良節下向仕、被仰含候御  
旨逐一承知仕、且御懇之御細書被成下、重畳難有拜  
承仕候、殊ニ

御沙汰ヲ以不肖之小臣江重大之事件御尋問被為在候故、  
上京仕候様被仰出、其上

勅書ヲ以御承知之御事被為在候由ニ而御写御下ケ被下、  
謹而拜見仕候、誠以冥加至極、恐入難有仕合、難尽  
毫端次第ニ御座候、就而迅速ニ発足可仕儀当然ニ御  
座候得共、先般モ申上置候通、方今之時勢国務多端  
之上、夷狄掃攘之方略嚴密申付、富国強兵之術計尽  
心力申度含ニ有之、且当冬修理大夫参府仕候様別而  
幕命モ致承知候得者、兩人一同発足仕候而者右等之

儀共十分行届不申、万々一夷賊領内へ渡来致シ候儀  
モ有之候節、聊ニ而モ蹉跌仕候而者、当国之耻辱者  
勿論、

御国体ニモ相拘リ恐入候儀ニ而、実以深心痛仕罷在  
申候、依之何共申上兼候得共、小臣是非上京不仕候  
而不相濟儀ニ御座候ハ、修理太夫参府御猶予被仰  
付候様、関東江被仰下候儀者相叶申間敷哉、於其儀  
者別而難有仕合奉存候、又一橋モ暫時延引之様ニモ  
致承知候得者、以後発足之頃合相分り次第被仰下候  
ハ、其節速ニ上京仕候而者何様可有御座哉、又者  
大樹公御上洛三月中ニ被召延、一橋上洛来正月中ト  
被仰出候得者、於小臣者猶更難有奉存候、右之趣誠  
ニ自由千万之願意ニ御座候得共、無抛情実不惡御汲  
取被成下、願之通

勅許被為在候様御取成被仰上被下度奉歎願候、誠惶謹  
白、

十月

日

島津三郎

〔本文書は「玉里島津家史料一」三四八号の一部と同文な  
り〕

藤井ハ此書翰ヲ護シテ十月十六日發覺、昼夜兼行帰京セリ、

159

○国父公御退京ノ後ハ、長土ノ二藩其他浮浪ノ徒逐日来集シ暴威ヲ振ヒ、宮・堂上方ヲ煽動シ、將軍家上洛ヲ急促シ、或ハ鎖攘ノ

勅速ニ下サレンコトヲ逼リ、加之横暴ノ奸人暗殺等所為少カ

ラス、民間ノ疾苦ヲ醸シ、人心恟々トシテ枕ヲ安ンスルコト能ハス、剩ヘ長土二藩ハ浮浪ヲ教唆シ、宮・堂上方ヲ動シ

朝議ヲ左右スルコト寡ラサルニ因リ、公卿方ニハ暴威ニ恐懼シ、或ハ甘弁ニ欺カレ、長土ノ藩論ニ左袒ノ人多ク、從テ本藩ノ所論ヲ廢斥シ、或ハ薩論ハ因循ナリ、佐幕ナリ、開港論ナリト喋々嘖々タルカ故、青蓮院宮ヲ初メ近衛殿下・正親町三条殿・中山殿等ニハ大ニ憂歎セラレ、

主上ニモ深ク

御憂悶、畏コクモ

御寢食モ安ンセラレス、茲ヲ以テ 国父公速ニ御上洛ヲ

促カサレ、鎮撫ノ策ヲ問ハセ玉ヒ、カヲ尽サレンコト

ヲ望マセラレシ者ナリ 藤井良節友人某へ密話ニ曰ク、国父公

御退京数日ナラスシテ長土二藩暴威ヲ振ヒ、宮・堂上方ヲ恐嚇シ、

朝議ヲ動カシ、浮浪ノ徒ハ時ヲ得、機ニ会シタリト長土人ニ親密シ、

討幕攘夷ヲ主張シ、將軍上洛ヲ急促シ、或ハ

朝廷ト本藩ヲ離間シ、私意ヲ恣ニセント種々姦計密謀ナサ、

ルコトナク、或ハ訛言流説、多クハ長土人ニ出タリト、茲ヲ以テ

元來婦女等シキ堂上方目前ノ勢ニ恐懼シ、或ハ利ヲ啗サシメ、

私論ニ左袒セシメ、特ニ奸謀ノ媒介者ナリ、実ニ謂フヘカラサル形

勢ニ陥リ内乱頽然タリ、速ニ御上洛、鎮定維持ノ御竭力ナクハ、

遂ニ救フヘカラサルニ立到シ、或ハ青蓮院宮ヲ初メ近衛殿御父子・

正親町三条殿・中山殿等僅五六名ノ外真ニ憂國ノ人ナク、主上ニ

ハ恐多クモ 御寢食モ安セラレス、御憂悶アラセラレシト、因テ

国父公御退京、日モ過キササルニ、重テ御上洛ヲ促サル、ハ 御心外

ニ 思召スト雖モ、真ニ止ムコトヲ得サセラレサルニ出タル者ナリ

云云、又曰ク、浮浪ノ徒多クハ功名貪利ニ外ナク、素ヨリ烏合ノ輩

ニシテ指シテ惡ムニ足ラス、土州人モ惡ムニ足ラス、元來ノ国風淡

白ニシテ粗暴トモ謂フヘシ、長州人ニ於テハ智アリ、誠アリ、弁口

逞シク、尤モ奸黠詐謀ヲ以テ浮浪輩ヲ教唆シ、暴業ヲ勵カシメ、傍

觀スルカ如キノ所為アリ、浮説訛言モ悉ク渠等カ作為スル所ナリ、

旧邦秘録五編文久二年之五終

〔頭注〕「攘夷別勅使東下」  
 ○勅使 三条中納言美美卿・姉小路少将公朝臣及ヒ差副ニハ松平土佐守豊範ナリ、○土佐守殿ハ数百ノ藩士ヲ卒シ、両卿ニ副下セラレタリ、  
 〔頭注〕「醜夷拒絶ノ四字ハ、攘夷ノ二字ニ改ムベシ」〔率カ〕  
 リ、関東へ下向、醜夷拒絶ノ

勅詔ヲ下サレタリ、  
 勅書左ノ如シ、

攘夷之念先年来至今日一不レ絶日夜患レ之、於二柳営一各々变革、施二新政一欲レ慰一 朕意一怡悦不レ斜、然拳二天下二於レ無二攘夷一定一人心難レ至二一致二乎、且恐人心不二一致一其乱於邦内早決二攘夷一布二告于大小名一、如二策略一武臣之職掌速尽二衆議一、定二良策一可レ拒二絶醜夷一、是 朕意也、

右、十月十二日ヲ以テ 將軍家へ発付セラレタリ、抑

〔頭注〕「コ、ノ四字、上ノ如シ」  
 毛醜夷拒絶ハ積年ノ 此 勅書、本藩へハ十月十五日、於京都留守居本田弥右衛門御呼ヒ出シ、関白殿ヨリ

〔貼紙〕「御書入ノ通、書改ムヘシ」  
 達セラレ、同月二十六日鹿兒島ニ到達ス、

叡慮ニシテ、今ヤ其機ニ臨ミ、其時ニ当レリトテ發布セラレシ者ナルヘシト雖モ、最モ興廢存亡ニ関スル一大重事ナルカ故、大小三百有余ノ諸侯ニ緩急得失ヲ諮問

セラレ、各意見ヲ集メ用捨斟酌セラレ、而シテ布令アリテ何ノ後レタルコトコレアランヤ、然ルニ僅々一二ノ藩論或ハ浮浪ノ徒ガ無謀過激ノ論ヲ信採セラレ、倉皇布令セラレタルハ豈ニ危カラスヤ、速ク鎮攘ノ令ヲ布キ人心ノ方向ヲ一定セラレントハ、当時ノ形勢ヲ以テ見ルトキハ全ク口実ニシテ、一ツノ権謀トモ謂フヘキナリ、茲ヲ以テ長土水ノ二三藩、或ハ浮浪輩ハ冀望ヲ達シ得タリト頗ル怡悦シ、倍々暴威ニ募リ、大二世ノ妨碍ヲ醸シタリ、故ニ心アル者ハ曰ク、内政整ハス勝算立タス、二百有余年兵馬ノ声ナク士気震ハス、糧餉足ラス人心一致セス、紛紜擾々タルノ際、設令

勅命下レリト雖モ、行ハルヘキニ非ラス、論汗ノ如シ、実ニ奈何ントモスル事能ハサルノ域ニ立到レリト痛嘆憂苦、声ヲ吞ム者十中ノ九以上ニ居レリ、方今人心紛乱、物情喧囂、諸侯ハ稍割拠シ世ノ形勢ヲ窺ヒ居ルノ際、加之財用乏シク器械備ハラズ、人材顕ハレザルノ時ナルニ於テヤ、畢竟彼我ノ形勢疎キニ依テ冀望シ熄マザル者ナルヤ、将タ余意アリテ促シ奉リ、己レ天下ノ権ヲ掌握セントノ私心顕然タリ、又一説ニ、鎮攘

ノ説ヲ主張スルハ長土水ノ三藩ト浮浪士ニシテ、他ハ大小三百余侯中、一トシテ尚早キヲ主張シ、内政整治ノ後ニスルヲ完全ノ策トシ、敢テ奮興ノ勢ヲ生シタルナシ、然ルニ鎖攘論者カ粗暴ヲ極メタルハ、是ノ

勅諭ノ発布アリシヨリ一層勢力熾ンニシテ、稍

天意ヲ矯ムルニ近キ挙動ニ垂々タリ、如此ナルモ長藩ヲ以テ最トス、其他浮浪輩カ公卿方ヲ逼責シ種々口実ヲ設ケ、速カニ鎖攘ノ

勅令発布セラレサルニ於テハ、国是定マラス人心ノ帰向一定セス、且ツ有志者ノ望ヲ失ハン、此時ニ方リテ有志者ノ心ヲ失ハル、時ハ、天下動乱土崩瓦解ニ至ラン、然ル時ハ幕府ハ倍々奸謀黠策ヲ逞フシ外夷ト通謀、遂ニ国ヲ誤ルノ大事ニ陥ラント様々ノ激説、或ハ詐謀ヲ以テ脅迫セシカ故、元來動搖シ易キ公卿方、其説ヲ無上ノ国策ト信シ、滿朝主張スルニ至レリトソ公卿方ノ中ニ、三条実美・姉小路公知ヲ巨魁トシ、長土人或ハ、浮浪輩ト親密ニ謀ル旨アリト云フ、

○編者曰、彼ヲ知り己ヲ弁シ、或ハ出テ制スルノ勢ヲ保ツノ時ニ至ラサレハ、守禦ノ力ヲ得タリト謂フヘカラス、又算多キハ勝チ、算少キハ勝タス、然ルヲ

矧ンヤ算ナキヲヤ、是レ兵家ノ要トスル処ナルハ多弁ヲ俟タズ、然ルニ人心紛紜方向定マラス、顛輾反復錯雜極リタルノ時ニ方リテ帰嚮ヲ定メントスルハ、策ノ尤モ拙キ者ト謂フヘシ、剩ヘ民間ノ流説ニ、這ノ

勅諭ハ、長土藩士カ浮浪輩ト謀リ私意ヲ逞フセンカ為メ公卿方ヲ脅迫シ、促シタルニ出タル者ナリト喋々シ、敢テ

勅諭ヲ重ンセサルノ形勢ニ陥リタリ、恐シコクモ主上ハ深宮ノ裏ニマシクテ、民間ノ情態言論ハ御膝辺ノ人言上ノ外

鳳聞ニ達スベキ道ナキカ故、元來井蛙二等シキ公卿方奸藩黠士ニ脅迫セラレ、其論旨ヲ

叡聞ニ達シ、人心ノ嚮フ処他ナシト信採セラレタルニ外ナカランカ、畢竟其素源ハ長人ノ詐術ニ出タリト謂フモ、強チニ誣説トナシ難シ、我カ 国父公ハ今春來無謀ノ攘夷ハ不可ナルノ趣数回上陳セラレ、當時一ニ藩論又ハ浮浪輩ノ説ト氷炭相反シタルカ故、當時ノ説ニ、薩論ハ因循ナリ、佐幕説ナリ、開港論

ナリト誹譏喋々タルニ立到レリ、茲ヲ以テ百事黙視

セラレ、中ニ就テ鎖攘ノ説ハ口ヲ喋マレ時機ヲ窺ハ

レタリ、嗚呼、時勢止ムヲ得サルト謂フヘキナリ、

○又幕府ヨリ各藩ヘ示達シタル攘夷布令左ノ如シ、

攘夷之事、累年

叡慮不被為絶候処、方今人心同ク冀望候、攘夷ニ決定無

之而者人心一致ニ難到、且此儘ニ而者 邦内混淆之程

深以被惱

叡慮候間、於幕府弥攘夷ニ決定候而、速ニ諸大名江致布

告、且策略之次第、拒絶之期限等衆議相立奏

聞可有之、今度以

勅使被仰遣候旨相心得、

叡慮徹底之様周旋カ周施、猶又報国尽忠可相励内々

御沙汰候事、

十月カ「貼紙」  
十一月「日札スヘシ」

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一六六号「攘夷之儀

」・「玉里島津家史料」三五五ノ二号と同文なり〕

此ノ

勅諭書、各藩ヘハ幕府ヨリ布達セラレタリ、此時ニ方リ

テ鎖攘ヲ主張スル輩ハ握腕踊躍シ、少シク心アル者ハ

其時機ニ到ラサルヲ憂フルモノ多ク、從テ人心倍々紛

紜タリ、○当時各藩ニ於テ種々ノ論派アリ、曰ク攘夷

論討幕説モ共、曰ク開港論、曰ク佐幕論一名因循論、或ハ、

攘夷論ハ長土水ノ三藩ニ多ク、或ハ浮浪士ハ真ニ鎖攘

ヲ良シトセサルモアリト雖モ、私意ヲ達センノ點意ヲ

以テ唱フルモアリ、或ハ糊口ニ困ンテ長土二藩ニ寄食

センカ為メ唱フルモアリ、交々ニシテ一ナラス、本藩

ニ於テモ鎖攘ヲ主張スル者老幼寡カラスト雖モ、多ク

ハ壯年血氣ノ者ニ多シ、佐幕論ヲ唱フル者ハ素ヨリ因

循姑息ノ論旨ニシテ、談ヲ借スヘカラサル輩ナリ、開

港論者ハ洋風ヲ好ミ、我カ国体ヲ顧ミス百事洋制ヲ主

張ス、此輩ハ当時洋癖家ト蔑唱セラレ、畏縮シテ声ヲ

出シ得サルノ形況ナリ、

○今回土州侯土佐守 豊範

勅使ニ差副関東下向ヲ命セラレタルハ、長土二藩士或ハ

浮浪士カ謀ル処ニ出テ、今春 国父公大原卿ニ御差副

御下向ノ例ヲ羨ミテ慾憑シタルナリ、三条・姉小路ノ二卿ニハ長藩士及ヒ浪士数十名護衛ノ名ヲ以テ付從シ、其実ハ

朝命ノ名ヲ仮リ、費途ノ如キハ長土二藩ノ負担スル処ナリト云フ、

○国父公御退京ノ後ハ、諸国ノ浪人或ハ諸藩士統々上京、洛中ニ蝟集ストモ謂フベキ形況ナリ、其儕公卿方ニ出入シ種々激烈ノ論ヲ立テ、稍脅迫ニ出タル挙動、或ハ略マシムルニ利ヲ以テシ、或ハ讒誣交々ニシテ維持シ難キノ形勢ニ陥リ、中ニモ長藩ハ浪士ヲ懷ケ、種々ノ奸策ヲ施シ暴威ヲ振ヒ、或ハ糊口ニ困ム浪人等ハ長藩ヲ推揚シ私意ヲ遂ケントスル等、実ニ名状スヘカラザルノ域ニ立到レリ、概言スレハ浪士又ハ黠藩ノ為メ蹠セラレタリトモ謂フベキナリ、幕府ハ狐疑ノ念甚シク、国父公ノ御諭旨公武御合体、而シテ大政変革、国威拡張セラレンノ御誠意ヲ信用セス、猜疑ノ間ニ彷徨シ、悠々不斷ニシテ忠肝義胆ノ者ノ胸ヲ焦サシメタリ、如斯異言喧騰、遂ニ無謀ニ攘夷ノ

勅命ヲ促シ奉レリ、而

勅使ハ未タ若齡血氣ノ人ニシテ、全ク長土人ニ惑ハサレ、東下ノ命ヲ奉セラル、ニ至レリト云フ、如此鎮攘ノ勅令ヲ下サレタルニ就テ、沿海ノ藩ハ素ヨリ、無海ノ諸藩モ各要衝応援ノ令ヲ布カレ、或ハ御親兵ト名付ケ、

十萬石以上ノ藩々ハ強幹忠勇ノ士ヲ撰拔シ、守護ニ供フベキ旨ヲモ令セラレタリ、幕府ニ於テハ各藩ノ情実モアルノミナラス、京師守護ノ職任ハ、將軍ノ責任ナリ、殊ニ近衛ノ大將兼任ナルカ故、無論幕府ニ於テ担任スベク、諸藩士ヲ募ルノ場合ニアラサル旨反復上陳セリト雖モ、而

勅使ハ綸言汗ノ如シト敢テ採顧セス、故ニ止ム事ヲ得ス、遂ニ文久三年三月<sup>十八日</sup>ヲ以テ幕令ヲ布クニ至レリ、幕府ハ此時迄別ニ京師守護ノ兵ヲ置カサリシニ、諸藩士ヲ以テ親衛タラシムル時ハ、職掌ニ於テ失当ナルノミナラス、形勢上ニ於テ遂ニ大権薄ラクニ立到リ、或ハ

輕瀛ヲ擧ラレ、君臣分明カナラサルヲ匡サレタル者ナリ、

勅命ノ下レル素因ハ、諸藩又ハ浮浪士カ黠謀ニ出タリト  
ノ情実ヲ以テ奉行ヲ否ミタリト雖モ、採容セラレサリ  
シ故、已ム事ヲ得ス遂ニ發令シタリトソ、而シテ兩卿  
ヲ初トシテ公卿方ハ此兵力ヲ仮リ威權ヲ振ヒ、

朝議ヲ左右スルニ至レリ、之ヨリシテ公卿方ノ中ニモ党  
派分裂互ニ軋轢諍抗シ、遂ニハ私憤ヲ懷キ国事ヲ過リ  
内乱ヲ惹起シタリ、此時ニ方テ真ニ愛国ノ人ハ退テ野  
ニ隱ル、ノ形勢ニ立到レリ、 国父公ニハ此形況ヲ聞  
召シ、殊更ラニ憂慮セラレ、如何ニモシテ鎮靜ノ道ヲ  
立ラレント夙夜御案痛アラセラレシト雖モ、時勢奈何  
ントモスルヲ得ラレス、姑ク形勢ヲ傍觀セラレ、時機  
ヲ俟タセラレタリ、

○幕府ニ於テハ 国父公御献言ノ如ク、諸大名ノ妻子国  
邑ヘ引取り在任勝手タルベキノ旨、十二月 日〔船經〕「日紀  
スヘシ」ヲ以テ布達セリ、○此布令ヲ發セントスルニ  
当テ、幕吏中ニ於テ可否ノ論鼎沸、閣老ノ意見モ屑ト  
セス、甚ダ困難ヲ極メタリシトナン、其論妻子国邑ニ  
引キ取ルニ於テハ、現今大小藩共ニ種々ノ故障ヲ以テ、  
參府猶予ノ申立少カラザルノ時ニ方テ、一層縦肆ナル

ニ至リ、遂ニ割拠ノ大害ヲ醸生シ、制抑ニ困ムハ必定  
ナリ、今ヤ二百年來兵馬ノ声絶ヘ極盛至治ナリシ、其  
本源ハ、武威ノ然ラシムルト妻子ヲシテ質トシタルノ  
二ツニ外ナシ、今是ノ制ヲ解クトキハ治乱ノ分ル、処、  
徳川家ノ存亡モ此一事ニ止マレリ、茲ヲ以テ假令ヒ

勅命ナリト雖モ、徳川家存亡ノ係ル処、特ニ大權掌握ノ  
任至重ナルヲ以テ可否スルモ、敢テ不可ナルコトナシ、  
又

勅命ナリト今日尊重スルモ、其出所ハ薩州ノ献言ニ基ス、  
故ニ左右シ可否スルモ將軍職ノ威權ニアリト其論沸ク  
カ如シ、又一派ノ論ニ、現今ノ形勢ヲ以テ其出所ヲ論  
シ左右セントスルハ、甚タ拙迂〔迂拙カ〕ニシテ、且ツ禍ヲ惹キ  
起スヤ疑ナシ、殊ニ外国ノ処分目下ニ困ムノ時ニ臨ン  
テ、内国ノ騷擾ヲ生スルハ良策ニ非ラズ、因テ一時  
勅命ニ循シ、而シテ後チ變更スルヲ以テ完全ナリト主張  
スル者アリ、此ノ二論一時沸々トシテ低止ナキノ勢ナ  
リシカ、一二ノ温順論者カ〔仲裁カ〕中裁シテ遂ニ循奉シ、後日  
變更ノ論ニ帰シ、而シテ布令スルニ至レリト云フ

告書中記ス、  
処ニ拠ル

寺師宗  
道カ報

○此ノ布令ヲ發シタルニハ、大小名ニ於テ大ニ喜ハサル  
ナク、我先キニト帰國ノ準備ヲナセリ、是全ク 国父  
公去ル七月 日「日札スヘシ」ヲ以テ幕府へ御献言

ノ第十六条ニ記サレタリ、実ニ富国強兵ノ礎基ニシテ

當時ノ形勢ニ適切ナルハ多言ヲ要セス、大小諸侯ノ妻  
子我カ邦土ヲ去リ、江戸ニ住棲スルノ由テ起リシハ、

今ヲ距ル凡ソ二百三十余年、寛永元年甲子元和十年二月  
晦日、寛永元

年ト改ノ冬、中納言家久公ノ御婦人義久公・嗣子忠元  
御女

公後ニ光久ト  
改メラル・第三子又十郎久直方後式部太輔、北郷出

妻 島津備前忠清女、光久公ノ生母ナリ、明雲守ノ養子ナリ及ヒ

年江戸ニ於テ卒ス、心広慶安夫婦ト諡ス、ヲ率ヒテ江戸ニ至

レリ十二月「日札スヘシ」、桜田ノ邸ニ住ス、是ヨリ衆

諸侯ニ令シタリ、而シテ今ニ至リテ妻子ヲシテ江戸ニ

居ラシメ質トシタル者ナリ、○又家伝ニ云伊勢家々伝、  
ヲ云フ、

徳川家一統ノ後、家久公窃ニ思ラク、夫人・女子ヲ

シテ悉ク東武ニ在ラシメ、世々異心ナキヲ明サント、

貞昌ハ老中土井大炊頭利勝ニ善シ是レヲ告ク、利勝其

上策ナルヲ称シ 台廟秀忠  
公ニ告ク、台廟大ニ悦テ曰

ク、是天下太平ノ基ナリ、於是 家久公夫人及ヒ衆子  
ヲ率ヒテ東武ニ朝ス事ハ家久公、  
ノ伝ニアリ、貞昌伊勢  
勢亦妻子ヲ東武

ニ置ク、衆諸侯亦 台命ヲ奉シ子女ヲ東武ニ置ク、今  
ニ至リ然リ、將軍之ヲ称シテ禄ヲ賜フト云云、

○編者曰、貞昌ハ材学優長名声高ク、曾テ 家久公ニ

国老タリ、大ニ国事ニ竭シ守成ノ業ニ功アリ、此時  
ニ方テ漸ク治政ノ緒ニ就キタルノ際、本藩ハ関ヶ原

ノ役ヨリシテ、徳川家ノ為メ表ニ見ル処ト異ニシテ、  
尚ホ包蔵スル処アランノ猜疑心ノ深キヲ察シ玉ヒ、

若シ少シク罅隙アルトキハ（機力）俵チ損害ヲ被ラン、將タ  
数百年ノ間士民困弊財用資セス、勢ノ及フヘカラサ

ルハ無論ナルカ故、當時ノ形勢ヲ慮ヒ玉ヒ、貞昌ニ  
密示セラレタル者ナリト云フ、斯クノ如ク二百有余

年前本藩ノ發論ヲ以テ久シク泰平ノ化ニ浴シ、而シ  
テ今又 国父公ノ御建議ニ出テ国邑ニ引キ取ラシム

ルニ至レルハ、時勢ノ沿革人情ノ異ナルニ準シタル  
ト、機運ノ然ラシムル者ナラント謂フト雖モ、始終

結局スト云フヘキナリ、○此ノ如ク数百年ノ間大小  
侯ノ妻子家族江戸ニ住シ、国邑ハ地図ト伝聞ニ止リ、

些々タル邸中ニ在リテ終身封土ヲ踏ムコトヲ得ス、  
当主ハ隔年国邑ニ往来シ、遠隔ノ地ハ數十ノ日子ヲ

耗シ、數多ノ人員ヲ具シ寒暑ヲ犯シテ来往シ、加之  
虚飾ノ行粧、其經費モ尠カラス、江戸ニハ大小ノ邸  
宅ヲ結構シ、美麗ヲ尽シ、從テ衣服・飲食・器具ニ  
至マテ金銀ヲ<sup>〔銀カ〕</sup>鋳メ、或ハ交際上ニモ驕侈ヲ極メ、尊  
大鄭重ニシテ珍禽・奇獸ヲ弄ヒ、百事分外ノ費耗拳  
ケテ謂ヒ難シ、国邑ニハ心分ノ城樓ヲ構造シ、幾多  
ノ士卒ヲ給養シ、或ハ別業ヲ營ミ、多クハ遊宴ニ消  
光シ、佞臣奸吏ニ愚弄セラレ、木偶人ニ等シキ拳動  
ナリ、姦臣佞吏ハ一身一家ヲ富シ<sup>〔驕佚カ〕</sup>驕送ヲ事トシ、其  
冗費多クハ藩庫ヲ私スルニ出テ、從テ百姓ノ困苦ハ  
見ルニ忍ヒサルノ形況ニ陥リタルモノ、大小三百余  
侯ノ内過半以上ニ居レルカ如シ、茲ヲ以武備ノ如キ  
ハ全ク放棄シタルノ世風ニシテ、假令ヘハ十萬石ノ  
歳入アル者、費用ハ三四十萬石以上ノ歳入ナキトキ  
ハ其冗費ヲ贖フヲ得サルナリ、故ニ浪花其外ニ負債  
夥シク、歳入ハ悉ク貸主ニ掌握セラレタルカ如シ、  
如此キ情事ナルカ故、遽ニ軍備ニ手ヲ下スニハ其用  
途ニ困メルノ藩ノミナリト謂テ、敢テ誣言ニ非ラサ  
ルナリ、茲ヲ以テ 国父公ノ洞見セラル処、武備充

實ノ本源ハ、先ツ冗費ヲ汰シ驕奢ヲ戒ムルニアリテ  
他二道ナク、大小各藩共別ニ生財ノ途ナク、唯此一  
事ニ止マレルヲ以テ御建言ノ要目ニ記サレタル者ナ  
リ、○又曰ク、寛永ノ初、 家久公伊勢貞昌ヲシテ  
土井大炊頭ニ告ケ玉ヒシ云云、當時ノ形勢ニ就テ考  
フルニ、慶長五庚子九月関ヶ原ノ役以来、徳川家ハ  
陽ニ懇篤ヲ表シ、陰ニ我藩ノミナラス外藩ノ勢力ヲ  
減殺シ、抑圧ノ政治ヲ布カントスルノ際ニ当リ、本  
藩ハ殊ニ嫌疑セラル、ノ意少カラサルカ故、時勢已  
ムヲ得ラレス忍耐シテ、如此獻言セシメ玉ヒシ者ナ  
ルヤ多弁ヲ要セス、而シテ 將軍家ハ之レヲ嘉納シ、  
遂ニ一般ニ令シタル者ナリ、是ヨリシテ大小侯ノ妻  
子拳テ在府スルニ至レリ、之レ則チ質ヲ置クモノニ  
シテ其名ヲ異ニシタルノミナリ、如此原因ヨリシテ  
殆ント二百年余ノ久シキニ及ベリ、然ルヲ 国父公  
ハ徳川家治術ノ要点トスル処ヲ論破セラレ、大小各  
藩ニ於テハ其恩波ニ浴シ、發令ノ際ハ愕然怡悅シ、  
而シテ各争フテ引キ取ルニ至レリ、

161  
○十月 日「日札スヘシ」、太守公御親書ヲ以テ目下

必要ノ条件一般江御諮問、或ハ令セラレタリ、左ノ如シ、

161の1  
□達

一 台場之事、

右者、先御代<sup>照国</sup>ヨリ神瀬御築立之 思召被為在候得共、御逝去後御取止相成、別而遺憾ノ事ニ候、然

処当時危急切迫之世態相成候ニ付而者、先当分之処沖小島江築立度存候得共、台場之儀者衆人之死生ニ係リ

不軽事ニ候条、大目付以上者勿論、軍役奉行・軍賦役中可否十分可申出事 神瀬砲台建築御目論見ノコトハ、照国公御事蹟録ニ詳載ス、

一 集成館之事、

右者、大砲鑄立者勿論、追々軍艦造立之含モ有之、當時格別ノ場所ニ候条、掛役々等右等之処深相心得、猶

存慮モ候者十分可申出事 集成館創建セラレシ始末ハ、照国公御事蹟録ニ詳記ス、  
一 宝蔵金五万兩 但、古金、

右者、繰替相成候ハ、拾五万兩ニモ可及候ニ付、内五万兩者宝蔵江納置、残り拾万兩ヲ以テ神社修造并集

一 窮士之事、

右救之為、勘定所其外江一往書役勤等申付有之事候得<sup>(事候得共カ)</sup>者、此以来右人数総而造士館・演武館へ致出席候様申

付、造士館者教授ノ印、演武館者師匠之印ヲ以テ扶持米相渡、出席帳月末掛側役江差出候様有之度事 元米劍槍術及弓馬

ノ師範タル者モ俗務ヲ奉シ、門人教育ハ朝夕又ハ夜間、或ハ定日ニ演武館ニ於テ演習セリ、然ルヲ今回ヨリシテ劍槍二術ノ師範タル者ハ、演武館ヲ勤務所トシ門人教育ヲ専門ニ命セラレタリ、而シテ日々組頭又ハ御目付或ハ君側ノ吏、臨時出館勤惰ヲ檢察セリ、又 太守公每回御親臨勸奨セラレタリ、故ニ各精勵勉、強得達ノ者輩出、士氣大ニ振興セリ、

一 米価之事 當時米価高直、玄米壹石価凡ソ十四五貫文ヨリ十七八貫文ニ内外シ、細民困頓ナルカ故如此令セラレ、尚諸色方(局名)ニ於テ壳価、

右、精々尽吟味、今一往直下相成度事、  
一 諸色之事 諸色方トハ凡百ノ物品売買檢察ノ局ナリ、元米商賈ノ習ヒ格外ノ高利ヲ貪リ占メ、売買等ノ奸ヲナシ、或ハ粗悪ノ品ヲ混淆スル等、一般ノ困却ヲ醸スノ弊スカラサルカ故、先年這、局ヲ設ケラレ、檢察或ハ有餘不足ヲ進退スルヲ専ラトセリ、

右諸色方之儀、掛役々吟味ヲ以取扱之事候処、近頃ヨ

り徒目付一人出席之由候得共、以来側役ヨリ掛申付、徒目付両三人掛置、時々吟味之形行側役江届申出候様可致事、

十月 日「〔貼紙〕日糺スヘシ」

〔本文書は「旧記雜録追録八」三八三号と同文なり〕

以上六ヶ条、太守公御親書ヲ以テ被仰出、国老中添書シテ布達セリ添書略、而シテ国老・若年寄・大目付、其他御軍役奉行・御軍賦役等各意見書ヲ奉呈セリ、素ヨリ御達書之趣時勢適當、他二意見アルベキニ非ラス、故ニ御趣意ニ対シ施行ノ順序ヲ上申セル者ノミナリキ、而シテ集成館ハ一層盛大ニ着手セラレ、大小砲器ノ製造ヲ命セラレタリ集成館ハ、去ル嘉永三庚戌ノ年、照国公御創建、専ラ陸海軍備ノ要器ヲ製造セリ、然ルニ安政五年戊午七月御逝去ノ当日ヨリ閉局セラレ、文久元辛酉ノ夏大砲製造所ヲ合併シ、大小砲製造等以前ノ如クナリシニ、今回一層盛大ニ着手セラレタリ、○大砲製造所ハ、弘化三年丙午ノ夏、齊興公ノ尊慮ヲ以テ鶴江崎ニ創建セラレ、専ラ洋式ノ大小砲製造ヲ命セラレタリ、詳ナルハ、齊興公御伝ニ詳記ス、其他米価又ハ諸物価之沙汰等殊更厳密視察シ、一般大ニ弁益ヲ覚ヘタリ、○又御城下居住之土則チ小番・新番・御小姓組及ヒ与、〔無禄カ〕力、這ノ四ヲ通唱諸土ト呼フ、無録或ハ無俵ノ輩、貧窮ニ迫リタル者ハ、御勘定所其他諸局筆吏等

一時一年又ハ半年、三ヶ月ヲ一期トセリ、奉職、俵米ヲ与ヘ教育セラレタリ、

然ルヲ演武・造士ノ両館ニ置キ給養ノ法ヲ創設セラレ

タルハ、文武ノ研磨ニ俸給ヲ支賜セラル者ニシテ、人

材育成ノ良法実ニ恩恵ノ至、加之人材輩出、国家隆盛

ノ礎基ト謂フヘシ、○沖小島ニ砲台建築ハ目下必要ノ

地ナルカ故、大砲師範青山愚知ナル者ニ委任セラレタ

リ、青山ナルモノハ元来出水郷ノ士ニシテ、父五郎右

衛門〔貼紙〕「実名糺ス」坂元天山カ門ニ入り、蘊奥ヲ極メ

タルニヨリ御城下へ召出サレ、代々御小姓与ノ籍ニ登

用、大砲師範ヲ命セラレタリ、其長子愚知初千九郎父ノ業

ヲ継ヒテ頗ル練達ノ名アリ、茲ヲ以テ沖ノ小島ノ守衛

ヲ委任セラレ、三貫目鉛彈ノ量ヲ以テ唱フ、砲名ヲ車砲ト云フ、荻野弘真カ發明セル式ナリ、或ハ

一貫目ノ砲數門ヲ装置シ、門人数十名ヲ卒ヒテ在營シ、

英艦来侵ノ時ハ大ニ其功ヲ顕シタリ詳ニ文久三年、ノ記ニ載ス、

162 ○十月二十四日、江戸飛脚着覽ス、報知ニ曰ク、来亥春

文久二 將軍御上洛ニ付キ、太守公ニモ御付従アラセ

壬戌春 ラルベキ旨御拜命ノ旨、在邸国老ヨリ報導セリ、○將

軍家上洛ノ大典ハ寛永十一年 家光公上洛ノ際、家

久公ニモ御上洛アラセラレ、以来未曾有ノ御盛事ナリ、依テ来早春御出府ノ御予定ナリ、然ルニ 国父公ニモ御上京アラセラルベキ旨、特別ノ

勅命ヲ奉ゼラレシ故、御父子同時ニ御不在ハ、海防其他

国政上ノ御指揮屈キ兼タル旨ヲ以テ、御猶豫アランコ

トヲ国父公御親書ヲ以テ御親書第七卷ニ在リ、近衛殿ニ就テ願ハ

セラレタリ、因テ

朝廷ヨリ関東江被仰達、御參府猶予セラル旨閣老ヨリ達

シタリ、達書左ノ如シ、

〔貼紙〕「達書得テ記載スヘシ」

163 ○十一月三日、例規ノ如ク本日稻荷社祭典執行セラレタ

リ、鎭流馬ノ興行等百事先規ノ如シ、 御名代島津讚

岐垂水郷ノ領主、其他吏員ノ姓名略ス、

164 ○十一月五日布達、

太守様来春御參府被遊筈候処、此節

三郎様御上京可被遊旨従

朝廷御承知被遊候二付、

太守様ニ者此涯御參府ニ不被為及旨従 公義被仰渡候  
段申来候、此旨向々ハ可致通達候、

十一月五日 式部川 但馬川  
上

165 ○十一月六日、横浜ニ於テ購求セラレタル汽船本日廻着

セリ、船名ヲ永平丸ト名ツケラタリ、堅牢ノ構造ニテ〔脱字〕

速力モ速カナリト云フ、昨年長崎ニ於テ買入セラレタ

ル天祐丸ト二艘ヲ備ヘラレタリ、現今幕府ヲ除クノ外、

大小ノ諸侯中大汽船二艘ヲ備ヘタルハ本藩ヲ以テ権輿

トス、幕府ニ於テモ現今僅大小四艘ヲ備ヘタリ幕府備フル処ノ大

汽船、觀光・朝陽・咸臨・鳳翔ノ四艦、皆洋製ヲ購求セシ者ナリ、  
○觀光ハ和蘭国ノ製ニシテ、日本二大汽船ヲ購求シタルハ之レヲ初

メト、  
ス、

166 〔頭注〕「軍制改革令」  
○十一月七日、軍制改革 太守公御親書ヲ以テ左ノ如ク

令セラレタリ、

家老中江

軍役之儀者 金剛定院様齊興公御深慮ヲ以、慶長以前

御三代様貴久公 義久公 義弘公之御旧法ニ被為基、西洋之砲術

高島茂敦カ和蘭人ヨリ伝 習シタル西洋新式ノ砲術 御採用ニテ御变革相成候処、

順聖院様音秘分而御心志ヲ被為碎、訓練等時々御指

揮被為在候得共、未半途ニモ不至事ニ而、実以遺憾  
不少次第二候、然処近年外夷愈猖獗之姿致増長、

漸々危急切迫之世態ニ相変候ニ付而者、軍政向一涯嚴  
重無之候而者不相濟事者勿論ニ候、就而於当国者每  
事ニ西洋人ノ挙動ニ倣ヒ候儀者、兎角人心之婦嚮薄  
ク、迪モ十分之境ニ至リ難ク、別而令心配候、依之  
猶又致熟考、慶長以前ノ御旧制ニ從ヒ軍備改革申渡  
候間、軍役方之面々綿密ニ尽吟味、趣意貫徹候様可  
取計候、尤モ攘夷之儀、今般

勅使ヲ以テ関東江被仰進候由致承知候得者、若夷賊掃  
攘之儀 台命相達候節者其通速ニ被行候様、手当不  
行届候而者奉対

天朝・幕府無申訳事候条、此旨厚相心得、聊緩怠之儀  
有之間敷候事、

但、台場備之大砲等者、是迄之通西洋之規則ニ基  
キ可申候、乍併是迪モ万事彼之法制ヲ学ヒ候儀者、  
我国風ニ不応儀モ可有之候間、右等之処深相弁、  
成丈簡易ニシテ行レ安キ様可致研究儀專要ニ存候

事、

十一月七日

右二国老連名ノ添書ヲ以テ布達セラレタリ国老添書、略ス、○這  
時隊制編伍ヲ改革シ、操練ノ式、進退駆引ノ法ニ至迄悉  
ク變更セリ、詳ニ文久三年英艦ト争戦ノ部ニ記ス、

○編者曰、御家ニ於テ旧來ノ軍法アリ、則チ 貴久公

義久公 義弘公專ラ被為用タル法、則チ御家流ナル  
者ナリ御三代ノ御軍、  
法ト唱フ、然ルニ 吉貴公御代ニ方リ、武

田流一名甲州流  
トモ唱ヲ以テ全国一般ノ軍制タルベキ旨、幕

令ニ依リ改革セラレ、五十騎又ハ三十騎ヲ一隊トシ、

弓槍銃三器三段・五段等ノ編伍ニ改メタリ、然ルニ

天保ノ末、 齊興公尊慮ヲ以テ西洋新式ノ砲術御探

用、御流儀ト称シ成田正右衛門旧名鳥居平七ニ師範ヲ命ゼラ

レ、而シテ弘化ノ初メニ至リ琉球国へ仏英ノ夷艦渡

来、通信貿易或ハ宗旨則チ耶蘇宗ヲ伝ヘンコトヲ乞ヒ、其

後浦賀、其他各所ニ来舶、同シク通信貿易ヲ乞フニ

至レルカ故、軍備ヲ修メ防禦専用ナルヲ以テ、弘化

丙午ノ夏、大小砲製造所及ヒ操練場一名訓練場トモ云フヲ創建

セラレ、而シテ同年十月十月二日發令軍制ヲ改革セラレ、御

三代ノ御軍法ヲ基本ニ立、西洋ノ法ヲ斟酌セラレ、  
隊制編伍惣鉄砲ノ制ニ一変セラレタリ、此時ニ至リ  
テ甲州流ノ隊制ヲ廢セラレ、先中後ノ隊ヲ定メ操練  
ヲナサシメ、年ナラスシテ兵制頗ル整ヒタリ、而シ  
テ 照国公ニ至リ、益兵制ヲ精フセラレ、大小砲ヲ  
製造シ、或ハ砲台ヲ築造セラレ、薨逝ノ前頃迄御躬  
御勉勵指揮ナラセラレタリ、如此御兩代連綿指揮セ  
ラレタルカ故、兵制整成、器械充備、不虞ニ応スル  
モ憂ヘサルニ至レリ、然ルニ今回改正ノ令ヲ發セラ  
レタルハ、實ニ時勢人情ニ於テ已ムヲ得サセラレサ  
ルニ出タル情実アリ、如何ントナレハ近代外夷倨傲  
ニ募リ、暴慢ノ挙動甚シク、茲ヲ以テ攘夷鎖港ノ説  
四方ニ起リ、特ニ

朝廷ニ於テモ鎖攘ノ  
宸念被為 在、既ニ

勅命モ發セラレタルカ故、一般鎖攘ヲ以テ国是トシ、

從テ西洋ノ兵制器械モ忌嫌スルノ人情ニ立至レリ、

本藩ニ於テモ又然リ、故ニ時世人情ニ於テハ利害功

拙<sup>拙カ</sup>ハ姑ク措キ、古式新法其差違素ヨリ論ヲ俟タスト

雖モ如何セン、彼ヲ攘斥スルニ汲々タル人情ナルヲ  
以テ、從テ彼カ製式ニ模擬スルヲモ好マサルカ故、  
已ムヲ得サセラレサル者ニシテ改革スヘキヲ令セラ  
レタル者ナリ、○當時一般鎖港攘夷ノ説上下共ニ主  
張スルカ故、從テ洋式ノ兵制器械ニ至ル迄嫌惡スル  
ニ至レリ、元來銃砲ハ天文年中洋人ノ伝授セシ者ナ  
ルハ悉ナ人ノ知ルカ如シ、而シテ日本ニ於テ尚ホ發  
明折衷シ、種々ノ流派ヲ立タリト雖モ、多クハ治世  
席上ノ論ニシテ、西洋各国ノ如ク絶ヘス実場試験ヲ  
經テ大成シタルニ非ラサルカ故、功拙利害素ヨリ論  
ナシ、茲ヲ以テ 照国公ハ其利害得失ヲ挙ラレ、御  
明文ヲ以テ示メサレタルハ安政ノ始メニアリ、然リ  
ト雖モ時勢ノ變換ハ四時ノ變遷ニ同シク、人情ノ更  
替ハ又昼夜ノ運動ニ等ク、如何ントスヘカラサルハ  
古今ノ通義ナリ、爰ヲ以テ人情時勢ニ循ハセラレ、  
改革スヘキヲ令セラレタル者ナリ、然ルニ又洋式ノ  
銃砲主張ノ輩ハ利害得失ニ就テ痛嘆スルモ少カラス、  
其輩ハ時勢已ムヲ得サルカ故、一回ヒ実戰ヲ經タル  
ノ後ニシテ、必ス利害ヲ弁知スルヤ疑フヘカラスト

声ヲ吞ミタリシニ、果シテ癸亥七月戦鬪ノ後倭ヲ弁

明シ、施条銃或ハ長尖彈等新式ヲ主張スルニ変シタ

リ、詳ニ癸亥七月戦鬪ノ編ニ記載ス、

〔貼紙〕追加

○軍制改革ヲ令セラレ、当時主張スル処ノ荻野流式ノ銃

砲二掃セラレ、小銃製造所モ創設セラレ、許多ノ工匠

ヲ集メ、昼夜兼業製造セリ製造所ハ鹿兒島塩屋村字七曲ト云  
ヘル海浜、旧造砲場ノ趾ニ新設セ

ラレ、鉄工ハ平佐・種子高等ヨリ、  
召喚シ、雷管機折衷ノ製式ナリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一七三号と同文なり〕

〔頭注〕「琉球通宝製造」

167 ○十一月八日布告、今般江戸ニ於テ御願濟アリシ琉球通

宝製造被相開候旨、国老喜人撰津ヨリ布告セリ布達略  
ス、

而シテ掛ノ吏員本日命セラレタリ、其人員ニハ松岡十

太夫〔ヤ、ヤ〕 御納戸奉行御趣法方掛御用人席ニ拜シ、鑄錢掛

元金山奉 物奉行見習御徒目付勤市来正右衛門〔貼紙〕廣  
行ヨリ 御徒目

付磯永喜之介〔貼紙〕弘  
御 藏方目付中原太郎 「実名札ス」・

同最上才次〔ヤ、ヤ〕 等ノ数名ナリ、○當時内外多端費用巨多、

殊ニ海陸ノ警備一方ナラサルカ故、至急製造所等建設

ス〔貼紙〕動植館ハ乃御花園ナレハ割レヘシヘキ旨ヲ令セラレタリ、初メ御城中動植館内ニ於テ

試鑄シ、而シテ十二月末ヨリ磯邸ノ近傍土橋南詰、現

今綿糸紡績所ノ在ル地ニ設ケラレ、日々数千名ノ職工

ヲ仕役シタリ製造之源因ハ 齊彬公、  
御事蹟録ニ詳記ス、 ○琉球通宝ハ其形〔稿  
四カ〕隨

円ニシテ、恰モ天保通宝ト異ナラス、唯文ヲ異ニスル

ノミニシテ、重量モ亦同シ、當時内外多端ノ費用アル

ノミナラズ、陸海ノ軍備ニ於テ巨万ノ費途アルカ故、

国父公御滞府中事実上申請願セラレシニ、幕府ハ容易

ニ允許スヘキニ非ラスト雖モ、 国父公国事御尽力ノ

末ナルニ因テ、特別ヲ以テ仙台通宝鑄製ノ例ニ準憑シ、

三ケ年間許允セリ、茲ヲ以テ速ニ製造ヲ開カレ、一日

三千兩乃至四千兩ニ相当ノ数ヲ鑄造シ、琉球及ヒ封内

普通ノ法方ヲ設ケラレタリ、一枚ノ價格寛永通宝百二

十四枚ニ交換シ、天保通宝ト双シテ通用セリ、是ヨリ

シテ国中ノ融通滑沢、上下頗ル潤ヒタリ、加之海陸ノ

軍備充実ノ緒ヲ見ルニ至リ、或ハ士民ヲ救助セラル、

ニモ用途ニ渋滞ナク、一般喜色ヲ顯シタリ、中ニモ癸

亥ノ夏、英艦侵入ノ際、上町及ヒ士街焼亡ノ賑救ニハ

充分資助セラレタルカ故、困苦ノ声ナク、或ハ海岸砲

台ノ修築、大小砲器ノ製造、或ハ神瀬砲墩ノ築造等、悉

ク該貨ヲ以テ支弁セラレ、或ハ軍艦〔購求カ〕贖求ニモ大ニ弁用

セリ、鑄造ノ資料ハ浪花・長崎其他各所ヨリ買集シ、或ハ御膝辺ノ銅器ヲ毀タレ、或ハ梵鐘・仏具ノ類巨万ノ斤數、或ハ古製ノ砲器兵器庫ニ在リシ者ヲ悉ク鎔毀スベキヲモ命セラレタリ、如此御膝辺ノ器物ヲ始メ資料ニ充テラレタルカ故一般感戴シ、戸々々所有ノ銅器・鍋釜ノ類獻呈センコトヲ懇願セリ、茲ヲ以テ其乞フニ依リ、相当ノ代価ヲ下賜セラレタリ、其斤數モ巨額ニ及ベリ、梵鐘・仏具ノ銅器ヲ熔解シ武器ニ鑄換スヘキトノ事ハ、安政二年乙卯三月

勅命ヲ下サレ、幕府之レヲ奉シ其処分法ヲ布達セリ、依テ同四年ノ春、照国公ハ御領内ノ寺院ニ在ル梵鐘・仏具ヲ鎔毀シ、大小砲器製造ノ料ニ充ラル、ノ尊慮ヲ以テ大砲鑄製場ニ聚メラレタリ、其數數百個ニ及ヒタリ、然ルヲ御逝去ノ後返付セシヲ此回鑄毀ヲ命セラレシハ、御遺志御継述ノ一ナルノミナラス、當時内外多難ノ時ニ方リテ軍備充実ノ資ニ鑄換セラル、ノ御英断ナルヲ、咸人感稱セシコトナリキ、

○御城下海岸其他各所砲台ノ修造至急ニ命セラレタリ、或ハ大門口・祇園洲台場ノ二ヶ所ニ遠見番所ヲ創設シ、

夷船渡來ノ時、相圖狼煙ノ用トシテ大砲三千斤ヲ裝置セリ、或ハ下町弁天波戸・新波戸・上町波戸・祇園洲砂揚場等數ヶ所ノ砲台ニハ巨大ノ砲數十門ヲ裝置セリ、其彈量ノ大概ヲ記サンニ、式十四斤・十八斤・十二斤ノ長砲此時新ニ鑄造シタル、洋式ノ長砲ナリ、或ハ百五十斤・八十斤・三十斤・三十斤・二十四斤・十八斤・十二斤・六斤等ノ砲悉ナ旧新洋式、製ナリ、或ハ五十斤・十六斤白砲等ナリ、而シテ操練ハ隔日ニ催サレ、太守公毎回御親臨、御指揮アラセラレタリ、茲ヲ以テ一般奮起、夷艦浸來セハ粉粹粉砕カセント競ヒタリ、又陸軍ハ先中後ノ三軍又ハ御旗元、

或ハ御城下警衛、或ハ二ノ丸御旗本国父公、御旗本等ノ制嚴備セリ一軍ノ兵員凡ソ六百ノ御旗本人員凡ソ二千四百人、野戰砲八門トス、○御城下警衛兵凡ソ千五百人、之ヲ四隊ニ分ツ、○二ノ丸御旗本人員凡ソ千五百人、詳、陸軍砲二ハ二ノ百錢ノ山戰砲鑄造ヲ命セラレタリ和蘭人カ「パタアビヤ」陸戰、小銃ハ荻野流式ノ十奴銃ヲ雷帽機ニ折衷シタル者ヲ専用セリ間々用ル者アリ、、彈藥ハ殆ント百余万斤ノ貯畜アリ、故ニ虧乏ノ憂アルコトナシ、○彈藥製造所ハ弘化ノ初、

齊興公軍制ヲ改正セラレシ時、旧法ヲ廢シ洋式ニ改製セラレタリ、從來粗惡ノ硝硫ヲ以テ製シ、實用ニ供シ

難キヲ改製、精良ノ品料ヲ用ヒタリ、茲ニ於テ硝薬ノ製一変セリ、然ルヲ 照国公尚製品ヲ精フスヘキヲ令セラレ、尋テ太守公ニ至リ、新式ノ器械改造ヲ命セラレ製場ヲ拡張セラレ、一日凡ソ三千余斤ヲ製スルノ混和器ニ改メ、旧来ノ臼搗ヲ廢シ固粒器ハ水力圧搾ノ器ニ改メラレ、或ハ火具製造ノ一局モ創立セラレ、大ニ面目ヲ一変セラレタリ、茲ヲ以テ幾年幾十回ノ戦争ニ及モ、彈藥闕乏ノ憂曾テアルコトナシ、○當時幕府ニ於テハ外国ヲ怖ル、コト鬼神ノ如ク、斯ク迄ノ予備、斯ノ如ク士氣ノ振起ヲモ知ラス、英人ヲ煽動シ、鹿兒島灣ニ逼迫セシメ、我勢望ヲ挫削セント謀リシハ、愚モ又甚シト謂フヘシ、聞ク処ニ扱レハ、閣老井上河内守<sup>〔貼紙〕</sup>「正直」<sup>〔忠〕</sup> 發論シテ臺灣ニ迫ラシメ、而シテ幕府ノ困難ヲ免レント謀リタリト云フ<sup>井上ハ遠州、浜松ノ領主</sup> 一説ニ井上ト小栗上野介カ建議ニ出タリトモ云フ、幕府ハ兵權掌握ノ職トシテ外国ノ威力ヲ仮リ、一薩藩ノ勢望ヲ削殺セント謀リタルノ挙動、職掌ニ戻リタルノミナラス、國權ヲ隕スノ罪又大ナリト謂フヘシ、

○編者曰、生麥村ニ於テ我カ藩士奈良原カ英商ヲ斬殺

シタルハ、全ク幕府ノ闕失ニ歸スルハ論ナキナリ、各藩ニ於テ從來慣例アリ、家法アリ、則チ行粧ハ行軍ノ隊伍ト異ナラサルカ故、若シ侵障セラル、ニ於テハ扈從吏員ノ大辱トシ、斬殺スルハ各藩普通ノ慣例トス、本藩ハ特ニ從來嚴法アリ、其法タルヤ藩庁ノ定令タルニ非ラス、扈從員ニ於テノ慣例タリ、因リテ幕府ハ其理由ヲ反省シ、外人ニ説ク処アルカ、將タ処分法モアルヘキニ、然ラスシテ徒ラニ奸謀ヲ以テ外国人ヲ慫慂シ、鹿兒島灣ニ廻艦逼迫セシメタルハ點策ト謂ハサルヲ得ンヤ、本藩ニ於テハ国力ヲ尽シ、宇内ニ跋扈セル英艦モ敢テ恐ルコトナク擊退シタルハ、士氣震ヘリト謂フモ不可ナランカ、又我ヨリ發砲兵端ヲ開キタルモ叨リニ開キタルニ非ラス、談判未タ局ヲ結ハサルニ渠ハ我汽船ヲ奪掠シタリ、故ニ已ムヲ得スシテ砲擊ヲ初メタリ、如此渠暴ニ我カ汽船ヲ掠奪セシハ、万国公法ニ照シ之レヲ論スルトキハ、其曲直何レニアリヤ、素ヨリ已ムヲ得サルニ出テ砲發シタル者ニシテ、渠者我ヲ蔑如シ、脅迫センカ為メ、我カ汽船ヲ掠奪シタリト謂ハサルヲ得

ス、如何ントナレバ「アトミラー」カ乗艦其他モ  
 桜島横山村ノ沖ニ碇泊セシカ、我カ砲声ヲ聞テ倉皇、  
 拔錨ノ違アラス切斷シテ運動ヲ初メタリ、是ヲ以テ  
 見ルトキハ、渠ハ戦ヲ開クノ意ナク、我カ汽船ヲ奪  
 ヒ、我ヲ劫カシテ請求ノ意ヲ達セントセシ者ナルハ、  
 弁ヲ俟タサルナリ、然ルニ我ハ汽船ヲ奪レ挽キ去ラ  
 ル、ヲ見テ、活然拱手スヘキニ非ラサルハ勿論、素  
 ヲリ渠暴謾無礼ノ挙動ヲナスニ方リテハ、掃撃スル  
 ノ予備嚴整ナルカ故、直チニ令ヲ下シテ砲撃セシメ  
 タル者ナリ、○三艘ノ汽船ハ重富郷脇元村ノ沖ニ碇  
 泊セリ、松木安右衛門寺島宗則・五代才介友厚・本田彦十郎  
 「実名糺ス」・鎌田諸右衛門〔貼紙〕「実名糺ス」等ノ士  
 官僅々数名本田ハ英人カ暴ニ乗艦シタルニ依テ戦フテ死シタリ、乗組タリ、掠奪ノ際、  
 松木〔安右衛門宗則〕・五代〔才助友厚〕ノ二名ハ虜トナリテ英艦  
 ニ遷サレ、後チ横浜ニ放チタリ、是モ又彼レカ曲タ  
 ルノ一ツニ非ラスヤ、渠ハ暴ニ汽船ヲ掠奪セシノミ  
 ナラス、士官ヲモ虜トシタルハ未タ戦端ヲ開カサル  
 ノ先キニ在リ、重富沖ヨリ桜島ノ方「アトミラー」

ノ乗艦ニ向テ挽キ去ルヲ見テ、我レハ掠奪セラレタ  
 ルヲ確認シ、而シテ砲撃スヘキノ号令ヲ下サレタル  
 モノニシテ、砲撃ヲ初メタルハ我ニアリト雖モ、戦  
 端ヲ開キタルハ渠レニアリトモ謂テ可ナリ、如何ト  
 ナレハ談判未タ局ヲ結ハサルニ、我カ汽船ヲ奪掠シ  
 タルノ一点ハ、公法上ニ於テ是レヲ何トカ云ハンヤ、  
 是レ渠ヨリ兵端ヲ開キタルノ判然タリト謂フ所以ナ  
 リ〔貼紙〕「松木・五代其時ノ挙動、或ハ當時一般、  
 ノ所論ハ、文久三年戦争後ノ部ニ記ス」、  
 「松木・五代ノ挙動ハ節義上ヨリ見ルトキハ奈何ン、当  
 時船奉行奉職ノ者ナリ」

168

○十一月九日、国老喜入撰津守衛兵二百名ヲ卒ヒ、至急  
 上京ヲ命セラレタリ〔貼紙〕 同年十二月二十九日着京ス、○同人履歴書  
 久三年癸亥正月元日近衛殿へ参殿、忠熙公、忠房公へ拝謁、久  
 光公ヨリ御口上之趣言上ス、御酒肴頂戴ス、同八日粟田口宮様へ参  
 殿、拝謁ス云云、今日小松帯刀着京、拙者事、至急江戸へ可被差越旨、  
 同人ヨリ伝達、島津登へ交代ヲ命セラレ、同十三日京都出發ス云云、

旧邦秘録五編文久二年之六終

〔頭注〕「齊彬公御贈官」

○十一月十一日達、明十二日御用之儀被為在候ニ付、太  
守公御名代御登城アルヘキ旨、幕府ヨリ御留守居へ達  
セラレタリ、依テ島津淡路守忠殿御登城アリケルニ、  
御白書院縁頼ニ於テ閣老井上河内守直殿ヨリ御達書左  
ノ如シ、

先代薩摩守儀〔齊彬〕、存生中為國家抽忠誠、病末ニ及ヒ実  
弟三郎江遺訓之儀共達

御感不斜候、先代家久雖存命中、權中納言  
宣下之家例モ有之候間、以格別之

叡慮贈權中納言從三位可被  
宣下旨、從京都被 仰進候故、薩摩守在生中彼是抽  
丹精候趣有之候ニ付、

叡慮之通被追贈權中納言從三位之旨被仰出候、  
十一月十二日

右閣老列座、河内守直申渡、若年寄中侍座、○如此  
朝廷特旨ヲ以テ幕府へ命セラレ、幕府循奉シテ御贈官

御拝承、而シテ後尚 近衛殿ヲ以テ神号請申セラレシ

カハ、照国大明神ノ号ヲ下サレタリ、而シテ翌文久  
三年癸亥正月 日〔貼紙〕「日糺スヘシ」、番頭島津奎〔知覽郷ノ領主〕  
〔実名糺スヘシ〕・御近習番松方金次郎正

口宣ヲ守護シ着麿セリ、 太守公 国父公御拜戴ノ式鄭  
重ニ執行セラレ、神殿御造営マテノ間ハ

口宣及ヒ神符ハ談政ノ間或ハ大菊ノ間トモ云、菊ヲ画ルカ故斯ク通唱ス、二御安置ア  
リタリ文久三年四月、社地ヲ城西南泉院ノ境内ニ撰ヒ社殿造営セラレ、元治元年甲子ノ冬十一月ニ至テ落成シ、同十二月十九日ヲ以テ正遷宮ノ大祭典ヲ執行セラレタリ、○社地ヲ撰ハレ、或ハ社殿造営或ハ正遷宮大祭ノ式ハ、元治元年ノ部ニ記載ス、其後明治二年、

重テ御贈官、或ハ 勅使ヲ以テ 御劍御下、〔貼紙〕社地御撰定、又ハ御造納ノ事実ハ、照国公御事蹟録ニ詳記ス、菅大祭等ノ事実追記ス  
シ」

口宣左ノ如シ、  
〔貼紙〕口宣追記スヘシ」  
〔貼紙〕口宣記載仕度」

斯クノ如ク御贈官ノ

宣下アリシ、其因テ起ル所以ハ、本年五月 国父公  
勅使大原三位重徳卿ニ御差副関東へ御下向、御滞府中  
主上ニハ、 国父公ノ御功蹟軽カラス、且幾久シクモ御

頼母シク

思食ス特旨ヲ以テ、官位御叙任アルヘキ旨、幕府へ

御内示アリケルニ、公ニハ素ヨリ功名利達ノ為メ御

竭力ノ御誠意ニアラサルカ故、固ク御辞退被 仰上シ

カトモ、

主上ハ尚ホモ厚ク

思食シ止マセラレス、再三ニ及ヒ

叡意之趣

仰セ下サレシニ依リ叡慮之趣 近衛殿・大原、卿ノ御内書ニ詳ナリ、真

ニ已ムヲ得ラレサルノ事情ニ御迫リ、窃ニ 近衛殿ニ

就テ 奏請セラレシ趣ハ、斯ク迄不肖ノ身、殊ニ家督

ニモアラサル者ニ

叡念ヲ懸サセラルノ厚キ、寔ニ恐縮ノ至リ、

叡慮ヲ空フスルモ又甚タ恐懼スル処ナリ、伏テ願クハ、

修理太夫へ中将叙任セラレンコトヲ懇請セラレシニ、

其時ハ既ニ関東へ

御内命ヲ下サレタル後ナリシトソ、然ルニ 太守公此由

ヲ聞召サレ大ニ驚カセラレ玉ヒ、忝モ 国父公ノ御功

蹟ヲ賞セラレ、御任叙アラントノ

叡慮ナルヲ、御謙讓転シテ寸功モナキ我レニ讓ラセラ

ル、ヲ、夫形リニ甘ンシ拝承スベキノ理アルコトナシ

ト、強ヒテ御辞讓アラセラレ、御父子ノ間ニ於テ如此

御謙讓アラセラレ、實ニ聖慮ヲ煩シ奉ルノ恐アルニ立

到レリ、故ニ国老其他要路ノ吏員等甚痛心シ議スル旨

アリ、曰ク、先公御易簣ノ後、天下ノ形勢漸ク危殆ニ

切迫シ、御遺志御繼紹ノ御誠心他ナク、大ニ御苦慮御

上洛、白刃ヲ踏ミ御身ヲ犠牲ニ拱（供カ）シ、一大偉功ヲ揚ケ

ラレ、全国一般尊

王ノ道立チ、人心ノ方向定リ、大義名分ヲ弁スルニ至リ、

皇威復旧ノ緒ニ就キタルハ衆能ク知ル処ナリ、然リ而シ

テ其本源ニ溯レハ、先公（朱書）モトヒニ基スルハ多言ヲ要セス、

茲ヲ以テ厚キ

叡慮ヲ空フセス、転シテ 先公へ御贈官アランコトヲ懇

請セラレタランニ於テハ、 御父子ノ間御謙讓ノ美事

モ亦空カラス、二ナカラ完全ナラント議決シ、而シテ

言上ニ及ヒ、 国老小松帯刀上京シ九月日（貼紙） 一日礼スヘ

シ、 関白忠熙卿ニ就テ事情ヲ縷述シ懇願ニ及ヒシ

カハ、殿下ヲ初メ議伝ノ両奏、其他公卿方大ニ感嘆セ

ラレ、奏

聞ニ及ハレシニ、御父子御謙讓ノ次第

叡感浅カラス、御懇請ノ如ク 先公御贈官ノ

勅諭ヲ幕府ニ下サレタリ、而シテ

叡感浅カラサリシ旨、及ヒ幕府へ

勅命ヲ下サレタル趣トモ、十月三日ヲ以テ 関白忠熙公

ヨリ 太守公 国父公へ御書翰ヲ以テ御内示アリタリ、

御書翰左ノ如シ、

169の2

尚々寒気專御自愛ニ存候、当地ハ今朝初雪ニテ寒気

相増候也、

追々寒気相増候、弥御揃御勇猛之御事令賀候、尚承度存

候、抑故薩摩守殿贈官位之儀、兼而其辺之処

叡慮モ被為在候旨ニ而、早速

御沙汰ニ相成、別紙之通幕府江被 仰出候、仍内々右之

写御目ニ掛置候、小松帯刀へモ右之写内々遣シ置候事ニ

候、仍荒々右之段申入候、

勅使明後十二日発足ニ付、御用繁取紛、大乱書御免可給

候也、  
十月十日認置

修理大夫殿

三郎殿

忠熙

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一六三ノ一号・「玉里

島津家史料一」三三八ノ二号と同文なり〕

169の3

別紙

松平故薩摩守儀、存生中国難ヲ憂、抽丹誠種々勘考、苦

心病末ニ及、弟三郎等江奉為国家遺訓之儀共、達

叡聞

御感不斜候、先代家久雖存命中、権中納言

宣下之家例モ有之候間、以格別之

叡慮、贈権中納言從三位可被

宣下思食候、右之趣早々御執行有之候様宜申入、関白殿

被命候、仍申進候事、

十月

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一六三ノ二号・「玉里

島津家史料一」三三八ノ一号と同文なり〕

如此御父子ノ御間御謙讓、遂ニ 先公〔貼紙 照国〕 御贈官

ニ転シ懇願セラレタル趣、悉ナ人洩レ聞キ大ニ感嘆シ、  
當時ノ言ニ、類ハ素ヨリ異ニシテ同日ノ談ニ非ラス、  
又警フルモ畏ケレト、古

仁徳天皇ハ、御兄弟ノ間ニ於テ御位ヲ謙讓セラレタルハ  
千載ノ美蹟、今亦御父子叙任ヲ謙讓セラレタルモ、稍  
類似ノ御言行ナリト、咸人感涙ヲ流シタル美談ナリキ、

170 ○十一月三日、高橋縫殿大目付二拝ス  
御小姓組番御、  
用人兼務ヨリ

171 ○十一月四日京師飛報ニ曰ク、長土水其他各藩士或ハ浮  
浪ノ徒洛中ニ蟻集シ、鎖攘ノ説喧囂暴慢ノ所為寡カラ  
ス、夫レカ為メ京撰近畿ノ人心恟々トシテ、枕ヲ安ス  
ンスルコト能ハス、特ニ

主上大和ノ山陵臨幸ヲ催シ奉リ、鎖攘ノ策略御廟議アリ  
ト稍臨幸ノ準備モアリト、是レ成長土藩人ノ從憑スル  
処ニシテ、公卿方多クハ二藩ニ因循セラレシ、太甚穩  
カナラサル形勢ニテ、内乱目下ニ迫レルトノ趣ナリ、

172 ○十一月八日、伊地知壯之丞  
貞馨、旧名堀仲左衛門、中頃故ア  
リテ堀小太郎又ハ次郎ト改メ、近

頃伊地知  
ト変ス 御小納戸格御庭奉行勤集成館掛二拝ス、○本年  
春 国父公御上京ノ時分、御納戸奉行、江戸・京都・  
大坂御留守居兼務二拝シ、而シテ

勅使御差副関東御下向ノ際從駕、御帰国後在府、天下ノ  
事ニ奔走尽力セシカ幕府ノ忌諱ニ触レ、御用アル者ナ  
ルカ故差出スヘシトノ旨、在邸国老へ達シタリ、茲ヲ  
以テ免職謹慎セシメ、亡命踪跡分明ナラサル旨届出、  
而シテ窃ニ汽船ニ塔シ〔搭カ〕下麿セリ、着麿ノ上、心入レヲ  
以テ謹慎スヘキ旨達セラレタリ、忌諱ニ触レタル事頃  
ハ、〔義カ〕襄キニ江戸芝ノ本邸失火焼亡セシハ伊地知カ所為  
ニアリト、或ハ各藩ト謀リ、或ハ浪士ヲ煽動シ、京撰  
ニ於テ騷擾ヲ醸シタル等、種々ノ嫌疑ニ触レ糺弾セン  
カ為、呼出ノ達アリタリト云フ、

173 ○十一月十六日、晴朗、昼後ヨリ時雨、本日 太守公  
〔頭注〕「海防要衝御巡覽」

国父公御一同四ツ時御出城、御城下出物藏脇渡戸ヨリ  
汽船永平丸へ召サレ、沖ノ小島砲台築造ノ場御覧アラ  
セラレ砲家青山愚知へ築、  
造委任セラル、其他桜島各所ノ砲台御巡覧アリ  
テ後チ集成館へ御入り、大砲鑄造等御覧、而シテ琉球

通宝製造局創建ノ地モ御親覽磯邸近傍土橋詰田中四郎兵衛別荘等、現今紡績所ノ地

而シテ後磯御茶屋へ入ラセラレ御休憩、晚景ニ及ンテ

又汽船ニ召サレ、御帰城アラセラレタリ鑄錢局地田中カ別荘ハ、享保ノ頃

淨国公磯邸御創建ノ時分ヨリ所有セリト云フ、其頃田中カ祖先君御

ニ奉職セシ者、内命ヲ蒙リ別業ヲ設ケタリト云フ、鑄錢局ハ盛大建

設ノ予定ナルカ故、其隣地川上萬之介・黒田某等八九戸ノ邸地ヲ買

上ケラレタリ、其地所數千坪ニ及ヘリ、同年十二月二十四日ヲ以テ

鑄造ヲ擱メ、開業ノ盛、而シテ癸亥ノ春ニ至テハ、一日ノ

典執行セラレタリ、鑄造額凡ソ四千五百両余ニ及ヘリ、其職工総員日ニ

三千七八百名ヲ仕役シ、実ニ一大盛業ニシテ治乱ノ費

途、之カ為メ匱乏ヲ告ケサルニ至レリ、

174  
〔頭注〕「姫君御帰国」  
○十一月十七日布達、

暉姫様・寧姫様御事、御国許へ御住居可被遊ト之段者

先般申渡置候通ニテ、先月二十八日、江戸御立被遊候

段申来候、此旨向々へ可致通達候〔貼紙〕從典ニハ、御側役中山次左衛門、其他御広敷

ノ役員・医師・女中等數十名、京都、其他名勝ノ地モ御巡覽ノ予定ナリ、

十一月十七日 但馬川上

175  
〔頭注〕「年首慶賀式布達」  
○十二月十八日布達、

年頭之御式、 太守様ニハ於御本丸御受可被遊、 三

〔貼紙〕「追加」

郎様二者於二丸御受被遊候旨被 仰出候、左候而、此

節ヨリ独礼以上之面々者、素袍・烏帽子相用候様被仰

出、烏帽子之儀者、島津折相用候様被仰付候、此旨独

礼以上之面々へ申渡、可承向へモ可申渡候、

十二月 筑後川 但馬川上

右ノ如ク素袍・烏帽子相用、殊ニ烏帽子ハ島津折ヲ用フ

へシトノ趣ハ復古ノ一ニシテ、心アル者ハ大ニ感戴シ、

服ハ身ノ章ニシテ忽セニスヘカラサル者ナルカ故、願ク

ハ御目見以上慰斗日着用格式ノ者ハ一般ニモ允サレンコ

トヲ冀望セリ西藩野史ニ曰ク、文治元年乙巳夏六月〔十五日〕、頼朝

〔時ニ七歳、聖采記二十三歳トスルハ非ナリ〕、鶴岡八幡宮ニ詣ル、三郎〔忠久公〕ヲ召テ元服セシム

字ヲ授テ忠久ト称ス、此日左兵衛尉ニ任ス、頼朝鳩作ノ短刀ヲ賜テ己カ名

賀ス云云、伝ル処ノ説ニ、此日 忠久公左折烏帽子ヲ着ケ玉ヘリ、是ヨリ

鳥津家ニ於テ世々佳例トシ用ヒタリト云云、又源平盛衰記ニ記ス処ハ、

前文略ス、土肥焼亡舞女房消息大太保烏帽子ノ事、御山隠レノ御スマイ

心苦クソ侍レ、急キ三浦ノ人々ヲ尋テ安房・上総ノ方へ越シ給フヘシ

云云、土肥此状ヲ以テ佐殿ニ角クト申シケレハ、神妙ノト大ニ悦ヒ給

フ、サラハトクノトテ夜ノ凌晨ニ真鶴ノ方ヘコソ落チ給ヘ、將軍宣ヒ

ケルハ、敵ニ攻ラレテ兜ヲ捨テツ、折節甲斐国住人大太保ト云フ鳥帽

子商人、箱ヲ肩ニ懸ケテ道ニテ逢ヒ、然ルヘキ事ナリトイワレナン、如

何シテ烏帽子ヲ著ヘキト仰セケレハ、折節甲斐国住人大太保ト云フ鳥帽

〔朱書〕

ル、取敢へス折節ナレハ急ニアハテ、折ル程ニ、七頭ハ右ニ、一頭ハ左折ナルヲ然モ佐殿ニ尋ル、佐殿アヤシトオホシテ七人カ烏帽子ヲ見廻シ給ヘハ、皆右ニ折テ尋ノ常ナリ、我身一人左リナリケレハ不思議ナリ、源氏ノ先祖八幡殿ハ左烏帽子ヲ著給ヒシヨリ、当家代々ノ太將軍左折ノ烏帽子ナルニ、今流人落人ノ身ナカラ是ヲ著ルコソ有難ケレ、昔天竺ノ摩訶陀国トテ云云、中略ス、八頭ノ烏帽子ノ中ニ左折一ツ、其シモ頼朝ニ当テケルモ不思議ナリ、然ルヘキ八幡大菩薩ノ商人太郎ニ入り替リ給フテ著セ給ヒニケルニコソ、末頼シク覚ヘケレハ、心ノ中ニ再拜シテ土肥ノ次郎ニ当座トラセテ著給ヒケレハ、七人ノ面々ニ烏帽子著テ出立給ヒケリ、藤九郎盛長ヲ使者ニテ家主カ内悦ヒ宣ヒケルハ、頼朝世ニ立ツナラハ、此悦ニハ名田三丁、在家三字ヲ計ラヒ給フヘシト云云、中略ス、去レハ平家亡テ後、甲斐国石和ト云フ所ニ百町三家賜リテ、今ノ世マテモ知行セリ云云、是ヲ以テ之レヲ見レハ、左折烏帽子ハ義家ノ著玉ヒシヲ初トシ、而シテ頼朝公暗ニ左折ヲ著玉ヒ、榮誉ヲ海内ニ揚ケラレシ故御佳例トセラレ、シ者ナランカ、

〔頭注〕「井伊其他所刑」  
○十一月廿日達、

井伊掃部頭直（江州憲 彦根）

名代 小堀大膳

其方父掃部頭儀直綱、安政五年戊午ノ年大老職ニ任シ、外国条約ヲ結ヒ、或ハ宮・堂上方等ヲ幽囚シ其他種々暴政ヲ施シ、終ニ万延元庚申三月三日、外桜田ニ於、重キ御役相勤、テ水戸其他脱藩士ノ為メニ斬殺セラレタリ、

御幼君將軍家 茂公 御補佐ニ付而者御委任被遊候処、奉対 京都被惱

宸襟候様之取計〔致シ脱カ〕 公武ノ御合体ニモ差響キ、天下ノ人心

不居合之基ヲ開キ、且賞罰黜陟共ニ私意ニ任セ、賄賂

私欲之儀モ不少、上之御明德ヲ汚シ、不慮之死ヲ遂

候ニ至候而モ奉欺 上聴候段、追々達 御聴、重々不

届ニ被 思召候、急度モ可被仰付之処、死後ノ儀ニモ

有之、出格之 御宥免ヲ以テ、其方高之内拾万石被召

上候、

右於豊前守宅勝行老中列座、同人申渡之、大目付〔竹本カ、正〕竹下甲

斐守・御目付杉浦正一郎相越ス、

○同日達、 内藤紀伊守〔信思 越後村上〕

名代 諏訪庄右衛門

其方儀、加判之列久々相勤、古役之儀ニ候得者、万事

可心付之処、無其儀罷過候段不束之至ニ付、急度モ可

被仰付之処、格別之 思召ヲ以、先年被仰付候一万石

旧地戻リ被仰付、溜詰格御免、帝鑑之間席被仰付候、

○同日達、 間部下総守〔詮勝 越前鯖江〕

名代 間部熊五郎

其方儀、勤役中外夷取扱向之儀ニ付、奉対

朝廷不正之取計有之、重キ方々江不相当之仕向致、右者

故井伊掃部頭之意ヲ受候ト者乍申、重大之事件輕易ニ

心得、公武ノ御一和ヲ失ヒ、天下人心之不居合ヲ開

候段、追々達 上聴、御役柄ヲモ不弁次第不束之至ニ

付、急度モ可被仰付之処、格別之 思召ヲ以テ、先達而村替被仰付候一万石被召上、隠居被仰付謹慎可罷在候、

○同日達、 下総守嫡子間部安房守（越前 忠 鱈江）

名代 間部熊五郎

其方父下総守儀、勤役中外夷取扱向之儀ニ付、奉対

朝廷不正之取計有之、重キ方々江不相当之仕向致、右者

故井伊掃部頭之意ヲ受候卜者乍申、重大之事件輕易ニ

心得、 公武之御一和ヲ失ヒ、天下人心ノ不居合ヲ開

候段、追々達 上聴、御役柄ヲモ不弁次第不束之至ニ

付、急度モ可被仰付之処、格別之 思召ヲ以、先達而

村替被仰付候一万石被召上、隠居謹慎被仰付、其方江

為家督四万石被下之候、

○同日達、

酒井若狭守（若州 忠 小浜）

名代 神田若狭守

其方養父右京太夫（忠 義）、所司代勤役中如何之取計有之、

先達而隠居被仰付、御加増被召上候処、一体公武之御

間柄ニ付、実直ニ可取計之処、権謀詐術之行為有之趣、

追々達御聴、

朝廷御疎隔之場ニモ相当リ、如何之事ニ被 思召候、急度モ可被仰付之処、格別之 御宥免ヲ以テ右京太夫儀 蟄居被仰付候、

○同日達、 堀田鴻之丞（下総 正 佐倉）

名代 小倉新左工門

其方父見山（備中守 正篤）儀、勤役中外夷取扱向之儀ニ付、品々

叡慮之趣モ被為 在候処、重大之事件輕易ニ心得、万端

不行届之及取計候段、追々達 御聴、重キ御役柄不似

合之儀共不束之至ニ付、急度モ可被仰付之処、格別之

思召ヲ以テ、見山儀蟄居被仰付候、

○同日達、

久世謹吉（下総 謙吉カ 関宿）「実名札スヘシ」

名代 「名札スヘシ」

其方父（大和守カ）太和守（広 周）儀、勤役中不束之筋有之、先達而御答

被仰付候処、猶追々達 御聴候趣者、故井伊掃部頭横

死之儀ニ付奉欺 上聴候段、御後闇キ （上聴ヲ欺キ奉リ云云、其場ニ於テ負傷シ、

後日死タル趣ヲ以テ届ケ出タリ、故ニ其時医師ヲ以テ慰問、或ハ物

品ヲ賜ハリシ等ノ式アリタリ、之レ上聴ヲ欺キタリトアルヲ以テ考

フルニ、將軍家上聞達セシハ負傷、後日死シタルヲ以テシタルモノ、

如シ、果シテ然ラン、元來幕府ノ習慣ニ、目前ノ障碍擾煩ヲ厭ヒ、如此ク曖昧ノ処 取計、御政道モ不相立次第、且從京都被仰遣儀モ有之候処、因循遅緩之取計致シ

朝廷ヲ不重、其上重キ御役儀乍相勤賂賂ニ汚レ、家事不

取締之段不埒ニ被 思召候、依之其方高之内一万石被

召上、大和守儀永蟄居被仰付候、

○同日達、

安藤鱗之助 〔信長〕 〔奥州警 〔貼紙〕 〔城平〕 実名札

スヘシ

名代 安藤小膳

其方父对馬守 〔信長〕 儀、勤役中不正之筋有之、先達テ御咎

被仰付候処、猶追々達 御聴候趣者、故井伊掃部頭 〔直弼〕

横死之節、奉欺 上聴候儀達 御聴候趣、御後闇キ取

計故、御政道モ不相立次第、且從京都被 仰進儀モ有

之候処、因循遅緩之取計致シ

朝廷ヲ不重、掃部頭死後モ其意ヲ受ケ非義ヲ行ヒ、外国

人応接ノ節、不分明之事共モ有之候由ニ相聞得、其上

重キ御役乍相勤賂賂ニ汚レ、家事不取締之段不埒ニ被

思召候、依之其方高之内二万石被召上、对馬守儀永蟄

居被仰付候、

右十一月廿日、豊前守 〔勝行〕 宅ニ於テ大目付竹下甲斐守・御

目付杉浦正一郎列座、掃部頭名代江先ツ達シ、順々達之、

○十一月廿一日達、 御書院番頭小倉長門守 〔小笠原カ、長常〕

名代 水野甲斐守

其方儀、京都町奉行勤役中事実不分明之取計致シ、御

制度之紛乱ヲ生シ候段不束ニ付、御役御免被仰付候 〔隠居脱カ〕 〔小倉〕

ハ京都町奉行ナリシカ、本年夏頃迄在職シ、所司代酒、井若狭守ト同心、種々姦曲ノ所為アリシモノナリ、

○同日達、

御小納戸小倉織部

名代 桑原善兵衛

其方養父長門守儀、京都町奉行勤役中事実不分明ノ儀

取計、御制度ノ紛乱ヲ生候段不束ニ付、御役御免被仰

付、家督無相違其方江被下之、

○同日達、

中奥御小姓薬師寺備中守 〔元寛〕

名代 太田左左衛門

其方養父隠居静山 〔薬師寺元真〕 〔貼紙〕 儀、故井伊掃部頭 〔直弼〕 二阿諛

致シ不正之取計有之、不束ニ被 思召候、依之隠居料

五百俵并其方高之内七百石被召上之、

右、稲葉兵部少輔 〔正巳〕 宅ニ於テ若年寄列座、同人申渡之、御

目付池田修理・沢七太夫相越ス、 〔長発〕 〔勘七郎カ〕

○十一月廿三日達、

御留守居松平出雲守 〔康正〕

名代 松平伊織

其方儀、御目付勤役中、飯泉喜内 〔左輔〕 飯泉ハ水戸藩士ニシテ本藩 〔土目〕 下部伊三次・越前福井

〔貼紙〕「初筆云云事実糺スヘシ」

藩士橋本左内等ト水戸公ニ賜フ処ノ、勅書事件ニ尽力セシ者ナリ、初メ云云ト記セルハ則チ其事件ヲ云フ、

付、吟味之節立会被仰付候処、不束ノ次第モ有之候間、

急度モ可被仰付之処、格別之御寛宥ヲ以御役御免、差

扣被仰付候、

○同日達、

講武所奉行大久保越中守

名代 永井土佐守

其方儀、京都町奉行勤役中事実不分明之儀取計、御政

度ノ紛乱ヲ生シ候段不束ニ付、御役御免、差扣被仰付

候、

○同日達、

御小姓組番頭松平式部少輔

名代 本多〔貼紙〕一名糺スヘシ

シ

其方儀、御勘定奉行勤役中不正之取計有之趣達

御聴、差扣被仰付候、

○同日達、

駒井山城守

名代 〔貼紙〕一名糺スヘシ

○同日達、

黒川備中守

名代 〔貼紙〕一名糺スヘシ

右、大目付勤役中、前文同、

○同日達、

西丸御留守居石谷長門守

名代 〔貼紙〕一名糺スヘシ

其方儀、町奉行勤役中、前文ニ同シ、

○同日達、

御小姓石谷鉄之丞

右父、前文ニ同シ、家督被仰付候、

○同日達、

御槍奉行岡部土佐守

其方儀、京都町奉行勤役中、事実不分明之儀有之、御

役御免、差扣被仰付候、

○同日達、

中奥御小姓久貝相模守

其方養父遠江守大目付勤役中、飯泉喜内初筆一件二付、

持高之内二千石被召上、遠江守儀差扣被仰付候、

○同日達、

寄合池田播摩守

其方儀、町奉行勤役中、飯泉喜内初筆一件二付云云、

御役御免、差扣被仰付候、

○同日達、

奥医師伊東長春院

アリト云フ、当時ノ説ニ、將軍家定公薨去ニ付テ業殺セシ云云ノ嫌疑アリ、虚実分明ナラス、

其方儀 思召有之、御役御免、謹慎被仰付候、

右、稲葉兵部正宅ニ於テ申渡之、

○十一月廿五日達、

松平讃岐守

〔讀州 高松〕

其方養父〔松平頼胤〕玄蕃頭儀〔ママ〕 思召有之、蟄居被仰付之、

名代 〔貼紙〕「名糺スヘシ」

○同日達、

松平伯耆守宗秀〔丹後宮津〕

其方儀、寺社奉行勤役中、飯泉喜内初筆一件二付、溜

之間詰御免、差扣被仰付、

○同日達、

松平和泉守〔貼紙〕「実名糺スヘシ」  
〔參州西尾〕

名代 〔貼紙〕「名糺スヘシ」

其方儀、勤役中前文二同シ、先年村替被仰付候一万石、

旧地戻被仰付候、

○同日達、

松平主水正 〔貼紙〕「実名糺スヘシ」

名代 〔貼紙〕「名糺スヘシ」

其方父、前二同シ、家督被仰付候、

○同日達、

脇坂淡路守安〔播州〕  
〔貼紙〕「名糺スヘシ」  
〔龍野〕

名代 〔貼紙〕「名糺スヘシ」

其方養父〔脇坂安宅〕搦水儀、右同文ニテ謹慎被仰付、

○同日達、

水野出羽守忠〔駿州沼津〕

名代 〔貼紙〕「名糺スヘシ」

其方養父左京大夫〔忠寛力〕誠儀、勤役中故井伊掃部頭江阿諛致

シ候二付、御役御免、謹慎被仰付、

○同日達、 神奈川奉行浅野伊賀守〔氏絶〕

其方儀、御目付勤役中不束之儀有之、御役御免、差扣被仰付、

右、稲葉兵部少輔〔正宅〕ニ於テ申渡之、

〔本文書は「玉里島津家史料九」追加一六号六七五頁「井伊掃部頭」より同六八一頁「奥医師」迄とほぼ同文なり〕

以上二十九名、井伊・安藤ヲ初トシテ軽重ノ処分ニ及ヒタルハ正邪曲直ヲ匡シタル者ニシテ、 国父公御建言ニ基ス、這ノ達シアリタルヲ、遐邇貴賤トナク聞ク者愉快ト言ハサルハナシ、邪ハ正ニ敵セス、天網灰々麤ニシテ洩サスト、真哉、

177 〔頭注〕「暴徒攘夷勅命ヲ追ル」  
○国父公御下国ノ後、長土二州或ハ浮浪士等京師ニ在テ

公卿方ヲ脅迫シ、將軍家上洛ノ

勅命ヲ發セラレン事ヲ逼リ奉リ、剩ヘ来亥早春卜期日ヲ

モ定テ促カサレ、其間ニ後見職一橋殿ニハ 御尋問ノ

事アルカ故、至急上洛ヲ促カサレタリ、



179 ○十一月廿日ヲ以テ、幕府ハ井伊・安藤其他ノ人々カ前

罪ヲ匡サレ、而シテ 將軍家茂公モ若齡ニシテ、大小

ノ政務閣老以下吏員ノ議決ニ出タリト雖モ、茲ニ於テ

ハ其情実ニ関セス、官位正三位大納言 兼右近衛大将一等ヲ貶セラレン

事ヲ一橋ヲ以テ奏

聞ニ及レシカハ、懇願ニ委セラレ、権大納言〔貼紙〕「從三位」

ニ貶セラレタリ 安政五年家定公薨ス、嗣ナシ、紀伊宰相家茂公入

テ職ヲ襲ク、年十二（本年壬戌十六歳ナリ）田安

大納言殿後見職トシ、井伊直弼大老ノ職ヲ以テ大政ヲ

握リ威權甚シ、之レ衆ノ知ル処、今又多言ヲ要セス、

180 ○国父公御滞京ノ

勅命ヲ奉セラレ、大原公卜偕ニ関東御下向ノ頃マテハ、

両端ヲ踏ミ傍觀シタル藩々モ、所謂一犬空ヲ吼レハ万

犬之レニ応スルノ言ノ如ク、争フテ上京シ、或ハ一門

ノ者、或ハ重臣ヲ上京セシメ、宮・堂上方ノ間ニ奔走

シ、或ハ阿媚シ、勤

王鎖攘ノ説ヲ立ル等喧々囂々、中ニモ長州ハ浮浪ヲ懷ケ、

種々奸暴ヲ教唆シ、遂ニ攘夷ノ  
勅諭ヲ下サル、ニ至ラシメタリ、其ノ  
勅使ニハ三条・姉ヶ小路ノ両卿ヲ推揚シ、攘夷別

勅使ト称シ東下セラレタリ、是レ全ク凌上ノ所為ニ外ナ

キカ故、心アル人ハ憂歎シ、這ノ形況ナルトキハ、父

子兄弟牆ニ鬪クノ慘状ヲ見ルニ陥ランコトヲ嘆息セリ、

如此黠党ノ暴勢熾ナルカ故、雷同付和ノ藩々ハ勢ニ走

リ、長土ニ藩ヲ尚望スルニ到レリ、茲ヲ以テ二藩ノ庇

蔭ヲ受ケタル三条美実・姉小路公ノ兩

勅使ハ大ニ威權ヲ有シ、十二月二日発京、関東へ下向セ

ラレタリ、長土ニ藩ノ士数百名ヲ従へ、或ハ土州侯差

副ハレ其勢甚タシ、二藩士・浪士等其挙動倨傲ニシテ

天下人ナキカ如シト、故ニ当時ノ巷説ニ、両卿ヲ指シ

テ竹林ノ猫ト綽名ヲ付シタリトソ、又長土ニ藩ハ 国

父公御退京後公卿方ヲ脅迫シ、

朝議ヲ左右シ、遂ニ鎖攘ノ  
詔ヲ下サル、ニ至リ、或ハ 將軍家上洛、或ハ一橋・越

前ノ二公モ上京ヲ促サレシ等、悉ク志望ヲ達シタルカ

故、益暴行ニ募リ、一般民庶ノ困頓ヲ来セリ 勅使隨

藩士ト唱フル者ノ中ニ、浪士輩ニ藩ノ名義ヲ假

リテ隨行セルモアリト云フ、果シテ然ラン、 茲ヲ以テ近衛殿

御父子・中山殿・正親町三条殿ノ諸卿ハ大ニ憂悶セラ  
レタリ、素ヨリ 国父公ノ御建白ヲ主張セラル、ト雖

モ如何セン、僅々五六名ニ過キサル同論ニテ、其他大小ノ公卿方悉ク暴勢ニ恐怖シ或ハ雷同シ、時機ヲ得タリト虎威ヲ仮リ、鎖攘ヲ唱フルノ形勢ナリ、幕府モ是ヲ抑制スルノ勢力ナク、殊ニ

勅命ヲ担キ斥抑ノ論ヲ以テスルカ故、又之レヲ奈何ントモスルニ途ナキニ逼マレリ、故ニ一橋・越前ノ二公ハ

之ヲ鎮靜シ得ルハ、海内他二人ナク、国父公ニ止マ

〔頭注朱書〕御書簡札シ記入スベシ

レルカ故、春嶽公ヨリ左ノ御書翰ヲ以テ依頼セラレタ

リ畏コクモ 主上ハ、国父公御建言ノ趣ヲ可トシ玉ヒ、偏ニ頼ミ思召スト雖モ、長土二藩或ハ浮浪士カ激論主張ノ公卿方少カラス、大

ニ 叡慮ヲ惱マシ玉ヒシトソ、故ニ御憂嘆一方ナラス、窃ニ関白、殿ニ密 勅ヲ下サレ、国父公速ニ御上洛ヲ促サレタル者ナリ、

181 〔貼紙〕追加  
○十二月四日江戸飛報ニ曰ク、生麦ニ於テ英国人斬殺ノ

事件ニ就テ、在邸国老島津登・留守居西筑右衛門、閣

〔忠精〕

老水野和泉守殿役館へ出頭、届書ノ趣ヲ以テ、脱藩輕

卒岡野新助ナル者ノ所為ニシテ、其場ヨリ踪跡分明ナ

ラサル旨答弁セシト雖モ幕吏肯諾セス、種々質問ノ旨

アルカ故、其場ニアリシ者差出スヘシトテ退キ、次日

御供目付山口彦五郎出頭セシニ、嚴シク尋問シ弁解ス

ト雖モ承引セス、其儘町奉行所ニ護送シ、四五日間留

置キ日々糺問、稍犯罪人ノ処分ナリシ趣ナリ、幕吏ハ探訪ヲ尽シ事実ヲ詳ニシ、亡命輕卒岡野カ所為ニ非ラス、供方頭立チタル者四五名カ所業ニシテ、剩ヘ寸断シ或ハ乘馬ニ傷ケタル等ノ始末詳細ニ取調ヘタル趣ニテ、国老其他大ニ痛困セリ云云ノ報ナリ、

182 ○十二月七日、照国公御贈官ノ

口宣到着、本日 太守公 国父公御一同福昌寺江入ラセ

ラレ、御幕前ニ於テ御祭典恭シク御執行、畢テ御城内

大菊間、談政ノ間トモ云フ、社殿落成迄ノ間安置セラ

レタリ、

183 ○十二月八日、太守公 国父公御一同、演武館内犬追

物場ニ於テ、今度変更ノ兵隊操練御覽アラセラレタリ、

○編伍ノ組織ハ御三代ノ貴久公 義久 公 義弘公 御軍制ヲ基本トシ、

和漢ノ法斟酌シタル者ニシテ、伊地知龍右衛門正 治・折

田平八等担当シテ編成シタリ二名共当時御軍、賦役職ナリ、

184 ○十二月九日達、大島盛太夫御目付・郷田仲左衛門同上・

上原善藏同上・平川一二同上・伊藤万次郎横目・土岐新兵衛同上・木藤矢太郎同上・有馬次郎右衛門同上・今井市兵衛同上・中村新兵衛同上、右十名被聞 召通趣有之、御役又ハ勤方被免、謹慎スヘキ旨達セラレタリ、此ノ輩ハ嚮ニ処分セラレタル諏訪数馬等カ指揮ヲ受ケ、小松・中山・大久保等ノ曹ヲ擯斥セント謀リシ故ヲ以テ、此ノ如ク処置セラレタル者ナリ、

185 〔貼紙〕〔追加〕  
○十二月十日、島津権五郎御小姓与番頭ニ拝ス〔久鑿〕、〔当番頭、ヨリ〕

186 ○十二月十日、伊地知宗之丞〔壮之丞カ〕御小納戸頭取御趣法掛御用人席ニ拝シ、御用取扱御用人同様トノ趣達セラル、

187 〔頭注〕〔將軍上洛発表〕  
○十二月十五日、將軍家御上洛発表セラレタリ、布達左ノ如シ、

187の1 来二月 御上洛可被遊旨被仰出候、右之趣万石以上以下共不洩様可被達候、

十二月十五日

188 〔貼紙〕〔此条下条ト転到、後日直スヘシ〕  
○来二月御上洛、久能山へ御社参還御之節、参州大樹寺へ御立寄り 御拜可被遊旨、先達テ被 仰出候処、今度御軍艦ニテ御上洛被遊候二付、御社参等不被遊旨被仰出候、此旨万石以上以下并御供之面々へ可被達候、〔本文書は「玉里島津家史料九」追加一六号六八三頁「来二月 御上洛之節、」と同文なり〕

189 ○十二月十五日、大赦発表セラレタリ、是レ先般 国父

公御上洛、浪士御鎮撫、或ハ

勅使御差副関東御下向、大政变革等御尽力一方ナラサリ

シ故、御帰国ノ折、

天拜厚キ褒

勅、且 御劍御拜戴ニ就テ執行セラレタリ、在獄或ハ流

刑ニ処セラレタル輩等、許多ノ人員恩恵ヲ蒙レリ、故

ニ獄中稍空虚トナレリ、

190 〔中旬カ〕  
○十二月中勿頃米穀匱乏、加之高価ニシテ一般困頓ヲ極

メタル趣、 国父公大ニ御痛心、国老其他ノ吏員へ裕

余ノ策ヲ諮詢セラレ、急救ノ法ヲ建ラレ、肥筑ノ両国

ヨリ許多輸入ノ道ヲ開カレタリ、○当時玄米一石ノ価  
四兩二歩ニ内外セリ、

十二月 日〔貼紙〕「日糺スヘシ」

191 〔貼紙〕「此条上条ト転到、後日直スヘシ」  
○近來品々御用途相勤、就テハ宿駅疲労不少趣被聞召、  
〔御国人民モ脱カ〕

來二月 御上洛之節、陸路御旅行ニ付テハ一同之疲弊  
モ甚敷、深 御憂念〔玉里島津家史料〕より趣被遊候ニ付、御軍艦ニ而 御上  
洛被遊候△之旨被 仰出候、依テハ陸路通行御供之  
面々等へ、精々冗費相省候様可致旨被 仰出候、右  
思召之程銘々厚ク相心得可申候、右之趣万石以上以  
下并御供之面々へ不洩様可被達候、

十二月 日〔貼紙〕「日糺スヘシ」

〔本文書は「玉里島津家史料九」追加一六号六八三頁〕近  
年御国人民も〜と同文なり〕

192 ○十二月十七日、 太守公 国父公御一同、 照国公御  
社殿御建築場御撰定ノ為メ御親臨アラセラレタリ、動  
植館内ヨリ城西南泉院ヘノ門ヨリ御出ナリ、社地ハ南  
泉院郭内本門前ノ広庭、又ハ蓮池等ヲ埋メ御造建地ニ

撰定セラレタリ、則現在山下町ナル 照国神社是ナリ、  
斯ノ如ク 御父子御一同御親臨御撰定アルヲ以テ、御  
尊崇ノ厚キヲ知ルニ足レリ社殿御造建ノ始末ハ文久、  
三年癸亥ノ部ニ詳ナリ、

193 ○御軍艦ニテ來二月 御上洛被遊候ニ付、一旦大坂御城

へ御着城、夫ヨリ淀川御舟ニテ伏見へ御泊、翌日二条  
御城へ被為入候旨被 仰出候、右之趣万石以上以下御  
供之面々へ無洩可被達候、

十二月 日〔貼紙〕「日糺スヘシ」

〔本文書は「玉里島津家史料九」追加一六号六八三頁〕御  
軍艦ニ而來二月〜と同文なり〕

○編者曰、 將軍家上洛入朝ノ大典ハ、今ヲ去ルコト  
凡二百三十余年寛永十一年、將軍家光、  
公入朝以來廢典ナリ、 十余世ノ間廢典  
ナリシカ、今回卒然

勅命ヲ下サレタルニ依リ、幕府ハ止ムコトヲ得ス奉命  
シ布達スルニ至レリ、將軍ハ未タ幼冲本年十  
六歳ニシテ、  
政務悉ク有司ノ議ニ決スルノ際ナリト雖モ、  
勅命ノ重キト時勢奈何ントモスルコト能ハサルニ迫リ  
遵奉セシ者ナリ、茲ヲ以テ幕吏中ニ於テハ頗ル困窘

194

○十二月

日「日札スヘシ」

〔貼紙〕 国父公京都守護職御

拜命ノ文左ノ如シ、

議論分裂、異言喧囂、裁断スルニ人ナク、漸ク一橋・越前二公ノ決ヲ以テ循奉ニ帰シタリトソ、而シテ上洛ノ行粧、諸侯ノ随従等、寛永ノ例ニ準セント云フモアリ、或ハ当時財用匱乏、各藩共ニ疲弊ノ際ナルカ故、時勢至当之準備アランコトヲ建論スルモアリ、交々鼎沸セリト雖モ、遂ニ時勢適宜ナルヘシトノ論ニ帰シ、品海ヨリ汽船ニ搭セラレ、浪花へ直航ト布達セラレタリト云、現今幕府ノ体裁ヲ論スルニ、二百年來花奢驕惰ニシテ尊大鄭重ヲ以テ威望トシ、僭上ノ所為拳テ数フヘカラス、斯ル弊習ナルカ故、寛永ノ例ニ準シ、陸路数十日ノ宿駅又ハ城邸等ニ休泊セラル、トキハ、其経費幾千カ量ルヘカラス、加フルニ大小侯随行ノ費途モ夥シク、或ハ宿駅ノ困頓ニ立至ルハ無論ナルカ故、初ノ布令ヲ變シ、軍艦ヲ以テ撰海へ直航ト布達セラレタルハ、時勢至当ト謂フヘキナリ

大小侯従駕ノ員モ国邑ノ便否ニ依リ、大坂ニ出揃ノ旨モ達セラレタリ、

195の1

〔頭注〕「会津守護職奉命」

京都守護職被申付、御警衛行届 御安心被 思召候、

松平肥後守容江保

195 ○守護職御拜命ニ付、会津公へ御達書左ノ如シ、

然処一藩職ニテハ人心居合モ如何可有之哉、御懸念被遊候、依之島津三郎儀、今般公武御一和之基本ヲ致周旋、為皇国尽誠忠ノ者ニシテ、此以來公武之御為別テ可然被思食、旁別段之

叡慮ヲ以テ断然守護職被命候、於 大樹家尚又

叡慮貫徹候様、肥後守申談相勤候様被遊度 御沙汰候事、

十二月

日「日札スヘシ」

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一九六号とほぼ同文なり〕

196

○御流儀砲術歩兵訓練之儀者、御吟味之訊有之、此涯取止被 仰付候条、御小姓与番頭并成田正右衛門へ申渡、向々へモ不洩様致通達、諸郷・私領へモ可申渡候、

十一月 廿六

日 式部 川上 久美

取次 福崎助八

〔頭注〕「右大臣輔熙公関白宣下」  
197 ○十二月廿三日、近衛関白忠熙公襄キニ

勅約ノ如ク御辞職、内覧ノ

宣旨ヲ蒙ラレ、鷹司右大臣輔熙公関白

宣下アリタリ勅約ノ事実ハ、第三卷 国、父公御献言ニ明カナリ、

198 ○十二月 日〔貼紙〕「日糺スヘシ」、大久保一蔵至急上京ヲ命

セラル、同月 日〔貼紙〕「日糺スヘ」〔脱カ〕発鷹、昼夜兼行、同月

日〔貼紙〕「日糺スヘシ」着京ス、青蓮院宮及ヒ鷹司関白

輔熙公・近衛忠熙公等へ御書翰ヲ以テ御報答、又ハ口

述セシメ玉ヘル趣アリ、

199 ○近衛公御書翰左ノ如シ、

修理大夫殿江宜御伝言可給候、貞姫方へモヨロシク

御申可被下候也貞姫トハ則忠房公御簾中ナリ、御結婚ノ御約、定アリテ、未タ御上京御入興ナキカ故如此、

追々寒気増長候、弥以御揃御勇猛之御事、珍重不斜候、

扱者此度京師守護職之儀ニ付早々御上京之処〔上京之事カ〕、御沙汰ニ

付御伝申入候、高崎佐太郎差下被相成候、何モ御聞取可

給候、先

勅使下向、存外関東之模様モ此処〔有之事カ〕不分明安心之事ニ候、

実ニ御周旋之故ニテ一越出頭〔有之事カ〕故之事、越候処至極ニ相成、

実ニ不分明此上之御上京之儀急々之儀、実ニ何共く御

氣之毒く御迷惑之事御察申入候得共、

勅使上京引統一橋・会津等上京ニ相成モ難計、何卒く

少シモ早方ニ御上京、来月下旬迄ニ御上京ニ相成候様、

偏ニ御頼申入候、色々申入候儀モ有之候得共、差急キ

荒々申残候也、

十一月十三日申刻

寒気専御用心可被成下候也、

島津三郎殿

忠熙

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一七五号・「玉里島津家史料一」三七一号と同文なり〕

右近衛関白之御状、同月廿六日鹿兎島ニ達ス、守護職之

儀此御書ニ見得タル迄也、公然ト御発表ニ相成タルニア

ラス、丁丑之兵乱ニ地中ニ埋メ、文字不分明之処アリ以上

右近衛殿云云、文字不分明ノ処アリ迄、正二位公御書入ナリ、此御書翰ニ対セラレ、左ノ

御返翰ヲ呈セラレタリ、

〔頭注〕「重子御献言」  
今般不容易以

親慮、不肖之小身御用之儀有之、早々上京仕候様

御内命之趣奉拜承、実以武門之冥加無此上、難有仕合

奉存候、就而者不日上京仕候儀当然ニ御座候得共、

毎々申上候通、国許相固度ト之趣意ヲ以御暇奉願届

国仕候、已来夙夜心志ヲ苦メ、海防之手当者勿論、

万般之政事向、精々処置ヲ加へ候折柄、

勅使関東江下向、攘夷之

命ヲ被下候段承知仕候、然者愈以内修外攘之道不相立

候而者 攘夷ノ一大事ハ、内政整理ノ後ニ非ラサレハ不可ナルノ旨、

数回建言セラレタリト雖モ、既ニ 勅諭ヲ発セラレタルニ

於テハ、勝敗利鈍ニ関セス循奉セラル、ハ臣子ノ分ナルカ故、如

此記サレタル者ナリ、実ニ普天下王土ニ非ラサルナシ、斯ク掃蕩

ノ 勅諭発セラレタルニ於テハ、論言汗ノ如シ、設令ヒ嚮キニ獻

言セラレタリト雖モ、事茲ニ至リテハ勝敗利鈍ヲ顧ミス、遵奉セ

ラレサルヲ得サルノ機ニ臨ミ、剩ヘ當時長土水ノ三藩、或ハ浮浪

士等ノ説ニ、本藩ハ開港ヲ主張スルカ故、殊更ニ攘斥ノ準備嚴密ニ

令セラレ、藩力ヲ尽シ国名ヲ穢サ、ルヲ要トセラレ、其策夜ヲ以

テ日ニ次キ、癸亥ノ春末ニ至リテハ殆ント成頓ト云フニ至レリ、  
元來陸海攻守ノ準備ハ、 齊興公 照国公御以來現今ニ至迄、綿々  
怠ラル、コトナク、當時三百有餘大小藩中ニ整理ノ名第一等ニ位  
スト雖モ、茲ニ至リテハ一層嚴整セラレタリ、故ニ宇内ニ横行、  
驕傲ヲ極メタル英国モ、目的ヲ達スルコト能ハス敗走シ、  
タル者ナリ、詳ナルハ前ノ浜戰關ノ部ニ記スルカ如シ、

親慮徹底難仕候ニ付、守禦之術十分ヲ尽シ度差急候次

第二御座候、只今半途ニモ不至発途仕候而者、都而

瓦解之姿ニ相成候者案中ニ而、別而心痛仕候、殊ニ

於敵邑者三分之二者環海之場処柄、且先般江戸出立

之節、於神奈川夷人混雜生麦村ニ於テ英人斬殺ノ事件一条ニヨリ、幕

府御処置被成兼候ハ、敵邑江致廻船候様御達相成

度、左候ハ、生麦村ニ於テ英人斬殺ノ事件、英国政府ヨリ幕府  
へ責論スル旨アリ、幕府ハ本藩ニ向テ頻責スルカ

故、是非曲直論弁スヘキ旨ヲ以テ、慶灣へ廻

航スヘク達セラレンコトヲ申述セラレタリ、

皇国之御瑕瑾不相成様、穩便ニ応接可仕旨及御届置候

処、未御決着モ不相付候得者、自然其通御達相成候

ハ、実ニ 皇国之御大事ニ係リ候儀故、前後当惑罷在候ニ付、何

卒以御憐察、暫時之御猶予海陸ノ守防ハ底分整成シタリト  
雖モ、當時ノ形勢上ニ就テ、暫

時ノ御猶予ヲ願、御前ヨリ御執成被成下度、伏而奉懇願候、

大抵今三四旬モ経候得者、治定之方ニ相向可申候間、

来正月中二者発足可仕候、尤、不容易大事之御時節

ニ当リ、奉蒙 重命候上者、其実相叶被為安

宸襟候様無御座候而者、屹度不相濟儀ト、只今ヨリ始

終之定策相立置度、昼夜忘寝食苦慮仕候、抑

皇国危急之節ニ臨ミ、忝モ

聖明之御英断ヲ以非常之大業ヲ被為創、殆成就之時機

二至リ、上被為対

皇祖、下万民之為メ千載不朽之御偉徳、誠以難有奉存

候得共、兎角自古有始無終成功ヲ遂ケ不申儀、和漢

其例不少候得者、乍恐以往之処、益深謀熟慮、屹度

衆口ニ無御動揺長土二藩士及ヒ浪人等、激説ヲ以テ公卿方ヲ脅

リ、様、御卓識被為立候儀肝要奉存候、既ニ攘夷之命

令被為下候上者、論言不可返之道理ニ而、自ラ於幕

府奉行有之筈ニ候得者、来二月 大樹公御上洛相成

候而者決而不可然儀ト奉存候、右事件左ニ奉申上候、

弟一攘夷之儀、假令三五年之期限ヲ定候而モ、實地

勅意奉行有之、其術ヲ施候場ニ至リ候得者、尋常之手

当ニ而者中々六ヶ敷、尤、彼ヲ制禦スル実備無之候

而者、我ヲ固守致候儀決而出来兼候得者、甚至難之

訳ニ御座候、寛急之次第者有之候而モ、攘夷決定之

上者、即日ヨリ各国寸陰ヲ惜ミ必死ニ磨励、海陸軍

十分不行届候而者、時機ニ後レ候儀必然ニ御座候得

者、上洛相成不可然奉存候、弟二二者、当分幕府変

革之初、人心紊乱、物議騒然之砌、暫時タリ共其猖

獮之夷人ヲ膝下ニ乍養、江府ヲ空城ニ致候儀不可然

奉存候、弟三二者、攘夷決定之上者列藩之侯伯在城

致シ、海防守禦之策專要ニ而、畢竟參勤猶予之新令

モ不外候処、上洛ニ付而者先規モ有之、大藩上京仕

候儀不可然奉存候、弟四二者、近年諸色沸騰、四民

困窮之折、如何様易簡之令ヲ布候而モ、 大樹公御

上洛ト申候得者、駄々奔命之疲勞不少候、弟五二者

右ニ付各藩士在京銘々及建議、衆口囂々一和之道相

立兼、御取捨之上二者或者恨ミ或者憤リ、其害不少

候、弟六二者、変革之時ニ当リ、正邪進退等ニ而小

人俗吏之徒ニ至リ候而者、私怨ヲ含ム者ニ候得者、

如何様邪心ヲ包藏シ、密ニ夷賊ニ応シ、上洛之虚ニ

乗シ不軌ヲ図リ候者有之モ難測御座候、攘夷被仰出

候上 大樹公御上洛之害將軍幼冲ニシテ大小ノ政務有司ノ

ルモ有名無実ナ所決ニ出ルノ際、上洛 朝議ニ列

ルヲ以テナリ、右通ニ候得共、於幕府者二百年來之廢

典ヲ起シ、君臣之大礼ヲ正シ、天下之人心ヲシテ尊

王之道ヲ知シメ候儀、至当之訳ニ而、今ニ至リ幕府ヨ

リ願立相成候而者人心之折合ニモ相係リ、大礼ヲ欠

候場ニモ当リ可申候間、前条之訳天下ニ示論シ、暫

199の3

上洛猶予有之候様、左候而、一橋・越前之間、名代上京之儀者不苦旨、

勅命ヲ以御達有御座度乍恐奉存候、幕府於内情者別而

大幸ニ時勢止ムコトヲ得スシテ奉 勅上洛ヲ発シタルカ故、猶予ヲ命セラレシニ於テハ実ニ幸ナルヤ論ナシ、可

奉存、且尊

王之道者、外ニ時世相当可奉施行件々余多可有之候得

共、只今ニ至而者先以攘夷実行之処、尊

王之一大急務ト奉存候間、何分早々御評議之上、速ニ

被仰出候様御座候得者、実ニ

皇国之御為無此上大幸ト奉存候、

右者実以重大之事件ニ而、小臣恐懼之至ニ奉存候

得共、篤ト勘考仕候処、不容易時節黙止罷在候而

者、却而不忠ト奉存候間、不顧多罪愚慮之趣、家

臣大久保一藏ヲ以奉獻言候、〔誠脱力〕誠惶恐頓首敬白、

十二月 日〔單紙〕「日糺スヘシ」鳥津三郎

〔本文書は「玉里鳥津家史料二四二九号と同文なり」

一 青蓮院宮尊融法親王様御還俗之一条、先般モ奉願候得共、

非常之御事ニ候得者御評決御六ヶ敷儀ト奉存候、乍

併不容易時世、天下有志之人心奉帰嚮

御方ニ被為在候得者、何卒出格之訳ヲ以、御還俗之

儀此涯被仰出候様、偏ニ奉願候、左様御座候ハ、

宮様ニモ猶又御奮励、御大政之御為別而可然御事ト

乍恐奉存候〔大塔宮カ〕當時青蓮院宮ヲ稱シテ大塔宮ニ比シ、衆望大ニ帰ス、然リト雖、法門ノ御身陽ニ朝議ニ参写シ玉フコト

能ハサルカ故、御還俗アランコトヲ献言シ玉ヒシ者ナリト云フ、

○因ニ記ス、當時一般唱フル言ニ、青蓮院宮ヲ大塔宮ニ、近衛忠照公ヲ藤房卿ニ、国父公ヲ正成ニ、

長州侯ヲ尊氏ニ比シタリトシ、〔大塔宮カ〕

一 松平相模守〔頭注〕一容堂公政事参号献言一慶徳、水戸齊昭公

席二而一橋・越前ヲ輔佐シ、政事向奉関係候様被仰

出度奉存候、尤、相模守二者一橋兄弟ニモ有之、殊

ニ徳川家御家門之列ニモ御座候得者、子細者無之筈

ト奉存候、容堂儀者外藩之事ニ御座候得者、評決六

ヶ敷可有之候得共、方今之世態、例格ニ不拘登用有

之候様、分而被仰渡御事ト乍恐奉存候、

一 別紙申上候、大樹公御上洛之発端者、先度

勅使大原卿関東御下向之節、三ヶ条之内其一ヲ奉行可

有之ト之

御内命有之、其趣早ク関東江相洩、一橋・越前出頭相

成候而者不可然ト之儀ニ而、専ラ安藤信・久世通之私計ヲ以、速ニ御上洛ヲ發シ候由、就而者

叡慮尊奉之実意ニ無之、心術者一橋・越前之出頭ヲ忌ミ、

勅命ヲ奉拒候奸謀ニ御座候、且又只今サヘモ東海道駅々人馬之差支不一方、内実者愁歎之声路傍ニ滿候向ニ相聞得申候、今般御上洛之入費、凡ソ八拾万兩之賦ニ伝承仕候、誠ニ莫大之失賊(失財カ)ニ御座候間、右ヲ全ク武備充実之方ニ被振向候ハ、第一攘夷之叡慮奉行之基本ニ可有之ト奉存候、

右者重畳奉恐入候得共、存付候間書添奉備高覽候、以上、

〔本文書は「玉里島津家史料」二四三五号と同文なり〕

右、近衛殿御書翰ニ对セラレタル御返書ニシテ、當時ノ形勢ニ就テ胸臆ヲ掃シ、暢申セラレタル者ナリ、御書中要点六目アリ、第一目ニ攘夷之儀、仮令ヒ三五年ノ期限ヲ定メ候而モ云云、則チ出テ制スルノ勢ヲ我ニ有セサレハ守禦至難ナルハ、今春来

朝廷幕府へ建論セラレ、兎角内ヲ整へ富強ノ二字ヲ下スノ時ヲ俟チ、而シテ積年ノ

叡念発布セラルヲ以テ順序トセラレシニ、豈ニ凶シ、衆諸侯ノ意見モ諮問セラレス忽卒鎮攘ノ

詔ヲ下サレタルハ、恐コクモ無謀無算ト謂フニ外ナシ、第二目、將軍上洛ヲ急促セラレタルハ、其機ヲ誤マレル者ニシテ、將軍家ハ未幼冲、大小ノ政務悉ク有司ノ議決ニアルハ言ヲ俟タス、然ルニ二百年來廢頽ノ大典ヲ拳シニハ、其經費幾千カ知ルヘカラス、從テ大小ノ侯伯・吏員ノ付從モ少々ナラス、其費用巨万ニ及フハ論ナシ、或ハ宿駅人馬ノ疲勞モ亦寡ラサルヤ明カナリ、今ヤ久シク昇平ノ化ニ浴シ、花奢驕惰ノ世風一旦タニ除却シ得ヘカラサルハ、古今ニ徴シテ見ルカ如シ、其經費ヲ軫シテ軍備充実ノ用ニ宛ルヲ以テ、策ノ尤モ得タリトスルハ多弁ヲ要セス、又將軍上洛アリテ鎮攘ノ策略ヲ自ラ議シ自ラ奏シ得ルノ將軍ニ非ラス、真ニ有名無実ト謂ヘシ、然ルヲ

朝廷是ヲ知ラサルニ非ラス、知テ而シテ促ガサル、ハ、是ヲ何トカ謂ハンヤ、洵ニ抑圧ノ甚シキト謂フヘキナ

り、是レ全ク真ノ

天意ニ出タルニ非ラス、一二藩論或ハ無頼浮浪輩ノ黠謀

ニ出テ、

天意ヲ矯シタルモノナリ、茲ヲ以テ 国父公ハ肺肝ヲ叩

カレ、斯クノ如ク要目ヲ挙テ、重テ建言セラレタリト

雖モ、時勢奈何ントモスルコト能ワサルハ、御建言ノ

趣水泡ニ帰シ、近衛殿ヲ初メ中山・正親町等ノ諸卿モ

力ヲ竭サル、ノ途ナク、歎息憂悶口ヲ噤マレシトナン、

然リト雖モ百万苦心セラレ、如何ニモシテ 国父公ノ

御建言ヲ暢達セラレント、大久保一藏ニ東下ヲ命セラ

レ、一橋・越前ニ公ノ竭力ヲ求メ玉ヘリ、大久保ハ直

チニ東下シ、ニ公或ハ閣老ニ謁シ種々論談ニ及ヘリト

雖モ、ニ公モ力ヲ容ルノ途ナク、唯々憂嘆セララル、ノ

ミナルカ故、空シク帰京セリ、斯ル形勢ニ陥リタルカ

故、近衛・中山等ノ各卿ハ、 国父公速ニ御上洛、

朝議ヲ一変シ、過激ノ徒ヲ退斥シ、而シテ完全ノ策ヲ建

ラレントコトヲ冀望セララル、ノ一点ニ止マレリ、実ニ危

殆ノ世態ニ切迫セリ 此時真ニ愛國ノ者ハ、 国父公速ニ御上

洛、寛猛ノ御措置ヲ冀望スル者多シ、

200

○十二月 日「日札スヘシ」<sup>〔貼紙〕</sup>達、松平容堂<sup>土州</sup>御用之都

度〳〵登城、御相談之儀モ可有之御政事向ニ付、存念

無嫌疑言上可被致候、右老中演達之 容堂公ハ当時大小各侯

安政六「己未」ノ年、春嶽公其他ト同シク譴責ヲ蒙リ退隱セラレシ

二、今回斯ノ如ク鳥取侯ト共ニ奉命セラレタルハ、 国父公御献言

ニ根シタル者ナリ、〇鳥取侯（慶徳）ハ水戸烈公ノ第五子ニシテ、

幼名五郎麻呂ト称ス、烈公ノ志ヲ継ヒテ尊 王ノ道ハ素ヨリ当時名

望アリ、故ニ容堂公ト双ンテ、

建言セラレタルモノナリ、

○同日達、松平相模守御用之都度〳〵登城、御用部屋へ

モ罷通、御政事向相談モ承、存意被申立候様可被致候、

右老中演達之、

○右ノ如ク、容堂公ニモ政事参預ノ命ヲ奉セラレ、一

橋・越前ノ両公ト議セララル、ニ、当時 国父公ハ天下

一般仰望シ、特ニ

朝廷ノ御覚モ浅カラス、加之国威海内ノ一二位シ、貴賤

欣望スル処ナルカ故、此時ニ方リテハ御尽力ヲ仰カ

ル、ニ外ナシトテ、越前公ヨリモ御書翰ヲ以テ御上京

ヲ勸メラレ、容堂公ヨリモ同シク御細翰ヲ贈ラレタリ、

左ノ如シ 此時迄ハ容堂公トハ未御一面会、

○此時京師ノ形況ハ、長土水三藩及諸浪士洛中ニ蟻集シ、

公卿方ヲ脅迫シ鎖攘ノ激説ヲ立、或ハ將軍上洛、又ハ

一橋・越前両公ノ上京ヲ急促シ、加之横暴ノ所為少カラス、人心恟々今ヤ兵馬ノ街ニ変セントスル勢ナルカ

故、青蓮院宮及ヒ近衛・鷹司ノ両公大ニ憂慮セラレ、將軍上洛ハ本年夏六月十日、国父公関東ニ於テ閣老脇坂中

務太輔殿へ就テ御建言ノ如ク、急速ナルヲ好マセラレス、上文ノ如ク今ニ至リテモ 国父公ノ御建言ヲ以テ

良シトセラルカ故、大久保ヲ関東ニ下サレ、大久保ハ橋越両公ニ向テ寛急ノ順序ヲ立、種々上陳スト雖モ、

既ニ

勅詔循奉、

勅使モ帰洛ノ後ナルカ故、両公如何ントモスルニ道ナク、

此上ハ

叡慮ニ委セ奉ルニ外ナシトノ事ナルカ故、大久保モ力ニ

及ハス帰京、事情復申ニ及ヒシカハ、此上ハ 国父公

速ニ御上洛、鎮撫ヲ仰カル、ニ外ナシトテ、青蓮院宮

及ヒ近衛・鷹司ノ三公ヨリ各御書翰ヲ以テ御上洛ヲ促

サレタリ、青蓮院宮御書翰左ノ如シ、

〔貼紙〕青蓮院宮御書翰記載仕度

〔貼紙〕不見当

○鷹司公御書翰左ノ如シ、

〔貼紙〕不見当

〔貼紙〕鷹司公御書翰記載仕度

○春嶽公御書翰左ノ如シ、

201の1

尚々当地之様子者、猪太郎

〔貼紙〕高崎猪太郎、後五六ト改ム

ヨリ委曲

可被申上候間不贅候、只々御上京、万事

朝廷之御周旋可被成候、以上、

未得拜顔候得共一書呈研北候、先以益御安全可被成御坐

奉遥賀候、方今天下之形勢足下委曲御承知之通、実安危

之機会此時ニ御坐候、来春者

大君ニモ御上洛、彼是ニ付足下モ御上京可相成、於関東

ハ春岳初

皇国之御為筋日夜苦心仕候得共、依頼仕候者無之而者大

事件独力ニ而者決而成功之定見無之、何卒足下御上京之

上ハ御互ニ尽力、

日本之国是如磐石仕度、是奉対

聖天子候赤心ニ御坐候、先ハ右等之義大略如此御坐候、

書外奉期面尽候、

十二月朔

松平容堂再拜

島津三郎君

座下

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一八四号・「玉里島津家史料」三九二号と同文なり〕

201の2

一 翰致陳啓候、嚴寒之節ニ候処、愈御清安珍重存候、陳者爾後殊之外御疎遠罷過、不本意千万存候、拟御帰国之後モ天下之形勢、廟堂之光景モ種々転換有之、何分危急切迫之秋ト相成、

天使御下向、降

勅之御次第モ不容易事共ニ有之候、乍併天下之人心如当

今義方ニ向ヒ致奮發候義者、二百年來希有之盛事ニ而、

乍恐

聖明之感動被為成候所ニ候得者、此時ニ当リ

皇国之衰運挽回無之而者、万歳ヲ経候而モ其期有之間敷

ト不堪激励候得共、兎角不才非力不行届而已ニ而恐惶不

少候処、近來容堂モ登城被仰付、廟議參予ニ相成候故、

大ニ力ヲ得、精々粉骨罷在候、

御上洛モ愈來々月御決定之事ニ而、其節者御宿望之通、

〔朝廷方〕 幕府之御親睦御熟調ニ不相成候半而者、是亦相濟

不申訳ニ候得者、

京師之御都合ハ甚不案内之義ニ而目途モ相定兼、痛心此

事ニ御坐候得者、此際之御周旋ニライテハ、偏ニ賢兄之

御鼎力ニ無之而者決而行届申間敷ト申談候事ニ候処、曾

而御上

京被成候様

御内旨モ有之哉ニモ致承知候得者、旁御賢勞ニ者候得共、

御支度次第一日モ早ク御上

京相成候様致企望候、左候得者容堂申合セ、從是モ上

京イタシ、於

輦下及御熟談、

官武之御合体之基本モ

皇国万安之大計モ粗商議ヲ極メ候而、御上

洛ヲ御待受申上候様仕度儀ト存候、尤、容堂申談候次第、

此地之形勢等ヨリ、総而猪太郎之口上ニ譲リ不及委細候

間、御聴取相成候様所仰冀ニ御坐候、何分ニモ此機會者

千歳之一遇ト被存候得者、唯々御上京、再度之御尽力御

坐候様、

皇国之御為ニ翹望依頼罷在候、且又高崎・岩下〔貼紙〕「方」平・

吉井之三士、先般以来精忠尽力不容易周旋共ニテ、暗ニ幕政之裨益ト相成候義モ不少、重畳感荷之至候得者、可然御褒詞モ被下候様、於劣生所希御坐候、楮余之心緒者来春之〔面晤カ〕面晤ヲ期シ、出仕前草々布字如此ニ候、謹言、

十二月朔日

松平春嶽

島津三郎様

二白、時下御自愛致専企候、只々本文之趣宜御聽受所希候、已上、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一八五号と同文なり〕

此ノ御書翰ニ対セラレ、十二月廿八日ヲ以テ御報書左ノ如シ、

当月朔日十二月朔日之芳墨致拜読候、先以テ余寒之砌御座

候得共、愈御安泰被成御座奉恐賀候、然者方今天下之形勢転換之次第、細詳御示諭之趣一々徹肺腑致拜

承候、実以閣下并土州老容堂君御尽力之故ニ、

皇国之衰運挽回之機会ト相成、感服不少奉存候、猶明

春者御両君一橋・越前ノ両公御上京、官武御親睦、夷狄掃攘

之策略等御評決ノ訳ニ付、小生モ早々致上京候様来命之趣致承知、愚魯鄙拙之小生、井蛙之見ヲ以廟堂

之大計ニ致關係候儀〔恐懼カ〕恐縮不少、殊ニ先般於京師滞留仕候様 御内命モ奉敬承候得共、当時之世態兎角富

国強兵之計略ヲ尽シ、醜夷掃攘之大本相立不申候而者不相濟儀ト奉存、再三愚意言上仕、乍漸

勅許相成致帰国候次第ニ而、則ヨリ修理太夫申合、右之術計嚴密行届候様致尽力候得共、何分於〔敵邑カ〕敵邑モ儉

安因循之風習急速变革致シ難ク、実以心配罷在候、

然処再上京致候様類ニ 御内命致拜承候得共、迅速致發途候儀当然之事ニ御座候得共、前文富強掃攘之

実事、未十分ノ一二モ不至致發途候而者、是迄之儀都而画餅ニ相成候訳故進退難決、大ニ致当惑罷在候、

且修理太夫參府、是迄每度御猶予奉願候末ニ而、此上難奉願御座候得共、右次第迪モ兩人一同発足致候

而者、乍恐攘夷之

叡慮ニモ不相叶哉、千思万慮不安寢食致苦心候、就而

202 ○十二月日詳ナラス、達、琉球通貨鑄造資料ノ銅、欠乏ナルヲ以

〔本文書は「玉里島津家史料二」四二二ノ一号と同文なり〕

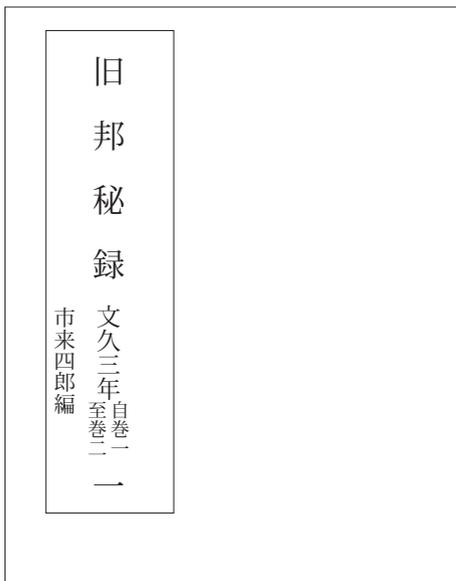
御宥捨奉願候、以上、  
上京拝顔之上万事可申上候、国事繁雜乱毫、偏ニ  
而過激之議論申上候儀ト恐縮ノ至リニ奉存候、尚  
之者共周旋之儀ニ付、御懇篤被仰聞致承知候、決  
二白、御端書委細致拝承候、且又家臣岩下外二人

修理太夫参府御猶予之 御内命モ有之哉ニ伝承仕候  
得者、何卒右ノ幕命相下リ候様御周施奉希候、左様  
御座候得者、小生上京之途速ニ相運ヒ、御両君御上  
京ノ節、御評議之末席ニ相連リ候儀相叶可申、旁別  
而難有仕合奉存候間、小生苦心之情実篤ク御汲取、  
土君容量被仰談、宜御執成之程偏ニ奉歎願候、幾重ニ  
モ自由千万ノ至、御心底之程モ難計候得共、不得止  
存慮無伏藏申上候、先者御請旁奉呈愚札候、以上、  
十二月二十八日 島津三郎

松平春嶽様

203 ○十二月廿八日、歳暮拜賀ノ御式受ケサセラレタリ、先  
規ノ如ク御一門四家及ヒ大身分其他諸士登城、 太守  
公御出座アラセラレタリ、去ル庚申三月御参府ノ御途  
中井伊直弼  
横死ノ際御発病、御引返シ御帰国ノ後チ、年頭・歳暮  
其他佳節・朔望ノ御出座モ停メラレシニ、来年首ノ拜  
賀受ラルヘキ旨布達セラレタルニ依リ、一同安堵ノ思  
ヲナセリ、

旧邦秘録五編文久二年之七終



〔扉に、表紙の文字の外に「久光公御加筆」(紙数一〇三枚)の記載あり〕

旧邦秘録卷之一

文久三年癸亥 ○清曆同治二年  
○西曆千八百六十三年

紀元二千五百二十三年

孝明天皇 第百廿  
世統仁即位十八年

將軍家茂公 第十  
世襲職六年

忠久公 第一 受封 八十二世 後鳥羽  
世 天皇文治二年丙午 六百七十八年  
茂久公 第二十 知政六年  
九世

204 ○正月元日、本日ヨリ十五日ニ至マテ年首ノ御式執行セ

ラレタリ、独礼家格ノ人々ハ着服素袍・烏帽子、其以

下諸士ハ従来ノ正服 麻上ヲ用ヒタリ、○ 太守公ハ御 〔忠義〕

本丸、〔久光〕国父公ハ二ノ丸ニ於テ慶賀ノ御式受ケサセラ

レタリ 昨年十二月十六日ヲ以テ布達ノ如ク、独礼家格ノ人々ハ素  
袍・烏帽子着用、烏帽子ハ烏津折用フヘシト令セラレタリ、

如何ニモ端正雅風ニシテ復古ノ一ナリト咸人感悦セリ、○烏帽子、  
製造ハ甲冑製作所ニ詔タリ、同局ハ許多ノ製造昼夜兼業セリ。

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二〇四号と同文なり〕

205 ○正月六日、本日例規ノ如ク砲術館ニ於テ歩砲二兵ノ操

練及ヒ軍神祭典執行セラレタリ、御名代島津讚岐 貴殿

ナリ、○昨年十一月七日ヲ以テ軍制改革ヲ令セラレシ

ニ依テ西洋式ノ操練ヲ熄メラレ、御家法ノ軍制ヲ基本

トシ、和漢洋大成ノ隊伍ニ編制シ操練ヲナサシメラレ

タリ、野戦砲隊ノ操練ハ 洋式従来ノ如シ、出役ノ人員等

ハ先規ニ異ナルコトナシ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二〇九号の一部と同文

なり」

206 ○本年々首ノ礼式ヨリ、麻袴又ハ羽織袴等着服勝手タル

ヘキ旨令セラレタルニ依リ、多クハ羽織袴着服ノ者多  
キニ変シタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二〇号と同文なり〕

207 ○本年々首御謡初ノ御式モ廢セラレタリ、

208 ○旧臘発布ノ幕令ヨリシテ一般平服上下一名継キ上下又ハ継  
肩衣トモ通唱ス、

ヲ廢シ、羽織袴・紺足袋等勝手ニ着服スルコトナレ  
リ、依テ本藩ニ於テモ重立タル御使者等ニモ襠高袴・

割羽織一名鞭指羽織  
トモ云フ、等着服セリ、又供人数モ減シ、閣老

ハ勿論大小名其他幕役乗輿ノ人ナク乗馬、或ハ服ハ熨  
斗目・長袴モ廢シタリ、○本藩ハ殊ニ質朴儉素ノ風俗

ニ復セラレンノ尊旨ナルカ故、綿布ノミヲ用キ、寸片  
ノ絹帛ヲ用ルヲ得サルノ嚴令ヲ布カレ、幕令ヲ俟スシ

テ儉素ナリ、斉興公 斉彬公ヨリ連綿質素ノ令ヲ布カ  
レ、当今ニ至リ尚ホ嚴令ヲ布カレタルカ故、殊更ニ儉

素ノ風行ハレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二一号と同文なり〕

209 ○正月十一日、先規ノ如ク諸役人昇級転遷、或ハ地頭職

転換ヲ命セラレタリ人名略、○当番頭御用人兼務相良治〔長  
卷〕

部琉球国在番奉行ニ拜シ、伊集院静馬へ交代ノ命ヲ奉  
ス、

210の1 ○正月十三日布達、

琉球通宝 但、裏ニ当百ノ文字ヲ記ス、

右者琉球国為通融、公義江御届之上鑄造被仰付候ニ  
付、御領国中之義モ通融被仰付候条、壹枚ニ付百弍拾

四文ニ而、今日ヨリ御蔵々入払者勿論、諸人取遣候様  
被仰付候、此旨支配中江申渡、奥掛・表方江茂相達、

諸郷・私領江茂可申渡候、

正月十三日 式部川上  
久美

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二五ノ一号・「名越

時敏史料一」三三三頁「琉球通宝」・「市来四郎史料

一」二三四頁「琉球通宝」〕と同文なり〕

横浜其他開港以来金銀貨幣ノ濫出甚シキカ故、内国融通ノ道塞リ、価格日二月ニ騰貴シ、民庶困頓ニ迫マレリ、然ルニ本藩ニ於テハ、琉球通宝鑄造ヨリシテ商工共ニ融

通滑沢、上下大ニ弁益ヲ覺ヘタリ 琉球通宝一枚ハ資料及ヒ職工

文許ヲ以テ元費トシ、而シテ布達ノ價格ヲ以テ融通スルトキハ、其利益凡八十六文内外ノ算ナリ、大利ト云フヘシ、当百ノ文ヲ以テ通融スヘキハ無論ナリト雖トモ、天保通宝ノ價格本藩ニ於テ寛永通宝ト交換スルニハ百二十四枚ノ時価ナルカ故、琉球通宝ト重量モ同シ故ニ同価ノ交換ニ令セラレタル者ナリ、○此製造ヲ開カレシヨリ一般ノ融通潤滑、米価高直ナリト雖トモ困頓ノ声ナシ、細民ハ職工ノ業ニ従事シ、日二三千余人ノ工人ヲ任役スルカ故ナリ、其他集成館火柴製造局砲台修造等ノ、工事多忙、役夫ヲ要スルコト夥多ナリ、細民ノ生計頗ル安泰ナリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二五ノ二号と同文なり〕

211 ○正月十九日、 太守公未ノ刻過御本丸御乗出シ、擊劍

師範加藤権兵衛カ宅ヘ入ラセラレ、擊劍法御覽アラセ

ラレタリ、俄然御入りニハ加藤ハ勿論門生中驚愕一方

ナラサリシトソ、 太守公ハ天真流則チ加藤カ劍法御

学ヒ、当時御修行中殊ニ現今劍槍ノ術御奨勸、御躬自

ラ御勉強ナルカ故卒然御向臨、門生等カ勤惰御親視ア

ラセラレタル者ナリ、奉從ノ輩モ悉ナ馬上、其人員僅

十名ニハ過キササルナリ、而シテ後口追ヨリ鳥越坂御乗

越シ礮ヘ御出、琉球通宝鑄造局ヘ入ラセラレ製造等御

覽、而シテ集成館ヘ御入り館中御巡覽、而シテ御帰途

ハ田之浦通、〔祇園カ〕祇園砲台御覽、日没ノ頃御帰城アラセラ

レタリ、鑄錢局・集成館何レモ卒然ノ御入りナリシカ

故、局吏等驚愕狼狽セリ、如此卒然御親臨勸奨セラル

ニハ其業自ラ進涉セリ、本日奉從ニハ御小納戸見習岸

良七之〔兼養〕丞ヲ初メ御小姓等七八名、或ハ御先乘川上十郎

左衛門等十余名ナリ、

212 ○正月十五日、 太守公川尻調練場ヘ御出馬、両御旗

本・御先手・両御城警衛等ノ諸隊操練ヲ催サレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二六号と同文なり〕

213 ○正月廿日布達、

〔忠義主〕暉姫様 寧姫様明廿一日御着之筈候条、当日御手当向

之義共於向々無手拔様可取計候、此旨可申渡候、

正月廿日 式部川上

久美

214 ○同日達、御着当日之次第布達セラレタリ〔次第書、略ス、〕○両姫

君昨年 月 日〔貼紙〕「日糺スヘシ」江戸邸御発輿、伊勢御  
参宮或ハ京都御立寄、諸名勝ノ地或ハ神社御参詣等モ  
アラセラレタリ、

214の1  
○暲姫様

寧姫様明後廿一日御光着ニ付、諸士之儀者千石馬場御  
通路筋へ刻限前以罷出、御光着後登城、御帳ニ相付  
太守様  
三郎様へ御祝儀可申上候、

正月十九日 式部川上久美カ

214の2  
○暲姫様

寧姫様明後廿二日四ツ時伊集院地頭仮屋御立、諸所御  
休ニ而御行掛、未下刻頃 御光着之御賦之段申来候、  
此旨向々へ可申渡候、

正月廿日 式部川上久

215 ○正月廿二日未ノ刻、 暲姫君 寧姫君御機嫌克御着ア

ラセラレタリ、廿日伊集院苗代川へ御着、廿一日御着

ノ予定ナリシニ、 寧姫君少シク御所旁、同所へ一日  
御滞留アリタリ、 暲姫君ニハ御母公〔斎彬等〕 芳樹院殿御遣  
伝ノ朱唐傘等御行列ニ備へ、其他御乗輿等美麗ニシテ  
拝観ノ者目ヲ驚セリ、御通街水上ヨリ西田町・千石馬  
場筋・枅形・二ノ丸下通、御台所門ヨリ御入城、数十  
町ノ間拝迎ノ男女老幼夥シ、○当時乱兆目下ニ迫レル  
世態ナルカ故、都会雑沓ノ地ニ御座アリテハ危殆ナル  
カ故、成人安堵ノ思ヲナセリ、

216 ○正月廿一日布達、御城下六組与替ノ令左ノ如シ、

高見馬場ヨリ西北 一番組

新上橋ヨリ草牟田村・常盤方限・西田村 二番組

高見馬場ヨリ東南 三番組

高麗町・荒田村・中村 四番組

以上三組〔下〕下方限

豎馬場ヨリ西南 五番組

豎馬場ヨリ東北 六番組

以上二組上方限

右通、御城下六組方限被相替候条、此旨表方江致通達、

奥掛・御勝手方江茂可相達候、

正月廿一日 式部川上

右ノ如ク従来ノ組区改正セラレタルハ、毎組区域ノ分界錯雜混淆シ、隊伍編制伍什ノ組織ニ就テ障碍アルヲ以テナリ、○抑モ御城下御目見以上ノ士・御家老組、或ハ六組ニ組織セラレタルハ、今ヨリ二百廿四年前寛永十七年十二月、光久公第十御城下士ヲ分テ十隊ニ

組織セラレタリ、旧記ニ曰、光久分城下士而為十隊、〔命之カ〕今之一番組・二番組、毎組定隊長曰組頭、其下受令而

伝旨于隊中者曰小組頭、外置一隊為家老組、令島津彈

正久慶・島津図書久通長、補家老〔行カ〕組職者列之、隊下之

士〔者十隊無異カ〕与十組無、其外有寺社家組、有諸役座組、十組之外

十六組〔都定二十六組カ〕都而二十二組也、所謂一番組頭島津安芸久雄・

新納四郎久辰、二番組頭島津市正忠弘・佐多〔又四郎カ〕又太郎久

孝、三番組頭桂又十郎忠心・吉利下総忠張、四番組頭

島津左近久守・樺山又九郎久尚、五番組頭町田出羽忠

尚・種子島左近忠時、六番組頭伊集院源介久立・島津

美作久基、七番組頭伊集院右衛門久国・川上上野運久、

八番組頭〔彌寝カ〕称寝七郎重永・川上将監久将、九番組頭鎌田

又七郎政由・入来院伯耆重高、十番組頭伊勢兵部貞昭・

島津中務久茂也、於是令速〔所脱カ〕於置郵〔写脱カ〕伝、命内整外備矣、

而シテ後正保三年合二十六隊而為七隊〔也脱カ〕及自一番組至

六番組、外置家老組云云、又曰ク御家老組被相建、御

家老島津彈正久慶・島津図書久通ニ被仰付云云〔御役源記、二抛ル〕

之ヲ御城下組区組織ノ初トス、是ヨリ曩キ出水郷二創

始セリト云フ、

○組織ノ時令スル処左ノ如シ、

寛永十九年十二月十三日ヲ以組々衆へ被仰出条々、

一一組之衆組頭之下知背問敷事、

一從組頭可被申付儀有之時、氣任之輩於有之者、曲

事可被仰付事、

一御出陣或者在江戸或者狩等之儀可被仰付時、異儀

申問敷事、

一喧嘩・口論・口事等出合候ハン時、組頭へ可申入、

遅々致問敷事、

一訴訟其外申分之儀、組頭江尋候而公義〔藩庁カ〕へ可

申出事、

○又同日被仰出条々、

一組中野心不忠之者可有之時者、早々可被致言上候、

若組頭油断ニ而於不申上而者、組頭并談合衆同意之心底タルヘキ事、

一与中江喧嘩・口事出合候者、早速寄合致談合可為相濟事、

一御奉公方之儀談合ニ而与頭ヨリ可申出事、付、出物首尾之事、

一作病其外御奉公方之難決申シ、氣任之輩於有之而者、以談合致言上、曲事ニ可申付事、

一組中ニ鬼立志端宗并一向宗於有之候者、致糺明言上可申事、

一組中於緩者と頭談合衆越度タルヘク事、一訴訟其外（申分カ）申合之儀、与頭江尋不申候而氣任ニ公

義（藩）江雖為申出、受付申間敷候間、可有其心得候、（事脱カ）以上、

右令（各条ヲ以テカ）条ヲ組織ノ初トシ、治乱共ニ維持ノ法令細大遺漏ナシ、而シテ正保三丙戌 月 日「日札スヘシ」、更ニ

又御家老組一与ヲ増置セラレ、而シテ天明六丙午七月、組頭ノ名唱ヲ罷メ御小姓与番頭ト改唱セラレ、今ニ至

テ其名唱タリ、○上文ノ御家老組トハ国老ヨリ百事直

接ニ示達シ、布令書等ヲ達スルハ大身分触役ノ小吏ヲ置カレタリ、○大番頭ノ職ハ初メ大御番頭ト唱ヘタリ、

此職ハ安永九庚子七月創設セラレ、同六年丙午十月大番頭ト改唱シ、小番・新番（新番ノ格式此時創設セラレタリ）・一代小番・

一代新番（上ト同時ニ創設セラル）等ノ支配ヲ令セラレタリ、○斯ノ如ク御家老組及ヒ小番・新番・御小姓組・与力等階級

アリテ、各頭職ヲ置キ治乱共ニ維持シ、治ニハ文武忠孝ノ道ヲ奨励シ、百事勸懲ノ權ヲ有シ、乱ニハ一隊ノ

長トナリテ鋒鏑ノ下ニ立ツノ重職ナリ、故ニ創設ノ時ハ公子ノ中ヨリ任セラレ、或ハ門葉ノ中衆望ノ属スル

人撰任セラレタリ、今ニ至リテモ門閥ノ中ヨリ撰択スルコト古ニ異ルコトナシ、然リト雖昇平ノ流弊モ又少

カラサルカ故、弘化ノ初 斉興公軍事改革セラレシ時其弊一洗セラレ、尋テ 斉彬公文武勸奨ノ際ヨリ嚴ニ

其規則ヲ設ケラレ、而シテ今回ハ殊更宿弊ヲ匡サレ、其任ノ適否ヲ精査黜陟セラレ、時勢適當治乱二ツナカ

ラ便宜ヲ謀リ、毎組ノ区域改革セラレタル者ナリ、○此時ニ方リテ調査シタル戸口左ノ如シ、

御一門四家及ヒ一所持二十二戸、一所持格四十一戸

家格一所持ノ格五カ、寄合六十四戸、寄合並十戸、無格二戸  
ナルヲ云フ、龜山ノ山、小番七百六十戸、新番二十四戸一代小番、一  
田ノ二戸、代新番ハ御小

姓与ノ内ニ、御小姓組三千〇九十四戸、総計四千〇二  
十戸、〇毎組ノ戸数ハ左ノ如シ、一番組戸数五百三  
十七戸、〇二番組五百十九戸、〇三番組六百四十六  
戸、〇四番組四百二十四戸、〇五番組四百九十二戸、  
〇六番組四百七十六戸、人口ノ数ハ軍賦ノ条ニ記ス

カ如シ、〇御一門四家及一所持以下寄合並・無格等  
五級ノ順次左ノ如シ、

〔貼紙朱書〕 島津備後殿 忠鑑、隅州始羅郡・薩州鹿兒島郡ノ内重  
富郷一万四千六百九十四石余ヲ領ス、

〔貼紙朱書〕 島津安芸殿 忠敬、指宿・額娃二郡ノ内今和泉  
郷一万三千八百三十三石余ヲ領ス、

〔貼紙朱書〕 島津又八郎殿 久宝、始羅郡加治木郷一万九  
千三百三十八石余ヲ領ス、

〔貼紙朱書〕 島津讚岐殿 貴敦、大隅郡垂水郷一万五  
千四百二十一石余ヲ領ス、

以上四家ヲ御一門家ト称ス、

〔貼紙〕 四家順次誤ル、張札ノ如シ、後日改ムベシ

島津下総左衛門 久徴、日置郡日置郷六千  
五百六十四石余ヲ領ス、

島津若狭 久敬、肝属郡花岡郷五千  
〇九十九石余ヲ領ス、

川上筑後 久封、領地無シ、普通ノ給  
地高五百余石ヲ所有ス、

島津織之助 久直、領地無シ、普通ノ給地  
高二千五百余石ヲ所有ス、

島津大蔵 久徴、領地無シ、普通ノ給  
地高三百余石ヲ所有ス、

島津図書殿 久治、薩摩郡宮之城一万五  
千七百五十五石余ヲ領ス、

島津隼人 久芳、薩摩郡黒木郷二千  
六百九十一石余ヲ領ス、

島津主殿 久儔、日置郡永吉郷三千  
五百〇六石余ヲ領ス、

島津伯耆 久福、給黎郡知覽郷六千  
九百三十四石余ヲ領ス、

島津壬生 久清、伊佐郡佐志郷二千  
八百二十九石余ヲ領ス、

島津左膳 久元、始羅郡帖佐郷ノ内松  
原村等三百余石ヲ所有ス、

新納波門 桑原郡踵郷ノ内三休  
堂村等五百余石ヲ領ス、

後島津石見 久静、諸県郡都城三万四  
千〇十一石余ヲ領ス、

前樺山相馬 久要、伊佐郡蘭牟田郷千  
五百八十九石余ヲ領ス、

桂右衛門 久武、領地無シ、普通ノ給  
地高二百余石ヲ所有ス、

島津頼母 久度、領地無シ、普通ノ給  
地高三百余石ヲ所有ス、

島津求馬 久邦、領地無シ、普通ノ給  
地高二百余石ヲ所有ス、

喜入撰津 久高、川辺郡鹿籠郷四千  
二百〇三石余ヲ領ス、

町田民部 久成、日置郡伊集院郷ノ内石  
谷村九百九十八石余ヲ領ス、

島津帶刀 久道、領地無シ、普通ノ給  
地高二百余石ヲ所有ス、

島津内記 久住、領地無シ、普通ノ給  
地高百八十余石ヲ所有ス、

北郷作左衛門 久視、薩摩郡平佐郷八千  
百三十七石余ヲ領ス、

島津主計 久宝、肝属郡新城郷千六  
百五十四石余ヲ領ス、

島津矢柄 久敬、領地無シ、普通ノ給  
地高三百余石ヲ所有ス、

大野多宮 久甫、領地無シ、普通ノ給  
地高百八十余石ヲ所有ス、

吉利仲 久包、領地無シ、普通ノ給  
地高五百余石ヲ所有ス、

島津内藏 久厚、領地無シ、  
普通ノ給地高

伊集院伊膳 久文、領地無シ、  
普通ノ給地高

種子島鶴袈裟 久尚、熊毛郡種子島一万  
〇百六十五石余ヲ領ス、

島津式部 久之、嘯喉郡市成郷三千  
〇四十四石余ヲ領ス、

穎娃織部 久武、領地無シ、普通ノ給  
地高二百余石ヲ所有ス、

小松帶刀 清廉、日置郡吉利郷三  
千〇十五石余ヲ領ス、

入来院恰 公寛、薩摩郡入来郷四千  
八百十五石余ヲ領ス、

比志島静馬 範馳、桑原郡踊  
郷ノ内万膳村

肝付兵部 兼両、給黎郡喜入郷五千  
三百七十四石余ヲ領ス、

菱刈李之介 隆徽、領地無シ、普通ノ給  
地高三百余石ヲ所有ス、

諏訪数馬 武盛、領地無シ、普通ノ給地  
高三百九十余石ヲ所有ス、

川田将監 佐武、領地無シ、普通ノ給  
地高二百余石ヲ所有ス、

畠山主計 義制、領地無シ、普通ノ給  
地高百五十余石ヲ所有ス、

鎌田仙千代 政雄、肝属郡大始良郷ノ内南  
村千六百〇五石余ヲ領ス、

伊勢雅楽 貞章、嘯喉郡末吉郷ノ内岩川  
村四千〇二十四石余ヲ領ス、

市田隼人 義賢、領地無シ、普通ノ給地  
高千二百五十余石ヲ所有ス、

以上四十二家ヲ一所持又ハ一所持格ト称ス、領地無  
キハ家格一所持二列スルカ故総称ス、

〔出義公史料より補〕  
寄合ト称スルハ左ノ如シ、△

義岡主殿 久道 山岡齊宮 久知行高千  
武二百余石

島津靱負 久倫 島津相馬 久中

末川久馬 久知行高二 島津藏人 名

〔頭注〕一藏人ノ次ニ島津主税ヲ脱スル歟  
川上龍衛 久齡 川上但馬 久連

島津左内 久成 島津登 久知行高三  
包百余石

郷原転 久寛 川上式部 久知行高千  
美五百余石

新納駿河 久伊佐方 菱刈郡大口郷ノ内木ノ内村<sup>〔久連〕</sup>知行、  
仰抱地高等混シテ五百余石ヲ所有ス、

樺山権十郎 久高 北郷数馬 久知行高千余石、  
德波江<sup>〔高ナルヘシカ〕</sup>

北郷波江久政

島津仲房久

町田内膳久〔町力〕田ノ上ニ新納衛守脱スル歟

新納主税品久

山田軫備有

平田靱負正智

仁礼小吉信仲

二階堂源太夫三行

小林一学政次

本田信二郎春貞

平田正十郎中位

小笠原兵部寧長

鎌田一藤太政拳

河野八郎左衛門紀高

渋谷喜三左衛門貴峯

関山糺金生

岩下佐次右衛門平方

猪飼鯉太郎尚香

桂内記久〔虫義公史料より補〕

伊集院静馬照久

伊集院巨道久

伊集院隼衛久温

鎌田要人政知行高千治二百余石

高橋縫殿種徳

二階堂部知行高六〔種〕百十余石

名越左源太盛貞

北条織衛時有

相良治部長〔種〕

堀四郎左衛門起敬

鎌田愛太夫政治

市来次十郎業広

赤松主水甫則

宮之原小膳通救

山田新之丞有隣

上野藤馬政教

稲富数馬〔種〕政教知行高二千八百余石

以上五十三戸ヲ寄合ト称ス、

〔虫義公史料より補〕  
寄合并ト称スルハ左ノ如シ、△

一三崎平太左衛門久盛〔種〕四村橋昇成

二倉山作太夫昌久〔種〕五北郷宗一郎明

六伊勢平四郎貞行〔種〕七西金之介純東

三谷川次郎兵衛武久〔種〕本田加賀守親諏訪社徳神職

井上駿河守長花尾社〔種〕面高中姓院修験道殿若院住職

以上十戸ヲ寄合並ト称ス、〔種〕

御一門四家及ヒ現ニ一所ヲ領スル者十四家、一村ヲ所

有スル者五家、寄合及ヒ寄合並六十三家、総計八十二

家〔種〕内方石以上七家、是ヲ門閥ト通称ス、○一所持及ヒ一

村所有ノ者皆多少ノ家臣ヲ扶持シ、隊伍ヲ編制シ軍務

二供ス、又寄合又ハ寄合並ト称スル者モ多少ノ家臣ヲ

有シ軍務ニ従事ス、此輩平常ハ農工商ヲ以テ生活ヲ営

メリ〔種〕一所々領ノ戸口等ハ、○小番家格ノ中ニ、諸県郡飯野

郷ノ内大河村在番職大河平孫八郎隆〔種〕芳ハ一村ヲ所有シ、

家臣百余戸ヲ有シ一隊ヲ編制セリ〔種〕軍賦ノ部ニ、○一百余

外城毎ニ多少ノ士分居住スルハ屯田ノ制ニシテ、往昔

ヨリ今ニ至テ其制綿々タリ〔種〕軍賦ノ条ニ、詳記ス、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二七号と同文なり〕

217 ○正月廿三日布達、御城下諸士五人組設立ノ令左ノ如シ、

一 小番・新番・御小姓組打込、拾五歳ヨリ六拾歳迄五

人組合致シ申出候様被仰付候、左候而、可成丈ケ者

同組中二而組合候様被仰付候、

但、他行其外伍人之内一人者不苦候得共、二人者

不相成候、

一 寄合以上タリトモ二男・三男小番二準候面々者、諸

士小番・新番・御小姓組ノ総唱同様組合被仰付候、

一 直触御家老組ノ総唱以上奥向御小納戸以下御小姓、御近習番等ヲ云之儀者、組合

不被仰付候、

一 三年二一度組合出入ノ調被仰付候、

右之通被仰付候条、此旨表方江致通達、奥掛・御勝手

方江モ可相達候、

正月廿三日 式部川上久美

此布令二依テ各同組中組合ノ契約ヲナシ、連署名印ヲ

ナシ組頭へ届出タリ、然ルニ行状不正ノ輩組合ヲナス

者ナク、困却セシ者モ又少カラス、人品陶汰ノ一方法

トモナレリ、○斯ノ如ク組合ヲナサシメ、平常ハ互ニ

患難相助ケ、非常ノ時ニハ伍什合併一隊ヲ作り、戮力

協心敵ニ当ルノ要法ナリ、○伍什ノ組織ハ天文・慶長

ノ頃モ設ケラレタル者ト旧史ニ散見ス、治世ニ至リ廢

レタリト雖モ、各郷ニ於テハ間々存シタルモアリ、或

ハ犯罪人遁亡、踪跡調査等ノ事アルニ方リテ臨機命令

セラル、コトモアリタリ、今回創設セラレタルハ治乱

共ニ維持ノ法ニシテ、伍什ヲ以テ火トシ、火伍ヲ隊ト

シ、隊ニヲ旅トシ、旅十ヲ団トスルハ古来御家法ノ編

制ニシテ、今回改革ノ隊制其名称ヲ変シタルノミニシ

テ、旅ヲ陣トシ、幾陣幾十陣ト唱ヘタリ詳ナルハ軍賦ノ条ニ記ス、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二八号と同文なり〕

218 ○正月 日〔貼紙〕「日糺スベシ」達、近村二十四ヶ村又ハ各郷

御鷹場廢セラル、旨令セラレタリ、○從來御鷹場ト称

ヘ、放鷹ノ為メ鳥類ノ獵ヲ禁セラレ、中ニモ鉄砲〔鉄砲カ〕放発

ヲ嚴禁シ、若犯違ノ者ハ輕重ノ刑ニ処セラル、ノ法規

ナリ、故ニ秋ノ半バヨリ春三月頃迄ハ、鶴雁鴨等ノ諸

鳥群集シ、田畑ニ妨害スル少々ナラス、加之御鷹匠・

御鳥見等ノ吏巡回シ、違犯ノ者ヲ誡メタリ、然ルニ今  
 回解禁セラレタルニハ農家ノ喜一方ナラス、是ヨリシ  
 テ田畠ノ収獲モ多キニ至ラント怡悦セリ、殊ニ谷山・  
 伊作・阿多・田布施・加世田・川辺、或ハ近村二十四  
 ケ村ハ耕作ニ損害少カラス、農家悲歎スルモノナリキ  
 解禁ノ令発スルヤ、其郷村ニ令書ノ達セサルニ先シ、城下ヨリ統々  
 鉄砲ヲ携ヘ来テ放発スルニハ、土人大ニ怪ミタリ、故ニ獲ル処許多ナ  
 リシト、○菱刈・真幸ノ諸郷ハ 齊興公弘化ノ中頃解禁  
 セラレタリ、又串良・高山・志布志等ノ各郷ハ 斉彬  
 公安政ノ初メニ解レタリ、○御放鷹場ト唱ヘ諸鳥ヲ打  
 ツノ禁令ヲ發セラレタルハ、 重豪公御代天明ノ初二  
 シテ、幕府放鷹場ニ擬セラレシ者ナリト云フ、○尾畔  
 御茶屋郭内ニ在ル御鷹部屋ニ従来飼養セラル、処ノ鷹  
 二十二頭ナリシヲ、今回僅カ六頭ヲ残シ悉ク放タレ、  
 残り六頭ノ者ハ御先代ヨリ有名ナル良鳥ナリシトソ、  
 ○御鷹方ト唱ヘ一局ヲ設ケラレ、一年ノ費途高三千石  
 ノ定額ヲ充ラレタリ、 重豪公御代ハ五千石ノ定額ナ  
 リシヲ、 斉宣公御代三千石ニ減セラレタリ、○御鷹  
 方ノ局創設セラレタルハ 重豪公御代安永六七年ノ頃  
 ナラン 創設セラレタル、初メ御鳥見頭ノ職ヲ創設セラレ、  
 年契所見ナシ、

専御放鷹場ノ検査ヲ掌リタル者ノ如シ、○御鳥見頭ノ  
 職ハ安永七戊戌正月十一日創設セラレ、天明元年辛丑  
 正月御鳥見頭格ノ職ヲ置レタリ、○御鷹匠頭ノ職ハ同  
 年五月初テ置カレ、御本丸御鷹匠頭・山下御鷹匠頭ト  
 二様 山下トハ田二ノ丸ヲ、又尾畔御鷹匠頭トモ記セリ、○  
 天明二壬寅六月、御本丸御鷹部屋ヲ山下御鷹部屋ト唱  
 フヘキ旨令セラレタルヲ以テ考フレハ、御本丸御鷹部  
 屋ヲ廢シ合併セラレ、尾畔御鷹部屋ノ二ツヲ存セラレ、  
 安永六丁酉五月、御鷹匠頭尾畔預ト名称ヲ改メラレタ  
 リ、○中古以来放鷹ハ諸大名ノ專ニスル処ニシテ、其  
 費耗寡カラス、加之放鷹場ノ域内ニハ諸鳥ヲ飼養シタ  
 ルニ異ナラサルカ故、耕作ニ妨害ヲナスコト又少カラ  
 ス、茲ヲ以テ今回断然放鷹セラレタルハ経済上ノ要点  
 タリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一三三〇号と同文なり〕

219 〔貼紙〕「月日及令書記入スベシ」  
 ○昨年十月初發令江戸邸改革ノ概況左ノ如シ、

219の1 江戸中ニ在ル藩邸大小十余ヶ所アリ、今回必用ノ分ヲ

○江戸通信ニ曰、昨年十月故井伊掃部頭直弼殿ノ前罪ヲ  
 残シ、其余ハ悉ク売却、或借地等ハ返戻セラレタリ、残  
 シ置レタルハ芝本邸及ヒ高輪・桜田・田町・堀端・南  
 向・西向・渋谷等ノ八ヶ所ニテ、今里・大井等ノ六七  
 ケ所悉ク廢シ、或ハ地主ニ返付セラレタリ、○各邸長  
 屋居住定府ト唱フル輩ハ藩地ヘ引取り、又ハ脱藩ノ望  
 アル者ハ出願スヘキ旨令セラレタリ、○定府ト唱フル  
 者ハ御先代ヨリ召抱ニナリタル家筋ノモノニテ、小  
 番・新番・御小姓組・与力・御小人・足輕・御口之者  
 等合計三百余戸、男女一千余ノ人口ナリ、此輩各邸ノ  
 官舎<sup>長</sup>屋ニ居住シ多少ノ給養ヲ受ケ<sup>堪忍扶持ト唱ヘ毎口、又</sup>  
 奉職ノ者ハ俸禄ヲ受ク職務ニ依テ多少アリ、○今回此  
 ノ如ク令セラレタルニハ大ニ困却シ、脱藩企望ノモノ  
 モアリ、或ハ家族等都会ノ地ヲ去リ帰国スルハ、異邦  
 殊域ニ左遷セラルカ如キ思ヲナシ、悲歎スル者又少カ  
 ラス、元來都会ニ居住シ遊逸惰弱ニ生育シ、各名義ノ  
 如ク本分ノ用ニ適スルモノハ甚タ寡シ、実ニ有名無実  
 ノ曹多シ、

〔貼紙〕「廢置等ノ令書記入スヘシ」

○當時擊劍・槍術等御勸奨ニ付、今般砲術館廢セラレ、  
 演武場建設セラレタリ、上方限<sup>御城下ヨリ北ヲ上方、</sup>  
 習場ト定メラレタリ、○下方限<sup>西南ヲ下方ト通唱ス、</sup>ノ演  
 ス、或ハ一流毎ニ一場ヲ建設セラレ、或ハ師範ノ居邸  
 ニ大小適宜ニ設ケラレタルモアリ、而シテ組頭・御目  
 付或ハ君側ノ吏、演武館又ハ師範居室ニ臨場シ、修業  
 ノ精粗驗視ヲ命セラル、等大ニ勸奨セラレタリ、故ニ  
 夙夜擊劍ノ声喧シ、或ハ修行拔群、行状方正ノ者ハ拔  
 擢セラレ、君側其他ノ職ニ登用セラレシ曹モ許多アリ、  
 實ニ奨導ノ道至ラサル処ナシ、  
 隣藩熊本モ數派ノ党ヲ樹テ脱藩セシモノモ尠カラス、  
 則チ轟武兵衛等ヲ巨魁トシテ攘夷論者脱藩シ、京摂間  
 二出テ長土水ノ三藩或浮浪ノ連中ト同心奔走スル者許  
 多ナリト云フ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二七号と同文なり〕

○正月 日「日糺スヘシ」<sup>〔貼紙〕</sup>布達、今回御軍賦改正ニ付テ、小番・新番・御小姓与知行高多額所有ノ輩、又ハ大身分等一所所有地外ノ禄高減少ノ令ヲ発セラレタリ、左ノ如シ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一二三三号と同文なり〕

〔貼紙〕  
「令書得テ記入スベシ」

○正月 日「日糺スヘシ」<sup>〔貼紙〕</sup>金相場替発令、金壹両錢八貫文替ナリシカ九貫文ニ令セラレタリ、○現今大坂ニテ金壹両銀八拾七匁五分内外ニ交換ス、故ニ坂地ノ時価ヨリ凡ソ一貫文内外高直ナラサルトキハ、金銀散出シ融通上不弁ナリ、是本藩ニ於テ経済ノ要トス、○現今大坂ノ金銀価八拾七匁ニ上レリ、実ニ未曾有ノ高価ナリ、其因テ起ル所以ハ、当今諸藩主許多ノ人数ヲ卒<sup>〔率カ〕</sup>シ上京、洛中ノ繁昌一方ナラス、随テ散布スル処ノ金銀悉ク大坂商人ニ借ラサルハナシ、茲ヲ以テ奸商等謀リテ高価ナラシメタリト云フ、果シテ然ラン歟、今日ノ形勢上論者ノ説ニ、不日亦一層高価ニ上ルヤ疑ナシ、

其所以ハ海外濫出ノ一大洞穴アリ、則チ当時各藩ニ於テ競テ汽船ヲ購求ス、其価幾干カ量リ知ルヘカラス、

其他大小砲或ハ弄玩ノ器物、布帛ノ類、枚挙ニ遑アラズ、其代価モ少々ナラス、然ルニ輸出ノ物品ハ僅々數品ニ止リ、品物貿易ノ名ヲ以ヒ難シ、故ニ不年ニシテ

内国ノ金銀ハ地ヲ掃フニ至ルヤ必セリト云フ、今ノ形況ヲ以テ考フルニ、果シテ然ラン歟、○金壹両錢九貫文ニ交換スルトキハ、則左ノ割合トナルヘシ、式歩金

壹片錢四貫五百文、壹歩銀壹片式貫貳百四拾八文、式

朱金壹斤壹貫百貳拾四文、壹朱銀壹斤五百六拾四文ノ割合ナリト云フ、○斯ノ如ク金銀貨高直ニ趣キ、米穀其

他物品日二月ニ騰貴シ、人民ノ困難太甚シキニ至ルヤ明カナリ  
現今長崎ヨリ支那ニ輸出スル起シ炭、一俵ノ価四十斤内外ノ量目アルモノ、金壹歩位、鹿兒島ニテハ壹俵二百文内外ノ品ナリ、ト云フ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一二四号と同文なり〕

○当時富国強兵ノ道種々手ヲ下サレ、殊ニ質素節儉ノ令ヲ布カレ、士庶共ニ絹帛服用ヲ禁シ、京撰等ヨリ絹布買下シ禁停<sup>〔ヲ脱カ〕</sup>、国産ヲ以テ弁用スルノ基礎ヲ立テ、紡績

局ヲ拡張セラレタリ、従来下町ニ在ル三島方大島其他島々砂糖商法ヲ掌

ル局名ナリ、今下町堀ノ郭内ニアリシヲ、更ニ大門口ニ引

遷シ、織工・染工等京坂ヨリ庸役シ盛大ニ開カレタリ、

局名ヲ織物所ト名称シタリ文久二年十月ヨリ、建築ニ着手セリ、○御城下居

住ノ士、無禄・小禄ニシテ俗務ノ俸米ヲ以テ生活シタ

ル者少カラス、此等ノ曹旧制ニ復シ、土着農稼ノ途ヲ

与ラレンノ議ヲ以テ、各郷荒蕪ノ土地開墾ノ令ヲ下サ

レタリ、

〔貼紙令書得テ記入スベシ〕

二百年来昇平ノ化ニ浴シ、土風懦弱ニ流レタルカ故、

土着ノ道ヲ開カレ耕耘ニ従事スルトキハ、筋骸健壯風

俗朴質ニ帰シ、中古之風俗ニ復スルヤ論ヲ俟タサルナ

リ、第一着手ニ比志島村ノ牧場ヲ廢シ、開墾ノ後所望

ノ貧士移住ノ方法ヲ設ケラル、御小姓与番頭担当ニ令

セラレ、旧臘十二月中旬ヨリ着手セラレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一二二五号と同文なり〕

〔貼紙移住望願スヘキ令書記入スヘシ〕

225 ○此度以

勅使攘夷之儀被 仰出、策略之次第者、衆議被為尽候

上 御決策被 仰上下之趣、今般從 公義被仰渡候、

就而者御領内之儀、専海岸之要所ニ候得者、諸士一同

策略被 聞召上度被 思召候、此旨早々可申渡旨被

仰出候条、向々へ不洩様申渡、諸郷・私領へモ早々可

申渡候、

但、郷士〔郷士以下カ〕以来タリトモ建議致度者不苦候、尤モ来八

日限一同可差出候、

正月 式部川上

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一二二九号と同文なり〕

226 ○本月初京師ノ形勢報知ニ曰、昨秋 国父公御退京御下

国ノ後、諸大名ニ於テ首鼠〔首鼠カ〕両端、時勢ヲ傍觀セシモ、

雷同付和シテ逐日上京、

天氣ヲ窺ヒ、或ハ尊

王鎖攘ノ説ヲ唱へ、世ニ阿諛スル者続々、既ニ熊本候〔熊本候カ〕ニ

モ舍弟澄之介・良之介二人ヲ具シ上京セラレ、所論條

チ變シ、或ハ武備〔汲々カ〕ニ級々トシテ、大小砲ノ製造局等遽

ニ設立セリト云フ、○本藩ニ於テ現今無用ニ帰シタル「ゲベール銃」一千余挺商賈私下、熊藩へ売り渡シ大ニ利ヲ得タリト云フ、如斯廃棄ノモノ購求スルヲ以テ、

從來武備ノ整ハサリシハ推シテ知ルヘキナリ、○佐賀（佐賀老侯カ、鍋島直正）

老候（閑叟）ハ參府ノ途次京師ニ立寄り

天氣ヲ窺ヒ、関白殿下・所司代へ面接アリシノミニシテ、

宮・堂上方へ訪問モナク僅一二日滞京、直チニ関東へ下向セラレシト云フ、同公ハ當時名望アリト雖モ頗ル狡黠ノ名アリ、昨年来藩士洛中ニ出ルヲ嚴禁シ、或ハ

二三ノ藩吏ヲシテ形況視察ノ為メ商賈ノ姿ニ変シ、京撰ニ来往セシメタルノ説モアリシト云フ、○又福岡候（福岡侯カ、黒田齊運）ハ本月初メ多数ノ人員ヲ具シテ上洛セラレ、

天氣窺ノ後滞京セラレシトソ、昨年四月 国父公御上洛ノ頃、御參府ノ途次播州大倉谷ヨリ御病氣ノ申立ニテ曳返シ帰国セラレタリ、當時ノ街説ニ驚怖セラレ、虚病ヲ作為シ帰国セラレタルノ説喋々トシテ、大ニ藩名ヲ殞サレタリシカ、天下ノ形勢一變シ、大小藩各上洛スルノ勢ニ變シタルカ故、多数ノ人員ヲ率ヒ上洛滞京セラレタル者ナリト、亦其説モ種々噴々タリ、実ニ藩

中人ニ乏シキカ故、如此不名ヲ取ルニ至レル者ナリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二六号と同文なり〕

227

○一橋殿上洛、旧臘十二月中旬江戸発途、同五日着京ア

リ、六条本願寺ヲ以テ旅館トス、付従ニハ閣老小笠原（長行） 凶書頭 ・ 水藩武田伊賀（正生） 「実名糺スヘシ」等ノ数

名ナリ、○一橋殿モ当時非常ノ形勢ナルカ故、銃兵三百余名ヲ従へ、其他擊劍得達ノ者五十余名ヲ従ヘタリト云フ、

228

○正月廿九日達、

太守様御儀、先達テ御參府被 仰出置候得共、此節

三郎様御儀御上京被遊候様被 仰出候ニ付テハ、右御

用被為濟候上、 太守様二者被遊御參府候様、於京師

一橋中納言様ヨリ被仰渡候条、此旨向々へ不洩様 可

致通達候、

正月廿九日 大藏 島津 久徽

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二〇号と同文なり〕

229 ○正月廿八日京都飛報ニ曰、本月十四日留守居御呼出ア

リ、本田弥右衛門出頭ス、〔親雄〕 太守公御参府御猶予、

国父公速ニ御上洛アルヘシトノ趣ナリ、○同報ニ、近

衛殿御書翰ヲ以テ、 国父公御上洛片時モ速ナルヘキ

旨御依頼アリ、御書左ノ如シ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一二二一号と同文なり〕

〔貼紙〕御書簡記載仕度〕

〔貼紙〕見当ラス〕

230の1

○正月廿九日布達、

勸農之儀者 御先代様ヨリ分而 御沙汰被為 在、百

姓御救助之儀モ先年来品々御手厚被仰付候得共、〔重斂〕 重斂

課役等積年之疲勞ニ追レ、何分潤立候涯不相見得、既

ニ諸卿下代藏役人付属藏之悪弊ヲモ被相改、憲法之御

仕向ニ而、去秋ヨリ三ヶ年御試被仰付、現事ノ取扱ニ

依リ、追々御治定可被居置旨被仰渡置候処、段々故障

之廉有之、且又諸卿差人之御奉公人数多之人数ニ相及、

送人馬・水夫者勿論、野菜・油・薪之類入付之費用、

年分ニ者多分之出銭相及、其外百姓共痛ニ相成候儀者  
此節別段之御吟味ヲ以左之通被仰付候、

一御年貢取納方ニ付而者、御藏付數十ヶ村一緒ニ相成込

合候付、日々持込候丈取納相済候儀者無之、無拠数日

及滞在、飯料諸雜用モ入嵩候上隙ヲ費シ、百姓共第一

迷惑之事情ニ付、当秋ヨリ村取納被仰付候条、庄屋・

役所又者便利宜場所ニ仮藏相調置、郡奉行地方檢者引  
受、庄屋方ニ而役々致取納置、都合ヲ以不込合様御藏

本江付ヶ届、惣俵掛占鬮当計リ例メシヲ以テ取納被仰

付候、就而者掛役者勿論、百姓共二者五人ツ、組合ヲ

以テ繩俵米拵、梃目・斤目不同無之嚴重取扱行届候様、

左候而、納人亦者取扱之所役々名前相記、差札入置、

尤、所役々ヲ始、組中連モ御請書差出候様申付候、右

ニ付万一不正之手数相企候者モ候者、当人者不及申、

組合ノ者迄モ重キ御取扱被仰付、所役々迄モ屹ト可及

沙汰候、且取納振津廻又者勘定向等之議者、御勘定奉

行・高奉行・郡奉行・御代官ヨリ致吟味可申出候、

一御定納外上納米式升四合之儀、当秋ヨリ壹升相減シ、

壹升四合 此ノ一升四合ノ米ハ、一俵ニ一升四合ヲ定額外ニ取納シ、  
以テ運輸ノ費用ニ充ツ、農家ニ於テ八十余里ヲ運搬シ日子

ヲ耗シ、費用少カラサルカ故、ツ、先柁ニテ別段取納可被  
大ニ便益ナルヲ喜ヒタリ、

仰付候、就テハ諸座書役等へ被成下候御心付向之御金

賦可及不足候間、琉球出来米代砂糖七拾万斤、御余勢銀

御内用金御内用金トハ財政上特別ノ名義ニシテ、詔言スレハ臨機特別ト云フカ如シ、當時財政上二途ニ分タルカ如シト雖トモ、敢テ然ルニアラス、御勝手方ノ名義ヲ用ルハ定規ニ罷ル者トシ、御内用ノ名義ヲ用ルハ特別臨機ニ罷ルヲ云フ、或ハ政務上ニモ御内用云々ト云ハ、定規外臨時ノ事務ヲ云フ、○這ノ名唱ハ天明ノ末ニ起リ、而シテ漸ク天保ノ中頃、齊興公調所笑左衛門二命シ財政一變セラレ、大ニ理財ノ法ヲ起サレシ際、御内用ノ名義盛ナルニ至レリ、如何ントナレハ出格非常、或ハ活潑機敏ノ措置ヲナサ、レハ能ハサルカ故ニ、定規模則ニ泥滞シ機會ヲ失フカ故ナリ、故ニ内用其他大小ノ故ニ、御内用掛ト唱フモアリ、或ハ御内用方、或ハ御内用計何々局ト唱フモアリ、或ハ出江差向ケ、右差足可被成下納上御内用金ト唱フモアリタリ、

候 琉球国石高九万余石ニ掛ル出来凡八千余石ナリ、此内黒砂糖七十万斤ヲ納取ス、是レ元米穀ノ産少キカ故、年々内地ヨリ数千石ヲ輸送セリ、茲ヲ以テ黒糖ヲ以テ代納ス、是ヲ大坂ニ、於テ売却スルトキハ、年々多少ノ利益ヲ生ス、

一 下代蔵役人之儀、人柄吟味之上申付クル事ニ候得共、

多人數之事ニテ、是迄致付屬等相勤候者旧習直リ兼候

事情モ有之、第一土風ニモ相拘リ候ニ付、当秋ヨリ村

取納被仰付候ニ付而者、別段之御吟味ヲ以テ、其郷内

亦者近郷役々無役郷士ヨリ人柄細々取調之上、下代蔵

役人申付、取調之次第ハ前条之通郡奉行所役々引受諸

下知致、津廻掛渡等締方横目見分ヲ受、所役々出会等

之儀者当分通、尚又嚴重致取扱勘定相逐候様申付候、相逐カ

左候而、御扶持米三石六斗宛被成下、苦勞銀員數之儀  
者追而可申渡候、

一 真幸表之儀近年取分ケ相勞、御高格護モ調兼候者モ不

少哉ニ而、右者第一御蔵本遠方、殊ニ坂道等ニ而致難

渋候処、先年御吟味ヲ以栗野中取蔵被建置候処、取納

之分ハ埒明難有詛ニ者候得共、翌春本蔵迄津下等ノ儀

モ有之、御取救之詮モ無之難最通、當時者先年通加治

木江負下致取納、連年疲勞弥増候ニ付、別段ノ御吟味

ヲ以テ真幸之内江本蔵新規被召建、村々取納米右本蔵

江致取納候迄ニテ、御前糶御前糶トハ、君公及ヒ老若君等御料食ノ糶米ヲ云フ、糶米ヲ以テ御台所ノ倉庫ニ貯蓄スル例規ナリ、○御前米田ト唱へ、諸県郡内飯野・加久藤ノ兩郷、最良ノ地質ヲ撰ヒ種植ス、故ニ米質モ良品ナリ、種植セシ土田毎ニ御前米ト記シタル榜標ヲ建タリ、之分者は迄之通、御蔵付ヨリ近郷

加治木江致津下候様被仰付候、右ニ付テハ取納米津下

候道無之、御用米難被振向候ニ付、御当地三町上町・下町ヲ云

廻、当分ノ通致売買候様、尤、御蔵米ニテハ是迄ノ造

入高ヨリ及不足候分者、郷々百姓余米持合之者共ヨリ、

相對買入ヲ以造入候様申付候条、御府内ニ於テハ一切

酒造等不相成候御府内トハ鹿兒島中、則チ御城下ノ通唱、ナリ、薩陽日三州ノ府ナルカ故ナリ、

〔名越時敏史料より補〕

一地方糧方檢者人数減少ニテ、兩役兼帶等申付候儀ハ別

段申渡通二候、△

一山方下目付之儀、已來不被仰付、拔木取締等之儀番所詰見聞役・山見廻等ヨリ尚亦行届候様申付候、

一諸所移地頭并地頭代抑役之儀、此節御改正之御軍役調

練差引、或ハ拔木拔木トハ、官山ヲ盜伐シ隣国ニ密売スルヲ云フ、諸県郡内或ハ川内等河海運搬便利ノ各郷ニ於テ往々密売者多キカ故、誠查ノ吏則チ山方下目付ナル者ヲ派出シタル者ナリ、○拔馬トハ、元來良馬ヲ産スルカ故、他邦ニ於テ薩摩馬ト唱ヘ大ニ渴望ス、故ニ年々一千里ヲ定額トシ他邦売販ヲ許サレタリ、然レトモ所望多キカ故密売少カラス、因テ既局其他ノ吏監戒甚タ厳ナリシ者ナリ、○元來本藩ハ人口ニ比シテ米穀不足ナルカ故、毎歲隣藩兩肥ニ筑ノ輸入ヲ俟、国用ヲ補充ス、然ルニ時トシテ奸商ノ為ニ餽額ヲ左右セラル、ノミナラス、甚シキニ至テハ輸出ヲ停ムルコトアリ、之ヲ津留メト唱ヘ、而シテ高騰ナラシムルノ奸術ナリ、其時ニ方テハ金銀貨ノ流通ハ滑沢ナリト雖トモ売穀ナキニ困メリ、茲ヲ以テ国産ノ米穀ハ他邦へ輸出ヲ禁セラレタルモノナリ、然ルレモ商賈等犯禁密売ス、之ヲ拔ケ米ト唱フ、○因ニ記ス、人口不相応、穀類不足ナルノミナラス、琉球・大島其他各島ハ砂糖産出ノ地ナルカ故穀作ヲナサス、穀類ハ皆内地ヨリ輸送ス、一歲輸送ノ數凡・抜

米・拔馬其外諸取締被仰付候、

一福山御牧之儀數ヶ郷ニ相掛リ、御普請向繁多ニ而百姓

共公役請負人共江相頼ミ、過分之及出錢候由ニ付、別

段ノ御吟味ヲ以テ此涯御引取、左候テ、牧馬八百疋程

モ及生育居候由候間、真幸・肝付方限等勞郷牛馬不持

合窮民共江、下料下料申請ト記セリト雖トモ、其美ハ下賜セラレタリ、申請被仰付候、

230/02

左候而、地面ノ儀當御時節大調練被仰付儀モ可有之候得共、畠作望之者候ハ郡奉行承届差免、其届申出候様被仰付候、右者百姓御救筋者勿論、一統融通之為、當時柄御失費相拘候儀モ無御構、右之通御改革被仰付候条、其旨厚汲受、夫々請持之御役場一涯相勵、取扱之儀精微ニ尺吟味得差凶、聊等閑之儀共無之様可致精勤、此旨支配中江申渡、奥掛・表方ヘモ可相達候、

正月廿九日小松清康 帶刀式部川上久美

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二二一ノ一号・「名越時敏史料」三五七頁「勸農之儀者」と同文なり〕

此布達ノ条件ハ、建国ノ本源ナル農耕勸奨ノ要点ナリ、近來世態變換多事ナルカ故、百姓ノ課役等繁ク、耕耘ノ障碍少カラサルカ故、僅々數件ナリト雖モ其益ハ許多ナリ、中ニ就テ下代藏役人付属ト唱フルハ、享保ノ末頃ヨリ許可セラレタル者ニテ其弊害少カラス、概言スレハ、百姓ノ膏血ヲ絞リ吏員ノ生活ヲ助クト云フヘキナリ、或ハ薩隅日三州中従來牧場多ク、大小四十余ヶ所アリ、中ニ就テ福山牧場ハ最大畜馬八百余頭ニ及

へり、此ヲ廢シテ耕地トセラレタルハ頗ル国益ヲ起セ  
り、或ハ諸郷差人ノ御奉公人云云、其役員定規ノ者ハ  
郡奉行 受持郡奉行又ハ臨時派出ノニアリ、受持トハ二三ヶ郷乃至四  
五ヶ郷ヲ引受ケ、農務勸奨、堤防修造、或ハ貢納督促等ヲ掌  
レリ、臨時派出ハ田畠檢見測量、其他堤、或ハ山奉行 春秋二回巡  
防修造等、大事件アルニ当テ派出ス、回シ山林ヲ  
檢査シ、或ハ杉檜楠其外必用ノ樹木種植ヲナサシメ、或ハ盜伐ヲ諷  
メ、或ハ人民家屋建設用ノ諸材私下等ヲ掌ル、是亦定規、臨時ノ別  
ア、或ハ宗門改役 耶蘇宗・一向宗等犯禁ヲ檢査ス、是又定規、  
臨時ノニアリ、臨時派遣ハ犯禁ノ者糺彈等ノ  
為ナ、或ハ縮方横目 縮方トハ大目付ノ目代ニ等シク、則一郷又、  
ハ二三ヶ郷ヲ兼テ視察ヲ掌リ在勤セリ。  
又廻勤横目ト名ツクルアリ、七八ヶ郷乃至十余ヶ郷ヲ  
一区トシテ巡回シ監督視察、縮方横目ノ正非曲直及郷  
村吏等ノ非違ヲ驗察セリ、或ハ地方櫛方ノ両檢者モ一  
二ヶ郷乃至三四ヶ郷ヲ兼、定規在勤セリ、地方檢者ハ  
受持郡奉行ノ指揮ヲ受ケ、勸農ハ素ヨリ田畠ノ種植取  
採ヲ勸督シ、或ハ堤防修繕、或ハ貢納ヲ督促、米位驗  
査等一切農務ニ僱ル事項ヲ担当ス、櫛方檢者ハ櫛楮漆  
桐等ノ諸木繁殖、或ハ保護取獲ヲ驗査スルヲ掌レリ、  
或ハ山見廻、或ハ山方下目付トハ各郷山林ヲ驗査シ、  
専ラ盜伐ヲ諷メ、或ハ他邦へ密売ヲ視察シ、傍ラ米穀  
ヲ隣邦へ売出スヲモ兼ネ諷メタリ、其他御鳥見・御鷹  
方、或ハ寺社方等ノ巡回挙テ數へ難シ、此等ノ吏員往

来ノ人馬又ハ滞留等、毎吏日々水夫 水夫トハ吏員カ百事  
仕役スル者ヲ云フ、一  
二名ヲ課役シ (勸督カ)  
ラモ課出ス、 又吏員人ニ依リテハ種々ノ  
悪弊アリテ防害寡カラス、茲ヲ以テ悪弊ヲ除キ冗吏ヲ  
廢シ、農家ノ疾苦ヲ救フノ要点タリ、○真幸表トハ、諸  
県郡内吉松・吉田・馬関田・加久藤・飯野等五ヶ郷ノ  
通唱ナリ、元来土地荒漠、人口寡少、士農共ニ疲弊ノ  
地ナリ、然ルニ貢納ノ際ハ加治木郷ノ官庫ニ輪送シ、  
收納スルニ二十余里、然モ峻惡ノ道路、疲勞ノ女馬ヲ  
以テ運送シ、初冬ノ時分中途原野ニ露宿スル等ノ困難  
アリ、加之日子ヲ耗シ費途モ少カラサルカ故、今回其  
郷村ニ於テ納取ノ弁ヲ謀レルモノナリ、而シテ城下酒  
造ヲ罷メ、其郷内ニ於テ釀製ノ法ハ官民ノ両便、加之  
酒滓ヲ以テ肥培ノ料ニ充ツルトキハ其益又一層ス、○  
封内一百余郷ノ中ニ士農共ニ疲勞セシハ、真幸五ヶ郷  
又ハ肝属郡内串良・高山・鹿屋・始良・大始良等ノ各  
郷ナリ、此地モ人口寡少、田畠広ク、剩ハ地質疲瘦、每  
戸賦耕セシム故ニ肥培其他耕鋤甚タ粗漏、随テ取獲寡  
ク貢納ニ困ムコト毎歲ナリ、此各郷ハ元龜・天正ノ頃  
迄ハ肝属カ所領ニシテ一小都会ナリシ故、人民モ土田 (肝付氏カ)

231の1

条々

231 ○二月朔日、御親書ヲ以テ左ノ令条ヲ發布セラレタリ、

文久三年癸亥

ニ応シ住棲セシニ、肝屬氏亡テ後漸次民庶散失、土田  
有余人民乏少ノ村落トナレリ、○移地頭ト云ヘルハ、  
国境ノ要衝其他警備ヲ要スル地、則高岡・大口・志布  
志・出水・甕島等、抑へ役ハ、綾・山ノ口・長島等ノ  
各所ニ置レタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二二ノ二号と同文な  
り〕

旧邦秘録五編癸亥之一

旧邦秘録卷之〔二二二〕

○

231の2

右二付、国老中添書左ノ如シ、

御軍役二付、平常御沙汰之趣、御別紙之通、御筆ヲ以  
被仰出候条、一統謹而可承知候、右二付而者、当今土  
風一涯致振起、文武之励者勿論之事ニ而、衣食住之儀

一詩歌諸遊技ヲ專ニ相嗜、士ニ不似合所業有之間敷事、  
一応知行高、軍役人数且兵器・糧食之不足有之間敷事  
領地ノ石高又ハ給地高所有ノ多、  
少ニ応シ、軍賦ノ条令アリ、  
一衣食住ニ奢侈無用之事、  
一組合中長病、或ハ死去之者候得者、同伍中ヨリ早速  
物主江可申出候事物主トハ則一、  
隊長ナリ、  
一什伍之組合、互ニ可和睦事伍什ノ組合云云、則今回組織セ  
ラレタル五人組ヲ以テ編制シタ  
ルヲ指シテ記サ、  
レタル者ナリ、  
右之趣堅固ニ可相守者也、

文久三年癸亥二月〔二年壬戌十月カ〕

茂久御判

〔本文書は「玉里島津家史料」二四七六ノ一号・旧記雜  
録追録八〕三九五の二号・「名越時敏史料一」三三四頁  
「条々」と同文なり〕

モ弥費用ヲ省キ、質素節儉相守リ、兵器・糧食等夫々分限相応致用意兵器・糧食等夫々分限相応用意云トハ、後ニ記シタル軍賦令ニ、領地又ハ知行高ノ多少ヲ以テ賦課ノ急場之御用無滞可相勤候、就中組合中ハ和睦信義ヲ專ニ相心得、聊疎意無之、御条目之趣堅固ニ可相守候、

右之通可奉承知候、

二月朔 筑後川上 大藏島津 但馬川上 式部川上  
日久封 久久 久久 久久 久久 久久 久久 久久 久久 久久

〔本文書は「玉里島津家史料二」四七六ノ二号・「名越時敏史料一」三三四頁「御軍役ニ付、平常」と同文なり〕

232 ○二月二日、天氣晴朗穩、本日 暉姫君 典姫君 寧姫君、大磯ノ桜花遊覧ヲ催サレタリ、折柄琉球人モ觀花ニ出テ、例年ノ如ク賑ヒタリ、琉様ノ弦歌・舞踏ノ興モ御覽セラレ、最ト珍シトセラレタリトソ、其他陸海共ニ遊觀ノ人影シ、 姫君ニハ当地ノ風俗初メテ御覽、御樂一方ナラサリシトナン、○在館琉球ノ吏員ハ、每歲桜花満開ノ時分ハ、例規トシ舟行觀花ヲ催シ、弦歌舞踏シ、其興盛ナルモノナリ、

233 ○二月五日達、琉球通宝鑄造資料トシテ、御兵具所所藏古製銅砲二十七門二百目・三百目・五百目等ナリ、百目抱打銃十八門、其他銅彈大小三万余個、或ハ陣鐘ノ類數十個甲州流製式ノモノナリ、鑄滅スヘキ旨令セラレタリ、

234 ○二月七日大坂飛報ニ曰ク、旧臘十二月、横浜ニ於テ購求セラレタル汽船永平丸、正月初メ大坂へ廻航、同廿三日国老小松帶刀及ヒ御側役大久保利通一藏搭艦、帰航ノ際播州明石灘ニ於テ暗礁ニ乘リ揚、艦底破裂、水船トナリ、小松ヲ初メ、乗組員辛フシテ明石ニ上陸、而シテ大坂ニ立歸リ、幕府ノ汽船ヲ拝借シ、帰航ノ準備中ナリトノ旨急報ス永平丸乗頭橋、口源右衛門、○此汽船ハ英国商人ノ所有ニテ、横浜ニ渡来セシヲ購求セラレタリ、三百馬力ニシテ、長三十二間余、速力モ速ナル良船ナリ、国父公不日御上洛ニ付、御召船ノ用ニ購求セラレタルモノナリ、航海不練ナルカ故暗礁ニ触レタリト云フ、

235 ○二月七日、本日両御旗本其他諸隊操練アリ、其人員総計二千八百余人、大砲十六門、黎明御城下へ着到、五

ツ時砂揚場へ行軍演習ス、雨リ車軸ヲ流スカ如シ、

二月十日 式部川上久美

236 ○二月八日達、三郎様御事不日御上京ニ付、汽船買入

ノ為メ御軍賦役集成館掛竹下清右衛門〔短刀〕・御用部屋筆者

税所容八〔喜三左衛門、容八、長藏、今三篤ト呼ブ〕長崎へ派遣セラル、本月

廿日迄買入廻航スヘシトノ趣ナリ、過日永平丸明石灘

ニ於テ沈没シタルカ故、別ニ購求セラル、者ナリ、

右ニ就而、從駕ニハ小松帶刀清・島津主殿久備、永吉郷三  
領、谷川次郎兵衛武久・中山中左衛門善、其他大小ノ吏  
員数十名本日拜命ス、○御上洛アルヘキヲ過日來一般  
洩聞シ從駕冀望ノ者夥シク、本日小松等拜命セシヲ聞  
ヒテ、切迫懇願スル者続々、応接ニ困却セリト云フ、  
現今京師ノ形勢穩ナラス、殊ニ攘夷ノ

237 ○二月八日夕七ツ時頃、汽船一艘入港ス、小松帶刀・大

久保一藏等大坂ヨリ廻航ス、此汽船ハ幕府ノモノニテ、

過日我汽船永平丸、明石灘ニ於テ暗礁ニ触レ沈没シタ

ルカ故、小松等ハ大坂ニ立帰り、幕船ヲ拝借シ下糞シ

タルモノナリ此船後ニハ筑前福、岡藩預トナレリ、

238 ○二月十日布達、

三郎様御事、厚キ

勅命之趣御承知被遊、來ル廿八日御發駕御上京可被遊旨

被仰出候条、御手当向諸事無手拔様可取計候、此旨

向々へ可相達候、

239 ○二月十一日昼九ツ時分、沖ノ小島遠見番所ヨリ相凶ノ

狼煙數發セリ、從テ大門口遠見番モ同シク發セシカ故、

各所砲台ノ兵員、或ハ両御旗本隊太守公其他ノ諸隊各持

場へ馳セ集リタリ、然ルニ、近寄ルニ從テ日本標

勅命ヲ下サレタルニハ、大ニ感發シ、小松其他中山等ニ  
向テ種々論責頻願ス、然リト雖トモ、軍賦一定セラレ  
タルカ故、当直亦ハ隊制治定ノ人ハ異動スルコトヲ得  
ス、壯齡ノ輩ハ許可ノ有無ニ関セス猥リニ從駕セント  
企タルモアリテ、政庁甚タ困却セリ許可ヲ得ス從駕スル者  
ハ脱走ニ等シ、是國法  
ノ許サ、ル所ナリ、然リト雖トモ、其志ニ於テハ忠奮ニ外ナキカ故、  
政庁ニ於テ甚タ困却シタリ、実ニ士氣振興ニ生シタル一弊ナリ、

旗ヲ揚ケタルヲ見テ退散帰家セリ、這ノ汽船ハ、過日  
小松・大久保等大坂ヨリ乗り来リシモノニテ、一昨九  
日竹下清右衛門等ヲ長崎迄送り帰港シタルナリ、

243 ○二月十三日布達、海岸守備之令左ノ如シ、  
異国船前之浜へ渡来之節、桜島并大門口・祇園之洲遠  
見番所ヨリ相図砲打揚候煙節、八ツ後出役之御役場左  
ノ通り、

240 ○二月十一日達、国老川上筑後封多年職務正道精勤致シ

タルニ付、思召ヲ以鞍鐙拝領、諸掛并月番御免、出  
勤ニ不及旨拜承セリ、○同日達、御小姓組番頭島津伊  
織惠事、御用取扱向不公平之儀不少、其外同役中不和  
云々ノ趣ヲ以テ免黜セラレタリ、

241 ○二月十二日達、御用取次見習・御小納戸兼務中山中左  
衛門・大久保一藏、御側役・御小納戸頭取兼務ニ拜ス、

242 ○二月十三日達、京都警衛ノ為メ、重中小姓ト名シ、御  
城下士六十名及ヒ足輕三十名、至急出発スヘキ旨令セ  
ラレ、同十五日陸路肥後路ヲ取テ出発ス、此人員ハ悉  
ナ強壮ナル曹ニシテ、不日 国父公御上洛ノ御予定ナ  
ルカ故、警衛ノ為メ先発シ、伏坂ノ間ニ奉迎スヘキ旨  
内命セラレタリ、

一大番頭・御小姓組番頭之間一人、右之内月番一人者  
一ト先ツ勤場へ罷出、其外者定メノ場所へ出役、御  
側御用人一人、御側役一人、御趣法掛・御納戸奉行、  
右之通勤場へ可罷出候、御軍役奉行・御軍賦役之間  
一人、右之勤場へ罷出、其外定メノ場所へ出役、御  
船奉行一人、  
右御殿へ可罷出候、  
一御作事奉行二人、物奉行二人、御目付・御裁許掛之  
間二人、郡奉行二人、  
右、勤場へ可罷出、其外者定メ之場所へ出役、  
一御台所頭御春屋役、  
右、都テ御殿へ可罷出、  
一御徒目付二人、横目二人、  
右、御殿へ罷出、其外者定メノ場所へ可扣居候、

一御用人一人、同御軍役掛一人、同月番一人、

右、勤場へ罷出、外掛之儀者定メノ場所へ出役、

右之通被 仰付候条、其外之御役場者出役ニ不及、与

中ニ至ル迄都テ在宿致、兼テ御手当被仰付置候面々ハ

勿論、一統不致動揺、無用ニ奔走屹ト不相成候、尤モ

御手当向ニ付テハ、兼テ申渡置候通り堅ク可相守候、

此旨大番頭・御小姓組番頭へ申渡、可承向々へ不洩様

急度可申渡候、

二月十三日 帶刀小松

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一三三五号・「名越時敏

史料一」三四三頁「異国船前之浜江渡来之節」と同文

なり〕

244  
○二月十三日達、

異国船御手当之次第、

一山川辺江四艘以上ノ異国船相見得、内海之様可乘入

模様モ候者、兼テ郷々小高キ所へ遠見番所・烽火台

等取建置キ、且ツ大砲五発位ヲ打チ、直ニ烽火可相

立候、

但、烽火台等取建之場所ハ、山川・指宿・今和泉・

喜入・谷山・垂水・新城ノ七ヶ所ニ定ム、

一右ニ付、前之浜へ四艘以上ノ異国船相見得候者、直

ニ諸手当可有之候、又者一二艘ニテモ碇泊応接之上

手切之模様モ候者、掛リ御家老ヨリ御軍役奉行差図

次第脱カ、早鐘一度ニ二ツ宛続ケ打、一呼吸ヲ置キ二ツ

打ツ、此相図ニテ御作事方并上下両町・西田町三ヶ

所之太鼓相鳴シ、其外吉野・草牟田・郡元等ハ最寄

之寺鐘相鳴シ、又者御馬乗役庄屋所へ相図ヲ告ケ候

次第可有之候、御作事方局内又ハ上町・下町・西田町ノ四ヶ所、

一右通相図相鳴ラシ候節者、御先手人数一番組・二番

組弁天波戸、三番組大門口台場、四番組調練場、五

番組新波戸、六番組祇園洲台場へ早々馳付キ、御差

図可相待候、此ニ記ス処ノ組々ハ、各砲台大砲、

一御旗本人数者、御本丸下ヨリ護摩所辺へ罷出、右同

断、

一三郎様御旗本人数者、二ノ丸下ヨリ造士館・南泉院

辺江、右同断、

但、当分御手当被仰付置候御城下守衛人数者、本

之場本之場トハ更改セサルヲ云、二被振向候、

一御城下守衛六組、右者演武館又者御台所御門内辺江、右同断、

右、依時宜 御姫様方為御警衛被召付賦ニ候、

一両御旗本人數之儀者、 御一方様 御留守之節迎モ

右集り場へ罷出、御差図可相待候御一方御留守トハ、仮令へハ国父公御上洛跡

等ヲ云、

一右外人數十五歳ヨリ五十八歳迄之間、各御先手与頭

備之次ニ相集、右同断此ノ老若ノ兵ハ、予備心、援メ為トスル者ナリ、

一諸郷・私領之儀モ、内外共ニ海岸有之候分者、地形

之遠近險易、兵卒之衆寡ニ從ヒ、互ニ可致救応事、

一右通夫々集り場へ早々馳セ付、大小砲其外要具相揃、

戰爭之致用意、弥手切レニ及ヒ、征討之時機ニ候者、

御家老ヨリ御軍役奉行・御軍賦役差図次第、鐘樓之

太鼓三ツ続ケ打チ、是又一呼吸ヲ置キ可相鳴候間、

是ヲ手切レ之相図ト可相心得候、

以上、

二月十三日 御軍役方御家老座印

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二四〇号・「旧記雜録

追録八」三九六の二号・「名越時敏史料一」三五九頁

「異国船御手当之次第」と同文なり〕

245 ○本月初ヨリ外国事情視察ノ為メ派出セシ御軍役奉行新

納次郎久徳四郎後ニ刑部、又ハ中三、去ル十一日帰麁届出ノ趣、生麦

ニ於テ我カ藩士英商ヲ斬殺シ、或ハ傷ケタル事件、彼

国政府ニ於テ万国公法ニ則リ、幕府へ向テ責論頗ル猖

獗、四五月中ニハ必ス一隊之軍艦差向ケ、時機ニ依リ

麁灣へ回艦要求スル旨アラントス、幕府ハ百方説諭ニ

及フト雖トモ、承伏ノ勢ニ非ザル趣、其他長崎ノ事情、

或ハ各外国ノ形勢ヲ探訪シタリ、英船鹿兒島へ渡来ノ

形勢ハ虚妄ナラサルカ如シ、故ニ海岸ノ守備一層嚴密

ニ議シ、渡来ノ上応接ノ人員モ内命セラレタリ、

246 ○二月十九日、本日 国父公御上洛御首途ノ御式、御先

規ノ如ク執行セラレタリ、

○同日 太守公ハ御休息所へ、国老及若年寄・大目付・

大番頭・御小姓組番頭・御趣法掛御用人等被召出、御

達ノ趣、当時危殆切迫、乱兆目前ニ顯レ、殊ニ 国父

公不日御上洛ニ付テ、治乱ノ政務上意見腹藏ナク言上スヘシト御諮問アラセラレタリ、然レトモ即座ニ意見言上ノ者ナキカ故、御懇遇刻ヲ遷サレ、他日口述又ハ書面ヲ以テ、忌諱嫌疑ヲ不憚、存意言上スヘキ旨達セラレタリ、

247 ○二月十九日、御筆又ハ御口達之覚左ノ如シ、

口達之覚

家老中江

国政変革永世不朽之治体相居候儀、実以不容易訊者勿論、方今内外危急之世態ニ臨ミ候テハ、殊ニ至極之場合ト存候、依之 三郎様御帰国涯昨秋八月御帰国ヲ指ス被 仰出候通、為

天朝国家深被遊 御配慮、富国強兵、海防守禦之術ヲ初、士風一新文武磨励之道ニ至リ、昼夜被為碎 御肺肝、精々御世話被為 在、我等ニ於テモ重々及心痛候得共、今日ニ至リ其詮モ不相見得、既ニ御発駕モ近寄り候得者、必至ト当惑、飲食モ咽ニ下ラサル仕合ニ候、事ノ

行ハル、ト不行ハ畢竟我等之不肖無申迄候得共、枢要之重任其責ヲ免レ難ク候得者、猶又為国家断然死力ヲ尽シ呉度、兎角数十年來之弊風動モスレハ因循苟且ニ涉リ候故、時世ニ後レ候儀而已有之候間、能々時務ノ然ル所以ヲ觀察シ、常例古格ニ泥候腐腸ヲ一洗シ、非常之節ニ応スルノ活法ヲ用ヒ、大変革ノ基本判然相立候様有之度、当時ハ 大樹家ヲ初メ変革被相行、旁不可失機會時ニ候、幾重ニモ時世切迫、尋常之処置ニテハ中々六ヶ敷誤ヲ相弁シ、

三郎様御留守中之儀者勿論、右之御趣意国内ニ拡充シ、大業成就之処、各職掌ニ付存寄之趣意不差置可申聞候事、此時ニ方リテモ固陋ノ説ヲ立、或ハ旧慣ヲ墨守シ、或ハ名分ヲ弁セサル頑愚ノ曹モアリテ、時勢適当ノ変革ヲ忌嫌シ、種々障礙ヲナセシモアリ、

二月十九日

〔本文書は「旧記雜録追録八」三九七号・「名越時敏史料一」三五〇頁「口達之覚」と同文なり〕

248 ○同日、御親書ノ布令左ノ如シ、

## 家老中江

以

勅命攘夷之儀被 仰出、於幕府御請相成、猶策略寬急之

次第者、大樹公 御上洛御決議之上、

叡慮可奉伺卜之事候処、 三郎様御儀追々從

天朝幕府御用召之被為蒙 御内命、被為遊 御上京候、

就而者屹卜 御建議之御趣意モ被為在候間、何レ御上

京之上大謀御決定可被為 在候、依テハ万一御留守中

前之浜へ夷舶致渡來候者、兼而申付置候法令堅固ニ相

守リ、人々不致動搖儀肝要之事ニ候、攘夷之

勅命相下リ候ヲ心得違、若シ暴卒之挙動有之候而者、第

一手許之号令不行屆場合ニ相当リ、且ツ

皇国之治乱ニ相係リ候、大事ノ將ニ決定セントスルノ機

ニ臨ミ、無名之事ヲ醸シ候而者、実ニ奉討

朝廷無申訳事ニテ、

朝議決定

勅諭相下リ候上者策略寬急ニ応シ、如何様トモ全国遵奉

致シ、自ラ攻守之命令可相加候条、一同不勘弁之儀共

無之筈候得共、 三郎様御留守中ニ相成候得者、一入

令配慮候間、克々輕重ヲ慮リ、右之旨聊取違無之様諸  
士末々迄モ可申聞事、

二月十九日

〔本文書は「名越時敏史料一」三五二頁「家老中江」と

同文なり〕

右之御書取、御家老・若年寄・大目付・大番頭・御小  
姓組番頭・御側御用人・御側役・御軍役奉行之面々ハ、  
別段御休息所へ被召出、細カニ 御沙汰之趣被為 在  
タリ、諸士へハ銘々組頭宅へ召集メ拜聞セシメ、而シ  
テ一般へ布達セラレタリ、此御書取ノ趣ヲ拜承シ、一  
同方向ヲ一ニシ、時態ノ已ムヲ得サルヲ弁知シ頗ル奮  
起セリ、殊ニ御政体变革ヲ発セラレ、或ハ御軍制一新  
ノ令アリテ、海陸ノ守禦一層嚴整セリ、

249の1

○二月廿日達、

稲富〔広哲〕數馬

右者、亡調所笑〔広郷〕左衛門在職中、欺上輕下、奸曲私欲ヲ  
專ニシ、国体ヲ損シ風俗ヲ乱シ、邦家ヲ覆シ危ニ至ラ

シメ、其魁首ト成リテ阿諛〔諛カ〕之者ニ党シ、重疊極罪之者候ニ付、御先代様ニモ 思召被為 在候間、屹度〔衍カ〕モ可被 仰付候得共、死後之事ニモ有之、旁 御宥恕ヲ以家格被相下、代々小番へ被入置、左候而、被定置候外、持高御取揚被仰付候、

二月廿 式部川上  
久美

〔本文書は「玉里島津家史料二」四八八号の一部と同文なり〕

右、定置レ候外持高御取揚云云、代々小番ニ被下タル故五百石余残シ置キ、其他二千余石ハ没収セラレタリ調所カ職務上ノ履歴ハ、○稲富ノ苗字ハ調所氏ノ古名ナリ、齊興公御伝中ニ詳記ス、故ニ笑左衛門病死ノ後、幕府ニ憚ル旨アリテ内諭セラレ、稲富ト改唱セリ、○数馬ナル者ハ笑左衛門カ嫡孫ナリ、長男ハ笑太郎ト呼フ、父笑左衛門国老ノ重職ナルカ故、僥倖ニモ御側御用人ノ職ニ昇レリ、元来痴鈍ノ生質ニテ、白痴ノ名アリシ者ナリ、

○編者曰、笑左衛門〔広郷カ〕ハ、国老職ニ在テ功勞尠カラスト雖トモ、能ク之ヲ論スルトキハ達書ノ如ク罪蹟

又甚多シ、今ニシテ功罪論償スルコト能ハス、詳ニ前編ニ記ス、

249の2

○同日達、

海老原宗之丞〔清熙〕

右者、在職中亡調所笑左衛門江一味致同心、欺上輕下、奸曲私欲ヲ專ニシ、国体ヲ損シ風俗ヲ乱シ、邦家ヲ覆シ危ニ令至候儀共、畢竟謀主トナリテ姦意ヲ助候者ニ付、御先代様 思召モ被為 在候間、屹度〔衍カ〕モ可被仰付候得共、御宥恕ヲ以被処遠島候屋久、島

二月廿 式部川上  
久美

〔本文書は「玉里島津家史料二」四八八号の一部と同文なり〕

編者曰、此者少シク才識アリ、鹿兒島内ノ丸ニ生長ス、狡黠佞智凡ニ抽ツ、幼ニシテ貧窮ナリ、十八九年ノ頃ヨリ下代又ハ藏役人等ノ職ニ就キ、金錢ヲ博取シ、廿五六年ノ頃ヨリ藏方目付ノ職ニ転シ、大坂邸ニ在勤シ、調所ニ佞媚シ其功モ寡カラス、登用セラレテ御側御用

人・当番頭・御趣法掛ヲ奉シ、専ラ理財ノ事ヲカメ、

後弘化ノ始 齊興公御軍事改正ヲ調所ニ命セラレシ時

担任シ、其功少カラスト雖トモ、罪状ノ概略達書ノ如

クニシテ、功ヲ以テ罪ヲ償フコト能ハス、実ニ罪セサ

ルヲ得サルノ奸人ナリ、

〔貼紙〕久宝  
〔高請〕  
島津豊後・三原藤五郎・永江休之丞・  
福崎助八等、達書得テ記入スベシ

249の3  
○同日達、

島津織之介

右者、其方祖父〔島津久徳〕将曹事、在職中權威ヲ振ヒ私欲ヲ構ヘ、

生質暴戻不公平之処置多ク、大ニ国家ニ害ヲナシ候者

付、

御先代様ニモ 思召被為 在候間、屹度被 仰付筈候

得共、家柄之儀殊ニ隠居之事候付、 御宥恕ヲ以テ慎

被 仰付候、左候テ、依願御役御免被成置候得共、御

取返ニ而、御役御免卜相心得被下置候、一世御養料高

百石御取揚被仰付候、

三月 日 大藏島津久徴

編者曰、大奸ハ忠ニ似タリト、実ニ島津将曹ナル者

ノ謂カ、元来碓山ノ苗字ナリシカ、 師久公第五世 貞久公

三子、薩摩国碓山城ニ居ル〔平ノ〕血統ナルヲ以テ、弘化ノ

末 齊興公尊旨ヲ以テ島津ノ称号ヲ賜リタリ、当時

国老職ニ在テ威權甚シク、大ニ富貴ヲ極メタリ、達

文ノ如ク性質暴戻奸黠ナル者ナリ、同時島津豊後ナ

ル者ト調所カ奸ヲ繼テ、俱ニ国政ヲ乱リタル者ナリ、

250  
○二月廿日布達、

一 御家老

一 若年寄

一 大目付

一 大番頭

一 御小姓組番頭

一 御趣法掛〔御側御用人脱カ〕

一 御側役

一 御軍役奉行

一 御軍賦役

一 郡奉行

右者、是迄四ツ時出勤、八ツ時御暇ニ被定置候得共、

当今不容易時世、内外多端ノ御処置御変革ノ折柄、繁  
務之事候間、以来七ツ時御暇ニ被相定候段被 仰出候  
条、此旨表方江致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

但、大番頭・御小姓組番頭・御軍役奉行・御軍賦役  
之儀、調練等之節者御届之上退出可致候、

二月廿日 大藏島津 帶刀小松

久徵 但馬川上 式部川上

久運 但馬久美

〔本文書は「名越時敏史料」三四三頁「御家老」〕と同  
文なり〕

251  
○二月廿一日達、

一 御趣法掛

右者は迄御役場被召建置候得共、 思召之訳被為 在、  
以来被廢、是迄御趣法方御用之儀者、御勝手方掛・御  
側御用人、御側役ニ而致取扱候様被 仰出候、

但、御趣法方書役之儀者、御勝手方御用人坐打込ニ

被 仰付候而、以来御勝手方御用人坐書役ト相唱、

席順之儀者年数ヲ以テ相定候様被 仰付候、

二月廿一日 帶刀小松  
清廉

〔本文書は「名越時敏史料」二一八頁「一御趣法掛」〕と  
同文なり〕

御趣法掛御用人ハ、御側御用人・御側役・御納戸奉行  
等ノ本職ヨリ命セラレタリ、御勝手方掛御用人トハ別  
席ナリ、御勝手方御用人ハ定格ノ出入ニ罹ル事務ヲ掌  
リ、御趣法掛ハ特別出格ノ出納、或ハ理財ノ事務ヲ執  
リ、經濟上ニ端ニ処分シ、御趣法掛ハ事務繁忙権域広  
ク、御勝手方ハ定規ノ事務ノミヲ執レルカ故、自ラ権  
域狭小ナリ、○御趣法方ノ役局ハ享保ノ末創設セラレ、  
經濟上ノ法方ニ関シタル一小局ナリシニ、安永ノ末ヨ  
リ逐次権域拡マリ、天保ノ中頃、国老調所笑左衛門へ  
御勝手方改革委任セラレシ以来一層擴張シ、理財出納  
勸農等、經濟ニ係ル事務統轄ノ要局トナレリ、故ニ御  
勝手方御用人ハ稍有名無実トモ云フヘキニ至レリ、然  
ルカ故、今回御勝手掛ノ名義ヲ存シ御趣法掛廢セラレ  
タルハ、名義至当ノ措置ナリ、

252 ○同日達、

一 御勝手方掛

一 御用人

右、御役場 思召之訳被為 在、以来御引取被仰付候

テ、当分相勤候掛御用人ハ御用人座御用人トハ表御用人座ヲ云フヘ相勤

候様被 仰付候、

二月廿一日 帯刀小松清廉

〔本文書は「名越時敏史料二」一七頁「一御勝手方掛」と同文なり〕

253 ○同日達、

一 御勝手方調掛

右、御趣法方調掛之儀、以来右之通名目被相替候旨被

仰付候、

二月廿一日 帯刀小松清廉

〔本文書は「名越時敏史料七」三八六頁「一御勝手方調掛」と同文なり〕

調掛ノ人員ハ、諸奉行職ノ中ヨリ理財出納之事ニ長シ

タル者ヲ撰抜シ、命セラレタル者ナリ、多クハ物奉行・御代官等ノ中ヨリ撰挙セラレタリ、

254 ○二月廿一日、太守公九ツ時分ヨリ政庁御家老座御出座、政

務取扱ノ実況御親覽アラセラレタリ、御舎弟島津図書

殿久治、宮之城領主・島津周防殿忠今珍彦、鑑重富領主ニモ陪從セラレタリ、

図書殿ハ此内特旨ヲ以テ政庁出席ヲ命セラレタリ、

太守公政庁へ御出座、事務取扱之実況親視セラレシハ

近代未聞ノ事ナリ、当時内外多難、殊ニ藩政改革ノ際、

加之鎖攘ノ

勅命下リ、守禦ノ準備一層厳整セラレ、当路ノ諸局ハ出

退時限ヲモ更メラレ、実ニ非常ノ時ナルカ故、御親シ

ク政庁ニ臨マレ実況御覽アラセラル、モノナリ、従来

政庁へ親臨アルハ、御知政御就封ノ時ニ限りタルカ如

シ、齊彬公ニモ御初入部ノ際、御先規ノ如ク、各局

御親臨アラセラレタルノミナリ、其他近世曾テ聞カサ

ル所ナリ、御親書ニ記サレタルカ如ク、危殆切迫ノ世

態ナルカ故、躬ラ先ンシテ其實ニ当ラセラル、ノ尊旨、

一般感佩セシコトナリキ、

255の1

〔本文書は二四七の一号に同じ、本文略〕

255の2

一昨十九日、我々并若年寄・大目付・大番頭・御小姓  
与番頭・御側御用人・御側役・御軍役奉行、御休息所  
へ被 召出、非常之時世御変革御一条等細々 御沙汰  
之上、猶又 御別紙之通

御筆ヲ以被仰出、実ニ臣子之罪不一方 御配慮之程奉  
恐入候、依之方今之時世篤ト致勘弁、各職掌ヲ尽シ必  
至ト差ハマリ、此涯成巧相立候様無之候而者、屹ト不  
相成候、且亦前之浜へ夷船渡来之儀ニ付而者、 御筆  
ヲ以被 仰出候通、至重至大之時機ニ候間、急度 御  
趣意相守可奉安 尊慮候、此旨謹而奉承知、支配下下  
役等へモ篤ク可申渡候、

二月廿一日

大藏 島津久徴

帯刀 小松清廉

但馬 川上久

式部 川上久美

〔本文書は「名越時敏史料」三三二頁「一昨十九日我々

〕と同文なり

256 ○同日布達、

三郎様御事、来ル廿八日御発駕御上京被遊筈候処、来  
月四日ニ被召延候段被 仰出候、此旨向々へ可相達候、

二月廿一日 式部 川上久美

御発駕延引セラレシハ、汽船購求ノ為メ、過日竹下・  
税所ノ兩名ヲ長崎へ出サレ、一艘ハ既ニ廻航シタリト  
雖トモ、今一艘不日航着ノ上、或ハ京師ノ報知ヲ待チ、  
其形況ニ依リ御出発ノ御予定ナリ 汽船一艘ニテハ從駕、又ハ警衛ノ兵員等搭載シ難  
ケレハ、  
ナリ、

257 ○二月廿三日、五代才介 友厚 支那上海ニ於テ購求ノ汽船廻

着ス、長二十五間余、百五十馬力、代価八万元、我金  
ニ算シ凡ソ四万余両ニ当ル、○五代ハ正月月初長崎ニ出、  
而シテ支那地方ハ売用ノ船多ク、且ツ価モ廉ナリトテ、  
英商「ガラバ」ナル者ト上海ニ航シ購求シタリト云フ、  
果シテ良船アリテ、価モ廉ナリシトナン、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一三四号と同文なり〕

258 ○二月廿五日、国父公御上洛ニ付、本日於大奥太守公

ヨリ御別杯ノ会催サレタリ、公子方及ヒ松寿院殿種子高家未亡人 齊興公 妹君ナリニモ御列会アリ、

259 ○二月廿七日、高崎佐太郎正 朝彦親王 風、中川宮及ヒ近衛家ノ御内

旨ヲ含テ下覽ス、曰ク、昨秋以来数回促サレタル如ク、国父公速ニ御上洛、鎮撫ノ方策立ラルヘキ厚キ内

勅ノ趣、或ハ中川宮・近衛家、其外関白殿下、或ハ議伝 両奏等ヨリ御依頼之御密書ヲ護シタリ、

〔貼紙〕各御書翰等記載仕度〔貼紙〕此御書見当らず、後日見当り次第」

○高崎カ報ニ曰、総裁職松平春嶽公ハ、正月廿二日江戸発程、上洛ノ途ニ就キ、松平容堂殿モ廿五日江戸発途セラレタリ、

○青蓮院尊融法親王、二月朔日御還俗アルヘキ旨

勅命ヲ下サレ、則ヨリ法衣ヲ脱キ蓄髮セラレ寺内ヲ出、

広小路一乘院宮御里坊ヲ仮館トセラレ、同十六日中川宮ト称セラルヘキ

勅宣アリ、而シテ一向ヲ国事ニ関涉シ玉ヘリトソ、

○宮御還俗国事御関係

主上御補佐ノ地位ニ立タセラレンコトヲ 国父公數回獻言セラレタルハ前ニ記スルカ如シ、宮ニモ積年奮憂セラレシ事故、是ヨリ陽ニ其地位ニ蒞マセラレ、御志望モ必ス達セラルナラント云フ、

260 ○二月十一日、長藩士久坂〔安瑞カ、連武〕・来島〔政久〕又兵衛・桂〔小五郎〕幸五郎〔久木戸孝允〕・木原庸蔵、熊本藩士轟武兵衛、寺島忠三郎〔長州藩士、昌昭〕等ノ暴

客数名、関白鷹司輔熙公ノ御館ニ推參シ、天下ノ大事御直ニ告ケ奉ラント拝謁ヲ乞ヒケルニ、予テ暴論者ノ聞ヘアル輩ナルカ故、御所旁ノ旨ヲ以テ御面接ナリ難シト達セラレシカトモ、押シテ拝謁セント切迫シ、其言ニ、天下ノ一大事今日中奏聞セラレ、

勅裁ナキトキハ大事ニ変スヘシ、依テ拝謁ヲ允サル、マテハ邸内ヲ退カサルヘシ、事ニ依テハ御座席ヲ穢ス事ニモ立到ラント脅迫必至ノ形勢ナルカ故、殿下大ニ驚カセ玉ヒ、已ムコトヲ得ス面接セラレシニ、曰ク、

將軍家人洛ニ先シ攘夷ノ期限一定セラレ、或ハ公卿方ノ人材ヲ撰ヒ国事掛亦ハ朝議参与ノ官ヲ置キ、或ハ各藩士ノ中ヨリ御親兵ヲ置レン等ノ件々逼迫論責、其形勢甚粗暴ナルカ故、殿下モ進退茲ニ極リ玉ヒ、深夜ニ及ヒ参内セラレシニ、

主上モ深更ニ及ヒ遽然ノ参内ナルニ驚カセ玉ヒ、暴徒等カ言上ノ旨御許ナキカ將タ遷延セラル、時ハ、變動目下ニ生セン事ヲ憂患セラレ、

朝議ノ隙モナク

勅許セラレタリ、然シテ〔実美〕三条・姉小路等同論ノ公卿方、

同夜一橋殿ノ旅館ニ推参セラレ、既ニ攘夷ノ期限

勅許ノ上ハ、幕府ニ於テ御請アルハ無論ナリト責論セラ

レシニ、一橋殿ニハ至大至重ノ事柄、素ヨリ一人ノ決

スヘキニ非ズ、將軍着京ノ上御受アルヘシト百方説

〔頭注〕「〔寛カ〕時春嶽ハ〔天カ〕憤激シ、公卿〔前ニ進ミ〕寄リ〔三〕飛掛ラントノ形迹ナリケ

レハ、容堂公別席ニ誘引シ説論セラレシトゾ、甲子ノ春京師ニテ一橋公・容〔容カ〕堂

守〔容カ〕殿等ヘ会集ヲ促サレ、論判刻ヲ遷シタレトモ、三

条・姉小路等ノ各卿ハ、既ニ関白殿ヨリ奏

聞ノ上、

勅許アリシ上、後見・総裁ノ二職ニ於テ御受ナキハ遠

勅ニ当ル等ノ言ニ及ヒ、遂ニ止ム事ヲ得ス、將軍家人

洛ノ日ヨリ十日間ノ滞京トシ、帰路二十日ニ予定シ、

合テ三十日ノ後、四十日ヲ過サス、拒絶ノ布令ヲ大小

各藩ニ伝フヘシト決定セラレ、三条等ノ諸卿ハ夜明ケ

テ後ニ退館セラレタリトゾ、

261 ○同日、松平長門守〔定広カ〕元徳定殿ハ、家臣久坂等カ関白殿下ノ館

邸ヘ推参セシ趣伝聞セラレ、予テ計画ノ事ナレハ、夜

中鞭鐙ヲ合セテ参館セラレシニ、着館ノ頃ハ関白殿ハ

ヤ参内ノ後ナリケレハ、〔拝晤カ〕拜晤ニ及ハス帰ラレシトゾ、

其時長門守殿ハ洛外嵯峨ノ天龍寺ヲ宿陣トシ、許多ノ

人員ヲ置テ、専ラ軍事ニ外ナク、久坂等カ関白殿ニ推

参シ、脅迫責論喋合セシ事ナルカ故、久坂等推参ノ後、

鞭ヲ揮フテ参殿セラレシト云フ、又同夜ハ久坂等ノミ

ナラス、長州左袒ノ各卿モ関白殿下ニ推参セラレ、痛

論切迫セラレタリ、即チ正親町大納言実徳卿・橋本幸

相中将実麗卿・三条西中納言季知卿・豊岡大藏卿随資

卿・花園中将公総朝臣・滋野井中将実在朝臣・正親町

少将(公董カ)公董朝臣・壬生修理太夫(大夫カ)基修朝臣・錦小路少将頼

徳(宿願カ)宿称・清岡少将長説朝臣・四条少将隆譚朝臣・沢主

水正宣嘉朝臣等(十一卿カ)ノ十一卿ナリ当時十三卿ト唱フルハ、此ノ諸卿二三条実美・姉小路公知卿ヲ加ヘテ十三名ナリ、長藩又ハ浮浪、此ノ各卿モ久坂等カ所論

ト同シク、頻論痛責セラレタリ、予テ喋合スル処逼迫

### 論責、迅速

勅諭ヲ促サスンバ志望達スヘカラサルハ、薩論主張ノ

宮・堂上方アリテ、国父公御上洛アリシ後ハ動シ得

ヘカラサルヲ察シ、此ノ如ク関白殿ヲ恐嚇シ、

勅許ヲ脅促シタル者ナリト云フ、真ニ乱臣賊子ノ所為モ

亦奮ナラス、責任ノ將軍家着京モ不日ニ在リ、殊ニ至

重至大ノ国事ナルカ故、假令ヒ真ニ

叡慮迅速ヲ要セラル、ト雖トモ、將軍家ハ素ヨリ衆諸

候ノ意見モ諮問セラレ、其宜ヲ採リテ

宸断アルヘキニ、一二藩或ハ数名ノ各卿、或ハ浮浪輩カ

私意ヲ達セント脅迫シ奉リ、

勅許ト唱ヘ期限ヲ定メタルハ、是ヲ何トカ謂ハン、実ニ

長大息ノ極リト云フヘキナリ、斯ノ如ク暴奸ノ所為ヲ

以テ天下ノ大事ヲ謀ラントスル輩ハ、国賊姦臣ト云フ

モ尚ホ足ラストス、○十三卿ノ中ニ、三条・姉小路ノ

二卿ハ長藩ト殊ニ親密ニシテ、百事長州ノ為ニ補助セ

ラレ、生計上ニ於テモ悉ク該藩ノ給助ニ懼リ、中ニモ

姉小路ハ未タ白面ノ一書生ニシテ、弁口ニ達シ論話ノ

如キハ長所ナリト云フ、三条ハ愚ニ近ク、姉小路ニ比

スレハ廻カニ劣レリト云フ、其他ノ各卿ハ勢利ニ走り、

雷同付和ノ輩ナリ、○久坂等カ関白殿下ヲ脅迫責論ノ

挙動ハ奸暴ヲ極メ、今夜中参内、

勅許ヲ促シ玉ハサルニ於テハ、恐ナカラ此御座席ヲ穢ス

ニ立到ルハ勿論、洛中直ニ汗馬ノ蹄街トナリ、砲声耳

ヲ塞クノ惨状ニ陥リ、恐多クモ

玉座モ動カセラル、ノ騷駭ヲ生スルヤ疑ナシトノ言ヲ以

テ劫シ奉シトナン、故ニ婦女子ニ等シキ関白殿大ニ恐

懼シ玉ヒ、事情奏

聞ニ及レシカハ、畏コクモ

叡慮ヲ惱シ玉ヒ、遂ニ

勅許セラレシトソ、○斯ノ如ク脅迫シテ期限ヲ定ムル等

ノ挙動ニ及ヒタル、其因テ起ル所ハ、中川宮及ヒ近衛



朝幕ニ献言セシコト数回、其底心開港佐幕ニ外ナキヤ明ナリ、今ノ形勢ニ措クトキハ、有志ノ藩々ハ素ヨリ、憂国ノ人士ハ悉ク頭ヲ刎ラルニ立到ルヤ必定ナリト、百方詭言流説ヲ醸シ、攘斥セントノ策謀ニ奔走竭力セリト云フ、以上藤井良節カ友人へ送ル処ノ書牘、或ハ高崎佐太郎カ口述ノ趣ナリ、

262 ○二月廿八日達、物頭之名目被廢、御兵具奉行ノ名目ニ被復、而シテ御兵具奉行席御役場新ニ被召建、御兵具奉行末席ニ被仰付候旨被 仰出タリ、布達左ノ如シ、

〔貼紙〕  
〔令書得テ記入スベシ〕

〔与方吟味役。御軍賦役見習。此二職創置ノ令書モ得テ記入スベシ〕

○御兵具奉行ノ職ハ 義久公御代ヨリ所見アリ、名称ノ如ク兵器ヲ掌レルモノナリ、寛永元甲申十二月物頭ト改唱セラレ、天明二壬寅四月御槍奉行・御弓奉行・御鉄砲奉行ノ三職ニ分チ、総名物頭ト唱フヘキ旨令セラレタリ、○御兵具奉行席ノ職ハ今回ノ創設ニシテ、軍器製造局等関係ノ吏員、多クハ該席ノ職ニ拝シタリ、

○天明ノ度改唱シ、槍弓砲ノ三奉行ヲ置レシヨリ、御兵具方付属足輕槍弓砲ノ三組ヲ置レ、三奉各名義ニ依テ統轄シタリ、○又足輕ニ三種アリ、曰ク御兵具方、曰ク御納戸一名御小人、トモ唱、曰ク御広敷等ナリ、又外ニ御雇足輕ト唱フルモノアリ、各郷士ノ内、懇望ノ者ヲ一時庸役セラレタリ、是元来足輕ノ人員不足ナルカ故ナリ、

263 ○二月廿八日達、御役人并御役場新ニ被召立、詰席表御番所ニ被 仰付候旨達セラレタリ、布達左ノ如シ、

〔貼紙〕  
〔令書得テ記入スベシ〕

○同廿九日、拜命ノ人員凡十余名ニ及ヘリ、君側其他御目付等ノ職ニ在テ其当ヲ得サルノ曹ナリ、

264 ○二月廿八日達、御側御用人・御勝手方掛御用人勤伊集院平治〔久長カ〕、小根占郷地頭ニ拜ス、○町田式部大目付〔朱書〕内膳敷、寺社奉行勤、指宿郷地頭職ニ拜ス、兩名共ニ至急赴任、海陸軍備或ハ士風振起候様、誘導勸奨スヘキ旨命セラレタリ、両郷共ニ御城下咽喉ノ要衝ナルカ故、特旨ヲ以テ命セラレタル曹ナリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二四四号と同文なり〕

265 ○二月二十八日布達左ノ如シ、

265の1

異国船渡来之節諸向手当之儀、去ル申年中渡置候得共、  
猶又此節別冊<sup>軍賦</sup>之通被仰付候条、早鐘等之相凶相鳴  
シ候者、早速諸士之面々各請持之場ニ相集リ、御小  
姓組番頭へ届可申出候、左候テ、万一心得違相凶無之  
内馳出候乎、又者兼テ御定メノ場所へ到着不致、己之  
了簡ヲ以於他所何様之功劳有之候共可為曲事段、組中  
之面々へ平日御小姓組番頭并仕長等ヨリ厳令可有之候、  
此旨大番頭・御小姓組番頭江可申渡候、

但、依勤場急変之節迪モ、出役不相調向者其訳早々  
御軍賦役へ可申出候、

二月二十 但馬川上  
八日 久運

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二四一号と同文なり〕

266 ○同日達、

一 伊集院

一 市来

一 郡山

一 鹿兒島郡吉田

右之一陣到着之上者、寿国寺・千眼寺・笑岳寺・薬王  
寺江止宿之事、

一 国分

一 嚙吹郡

右之一陣桜島之内、横山・赤水辺へ同断、

一 蒲生一組

一 帖佐一組

右桜島之内、瀬戸村へ同断、

一 伊作

一 阿多

一 田布施

一 川辺郡山田

右一陣谷山へ同断、

右者、異国船内海江乗入候節者、相凶其外注進等相達  
候者、兼テ申渡置候御手当ニ基キ、早速右場所へ差越、  
到着之届物主へ可申出候、此旨地頭并地頭用達へ申渡、

可承向へモ可申渡候、

二月二十  
八日 但馬川上  
久運

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二四五ノ一号と同文な

り〕

267 ○同日達、

一 伊集院

一 市来

一 郡山

一 鹿兒島郡吉田

一 国分

一 贈吹郡

一 蒲生

一 帖佐

一 田布施

一 阿多

一 川辺

一 川辺郡山田

一 伊作

右者、異国船内海江乗入候節者、注進次第御当地又者

桜島等江夫々出役、受持之場所被相定置候ニ付テハ、

早鐘等之相凶相鳴候者、出役之儀御軍賦役ヨリ組合郷

之内一郷江可相達候ニ付、直ニ外郷へ相通シ候様兼テ

可申談置候、尤、物主之儀モ早速受持之場へ馳セ付、

着到之人数相円メ御差図可相待候、此旨可被申渡旨每

郷物主へ可申渡候、

二月二十  
八日 式部川上  
久美

上文ニ、物主之儀モ早速受持ノ場へ云云、諸郷隊ノ物

主モ惣テ城下居住ノ士ナリ、其郷ノ地頭或物頭等ノ内

ヨリ特撰命セラレタリ、又旗預或ハ談合役等モ御城下

士ニ命セラレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二四五ノ二号と同文な

り〕

268 ○二月廿九日達、

金壹万兩

重久佐次右衛門

右者、方今之世態内外多端之御用途ニ被為及候ニ付、

夫々理財之御趣法モ相立、後年之御見留十分被為居候

269  
○同日達、

金八千両

川井田藤助

長倉猪八郎

岩元政右衛門

坂元貞右衛門

右、重久達書ニ同シク、各通ヲ以テ達セラレタリ、金額ハ各同数ナリ、

二月二十小松九日清廉 带刀式部川上久美

〔本文書は「玉里島津家史料」二四八八号の一部と同文な

り〕

事ナカラ、今ニ当而者、為天下国家無御扱百端之御散財而已之御事候ニ付、右片書之通御借シ上被仰付候間、何レモ時勢奉汲受御請可申上候、

但、五ケ年限御返却可被成下候、

二月二十小松九日清廉 带刀式部川上久美

〔本文書は「玉里島津家史料」二四八八号の一部と同文な

り〕

此五名ハ当時藩内有名ノ金満家ナルカ故、此際御費途多端ナルカ故書面ノ如ク達セラレタリ、然ルニ重久ハ五名ノ中ニモ抽ンテ富有ノ者ナルニ、種々苦情ヲ唱へ、貯蓄匱乏ノ趣ヲ以テ訴フ旨アリシカハ、時勢ヲモ弁ヘス訴フル旨不忠ノ至ナリトテ、役職免黜謹慎命セラレタリ、其他四名ハ異儀ナク、三四回ニ及ンテ悉皆借上セリ、而シテ重久ハ譴責ヲ蒙リ恐懼シ、知行高一千石余ノ内七百石ヲ呈出シ、費途ニ充ラレンコトヲ懇願シタリ、知行高所有ノ制限ハ、弘化二年軍賦改正ノ時、家格又ハ役職ノ高下ヲ以テ規定セラレ、其際養父篤徳佐次右衛門町奉行職ヲ奉シタル故、一千石余所有特別ニ充サレタル者ナリ、同職同家格ノ者モ、元来ノ素姓ニ依リ一千石以上所有ノ成規ナリ、同人ハ下町商賈カ商賈ニシテ巨万ノ富ヲ致シ、天保ノ中頃国庫匱乏ノ際、金納シ士分ニ列セラレ、町奉行職ニ登用セラレタル者ナリ、当佐次右衛門ハ市来清次郎カニ男ニシテ、重久カ養子トナリシ者也、○川井田・長倉・坂元ノ三名モ同ク下町居住ノ商人ナリ、岩元ハ指宿郷ノ商人、何レモ天保ノ中頃、金納ノ為メ士分ニ列セラレタル輩ナリ、

○二月廿九日、江戸及ヒ京坂ノ飛報着覽、曰ク、現今種々ノ訛言起リ、中ニモ鎖港攘夷実行セラルノ説紛紜トシ

テ、人民枕ヲ安スンスルコト能ハス、横浜ニハ各外夷

追々軍艦差向ケ、現在米・英・仏・和蘭・魯等ノ軍艦

十余艘碇泊シ、其他各国商船二十余艘、実ニ桅檣林立

トモ謂フヘシ、又英国ハ大小十二艘ノ軍艦ヲ差向ケ、

其中四艘ハ長崎又ハ上海ニ往復シタリ、殊ニ生麦事件

ニ就テ頗ル猖獗ノ責論ニ及ヒ、幕府甚困却云云、以上

江戸ノ報、○京都ニハ一橋公・越前春嶽公・土州容堂

公、閣老板倉周防守・水野和泉守・小笠原壹岐守、其

外閣老板倉・水野・小笠原ノ三侯ハ、將軍家大小ノ役員多数滯

京、攘夷鎖港ノ御評議纏リ兼タリト、或ハ大小名モ

追々上京、細川侯モ旧臘十二月出京、舍弟澄之介・

京ノ諸大名左ノ如シ、

松平美濃守〔貼紙〕各実名・国邑乱スベシ 細川越中守〔長博〕〔長薄〕

松平相模守〔カ〕・福岡 松平安芸守〔慶徳〕 鳥取 廣島

有馬中務太輔〔慶順〕 久留米

松平淡路守〔茂留〕 阿

上杉弾正大弼〔齊憲〕 羽

丹羽左京大夫〔長国〕 奥

松平大和守〔直克〕 川越

松平佐渡守〔直巳〕 雲州

本多豊後守〔助藉〕 信

松平主殿頭〔忠和〕 島原

中川修理大夫〔久昭〕 濃

戸田采女正〔氏彬〕 大垣

大久保加賀守〔忠礼〕 小田原

藤堂和泉守〔高猷〕 桑名

立花飛彈守〔鑑寛〕 筑

松平讚岐守〔頼聰〕 高松

松平越中守〔定敬〕 桑名

松平阿波守〔齊裕〕 徳島

保科弾正忠〔正益〕 上

伊達遠江守〔宗徳〕 宇和島

池田信濃守〔政詮〕 備

佐竹右京大夫〔義就〕 出

松平肥後守〔容保〕 大

松平甲斐守〔保申〕 大

小笠原左衛門佐〔長守〕 越

井伊掃部頭〔直憲〕 彦根

酒井左衛門尉〔忠篤〕 羽

松平播磨守〔頼繩〕 州鶴岡

松平丹波守〔光則〕 信

稲葉右京亮〔久道〕 豊

酒井雅楽頭〔忠頼〕 高松

松平伊豆守〔信古〕 参

真田伊豆守〔幸次〕 州吉田

松平下総守〔忠誠〕 武州忍

小笠原大膳大夫〔忠幹〕 小倉

以上四十余藩、洛中洛外旧邸或ハ寺院ニ宿陣シ、或ハ重役其他ノ吏員ハ市中ニ旅寓シ、近代未聞ノ繁昌ナリ、○朝廷ニハ治世以来未曾有ノ御盛榮、年首朝賀ノ御式モ

受ケサセ玉ヒ、公卿方ハ素ヨリ在京數十ノ諸候参朝、拜賀ノ形況ハ実ニ近世ノ一大美觀ナリシト云フ、○或人ノ書牘中ニ、近衛殿本年朝賀ノ盛典ニ付テノ御言ニ、数百年來朝賀ノ大典ハ、僅ニ宮・堂上・所司代・二条城番等カ参賀ニ限レル者ナリシニ、本年斯ク盛ナルニ至リシハ全ク島津カ英斷、尊

王ノ道踏開キタルニアリトノ御言アリシト云云、実ニ近衛殿ノ御言ノ如ク、御築地内九六門内等ノ道路ハ、草葎生ヒ繁リ、人跡ノ通フ所ノミ砂礫ヲ見ルト云フヘキ形状ナリシカ、昨年夏ノ頃ヨリ倏チ草叢變シテ、大名・武士ノ衢トモ云フヘキニ至レリ、近衛殿ノ御言誣言ニアラサルハ衆ノ知ル処ナリ、

○堂上方ノ中ニ攘夷熱心ナルハ、天法輪三条殿・姉小路殿・三条西殿等ヲ首メトシテ、有栖川宮ヲモ同論ニ引キ入レ、長州・土州・水戸浪人、其外諸藩脱走ノ輩中ニモ久留米・熊本・福岡等ノ人多ク、其輩暴業ヲナ

シ、酒色ニ耽リ乱妨ノ所為アルニ依リ、人心恟々トシテ安キ心モナシ、昔義仲カ乱妨モ斯クコソアラント云云、○近々 將軍家御上洛ノ上ハ、攘夷御決定滞京十日ヲ限り直ニ東下、江戸着二十日ヲ過キス神奈川鎖港

ヲ達シ、若シ承服セサルトキハ撃払トノ 朝議ナリ云以上京師、○同時頃京都ノ形勢ハ、長土藩又ハ浮浪輩ノ報知 暴威ヲ振ヒ、市街ノ妨害甚シク、長人ハ当閔白殿ヲ貶斥シ、三条殿実美ヲ閔白ニ、姉小路殿ヲ左右大臣国事掛据ント謀リ、或ハ長州ノ若君長門守殿ヲ攘夷副將軍ニ任シ、 將軍家御上洛ノ上ハ差副、東下ノ命ヲ下サル、等ノ説、囂々トシテ混雜極マリタリ、然ルニ長門守殿ニハ帰国御暇申立ラレシカトモ、

朝廷御許容ナカリシ由、世説ニ一時ノ權謀ヲ以テノ申立ナリト喋々ス、実ニ洛中ノ雜沓言語ニ尽サレス、細事高崎ヨリ御聞取アレ云云 此書牘ハ姓名ヲ記サス、蓋シ藤井良節ナランカ、

○二月晦日達、  
右者、当時天下国家之御為、不容易多端之御用途ニ付、  
重久佐次右衛門

無御抛夫々所帯柄御吟味之上御貸上金被仰付候処、身上不似合之申分致シ、別而不届之至被思召候、全体亡養父佐次右衛門儀莫大之奉蒙 御鴻恩、太禄ヲモ不相応致所持候得者、加様之御時節御国用相弁、奉報恩コソ当然之時候処無其儀、返而不明白之苦情種々申立無和理、御趣意之程ヲモ不奉汲受段、重畳不忠之心底二候、屹度(衍九)モ被仰付筈候得共、御宥免ヲ以役儀差免、謹慎罷在候様被仰付候条可申渡候、

二月晦 式部川上  
日 久美

○国父公不日御上洛、其他当時海防專要ノ世態ナルヲ以テ、汽船購求ノ為メ竹下清右衛門・税所容八等出崎、英国商人所有ノ汽船買入、近日鹿兒島へ廻航スト云フ、  
○昨年春 国父公御上洛前ニ購求セラレタル汽船ヲ天祐丸ト名ツケラレ、此代価五万八千余両、次ニ横浜ニ於テ購求セラレタル者ヲ永平丸ト名ツケラレ、此代価六万余両、今回長崎ニ於テ購求セラレタル者ヲ白鳳丸ト名付ラレ、此代価四万八千余両、五代才介上海ニ於テ購求シタル者ヲ青鷹丸ト名付ラレ、此代価五万二千

273 ○是迄急変之節者、御火之見ヨリ太鼓相図可有之段申渡置候得共、以来御目付・御軍賦役ヨリ達シ次第、御兵

余両、以上四艘ヲ備ヘラレタリ、僅々一年未滿ノ間ニ大汽船四艘ヲ購求シタルハ、非常ノ英拳ト謂フヘシ、現今幕府ニモ汽船五艘・風帆船三艘ヲ備ヘタリ、各藩ニハ昨春末頃汽船ヲ備ヘタルハ全クナカリシニ、騷擾ノ世態ニ変シタルカ故ニヤ、各争テ購求スルコトナレリ、故ニ外夷ハ大ニ利ヲ得タリト云フ、長崎ニ於テ詔ヘタル数ヲ聞クニ、長州ニ汽船二艘・風帆船二艘、筑前福岡ニ汽船一艘・風帆船一艘、広島ニ汽船一艘、熊本ニ汽船一艘、佐賀ニ汽船二艘・風帆船一艘、雲州松江ニ汽船一艘、高知ニ汽船一艘、宇和島ニ汽船一艘、以上汽船九艘・風帆船四艘、壬戌ノ春末初夏ノ頃ヨリ本年癸亥ノ春迄ニ購求シタルハ、非常ノ世ニ必用ナルカ故、競フテ購ヒタル者ナリ、從テ外国人ハ巨万ノ利ヲ得、加之其価金ハ悉ナ日本金貨ヲ以テシ、他物ヲ用ヒタルニ非ラサルナリ、之カ為金銀ノ輸出夥シ、其外銃砲・彈藥ヲ購求スルニモ亦夥シ以上在崎中、原猶介報知

(貼紙)「或ハ四万二千円トモ記ス、札スベシ」

(反厚)

具所ヨリ太鼓之貝吹立候様被仰付候条、此旨物頭へ申渡、可承向へモ可相達候、

二月 登島津  
久包

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」一三二二号と同文なり〕

274 ○旧臘十二月布達セラレタル質素節儉布令ニ、羽二重・縮緬・八丈布等ノ類禁停、商人持合ノ品モ売買ヲ停メラレ、他国へ売出スヘシトノ令ヨリシテ呉服商人甚タ困却セリ、然レトモ売買ノ源ヲ止メラレタルカ故、一般倏チ質素ノ風ニ変シタリ、

275 ○昨年末文久二年壬戌金銀錢ノ融通、近年稀ナル好機ナリ、然レトモ米穀乏シク高直ナルニハ上下困究〔困窮カ〕セリ、御蔵払米モ十月末ヨリ滞リ、十二月廿日頃ニ至リ払ハレタリ、是レ取納方法改正セラレシニ依リ廻漕ノ滞リタリ、加之昨秋収獲十分ナラサル等ニ抛レリ、

276 ○当時全国一般高直、且匱乏ナルハ銅ナリ、如何ントナレハ外国商品ノ第一、次ニ各藩拳テ海防ノ為大砲製造

スルノ二ツニ依リテナリ、大坂ノ時価丁銅一斤百六十匁ノ価、銀ニ匁八九分ヨリ三匁二三分ニ内外セシカ、近頃

ニ至リ六匁四五分乃至七匁以上ニ騰貴セリ、全国各銅山ニ於テ一年ノ産額大凡七百万貫目ニ内外シ、其中外国輸出半ハ以上ニ及ヘリト云フ、此ノ如ク騰貴セシ故、本藩琉球通宝製造ニ就テ甚タ困却スル処ナリ、依テ国分・阿久根・加世田・甕島等ノ各所採掘着手セラレ、或ハ寺院ノ梵鐘・仏具ヲ鑄減シ、資料ニ供スヘキ旨令セラレタリ、○諸国寺院ノ梵鐘ヲ鑄減シ、大砲ニ鑄換スヘキ

276の1 詔ヲ下サレタルハ、安政元甲寅年十二月ナリ、詔書左ノ如シ、  
〔太政官カ〕  
大政官符五畿七道諸国司、応以諸国寺院之梵鐘造大砲・小銃事、

右、正二位権大納言藤原朝臣実万奉勅、夫外寇事情固所深被惱

宸襟也、況於緇素何有差異、頃年墨夷再来入相模海岸、今秋魯夷渡来畿内近海、国家急務只在海防、因欲以諸

国寺院之梵鐘鑄造大砲・小銃、置海国枢要之地備不虞、  
速令諸国寺院存時務、本寺之外除古來名器及報時之鐘、  
其他悉可鑄換大砲、為

皇国擁護之器及辺海無事之時、復又宜消兵器為鯨鐘不可  
〔存脱カ〕〔諸国脱カ〕〔宣カ〕  
異議者承知、仍宜行之、符到奉行、

安政元年十二月二十三日

權右中弁正五位上左馬佐藤原朝臣判  
〔兼行左衛門權佐カ〕

修理東大守長官四位上中務權少輔主殿左大史小槻宿  
〔東大寺大仏長官從四位上行中務權少輔主殿頭兼カ〕

禰判奉

上卿三条大納言実〔朱書〕「万」卿

奉行葉權中弁

〔本文書は「斉彬公史料 第二卷」三〇五ノ一号と同文な  
り〕

此ノ

詔ニ対シ、幕府ハ処分法ヲ各藩ヘ布達セリ、左ノ如シ、  
〔貼紙〕  
〔布達得テ記入スベシ〕

本藩ニ於テハ、同五年戊午ノ春、 照国公封内寺院ニ

在ル梵鐘ノ数及ヒ由緒或報時否ヤヲ調査セラレ、大小  
二百三十余口ヲ大砲鑄製局ニ集メ、鑄鎔ノ令ヲ下サレ  
ントスルノ際逝セラレ、而シテ後チ鎔減ヲ止メ、元所  
在ノ寺院ヘ還付セラレタリ、然ルヲ今回鑄錢ノ資料ニ  
鎔減ノ令ヲ布レタルハ、

勅命循奉ハ素ヨリ、 照国公ノ尊旨継述セラル、ノ英斷  
一般感賞セリ、加之貨幣ニ鑄換シ国人ノ便利ニ充ラル  
ハ、寛永ノ頃松平伊豆守信綱大仏ヲ鎔減、寛永通宝鑄製  
セシ英斷ニ異ナラス、元來仏ハ慈悲為善衆生濟度ヲ本  
旨トシ、己カ体軀ヲモ毀チ衆生ヲ濟ハ、則身ヲ殺シ仁  
ヲ為スノ言ニ同シク、況ヤ梵具ヲ毀ツヲヤ、然リト雖  
トモ、佞仏者或ハ凡庸ノ為シ難キ処ニシテ、道理弁明  
ノ人ニ非ラサレハ為シ得ヘカラサルナリ、

勅命下レルノ際或ハ幕府発令シタル時ハ、種々ノ妖言怪  
説起リ、中ニモ僧侶佞仏ノ徒ハ頗ニ誹議ノ説ヲ起シタ  
リ、殊ニ本願寺ノ如キハ訴フル旨アリシト云、各藩ニ  
於テ毀滅シタルハ本藩ト岡山藩ニ止マリ、其他大小藩  
ニ於テ果斷セシハアラサリシト云フ、水戸藩ニ於テハ、  
天保ノ末寺院ヲ廢シ梵鐘ヲ毀チ、大小砲ヲ製造シタル

ノ英拳ハ咸人知ルカ如シ、然リト雖トモ、姦臣結城虎寿等ノ数名僧侶ト謀リ、遂ニ徳川齊昭烈公モ譴責ヲ蒙ラレタリ、古ヨリ佞仏ノ徒世ヲ乱リタルノ例、枚挙ニ遑アラス、英邁剛明ニ非ラサレハ為シ得サルノ一事ナリ、

277 ○海防ノ準備一層嚴整スヘキ旨令セラレ、各所ノ砲台修築昼夜兼業、殊ニ五ヶ所砲台ハ數門ノ砲増置ヲモ命セラレ、大守公操練毎ニ御出馬御指揮アラセラル、カ故、咸人奮起勉勵セリ、加之毎々褒詞或ハ酒肴種々ノ賜物等懇命ヲ下サレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二四六号と同文なり〕

278 ○当時各藩ニ於テモ種々ノ党派分立軋轢シ、中ニハ諍抗ノ太甚シキニ及ヘルモアリト、長土二藩ハ特ニ甚シク、稍内乱ノ形況ナリト云フ、隣藩熊本モ近頃党派分立、既ニ旧臘十二月中旬頃、有名ナル横井平四郎時存ヲ刺サントセシ由、其顛末ハ、横井ナル者江戶在邸ナリシカ國政改革ニ關係シ、且京師ニ出テ藩主輔佐ノ命ヲ奉シ、同藩都築四郎・吉田平之介等ト別離ノ会ヲ催シ、或ル

酒樓ニ於テ半酣ノ際、抜刀ノ者三四名押シ入り、互之爭鬪ニ及ヒ横井モ負傷シ、其席ニアリシ者三四名即死、乱入ノ者ハ踪跡ヲ暗シタリトソ、之レ悉ナ同藩異論者ノ所為ナリシトソ、中ニモ轟武兵衛ナト云ヘル輩ハ、一党ヲ結ヒ長土人ト團結シ、鎖攘ノ説ヲ唱へ、京摂ノ間ニ奔走シ、我カ藩人ヲ惡ミ、稍讐敵ノ如キ形勢ナリト云フ在京某カ報知、姓名詳ナラス、

279 ○貼紙〔十一日カ、札スス〕將軍家茂公ハ本月十三日上洛ノ途ニ就カレ、江戸城ヲ

發セラレタリ、初メ上洛發表ノ時ハ陸路ニ令シ、而シテ軍艦ヲ以テ品川海ヨリ大坂ヘ直航ニ變シ、而シテ又陸路東海道通行ニ變シタルハ、同月十日頃ヨリ英仏ノ軍艦數艘横浜ニ來港、尚各国ノ軍艦逐日來津ノ聞ヘアリ、故ニ航中不虞ノ變ヲ慮リ、遽ニ陸路ニ転シタリト云フ一説ニ生麥事件ニ付テ、英國ノ軍艦數、艘來港ノ説アルニ依レリトモ云フ、此ノ如ク遽然陸路ニ修繕、宿駅・旅店ノ修理等夜ヲ以テ日ニ次キ、其費用幾干カ算シ難キニ及ヒ、其外數千ノ扈從前後絡駅、人民ノ困頓言詞ニ尽シ難シト云フ、○隨從ノ吏員左ノ

如シ、

〔貼紙〕「各美名礼スベシ」

板倉周防守 勝静、松山閣老

稲葉兵部少輔 正巳、若年寄

坪内伊豆守 保之、御側衆

村松出羽守 〔武義力〕同上

赤松左衛門尉 同上

有馬出雲守 〔則篤力〕同上

林大学頭 〔朱書〕「禮儒者」奥

大井美濃守 〔信道力〕同上

松平甲次郎 〔乘模力〕同上

長井藤左衛門 同上

小出五郎左衛門 〔有礼力〕同上

須田久左衛門 〔各美名礼スベシ〕御使番

水野和泉守 忠精、山形閣老

田沼玄蕃頭 意尊、〔朱書〕「若年寄」

小笠原加賀守 〔長毅力〕同上

佐野伊予守 御書院番頭

松平筑後守 御小姓組番頭

松浦備前守 〔マ〕同上

小林栄太郎 〔マ〕御目付

山口信濃守 〔直毅力〕同上

大久保権左衛門 〔マ〕同上

松浦正一郎 〔マ〕御目付御使番勤

能勢金之助 〔頼之力〕同上

石上民部 〔マ〕御使番

小出内記 〔マ〕同上

松平鎧三郎 〔マ〕同上

萩原近江守 〔マ〕講武所鉄砲師範役

男谷下総守 〔信友力〕講武所劍術師範役

柘植奎之助 〔マ〕奥御右筆

松平太郎 〔マ〕同上

諏訪播摩守 〔マ〕同上

本多隼之助 〔マ〕同上

小野梨三郎 〔マ〕同上

一色仁左衛門 〔マ〕同次席講武所頭取

片山与八郎 〔マ〕奥御右筆格

佐藤清五郎 〔マ〕同上

内藤甚三郎 〔マ〕組与力

牧野左近 〔マ〕同上

小野喜一郎 〔マ〕御先手

下曾根甲斐守 〔マ〕講武所鉄砲師範役

高木幸次郎 〔マ〕同上

柳沢勉次郎 〔マ〕同上

渡辺為三郎 〔マ〕御徒頭

戸田寛十郎 〔マ〕同上

内藤十郎 〔マ〕同上

完尾平八郎 〔マ〕同上

飯田庄藏 〔マ〕同上

斉藤三弥 〔マ〕同上

松平筑後守 〔マ〕同上

青山三郎右衛門(マ)  
同上

其他小吏数百人ノ名略ス、

○又御先登上京ノ諸候、左ノ如シ、

尾張前大納言茂徳殿  
一橋中納言喜慶殿

水戸中納言慶篤殿  
松平春嶽(朱書) 慶永

松平容堂(朱書) 豊信  
小笠原図書頭長行、肥前唐津

其他吏員数名ナリ、

○又一橋殿ハ後見職ナルカ故、幕吏ノ付従左ノ如シ、

(貼紙) 各実名礼スベシ  
松平因幡守忠敏、大御番頭

渡辺肥後守(孝綱カ) 院番頭

土岐大隅守(マ) 御小姓与番頭

岡部駿河守(長常カ) 大目付

大沢豊後守(兼哲カ) 橋家老

戸田能登守(ママ) 同上

沢勘七郎(マ) 御目付

松平勘太郎

○將軍家扈從ノ人員上下凡八千余名、陪從卒ニ至ルマ

テ一万余人、此内警衛兵凡六大隊(大隊ハ凡五百人)、砲兵三大隊

野戰砲十八門ナリト云フ、皆荷作シテ人足、又閣老・若年寄等担キ、玉葉等マテ百余荷ニ及ヘリト云フ、

ハ、一小隊或ハ二小队モ引卒セリトソ、○又於京師待

受ノ大名左ノ如シ、

加賀中納言齊泰殿

松平大膳大夫慶親、萩カ)

松平三河守(慶倫カ) 慶偏、州津山、作

松平相模守慶徳、鳥取

細川越中守慶順、熊本

松平越前守茂昭、福井

松平兵部大輔慶憲、白石

松平陸奥守慶邦、仙台

藤堂和泉守(高獻カ) 津

上杉弾正大弼齊憲、米沢

佐竹右京大夫義就、秋田

溝口主膳正直薄、新発田

本多主膳正(康稜) 膳所ナリ

其他旧臘上京ノ諸藩數十名、

○先登高家ニハ左ノ如シ、

京極丹後守高福

有馬兵部大輔広衆

織田宮内少輔信愛

○御先供高家左ノ如シ、

大沢采女正基寿

中条中務大輔慶頼

○一橋殿差副高家

土岐出羽守頼永

○將軍家行粧大抑ニハ、

松平隱岐守勝成

○別段警衛ニハ、

松平甲斐守保申、銃隊一  
大隊ヲ卒ス、此外着京ノ上、二条城警衛ニ

ハ、

藤堂和泉守高獻、  
津

松平出羽守定安、  
松江

松平越中守定敬、  
桑名

松平隠岐守勝成、  
松山

本多主膳正(康禎カ)  
勝所

永井飛彈守直矢、  
高槻

牧野讚岐守忠衛、  
三根山

○火之御番ニハ、

稲葉長門守正邦、  
淀

青山因幡守忠敏、  
笹山

此外小吏數百名ナリ小吏ニシテ職名アル者ニ至ル迄、  
凡一千人ニ及ヘリト云フ、

○將軍家上洛發程ノ前頃ヨリ、洛中何トナク穩ナラス、

人心恟々今ヤ兵馬ノ衢トナラント物情囂々タリ、三条

美・姉小路公知等ノ堂上方国事掛ニ拜セラレ、日々學習

院日ノ御門前  
ニアリニ會議シ、長土水其他各藩士或ハ脱藩浮浪

ノ徒、日ハ日ニ出京、蟬聚シ議スル処鎖攘ニ外ナラス、

加之

朝議ヲ左右シ、

勅意ヲ矯スカ如キ挙動(マ)ニ、或ハ各藩又ハ脱藩ノ徒ヲ募ラ

レタル、所謂御親兵ト唱フル輩ハ、暴威ニ募リ、恣ニ

無辜ノ人民ヲ虐殺シ、或ハ天誅ト唱へ、幕府ノ為メ仕

役セラレタル者ヲ斬戮シ、酒狂乱行極タルカ故、一般

薄水ヲ履ムノ思ヲナセリ、斯ノ如キノ形勢ナルカ故、

近衛殿等正論ノ方々大ニ憂歎セラレ、恐多クモ

主上

宸衷ヲ悩マシ玉ヒ、窃ニ 中川宮・近衛殿ニ密

勅ヲ下サレ、 国父公速ニ御上洛、鎮撫ノ御尽力アラン

コトヲ御頼ミ 思召シ、因テ宮及ヒ関白殿・近衛殿御

父子ハ、御密翰又ハ御内使ヲ以テ御上洛ヲ促シ玉フコ

ト頻ナリ、 国父公ハ斯ノ如ク紊擾混乱ノ形況ヲ 聞

召シ、或ハ宮其外御密翰ノ趣、御憂痛一方ナラス、昨

秋御帰国ノ前頃ヨリ、茲ニ及ハン事ヲ洞察セラレタル

カ故、

朝暮ノ間ニ屢獻言セラレタリト雖トモ、事行ハレス奈

何ンセン、斯ノ如ノ形勢ニ陥リタリ、然レトモ

勅命ノ重キ、宮及近衛殿御依頼ノ厚キ、加之

將軍家上洛就途ノ趣ナルカ故、成否ニ関セス御上洛御

尽力ノ御決心ニテ、三月初旬御發程御上洛ノ旨發表セ

ラレタリ、

280 ○二月廿九日頃京師及江戸雜報左ノ如シ、

280の1

正月初旬江戸ニ蕃書調所ヲ創置シ、大ニ洋学ヲ勸奨セラル、是レ彼ヲ知り而シテ後チ為ス事アランノ所論ニ出タリト云フ、教授ノ員ニハ杉田玄端〔充甫〕・箕作元甫〔虔徳〕・川本幸民〔裕〕等ヲ初トシテ数名ニ命シタリ〔私〕人某カ献言シタルニ因リテ開設セリト、云フ、

281 ○正月五日、佐賀老候〔閑叟〕京師ヨリ江戸ニ出ツ、幕府命スルニ、文武勸奨ノ総裁トシ、人材登庸撰択ノ事ヲ委任ス、同公ハ昨年十二月卒然上京シ

天氣ヲ窺ヒ、関白殿下及ヒ所司代ヲ訪問セラレ、直チニ江戸ニ向テ発程セラレタリ、当時ノ説ニ、藩士勤王攘夷ノ説ヲ唱フル者ヲ戒メ、或ハ他藩士ト交通ヲ禁シ、黙シテ形勢ヲ傍觀シ、

朝幕ノ間何レニモ手ヲ出スコトナカリシニ、

朝威漸ク盛ニ趣キ鎖攘ノ説囂々、各藩競テ上洛スルニ至

テ、卒然発途上京シ

天氣ヲ窺ヒ、何等ノ言モナク僅々三四日滞京、直チニ関

東ニ下向セラレタルハ、未タ天下ノ形勢見定ナキカ故、此ノ如キ挙動ナリト云云、

282

○正月廿日頃ノ事ニ、当時大坂ニ於テ有名ナル儒者池内〔奉時〕大学ト云ヘル者、幕府ノ問課ナル聞ハアルヲ以テ、浪人等数名宿所ニ押入リ斬殺シ、首ヲ難波橋ニ梟シ罪状ヲ揭示シ、其手足ヲ斬リ、一ハ中山大納言〔忠能〕ノ邸ニ、一ハ正親町三条殿ノ邸ニ投シタリ、又同シ頃千種殿〔有文〕ノ家臣賀川肇ト云ヘル者ヲ斬殺シ、其首ヲ一橋殿ノ邸ニ投シタリ、是モ罪状ヲ記シ首ニ添タリト云フ、或ハ手足ヲモ斬リ、千種・岩倉家ノ門戸ニ置キタリトモ云フ、

283

○二月初、英国ノ軍艦一隊〔大小八艘〕横浜ニ来港シ、彼国書ヲ以テ、本藩士カ生麦ニ於テ同国人斬殺ノ事件ヲ詰問ス、其挙動甚猖獗ヲ極ム、幕府頗ル困却、百方説解ヲカムト云云、

284

○二月十三日、大原〔左衛門督カ〕四辻侍従〔公賀〕ニ卿譴責ヲ蒙リ禁錮セラレタリ、当時長土ノ二藩或ハ浮浪士カ

朝議ヲ左右スル等ノ事ニ慨嘆セラレ、幕府ト謀ラレシ事  
アルニ依レリトモ謂ヒ、或ハ幕府ノ賄賂ヲ受ケテ、三  
条・姉小路等國事掛ノ諸卿擯斥ノ策謀アリシトモ云フ、

旧邦秘録五編癸亥之二

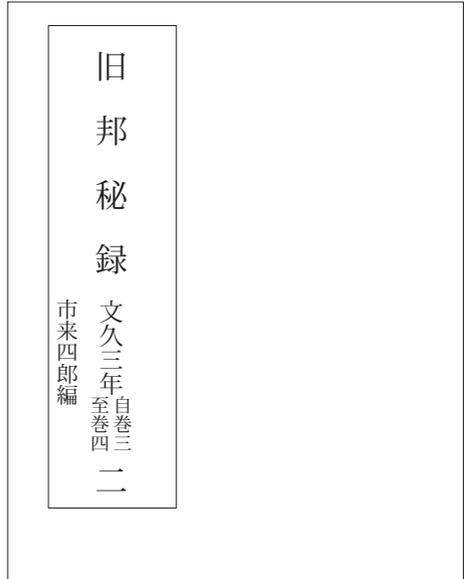
○三月二日<sup>〔達カ〕</sup>布達、

文久三年癸亥

○

旧邦秘録卷之三

〔表紙〕



〔扉に、表紙の文字の外に「久光公御」加筆〕〔紙数一四四枚〕の記載あり

○三月四日、国父公巳ノ中刻御発城、前之浜ヨリ汽船

二ノ丸御殿御手狭ニ有之、御用席御差支相成候ニ付、表御計ヲ以テ花倉御茶屋御引直御造次被成進候条、此旨御作事奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

三月二日<sup>川上</sup>式部<sup>欠美</sup>

昨年春<sup>〔欠光〕</sup>国父公ニノ丸御移棲ニ付御造宮アリシカトモ、御上洛ニ差迫リ急遽ノ構造ニシテ甚狭隘ナルカ故、今回花倉邸内ノ家屋引遷サレタリ、○花倉御茶屋ハ弘化ノ初 齊興公創建セラレ、御逝去ノ後今ニ至リテ不用ナルカ故、曳キ移サレタル者ナリ、○表御計トハ<sup>〔忠〕</sup>太守公<sup>〔義〕</sup> 国父公ノ御用途定額アリ、斯ノ如キ費用ハ定額外ノ先例ナリ、之ヲ表計ト通唱ス、

白鳳丸ニ御搭艦、午ノ刻頃御発航、御上洛アラセラレタリ、従駕国老小松带刀<sup>清</sup>、御側役勤島津主殿<sup>久備、本</sup>与番頭、永吉郷三千五<sup>〔美善〕</sup>、<sup>〔廉〕</sup>職御小姓百〇六石余ヲ領ス、<sup>〔久武〕</sup>中山中左衛門・谷川次郎兵衛、其他大小ノ吏員数十名、御馬廻定御供・中小姓・重中小姓等、其他足輕等ニ至迄凡七百余名ニ及ヘリ、本日ハ

特ニ晴朗、北風穩ニシテ波瀾ヲ見ス、実ニ盆水ニ等シ、内湾ヲ出テ佐多岬ヨリ針道ヲ丑寅ノ間ニ取り、東海ヲ航シ日州海ヲ経テ、豊後海ヨリ中国海ニ入り航セラレタリ、○同十日、伊予海ニ於テ島津淡路守忠寛殿江戸ヨリ帰邑ノ途次、京都ニ立寄ラレシ故停航御対面、京師ノ事情聞召サレタリ、其形況ハ現今鎖攘ノ説熾ンニシテ、二三ノ暴藩士或ハ浮浪輩ノ暴行太甚シク紊擾極リ、乱兆目下ニ迫レリ云云ノ趣ナリ、○同十一日兵庫港御着、同地へ御一泊、同十二日山崎街道御通行、郡山駅御一泊、同十三日淀橋へ先発ノ警衛士奉迎従駕シ、申ノ刻頃伏見邸へ御着御一泊、同十四日、御旅館へハ入ラセラレス近衛家へ御參殿アラセラレシニ、〔朝彦親王〕中川宮及関白殿鷹司ヲ初メ、一橋公〔慶喜〕此人ハ先ニ暴公卿等迫テ攘夷ノ期限ヲ促セシ後、病ト稱シテ籠居セリ、〔山内豊信〕春嶽公・容堂公御參集、国事ノ御議談刻ヲ遷サレ、夜入り亥下刻頃御退殿、御旅館智恩院錦街ノ藩邸ハ狭隘ナルカ故、智恩院ニ宿營セラレタリ、へ御着アラセラレタリ、○当時京師ニ於テハ長土水ノ藩士及ヒ浮浪ノ徒累々蟻集、鎖攘ノ説ヲ主張シ、剩へ期限ヲ急促シ、或ハ將軍家ヲ恐嚇シ、黠謀姦策ヲ施シ暴行甚シキカ故、宮・堂上ノ中ニモ真ニ憂国ノ方々ハ大ニ憂慮セラレ、 国父

286の1

公ノ御威力ヲ仮リ鎮定センニ外ナシト、御上洛ヲ促サル、コト数回、御着京ヲ待ル、コト千秋ノ如シ、然シテ本日近衛家へ御參集、鎮定ノ御依頼ハ素ヨリ、御施行ノ尊旨ヲ問ハセ玉ヒシ故、左ノ十五條ヲ以テ御論弁ニ及ハレタリ、当時国事掛ノ各卿又ハ長州其他二三藩或ハ浮浪輩カ主張シ只管竭力スルノ条件、悉ク擯斥セラレ、或ハ浪士輩逐斥等ノ事ハ、関白殿ヲ始メ各公驚愕、口ヲ噤マレタリ、殊ニ御言論成断然処分ノ点ニ出タルカ故、満座驚黙優柔不断ノ形況ナリシトソ、御演説ノ御箇条左ノ如シ、

一 今日者無伏藏〔腹藏カ〕十分言上仕候間、忌諱嫌疑等御有捨奉

願候事、

一 攘夷御決議輕卒之儀不可然事、

一 後見・総裁ノ二職ヲ奴僕之如ク御対遇、浮浪藩士之

暴説御信用等尤不可然、且於

御膝本法外之儀有之候ヲ其儘ニ被召置候儀、

朝憲・幕令モ不被行姿、只ニ乱世之基、歎息ニ不堪候

事、

一 右二付、暴説御信用之堂上方所謂十御黜ケ、浮浪藩士

ノ暴説家者幕ヨリ処置可有之事、

一 宮并ニ 前関白・中山・正親町三条等、以前之如ク

御委任等之事、

一 大原卿御宥免之事、

一 天下之大政將軍家江御委任之事、

一 長州父子所存後見職ヨリ御質問之事、

一 御親兵一条之事、

一 無用之諸大名・藩士等都而帰国被命事、

一 一宮及ヒ堂上方、主命之外藩士江御面会御無用、浮浪

者尤不可然事、

一 主家亡命之者御信用不可然等之事、

一 英夷一条、諸夷一条之事、

一 神宮御守衛トシテ 親王方被差遣候儀尤不可然、是

者其近国之大名江被命至当之事、

一 浮浪藩士之心底能々御勘弁有之度事、

〔本文書は「玉里島津家史料二」五一ノ三号と同文な

り〕

以上十五條、御論談ノ詳事左ニ記スカ如シ、

○左ニ記ス御論談ノ詳事ハ、大久保利通一藏カ友人某へ密

話ノ筆記ニ抛リテ記ス友人ノ名詳ナラス、蓋野村宗七ナラン、

○編者曰、本日ノ御論談ハ昨年来數回献言セラレタル

枢要ノ条件水泡ニ帰シ、天下治乱ノ分ル、処ナルヲ

以テ、初條ニ記サレタルカ如ク胸服ヲ一掃セラレ、

忌諱嫌疑ニ触ルモ顧ミラレス御陳述アラセラレタリ、

〔第二條カ〕第一條、攘夷御決議輕卒之儀然ルヘカラス云云、当

時公卿方或ハ長土水ノ三藩、或ハ浮浪ノ曹只管謀ル

処ニシテ、既ニ二月十一日ヲ以テ関白殿下ヲ脅迫シ、

鎖攘ノ期限

勅裁ヲ促シ奉リ、或ハ所謂十三卿ハ虎狼ノ威ヲ仮リ一

橋・越前ノ両公ニ逼リ、遂ニ期限御受ニモ及タルカ

故、各藩ニ於テモ内心ノ如何ハ措テ、表ニハ鎖攘ヲ

唱サルハナク、一般男子タル者鎖攘ヲ唱ヘサレハ懼

夫トスルカ如キノ形況ナリ、斯ル人情ナルニモ忌憚

セラレス、無謀ノ攘夷ハ不可ナルノ旨献言セラレタ

ルハ、凡庸ノ人ニシテ為シ得ヘカラル処ナリ、当

時彼我ノ形勢ヲ弁シ、真ニ憂國ノ者ハ 国父公ノ御

獻言ヲ以テ国是トセサルハ、国辱ヲ招クノ所為ナラ  
ン、

皇国開闢以來二千有余年ノ今ニ至迄、外国ノ為ニ輕侮  
ヲ受ケタル事ナキニ、黠藩暴浮浪ノ詐謀奸術ヲ信セ  
ラレ、無謀ノ令ヲ下サレタルハ、寔ニ謂フニ忍ヒサ  
ルナリ、如何セシ、時勢止ムヲ得サルト謂フハ当時  
ニ外ナカラント窃ニ私語キタリ、○(第三条カ)第二条、後見・  
総裁ノ二職奴僕ノ如ク御對遇云云、則ニ職ハ一橋・  
越前ノ二公ニシテ、

朝幕共ニ当今機軸ノ職掌ナルニ、猜疑ノ一点ヨリシテ  
稍蔑視シタル如シ、將軍家未若齡、其責ニ当ルヲ得  
サルカ故、両公ヲ措テ誰カアル、内整外治ノ順序ヲ  
立、夷狄ノ輕侮ヲ受サルヲ專要トスヘキニ、区々タ  
ル鄙念ヲ以テ狐疑ヲ懷キ、善良ノ域ニ進ムヲ得サル  
ハ、時勢如何ントモスルコト能ハサル者ト謂フヘシ、  
或ハ脱藩浮浪ノ徒公卿方ヲ欺瞞シ、或ハ恐嚇シ、詐  
欺謀策ヲ以テ鎖攘ヲ国是トスルノ説ヲ国忠ト信セラ  
レ、

朝議ヲ左右シ

叡慮ヲ矯メ、剩ハ輦下ニ於テ既往ノ罪跡ヲ潑キ、(撥カ)暗殺  
等ノ暴行、或ハ無辜ノ民庶ニ種々ノ妨碍ヲ与ヘ、実  
ニ制度法令ナシト謂フモ不当ニ非ラサルナリ、然ル  
ニ

朝廷ニ於テハ、其曹ヲシテ憂国忠奮ノ者ト愛視セラレ、  
建言論說ヲ無上ノ国策トセラレタルカ如シ、或ハ暗  
殺暴行ヲ快トスルニ等シク、幕府ニ於テハ生殺与奪  
ノ大権ヲ有シ、兵力モ未タ衆(諸侯カ)諸候ノ上ニアリ、然ル  
ニ之ヲ制抑ノ力ナク、徒ラニ探訪搜索ニ勞シタルノ  
ミニシテ、日ハ日ニ自ラ權威ヲ貶スノ挙動トモ謂フ  
ヘシ、加之 国父公ノ如キ至誠愛国ノ人ニ狐疑ヲ起  
シ忠諫ノ道ヲ塞クハ、自滅ヲ招クト謂フヘキノ動作  
ナリ、茲ヲ以テ昨年来今ニ至テ数回諫諍、口ヲ辛酸  
タラシメ玉ヒシモ、敢テ感動採用セス、嗚呼時勢如  
何セシ、機運傾頽挽回シ得ヘカラサルニ立到レリ、  
○(第四条カ)第三条、暴説御信用ノ堂上方御黜ケ云云、則チ黜  
藩暴徒ト親密ナル三条美・姉小路公知ノ二卿ヲ初、十  
有余名ヲ指シテ記サレタルモノナリ、此ノ各卿当時  
国事掛ノ名義ヲ以テ日々学習院ノ議政局ニ出頭セラ

レ、鎮攘ノ主義ヲ以テ施政ヲ議シ、  
朝議ヲ左右シ、

勅意ヲ矯メシ、激烈無謀ノ事ヲ以テ快トシ、其内幕ハ  
悉ク一二ノ暴藩士浮浪輩ノ議ニ出タルモノナリ、此  
ノ如キ虎狼ノ暴威虚喝ノ勢力太甚シキカ故、幕府モ  
却テ阿媚佞從シ、大小各藩モ佞舞趨走ニ等シ、斯ル  
形勢ナルカ故、速二十有余名ノ公卿ヲ黜斥セラレ、  
或ハ浮浪ノ徒黠藩士等ハ職掌ニ依テ、幕府ニ於テ斷  
然処分アルヘキヲ責論セラレタリ、是レ後見・総裁  
二職ノ責任ナルヲ以テナリ、然ルニ一橋・越前ノ兩  
公ハ直接ノ御論責ニ奮發シ、職任ヲ尽サンノ答弁モ  
為ス事能ハス、黙々傾首大息セラレシノミナリシト  
ソ、○（第五条九）第四条、宮中川并前閔白殿近衛・中山忠能・正  
親町三条実愛等ノ諸卿ハ直実憂國ノ人ナルニ、彼ノ  
十余卿又ハ黠藩暴徒ト阻隔ヲ生シ、遂ニ疎外或ハ貶  
斥セラレシヲ、復職アランコトヲ論責シ玉ヒシ者ナ  
リ、○（第六条九）第五条、大原重徳卿御宥免云云、此ノ卿ハ篤実  
忠奮憂國ノ人ナリ、然ルニ所謂十三卿ト論ヲ異ニシ、  
浮浪士等カ所論ニ反セラレタルカ故佐幕家ト称シ、

或ハ幕府賄賂ノ為メ謀ラレシ旨アリトノ浮説ヲ受ケ  
擯斥セラレタリ、是説全ク無形ノ事ナリシト云フ、  
茲ヲ以復職アラン事ヲ論セ（脱九）ラタル者ナリ、○（第六条九）第六條、

天下ノ大政將軍家へ御委任云云、元來鎌倉幕府以來  
大小ノ政權委任セラレタルハ多言ヲ要セス、殊ニ德  
川家十有余世ノ間、細大委任セラレシニ、去年 国  
父公御上洛、浪士御鎮撫ノ後大原卿ヲ  
勅使トシ、国父公ヲ差副副使ノ俗唱トシ東下ヲ命セラレ、  
大政変革、人材登用等ノ  
勅諭ヲ下サレシニ幕府循奉シ、而シテ天下ノ形勢茲ニ  
於テ一變シ、尊  
王ノ大義立チ、  
朝威復古ノ緒ニ着キ、然ル後何トナク政權  
朝廷ニ復シタルカ如シト雖モ、判然復帰ノ明涯ナク、  
知ラス識ラス今日ノ体裁ニ流至セリ、幕府ハ  
勅意循守、一橋・越前其他大小ノ吏員ヲ黜陟シ、政体  
改革ノ途ヲ開キ、正路ニ方向ヲ取レルカ故、大小輕  
重ノ別ヲ立テ、委任スヘキハ委ネ玉フヘキ旨陳述セ  
ラレタリ、○（第七条九）第七條、長州父子ノ所存後見職ヨリ質

問云云、此一条ハ殊更當時ノ要点ナリト雖トモ暴威  
ニ募リ、虐勢熾ニ凌轢太甚シキカ故、

朝幕俱ニ処分至難ノ一事ナリ、如何ントナレハ當時彼  
ノ二三藩士十有余卿ト親密、或ハ浮浪ノ徒ト通謀、

鎮攘ノ重事ヲ急促シ、

朝議ヲ左右シ

叡慮ヲ矯シ、或ハ堂上方ノ黜陟転遷モ悉ク該藩ノ所為  
ニ出ル等ノ形勢ニシテ、傍二人ナキカ如シ、幕府モ

却テ恐怖シ、倚憑ニ等シキ挙動モアリ、剩ハ曖昧模

稜ノ所為多々ナルカ故、其條款後見・総裁ノ二職ヨ

リ詰問セラレ、功罪明白ノ処分アラン事ヲ痛論セラ

レタリ 去ル壬戌春來、長藩ノ拳動甚々怪ムヘキノ事項数件アリト

雖トモ、今其概略ヲ挙テ記サンニ、壬戌四月 国父公御

上洛、浪士鎮撫ノ勅命ヲ奉セラレシ後、本藩士有馬・柴山・橋

口等ノ輩暴動ノ企アリ、其時彼藩土木原庸蔵ヲ初トシ數十名、及

ヒ在京來島又兵衛(當時彼藩京師留守居役)・九坂玄端(當時彼藩

留守居付属吏ナリ)等モ同党ニ在リテ、俱ニ事ヲ揚ケンノ計圖ナ

リシニ、本藩士数名伏見寺田屋ニ於テ誅戮セラレシニ依リ、事ヲ

果サス鎮定セリ、其時計圖ノ破レタルヲ前知セシカ、將タ本藩其

他ヲシテ、已等ハ後ニ在テ為ス事アラントスルノ謀策ナリシヤ、

策ノ破タルニ方テ踪跡ヲ暗シ、來島・九坂等ハ彼ノ邸中ニ在テ知

ラサルニ擬シタリ、是奸謀ノ尤モ甚シキ者ニシテ、一般喋々不信

不義ヲ唱ヘタリ、是其一ナリ、其後世子長門守殿下国ノ名ヲ以テ

幕府ノ密命ヲ奉シ、巷説ノ如ク 国父公京師ニ於テ事ヲ揚ラル、

ノ時ハ抑制セント、遂次京師ニ立寄ノ名義ヲ以テ着京セラレシ

ハ、国父公浪士鎮撫ノ勅命ヲ奉セラレ、殆ント十余日ノ後ニ  
アリ、而シテ 国父公御名望盛ナルノミナラス、朝廷ノ御覺厚

ク、偏ニ御依頼思召シ、從テ一般歎慕ノ美蹟ヲ見テ條子浪士鎮撫  
シ、幕命ヲ放棄シ、各公卿方ニ逼リ、国父公ト同シク方々向マ

又ハ大政改革尽力ノ勅命ヲ請下セリ、依テ本藩ト同致協心尽力  
アルヘキハ無論 勅書ニモ記サレタルニ、敢テ然ルニ非ラスシ

テ、 国父公大原卿ト東下ノ後依然在京、一己ノ藩論或ハ浮浪士  
ト謀リ鎮攘ノ説ヲ主張シ、遂ニ勅命ヲ下サル、ニ至ラシメタ

リ、鎮攘ノ一事ハ安危興廢ニ罹ルに至重至大ノ国策ニテ、假令ヒ

叡慮迅速ヲ要セラル、ト雖トモ、全国民命ノ安危ニ関シ容易ノ事

ニ非ラス、加之將軍家ヲ初メ大小各藩守禦ノ調ト不調ニ依リ、勝

敗利鈍ノ大事ニ罹ルカ故広ク諮詢セラレ、而シテ後其宜ヲ採リ、

勅裁アルヘキハ素ヨリ論ナシ、然ルニ僅々己カ籠絡シ得タル数名

ノ公卿ト謀リ 勅諭ヲ促シタルノ挙動、誰カ之レニ服シ誰カ之ヲ

擁シトスヘケンヤ、是其一ナリ、彼ノ藩ニ於テ鎮攘ノ義ヲ急促ス

ルヤ否ヤ、或ハ幕府ヲ初メ大小各藩守禦ノ予備調ヘリト名ツクル藩

アリヤ、將タ鎮攘ノ令発セラレタルニ於テハ、無論戦端ヲ開カサ

ルヲ得サルナリ、然ル時ハ彼ハ海戦ニ長シ、各要衝ニ出沒シ妨害

ヲナスニ当テ、我ニ追撃ノ船舶備レリヤ、未タ全クナシト謂フヘ

シ、彼各所ニ出沒スルトキハ、我又是ニ備ヘサルヘカラス、備フ

ルニ当テ出沒極ナキニ対スルハ奔走ニ勞ル、ハ論ナキナリ、茲ヲ

以テ無謀ノ攘夷ハ不可ナルノ旨、或ハ海軍ノ設ナキ等ノ点ヲ挙テ

献言セラレタル数回ニ及ヘリ、長藩ニ於テハ如何ノ策略ヲ以テ

スルノ議ナリヤ、一回ヒ戦端ヲ開ケ、ハ勝算ノ有無ニ関セシ戦ハ

サルヲ得サルナリ、則チ近ク清国ノ覆轍アリト迄申論セラレタリ、

是其一ナリ、又曰ク、脱藩漂泊浮浪ノ徒ヲ擯ケ、煽動シテ種々ノ

暴行ヲ為サシメ、民間ノ疾苦ヲ惹起シ、釐下ノ地ハ勿論 伏坂

ノ人民眠食ヲ安ニスルコト能ハス、剩ハ足利三代ノ像ヲ毀ツノ暴

業ヲナシタル曹力有赦ヲ請ヒタルハ何等ノ事ソヤ、実ニ無政ヲ喜

ヒ暴逆ヲ愛スルカ如シト謂フヘシ、是其四ナリ、藩士九坂等ノ輩

関白殿下ヲ恐嚇シ、攘夷期日ノ勅裁ヲ促シ奉リ、剩ハ世子長門

守殿毛殿下(鷹司)ノ館ニ馳參ラセラレタルノ挙動、是レ何等ノ

事ソヤ、家臣等カ暴論ヲ以テ国家ノ大事ヲ輕視シ粗暴ノ所為多キ、

其罪ハ至重、敢テ許スヘカラス、其主タルノ人ニシテ黙々ニ措キ、

或ハ馳參セラレタルノ始末ハ何等ノ事ソヤ、若シ當時街説ノ如ク

ナルニ於テハ、一藩主タル者ノ為スヘキノ事乎、若シ之ヲ知ラサル者トシテ論センニ、他日懲戒処刑スヘキノ非ラサンヤ、其事ナキヲ以テ之ヲ見ルトキハ世子ニ於テモ同論ニシテ、馳參セラレタルハ、煽動シ勢力ヲ与シカガメ喋合ノ計画ト謂フモ、敢テ通レ得サルノ挙動ナリ、是其五ナリ、或ハ脱藩浮浪ノ者ヲ懐ケ、加之藩邸ニ給養シ、煽動シテ暴行ヲナサシメタル確証ノ顯然タルモアリ、或ハ本藩ヲ讒誣シタル条件モ又寡カラス、或ハ昨年五月國父公、勅使ト俱ニ江戸御着ノ前日、大膳大夫殿ハ道ヲ別路ニ取テ上京セラレタリ、此一件ハ殊ニ本藩ニ於テ怪ム処ノ要件ナリ（文久二年第二卷ニ詳記ス）、或ハ今回男山御幸ヲ促シ奉リ、節刀ヲ賜フノ事モ、全ク長藩ノ謀ル処ニシテ、関白殿ヲ初議伝両奏モ非否セラレシカトモ、脅迫セラレ奏、聞ニ及ハレシニ、（行幸ノ上毛幸行ノ一点ハ、寂感アラレ、節刀ヲ賜フノ事ハ、畏クモ即座ニ、勅允ナカリシヤ、一般ノ帰向殊ニ長藩其他誠忠ノ曹、冀望ノ要領ナルヲ以テ言上ニ及ハレ、遂ニ、勅許ヲ促シ奉レリ、是其六ナリ、以上六条詰問セハ如何シノ答弁ヲナスヘキヤ、恐ラクハ語塞クニ至ラン、其他細事ハ数ルニ、遍アラサルナリ、

※〔眞注〕

「此時長州ノ心底ハ、天下ノ人心ヲ取り將軍タラント欲スルコト、鏡ニ掛テ見ルカ如クナリキ」

○第九條カ

第八條、御親兵ト名ケ、各藩ヨリ徵集シ、輦下ニ置

レタルハ、責任ノ將軍ヲ措テ不当ト謂フヘシ、又

將軍家命スル処ノ守護職アリ、許多ノ兵ヲ置テ警衛

怠ルコトナク、又不足ヲ告クルコトナシ、若シ不足

ナルニ於テハ各藩ニ命スルヲ以テ至当トス、然ルニ

藩々ヨリ二三名ヲ徵スルハ、不当トスルノミナラス、

別意アルノ所為ニ似タリ、○第九條（第十條カ）、無用ノ諸大

名・藩士等都而帰国云云、当時大小藩許多上洛シ、（率カ）卒ル処ノ士卒霧聚雲屯雜沓極リタリ、昨年五六月以來天下ノ形勢一変シタルカ故、（首鼠カ）首鼠兩端ヲ懐キタルモ、其後ニ至リ雷同統々上洛、鎖攘ノ説ヲ唱へ、當時所謂十三卿ニ阿媚シ、趨走馳驅ノ形况抱服ニ堪ヘス、或ハ在京中幾干ノ經費アルハ、無論之ヲ軋シテ軍備ニ充ツルトキハ、必ス応分ノ予備調ヒ、全国ノ兵力ヲ増スニ至ラン、茲ヲ以テ枢機ノ場ニ当ルヲ在京セシメ、他ハ悉ク帰国ヲ令セラレ、各封内富強ノ道ヲ力メシムルニアリ、國父公ハ既ニ昨秋御帰國ノ頃ヨリ、此ノ如キノ弊果シテ生セン事ヲ洞見セラレ、予メ献言セラレタリ、然ルニ筆痕未タ乾カサルニ如此形勢ニ陥リタリ、○第十條（第十條カ）、主命ノ外各藩士へ御面会無用云云、当時公卿方へ各藩士或ハ脱藩浮浪ノ徒出入シ、政体ヲ論シ、

朝議ヲ左右シ、大ニ妨害ヲ為シ、或ハ

朝議ノ機密ヲ漏スノ憂モ少カラス、夫カ為メ禍害ヲ惹

起スノミナラス、上軽下重ノ大弊ヲ生スルハ必定ナ

ルカ故ナリ、○第十一條（第十一條カ）、主家亡命ノ者御信用然へ

カラス云云、藩主ノ命ニ背キ、或ハ不羈ニシテ脱藩ノ徒弁口ノ功ナルニ惑ハサレ、国事ヲ謬ルノ弊尠カラサルカ故ナリ、○(巧カ)第十三条カ、英夷一条、諸夷一条云云、政務ノ要ハ寛急順序ノ区別ナクンハアルヘカラサルハ多言ヲ要セス、然ルニ現今内政混乱、人心定マラサルノミナラス、武備不整、財用足ラス、人材乏シク、其他一トシテ未タ大事ヲ揚クルノ時ニアラサルナリ、然ルニ至重至大、興廢存亡ニ懼ル鎖攘ノ命ヲ下サレタルハ何等ノ御見定アリヤ、国父公無謀ノ鎖攘ハ不可ナルノ御所論ハ、外夷ヲ恐タルニ非ラス、勝算立タサルヲ恐テナリ、又生麦事件ノ起リシヨリノ事ニ非ラス、昨年四月御上洛ノ際ヨリ、無謀ノ鎖攘ハ不可ナルノ旨反覆上陳セラレ、江戸ニ於テモ閣老ニ向テ同シク建論シ玉ヒ、先ンスヘキハ内政ヲ改正シ、富強ヲ謀リ、出テ制スルノ国力ヲ保ツヲ要トシ、而シテ後攘不攘ハ議セラレテ、何ノ後レタル事之レアランノ御主義タリ、決テ今初テ不可ナルヲ發論セラレタルニ非ラサルナリ、生麦事件素ヨリ大事タリト雖モ、曲直分明ナルニ若シ明解セス

暴謾ニ募リ、戦端ヲ開キタルニ於テハ、国力ヲ尽シ之レニ応スルヲ以テ至当トス、然ルニ鎖攘ノ点ハ該事ト別途ナルヲ弁別セス、一途ニ之ヲ議スルハ混淆ノ太甚シキ者ト謂フヘキナリ、又英人己カ曲ヲ措テ封内ヘ廻艦セハ、曲直論弁スヘシ、或ハ既ニ鎖攘ノ勅諭發布セラレタル上ハ

諭言汗ノ如シ、普天下誰カ循奉セサル者アラサランヤ、況ヤ 国父公ニ於テ素ヨリ速ニ循奉シ、敢テ曩ニ獻言ノ旨ニ頑泥シ背違セラルヘケンヤ、勝敗利鈍ニ関セス、家國ノ存亡ハ素ヨリ顧ミ玉ハサルナリ、開國以來外夷ノ為メニ恥ヲ受ケタルコトナキ

皇國ナルカ故、寸土モ渠ニ穢サレサルノ御決心ニテ、既ニ國中ヘモ

勅諭ノ下リシ際示達セラレ、掃攘ノ予備国力ヲ尽シタリ云云ノ趣、殊更確然申述セラレタリ、○当時各藩士尊

王鎖攘ノ説ヲ唱ヘ、脱藩ノ徒京伏坂ノ間ニ出テ黠藩ニ倚憑シ、或ハ浮浪ニ交リ無頼放蕩暴行極リ、其輩公卿方ニ出入シ暴黠ノ論ヲ主張シ、或ハ恐嚇シ、公卿

方ニハ畏怖ノ余リ協意戮力、

朝議ヲ左右スル等ノ大弊ヲ生シタリ、此曹ノ中ニ身ヲ棄テ国ニ殉スルノ誠心ヲ貫キタルモ間々アルヘシト雖モ、多クハ雷同、或ハ郷里ニ於テ容レラレサルノ徒、或ハ糊口ニ困ミ寄食ノ為メニスルモ、恐ラクハナシトセス、此等ノ曹カ弁口ノ巧ナルニ惑ハサレ玉フ時ハ、大二国策上ノ妨碍アルハ必定ナリ、決シテ御信用ナキハ素ヨリニシテ、近ツケラルヘキニ非ラス、今日ノ姿ナルトキハ不測ノ大害ヲ生シ、内乱ハ日ナラス 御膝下ニ生セン云云ナリ、○第十四条カ第十三条、神宮御守衛トシテ親王方被差遣云云、今回伊勢神宮守衛ノ為親王家派遣セラレントスルハ有名無実ナルカ故、近国ノ大名へ被命至当ナルヘシ、中ニモ勢州ニハ津藩アリ、隣藩ニ名護屋・桑名ノ名藩アリ、一ツ神宮ノ守護何ソ不足ヲ告ンヤ、然ルニ親王家ヲ以テセントスルハ公卿方ノ私論カ、将タ浮浪黠藩カ、何ソ目的アリヤ、当時外難目下ニ逼迫危殆ノ時ニ方テ、貴重ノ親王ヲ以テ神宮ノ保護ニ充ラル、ノ時ニアラサルナリ、○第十五条カ第十四条、浮浪藩士ノ心底云云、

浮浪士又ハ各藩士、在京国事ニ奔走スル輩ノ中ニ、名利ニ走り国事ニ名ヲ仮リ、或ハ黠藩ノ為ニ保助ヲ受ケ、其底意甚タ鄙劣ナルモアルヤ疑ナシ、是等ハ必ス巧言ノ徒ナリ、剩ヘ虎狼ノ威ヲ仮リ、暴論虐行大害ヲ醸スヤ見ルカ如シ、宜シク注意ナクンハ大二政治上ノ妨害ヲ惹起セン事見ルカ如シ、斯ノ如キノ曹ニ公卿方（附着力）濫睹セラレシ事アルヲ以テナリ、以上十四条一々論責セラレシカトモ、宮ヲ初メ各公頭ヲ傾ケ玉ヒシノミニシテ、奮然起テ施行セントノ形況ナク、無益ナルヲ洞見セラレ、此ニ於テ速ニ御帰国、時ヲ待ツニ若シト御決心ハアリシトナン、然レトモ勉忍セラレ漸ク三日間御滞京、同十七日発表セラレ、十八日黎明御退京、御帰国ノ途ニ就セラレ、大坂藩邸へ御一泊、十九日兵庫へ御出、直ニ御搭艦御発航セラレタル者ナリ、然ルニ宮及ヒ閤白殿下并近衛殿、其他御退京ノ御届書ニ依テ驚愕一方ナラス、洛中貴賤ノ耳聞ニモ倏ニ陟リ、種々ノ巷説起リ騒々タルニ至レリ、

287  
○三月十四日、国父公御親書ヲ以テ於伏見邸從駕ノ人

員江御達書左ノ如シ、

今般英夷軍艦横浜江渡来、不容易重大之事件申立、於幕府御許容難相成趣之由、畢竟者去秋生麦之一条ト相聞得候、就而者

皇国之御大難ヲ当家ヨリ事起リ候訳ニ而、別而恐入次第ニ候、尤モ彼儀者曲直分明之事候処、蛮夷之情態可惡之至ニ候条、遂ニ強暴申募兵端相開候節者、天下国家之為メ抽他藩、一統粉骨碎身、夷賊誅伐有之候様頼存候事、

三月十四日

右御親書ニ対シ、国老ヨリ左ニ添書シテ從駕人員へ達シタリ、

御当地京師之形勢混雜之様子モ有之候条、於御国許被

仰出置候趣深く相守、諸事御滞陳ト相心得、一己之識ヲ不用、一同一和一定之儀專要ニ候条、堅ク可得其意候、

三月十四日 帶刀小松清廉

此ノ御親書ハ、攘夷御決議幕府循奉各藩へ布達シ、其

期限モ後見・総裁ノ二職ニ於テ御受アリタルニ依リ、国父公ニハ設令ヒ曩キニ無謀ノ攘夷ハ下策ナル旨再三獻言セラレタリト雖モ、事茲ニ至リテハ

綸言汗ノ如シ、今更如何ントモスルコト能ハス、臣子ノ分尽サスンハアルヘカラス、特ニ生麦事件目下ニ切迫掃攘ノ談判ニ先ンシテ彼ヨリ責論ヲ開キタルカ故、爰ニ於テハ他ニ異ナリテ攘斥ニ力メサルヲ得ス、加之曲直分明ニシテ、敢テ縮畏スヘキ理由アルコトナシ、彼其曲タルヲ反省セス、我ヲ曲トシ要求シ、熄マサルニ於テハ我尤モ熄ムヘキニ非ス、彼暴ヲ以テスルトキハ我モ亦至当ノ処分ナサルヘカラス、剩ヘ這ノ事ナシトスルモ鎖攘ノ

詔ヲ下サレ、幕府循守布告セラレタル上ハ、到底掃ハサルヲ得サルノ今日ニ至レルヲヤ、是ニ因テ御書面ノ如ク決定セラレ、從駕ノ人員へ布令セラレタル者ナリ、然ルニ從駕人員中ニモ鎖攘主張ノ者多く、且懇到ノ布令ニ感シ身ヲ粉碎シ、先祖来數百年ノ久シキ恩惠ニ浴シタル酬報ハ此時ニ在リト奮然感發シタリ、実ニ六百年來養成ノ国風盛ナリト謂フヘシ、

○編者曰、機事密ナラサレハ成ラス、謀ノ洩レ易キハ  
 禍ヲ招クト古人ノ言ノ如シ、中ニモ将帥タル人ハ謹  
 ミ誡メサルヘカラサルノ要点ナリ、 国父公無謀ノ  
 攘夷ハ下策ニアリトノ尊旨數回献言セラレタル趣ハ、  
 国老及ヒ君側二三名ノ外曾テ知ルモノナシ、茲ヲ以  
 テ國中一般尊

王攘夷ノ御所論ニ外ナシト信シ、壯齡血氣ノ輩ハ益奮  
 フテ掃除ヲ主トシ、少シク老練彼我ノ形勢ヲ識得シ  
 タル曹ハ、勝算ナキヲ憂ヒ私語クモアリタリ、編者  
 カ門モ御論旨何レニアリヤヲ疑惑シ、頗ル憂嘆セシ  
 事ナリシカ、英夷ト戦争ノ後ニ壬戌四月近衛家ヲ以  
 テ御献言、同六月江戸ニ於テ閣老ヘノ御建論、或ハ  
 同年八月

朝廷ノ密命ニ応シ、御献策等ノ書ヲ拝読シテ、初テ尊  
 慮ノ在ル処ヲ知り愕然、茲ニ於テ疑惑氷解シタリ、  
 実ニ宇内ノ形勢、彼我ノ情実洞見セラレシヲ感佩セ  
 シコトナリキ、洵ニ古人ノ言ノ如ク、機事密ニシテ  
 謀ノ洩泄セサル、一賞三歎感佩極リタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二五五号と同文なり〕

288 ○三月十七日、 国父公御退京ノ節御届書左ノ如シ、

288の1 今般私奉蒙〔儀脱カ〕

御内命上京仕、

輦下之形勢詳ニ觀察仕候処、

皇国之御危急且夕ニ迫リ候趣顯然ト相見得候ニ付、愚魯  
 之身ヲ不顧、 公武之御重職方江存慮十分献言仕候得  
 共、〔被為在カ〕 迺モ御採用相成候御模様ニ無之、慷慨歎息之外無  
 御座候、就而者無用之小臣長々滯京仕候而者、却而公  
 武之御為不相成、讒口紛々沸騰仕、終ニ者於 御目前  
 騷乱ヲ生シ候者案中ト奉存候、且攘夷御決議之上者弊  
 邑之地三面之海岸、寸地ヲモ醜虜ニ掠奪不被致様防戦  
 之用意嚴重不申付候而者、

御国威ヲ奉貶候場ニ相当リ、別而恐人奉存候間、不得止  
〔衍カ〕 事明日発足仕候、急速之儀御疑モ可有之候得共、右申  
 上候外ニ所存無之候間、是等之趣不悪様御聞取被成下  
 度、依而奉希候、以上、

三月十七日 島津三郎

〔本文書は「玉里島津家史料二二五一―一ノ一号の一部と同

文なり)

右御届書、

朝幕共ニ各通或ハ写書ヲ以テ近衛家ヘモ御通知アリタリ、  
文中御危急且夕ニ迫リ云云トハ、鎮攘ノ説熾ニシテ期  
限モ定リ、内ハ二三ノ黠藩士浮浪ノ輩ト結合、暴行訛  
言太甚シク、実ニ洛中鼎沸、人民寢食ヲ安スル事能ハ  
ス、剩ヘ公卿ノ中ニモ異議(紛攘カ)、互ニ軋轢シ稍仇讐ノ  
如ク、幕府鎮圧ノ力ナク、優柔不断ナルノミナラス猜  
疑倍々甚シク、適々ノ御建論モ唯々頭ヲ傾ケ默然タリ、  
真ニ長太息ノ極リト謂フヘシ、此ノ如キ形勢ニシテ十  
有余名ノ公卿ハ、長藩浪士ト俱ニ私論ヲ主張シ、本藩  
独リ論ヲ異ニシタルカ故、種々ノ訛言流説ヲ以テ離間  
ヲ施スノ証憑モアリ、茲ヲ以テ一藩拳テ忿激シ、中ニ  
モ壮士等ハ握腕切齒、呉越ノ勢ヲ醸シ、目前大事ヲ生  
セントスルノ形況ニ立到レルカ故、大ニ憂慮セラレタ  
リ、斯ノ如キノ情勢ナルヲ以速ニ御退京、若シ英夷封  
内ニ渡来セハ曲直審論シ、彼兵端ヲ開カハ国力ヲ尽シ、  
皇国ノ穢名ヲ取サルノ一点ニ決定セラレ、這ノ御届書ヲ

呈出シ、直チニ発京セラレタル者ナリ、

289

○三月十八日朝辰刻過、知恩院ノ御旅館御発輿、伏見邸  
ヘ暫時御休憩、而シテ川舟ニ召サレ、申ノ下刻頃大坂  
藩邸ヘ御着御一泊、当夜近衛家ヘ左ノ御書呈送セラレ  
タリ、

289の1

昨十七日御届申上候通、今日退京着坂仕候処、英夷国  
許江来舶之模様申来候、就而者修理(大夫カ)太夫在国之事二者  
御座候得共、未若年故行届兼候儀モ有之、六百年來御  
預之

王土聊ニ而モ彼カ蹂躪ヲ受候而者、

御国辱者勿論、奉対

祖宗之神靈、無申儀恐入奉存候ニ付、一日モ早ク帰国  
仕、守禦之策略十分ヲ尽シ必死ニ防戦仕、夷賊一人モ  
不残加誅戮、数十代之奉報

朝恩度赤心ニ御座候間、無抛早々出船仕候、當時於

御膝下守衛者 大樹公御滞留之上、諸国之大小名在京之

事御座候得者、御手薄之儀モ被為在間敷ト乍恐奉存候、

且又関東承接之次第二依り夷賊承服仕候ハ、天下国家之大幸無此上御事ト奉存候、其節者速ニ上京仕、奉謝莫大之

天恩度合ニ御座候、若発足御差留之

朝命被為在候御事モ難計奉存候間、右之趣意宜御汲取被成下、御都合可然様御執成被仰上被下度、伏而奉願候、以上、

三月十八日

島津三郎

〔本文書は「玉里島津家史料二」五一一ノ二号と同文なり〕

○国父公遽ニ御退京ノ説倭チ洛中洛外ニ伝播、聞ク者拳テ驚愕シ、各藩ハ素ヨリ 將軍家ニモ一層憂慮ヲ重ネ、殊ニ

主上此由 聞召サレ、大ニ驚カセ玉ヒ、如何ニモシテ御引留アラント関白殿及ヒ近衛殿ヘ内

勅ヲ下サレシ故、大坂邸マテ御使ヲ立ラレシカトモ、御使者着坂ノ時ハ早ヤ汽船解纜ノ後ニシテ、如何トモスルコト能ハサリシトソ、此時長藩或ハ浮浪ノ曹ハ、

勅許幕允ヲ受ケス御退京アリシヲ喋々シ、其罪ヲ匡サレ

ンコトヲ学習院国事掛ノ席ニ論出シタリト雖モ、三条・姉小路等ノ暴論家モ如何ンノ思想ナリシヤ、其説

ニ応セス水泡ニ帰シタリトナン、斯ノ如キ形勢ニテ讒譏百出、薩藩ハ開港佐幕、因循不断ナリト嘖々タル、

實ニ甚シ、是咸ナ長藩ノ流言ニシテ名望ヲ失ハシメ、而シテ

朝廷ノ 思召ヲ離隔シ、私意ヲ恣ニセントノ姦謀ニ出タ

ル者ナリ、茲ヲ以テ其情意洞察セラレ、勇断遽然御退京ニ決セラレタル者ナリ、○御退京ノ後ハ二三ノ暴藩

士或ハ浮浪ノ曹一層倨傲ニ募リ、人民ノ障碍尠カラス、益

朝議ヲ左右シ種々奸謀ヲ施シ、我意ヲ逞フセリ、斯ノ如ク内外ノ乱兆目下ニ顕ハレ、奈何ントモスルニ道ナキ

ニ逼レルカ故、越前々（松平慶丞）中将殿ニモ如何ンノ思慮ナリヤ、詳ニスルニ由ナシト雖モ、同廿一日総裁職ノ辞表ヲ呈

出シ、当夜発邸帰国セラレタリ、街説ニ抛レハ、国父公御上洛アリシ上ハ驥尾ニ属シ、 公武御阻隔ヲ解

和シ、国是ヲ定メントノ思慮ナリシニ、纔三日間ノ在

京ニテ遽然帰国セラレシ故、憑ルヘキノ人ナク、自ラモ退カンニ若シト決定セラレタリト云フ、斯ル形勢ニ立到リシ故、上下ノ人心臨淵踏水ノ思ヲナシ、今ヤ汗馬馳セ違フノ衢ニ変セント恟恟愕愕、寢食ヲ安ンスルコト能ハサルノ域ニ迫レリ、又長州ノ世子長門殿モ如何ンノ思謀ナリシヤ、同廿三日帰国ノ表ヲ捧ケ、朝暮ノ允許ヲ俟タス退京、兵庫駅マテ発程セラレシニ、朝暮ヨリ御喚婦シノ命下リ、二三日間ヲ置テ重テ上洛セラレタリ、當時ノ説ニ、長州ハ薩越ノ両公退京ニ準シ帰国セラレシハ、世上ノ聞得ヲ憚リシモノニシテ、真ニ帰国ノ旨趣ニ非ラス、一謀計ナリシト云フ、果シテ説ノ如ク謀策ナリシモ強チニ不当トナシ難シ、或ハ越公卒然ノ帰国ハ、一大擘ト頼タル薩候カ薩候カ遽然帰国セシ上ハ、天下ノ事茲ニ尽キタリト決然帰国セラレタリト、薩候カ僅三日間ニシテ退京セラレシハ、言行ハレズ、計用ヒラレス悠々在京シ、天下ノ騒駭ヲ惹キ起サンヨリ寧口速ニ帰国センニ若シト、断乎ト出發セラレタリト云フ、此時洛中ノ形勢、朝暮ノ情実、或ハ公卿方ノ氣嚮、長土水ノ挙動紛紜擾々帰着ノ日途ナク、

加之

朝議ハ無謀ノ鎖攘ヲ主トセラレ、浮浪輩カ説ヲ可トシ、本藩ノ所論ハ開港論或ハ因循不断トシ攘斥セラルノ勢ナルカ故、今ハ到底、尊慮行ハルヘキニ非ラスト、速クモ亮察洞視シ玉ヒ、退ヒテ時ヲ待チ、或ハ既に勅命ヲ發セラレタル上ハ

綸言汗ノ如シ、挽回スヘカラサルハ無論ナルカ故、速ニ攘斥ノ予備ニカメサルベカラス、茲ニ至テハ成敗利鈍ヲ論スヘキノ時ニ非ラスト断決セラレ、御帰国ノ途ニ就カセラレタリ、御進退ノ迅速ナル、御洞見ノ明ナル、實ニ驚クベキナリ、

○從駕御側役島津主殿友人某ハ當時ノ形況其他ノ親話、

三月十一日兵庫御着、同夜同所小豆屋某宅小豆屋ト通唱ス、從來本陣御一泊、十二日摂州郡山駅御一泊、十三日伏見御

一泊、十四日御入洛、御旅館今回ハ洛東智恩院ヲ拜借セラレ御旅館トスへハ入ラセラレス近衛家へ御參殿午ノ刻頃、忠熙公・忠房公ト

御会釈、間モナク中川宮御臨向前ニ青蓮院尊融、法親王ト申ス、又程ナク

一橋公及ヒ松平春嶽殿・松平容堂殿・鷹司閔白輔熙公等追々御来会、御会釈畢リ国事ノ御談ニ及ハレタリ、

国父公ハ予テ時勢御洞察、或ハ 朝幕ノ形況、或ハ黠藩浮浪輩ノ挙動御認定ノ事故、上文十五条ノ趣御演説ニ及ハレシニ、満座傾首黙然、答弁ハ素ヨリ異議意見申述セラル、方ナク、サスカ有名ナル一橋公モ口ヲ噤マレ、或ハ論話衆ヲ压スルノ名アル容堂公モ黙然言論ナシ、然ルニ中川宮ハ 国父公ノ御説一々御賛成アリシカハ、満座御同意ノ語ハ発セラレタリト雖モ、施行ノ点ニ於テハ容易ノ事ニ非ラサルカ故又黙々ニ付シ、決定ノ勢更ニナク因循固滞、黠藩暴徒ヲ恐怖シ、敢テ〔頭注〕「酉ノ下刻ニ非ス、会谈ヲ始リシガ酉ノ下刻比ニシテ、退散ハ寅ノ刻比ニテ、施為ノ途ニ出サリシトソ、而シテ夜入酉ノ下刻頃御退知恩院ニ帰リシハ、曉天ニ近カリシ。」闕白殿下ヲ初メ御演説ノ条々、現今至難ノ事件ナルノミナラス、攘夷ハ既ニ

勅裁セラレ、今更變更スヘキニ非ス、其他一トシテ容易ノ事ニ非ラサルカ故、本日ノ御会議ハ可否ノ弁別モナク悠悠不斷ナルカ故、其形リニ御退殿アリシトナン、○御参殿ノ日申ノ刻頃ニモアラン、長州世子長門守殿東帯シテ参殿セラレタリ、何乎ニ事寄セテ差シタル用ニハアラサリシトソ、本日 国父公御参殿、宮及ヒ其

他御来会アリシハ悉ナ人知ル処ナルニ、何等ノ事アリテ参殿セラレシニヤ、御会席ニ加ヘ玉フ事モヤアラント、参向アリシモノナラント私言キタリシトソ、○又或ル人ノ説ニ、本日数条御陳述アリシカトモ、悉ク至難ノ条目ナルカ故、宮及ヒ各公傾首噤口、可否答弁ナキニ依リ、国父公ハ強チニ論責セラレス、到底行ハレ難キヲ亮知セラレ、迅速御帰国ニ決セラレシヤ、言ヲ俟タサルナリ云云、

290

○三月十五日、此度ハ参殿セス、未ノ下刻頃ヨリ中川宮ニ御参殿、酉ノ下

刻頃御帰館アラセラレタリ、近衛忠房公ニモ御同会、御談話刻ヲ遷サレタリ、○同日御帰国ノ旨仰出サレシカハ、従駕ノ輩驚愕、暫時御延日、形勢御覽アラン事ヲ言上セリト雖モ、御断決ノ事故其旨従駕員へ布達セシニ、一同狼狽セリ、其時高崎佐太郎正風・同猪太郎五六兩名モ今数日御滞京、天下ノ形勢御見定ノ上御進退ヲ決セラレン事ヲ言上セシニ、国父公仰セニ、言行ハレス、策用ヒラレサル時ニ退クハ古今ノ通義ナリ、豈ニ遅々タルヘケンヤ、今日ノ形勢ハ到底治術ナキニ立

到レリトノ御言ナリシ故、兩名モ御洞見ノ卓絶ナル御決定ノ迅速ナルニ感シテ、再ヒ上言スルニ詞ナカリシト云フ、從駕ノ輩ハ未タ荷物モ解カス、其儘大坂へ運致シタリトソ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二五九号とほぼ同文なり〕

291 ○三月十八日京師御発輿ノ後、国老小松帶刀二条城へ出

頭、將軍家御上洛ノ恭賀ヲ述、或ハ中川宮・関白殿・近衛殿及ヒ一橋殿・越前・土佐等ノ各公へ参候、御帰国ノ途ニ就カセラレシ趣等ヲ演述セリ、各公此由聞シ召シ驚愕セラレ、頗ル憂歎セラレタリ、而シテ此由

叡聞ニ達セシニ、大ニ驚セ玉ヒ、昨秋来待チ設ケ玉ヒ、御着京ノ事ヲ聞召シ喜バセ玉ヒシニ、豈料ラン、遽ニ御退京アリシハ不服ノ事アリシナラン、御依頼ノ旨モ空カリシト甚タ御憂悶アリシト云フ、直チニ御呼還シノ内

勅ヲ下サレ、伝奏坊城宰相中将殿ヨリ近衛殿へ

勅意ヲ伝ヘラレ、近衛殿ハ直チニ大坂迄御使ヲ立ラレシカトモ、御使者着坂ノ時ハ早ヤ御搭艦、御発航ノ後ナリシ故、止ムコトヲ得ス空シク帰京セリト云フ、因テ近衛殿ハ御留守居へ

勅命ノ趣達セラレ、重テ速ニ御上洛アラン事ヲ冀望セラ  
ル、旨伝ヘシメ玉ヘリ、而シテ税所容八御用部  
屋筆者近衛殿ヨ  
リ

勅命御伝達之御書類護送帰国セリ、斯ノ如キ卒然ノ御退京ナルカ故、洛中訛言囂々、人心恟々タリ、恐コクモ宸襟ヲ悩マシ玉ヒ、中川宮及ヒ関白殿下へ

御憂悶ノ御旨告玉ヒ、再ヒ御上洛ヲ促サル、頻リナリ、又中川宮ニハ元來 国父公御同論ニシテ百事御依頼アリシニ、事ノ行ハレサルヲ以テ卒然御退京アリシニハ大ニ御憂ヒ、天下ノ治安ハ以來望ムヘカラストノ仰アリシトナン、將軍家ヲ初メ一橋・越前公等ニモ頗ル驚愕、為ス所ヲ知ラサルニ逼マラレ、中ニモ春嶽殿ハ殊ニ憂慮セラレ、当日ハ飲食モ忘レ痛心セラレタリト云フ、○長藩其他浮浪士ハ一喜一憂、從テ三条・姉小路等長藩論ノ公卿ハ、且ツ憂ヒ且ツ喜タリト、或ハ閣

老及ヒ幕吏ハ、国父公ヲシテ公武ノ間ニ置キ、御見カヲ促スノ計画ナリシニ、卒然御退京アリシニハ頗ル意外ニ出テ、カヲ落シタリトナン、元来 国父公ノ御所論ハ、公武御和睦、無謀ノ鎖攘不可ナルノ御献言屢

ナリシハ、幕府ニ於テ大ニ喜ブ処ナリ、然リト雖モ數百年習染ノ驕慢ヨリシテ猜疑ノ意深く、或ハ己ヲ空フシテ言ヲ求メ、或ハ依頼スルノ開豁ナルニ至ラス、

国父公ヲシテ使役スルノ素心ナリ、斯ル形勢ニ変シ、幕威漸ク傾キ旧慣ノ臭情去ラサルハ、機運ノ尽ントスル兆ト云フヘキナリ、又在京各藩モ大ニ驚愕シ、世ノ形勢ヲ傍觀シ、機運ノ顕ハル、ニ至テ進退セント、首巖両端ヲ持スル者倍々多キニ至レリ、或ハ大小公卿ニモ両端ヲ懷キ、時勢ヲ窺ハル、ノ形況ニ変シタリ、此ノ如キ形勢ナルカ故、京伏撰間其他近畿ノ地、種々ノ訛言頻リニ起リ、人庶恐懼シ、寢食ヲ安セサルニ立到リ、日ナラスシテ洛中兵馬ノ衢ニ変シ、或ハ撰播泉沿海ノ地ハ外夷ノ為メニ蹂躪セラレ、或ハ薩州ハ割拠シテ西ノ將軍ト仰カレ、

天子ヲ挟ミ大ニ為スコトアルヤ必セリト、喋々嘖々喧シ

キニ至レリ、各藩ニ於テ見ル処モ同シク、殊ニ長藩或ハ浮浪輩カ注目スル処モ割拠シテ、為ス事アルヤ疑ナシト、大ニ心ヲ用ヒタリシト云フ、斯ノ如ク訛言流説ノ喧シキヲモ

叡聞ニ達シ、大ニ

宸襟ヲ惱サレ、中川宮ヲ召サレ、如何ニモシテ速ニ上洛セシメ、鎮静ノ策ヲ問ハセ玉フヘキトノ密

勅ヲ下シ玉フ事數回ニ及ハレ、宮モ差シ向キニ如何ント

モスルニ術ナク、近衛殿ト密カニ議シ玉ヒ、

叡慮ノ旨ヲ以テ御上洛ヲ促サル、事頻ナリ、実ニ天下ノ

機軸ニ立タセラレ、万人ノ標準ト仰キ奉リタル 国父

公ナルカ故、遽ニ御退京アラセラレシニハ、恐懼憂患

スルハ至当ト云フヘシ、素ヨリ尊

王治国ノ御誠意確然トシテ他意アラセラレサルハ、鬼神

ノ見ル処ナルカ故、黠藩暴徒カ如何ニ訛言千万出スト

モ、敢テ恐ル処ナク憚ル事ナキカ故泰然御帰国、武備

嚴整

勅命循守、国力ヲ尽シ攘掃ノ功ヲ挙ンノ一点ニ決セラレ

タリ、実ニ

皇国ハ外国革命ノ国風ト異ナリ、開国以来二千有余年

皇統綿々比肩ナキハ多言ヲ要セス、普天下王土ニ非ラサルナシ、

論言汗ノ如シ、背違スヘカラサルハ論ナク、設令ヒ曩キ

ニ無謀ノ鎖攘ハ不可ナルノ旨、数回上言セラレタリト

雖モ、採択施行セラル、ハ

朝廷ニアリ、是ヲ施行スルハ幕府ノ責任ナルハ言ヲ俟タ

ス、因テ各港在留ノ外人ヘモ既ニ幕府ノ達スル処トナ

リタリ、豈ニ一献言ノ行ハレサルヲ以テ割拠スル等、

不忠無道ニ陥ルノ挙動アランヤ、剩ヘ生麦事件ニ就テ

英夷ノ申請頗ル猖獗倨傲ヲ極メ、幕府制抑ニ困ミ本藩

ニ譲リ、目下ノ困擾ヲ避ケントスルノ姦謀アリ、斯ル

事項ノ在ルアリ、素ヨリ勝算ナキハ自ラ能ク弁知セラ

ル、処ナリト雖モ如何セン、

勅命奉セサルヘカラス、依テ国人ニ向テ、攘夷ノ

勅諭ヲ循守シ、死力ヲ尽セ云云ノ布令ヲ發セラレタル者

ナリ、又曰ク、生麦事件ハ前卷ニ論シタルカ如ク、彼

暴謾無礼ニ我カ行粧ヲ侵シタルカ故、旧慣ニ則リ斬殺

シタル者ニシテ、曲直判然タルハ論ヲ俟タス、畢竟彼

礼讓ヲ失ヒ、自ラ招キ禍ニ罹リタル者ナルカ故、如何

ニ論責スト雖モ、幕府是ヲ論弁スルノ理アルニモ悲哉、

開港以来外国ノ暴威ニ恐怖シ論斥ノ勇胆ナク、却テ渠

ト密親、目下ノ困難ヲ避ント威力ヲ振り、本藩ノ勢望

ヲ貶セントスルノ説モアリ

前編ニ記セシ如ク、閣老井上河内守

ヲ發論シテ鹿兒島ニ來港シ、迫マラシ

メタリ、政權掌握ノ幕府失、

典ノ大ナル者ト云フヘシ、斯ノ如キ種々ノ情実アリ、加之

大權掌握ノ底意ヲ存シタリ等ノ猜疑ヲ以テ公武御和睦

云云ハ口実トシ、数回ノ御献言モ信採セサルハ、徳川

家衰運ノ機迫マレリト謂フベシ、加之將軍

リト雖トモ、未タ政務ノ得失、寛急ノ順序モ弁識セラ

レス、悉ク一橋殿及ヒ閣老等ノ所議ニ出ルハ則攘夷期

限 將軍家入洛ノ前頃、長州ノ暴論家久坂或ハ熊藩(轟)

等力、三条美実・姉小路公知等十二三卿ヲ煽動シ、関白殿

下ヲ脅迫シ、

勅諭ヲ促シ奉リ、一橋殿ヘハ

勅允ヲ以テ逼リ、遂ニ期限ノ御受ニ至レリ、是レ將軍家

ハ幼若ナルカ故、凡百大小ノ有司議決ニ出ルノ確証ナ

リ、茲ヲ以テ 国父公ハ、初ヨリ 將軍家上洛ノ大典

ハ速ナルニ及ハス、後見・総裁ノ二職ヲ置キ、而シテ

大小各藩ニ諮詢セラレ、国是ヲ定メラル、ヲ急務云云ノ御定論ナリ、又上洛ノ大典ハ其經費莫大、或ハ宿駅ノ窮困、或ハ從駕大小藩ノ費途モ幾干カ知ルヘカラス、故ニ後ニストモ敢テ不可ナル事ナシ、其費ス処ヲ以テ海陸備防ニ充ン等ノ理ヲ尽シ、寛急ノ序ヲ立テ獻言セラレシニ、幕府ハ猜疑、或ハ黠藩暴徒カ脅迫ニ驚懼シ、上洛シテ尊

王ノ道ヲ虚飾シ、幕威ヲ恢復シ、抑圧ヲ擅ニセントシテ上洛アリシ者ナリ、然ルニ黠藩暴徒ハ其機ニ乗シテ、攘夷ノ期限或ハ節刀授与ノ詐術ヲ促シ奉リ、益々私意ヲ恣ニセントスルニ至レリ、茲ニ於テ幕府初メテ驚キ、供奉病ヲ以テ避ケ、代員一橋殿モ遽病ヲ以テ退クノ切迫ナル挙動ニ及ヒタリ、黠藩暴徒ハ謀ル処其機ヲ失ヒタルヲ以テ漸ク暴烈ニ変シ、大和幸行ヲ促シ奉リ、是ノ奸謀モ又破レ、遂ニ京師暴発ニ至リ、奸策水泡ニ帰シ、同論ノ各卿ハ流離ノ困難ニ陥リタリ、斯クノ如キノ顛末ニシテ幕運ノ傾キタルハ、全ク猜疑ノ深キヨリ生シタリト謂テ不可ナカラン、猜疑ノ深キ其因テ起ル処ハ、數百年ノ間天下ノ政權ヲ握リ、上ヲ輕ンシ下ヲ

抑圧シ、詐術ヲ以テ得策トシ、探訪ヲ密ニシ、少シク瑕瑾ヲ認ムレハ残酷ノ処分ヲナシ、尤、探訪ノ密ナルヨリシテ猜疑倍々深く、却テ街衢ノ説ニ惑ハサレ、遂ニ今日ノ困難ヲ来シ、進退逼迫ナルニ至レリ、茲ヲ以テ徳川家運機ノ傾キタルハ、驕傲猜疑ニアリト謂フモ不当ト謂フヘカラス、又

朝廷ニハ數百年來幕府ノ抑圧ニ困マレ、敬シテ遠ケラレ、鬼神ト同シク深宮ノ中ニ籠絡セラレ玉ヒシ故、宇内ノ形勢ハ無論、國中ノ情事モ知シ召サレス、外夷ト云ヘハ禽獸ト同視セラレ、攘夷ト云ヘハ兎鹿ヲ逐フカ如ク容易ノ者トシ、黠藩暴徒ノ甘弁ヲ信セラレ、時トシテ恐嚇ノ語ニ驚カセ玉ヒ、則チ久坂・轟等カ脅迫ノ如キニハ狼狽セラレ、至重至大ノ事件朝議ニモ涉リ玉ハス、各藩ハ諮問モナク、勅裁ヲ促シ奉リタルノ始末、実ニ名ツクルニ由ナキノ暴行ニシテ、

勅意ヲ左右シ奉ルノ大罪ト謂ハサルヲ得サルナリ、又幕府ニ於テ政權掌握ノ名アリ、兵威モ未ダ各藩ノ上ニアリ、然ルニニ黠藩或ハ僅々數百ノ浮浪、或ハ十余名

ノ暴公卿抑制ノ断ナキハ又之ヲ何トカ謂ハン、兵威・  
権力ニツナカラ存スルノ時、之レヲ制シ得サルハ臆怯  
ノ名ハ尤モ免レ難カラン、素ヨリ真ノ

叡慮ニ出タルニ非ラス、脅迫シ奉リタル挙動顯然タルカ  
故、之レヲ罰スルノ名、之レヲ刑スルノ柄アルハ論ヲ  
俟タサルナリ、然ルニ処分スルノ力ナキハ寔ニ悲ムヘ  
キノ極リト謂フヘシ、斯ノ如キ事情ニ起レル攘夷ノ布  
令ナリト雖モ如何ンセン、

勅命・幕令ト云ヘハ、設令ヒ必敗ハ見ルカ如シト雖モ、  
循奉セサルヲ得ス、是ヲ奉セサルハ

皇国ニ於テ臣タルノ道ニ背違ス、故ニ勝算素ヨリナシト  
雖モ、国力ヲ尽シ、掃攘ニ決ヲ取り、死力ヲ尽スヘシ  
トノ嚴令ヲ布レタル者ナリ、本藩ハ守防ノ備大小三百  
余藩ニ比肩恐ラクハアラサルヘシ、如何ントナレハ弘  
化ノ初ヨリ今ニ至リ、御三代殆ント二十年懈怠ナク巨  
万ノ財ヲ費シ、大小砲ハ素ヨリ砲台其他彈藥ノ如キ虧  
乏アルコトナシ、唯軍艦・海兵備ハラス、故ニ追撃ノ  
一点ハ手ヲ空フスルノミ、（釋也） 照国公ハ安政ノ初メ、既  
ニ海軍創設ノ端緒ヲ開カレタリト雖モ、不幸ニシテ天

年ヲ假サス、奸吏目前ノ費途ヲ厭ヒ、海陸ノ軍備モ稍  
廢棄シタリ、然ルヲ 国父公御介助ニ至リ、軍艦製造  
又ハ汽船購求等ノ令ヲ下サレタリト雖モ、目下速成ス  
ヘキニ非ズ、其他守防ノ準備ハ稍整理セリ、故ニ夷艦  
襲来ストモ恐れニ足ラス、必勝ハ期シ難シト雖モ、全  
敗ハ恐ラク取ラサルヘシト、國中一般疑ハサル処ナリ、  
各藩ノ如キハ佐賀藩ヲ除クノ外、今ノ世ニ処スルノ軍  
備ハ掃フテナシト云フヘキナリ、幕府ニ於テモ江戸近  
海ノ守防ハ少シク設アリト雖モ、摂泉播ノ要衝ハ兇戲  
ニ等シキ結構ニシテ、備防ノ名ヲ与ヘ難シ、然ルニ羊  
豚ヲ追フカ如ク攘鎖ヲ促サル、ハ、真ニ無謀ト云フニ  
外ナシト雖モ、本藩ニ於テハ生麥事件アルカ故、止ム  
ヲ得ス掃攘ノ令ヲ布カレ、或ハ一回砲煙ヲ揚ケ、而シ  
テ後彼我ノ実況ヲ見テ、而シテ後ニ又施スノ道生スル  
ニ至ラントノ決策ニ出タリ、詳ニ後編ニ記載ス、○又  
本月末頃京撰問ノ説ニ、 国父公卒然御退京御帰国ア  
リタルヲ大ニ感賞シ、御献言行ハレサルカ故ニ、一時  
国ニ引キ入り形勢ヲ傍觀セラルハ、頗ル果斷ニ出タリ、  
他日大ニ為スコトアラント、或ハ長藩浮浪ト謀リ讒誣

シ、離間ノ策ヲ施シタリトノ説喋々タルニ依リ、其説ヲ避ケンカ為メ、或ハ 朝幕ヲ驚カサンノ奸策ニ出タリトモ唱ヘタリ、越前春嶽公ハ総裁ノ職トシテ許允ヲモ受ケス発程セラレシハ、縦肆ノ挙動ナリトノ幕議ヲ以テ、免職謹慎ノ譴責ヲ蒙ラレタリ、此ノ如ク当時柱石トスル各公数日ノ間ニ帰国セラレタルニハ、上下一般恐懼シ、訛言嘖々トシテ、今や砲煙矇昧ノ街衢ニ変セント騒々タルモ理ナシトセス、

292 ○今度 御上洛御在京御日数可為十日旨、於京都被 仰

出候旨、於御旅館被 仰出候、此段為心得向々へ可被 相達候事、

三月「日糺スヘシ」  
〔貼紙〕

293 ○三月朔日、英国軍艦大小八艘神奈河へ渡来、去年四月

薩摩藩士生麦村ニテ英商ヲ殺傷セシハ、条約上ニ背違シタルヲ主張シ、三ヶ条三ヶ条トハ、第一斬殺シ者ヲ得テ刑セシ、第二万国公法ニ則テ償金ヲ得ン、第三斬殺セラレシ者ノ家族養育金ヲ得ンノ三件ナリ、ヲ以テ責論シ、恐嚇ノ情甚シ、幕吏頗ル困却、百方説解ストモ敢テ承服セス、因テ三月

十七日各藩へ布告シ、本藩へハ三月二日ヲ以テ達セラレ、而シテ後 月 日「〔貼紙〕月日糺スヘシ」、二条城へ国老

小松帶刀ヲ召喚シ、一橋殿及ヒ閣老板倉周防守殿・水野和泉守殿〔忠精〕列座、一橋公曰、去秋生麦ニ於テ其藩士英

人斬殺事件ニ付テ、三ヶ条ヲ以テ頗ル猖獗ノ問題タリ、其中償金ヲ求ルノ条アリ、処分如何ンシテ可ナラン、

又其藩ニ於テ冀望スル旨モアラハ是ヲ聞ント云云、小松答曰、這ノ事件全ク弊藩ニ起リ、実ニ恐縮ノ至リ、然リト雖モ事素ヨリ曲直判然タリ、若シ果シテ魔海ニ廻航セハ論判スル旨アラン、然ラハ彼必ス反省スル処アラン、一橋公曰、彼申請ノ条幕府ニ於テ許容シ難シ、如何ントナレハ責任上ニ於テ此事設令薩藩ニ起レリト雖モ、処分ニ於テハ幕府ノ知ル処ナリト云フ、茲ニ於テ小松ハ曲直分明ナル旨ヲ以テ論判シ去シメ、敢テ輕忽ニ事ヲ破ルノ時機ニ至ラシムヘカラス、彼レ魔灣ニ廻航スルハ、敢テ否ム処ニ非スト謂テ退キタリトナン、

294 ○

大目付江 此節神奈河表へ英国軍艦数艘渡来、重大之事件書翰ヲ

以テ申立、来月八日迄ニ御聞届於無之ハ、船將之職掌

ヲ尽シ可申旨申立、右者不容易儀故、応接之模様ニ依

リ、開兵庫候モ難計候間、差図次第出張之心得ヲ以テ

人数等手当可致候、御困メ場等之儀者尚相達方可有之

候、尤モ御留守將軍在京中  
ヲ云フ、中猥ニ動揺無之様、未々迄精々

可被申付置候、

右之趣、万石以上之面々へ可被相触候、

三月十六日

右之通従 公儀被仰出候段申来候、此旨御供中へ可被

申渡候、

三月十八日 帶刀小松

295 ○三月十七日、於 御所関白殿ヨリ一橋殿へ御渡、

295の1 大樹婦府之事段々以

勅諭被召止候事、先日

御沙汰被為

在候通、將軍職万事是迄ノ通御委任候、就而者諸大名

以下守衛万端指揮於被致者

御安心ニ候事、殊ニ寄候得者御親征モ被(為脱カ)

在程之

思召ニ候事、

右御書付ニ对セラレ、御直筆ヲ以テ將軍家直筆  
ヲ云フ 奉畏御請

申上候事、

三月十八日 家茂

296 ○ 大目付江

攘夷之儀御奉戴ニ付、早々拒絶之応接ニ及ヒ、若シ承

服於不致而者、速ニ打払候様被仰出候ニ付、一同厚相

心得、御国辱不相成候様可被抽忠勤候旨御沙汰候事、

右之趣、万石以上以下之面々へ不洩様早々可被達候、

三月「日札(貼紙)スヘシ」

297 ○癸亥二月十九日、英国軍艦ヨリ差出タル書翰左ノ如シ、

297の1 英国海軍士官生麦村ニ於テ薩州家来ノ者ニ殺害セラレ

候ニ付、殺害シタル一類之者不殘召捕、英人立合ノ上

○三月廿一日、幕府ヨリ英国公使江返翰左ノ如シ、

〔貼紙〕「償金数、諸書記ス処各異ル、札スヘシ」  
殺害シタル者ノ首ヲ刎候様致度、此度日本政府ノ威権  
薄クシテ処置難相成候者、贖金五十万「ポント、ステ  
ルステンリング」〔日本金ニ直シテ凡二十五万兩〕ヲ政府ヨリ差出可有之、

其上ニテ薩州鹿児島湾ニ廻リ、殺害セラレタル英人カ  
妻子養育金三万「トルラル」〔貼紙〕「我金ニ直シテ凡二万五千兩〕ヲ島津家ヨ  
リ受取ヘク、若又拒候者戦争ニ可及候間、日本政府ヨ  
リ重キ役人一人檢使トシテ、是非共英国軍艦へ乗組相  
願度存候、右返答十九日ヨリ二十日迄廿四時間ニ彼国  
政府ノ命令ニ無之、全ク船将一手切りノ猶予ニ依テ今  
日返答承度、猶予ノ刻限遲滞候者、即刻軍艦ヲ大坂・

長崎・箱館其外諸港ニ差廻シ、出入ノ船ヲ奪ヒ、且江  
戸中ヲ焼払ヒ候、是ハ英国ノ穩辛〔貼紙〕「穩辛ニオキテト仮名ヲ付ス、札スヘシ」并  
条約ニ対シ、日本政府ノ越度アルニ依リテ、無拋此ノ  
事件ニ及ヒタリ、

亥二月十九日 在日本英吉利国代理公使

日本政府 イ、シントシヨン、テール

御老中様江

貴国第四月六日之書翰并別紙共〔善手カ〕領手、之レ申越候条件  
了承ス、而早速大君殿下江報通可致、将又以其軍艦薩  
摩国江差渡、夫々談判之品有之事之由、今更別ニ不待  
便論、兼々其許ニモ我国之事情承知被致候ナレハ、右  
之一条者意外之損害差起リ、一層且ツ不和ヲ醸シ候場  
合ニモ可致立到哉モ難計、且我国之政度ニモ差響キ、  
不都合之廉不少、深ク痛心スル処ナレハ、右薩摩国江  
差渡サンノ別紙ハ〔儀ハカ〕見合候様致度、今之一条於政府モ当  
節者殊更ニ配慮有之折柄ナレバ、暫ク其所置ニ被任候  
様可望、爾来高貴之士官一名乗組候儀モ難心、其意勿  
論是以テ大君殿下江言上之上、向後可及挨拶候、不取  
敢返書旁此段申入候、恐惶頓首、

三月二十一日 松平豊前守〔信憑〕

井上河内守〔正直〕

花押

英吉利国在日本代理公使

イ、シントシヨン、テール閣下

〔本文書は「玉里島津家史料補遺 南部弥八郎報告書一」

299の1  
○京都報知ニ、去月廿二日二月廿二日ノ夜、洛西金閣寺ニ安置

スル所ノ足利三將軍ノ木像ヲ毀チ、三条川原ニ梟シタルニ付達書、

当月廿二日ノ夜、尊

王之名義ヲ仮リ、私意ヲ以テ横行ニ及ヒ、足利三將軍木

像ノ首ヲ拔キ取り梟首致シ、種々雜言ヲ書キ顯候聞得

有之、其者共召捕候、畢竟

朝廷官位ノ重ヲ不憚、奉輕蔑

天朝之至宥免難被成、猶吟味之上罪刑ニ可被処事候、乍

去精忠正義、実ニ尊

王ヲ志シ候者共於

朝廷固ヨリ被遊

御満足、公義ニ於テモ御採用相成事候ニ付、聊無疑心、

弥忠誠ヲ励、心得違無之様急度可被申聞事、

右、守護職松平容保肥後守殿ヨリ、洛中洛外へ不洩様可相

触旨御沙汰候事、

斯クノ如ク暴業ノ顛末ハ、洛西等持院ニ安置セル足利

尊氏及ヒ義詮・義満三將軍木像ノ首ヲ拔キ取り、三条

河原ニ梟シ、其傍ニ罪状ヲ掲示セリ、曰ク、源頼朝以

来北条・足利ニ至リ凶逆数フヘカラス、我曹其時ニ有

テ不臣ノ者ヲ誅戮セサルヲ遺憾トス、依テ木像ヲ梟シ

テ衆ニ示ス云云ナリシトソ、足利氏ノ凶暴ヲ唱ヘタル

ハ幕府ヲ擬弄シタル者ノ如シ、守護職会津侯久津候ノ手ヲ以

テ嚴ニ搜索シ、捕縛セラレタル曹ハ、松山藩脱走三輪

田綱三郎綱郎丸元綱、諸岡節齊節齊方、正胤、宮和田雄太郎男太郎丸胤影、浮浪士ニハ建部

建一郎高綱、青柳健之助、高松起之介、仙石佐太郎佐多雄丸、隆明、長沢

誠平、大庭匡平、長尾郁三郎、山田綱太郎、泰某等一浪貼紙

士ハ皆変名ナリシト云フ之曹ニシテ各獄ニ下シタリ、

然ルニ長藩ハ寛典ニ処セラレンコトヲ頻請セリト雖モ、

敢テ允サレス、然リト雖モ処刑ノ場ニ至ラス獄中ニ繋

ケリ、是ヨリ浪士等ハ長藩ヲ推揚仰望スルコト一層セ

リ、当時ノ説ニ、此暴業其因テ起ル処、長藩士カ浮浪

ニ懲洩シタル者ナリト云云、○此時幕府ハ浪士鎮撫抑

制ニ苦ミ、一新法ヲ設ケ新徴組ト名付ケ扶持シ、江戸又ハ京都ニ置キタリ、京師ハ壬生ニ屯所ヲ設ケ、之ヲ壬生浪人ト唱ヘタリ、其人員五百名ニ余レリト云フ、

○長藩ハ昨年来仕役スル処ノ浪士殆ント一千人ニ余リ、悉ク京師ニ出テ奔走シ、暴業ヲナシ人民ノ妨碍タルコト少々ナラス、又壬生浪士モ元来無頼ノ輩ニシテ乱行甚シ、是ヨリシテ洛中ニ居ル処ノ浪士ニ派二分レタリ、幕府扶持スル処ノ浪士ニ宰タルハ鶴殿鳩翁（長勢）民部少輔トモ云フ、ナル者ヲ初、数名ノ吏ヲシテ招募シタルハ、浪士ノ勢力日ニ熾ナルカ故、之ヲ抑圧スルノ力ナク、一時ノ權謀ヲ以テ徵集シタル者ナリト云フ、

300 ○三月十日京師報知ニ曰、洛中ノ形勢日ハ日ニ切迫、乱

兆眼前ニ顕レ、一般恟々眠食ヲ安ンスルコト能ハス、朝廷ニハ鎖攘御決定、將軍家人京ノ前頃掃除ノ期限ヲ定メラレ、僅々数日ノ滞京ニテ帰府ヲ促サルニ決セラレタリ、或ハ長藩ハ浪士ヲ懐ケ、鎖攘ノ説或ハ政治上種々ノ訛言ヲ流布セシメ、加之暴行太甚シク暗殺剛奪ノ所為ニ涉リ、或ハ浪花其他ニ於テハ豪富ノ者ヲ恐嚇

シ、金銀ヲ劫奪スル等暴悪ノ所為至ラサルナク、実ニ義仲カ乱妨モ斯クソアリシナラント、洛中ハ素ヨリ京伏坂ノ民庶枕ヲ安スルコト能ハス、外難内憂一時ニ逼迫セリ、本藩ニ於テハ生麦事件ニ就テ英夷請求ノ条件頗ル重大、且猖獗ノ言論ニ出、幕府措置ニ困ミ、本藩ニ其責ヲ讓ラントスルノ姦謀ヲ施スノ説モアリ、斯クノ如キ情況ナルカ故、軍備一層嚴整、内外ノ変ニ応シ、六百年來養成ノ国風ヲ耀カスノ時ニ至レリト、一般頗ル振興セリ、

301 ○三月六日布達、先中後ノ三軍又ハ救応或ハ予備、或ハ

兩城（御本丸）警衛、府内（御城）巡邏或ハ各砲台救応及予備ノ諸隊編伍ヲ改メラレタリ、左ノ如シ、

301の1

〔貼紙〕一名実名札スヘシ

先軍（御先手ト）一陣ノ主將川上式部（久美）、物主川上源十郎（マ）

後勘解由（ト改ム）・樺山要人、旗預関山新兵衛（マ）、談合役吉崎壯八郎（マ）、其外仕長・伍長等数十名、又中軍ハ（御旗本隊）太

守公 国父公各二陣、後軍ノ主將ハ川上但馬（久運力）等、各

主將・物主・隊長・仕長・伍長・輜重・彈藥方兵士等

数千名数隊ナルカ故、各組頭宅へ喚出シ、本日ヨリ九日迄二達シ終レリ、而シテ此編制ヲ以テ不日 太守公御出馬、実地演習セラルヘキ旨モ達セラレタリ、

302 ○三月十二日、本日川尻砂揚場ニ於テ、先中後三軍及ヒ

御城下警衛隊等ノ操練ヲ催サレ、太守公ニハ巳ノ刻頃御出馬、各軍ハ黎明ニ出場、御出馬ヲ待チタリ、御出馬御本陣ニ入ラセラレ、各軍拜謁畢テ諸軍操練ス、

先軍御先手 主将国老川上式部美久、次ニ中軍御旗本隊、次ニ国

父公御旗本隊、此二軍ノ主将ハ島津周防殿忠鑑、重指揮、〔貼紙〕各実名札スヘシ 富郷領主〔マ、マ〕セラル、次ニ御城下警衛隊、此主将ハ国老川上但馬〔マ、マ〕、

各軍操練中 太守公ニハ御乗出シ、進退駆引御巡覽アラセラレタリ、未ノ刻許リニ終レリ、而シテ 太守公ニハ下町弁天波戸砲台へ御出馬、水軍隊操練御覽、申ノ下刻頃御帰城アリタリ、○本日先中後及ヒ諸隊人員左ノ如シ、旗預二十五人、談合役二十五人、〔具役カ〕具役二十五人、太鼓役二十五人、什長百五十六人、兵糧方二十五人、玉薬役二十五人、戦兵千五百六十人、人馬方二十五人、普請方二十五人、医師二十五人、旗持足輕二

十五人、総計人員千九百六十六人、此外水軍又ハ砲台或ハ救心・後備・予備等ノ数十隊ナリ、○水軍隊ハ今回創設セラレシモノナリ、〔脱カ〕其組織ハ輕舸十余艘〔脱カ〕ヲ新製シ、各十八斤銅短砲一門ヲ装置シ、水軍兵ヲシテ進衛追撃ノ為ニ設ケラレタリ、船ノ長六間許リニシテ進退自在、輕便ヲ要トシタル製造ナリ、夷舶來襲ノ時ハ突衝或ハ追撃ノ用ニ充テラル、者ナリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二五四号と同文なり〕

303 ○三月七日江戸飛報ニ曰ク、二月廿二日、幕府外国掛御

目付ヨリ江戸邸留守居呼出シ、左ノ書面ヲ渡サレタリ

御留守居付役岩元、  
太右衛門出頭ス、

303の1 此節神奈川表へ渡来ノ英国軍艦水師提督薩州表へ相廻リ、申立ノ趣品々有之段同国公使ヨリ申立候、右者外人接待ノ地ニ無之候ニ付、説得為致候得共、有無之返答ニモ不及、卒爾ニ船差廻候様ノ儀無之トモ難申候間、此段為心得相達候事、

二月二十二日

此書面及ヒ在邸国老喜入撰津ヨリ、夷情ハ素ヨリ幕府ノ形勢其他街巷ノ説等種々ノ報告ナリ、

304の1 ○三月十五日ヲ以テ長崎奉行ヨリ九州各藩へ達書左ノ如シ、

昨戌八月島津〔久光〕三郎儀江戸出立之節、於生麦英吉利人兩人斬殺ハ誤ナリ、一人ヲ殺シ一人ヲ傷ケタリ、○生麦ニ於テ斬殺セラレタル英商ハ「カルレス、リチャルドソン」ト云フ、傷ケラレタル者ハ「ウイレム、カラクケ」「ウイレム、マルセル」、此二名ハ深傷ヲ受、外ニ「ホルラデイレ」及婦人一名ナリ、合テ五名同行皆馬乗遊歩セシト云、四名ハ辛フシテ通レ去レリ、○其時我行艇中ニ見認メタルハ三名ニシテ、一名ヲ斬殺シ一名ニ傷ケ、婦人ハ遁ケ去リタリト記セリ、諸書記ス処異同アリ、○或ハ英国士官ト記スモアリ、或ハ償金・養育金ノ数モ異同アリ、打果候ニ付、同国ヨリ此度横浜湊へ軍艦差向ケ、三ヶ条三ヶ条ノ事柄ハ前ニ記ス申立候、右者難聞屈筋ニ付、其旨及応接候間、速ニ戦争可相成モ難計候間、此段為心得相達候、

右之通、松平春嶽殿ヨリ被仰下候ニ付、此段相達候、尤モ右ニ付廉々急便ヲ以テ相伺置候儀モ有之候間、猶相達ニテ可有之候、

三月十五日

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二五七号と同文なり〕

305の1 ○三月十五日達、

井伊掃部頭〔直憲〕 家来江

此度横浜港へ英吉利軍艦渡来、昨年島津三郎家来之者英吉利人兩人殺害ニ及候儀ニ付、三ヶ条之儀申立、何モ難聞屈筋ニ付、其趣ヲ以テ可及応接候間、速ニ兵端相開候儀モ難計、依テハ銘々藩屏之任ニ有之候ニ付、夫々備向手当有之候様為心得相達候事、

三月十五日

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二五六ノ三号と同文なり〕

305の2 ○同日達、 井伊掃部頭へ

此度江戸表江異国軍艦差向ケ、三月八日迄相待、御答生麦無之候者戦ニ可及旨申立、右者御承引可相成筋無之事件、  
候ニ付、御一戦之御覚悟ニ有之候ニ付、其方へ横浜ヨリ川崎迄御警衛被仰付候、早々人数差出、防禦可致旨被仰出候、

三月十五日

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二五六ノ一号と同文なり〕

り

306 ○攘夷拒絶ノ布告或ハ生麦事件ニ就テ、本藩ハ開港論ナ  
リトノ説アルカ故、御退京御届書ト同時ニ左ノ書面ヲ  
呈出セラレタリ、

306の1 此節攘夷拒絶之嚴令承知仕候ニ付、夷船一艘ニテモ領  
内へ碇泊致候者不及応接、速ニ加誅伐候心得ニ御座候、  
且依時宜テハ夷賊為征討、軍艦差遣候儀モ可有之候間、  
右之趣兼テ御聞置被下候様可申上置旨申付候、此段申  
上候、以上、

三月十七日

松平修理太夫内

本田弥右衛門

右御書面、三月十七日 国父公御退京御届書ト俱ニ議  
奏へ就テ奉呈セラレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二五六ノ二号と同文な  
り〕

307 ○三月十五日ヲ以テ 国父公於京都從駕、亦ハ在邸ノ吏

員及ヒ守衛ノ人員中へ御示達ニ基カレ、 太守公御筆  
ヲ以テ左ノ令書ヲ發セラレタリ、

307の1

今般英夷軍艦横浜へ渡来之一条ニ付テ、於京都御別紙  
之通、 三郎様御筆ヲ以テ被仰出候趣、御尤之御儀ニ  
存候、

皇国ノ御大難ヲ当家ヨリ引起候訳者、幾重ニモ恐入候得  
共、畢竟生麦一条ニ就テハ曲直分明、武門ニ於テ不可  
遁ノ先習候間、万一前之浜へ渡来候者、正議之論ヲ以  
テ致応接、彼ヲシテ令屈伏候者必定ニ存候得共、自然  
兵端ヲ相開候訳ニモ候者、強暴之極ト可申候得共、  
三郎様御趣意奉汲受、天下国家之為メ粉骨碎身、夷賊  
誅伐有之候様頼存候、就テハ手当向相掛候儀共、猶又  
於役場手厚ク尽評議候様可有之候、且又一同相心得候  
訳トハ存候得共、攻守之命令相加候迄者、如何程之軍  
艦渡来候共、少シモ動揺不致候儀專要存候事、

三月

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二五八号・「名越時敏  
史料一」三七九頁「今般英夷軍艦横浜へ渡来」と同文

なり）

308  
○三月十六日、御次三之間ニ於テ、御側役大久保一蔵ヲ以テ御達書左ノ如シ、

308の1

側向中江

追日至極之世態ニ相成、三郎様御配慮、我等心痛ニ及候次第者、此内分而一同江モ申達置候通ニ候、然処側向者諸方之標的ニ而、身辺之者共者第一趣意貫徹無之候而者不相成事ニ候、命令之不行届者畢竟我等不肖之故ト相考候得共、ケ様ノ時勢為國家断然尽死力、我等之不肖ヲ補ヒ、標的之基本相立候儀、亦臣子当然之事ト存候間、能々時勢ヲ觀察シ、尋常之事ニ而者不相濟訳ヲ弁シ、各職掌ニ応シ勤向者勿論、文武磨励之道等、此節者改而其詮相立候様、左候而、用部屋者申迄モナク、小納戸方等者身辺之要所ト存候間、此内申達置候書取之趣意一段相心得候様可有之、三郎様万端御苦心被成下候折柄、此上懸而御配慮重上ケ候儀共有之候而者、何共恐入次第ニ候、我等ノ情義ヲ相察シ、

ケ様之時勢如何程致力候而、臣子之情義相立候哉ト深く可及勘考候、既ニ御立ニモ相成苦心之余、此段分而申聞置候、

三月十六日

309

○三月十五日京都報告ニ曰、攘夷御決議五月十日ヲ以テ期限ト令セラレタルニ依リ、在京ノ諸大名御暇至急帰国、掃攘準備アルヘキ旨達セラレタリ、左ノ如シ、

309の1

〔前田齊泰〕  
加賀中納言殿

〔齊憲〕  
上杉彈正大弼

〔慶頼〕  
有馬中務大輔

〔宗徳〕  
伊達遠江守

〔義堯〕  
佐竹右京大夫

〔長因〕  
丹羽左京大夫

〔信順〕  
南部遠江守

〔忠義〕  
酒井若狭守

〔忠礼〕  
大久保加賀守

有馬大膳亮

〔直巳〕  
松平佐渡守

〔承昭〕  
津輕越中守

〔長守〕  
小笠原左衛門佐

〔助美〕  
本多豊後守

〔忠紀〕  
本多能登守

〔友詳〕  
遠山美濃守

〔正綱〕  
堀田摂津守

〔信成〕  
織田筑前守

〔光貞〕  
分部若狭守

〔信学〕  
織田兵部少輔

松平兵部少輔

森伊豆守(俊滋)

仙石讚岐守(久利)

内藤勝之丞(政敏)

加納遠江守(久慈)

米倉下野守(昌言)

加藤大藏少輔

一柳兵部少輔(頼超)

立花出雲守(種恭)

井上伊予守(正兼)

○交代寄合ノ内ニモ同シク達セラレタルハ左ノ如シ、

本堂内膳(親久)

松平兵部

平野内蔵介(長登)

最上采女介(義進)

以上三十一藩四家、各速ニ退京スヘシトノ達文ナリ(マ)達  
略、依テ一七日許リニテ帰路ニ就キタルモアリ、上

杉・佐竹・丹羽ノ三藩ハ二三日ニシテ発途セリト云フ、

○此際 国父公ハ遽ニ御退京、尋テ同廿一日ハ越前公

帰国、(長州侯カ)長州候モ出途、御暇ノ各藩モ逐日発程シ、洛中

騒々タル事言詞ニ尽シ得サルノ形況ナリ、從テ巷説

紛々、内外ノ大乱目下ニ生シタルカ如ク、京伏坂ノ間

ハ頗ル鼎沸セリ、

310 ○三月十七日、左ノ(二十一 侯カ)二十一候参内、

天拜ヲ被允、而シテ攘夷ノ成功ヲ遂クヘキ懇

勅ヲ下サレタリ、

尾張大納言殿

一橋中納言殿

松平春嶽

松平肥後守(蜂須賀茂徳)

松平相模守(池田慶徳)

松平淡路守(蜂須賀茂徳)

松平美濃守(黒田長連)

伊達遠江守

上杉弾正大弼

松平容堂

松平三河守(慶倫)

松平阿波守(蜂須賀齊衡)

細川越中守(韶邦)

松平出羽守(定安)

松平長門守

佐竹右京太夫

松平安芸守(淺野長訓)

中川修理太夫(久昭)

毛利右京亮(左京亮カ、元周)

池田信濃守(章政)

松平主殿頭(忠愛)

311 ○二条城ニ於テ閣老水野和泉守殿御渡、

攘夷之

詔御奉戴ニ付、早々拒絶之応接ニ及ヒ、外夷承服不致節

者、速ニ打払候様被 仰出候間、一同厚相心得、御

国辱不相成様可被抽忠勤候、

右之通、万石以上以下之面々ハ可被相達候事、

三月十八日

312 ○將軍家帰東ノ願停止、御達書左ノ如シ、

312の1

英夷渡来ニ付関東之事情切迫ニテ、防禦之為メ大樹帰府之儀尤ノ訳柄ニ候得共、京都近海之守衛策略自ラ指揮可有之、攘夷決議之折柄、君臣一和二無之候テハ不相叶ノ処、大樹関東へ帰府、東西抑隔候テハ君臣ノ際情意不相通、自然間隔ノ姿ニ相成リ、天下ノ形勢不可救ノ場ニ可立至候、当節大樹帰府ニ就テハ於

叡慮不安候間、滞在守衛ノ計略厚ク有之、奉安

宸襟候様 思召候、英夷応接之儀者浪花港へ相廻シ、拒

絶ノ談判可有之候、若兵端ヲ開候節者大樹自ラ出張、

万事指揮有之候者、

皇国ノ真氣挽回ノ機会可有之 思召候、関東防禦ノ儀ハ

可然人体相撰被申付候様 御沙汰候事、

三月十七日

前書之趣、大樹家御受仕候節ハ攘夷御首途直ニ八幡へ〔ニテ脱カ〕

行幸、於神前節刀賜候 思召ニ候、

右御沙汰書、於小御所関白殿ヨリ一橋中納言殿へ御渡

ニナリタリ 行幸又ハ節刀ヲ賜フノ 叡慮、因、  
テ起ル処ハ前ニ記シタルカ如シ、

〔本文書は「名越時敏史料一」三九二頁「一英夷渡来ニ付」と同文なり〕

313 ○大樹帰府之事、段々以

勅諭被 召止候事、先日 御沙汰被為 在候通、將軍職万事是迄之通御委任ニ候、就テハ諸大名以下守衛ノ指揮於被致ハ 御安心之事々ニ寄り候者、 御親征モ被為 遊度程之 思召候事、

三月十七日

〔本文書は「名越時敏史料一」三九七頁「大樹帰府之事」と同文なり〕

甚ヒ哉、当時

朝議ノ変シ易キ、幕令ノ動クニ速ナル、 將軍家入京前

ノ

朝議ハ、滞京十日間、東下ノ途廿日トシ、帰府当日ヨリ

十日ヲ置テ四十日ヲ過サス鎖攘ノ実行アルヘシト令セ

ラレシニ、幕府是ヲ循奉シ、而シテ入京ノ後滞京延日

懇願セラレシカトモ、

朝廷ハ容易ニ之ヲ允サレサルニ依リ、重テ尾張大納言殿  
ヨリ献言セラレ、漸ニシテ二十日間ノ滞京ヲ允サレタ  
リ、而シテ

朝議一変シ、將軍ハ滞京セラレ、一橋殿・水戸殿東下、

鎖攘ノ評判施行スヘキヲ命セラレタリ、此令ノ下ル前  
頃幕議モ又変換シテ、東婦ノ懇願頻リナリト雖モ敢テ  
允サレス、其允サレサル所以ハ、八幡ヘ

行幸、社頭ニ於テ節刀授与ノ議起リシニ依テナリ、其  
議ノ起ルヤ、専ラ長藩及ヒ浮浪輩ノ発論ニシテ、所謂  
三条・姉小路其他十余卿・国事掛ノ人々閔白殿ヲ責論  
シ、遂ニ

叡慮ヲ動シ奉リタル者ナリ、僅々數日ノ間ニ如此変換セ  
リ、幕府ニ於テ鎖攘ハ元來好マサル処ナリト雖モ、一  
時ノ權謀詐術ヲ以テ循奉シ、遷延遅々シテ施ス処アラ  
ンノ密議ナリシニ、黠藩暴徒ハ是ヲ推知シ、期限ヲ切  
迫スルニ至レリ、茲ヲ以テ 朝幕俱ニ命令屢變更スル  
所以ニシテ、

朝幕ノ間倍々猜疑ヲ醸シ、阻隔ノ情一層セリ、此ノ如キ  
ノ情実ニ迫リタルノミナラス、朝令暮換ノ甚シキヲ聞

ク者笑嘆、倍々命令輕キニ陥リタリ、

314

〔頭注〕永平九ハ前年冬明石ノ沖ニ沈没セリ  
○三月廿日、国父公ハ兵庫港ヨリ汽船永平九ニ搭セラ  
レ、同 日日州細島港ニ着セラレ御揚陸、同所御一

泊、同 日佐土原御着、領主島津淡路守寛殿モ在邑

御上洛ノ際、伊予海ニ於テ 奉迎、御接待ノ式最ト鄭重ナリ、  
御行逢、其後在邑ナリ、

然シテ御嫡又之進殿忠元服御加冠ヲ願ハレ、其為メ一

日御滞留アラセラレ、同 日高岡御一泊、同 日

去川洪水ニテ御滞在、四月 日去川御一泊、同 日都

城御着、同 日同所御滞在、同九日福山御一泊、同十

日重富御一泊、同十一日御着城アラセラレタリ、

○太守公ハ国分迄御奉迎、島津備後殿・島津久書殿ニ

モ同所ヘ奉迎セラレタリ、

○佐土原侯ハ代々元服加冠ノ式 太守公ヘ願ハル、家

例ナリ、多クハ江戸邸ニ於テ執行セラレタリ、然ルニ

今回ハ父子共ニ在邑、殊ニ 国父公御通過ナルカ故懇

願セラレ、其為一日御滞留、御加冠ノ式執行シ遣ハサ

レタリ、

315 ○

水戸中納言殿

大樹滯京之儀御受被成候ニ付テハ、為関東守衛下向被仰付候間早々出府、防禦筋之手当相心得、自然英夷開兵端候節者、尽力決戦有之候様 御沙汰候事、

三月二十一日

316 ○三月十九日伝奏衆ヨリ水戸殿へ御達書、

今十九日、俄ニ大樹公参内被仰出候処、於二条八掃府御暇之心得ニテ御受被仰上候処、中々左様之思召ニ無之、何分此節之儀故、押テ再三御願ニ候得共無御許容、御用相済迄是非在京可有之 御沙汰ニテ、今日ハ表向小御所ニ於テ 御対面ハ無之、内々於御三之間御対面、 御直ニ段々ト 上諭被為 在、別紙之通被仰出趣、即座ニ御受書被為 在候事、  
右、為心得相達候事、

三月十九日

317 ○攘夷布告ニ付、三月廿四日ヲ以テ長崎奉行大久保豊後（思想）守ヨリ英国人へ、彼我国旗ノ照会書写、為心得九州沿

海各藩へ示達セリ、照会書左ノ如シ、

317の1

此度貴国軍艦神奈河港へ渡来、不容易事件（生麦事件）申立候ニ付、其談判不整候間、若シ戦争ニ相成候者、右戦争中於当地双方ノ使者往来之旗印兼テ打合置不申候テハ、臆忽ノ振舞有之候モ難計候ニ付、従此方ハ日ノ丸国旗并ニ白旗相用ヒ候筈ニ有之候間、其段被相心得、軍艦船将ニモ通達有之度候、就テハ貴国使者印旗兼テ被申越候様致度存候、此段申達候、謹言、

文久三年亥三月二十四日

大久保豊後守 花押

「シヨユスモリソン」

足下

〔本文書は「名越時敏史料」三八二頁「此度貴国軍艦神奈川湊江渡来」と同文なり〕

鎖港ノ談判開カレタルニ依リ、開戦ノ準備ニ彼我国旗ヲ以テ来往ノ照会ヲナセシモノナリ、外国交際開ケタル日尚ホ浅ク、我レニ於テハ未タ国旗ノ布告モナカリ

シ故、今回初テ照会セラレタルモノナリ、又長崎在留  
外国人開戦ノ上、立退場等照会書左ノ如シ、

英国ト戦争相成候節ハ、其許立退方之儀被申出趣ニ付、  
勘弁致候得共、何分警固ノ見据無之、然ル上ハ商人一  
同一ト先退崎被致候様頼入度候、乍去在留之決心ニ候  
者、素ヨリ警固ノ手当届兼候得共、稲佐辺寺院ナリト  
モ一纏ニ居留被致度、支配向等付置候様可取計候、尚  
深ク勘弁及御相談候、謹言、  
(有之度脱カ)

文久三年亥三月二十四日

大久保豊後守 花押

「シヨユスモリソン」

足下

〔本文書は「名越時敏史料」三八一頁「英国ト戦争相成  
候節」と同文なり〕

右之趣在留外国人へ照会セラレシ故、上海辺へ立退ク  
モアリ、或碇泊ノ自国軍艦へ曳キ取リタルモアリ、其  
中ニ魯国ハ泰然動揺セス、稲佐ノ方ニ立退キタリ、其

人員僅二十余名ナリシトソ、○又英国ヲ除クノ外、米  
仏其他ノ夷人へ照会左ノ如シ、

此度神奈河港へ英国軍艦渡来、不容易事件<sup>生麦事件</sup>申立之  
趣ニ付、若シ談判不整候テ戦争ニ及儀到来之上者、於  
当地モ英国ト戦争相成候儀ニモ可有之哉、仍テ貴国商  
人共戦争中在留候テハ、如何様ノ儀相生シ可申モ難計、  
左リ迎別段警固ノ者付置キ候手当行キ届不申候ニ付、  
一ト先ツ当地為曳払候様取計有之度、此段頼入候、謹  
言、

文久三年亥三月廿四日

大久保豊後守 花押

各国「コンシユル」

亜米利翰 仏郎西 和蘭 李 葡

足下

〔本文書は「名越時敏史料」三八一頁「此度神奈川港へ  
英国軍艦渡来」と同文なり〕

各国各通ヲ以達セラレシ故、支那各港ニ曳取リシモア

318の2

大樹婦府ノ儀再度被相願候得共、婦府有之候テハ如何ノ〔様脱カ〕

三月十九日

神州之不損国体様ニト之  
叡慮被為在候事、

宸襟、下救万民令黠虜、永絶覬覦之念、不朽  
叡思奉之、固有之忠勇奮起速建掃除之功、被安

宸衷候ニ付、蛮夷拒絶之  
列祖之神靈不相濟、是全当今寡德之故ト深被痛

被為対

皇国、実不容易形勢ニ付、万一於有殞国体穢神器事者、

318の1

近来醜夷逞猖獗、数覬覦

318

○三月十九日ヲ以テ在京各藩江攘夷ノ

勅命左ノ如シ、

リ、或ハ軍艦ヘ引取り形勢ヲ窺フモノアリ、商法ハ全  
ク停止シ寂寞タリトソ、而シテ心得ノ為メ沿海各藩ヘ  
モ布告セラレタリ、

318の3

變事到来モ難計、左候者実以テ一大事ノ儀ニ付、深被  
惱

宸襟候間、天下ノ為メ且ハ徳川之為ヲモ深被

思召候儀故、今暫時滞在有之、攘夷之基本相立、

叡旨貫徹、人心安堵ノ場合ニ至リ候テ、被奉安

宸襟候様周旋可有之旨 御沙汰候事、

三月二十四日

〔本文書は「名越時敏史料」三九一頁「一大樹婦府之儀、  
」と同文なり〕

○將軍家婦府ノ願ヒアリシカトモ

勅許ナク、故ニ横浜鎖港談判ノ為メ、一橋殿婦府奉命セ

ラレシニ依リ、水戸殿ヘハ左ノ如ク達セラレタリ、

水戸中納言

為関東守衛下向被 仰付候ニ付、防禦筋之儀大樹目代

之心得ヲ以テ指揮可有之候、祖先爾来格別勤

王之家柄、先代之遺志致継述、藩中一致尽力防禦、可奏

夷狄掃攘之功候様 御沙汰候事、

三月廿四日

〔本文書は「名越時敏史料一」三九二頁「水戸中納言」と同文なり〕

○前書ノ如ク、水戸中納言殿婦命セラレタルニ付、家老大場へ左ノ如ク達セラレタリ、

水戸家老

大場一真〔一真齋九景漱〕

精忠節義之志厚有之段、兼テ達 御聴一段之事ニ候、今度御所ヨリ被仰出趣モ有之、江戸為守衛水戸殿婦府被致候二付テハ陪從罷歸リ、御警衛向其外万端厚相心得、国家之御為メ弥精忠尽力可致旨被 仰出候、右之通御申付可被成候事、

三月廿四日

〔本文書は「名越時敏史料一」三九二頁「水戸家老」と同文なり〕

319 ○三月廿六日、国老島津登久包江戸ヨリ帰着、即日辞職ノ

書ヲ呈ス、同二十七日依頼免セラレ、一世養禄百石ヲ

賜フ、○即日辞表ヲ呈シタルノ事情ハ、去ル壬戌ノ春ヨリ江戸邸ニ在勤シ、生麦事件等ノ処分ニ就テ不体裁ノ措置アリシ故ナリト云フ、

320 ○三月廿八日、所司代ヨリ各藩留守居呼出達、

松平越中守〔定敬〕

松平越前守〔茂昭〕

松平讃岐守〔頼聰〕

松平出羽守

榊原式部大輔〔政敬〕

溝口主膳正〔直博〕

松平淡路守

青山下野守〔忠敏〕

此度横浜表江英吉利軍艦渡来、三ヶ条生麦事件之儀申立、何レモ難聞屈筋ニ付、其趣ヲ以テ可及応接候、依テ速ニ兵端相開事候ニ付、御暇被仰付候間早々出府、藩屏之任不失様可尽粉骨候、

三月二十八日

右、福井藩留守居ニハ別府武三郎出頭候処、公用人能勢喜内ヨリ相渡、至急出足東下、江戸警衛アルヘキ旨達セラレタリ、斯ノ如ク各藩至急東下ヲ命セラレタル

ハ、生麦事件或ハ鎖港布告ニ依リ各国軍艦逐日来港、其形勢穩ナラス、幕府ハ不日談判ヲ開カンノ予定ナルカ故、開談セハ直チニ兵端ヲ開クヤ必セリ、故ニ江戸近海ノ守備ニ他事ナク、逐次準備ヲ令セラレタリ、

旧邦秘録卷之四  
○  
文久三年癸亥

321 ○米価格外高料ニ而諸人難涉致候ニ付、厚以思召米穀諸色下料之儀共追々被 仰出、米会所迄モ被召建、下料申受米被成下候処、軽キ者共弁へ薄ク、不容易 御仁慈モ不奉汲受、下料申受被成下候ヲ幸ニ存、猥ニ致飢食候哉ニ相聞得、夏分ニモ相成候者、弥増不通融成立、可及難涉者案中之事候ニ付、市中一同其心得致シ、厚キ 御趣意奉汲受、何篇省略ヲ加へ、成丈ケ粥・雜穀類之麤食ヲ以取続キ、其職分相励候様、支配頭等ヨリ堅ク可申付候、右ニ付而者見聞ヲモ掛置候条、不守之者屹度可及沙汰候、此旨町奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

三月廿五日 但馬川上  
久（久運カ）

322の1  
322 ○四月朔日布達、昨廿九日京師飛報到来、 国父公不日御下国アラセラルヘキ旨告ケ来レリ、布達左ノ如シ、  
三郎様御儀、此節 御上京、即日近衛様へ御参殿、公武御重職之御方々様へ御逢御用談被為在、中三日御滞在ニテ被遊 御下向候、勿論被遊 御建白候 御趣意モ被為在候得共、既ニ攘夷 御決定、猶英夷三ヶ条申立之趣、専ラ御国へ相拘り候儀ニテ、再三 御召留之御内命被遊 御承知候得共、右様 〔名越時敏史料より補〕切迫之形勢故△無御抛筋被 仰立、不被為得止早々被遊 御下向候段申来候条、此旨早々向々へ可申渡候、

四月朔日 式部川上  
久美

旧邦秘録五編癸亥之三

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二六二号・「名越時敏史料」三七六頁「三郎様御儀」と同文なり〕

○同日達、

三郎様御事、近々御下国可被遊段者別段申渡候通候条、御手当向相掛候儀、万端無手拔様早々取調可申出候、御道中筋之儀者追而可相達候、此旨向々へ可申渡候、

四月朔日 式部川上久美

斯ノ如ク布達セラレ、或ハ在京ノ人々私書等ニ依テ聞知シ、鎖攘ノ大挙御下着ノ上、直チニ御着手アルヘシ、或ハ京師ノ形勢危急ニ迫リ、到底救フヘカラサルノ勢ナリト種々様々ノ説ヲ唱ヘタリ、因テ壮年ノ輩ハ握腕シ、攘夷ヲ喜フモアリ、或ハ上京シテ竭ス処アラントスルモアリ、交々一ナラス、実ニ熾ナル事譬フルニ物ナシ、○生麦事件英夷申立三ヶ条トハ、斬殺シタル者ヲ刑セヨ、償金六十萬元〔貼紙〕幕府ニ要求スル処ノ償金五十萬元、或ハ六十萬元ト記ス、諸書異同アリ、何レカ是ナリヤ 我金貨凡三十、尚ホ糺スヘシ」万兩ニ当ル、斬殺セラレタル家族養育金十二萬元我金ニ算シテ凡六万兩ヲ求ルノ三ヶ条ナリト云フ、

323 ○四月二日、遽ニ五ヶ所砲台又ハ汽船ヨリ海陸攻守ノ操練ヲ催サレ、太守公ニハ申刻頃ヨリ御出馬、親シク

指揮セラレ、海陸一同大小ノ砲声、百雷ノ轟クモ斯ク

コソト思ハレタリ、畢テ水軍兵ノ操練御覽アリテ、日没ノ頃御帰城アラセラレタリ、○本日ノ操練ハ卒然ノ催ニテ、兵士出頭ニ先シ御出馬アラセラレ、兵士ハ伍什ノ列ヲ立テ拜謁ノ式アリ、畢テ国老川上式部ヲ以テ本日遽ニ催サレシニ、各速ニ出頭、御満足ナリ、然リト雖モ砲発ノ式未タ不練ノ者モアリ、尚研究スヘシトノ趣達セラレタリ、不練トハ冲中ノ標的ニ向テ破裂彈等着発ノ度、適否アルヲ不練ト達セラレタル者ナリ、是ヨリシテ兵士等一層奮発、彈着ノ適度ヲ精究セリ、〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二六五号と同文なり〕

324 ○四月二日長崎報知着覽、曰、攘夷鎖港決定セラレ、不日発布アルヘシトノ趣、外国人共ニモ洩レ聞キ、或ハ幕府ヨリ内達ノ旨アリシ由ニテ、神奈河・長崎イツレモ商法ヲ停メ、随テ内外人共ニ恟々トシテ、戦争近キニアリト資財ヲ片付、避逃ノ準備ヲナシ、布令ヲ待ツノ形況ナリ、斯クノ如クナルニ依リ、幕府ヨリ和蘭人へ汽船購求代弁償ノ為メ、銅五十余万斤長崎会所ニ貯

へ在リシヲ、本藩琉球通宝鑄造用ニ悉皆買取ラレ、不日廻漕ノ旨告ケ来レリ、斯ノ如ク切迫ノ形況ナルカ故、必ス開戦ノ時機ナラント云フ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二六四号と同文なり〕

325  
○四月三日、梵鐘大小二百八十七口、琉球通宝鑄造資料ニ充ラル旨達セラレ、本日ヨリ毀滅ニ着手セリ、其他銅製仏具ノ類数万ノ斤数ニ及ヒ、許多ノ通貨ヲ製造シタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二六六号と同文なり〕

326  
○四月三日達、齊彬公御贈官、照国大明神ノ社号ヲモ下サレタルカ故、社殿御造営不日御着手ニ付、本日御造営掛員命セラレ、其人々ニハ国老川上式部、御勝手方御用人中村新助・同席伊地知宗之丞〔貞繁〕、御作事奉行帖佐伊右衛門・森川孫太夫、其他御細工奉行・郡奉行等数名ヲシテ、来ル十五日手斧初メヲ予定セラレタリ、

前文略ス、当港在留ノ外国人攘掃拒絶ノ

勅諭幕府奉命各藩へ令シ、手当頼ナル旨夷人共伝承致シ、残ラス支那地マテ曳取リノ心得ニテ、追々船都合ヲ以テ商品又ハ荷物ヲ積送リ、或ハ商法取引ノ混雜一方ナラス、稲佐製鉄所雇人ノ夷人ハ幕府ヨリ内達、帰国致シ候者モ有之、残り居候者ハ荷物取片付船ニ積込、夜分ニハ自国軍艦へ致宿泊候、軍艦ハ各国共昼夜蒸鐘ニ火ヲ入レ、大砲ニハ装薬致シ、直ニ放発ノ手順モ致居候位ノ物騒ニ成立申候、殊ニ近頃浪人体ノ者多数入り来リ、或ハ長土人モ其中ニ交リ居、攘夷ノ手初ヲナサント唱居候モ有之、夫故奉行ニハ甚痛心致サレ候得共手ニ及ヒ兼、却テ暴徒ノ勢強ク、実ニ幕威ノ衰タルコト意外ニ御座候、外国人モ其趣承知シ、兩三日此方日々各国ノ軍艦入港、只今碇泊ハ英ノ軍艦二艘、仏国二艘、和蘭一艘、米国二艘、皆大「プレカット」ニテ日々操練忘ナク、今朝ハ魯国大軍艦二艘入津、各国軍艦ヨリ祝砲十二発ツ、一時ハ山嶽モ崩ル、カ如ク、当港中暫時煙霧ニテ御座候、夫ヨリ魯艦ハ放発操練ヲナシ、一人モ上陸ハ不致、何カ疑ヲ懷キタル様子ニ見

327  
○長崎在勤中原猶介〔尚勇〕、四月三日ヲ以テ政庁へ報告ニ日ク、

受ラレ申候、將又先日ヨリ市中ハ皆明キ家同前ニテ、  
商法モ一切止メ、老幼婦女ハ近村へ避ケ去リ、男子ノ  
ミ家ニアリテ、スワト云バ直ニ立チ退キノ手当致居候、  
其上米穀払底、上下大ニ困窮罷在、売米ハ一切無之、  
夫故土人ハ島原又ハ諫早・佐賀等へ立去リ、誠ニ淋シ  
キ事ニ御座候、浪人体ノ輩ハ人家ニ押入り、盜ミ或ハ  
婦女ヲ劫シ候等ノ次第モ有之由、天草辺ノ無頼人共モ  
加居候由、何分長土人ノ暴悪ハ言語ニ述へ尽サレ申サ  
ス、又攘夷モ弥近日御下知ニナルトノ事ニテ、外国人  
共ニハアザ笑ヒ居候、知人ノ夷人申ニハ、長崎ヤ下ノ  
関位ノ大砲ハ少シモ恐ル、ニ足ラス、戦争ヲ開キタル  
上ハ立派ニ分捕シテ見スヘシナト申シ居候、又軍艦ノ  
大砲ハ近代發明ノ長彈ノミニテ、是迄ノ円彈ハ一ツモ  
無之候、小銃モ同様ニテ遠町ニ達シ、先年来ノ仕掛ト  
ハ大ニ相違ニ御座候、生麦事件ハ御模様如何ノ向キニ  
相成候哉、当地ノ形勢ニテハ容易ナラサル勢ニ御座候、  
又京都ノ御模様ハ彼我ノ弁識ニ疎キ様ニ存候、兎角一  
変事有之候上ナラデハ、御目ハ覚メ不申カト奉存候、  
尚追々探偵ノ事実可申上候云云、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二六八号と同文なり〕

328 ○又同時、友人某へ報信左ノ如シ、

328の1 前文略ス、今般鎖港攘夷ノ

勅諭幕府ニ於テ御受ト相成リタル由ニテ、横浜ニ於テ談  
判中ニテ、当地在留ノ夷人共へハ奉行ヨリ、不日ニ残  
ラス引払ノ心得ニテ罷在候様達モ有之、大浦・出島・  
稲佐ノ製鉄所等ニ在ル夷人、多クハ帰国致シ、残り居  
候者モ皆荷物ヲ片付ケ、夜分ハ軍艦へ致寢泊候程ノ形  
勢ニ成リ立チ、今ニモ砲声ヲ聞クノ場合ニテ、商売ハ  
勿論、質問事モ相調不申、以来ハ夷人引合之儀者何事  
モ出来不申候、右通ノ次第ニテ表情探索十分調兼、残  
念之時宜ニ御座候、土人モ今ヤ事ノ起ルナラント近村  
山手ニ通レ行キ、空家勝ニテ淋然タルコトニ候、当今  
在港英ノ軍艦二艘、仏ノ同二艘、和蘭一艘、米国二艘、  
魯国二艘、中ニモ仏蘭魯ハ蒸氣「ブレカット」ノ大軍  
艦ニテ、昼夜警備嚴ニシテ彈藥ヲ込ルノミノ手当ニテ、  
平生ノ如クニ見物モ許シ不申、現今ノ砲台ニテハ迎モ

329

対応ハ難致、一艘ヨリ二三発シテ長崎中ハ焼土ト相成ルハ必定ニテ、実ニ盲目蛇ヲ恐レストハ此事ナラン、又各藩ノ処ハ、九州ニテモ佐賀ノ外其他ノ大小藩一トシテ警備ノ実アルハ無之、中国ハ長州ニ少シク備アリ、其外ハ笑フヘキ次第、関東ハ幕府ニ少々備アリト雖モ、之レハ烏合ノ人ノミ、器械アリテモ用ニ立チ申スマシク、且又堂上方ニハ表情ニ疎ク、浪人や各藩人ノ勢アルモノ、口ニ左ニ右ニ従フ位、婦女ニモ戻レル人々ナレハ、弓・槍・長刀デ攘夷カ出来ルト思ハレシ様ニテ、沙汰ノ限リトモ申スヘシ云云、

四月三日

右、中原カ政庁へ報信又ハ友人へ通報、大同小異ナリト雖モ、当時ノ形況ヲ弁スルノ一端ナルカ故、重複ニ等シト雖モ記シテ以考案ニ供ス、

○四月四日達、花倉御茶屋ノ内ニ丸御引直シノ外、家々国分御飯屋地へ此涯御引直相成候ニ付、取調申出候様御作事奉行へ達セラレタリ、又攘夷御決定、不日

331

○四月八日、国父公御下国御迎ノ為メ、太守公汽船ニ召サレ、国分郷マテ御奉迎アラセラレタリ、○国父公ハ去三日兵庫ヨリ汽船ニ召レ、日州細島へ御直航、同所ヨリ御上陸、高岡筋御通行、来ル九日御着城ノ予定ナルカ故、本日ヨリ御奉迎ノ為メ御出向アラセラレ

330

発布ノ内達アリ、本藩ハ目前生麦事件ニ就テ侵入スルハ必定ナルカ故、藩力ヲ尽シ争戦ノ御決定ナリ、依テ姫君方御避乱ノ予備トシテ、華倉御茶屋内ノ家屋ヲ国分郷御飯屋内へ移転ニ着手セラル、旨、上文ノ如ク其筋へ達セラレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二七五号と同文なり〕

○四月四日、五ヶ所砲台演習ヲ催サレ、巳刻過ル頃御出城、下町弁天波戸砲台ニ入ラセラレ、各砲台及ヒ水軍演習御覧、畢テ御親ラモ三十六斤・八十斤砲各四発、信管等一切御調製試験セラレ、未ノ下刻頃御帰城アリタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二七六号と同文なり〕

〔太守様脱カ〕

タルモノナリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二七九号と同文なり〕

332 ○四月 日「日札スヘシ」、〔貼紙〕 国父公ハ佐土原ヘ一日御滞

留、嫡子又之進忠亮殿元服加冠ノ式願ハレシトソ、○同

家ハ代々元服加冠ノ式ハ御家ニ就テ執行セラレタルニ

依リ、今回ハ幸ニ同地御通行故、先規ノ如ク願ハレタ

リトソ、○佐土原城下倉岡辺ニハアラスマヤ寺〔貼紙〕寺名札スヘシ」ニ在リ

シ伊東修理大夫義祐寄付ノ銘文アル大梵鐘一個、琉球

通宝鑄造資料ノ為メ廻送ノ旨達セラレタリ這ノ梵鐘ハ日

修理大夫藤原朝臣義祐寄隅薩三州太守進云云ノ銘文ヲ記セリ、○同時ニ穆佐郷悟性寺ニ在ル大

梵鐘一口、是モ同シク鑄銭資料ノ為メ廻漕セリ、其量

目六百四十二斤、這ノ梵鐘ハ今回鑄銭資料ニ破壊セシ

数百個ノ中尤モ古製ニシテ、形状モ尋常ノ梵鐘ニ異リ

タリ、依テ銘文ヲ記シテ参考ニ供ス開鐘声煩惱怪 智慧長

願成仏度衆生 伏願仏日重興、国家安寧、兵革頓息、万民康泰、

專祈大檀那福寿増長、宗門繁荣、伏冀当时食法兩輪共転、真俗〔譯カ〕二諦

同唱、時永徳元年辛酉黄鐘二十日、開基大檀那伊東藤原氏臣駿河祐

満、日本国日向穆佐院洗心山悟性禪寺、開山住持沙門長徳置之〔譯カ〕ト記セ

リ、永徳元年辛酉ヨリ文久三年癸亥ニ至テ、凡ソ四百八十三年ニ

充ツ、今回鑄減シタル大小数百口ノ中ニ古製ノ第一トス、其他ハ寛

永以降ノ製ニ罹、

レル者ナリキ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二八〇号と同文なり〕

333 ○四月十一日未ノ下刻頃、 国父公御着城アラセラレタ

リ、昨十日重富御泊、白金坂、吉野筋御通行ナリ、從

駕国老小松帶刀、御側役島津主殿・中山中左衛門等ナ

リ、○御着城ニ付、先規ノ如ク御一門家其他大身分諸

士登城、太守公 国父公ヘ恭賀ノ式執行セラレタリ、

○今回ノ御上洛ハ天下治乱ノ分ル処、国威ノ揚墜二関

シ国是決定ノ時ナルカ故、国父公ハ御定論ノ如ク無謀

ノ攘夷ハ不可トセラレ、昨年来

朝幕ノ間ニ屢々御献言ノ旨ヲ、今ニ至テ毫モ異動セラレ

ス、内政ヲ整治シ出テ制スルノ国力ヲ保テ、而シテ後

攘否如何シノ議ニ及ヒ、何ソ後レタリトセンノ御立論

ナリシト雖モ、時勢如何セン、黠藩暴徒ノ煽動ニ依リ

遂ニ鎖攘ノ大令ヲ布レ、幕府循奉セラレシカ故、御献

論水泡ニ帰シタリ、然リト雖モ、事茲ニ至リテハ前論

ニ拘泥セラレ、違否セラルヘキニ非ス、普天ノ下王土

ニ非ラサルナク、殊更尊

王ノ大義少シモ誤リ玉ハサルハ無論、加之生麦事件ニ付

テ、英夷ハ幕府ニ就テ猖獗責論ノ際ニ方リテ、攘夷否

避ノ名ヲ取ルハ国名ヲ穢スニ立到ルカ故、断然攘斥ニ

決セラレタル者ナリ、茲ヲ以テ国中一般大ニ振興シタ

リ、実ニ盛ナリト謂フヘシ、中ニモ元来鎖攘主張ノ士

寡カラサルカ故、其曹ハ踊躍シ、来寇セハ撃碎セント

競ヒタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二八二号と同文なり〕

334 ○四月十二日布達、御三役以下被定置候御役々、七ツ時

御暇被仰付置候得共、此節時刻被召替候ニ付、明日ヨ

リ以前之通、四時出勤八時御暇ニ被 仰付候、当分時

刻之儀、一日七時割ヲ以テ、於鐘楼撞来候得共、明日

ヨリ日一杯六時割ニ被召替候、

右之通被仰付候条、可承向々へ可申渡候、

四月十二日 帶刀小松 清廉

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二八三号と同文なり〕

335 ○四月十三日、 国父公福昌寺・恵灯院・浄光明寺御廟

參アラセラレタリ、御下国初テノ御參詣ナルカ故、本

御行列ナリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二八四号と同文なり〕

336 ○四月中旬大坂物価報左ノ如シ、

肥後米一石 百六十二匁

薩摩米一石 百五十四匁

大豆 一石 百三十五匁

麦安 一石 八十五匁

小豆 一石 百三十五匁

小麦 一石 百十匁

黒砂糖琉球上一斤 一匁五分五厘

生蠟 一斤 三匁八分

菜種 一石 百五十匁ヨリ百四十五匁迄

煙草 枯葉一匁三四分ヨリ二匁四五分迄  
本葉一匁四五分ヨリ四匁五六分迄

鱈節 大 三百五十匁 中 二百八十匁  
小 二百六十匁

椎茸 上 五百五十匁 中 五百匁  
下 四百五十匁

綿 二百八十八匁

水油 六百八十匁

京坂ノ時価此ノ如ク、鹿兒島ハ玄米一石価百三十五匁

〔貼紙〕「正二位公御筆なり」〔御書写中二入〕

ニ内外シ、加之匱乏一般困頓、金錢アリテモ買求シ得サルカ故、肥筑ノ間ヨリ数千石ヲ買入ラレ、市街ノ価ヨリ一升代三十二文下直ニ払下ラレ、上下共ニ仁恵ヲ感戴セリ、○如此米穀匱乏ナルハ、昨秋八月大風ノ損害ヲ受タルニ依レリ、他藩ニ於テモ同時ノ風災ニ罹リ、全国一般ノ困頓ナリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二巻」三〇一号と同文なり〕

337 ○国父公御退京ノ後ハ、

朝暮ノ御間倍々阻隔ノ情甚シク、所謂十三卿ノ暴論家ハ倨傲暴漫ニ募リ、從テ二三ノ暴藩士或ハ浮浪ノ曹跋扈シ、謂フヘカラサル形勢ニ立到リ、到底乱兆目下ニ逼マレルカ故、心アル者ハ退テ野ニ隠ル、ニ至レリ、近衛前関白忠熙公モ内覽職辞表ヲ捧ケ玉ヒシニ、三月廿六日ヲ以テ允サレ、閑散ノ御身ニテ、風花雪月ニ消光ノ御言ナリト雖モ、密カニ時勢ノ危殆、  
皇基ノ興廢ニ関スルカ故、御憂患一方ナラス、因テ 国父公へ左ノ御内書ヲ贈ラレタリ、

春暖之節、弥御勇猛珍重候、抑去ル十四日ニハ御上京ニ而、久々面謁申入、喜悦之至ニ候、併誠ニ急速御出足、何共〳〵申条無之痛心候、前夜ニ初テ御出足之趣承知致、誠ニ驚人、何モ不取敢中川宮へ談合、中川

宮・忠熙等ヨリ関白江申入、段々苦心之仕合、何分何事慕取兼、其夜モ天明ニ及、実以苦心難堪、忠熙家来ヲ智恩院迄差向、段々申入度儀モ在之候処、最早御出立後ニ相成、甚不都合〳〵、何共〳〵苦慮無限候、夫ヨリ段々中川宮共々ニ談合、関白江申入、更ニ早々御上京之様 御沙汰ニ相成候得共、最早御出帆後之趣、本多・高崎兩人下坂仕候得共、右故空敷立戻リ、甚心痛無限候、度々以

勅書段々

叡慮之程伺候へハ実以何共恐入候事ニ而、何レ其許今度御上京ニ相成候ハ、昨年

叡決之通、守護職辺被 仰出候 思召之趣、然ル処当節邪魔已入込、甚御痛心之趣、委細ニ御沙汰共被為在候御事ニ而、深々恐入候事ニ候、先々此比ニ至リ、暴激之堂モ大ニ和キ、至当之論モ相發シ、少々ハ宜模様ニ

〔上脱カ〕

候、尤、就中暴激之人体ハ、

朝廷ヲ退キ、其後行方知レ兼候事ニ候、併却テ穩ニ趣候

哉ト聊安心之事ニ候、何分方今忠熙ニハ人望ヲ失ヒ、

何事ヲ申出シ候共更ニ人ニ不応、唯致方無之候、内覽

之蒙 仰居候得共、誠ニ有名無実、何事モ被 仰出後

他ヨリ承知仕、是ハ甚不相濟御事ト存候儀毎度之事ニ

而、実ニ名有テ実無キ役人トハ忠熙之事ニ而、迎モ動

仕之詮無之、其上持病モ時々相発、苦心不一方仕合、

内覽辞表差出、段々願立候処、一昨夜願之通被 聞召、

深く畏々安堵之事ニ候、最早是ヨリハ天下之形勢如何

相行候事哉ト御案事申上、拜見仕候〔已外カ〕已ノ外無之ト決心

之事ニ候、其許昨年格別之御忠節ヲ被立候故、屹ト御

賞モ可有之ト被存候、右辺モ如何ニ相成候事哉、何分

最早役人ニ無之、只々形勢已拜見ト決心之事ニ候、何

分実々

朝廷之処暴ハ少シ退キ候事故、何卒此上之処、

朝憲相立候様御上京御周旋、御忠節相立候様分而申入度

存候、呉々御上京無而ハ御不忠無限候、仍早々申入度

存候事、

三月廿八日

二白、大樹公ニ茂過日ハ御届捨ニ而帰府之趣ニ而、誠

ニ大混雜〔候カ〕之、俄ニ參 内被仰付、段々之以

叡慮滞在之様 御沙汰ニ相成、御受被申上候事ニ候、

何分ニモ大樹帰府ニ而モ致候而ハ、折角即今御一和之

立掛ケ候処、実以恐人候事ニ候、以上、

〔本文書は「忠義公史料 第三卷」二二五号・「玉里島津家

史料」二二五一六号と同文なり〕

338 此御内書ニ对セラレタル御答翰左ノ如シ、

338の1 先月廿八日之尊書、一昨十四日相達、難有謹而拜見仕

候、先以追日向暑相成候処、 御而殿様御揃、益御機

嫌能被遊御座、恐悦御儀奉存候、然者先般上京、參殿

拜謁仕候処、種々御懇篤被仰下、別而難有仕合奉存候、

殊ニ官武中川宮・鷹司関白殿・一橋殿及ヒ春嶽公・容堂公等御重職方御談判之御末

席ニ相連リ候儀、重畳難有奉存候、其節至愚之鄙見申

上候通、外ニ

皇国之御為ニ相成候儀モ存付不申、赤面至極奉存候、就

而御届申上候通之趣御座候二付、不得止出京、去ル十

一日無事帰国仕候、然処其後之御事共本田弥右衛門ヨ

リ委曲申越、御差留之御沙汰モ被為在候由、且尊書ヲ

以テ細々被仰下趣逐一奉承知、誠以不都合之至何共奉

恐縮次第御座候、此上者何様之罪科ニ被処候共、更ニ

可奉恨儀ニ無御座候処、再上京仕候様被仰下、誠以御

宥恕之、御沙汰難有奉承知候二付、速ニ発足、御礼旁

申上候儀至当ニ御座候得共、英賊一条者勿論、攘夷拒

絶被仰渡候二付而者、御届申上候通之儀故、今更贅言

不仕候、且又、殿下ニモ内覽御辞表被仰上候処、御願

之通被時、昨年四月 国父公 朝廷へ御献言、御復節、関白職御受ノ

御在職ノ期仰立ラレ、其後御辞職ノ際、内覽ハ故ノ如

シト拝セラレ、今日内覽ヲ辞セラタルモ、聞召被遊御安堵、最

早是ヨリ者天下之形勢被遊御傍觀候御事共、細々被仰

下趣奉承知候、何共遺憾之次第奉存候、乍恐、撰家之

御身之上ニ而右様御傍觀之御事御座候得者、於外臣トハ

御躬ヲ指シテ者猶更之儀歟ト奉存候、誠ニ井蛙固陋之小

臣迎モ此以後

朝廷之御大計ニ関係仕候儀、恐多奉存候二付、右旁之次

第故、再上京之儀偏ニ御猶予被成下度、伏而奉願上候、

撰府四月十八日、大坂邸ヨリノ御書翰ナリ、ヨリ申上候通、英賊一条無事相濟

候ハ、其節上京仕、奉謝是迄之

天恩含御座候、併（平脱カ）是以

公武ヨリ、御沙汰無之候而者、発足難仕儀ニ御座候、尤、

幾重ニモ恐多申上事ニ者御座候得共、方今之御模様ニ

而者

公武御一和之御実意貫徹不仕、諸侯之面々正邪明白之御

処置モ相付不申、諸侯ノ面々正邪明白ノ御処置モ不相付云云、専ラ

長藩詐謀茲術ヲ以テ堂上方ヲ愚弄シ、朝議ヲ左

右シ、勅意ヲ矯シ、或ハ浮浪ヲ懐ケ暴行ヲ為サシメ、去秋モ

公武ノ御間ヲ阻隔シ奉レル等ヲ指シテ記サレタル者ナリ、

粗申上候通、姦雄割拠之勢已ニ相顕、長大息此事ニ御

座候、就而賞罰分明之、御沙汰無御座候而者、誠忠之

士失望之基ト奉存、不顧多罪献言仕候、先者右御請旁奉

呈愚札候、

四月十六日 島津三郎

再白、大樹公ニモ参

内被仰出、滞京被命御受御座候由、恐悦奉存候、即今

大樹公発京相成候ハ、姦賊愈志ヲ得、御目前騒乱

之基ト可相成者案中ト奉存候、何卒右之辺深く御評議

殿下ヲ奉始御周旋之故ヲ以テ御取止相成候、然処当春  
一条之者共御赦之儀、去秋モ 御沙汰相成筈之処、  
先般參殿仕候節申上殘候二付、書添申上候、去夏伏見

此ノ御書翰ニ又左ノ御書ヲ副ヘラレタリ、

〔本文書は「玉里島津家史料」二五三二ノ一号と同文な  
り〕

上、  
申訳モ無之奉存候二付、急速発足仕候、何モ不臣之心  
底ニ無御座候、此儀者天地神明之照覽モ可被為在下午  
恐奉存候、右之趣不悪御聞取被下度、伏而奉願候、以

被為在、何篇治定之上、帰府被命候様仕度奉存候、幾  
重ニモ私此節御暇モ不奉願、御届迄ニ而出立仕候儀、  
恐人奉存候、（得其脱カ）実以長々滞在仕候得者、家臣之内固陋短  
慮之者共多ク有之候故、終ニ者暴論家江对シ何様之違  
變ヲ起シ候モ難計、固陋短慮ノ者共多ク、終ニハ暴論家ヘ对シ何  
様ノ變違ヲ起シ云々、事實ヲ記サレタリ、当  
時各卿ノ中ニ、點藩浮浪輩カ所為ヲ忿懣シ、誅除セント企タル者モ  
ナキニ非ラサリシ故、永ク御滞京アルニ於テハ、如何ノノ大事ヲ惹  
起サンモ測リ知ルヘカラス、仍テ速、  
ニ御退京アラセラレタルモノナリ、若右次第ニ立至リ候而者

右之訳ニ而大原卿 御勤氣ヲ被蒙候由、乍恐如何様之  
御評議ニ御座候哉、疑惑不一方奉存候、彼一条二付而  
者、最初 （右大将也） 右大将家江言上仕、中山・正親町之両議奏  
御評議之上、御伺相成候処、是非鎮靜可仕ト 嚴命承  
知仕、早速右趣意ヲ以再三理解、彼一条ニ付而者、最初云云、  
両議奏御評議ノ上、御何云云、  
トハ、壬戌四月廿三日、有馬・両橋口・柴山等ノ連中暴挙セントセ  
シヲ鎮靜スヘキ内、勅ヲ下サレタルヲ指シテ記サレタルモノナリ、  
為仕候得共、終ニ承服不仕、彼挙動ニ相及候儀違

勅顯然之者候処、御救之事申立候者共御座候由、何共奉  
恐人候得共、明白之御賞罰無御座故ト慨歎之至ニ不奉  
堪儀ニ御座候、御救申上候者之心底何様被思召候哉、  
則彼与党ニ相違無御座ニ付、御救申上候者ノ心底何様被思召候  
哉云云、壬戌四月、伏見寺田屋ニ  
於テ処分ノ連類、本藩士ハ悉ク下鷹、謹慎命セラレタルノミニニテ、  
尤モ寛大ノ措置ナリ、然ルヲ全ク赦免セラレンコトヲ、浮浪或ハ長  
藩士等ヨリ 朝廷ヘ上請セシヲ指シテ記サレタル者ナリ、本藩ニ於  
テ從來ノ刑法ヲ以テ処分スルトキハ、則悖逆ニ外ナラサルノミナラ  
ス、脱走ノ罪アルモアリ、或ハ再三ノ訓諭モアリタルニ、之ヲ顧省  
セサルハ其罪最モ重シ、重刑ニ外ナシト雖モ、尊 王ノ衷情ヲ以テ  
格外特旨ヲ以テ自宅謹慎ノ寛、  
典ニ処セラレタル者ナリ、 此節者是非嚴科ニ被処候而社、  
賞罰之至当共可奉申候処、何等之 御沙汰モ無之、夫  
成被召置候者、小臣疑惑之第一ニ御座候、若彼一条小  
臣処置不当ト被思召候ハ、何様共罪科ニ被処被下度

奉存候、左様無御座候而者天下之人心瓦解之基、乍恐

朝政之御疵ト奉存候、何様共明白之 嚴命承知仕度、幾

重ニモ奉希望候、

一守護職之

朝命被為在候由被仰下、恐入奉拜承候、此儀者会津藩幕

命ニ而勤仕之上、細川江モ被命候哉之由伝会津藩ト同シク守護職命セラル

ノ事ヲ幕府ヘ示令セラレタルハ、壬戌ノ冬ニアリ、然ルニ初ヨリ会津ニ双シテ命セラル朝意アルヲ察セラレ、頻リニ謙退セラレタリ、細川家ニ於テハ冀望シ、殊ニ幕府モ好ム処ナリシト云フ、如何ントナレハ該藩ハ幕府ノ密命ヲ奉シ、本藩ノ舉動ニ注意シ、幕命ト云ヘハ理非ヲ論セス、唯命之レ從フカ故ナリ、外藩ノ列ニアリト雖モ、家門ト同視セラレタリ、茲ヲ以テ内願スル旨アリテ奉命セリト云フ、果シテ承仕候、然上者乍恐然ラン歟、

鳳闕警衛御手薄之事モ被為在間敷ト奉存候、敵藩者僻遠

之地、先般モ申上候通三面之海岸、攘夷ニ付而者、守

衛十分不行届候而者、彼カ掠奪ヲ受候儀者案中ニ而、

私之事ニ無御座、普天之下無非王土〔畢竟カ〕〔玉里島津家史料〕之事ニ御座候得

は△、何方ヲ守衛仕候モ同ク、

皇国之御為ト奉存候ニ付、守護職之儀者幾重ニモ御断申

上度奉存候、併是非被命儀ニ御座候ハ、其代リ二者〔乍腕カ〕

九国九国ト之藩鎮被仰付、拾万石以下之大名者皆総督仕

候様承知仕度、乍恐奉願候、誠ニ以自由千万之願意ニ

御座候得共、此旨不惡御汲取被成下度、伏而奉願上候、

右者本書モ種々不敬之儀共申上候上、猶不顧恐懼多罪  
愚意不差置申上候間、御都合ヲ以宜御執成被下度奉願  
候、以上、

四月十六日 島津三郎

〔本文書は「玉里島津家史料二」五三二ノ二号と同文なり〕

339 ○四月十六日、攘夷拒絶ノ嚴令左ノ如シ、

339の1 三郎様京都 御立之節、攘夷拒絶之嚴令被遊御承知候

ニ付、異舶一艘ニテモ 御領内へ致碇泊候者不及応接、

速ニ誅伐可被召加、且依時機夷賊為征討、軍艦可被遊

御差向ト之趣、

朝廷・幕府へ被為在 御届候間、一同其通可相心得候、

就テハ何分公武之御命令モ可有之儀、且ハ攻守ノ術ニ

於テ遠大之 御趣意モ屹ト被為在 御事候間、自然異

舶渡来候節ハ、決シテ不致動搖可奉待 御命令旨、御

直ニ承知仕候、誠ニ奉恐人次第之事ニ候、右ニ付テハ、

夷舶渡来之節ニ付、是迄追々 御筆ヲ以テ細々被

仰出置候通、聊 御趣意不致乖戻様可相守候、此旨  
向々へ不洩様、早々可致通達候、

四月十六日 帶刀小松清廉 式部川上久美

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二二八六号と同文なり〕

攘夷ノ布告或ハ生麦事件ニ付テ、英夷傲慢無礼ノ条件  
ヲ以テ幕府ニ責迫スルノ事実、或ハ 国父公御献言採  
用セラレス、掃攘拒絶ノ嚴命拜承セラレタル等ノ事ヲ  
漏聞シ、藩内一般大ニ奮發、夷艦渡来セハ直ニ砲撃ス  
ル事ト覚悟シ、此時ニ方リテ祖先以來數百年ノ恩恵ヲ  
報スルノ時ナリト、郷党朋友相約スル者寡カラス、元  
來本藩士ハ幼若ノ時ヨリ教育ノ語ニ、軍陣ニ臨テ戰死  
シ、或ハ君公ノ馬前ニ於テ死スルヲ以テ本分トシタル  
カ故、互ニ競争シテ先陣ヲ望ムノ養成ナリ、廉恥ノ情  
ハ人トシテアラサルナキカ故、一般ノ国風トナレリ、  
實ニ古來勇敢ノ名アル国俗ナルハ誣言ニアラサルナリ、  
加之今回ハ 国父公御献言ノ行ハレサルハ、楠公カ奸  
吏ノ為メ計用ヒラレサリシニ同シク、奈何ントモスル  
ニ道ナシ、怨ル事ナク嘆ク所ナシ、茲ニ於テ臣子ノ分

尽サル、ニ從テ竭サザルヘカラス、加之生麦事件アリ、  
此時ニ方テ国名ヲ隕スカ如キニ至ラハ、再ヒ他藩人ニ  
對シテ面ヲ向クルヲ得ヘカラスト大ニ憤起セリ、斯ノ  
如キ勇奮ノ形勢ニシテ、夷船渡来相図ノ鐘鼓ヲ聞テモ  
在宿シ、出發ノ令ヲ待ツヘシト數回嚴令ヲ下サレ、或  
ハ隊長・什伍長ヨリ訓示スルコト甚タ嚴密ナリ、實ニ  
七百余年愛養ノ士氣爰ニ於テ赫然タリ、

340 ○四月廿一日晴、例年ノ如ク吉野牧馬追張行セラレタリ、

太守公及ヒ 姫君方御出輿アリタリ、○馬追ハ遊觀ノ

如シト雖モ、元來操練ノ一端ニシテ、馬匹追捕ノ駆引

ハ軍法ニ擬シ組織セラレタル者ニシテ、 太守公御出

馬ノ時ハ御行粧モ本式ニ備ヘラレタリ太守公御出馬ナキ時ハ御輿掛・若年寄

及ヒ御用人其他吏員、  
數名出役執行セリ、

○暁姫君 典姫君 寧姫君ニモ御見

物ニ御出輿アリテ、頗ル賑ヒタリ、殊更天氣晴朗ニシ

テ遊觀登場ノ人夥ク、或ハ騎術演習人モ數百名ニ及ヒ、

寬急從意馳驅スル者最ト盛ナリ、 姫君方ニハ初テ御

覽セラレ、特ニ御興アリシトナン、○本藩ニ於テ壯觀  
ナルハ四大祭及ヒ馬追ヲ以テ一歳ノ盛事トス、四大祭

ノ其一ハ、則チ毎歲正月廿八日諏訪社社頭ニ於テ神舞ヲ催シ大祭ノ式アリ、其舞踏種々アリト雖モ、劍舞或ハ田ノ神舞等ハ最モ興アル者ナリ田ノ神舞ノ謡歌ハ、第二、成形図説ニ記ス、七月朔日ヨリ同廿八日ニ至ル迄祭式アリ、頭殿・居殿ト唱ヘ左右二名ノ祭主ヲ設ケ、二十八日ニ至テ大祭執行ス、其間同月二日ヨリ十一二日迄、毎日近在二十四村ノ農人等太鼓踊ヲ催シ、頭居両殿ノ仮屋ニ至ル、踊ノ組織ハ鼓鉦大小數個ヲ携ヘ、種々造り花ノ帽ヲ頂キ、或ハ鳥毛ヲ竹竿ニ挿置セルヤバトヲ背負ヒ、拍子ヲナシテ踊躍ス、頗ル愉快ノ形容ナリ、其中ニ小山田村ノ拍子ハ尤モ壯快ナル者ニシテ、鉦鼓ノ響耳ヲ穿ツカ如シ、又桜島踊ト唱フルハ、鉦鼓大中小數個、太鼓ノ如キハ粗糙ノ製ナリト雖モ、大ナルコト直経(直徑カ)四尺ニ下ラス、実ニ古雅ナル製ニシテ一種異形ナリ、響ハ甚タ佳ナラスト雖モ、又一種雅音アリ、兒童ハ鉦鼓ヲ以テ拍子ヲナシ、頭ニハ種々美麗ノ造花笠ヲ頂キ、古体ノ歌ヲ拍子ニ添ヘ、円圈巡環謡踏ス、此ヲ十余日間最終ノ躍トス、如此頭居両殿ノ仮屋ニ興行シ、而シテ後城下ニ至ル、其時 君公ハ角ノ矢倉又ハ内庭御休息所御庭トモ云フ、

堤上ヨリ見玉フヲ例規トス、畢テ二ノ丸表門前、次ニ南泉院城西、今鶴ヶ嶺神社及此、次ニ福昌寺現今鼓川町、長谷場照國社ノ地ニアリタリ、山下歴代御墳墓ノ地ニ在リ、次ニ浄光明寺現今龍尾町ナル丁丑ノ戦死者西、次ニ興國寺現今冷水通町ノ山、次ニ妙國寺現今下伊敷村、玉里邸、次ニ南林寺現今山ノ口馬場町、松原、次ニ不斷光院現今下龍尾町、是等ノ寺院ヲ巡踊セリ、齊興公玉里邸ニ隱棲セラレシヨリハ同邸ニモ召寄ラレタリ、斯ノ如ク巡躍スルハ、歴世ノ君廟ナルカ故、国家安寧、五穀豊穰ヲ禱ルノ為ナリト云フ、此踊同月十二日迄ニ終レリ年々異同アリ、二十四ヶ村ノ内三村、四五ヶ村連合シ、一二三ヨリ十余番号迄、先末ノ順番転換アリ、或ハ頭殿掛ト唱ヘ祭典ニ従事スルアリ、其時ハ踊ヲナサス、祭式ノ仕丁其他ニ、十八日ニハ法樂能興行セラレタリ、其時ハ若年寄職出張シ、興行ナサシムルヲ例規トス、二十一日ヲ大祭ノ当日トシ御参拜アラセラル例規ナリト雖モ、事故アルニ当リテハ、御代拝御一門家ニ命セラレ、或ハ若年寄等數名ノ吏員出頭シテ祭式ニ預ル、当日頭居両殿ハ束帶ノ服式服式官等ニ則レル者ナリヤ否ヤ、詳ニスルニ由ナシ、依テ今束帶ト書スルハ、束帶類似ノ服ナルカ故、其形狀行粧ヲ調ヘ社頭ニ臨ミ、社司本多ヲ初、數十ノ神職各官等ノ冠服ヲ着ケ、其式最モ嚴ニシテ且ツ壯觀ナリ、神馬或ハ角力等ノ興モアリ、素ヨリ神饌供

撒或ハ 御代拜、或ハ頭居両殿進退等ノ際奏楽アリ、

此祭式ハ所謂御狭山祭ニ擬セラレタリト云フ御狭山祭ハ社祭典ノ名ナリ、詳ナルハ、則信州諏訪該社縁起ニ記スルカ如シ、

此祭式ハ第五世貞久公ヨリ連續

廢藩置県ニ至ル迄虧絶ナシ、第三、十一月三日例歳稻

荷神社ノ大祭ナリ、祭式最モ鄭重、御参拜ノ例規ニシ

テ、御親参ナキ時ハ御代拜御一門家ニ命セラレ、若

年寄其他役員数名出頭、而シテ鑰流馬ニ騎興行セラレ、

這騎者ハ犬追物射芸ヲ允サレタル家格ノ者ニ命セラ

ル、規則ニシテ、年々交替ス、因テ犬追物射術師範御

預リ川上十郎左衛門担当ス諺ニ、厄年ト唱フルアリ、則チ四十一歳ヲ以テ受厄ト通唱ス、之レ

ニ依リテカ、太守公当年ノ御時ハ祈願ノ為メ、三十六騎張行スル

中古ヨリノ例規トス、這ノ張興ハ犬追物騎術者連中請願シテ張行

スル者、祇園カ第四、六月十五日祇園祭ナリ、祭式供饌ハ藩庁

ノ支弁ニシテ、其他城下三町上下兩町 西田町ノ寄進ニ罹レリ、

其概況ハ、上下二町ノ中ニ祇園屋敷ト唱フル地所アリ、

其地ニ同神ヲ勧請シ、年々各地ニ仮殿新宮遷座上町ニ六ヶ所 下

町ニシテスルヲ慣例トス、故二十八年ニシテ初メノ町邸ニ

遷還ス、例祭当日ハ本社清水馬場町永安 橋詰ニ在リへ神輿ヲ会祭ス、

其時三町ノ経費ヲ以テ山京都又ハ東京等ニテ出シト 唱フル者ヲ山ト通唱ス、数台ヲ

本社ノ近傍迄張行ス、其山ニハ男女一種ノ樂人ヲ載セ

テ行々拍子興行ス祇園雖シト通唱ス、拍子ハ各異ナレリ、又町踊ト唱へ、八

九年、十三年頃迄ノ女子数名社前ニ於舞踏ス、其謡

歌又ハ拍子モ一種アリ謡歌又ハ手引人ノ仮面ハ光、久公ノ御作ナリト云フ、又舞踏

ノ女子等カ乗ル処ノ者ヲ花駕籠ト名ツケ、駕籠類似ノ

製ニシテ種々ノ造花或ハ数色ノ布帛ヲ以粧飾ヲナシ、

尤モ美觀ナリ、斯ノ如ク様々ノ興行其費用ハ悉ナ三町

ノ負担ニシテ、藩庁ノ関スル処ニ非ラス、三町内ニ在

ル数所ノ邸地ヲ借地トシ、其地代等ヲ貯蓄シタル者ヲ

以テ費用ニ充ツト云フ、之レヲ祇園金ト唱ヘタル者ナ

リ、今ニ至テモ例歳稍昔時ノ如シト雖モ、山ノ数或ハ

女子踊・花駕籠等ノ壯觀ハ廢藩ノ時ヨリ省減シタリ、

或ハ三町ニ在リシ祇園屋敷モ其時売却シ、去ル明治十

七年迄ハ各町道傍ニ仮殿ヲ設ケ祭式ヲナセシニ、其後

旭町ニ一社ヲ創立シ、神輿ヲ出シテ祭典セリ、是レヲ

鹿兒島ニ於テ年中ノ四盛事トシ、觀覽ニ出ル者夥シ、

時勢ノ變遷轉換ニ依テ盛衰ハ古今歷々、中ニモ諏訪社

ハ丁丑擾乱ノ際兵燹ニ罹リ、一小仮殿ヲ造宮シ祭事ヲ

為スト雖モ、昔時ノ十分一二モ及ハサルナリ、神人共

ニ榮枯ハ相同シキ者ナリ、又今ヨリ七八十有余年前ニ

三大興行ト唱ルアリ、則御関狩・士踊及ヒ馬追是ナリ、其後馬追ノミ例歳張行セラレタリ、○因ミニ其概略ヲ

記サンニ、御関狩・士踊ノ二ツハ 重豪公御代ニ中止セラレシヲ齊興公御再興、尋テ 齊彬公御知政御就封

ノ秋、吉野原ニ於テ催サレ御出馬、猪鹿數頭ヲ獲ラレタリ、其時先規ノ如ク、城下士ハ素ヨリ各郷士・百姓

等數千ノ人員出場シ、実ニ近世ノ盛筵ナリ齊彬公御伝、ニ詳記ス。

中止ノ間モ、年々春季吉野原ニ於テ其式ノミ存セラレ、

御用人・物頭支配下ノ足輕ヲ率ヒ登場執行セリ、○士

踊ハ 齊興公嘉永三年 月 日「〔貼紙〕月日糺スヘシ」上下

両区ニ各別シ、興行ヲ允サレ御覽アラセラレタリ齊興公御伝ニ

詳記、馬追ハ古ヨリ毎歲初夏四五月ノ頃催サレタリ起因ハ後

業二概、其催日ヲトシ上申スルハ御既吏員ノ掌ル処ニシ

テ、畜馬ニ歳ニ充テ、健全馳驅ノ度ヲ見定シ申言ス、

尤、二歳ノ牡馬ハ悉ク捕獲シ払下ケトシ、牝馬ハ依然

牧置シ播殖ヲ要スルノ方法ナリ、追捕ノ概況ハ追躡者

ヲ串目ト云フ、此ノ串目ナル者ハ、各郷ノ百姓或ハ御

城下三町ノ役ニシテ上下両町・西田町ノ三町ナリ、各其郷村或ハ町名ヲ

記シタル標旗ヲ用ヒ、中ニモ三町ノ曹ハ大小旗數十ヲ

立列ネタルハ、恰モ軍画ヲ見ルカ如シ、而シテ牧司牧場ノ牟礼ノ岳ヨリ貝ヲ鳴ラシテ相図ヲナシ、各所ヨリ

馬ヲ追ハシム、其時騎術練習ノ人ハ縦横ニ馳驅シ、追

躡ノ形况頗ル壯觀ナリ、又本日牧神ノ祭式アリ、御馬

預參拜ス牧神ハ牟礼岳ノ頂上ニアリ、御棧數ハ葛掛原ニ設ク、其近

地ニハ諸役員或ハ門閥家ノ棧敷ヲ並列セリ、亦追ヒ集

メタル數百ノ中ヨリ二歳牝馬ヲ捕フル形况尤モ壯觀ナ

リ、捕フルニハ甚タ危險ナル者ナリ、御口之者御口之者トハ駢者ナリ、君公乘馬ノ口取スル者厩局付属ニシテ、一種ノ格式ヲ与へ、俸祿ヲ給スルモノナリ、群屯馬匹ノ中ニ

跳入り捕フルモノナリ、數百ノ馬匹群屯シ蹠齧交々ニ

シテ、負傷或ハ暈絶スル事モアリ、形况甚タ危險ニシ

テ且壯觀ナリ、而シテ捕ヘ終リテ後、埒ヲ開ヒテ放遣

ス、概略斯ノ如クニシテ觀覽ノ男女夥ク、広漠タル原

野モ隙地ナキ程ナリ、又騎術練鍛ノ人ハ帰路大龍寺馬

場現今上龍尾町ナリニ於テ馳驅ス、之ヲ見ル者又夥シ、是等ヲ

三興行ノ其一存シタル者ナリシニ、廢藩置県ノ後明治

五年、牧場ヲ廢シ開墾地トシ、或ハ牧馬ヲ熄メ、開墾

或ハ牧牛場トナシタルカ故、馬追モ茲ニ至テ全廢セリ、

○旧乘ニ記ス処、御関狩ノ因テ起レルハ、天正元癸酉

九月、伊地知周防助重興・禰寝右近大夫重長・〔肝付方、兼続〕伊地知力居城垂水郷早崎城ヲ攻メ玉ヒ退治セラレ、令

弟中務太輔家久君ヲ早崎城ニ残シ置レ、在城中操練ノ

為メ、牛根ノ山林原野ニ於テ兵士其他土人ヲシテ猪鹿ノ狩ヲ催サレ、進退聚散ノ駆曳隊伍ヲ定メ玉ヘリ、之

ヲ御関狩ノ起源トス、而シテ軍事操練ニ適シタルヲ以テ、同二甲戌年二月吉野原ニ於テ催サレ、其時尚節制

号令ヲ制定セラレ、教戦ノ要ト規定セラレタリ〔家久君御合戦日記〕

ニ拠、或ハ初メ組織シ玉フ時、義久公家久君議シ玉ヒ、

古 頼朝公富士野ノ狩ハ教戦ノ一端、騎歩二兵ノ操練ヲ本旨トシ玉ヘルニ基カレタリトモ記セリ、是ヨリ御

代々例規催サル、事トナリタリ、○又馬追ハ其後吉野

ニ於テ催サレ、或ハ福山又ハ伊集院・春山等ニモ催サレタリ、御関狩モ吉野又ハ谷山・桜島・春山等ニ於テ

張行セラレ、中ニモ 光久公 綱久公 綱貴公ニハ

毎々御出馬アラセラレシト記セリ、○吉野牧場ハ、川

上筑後祖先代ヨリ所有ノ牧場ナリシニ、慶長七年、川

上上野介久隅 家久公へ献呈シ、馬追ノ式モ被定御出

馬、久隅モ扈從シタリ、其前ニモ 義久公 義弘公御

出馬アラセラレタル事旧記ニ散見ス、○當時モ御出馬

アラセラレサル時ハ、国老〔貼紙〕又御談合役トモ唱フ〔立時御老中又ハ八年寄衆〕一名・

物奉行一名・川上家ヨリ一名・御目付〔當時横目〕二名出

役スルノ定規ナリシニ、寛永三年、御名代其他出役ト

記シ、享保八年癸卯七月、御名代及ヒ若年寄其他役員

出張ト規定セラレ、今ニ至テ連続セリ〔川上久隅献呈セシ縁故ヲ以テ、毎歲駒一頭ヲ下賜セラル、例規ニシ、〕

弘公 家久公朝鮮征討御渡海中、寺沢志摩守・宇久大

和守ト御懇交アリシ故、御帰朝ノ後、二人共ニ御礼ノ

為メ来麿ノ時、扈從ノ士ヲシテ五島踊ヲ興行セシメタ

リ、其際桜島野ニ於テ御関狩張行饗応セラレ、而シテ

後五島踊伝習ノ為メ、税所与助入道一和・奥山某二名

五島ニ遣シ玉ヒ伝へ来リ、此ヨリ鎧具ヲ着シ、操練ノ

組織ニ変シ玉ヒシト云フ、謡歌ノ如キハ、五島ヨリ伝

へタル者ト、本藩ニ於テ製シタル者ト混淆シ用ヒタリ

ト云フ、或ハ諏訪社神事二十四村大鼓踊モ、五島ヨリ

伝へタリトモ云フ、○諏訪・稻荷両社祭典ノ起源左ノ

如シ、

諏訪神社ハ鹿兒島郡鹿兒島坂元村ニ鎮座建御方命・事、代主命ニ座、当

社ハ第五世 貞久公信州大田庄地頭職兼任セラレシ時、

信州諏訪社分靈ヲ薩州山門院ニ勧請シ玉ヒ、曆応四年

閏四月、第六世 氏久公鹿兒島東福寺城ニ移城シ玉ヒ

シ時、今ノ地ニ遷宮、鹿兒島ノ宗廟ト定メ玉ヒ延文元年遷宮

夫ヨリ御代々御崇敬、毎歲七月大祭執行セラレ、御參

拜奉幣ノ式嚴重ナリ諏訪社祭典ニ頭殿・居殿ハ則チ祭主ノ如キ者ニシテ、其因テ起ル所以ハ詳ナラスト雖モ、祭主ニ設ケラレタル者ナルハ、祭式ノ一般ヲ以テ知ルニ足レリ、又慶長七壬寅、社役云々ニ兩殿ヲ左右二分チ、左頭殿凶書殿宅、右頭殿本田与兵衛殿宅ト記シ、或ハ左頭殿新納助右衛門嫡子、右頭殿猿渡嘉右衛門嫡子云云ト記セリ、或ハ上井覺兼日記中天正十二年申六月ノ條ニ、当年当所御頭殿之儀、左忠棟之次男、右村田雅樂介息タルヘキ由定候ナリト記セリ、是ヲ以テ考フルニ、頭居兩殿ヲ左右二分チ唱ヘタルハ古キ事ニテ、廢藩置縣迄モ依然左右之唱アリタリ、○頭屋地ヲ戸柱辺ニ設ケラレタルハ何ツノ頃ヨリナリヤ詳ナラス、慶長ノ頃ハ門葉家ノ宅ナリシハ旧史ニ記スカカシ、又祭典ニ幣之役ト云フアリ、慶長七年ノ記ニ、御名代幣之役、左平田与九郎殿、右平田五次右衛殿、右外社役左宿瀧間宗連老、右宿平田九郎左衛門殿之事ト記セリ、又社役ノ家筋、伊集院・伊地知・川上・長野・町田・本田・新納・鎌田ノ八家ニテ、年々二家、○元禄九年神祇カ組合ヲ以テ勅タルモ、古代ヨリノ事ト見ヘタリ、

六月、神祇道管領從三位卜部朝臣兼連卿神位正一位ヲ

授ケラル、同十三年四月、近衛右大臣家熙公染筆諏訪

大明神ノ額ヲ両花表ニ掲ケラル、是第二十世 綱貴公

ノ請ニ依テナリ云云薩藩名、勝志、而シテ五社ト定メラレ、崇

敬尤モ重シ五社トハ諏訪社ヲ第一トシ、第二祇園、第、三稻荷、第四春日、第五若宮此レナリ、○稻荷

社モ神位正一位ニシテ、鹿兒島坂本村ノ内精木川ノ上

流稻荷川ト通稱ス、倉稻魂神・瓊々杵尊・伊弉冉尊三座、当社ハ島津家氏神ニシ

テ、第一世忠久公撰州住吉社地ニ於テ誕生セラレシ時、

末社稻荷神ノ擁護アリシト謂フヲ以テ、氏乃神ト尊崇

シ玉ヒ、薩隅日三州ノ封ヲ請ケ玉ヒ、山門院ニ御下向、

後チ日州島戸ニ移ラセ玉ヒシ時、同地ニ勧請セラレ、

建久八年九月十九日、遷宮ノ式執行セラレ、而シテ後

承久三年薩州市來院ニ市來郷湯田村ニ在リ、勧請セラレ、第九世

忠国公今ノ地ニ遷シ玉ヘリ一説ニ八天文年中トモ云フ、又一説ニ天文七年二月後迫稻荷ケ尾ノ地ニ遷シ、天正年中今ノ地ニ遷宮トモ謂フ、諸説、每歲正祭ニ鎗流馬

同シカラス、何レカ是ナルヤ知ルニ由ナシ

張行セラル、ハ、是レ文禄ノ初、朝鮮役勝運ノ祈願ヲ

立ラレ、御帰朝ノ後慶長三四年頃鎗流馬ノ張興ハ朝鮮役御帰朝ノ後ト旧記ニ記スト雖モ、年契詳ナラス、蓋シ再役御渡海御帰朝後ナラン、然ル時ハ慶長二丁酉再ヒ御渡海、同三年戊戌十二月御帰朝、其翌年則チ同四年己亥ヨリナラン歟、初ハ十六騎ト記セリ、第二十世 綱貴公

何レノ頃ヨリニ騎トナリシヤ詳ナラス、

諏訪社ト俱ニ吉田兼連卿ニ請ヒ、正一位ノ神位ヲ授ケ

玉ヒ、同十三年四月、近衛右大臣家熙卿神号ノ額ヲ掲

ケラレタルモ諏訪社ト同時ナリ、○祇園社今八坂神社ト唱フ、

濱崎城趾ノ海浜ニ鎮座濱崎城ハ東福寺城ノ山統キ、南端多賀神社ノ辺ナリト云フ、今多賀山ト通稱ス、

山城国愛宕郡八坂郷祇園社 素盞鳴尊・稲田姫・八王子ノ数座 勸請年月詳  
 ナラス、鹿児島五社第二ナリ 明治三年、町内ノ分社ヲ本社ニ合祭セラレ、六月十四日、町内ノ飯殿ニ神輿ヲ出シ、七月一日ヨリ廿八日迄諏訪社、テ祭典ヲ行ヒタリ、六月十五日祇園社祭、十一月三日稻荷祭、是ヲ鹿児島ノ四大祭トシ、外ニ吉野原馬追合セテ、五、壯觀ナリシモ、廃藩置県ノ後ハ僅ニ其式ヲ存スルノミ、  
 〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二一九〇号と同文なり〕

341の1

○御直元服并御太刀進上ニテ、初テ之 御目見被 仰付  
 候者、児烏帽子相用候節者都テ御家折 左折リトモ云フ、児烏帽子  
 相用ヒ候様被 仰付候条、可承向へ可申渡候、

四月二十日 大藏 島津久徴

341の2

御直元服初テノ御目見家格順次左ノ如シ、

- 島津周防殿 重富郷領主
- 島津讃岐殿 垂水郷領主
- 島津左衛門 日置郷領主
- 島津又八郎殿 加治木郷領主
- 島津安芸殿 今和泉郷領主
- 島津若狭 花岡郷領主

以上六家、嫡子又ハ二男迄御直元服ノ格式ナリ、○進

上品左ノ如シ、

御一門四家ハ、太刀・馬 現馬・弓十張・征矢百・三種三荷、又年首慶賀ノ式ハ御座間着座、進呈品太刀・馬代

銀三枚、又此内島津左衛門・島津若狭両家元服ハ太刀・馬代銀三枚・折十二合・樽五荷、  
〔頭注一馬代三種□□ハ雜目□ヲ誤ル歟〕

島津将曹 領地無シ 島津大藏 領地無シ

島津凶書 〔宮之城郷カ〕ヲ領ス、

島津隼人 黒木郷ヲ領ス、 島津主殿 永吉郷ヲ領ス、

島津伯耆 知覧郷ヲ領ス、 島津壬生 佐志郷ヲ領ス、

島津左膳 領地無シ 島津石見 郡城ヲ領ス、

新納波門

以上九家、嫡子御直元服、二男御前元服ノ格式ナリ、  
〔十家カ〕

○進上品太刀一腰・馬代銀一枚・折六合・樽三荷、○

年首太刀・馬代銀一枚、

川上筑後 榊山相馬 蘭牟田郷ヲ領ス

桂小吉郎 島津頼母

島津求馬 喜入撰津 鹿籠郷ヲ領ス

町田民部 伊集院郷ノ内石谷村ヲ領ス 島津帶刀

島津内記 北郷作左衛門 平佐郷ヲ領ス

島津主計 新城郷ヲ領ス 島津矢柄

大野多宮 吉利仲

島津内藏 伊集院伊膳

種子島彈正種子島ヲ領ス、

穎娃織部

入来院恰入來郷ヲ領ス、

肝付兵部

諏訪数馬

鎌田刑部大始良郷ノ内南  
方村ヲ領ス、

義岡主殿

島津靱負

末川久馬

市田勘解由

島津登

新納駿河

新納内匠

伊集院亘

鎌田要人

山田弥九郎

新納喜右衛門家格  
小番

諏訪李右衛門家格  
小番

渋谷四郎左衛門家格  
小番

島津仁十郎市成郷ヲ領ス、

小松帶刀吉利郷ヲ領ス、

比志島靜馬

菱刈全之介

畠山主計

伊勢雅乘末吉郷ノ内岩  
川村ヲ領ス、

山岡齊宮(齊宮カ)

島津相馬

島津藏人

島津左内

川上式部

樺山権十郎

町田内膳

高橋縫殿

平田靱負

仁礼小吉

比志島主右衛門家格  
小番

土持孫兵衛家格  
小番

猪飼御太郎

以上五十三家(マ、)、嫡子御直元服ノ格式ナリ、○進上品太

刀・馬代銀一枚・折六合・樽三荷、家格ニ依リテ多少

アリ、

川田将監

北郷波江

三崎平太左衛門

肝付新太夫家格  
小番

以上七家、御前元服ノ格式ナリ、○進上品太刀・馬代

銀一枚・折三合・樽二荷、家格ノ差違ニ依テ小差アリ、

桂内記

北条十左衛門

本田六左衛門家格  
小番

以上六家、元服ノ御礼格式ナリ、○進上品太刀・馬代

銀一枚・折三合・樽二荷、

島津仲 高橋縫殿

二階堂源太夫

鎌田愛太夫御目見ナリ、  
市来次十郎上二同シ、

相良治部名越ノ次

小林一学御目見ナリ、

郷原転

本田新二郎

倉山作太夫

伊集院靜馬

川上左太夫家格  
小番

高崎崎納右衛門家格  
小番  
(高崎)  
(高崎家名ナリ)

二階堂部

名越左源太

小笠原兵部

平田正十郎御目見ナリ、

河野八郎左衛門

赤松主水

岩下佐次右衛門御目見ナリ

関山糺御目見ナリ、

宮之原小膳

山田新之丞

稲富數馬初ハ御直元服ナリシカ、後ハイカ、命アリシカ、

上野藤馬御目見ナリ、

命アリシカ、

村橋昇

伊勢平四郎

倉山作太夫

谷川次郎兵衛

西金之介

堀四郎左衛門平田ハ下ニ入平田堀ハ只御目見ナリ、

以上二十五家、御内証元服ノ格式ナリ、○進上品太刀

一腰・馬代銀一枚・二種一荷、

合計百六家ヲ以テ初而御目見ノ節、御直元服其他右ニ

記スカ如ク家格ヲ定メラレ、其式最ト嚴重ナル者ナリ

キ、斯ク確定セラレシハ二十一世 吉貴公、正徳元年

辛卯九月、永世之家格ニ定ラレタリ、然リト雖モ、其

后国老職等奉職シ、家格寄合又ハ寄合並ノ格式ニ登用

セラレシ者數家アリ、此輩ハ咸御内証元服ノ列ニ置レ

タリ、則チ関山糺・山田新之丞・岩下佐次右衛門（間脱カ）・上野

藤馬・調所笑左衛門（広稱）・猪飼御太郎（尚香）等ノ如キ是ナリ、或

ハ新家ニシテ御前元服ニハ市田隼人ノ如キモアリタリ、

○御直元服トハ、 太守公御親シク理髮加冠シ玉フ者

ナリ、御前元服トハ、 太守公御前ニ於テ理髮スルヲ

云フ、○初テノ御目見トハ、御一門四家（大身分カ）・太身分・小

番・新番・同一代、又ハ御小姓組・与力・長二三男以

下ニ至ル迄、十二三歳ノ年齢ヨリ十四五年ニ至ル頃、

初テ 君公ニ拜謁スルヲ云フ、其時家格ニ依テ太刀・

馬・弓或ハ中紙等進献ス、各家格ニ準シテ差アリ、

342 ○四月廿四日京都飛報曰、長土水三藩及ヒ浮浪ノ輩益暴

威ニ募リ、人心恟々乱兆目下ニ逼リ、心アル者ハ退テ

野ニ隠ルノ形勢ナリト、或ハ大小ノ政度朝令暮改、全

ク長藩或ハ浮浪輩カ進退左右スル処ニアリテ、国事掛

及ヒ非常付此二職ハ昨九月以、來創テ置レタリ、公卿方ノ議ニ出、関白殿下

ヲ経テ

勅裁ノ名アリト雖モ有名無実ナリ云云、○惣裁職越前々

中将春嶽殿モ 国父公御退京後出仕ヲ罷ラレ、間モナ

ク辞表呈出、五月廿二日、裁可有無ノ命モ待タス、同

廿三日ノ夜發途帰国セラレタリ、 国父公遽然御退京、

人心動揺、憂国ノ人士傾首憂苦ノ時ニ方リ、越公モ同シク卒然帰国、益人心疑懼恟々トシテ目下汗馬ノ蹄、砲煙矇々タルモ遠カラサルコトナラン云云、如此卒然帰国セラレタルニ依リ、幕府ハ総裁ノ重任トシテ縦恣ノ所為ナリトテ免職、国元ニ於テ謹慎ノ譴責ヲ蒙ラレタリ云云、

343 ○四月廿五日、甲突川尻操練場ニ於テ大砲遠撃ヲ催サレ、太守公御出馬アラセラレ、遠近彈着ノ御指揮モアラセラレタリ、

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二九三号と同文なり〕

344 ○当時海陸ノ軍備他事ナク着手セラル、ニ由リ、必要ナル火薬製造所モ一ヶ所ニテハ不足ナルカ故鼓川町稲荷川上流字瀧上ニアリ、今回山川郷成川村ニ創設ノ命ヲ下サレ、迅速建築ノ準備ナリ、○瀧ノ上ナル製造所モ盛大ノ設ニテ、從來ノ貯蓄百余万斤ニ及ヒ、目下不足ヲ告ルコトナシト雖モ、危険ノ事業ナルカ故、若シ不慮燃発ノ憂モ保シ難シトテ、各所ニ設ケサルヘカラストノ議ヲ以テ創設

セラル、者ナリ、○山川成川村ハ水利ニ富ミ、製造水車ヲ設ル〔便カ〕ニ弁ナルノミナラス、西南各郷運搬ノ弁モ又宜シ、○従来火薬貯蓄庫ハ、田上村ノ内字御牧・犬廻〔犬廻カ〕村・坂元村・郡本村・西之別府村ノ五ヶ所ニアリ、

345 ○將軍家御上洛御滯京、僅十日間ニシテ帰途、廿日帰着後十日ニシテ攘夷実行スヘシトノ

勅令ヲ下サレシニハ、幕吏中深く憂へ種々評議ニ涉リ、遂ニ尾張前中納言茂殿ハ三月十日ヲ以テ学習院国事掛ニ就テ、三十日間滯京懇請セラレシカハ、同月十七日ニ至リ、此滯滯京アルヘキ旨

勅命ヲ下サレタリ〔紹述編ニ、此時尾張前中納言殿ハ、病ニ臥シ居ラレ云ト記セリ〕

346 ○四月廿六日京師通信着覽、曰、去ル十一日予達ノ如ク主上石清水八幡へ 行幸、將軍家供奉ヲモ命セラレタリ、此 行幸ハ、専ラ攘夷期限五月十日ト発令セラレタルニ依リ御祈願、且ツ神前ニ於將軍家節刀賜授ノ朝議ニ出タリト云フ、絶テ久シキ盛典ナルカ故、前頃ヨリ御通

輦ノ途次、道路・橋梁或ハ社内ノ粧飾修繕等日夜兼業セリト云フ、殊ニ山内寺院神職ノ戸々ニハ、供奉ノ諸侯休憩ノ場ト達セラレシニ依リ、自費調修ノ力ナキカ故、悉ク官費ヲ仰キタリ、從テ山下ノ民屋・旅店ノ如キモ咸ナ官費ヲ以テ修繕シ、其經費莫大ニ及ヒタリトナン、斯クテ十一日黎明

御発輦ト令セラレタリ、然ルニ前日ノ晚景ニ及ンテ、

將軍家遽ニ発病ノ趣ヲ以テ、供奉スル事能ハサル旨届出ラレタリ、

朝廷ニモ遽病出発ノ趣ナレハ真偽大ニ疑惑セラルト雖モ、

奈何トモスルニ道ナク、依テ後見職一橋殿素ヨリ供奉ノ事ナレバ、節刀代受アルヘシト達セラレ、当日曉

御発輦アラセラレタリ、供奉ノ人々ニハ関白輔殿ヲ初メ、

数十名ノ公卿方及ヒ一橋殿、其他数十ノ諸侯加茂 行幸、此時本藩島津彈正（市成郷領主、同人員ト稱シ、供奉セラレ、石清水へ當時京師警衛隊物主職ナリ）一隊ヲ率ヒテ供

奉シタリ」

御着輦、神職

〔貼紙〕「名札スヘシ」カ館ニ御休憩、而シ

テ社頭へ出、

御祭典畢リテ重テ攘夷御祈願、節刀授与セラル、予定ナ

リシニ、御休憩中一橋殿ハ発病ノ旨ヲ以テ下山、帰京セラレタリ、茲ヲ以テ予定ノ事全ク相違シタリト雖モ、

発病ノ届出ナルニ於テハ奈何ントモスルニ途ナク、已ム事ヲ得ラレス御祈願ノミ執行セラレ、主要トセラレシ節刀授与ノ大典ハ水泡ニ帰シタリトナン、其時二三ノ暴藩士及ヒ浮浪輩ハ、一橋殿卒然下山帰京セラレシ由ヲ聞ヒテ大ニ憤懣シ、大事ニ及ハントスルノ形勢ナ

リシカトモ、一橋殿ハ予メ計畫シタル事ナルカ故、陪

從モ多キノミナラス、数百ノ銃卒モ從ヘタルニ依リ、暴卒ノ所為ナシ得サリシトゾ、是ヨリシテ二三ノ暴藩

ハ素ヨリ、浮浪ノ徒ハ計謀画餅トナレルヲ憤リ、幕府

ヲ惡ムコト益甚シク、一橋殿及ヒ閣老其他幕吏ヲ罵詈スルコト一層セリ、然シテ謀策破レタルカ故、此上ハ

幕府ヲ放棄シ、攘夷ノ大挙

御親征ヲ促シ奉ルニ変シタリ、而シテ浪士等ハ、將軍家

病ヲ告テ供奉ヲ辞シタルモ、全ク攘夷ヲ否ミ、節刀拝授ヲ避ケンニ外ナク、一橋殿モ又遽病ヲ以テ下山シ、

加之

朝廷ノ命ヲ埃タス帰京シタルハ、上ヲ輕蔑スルノ太甚シ

キ所為ナルカ故、其罪ヲ正シ玉ハスンハ、今後輕違ノ  
挙動増長スルヤ必セリト、学習院ニ於テ議定シ、

朝議ニ訴ヘシカトモ、如何シノ

朝議ナリシヤ不問ニ置レ、而シテ尾張中納言慶殿ヲ以テ

將軍家輔佐トシ、佐賀老侯方、鍋島直正以テ文武総裁職トシ、

酒井雅樂頭忠嶺、播州姫路ヲ以テ大老職ニ置クヘキ旨令セラレ、

一橋殿ハ攘夷談判ノ為メ東下ノ命ヲ奉シ、四月廿二日

京師發程、帰府ノ途ニ就レタリ、將軍家ハ茲ニ至テ

前説ニ反シ屢々帰府セラレン事ヲ頻請セラレシト雖モ、

敢テ允シ玉ハス、

御膝元ママママ御氣小ソニ

思召シ玉フ等ノ旨ヲ以テ滞京スヘシト令シ玉ヒ、攘夷

ノ大事ハ水戸中納言殿ニ命セラレシニ依リ、水戸殿ハ

閣老小笠原長行書頭ヲ初、数名ノ幕吏ヲ卒ヒテ帰府セラ

レタリ、○一橋殿男山ニ於テ遽病ヲ告ケ、或ハ將軍

家供奉ヲ辞セラレシ等ノ事、悉ク一橋殿ノ姦計ニ出タ

ル者トシ、其罪ヲ匡サレンコトヲ論出セシハ長藩卜浪

士等ニシテ、其論一時沸クカ如ク罵詈暴語太甚シク、

兵ヲ揚ケテ誅戮スヘシト言ニモ及ヒタリシニ、長藩士

ノ中ニ桂幸五郎小五郎久木戸孝允・来島又兵衛等ノ三四名之ヲ不可トシ、

而シテ別ニ施スコトアラントノ旨ヲ以テ鎮靜シタリト

云フ、或ハ大和 行幸ヲ促シ奉リ、御親征ノ名義ヲ

以テ大小ノ諸侯ヲ卒ヒ玉ヒ、兵力ヲ張リ、而シテ天下

ニ号令スルヲ以テ良策トスルノ論ナリシトモ云フ、当

時ノ説ニ、長藩及ヒ浮浪士カ大和 行幸御親征等ノ事

ヲ促シ奉リ、大小諸侯ヲシテ違動スルヲ得サラシメ、

而シテ大ニ為スコトアラントス、則チ

天子ヲ挟ンテ事ヲ謀ルノ奸謀ナラント私語キタリ、中川

宮又ハ近衛殿、其他二三ノ公卿方ハ頗ル憂患セラレ、

如何ニモシテ此 行幸ヲ停止セント百方苦心セラレタ

リト雖モ、勢ノ及ハサル論斥ノ人ナク、憂鬱痛歎セラ

ル、ノミニシテ、只管 国父公御上洛ヲ冀望セラレタ

リト雖モ、御退京未タ幾干ナラサルカ故、是モ又如何

ントモスルニ道ナシトテ憂困セラレシトソ、或ハ大和

行幸ハ真ノ

叡旨ニ非ラス、止ム事ヲ得玉ハサルニ出タル者ナリト云フ、

347 ○四月廿六日、京師飛報四月十六日 日京師発着麁、曰ク、 国父公御

退京後、洛中ノ形勢日々危迫ニ陥リ、幕威倍々衰へ、  
 長藩或ハ浮浪士ノ暴勢一層、其他八幡 行幸ノ形況、  
 或ハ大和 行幸御親征、或ハ一橋殿東下、攘夷期日切  
 迫、人心恟々タル趣等ノ数件ナリ、

○在京磯永真海友人へ通報書牘ノ略、左ノ如シ磯永ハ當時警衛什長ナリ、

前文略ス、儲当地ノ形勢ハ追々御聞取相成候事トハ奉  
 存候得共、私ニモ段々四方ニ耳ヲ傾ケ罷在、種々様々  
 承及候事ノ内、出所正シク間違ナキ儀ト存候ケ条左ニ  
 申上候、尤、此ケ条ハ両高崎・本田弥右衛門・藤井宮  
 内ナトニ於テモ真説ト信シ候ニ付、多分要路ノ所へハ  
 通報仕タル事ト奉存候、今度石清水行幸ニ付、將軍家  
 供奉ノ筈候処、前日晚方俄ニ持病差起リ、起居自由ナ  
 ラサル趣ニテ、供奉御免願之儀閣老ヨリ御届ニ相成候  
 処、

朝廷ニモ御意外ノ御事ナカラ、何分病氣ニ付テハ致シ方  
 アラセラレス、既ニ明未明

御発輦、諸御手当モ調ヒタル処ニテ、節刀下サレノ都合、

御式向モ調居候由故、一橋殿御名代ニテ拝受ノ御内達  
 御受相成候由、其御届出ニ相成候節、国事掛ノ堂上方  
 大ニ立服立服方シ、將軍家病氣ハ偽病ニ相違ナシ、典業  
 頭ヲ見届ニ遣サレント沸々タル議論ニ候由、然ルニ長  
 州人ハ早ク其事ヲ聞キ、節刀下サレノ事ハ一橋名代ニ  
 テ然ルヘシト申出、夫レニ決定、御違ニ相成候由、十  
 一日ニハ曉ヨリ

御発輦、公卿方ハ申ニ及ハス、大小名及ヒ一橋殿ハ後抑  
 ヘノ場ニテ供奉致サレ、私ニモ拜見ニ罷越シ、誠ニ御  
 盛ナルコトニ有之候、御行列立ハ版行一枚差上候、格  
 別相違無之様ニ相見得申候、一橋殿ニハ行列ノ後半丁  
 程間ヲ置キ三百人許ノ銃兵ヲ列ラレ候、其殿ノ前後ニ  
 殿トハ一橋殿ト云フ、三十人モ可有之、長刀ヲ差シタル人付キ居申  
 候、是ハ兼テ承及候劍術者ナラント申事ニ御座候、同  
 十二日ノ評判ニ、一橋殿モ石清水ニ着セラレ、未夕御  
 祭式ノ場ニモ至ラサル内、俄ニ下山帰京致サレ候テ、  
 後発病ノ御届ニ及ハレ候由、將軍家モ病氣、後見職  
 モ急病差起リ、直チニ曳返シ相成候二者、皆人不審ヲ

起シ、種々様々ノ悪評判モ尤ノ事ニ御座候、其後段々承合七候ニ、此事ハ前以テヨリ幕府方ニテハ大ニ吟味ヲ尽シ切り、兎角如斯振り切りタル決断ニ及ヒタル事ノ由、専ラ一橋殿ノ計策ナリト申事ニテ、茲ニ於テ節刀下サレノ何ノト謂フハ浪人輩ト長州カ献言ニ出テ、  
実ノ

叡慮ニアラス、此御式ヲナシテ天下ニ名ヲ取ラントノ手段ヲ探り知り、一橋殿自分引受宜シキニ取計ハントノ事ニテ出掛ラレ候由、夫故石清水へ

御着輦、惣勢着山迄ハ

御休息アラセラレ、御祭式アリテ後節刀下サレノ御式順

ニテ御座候処、一橋殿ハ

天氣伺モ致サレス、着山程モナク病氣ノ御届ケ離シニテ直様帰京線出相成り、如何ニモ徐ツ／＼ト行列ヲ乱サス引取ラレ候由、数百ノ銃卒・劍術者ハ浪人共ノ万一二備へ候半ト存候、右之通不都合ノ次第ニテ、公卿方モ案内ノ仕合如何様ニモ致シ方無之、吟味区々ノ処ニ、長州人又浪人共ハ追懸ケ曳戻サントヒシメキ候得共、夫デハ一大事ニ及<sup>（行カ）</sup>フハ勿論、一橋モ其手当ハ十分

ニ致居候事ニ相違無之トテ取鎮ニ相成り、右旁ノ吟味延刻ニ及ヒ、御拜式モ時刻後レニ被為濟還御相成候由、其時ハ恐多クモ

逆鱗マシ／＼タル由左モ可有之事ニ御座候、要路ノ公卿方モ且怒リ且憂ヒ、シカ／＼食事モ咽ニ下ラサル人多カリシトノ評判ニ御座候、元来幕府ハ攘夷ハ否ヤナシニテ、節刀ヲ下サル、トキハ兎角現事ヲ致サステハ不相成トテ、前以テヨリ密議ニ及ヒ、一橋殿振りハマリ引受ノ取計ニテ、一口ニ申セハ究策ノ一ツニテ候ト申ス事ニ御座候、長人共ハ計策破候ニ付、御親征大和行幸ト申ス事ヲ唱へ出シ候由ニ相聞得申候、此事ニ就テハ長人ニモ究策ニ出、モウハ是迄ノ姦謀モ皆相違致シ候ニ付、此上ハ手切れノ策ヲ以テ 行幸ヲ促シ、在京ノ大小名悉ク供奉ヲ命セラレ、大和ノ旧都ニ永ク御

輦挟ミ奉リ、大小ノ諸侯ヲ朝セシムル時ハ幕府孤立、勢望ヲ失ヒ、違

勅ノ罪モ其時ニ至テ匡スヘシ、又薩越ヲ除クノ外手ニ立ツ大名ハ一人モナク、仮令ヒ薩越ヲ幕府カ欺キ付ルト

モ、全ク違

勅ノ名ハ相違ナキ場ニ相成ルヘシトノ議ヲ以テ、行幸ヲ促シ奉リ候由ノ説ニ御座候、此趣ハ出所正カナル説ニ御座候、本田ヨリ其許要路ニハ申上タル筈ト奉存候、右通切迫ナル次第第二相成リ、中川宮・近衛殿御親子、其外関白様・議奏・伝奏ノ中ニハ甚タ御心痛ナサレ、毎々藤井・両高崎等ヲ内密招呼ハレ、兎モ角モ 三郎殿片時モ早ク上京セラレ、取押ヘノ力ヲ尽サレズハ不相濟、越前ハ頼少ク、広キ日本中ニ御力ニナルハ薩州ノミニテ、誠ニ危急存亡ノ時節、恐多クモ

主上ノ御心配一方ナラス、朝夕ノ供御モ忘サセ玉フ程ノ御事ニテ、節刀下サレノ事モ下ヨリ促シ奉リタル次第ニシテ、御心ナラスモ三条等カ党勢ヲ以テ、一口ニ申セハ劫シ奉リ、御発シニ相成タル訳ナリトノ御内話モアリシ由、又中川宮ノ仰ニ、三郎殿カ立服シテ帰国シタルモ、我々カ行届カサルニアリ、何分

主上ノ御心痛、実ニ恐入ル次第ナレハ、国ノ為メ怒ヲ押ヘテ速ニ上洛ヲ冀フノミニテ、外ニ何ノ手段モ無之ト、誠ニ究シ切ラレタル御事ナリト承及候、何分爰ニ至リ、

進退窮リタル御事ニハ相違ナシト申ス事ニ御座候、又御国ニモ生麦一件英夷申立ノ趣、幕府モ板ハサミニテ致シ様無之向、其中ニ又身掃ヒ致シ、御国へ全ク扨ヒ付ケ候手段ニ可有之トノ趣ハ、先日中原ヨリモ申来リ、事实ニ於テ果シテ其通ノ策ニ可有之ト藤井ナト、申ス事ニ御座候、攘夷ハ五月中旬トノ決定ニ候得共、幕府ハ千々万々実行ハ仕マシクト申事ニ御座候、何乎ノ事ヲ以テ延引スルノ見込ナリト被存候、只今ノ処ハ攘夷ヨリモ大事ナルハ長州ヤ浮浪輩ニ御座候、早ク内ノ病ヲ除キ、其上ニ外ヲ療治スルコソ肝要ニ御座候、此二口ノ病ハ腹中ノ虫ニテ、表ニハ忠臣メカシクシテ、内心ハ恐ルヘキニ御座候、幕府モ薩州ト長州カ腹中恐口シト申ス由ニ候得共、御国ハ將軍望ミノ心ハ初ヨリアラセラレサルハ私共迄モ安心仕居候ニ、長ノ処ハ疑フヘクモナク、大望ノ底心ハ其証拠段々有之候、然レトモ何分余リ事高ク相成候故、成就ハ六ヶ敷、又成就サセテハ不相成ト物笑致ス事ニ御座候、何分ニモ恐ナカラ

主上斯ク迄御心痛ノ旨ヲ承レハ、土芥ノ如キ我々モ腹ヲ

居へ兼候次第二御座候、何卒 老公一日モ早ク御上京、  
天意ヲ安ンセラレ度御事ト奉折候、御模様何月頃ニ候哉、  
御漏レ聞キ相成候者御通漏奉願候、又浪人ノ中ニモ素

ヨリ異論モ少カラス、混雜ナルコトノ由ニ承及候、当  
分長土水ノ三藩同腹ノ様唱候得共、現実藩君ハ拘リナ  
ク、藩士ノ内党派有之、其輩ト申事ニ候、中ニモ土州  
ノ主人ハ攘夷ナトノ主意ニ無之、役人中モ同様ニテ、  
全ク城下中ニハ其党派ハ少ク、田舎居住ノ者ノミ攘夷  
論ノ由、是ハ御国ノ郷土同様ノ格式ニテ、目見以下ノ  
様ナルモノ、由、武市半平太等モ其一派ニテ候由、此  
者共ハ長曾我部ノ遺臣家筋ニテ、城下士トハ陸カラス、  
互ニ讐仇ノ如キ間ニ候由、毎々争論モ起リ、其上攘夷  
論ニハ中惡シク、内乱ノ兆シモ有之、容堂公ニモ是ニ  
ハ御心配ト申事ニ候、水戸モ先年ヨリノ党派和合セス、  
武田党攘夷ヲ唱へ、是モ今ノ向ニテハ内乱トナルハ必  
定ト申ス事ニ御座候、越前モ近頃家中士氣衰へ振ヒ不  
申、其外格別力ニナル藩ハ無之、熊本ハ不相替勝間ノ  
風ニテ、勢ノアルニ從ヒ、突立タル者絶テ無之、轟等  
ノ暴論家ヲ抑へ候力モ無之、久留米ハ真木和泉カ党派

勢ヲ得候由、其外ノ藩々ハ程ノ知レタル事ニテ、利口  
二尊

王攘夷ヲ唱候得共内心ハ難計、此方ノ如ク馬鹿ニ一向ナ  
ル尽力ハ不致、中ニモ佐賀ハ檀那ヲ初メ、皆日和見ノ  
上手ニテ、是又頼ムニ足ラス、一口ニ申セハ商人根性  
トモ申スヘシト申ス事ニ候、又諸藩ノ手当ハ誠ニ笑フ  
ヘキ処ノミ、九門六門ノ御固等ヲ見候ニ、古式大小  
砲・弓・槍等ニテ適々西洋風ノ大小砲アルモ、兵士ノ  
形容実ニ氣ノ毒ナル体ニ相見得候、幕府ハ新法ノ大小  
砲式ニテ、歩兵大砲ノ訓練等行届キ、一橋モ三百人程  
ハ銃兵ヲ備ラレ候由、諸藩共ニ六門九門ノ固メニハ爰  
ヲ晴レト備ヘタル体此通ニテ、国元海岸ノ備等ハ推察  
セラレ候、ケ様ナ位ニテ攘夷ノト口ニノミ走り候ハ、  
誠ニ氣ノ毒ナル事ト存候、堂上方ノ処ハ井戸ノ蛙ト同  
様ニテ、弓・鉄砲ト云へハ精粗ノ弁別モナク、犬ヤ猫  
ヲ追フカ如クニ御考ノモノ、様ニ相見得申候、何レ本  
途ニ攘夷ナサル、モノナラハ、十年ノ後ニ無之候テハ  
調申間敷ト奉存候、今ノ処ニテ御国程海陸御手当ノ届  
キタルハ決テ有之間敷トノ評判ニ相聞得申候間、尚又

嚴重ノ儀願フ処ニ御座候、幾重ニモ老公一日モ早ク御上京、

天意ヲ安セラレ候様ニト乍蔭奉祈所ニ御座候、御出ノ上ハ御一言可否ノ仰ハナクトモ、浮浪ハ素ヨリ二三藩ノ暴士モ猥リニ事ヲ為シ得申間敷、諸藩モ又從テ正論ニ婦シ可申、

朝廷モ暴公卿方頭ヲ縮可申ト申ス事ニ御座候、十三四人

ノ暴論公家ノ中ニ姉小路ト申ス人ハ利口ニシヤベリ候人ノ由、近頃人望ヲ失ヒ申シタル由、天法輪〔転法輪カ〕三条ハ愚

ト申スヘキ人物ノ由、其外ハ皆雷同ニテ勘定ニ入ルハカリト聞得候、長州ノ檀那ハ置キ物ニテ、家老〔晋作〕二一人、一門〔晋作〕二一人ノ暴論家アリ、久坂・高杉・来島・

〔貼懸「異本、本原カ名ナシ」桂・木原等カ為ス処ト相聞得候、中々上手ニ手ヲ廻シ、

至ラヌ隈ナク立廻リ候、全ク覇業ノ望アル証拠モ有之由、今日ノ姿ニテハ幕府ハ日々々々衰ヘ行キ候ニ付、

終ニハ長州カ將軍トナルヘキモ計ラレスト私語キ候事

ニ御座候、彼藩カ悪ミ恐ルハ薩州ノミト相聞得候、マ

サカ長州ヲ公義ト尊フハ、仮令ヒ死ストモ否ヤナリト存候、然レトモ彼ノ虧ケ道ハ、世ニ評判ノ通、檀那カ

置キ物同様ニテ、臣下ニ段々智アル者有之、我藩ハ上ハ能クシテ臣下ニ人物少ク、長州トハ裏腹ニ有之ト申

ス事ニ候、又一橋殿モ近頃人望薄ク、是迄評判通ノ人ニハ無之、付キ人ニ梅沢某・原某ト申ス二三人ノ者助ケ候由、幕府ハ尚更人物絶テ無之、〔板倉候カ〕板倉候高名ニハ候得共、大名ノ事故差知レタル人物ノ由、水野モ同様、

小笠原ハ元小身ヨリ養子ニ入リタル者ニテ、随分知慮

モアリトノ評判ニ御座候、会津ハ田舎武士ニテ片イヂニ有之、守護ノ職ハ相当、庄内モ随分士氣立居、先ツ

此ニ藩カ幕府ノ片腕ト申ス事ニ御座候、今日ノ勢ニテハ会津ト長州ノ喧嘩起ルハ遠カラサル事ニ可有之、一

軍ハ必ス二三ヶ月内ニ起リ可申ト、心アル先生達カ見居ニ御座候、先ツ当分ノ形勢大略如此ニ御座候、追々

承得可申上、大山氏〔綱〕良・愚父・愚弟・叔父ヘモ此趣御申聞奉頼候云云、愚父トハ磯永孫四郎、愚弟トハ同喜、之介、叔父トハ大山仲兵衛ナリ、

四月十五日

二白、御国ニテハ弥英国ト生麦一件ヨリノ戦争アルヘシトノ評判ニ御座候、定而砲台其外ノ御備向等一涯御手付候事ト奉存候、其形勢御通知奉願候、然シナカラ

願クハ事ニ及ハサル様念願仕候、何分台場ノ御備ハ、

御先代様ヨリ行届候事ニテ、海陸ノセリ合一二回ハ差

支申マシク候得共、残多キハ海軍ノ備無之ハ遺憾ノ至、

大山氏御軍 賦役ハ其職分ニテ如何心得被居候哉、其外攘夷

論ノ衆ハ振ヒ立ノ筈、然レトモ一度戦ヲ開キタル上ハ、

止ムル訳ニモ參ルマシクト存候、若シ開キニ相成候者、

日本中ノ人氣格別ニ変シ可申ト申ス事ニ御座候云云、

此書牘ハ、当時ノ実況ヲ記シタル者ナルカ故記載ス、

素ヨリ守衛人員中ニ在テ其事ニ関セサル故、誤説ナキ

ハ保シ難シト雖、当時洛中ノ概況ヲ知ルノ一端ニ供ス、

349 ○四月廿八日京師飛報ニ曰ク、本月七日 將軍家參 内、

天拜ノ式事滞リナク執行セラレタリ云云、今ヲ去ルコト

二百余年前、寛永十一甲戌年七月十八日、家光將軍入

朝 此時我カ 黃門家久モ從テ參 朝セラレタリ、○家久公參 朝

天拜セラレタルコト四回、第一回元和二年七月廿一日、將軍秀

忠公ニ從テ入 朝(後水尾天皇政仁)、琴一面・尺八二管ヲ賜フ、

第二回同五年七月二十五日、秀忠公ニ從テ入 朝、第三回元和三年

丙寅九月六日、主上二条城ニ幸セラレ、前將軍秀忠公 將軍家光

公 鳳駕ヲ迎ラル、ニ從テ入 朝シ玉ヒ、還御ノ後、勅シテ寮ノ

御馬・衛府ノ太刀ヲ賜フ、是ヨリ嚮キ八月十九日從三位ニ叙シ、以

中納言ニ任セラレタリ、第四回寛永十一甲子七月十八日ナリ、

来廢絶ノ大典ナルカ故、礼典行 粧壯麗、洛中ノ繁昌言

詞ニ尽スコト能ハス、洛中洛外ハ素ヨリ伏坂ノ間、或

ハ畿内諸國ヨリ拝観セント上京セシ者夥シク、宿泊所

モナク、神社仏閣ニ宿レルモノ多カリシト云フ、○參

内当日ノ扈從ニハ閣老小笠原凶書頭・板倉周防守・松

平豊前守、諸大名ニハ水戸中納言殿・松平陸奥守・佐

竹右京大夫・細川越中守・松平出羽守・丹羽左京大

夫・松平越中守・松平相模守・松平主殿頭・松平越前

守・松平伊豆守・松平左京大夫・松平右近將監・立花

(飛彈カ) 飛彈守・小笠原大膳大夫・大久保加賀守等、其他大小

ノ吏員數百名六門内ニ充滿シ、尺寸ノ隙地モナク、壯

觀美麗ヲ尽シタリト云フ、○献上ノ品左ノ如シ、將

軍家ヨリ御太刀一腰 鞍置馬一匹 黃金百枚 白銀千

枚 御懸物一幅 御衝立一對 青磁香炉一 御料紙硯

箱 御机各一具 御屏風一双 蘭絹五十卷 真綿千把、

此ヲ 主上ヘノ獻品トス、又親王方・准后御方ヘモ各數品獻セ

ラレタリ、亦和宮(家茂室)及ヒ天璋院殿ヨリモ獻呈ノ品アリタ

リ、○將軍家ニハ

天盃拜戴等ノ式殘ル処ナク畢リテ、日没ノ後退出セラレ  
タリ、二百年來數世ノ久シキ廢絶ノ大典ナルカ故、一  
般恭賀セリト云フ、○今回ハ寛永度ノ式ニ基カレタリ  
ト雖モ、伝奏ニ条城ヘ迎向等ノ式ヲ罷メラレ、其他  
天盃拜戴ノ式モ輕キニ變セラレタリトソ、

○編者曰、寛永ノ度ハ 將軍家威力赫々タルノ時ナル  
カ故、百事鄭重ニ遇セラレタリト雖モ、今回ハ其時  
ニ反シ、

朝威煌々タルカ故、幕府敬遜ノ道ヲ尽シタリト云フ、  
實ニ時運ニ依テ差アリ、斯ノ如ク

朝威ノ耀々タルニ至リシハ、全ク 国父公英斷勇為尊  
王ノ道挽回セラレタル（基レタルカ）ニ基リスルハ、衆ノ知ル処ナリ

ト雖モ、事實ハ亡失シ易キモノナルカ故、贅冗ナリ  
ト雖モ、上洛ニ懼レル事項、或ハ天拜式等ノ概略ヲ

記載シ、参照ニ供ス 寛永ノ例ニ慣ヒ、洛中市街ノ者ニ黄金六  
万余兩ヲ賑与セラレタリ（二戸ニ付一兩  
一步ノ割ナリ、  
シト云フ）

350 ○四月十一日、石清水カ上下加茂ノ神社行幸アリ、是レ攘夷期限

予定セラレ、臨機御親征ノ

叡慮ナルカ故、御首途ノ式ニ準ヘ、 將軍家供奉モ命セ  
ラレタリト云フ、○当日供奉ノ堂上方ニハ、鷹司閔白

前右大臣輔熙公・二条右大臣齊敬公・近衛左大将忠房  
卿・徳大寺右大将公純卿・庭田中納言重胤卿・日野大

納言資宗卿・徳大寺中納言実則卿・飛鳥井中納言雅典  
卿・橋本宰相中将実麗卿・同中将公正朝臣・清水谷少

納言信長朝臣・櫛笥中将隆韶朝臣・油小路中将隆晃朝  
臣・東園中将（基敬カ）荃敬朝臣・（野脱カ）滋井中将実在朝臣・姉小路少

将公知朝臣・正親町少将公董朝臣・四辻少将公賀朝  
臣・東久世少将通禧朝臣・中山侍従忠光朝臣・四条侍

従隆譚朝臣、職事職ニハ中御門左中弁継之朝臣・清閑  
寺右中弁豊房朝臣・坊城右少弁俊正朝臣、其他外官人、

衛士・北面士等數百人、武家ノ供奉ニハ大將軍家茂公  
當時從ニ位内大臣・尾張大納言慶勝殿・水戸中納言慶篤殿・一

橋中納言慶喜殿、閑老ニハ水野和泉守忠・板倉周防守  
勝、若年寄田沼玄蕃頭意・稻葉兵部少輔正、高家ニハ織

田宮内少輔・中条中務大輔・京極丹後守・有馬中務大  
輔、町奉行瀧川播磨守（播磨カ）、諸大名ニハ上杉弾正少弼・松

平陸奥守・蜂須賀阿波守・細川越中守・伊達遠江守・池田播磨守・佐竹右京大夫・亀井隱岐守・松平三河

演習等非常ニ勉勵セシカ故、不日其術進歩シ賞詞ヲ下サル、ニ至レリ、

守・松平兵部大輔・上杉彈正大弼・溝口主膳正・藤堂和泉守・本多主膳正・松平越前守・松平甲斐守・松平

〔本文書は「忠義公史料 第二卷」二九四号と同文なり〕

隱岐守・松平出羽守等、各官位ニ準シ衣冠束帶、騎馬ノ供奉タリ、殊ニ諸侯ハ何レモ數百ノ從者ヲ卒シ

旧邦秘録五編癸亥之四

鳳輦ノ前後ニ從ヒ、御所ヨリ加茂ノ社迄御行粧稍連続シ、近代未聞ノ壯觀ナリシト云フ、

351 ○四月廿九日、本日下午町弁天砲台ニ於テ一番・二番兩組

大砲演習ヲ催サレ、太守公已上刻御出馬アラセラレ、兩組操練畢リテ後、三十六斤砲及五十斤白砲各五發、御親ヲ沖中漂的二向テ試發セラレタリ、○過日不練云云ノ命アリテヨリ、兵士等夙夜研究シタルカ故、本日ハ漂のノ命中、彈丸破裂ノ度ニ至ル迄頗ル練熟シタルニ依リ賞詞ヲ下サレタリ、○斯ク練熟セルハ過日不練云云ノ御督責アリシヨリ、物主初メ什伍長等請願シ、各隊日々火藥局ニ出頭、火管ノ製造或ハ彈道ノ理ヲ講シ、或ハ試験等只管研究シタリ、又砲台ニ於テ隔日ニ

鹿児島県史料編さん関係者

史料編さん  
顧問  
東京大学 史料編纂所 所長 本郷 恵子

東京大学  
史料編纂所 教授 保谷 徹

九州大学 名誉教授 安藤 保

志学館大学 教授 原口 泉

委員  
三木 靖 日隈 正守

丹羽 謙治 佐藤 宏之

塩満 郁夫 尾口 義男

堂満 幸子

鹿児島県歴史・美術センター黎明館

館長 鎮寺 裕人

副館長 小村 浩信

調査史料室 栗林 文夫

学芸専門員 市村 哲二

資料調査員 藤崎 光穂 山橋 元正 樹

編集員 向原 雅子 山元 亜由美

原田 紗代子

鹿児島県史料

市来四郎史料二

令和4年3月11日 発行

非売品

編集 鹿児島県歴史・美術センター黎明館

発行 鹿児島県

印刷 株式会社 ぎょうせい

